高岡市埋蔵文化財調査報告第12冊

間尽遺跡調査報告Ⅲ

－平成14年度、能越自動車道土砂採取関連事業に伴う調査（B・C地区）－

2004年3月

高岡市教育委員会

高岡市埋蔵文化財調査報告第12冊

間尽遺跡調査報告Ⅲ

－平成14年度、能越自動車道土砂採取関連事業に伴う調査（B・C 地区）－

2004年３月

高岡市教育委員会

序

間尽遺跡は、高岡市西部を流れる小矢部川左岸に拡がる西山丘陵の一角に位置しております。また、今回調査が実施されました地点は、谷間にあり平野部からは奥まった立地条件にあります。しかし、調査結果はこのような土地柄に関わらず倉庫群や溝などをはじめとする連綿とした生活の証が確認されるにいたりました。ここでは、年代測定・花粉分析・珪藻分析など様々な自然科学的な方法を採用することにより地面に刻まれた往時の周辺環境の痕跡を追求し、人々はなぜこのような場所に着目し生活を営んだのであろうかとの疑問に少なからず検討材料を示すことができたのではないかと考えられます。

最期になりましたが、調査成果が多くの方々に活用され、さらには地域の歴史及び文化理解の礎となれば幸いです。また、現地調査ならびに報告書作成に際しまして格別のご配慮を賜りました皆様方に厚く御礼申しあげます。

平成16年3月10日

高岡市教育委員会

教育長　細呂木　六良

例　言

1．本書は、平成14年度、能越自動車道土砂採取関連事業に伴う、間尽遺跡（Ｂ・Ｃ地区）発掘調査の報告書である。

2．当調査は、「能越自動車道土砂採取（手洗野地区）に伴う間尽遺跡発掘調査業務」の委託契約に基づき、大成エンジニアリング株式会社埋蔵文化財調査部が実施した。

3．当調査は、高岡市教育委員会が調査主体となり実施した。

4．調査地区は、高岡市手洗野字平田である。

5．発掘調査（現地調査）は、平成14年７月14日～同年12月26日までである。

6．報告書作成作業は平成15年度業務として実施した。

7．調査関係者は次の通りである。

［高岡市教育委員会文化財課］

平成14年度（Ｂ・Ｃ地区本発掘調査）

文化財課課長：大石茂

課長補佐：天谷隆夫

主任：根津明義

文化財保護主事：荒井隆

太田浩司

平成15年度（報告書作成）

文化財課課長：大石茂

副主幹：本林弘吉

主任：根津明義

荒井隆

文化財保護主事：太田浩司

8．当調査及び当報告書作成は太田浩司文化財保護主事が監理を担当した。

9．調査及び報告書作成にあたっては、大成エンジニアリング株式会社埋蔵文化財調査部が業務を受託した。担当者等は以下の通りである。

［大成エンジニアリング株式会社埋蔵文化財調査部］

総括：早川泉（調査部部長）

調査担当：板野伸彦（課長）、伊藤俊治（主任調査員）、吉田寿（主任調査員）

現地調査補佐：渡辺宏司（課長代理）

報告書作成：板野伸彦（課長）、富田静香、橋澤道博

10．本書は、太田による総合的な監理の下、大成エンジニアリング株式会社埋蔵文化財調査部が執筆・編集を担当した。なお、第１章第２節は太田が担当した。

11．本書における掘立柱建物跡の組み立ては、全て案件であるため、文中においては「(案)」を付記している。

12．自然化学分析の項は、一部遺物番号等を変更した他、監理者の指導の下、加筆した部分もあるが、基本的には、各機関より提出された報告文をそのまま掲載している。

13．墨書の解読は国立歴史民俗博物館、平川南氏の研究室に依頼した。このとき浜松フォトニクス社製赤外線テレビカメラを使用され、また、撮影にはＳＯＮＹ社製サイバーショットＦ

707が使用された。

14. 現地調査及び報告書作成において、以下の各機関・各氏より、ご教示・ご協力を得た。この場を借りて厚く御礼申し上げます。（順不同・敬称略）

高岡市建設部能越自動車道対策課　（社）高岡市シルバー人材センター

四柳嘉章（漆器文化財科学研究所）　服部敬史（東京家政大学講師）　平川南（国立歴史民俗博物館教授）　松本浩一　（株）エイ・テック　（株）笹島工業　（株）新港土木

朝日航洋（株）　ディーン・グッドマン（マイアミ大学地球物理学応用考古学探査研究所中島研究室）　中村亮二（（財）富山県埋蔵文化財調査事務所）

パリノ・サーヴェイ（株）　（株）ニッテツ・ファイン・プロダクツ

（株）加速器分析研究所　（有）山武考古学研究所　丸三開発工機（株）

15. 現地での発掘調査参加者および整理作業参加者は以下の通りである。（順不同・敬称略）

発掘調査参加者

林平一郎　吉田敏夫　堀清勝　金森栄治　本江富雄　西田繁　越口辰男　新谷松男　島明本間敬　一宮健治　山田次郎　山崎勝二　福本繁　高岡信一　南弘喜　中沢忠晴　早川清新保勝正　渡辺清三　越前時男　船木藤夫　石田哲雄　磯部良　三池春美　中野智子沙小織　河合洋人　山本重夫　福村留美子　森真由美　黒田総一郎　堂口陽子　谷口勝美

整理作業参加者

新谷晴紀子　村田智恵子　中野智子　沙小織

凡　例

1．遺構実測図等における方位は、座標北を示している。

2．本書では、世界測地系で記載してある。

3．本書における遺構記号は、次の通りである。

ＳＢ－掘立柱建物、ＳＡ－柵址、ＳＫ－土坑、ＳＤ－溝、ＳＸ－性格不明遺構

4．本書における遺物番号は通番とし、括弧内にＲ番号（現場での遺物取上げ番号）を付した。

5．別表･遺物観察表で表記している計測値は、小括弧＝（）内の数値が復元値、山括弧＝〈〉内の数値が残存値を示し、単位はcmである。

高岡市埋蔵文化財調査報告第12冊

間尽遺跡調査報告Ⅲ

目　　次

序

例言

凡例

第１章　序　　説 …… 1

第１節　遺跡概観 …… 1

１．環境 …… 1

２．従来の知見 …… 1

３．遺跡の分布状態 …… 5

第２節　調査に至る経緯 …… 8

第３節　調査概観 …… 9

１．調査の方法 …… 9

２．調査の経過 …… 10

３．調査の概要 …… 11

４．基本層序 …… 12

第２章　Ｂ地区第１面 …… 13

第１節　概観 …… 13

第２節　遺構 …… 13

１．溝 …… 13

第３節　遺物 …… 16

第３章　Ｂ地区第２面 …… 17

第１節　概観 …… 17

第２節　遺構 …… 18

１．掘立柱建物 …… 18

２．柵址 …… 21

３．土坑 …… 22

４．小ピット …… 24

５．溝 …… 24

６．性格不明遺構 …… 28

第３節　遺物 …… 28
１．遺構出土遺物 …… 28
２．遺構外出土遺物 …… 30

第４章　Ｃ地区 …… 33
第１節　概観 …… 33
第２節　遺構 …… 33
１．掘立柱建物 …… 33
２．土坑 …… 35
３．小ピット …… 36
４．溝 …… 36
第３節　遺物 …… 39
１．遺構出土遺物 …… 39
２．遺構外出土遺物 …… 39

第５章　結　　語 …… 41

別表遺物観察表
図面
図版
自然科学分析
報告書抄録

図　面　目　次

図面01　遺構実測図　Ｂ地区第１面遺構配置図（１／300）
図面02　遺構実測図　Ｂ地区第２面遺構配置図（１／300）
図面03　遺構実測図　掘立柱建物ＳＢ01（案）（１／60）
図面04　遺構実測図　掘立柱建物ＳＢ02（案）・掘立柱建物ＳＢ03（案）（１／60）
図面05　遺構実測図　掘立柱建物ＳＢ04（案）（１／60）
図面06　遺構実測図　掘立柱建物ＳＢ04（案）（１／60）
図面07　遺構実測図　掘立柱建物ＳＢ05（案）・掘立柱建物ＳＢ06（案）・掘立柱建物ＳＢ11（案）（１／60）
図面08　遺構実測図　掘立柱建物ＳＢ07（案）（１／60）
図面09　遺構実測図　掘立柱建物ＳＢ08（案）・掘立柱建物ＳＢ09（案）（１／60）
図面10　遺構実測図　掘立柱建物ＳＢ10（案）・掘立柱建物ＳＢ12（案）・掘立柱建物ＳＢ13（案）（１／60）
図面11　遺構実測図　掘立柱建物ＳＢ14（案）・掘立柱建物ＳＢ15（案）（１／60）
図面12　遺構実測図　掘立柱建物ＳＢ16（案）（１／60）
図面13　遺構実測図　１．掘立柱建物ＳＢ17（案）・掘立柱建物ＳＢ18（案）（１／60）
　　２．柵址ＳＡ01・柵址ＳＡ02（１／120）
図面14　遺構実測図　土坑ＳＫ01～土坑ＳＫ04（１／40）
図面15　遺構実測図　土坑ＳＫ05・土坑ＳＫ06（１／40）
図面16　遺構実測図　土坑ＳＫ07～土坑ＳＫ10（１／40）
図面17　遺構実測図　土坑ＳＫ11～土坑ＳＫ13（１／40）
図面18　遺構実測図　溝ＳＤ59（１／120）
図面19　遺構実測図　性格不明遺構ＳＸ01・性格不明遺構ＳＸ02（１／40）
図面20　遺構実測図　掘立柱建物ＳＢ405（案）（１／60）
図面21　遺構実測図　Ｃ地区遺構配置図（１／300）
図面22　遺構実測図　掘立柱建物ＳＢ01（案）・掘立柱建物ＳＢ02（案）（１／60）
図面23　遺構実測図　掘立柱建物ＳＢ03（案）（１／60）
図面24　遺構実測図　掘立柱建物ＳＢ04（案）・掘立柱建物ＳＢ05（案）（１／60）
図面25　遺構実測図　掘立柱建物ＳＢ06（案）（１／60）
図面26　遺構実測図　掘立柱建物ＳＢ07（案）（１／60）
図面27　遺構実測図　掘立柱建物ＳＢ08（案）（１／60）
図面28　遺構実測図　掘立柱建物ＳＢ09（案）（１／60）
図面29　遺構実測図　掘立柱建物ＳＢ10（案）・掘立柱建物ＳＢ11（案）（１／60）
図面30　遺構実測図　掘立柱建物ＳＢ12（案）・掘立柱建物ＳＢ13（案）（１／60）
図面31　遺構実測図　土坑ＳＫ01～土坑ＳＫ10（１／40）
図面32　遺構実測図　土坑ＳＫ11～土坑ＳＫ14・小ピットＳＰ30（１／40）
図面33　遺物実測図　Ｂ地区遺構内出土遺物　土器類・鉄製品（１／２、１／３、１／６）
図面34　遺物実測図　掘立柱建物ＳＢ02（案）出土遺物　木柱（１／８）
図面35　遺物実測図　掘立柱建物ＳＢ02（案）・掘立柱建物ＳＢ03（案）出土遺物　木柱（１／８）
図面36　遺物実測図　掘立柱建物ＳＢ04（案）出土遺物　木柱（１／８）

図面37　遺物実測図　土坑ＳＫ01出土遺物　木製品（１／３、１／４）
図面38　遺物実測図　土坑ＳＫ06・土坑ＳＫ08出土遺物　木製品（１／３、１／８）
図面39　遺物実測図　土坑ＳＫ08出土遺物　木製品（１／３）
図面40　遺物実測図　土坑ＳＫ08出土遺物　木製品（１／４）
図面41　遺物実測図　土坑ＳＫ08出土遺物　木製品（１／３）
図面42　遺物実測図　溝ＳＤ59出土遺物　木製品（１／２、１／３）
図面43　遺物実測図　溝ＳＤ59出土遺物　木製品（１／３、１／４）
図面44　遺物実測図　溝ＳＤ59出土遺物　木製品（１／３、１／４）
図面45　遺物実測図　溝ＳＤ59出土遺物　木製品（１／３）
図面46　遺物実測図　溝ＳＤ59出土遺物　木製品（１／３、１／４）
図面47　遺物実測図　溝ＳＤ59出土遺物　木製品（１／３）
図面48　遺物実測図　溝ＳＤ59出土遺物　木製品（１／３、１／４）
図面49　遺物実測図　溝ＳＤ59出土遺物　木製品（１／３、１／４）
図面50　遺物実測図　溝ＳＤ59出土遺物　木製品（１／３）
図面51　遺物実測図　溝ＳＤ59出土遺物　木製品（１／３）
図面52　遺物実測図　Ｂ地区第２面遺構外出土遺物　土器類（１／３、１／６）
図面53　遺物実測図　Ｂ地区第２面遺構外出土遺物　土器類（１／３）
図面54　遺物実測図　Ｂ地区第２面遺構外出土遺物　土器類（１／３）
図面55　遺物実測図　Ｂ地区第２面遺構外出土遺物　土器類（１／３）
図面56　遺物実測図　Ｂ地区第２面遺構外出土遺物　土器類（１／３）
図面57　遺物実測図　Ｂ地区第２面遺構外出土遺物　土器類（１／３、１／６）
図面58　遺物実測図　Ｂ地区第２面遺構外出土遺物　土器類・土製品・古銭（１／１、１／３、１／６）
図面59　遺物実測図　Ｂ地区第２面遺構外出土遺物　木製品（１／３、１／４）
図面60　遺物実測図　Ｂ地区第２面遺構外出土遺物　石器類・石製品（１／１、１／２、１／３）
図面61　遺物実測図　Ｃ地区出土遺物（１／３、２／３）

図　版　目　次

図版01　遺跡写真　1．遺跡遠景（西から）
　　2．Ｂ地区第１面全景
図版02　遺跡写真　1．Ｂ地区第２面全景
　　2．Ｃ地区第１面全景
図版03　遺跡写真　1．Ｂ地区第２面北東部地域
　　2．Ｂ地区第２面西部地域
　　3．Ｂ地区第２面南東部地域
図版04　遺跡写真　1．仮設事務所等設置状況
　　2．安全大会
　　3．Ｂ地区調査前全景（東から）
図版05　遺構写真　1．Ｂ地区第１面表土除去作業状況
　　2．Ｂ地区第１面遺構検出状況
　　3．Ｂ地区第１面遺構覆土除去作業状況
図版06　遺構写真　1．Ｂ地区第１面遺構覆土除去完了状況（南から）
　　2．Ｂ地区第２面掘立柱建物ＳＢ01（案）完掘全景（南から）
　　3．Ｂ地区第２面掘立柱建物ＳＢ02（案）完掘全景（東から）
図版07　遺構写真　1．Ｂ地区第２面掘立柱建物ＳＢ02（案）－Ｐ１半截状況（南から）
　　2．Ｂ地区第２面掘立柱建物ＳＢ02（案）－Ｐ１完掘
　　3．Ｂ地区第２面掘立柱建物ＳＢ02（案）－Ｐ６半截状況（南から）
図版08　遺構写真　1．Ｂ地区第２面掘立柱建物ＳＢ02（案）－Ｐ７完掘（北から）
　　2．Ｂ地区第２面掘立柱建物ＳＢ02（案）－Ｐ10半截状況（北から）
　　3．Ｂ地区第２面掘立柱建物ＳＢ03（案）完掘全景（東から）
図版09　遺構写真　1．Ｂ地区第２面掘立柱建物ＳＢ03（案）－Ｐ１半截状況（東から）
　　2．Ｂ地区第２面掘立柱建物ＳＢ04（案）完掘全景（南から）
　　3．Ｂ地区第２面掘立柱建物ＳＢ04（案）－Ｐ11半截状況（北から）
図版10　遺構写真　1．Ｂ地区第２面掘立柱建物ＳＢ04（案）－Ｐ11完掘（東から）
　　2．Ｂ地区第２面掘立柱建物ＳＢ01（案）・02（案）・03（案）・04（案）完掘（北東から）
　　3．Ｂ地区第２面掘立柱建物ＳＢ02（案）・03（案）・04（案）完掘（北から）
図版11　遺構写真　1．Ｂ地区第２面土坑ＳＫ01遺物出土状況（西から）
　　2．Ｂ地区第２面土坑ＳＫ03完掘（西から）
　　3．Ｂ地区第２面土坑ＳＫ04完掘（西から）
図版12　遺構写真　1．Ｂ地区第２面土坑ＳＫ05完掘（南から）
　　2．Ｂ地区第２面土坑ＳＫ08曲物等出土状況（南から）
　　3．Ｂ地区第２面土坑ＳＫ08曲物等出土状況近景（南から）
図版13　遺構写真　1．Ｂ地区第２面掘立柱建物ＳＢ10（案）及び溝ＳＤ59（南から）
　　2．Ｂ地区第２面溝ＳＤ59遺物出土状況①（北から）
　　3．Ｂ地区第２面溝ＳＤ59遺物出土状況②（東から）

図版14　遺構写真　１．Ｂ地区第２面溝ＳＤ59遺物出土状況③（北から）
２．Ｂ地区第２面溝ＳＤ59漆器椀［56（Ｒ680）］出土状況近景（西から）
３．Ｂ地区第２面溝ＳＤ59櫛［58（Ｒ613）］出土状況近景（北から）
図版15　遺構写真　１．Ｂ地区第２面溝ＳＤ59北側セクション（南から）
２．Ｂ地区第２面発掘調査作業状況（西から）
３．Ｂ地区第２面実機ヘリ空撮状況（西から）
図版16　遺跡写真　１．Ｃ地区北西部地域①
２．Ｃ地区北西部地域②
図版17　遺跡写真　１．Ｃ地区北部地域
２．Ｃ地区北東部地域
図版18　遺跡写真　１．Ｃ地区調査前全景（東から）
２．Ｃ地区重機搬入状況（東から）
３．Ｃ地区表土除去作業状況（北から）
図版19　遺構写真　１．Ｃ地区遺構検出状況（西から）
２．Ｃ地区北東部地域遺構検出状況（西から）
３．Ｃ地区掘立柱建物ＳＢ01（案）完掘（南から）
図版20　遺構写真　１．Ｃ地区掘立柱建物ＳＢ02（案）完掘（南から）
２．Ｃ地区溝ＳＤ01・03・04、掘立柱建物ＳＢ10（案）完掘（南東から）
３．Ｃ地区小ピットＳＰ30遺物出土状況（北から）
図版21　遺構写真　１．Ｃ地区土坑ＳＫ01完掘（南から）
２．Ｃ地区土坑ＳＫ02・03完掘（東から）
３．Ｃ地区土坑ＳＫ04完掘（南から）
図版22　遺構写真　１．Ｃ地区土坑ＳＫ05完掘（南から）
２．Ｃ地区土坑ＳＫ06完掘（南東から）
３．Ｃ地区土坑ＳＫ07完掘（南東から）
図版23　遺構写真　１．Ｃ地区土坑ＳＫ08・09完掘（南西から）
２．Ｃ地区土坑ＳＫ10完掘（北西から）
３．Ｃ地区土坑ＳＫ11完掘（南から）
図版24　遺構写真　１．Ｃ地区土坑ＳＫ12完掘（南東から）
２．Ｃ地区土坑ＳＫ13完掘（南東から）
３．Ｃ地区土坑ＳＫ14完掘（南から）
図版25　屋内作業写真　１．遺物注記作業状況
２．遺物接合作業状況
３．図面整理作業状況
図版26　遺物写真　Ｂ地区遺構内出土遺物①　土器類・鉄製品（遺物番号１～14）
図版27　遺物写真　Ｂ地区遺構内出土遺物②　土器類・木製品（遺物番号15～21）
図版28　遺物写真　Ｂ地区遺構内出土遺物③　木製品（遺物番号22～25）
図版29　遺物写真　Ｂ地区遺構内出土遺物④　木製品（遺物番号26～28）
図版30　遺物写真　Ｂ地区遺構内出土遺物⑤　木製品（遺物番号29～31）

図版31　遺物写真　B地区遺構内出土遺物⑥　木製品（遺物番号32～34）
図版32　遺物写真　B地区遺構内出土遺物⑦　木製品（遺物番号35～39）
図版33　遺物写真　B地区遺構内出土遺物⑧　木製品（遺物番号40～45）
図版34　遺物写真　B地区遺構内出土遺物⑨　木製品（遺物番号46～50）
図版35　遺物写真　B地区遺構内出土遺物⑩　木製品（遺物番号51～56）
図版36　遺物写真　B地区遺構内出土遺物⑪　木製品（遺物番号57～60）
図版37　遺物写真　B地区遺構内出土遺物⑫　木製品（遺物番号61～67）
図版38　遺物写真　B地区遺構内出土遺物⑬　木製品（遺物番号68～75）
図版39　遺物写真　B地区遺構内出土遺物⑭　木製品（遺物番号76～84）
図版40　遺物写真　B地区遺構内出土遺物⑮　木製品（遺物番号85～94）
図版41　遺物写真　B地区遺構内出土遺物⑯　木製品（遺物番号95～102）
図版42　遺物写真　B地区遺構内出土遺物⑰　木製品（遺物番号103～108）
図版43　遺物写真　B地区遺構内出土遺物⑱　木製品（遺物番号109～115）
図版44　遺物写真　B地区遺構内出土遺物⑲　木製品（遺物番号116～123）
図版45　遺物写真　B地区遺構内出土遺物⑳　木製品（遺物番号124～132）
図版46　遺物写真　B地区遺構内出土遺物㉑　木製品（遺物番号133～140）
図版47　遺物写真　B地区遺構内出土遺物㉒　木製品（遺物番号141～143）
図版48　遺物写真　B地区第2面遺構外出土遺物①　土器類（遺物番号144～160）
図版49　遺物写真　B地区第2面遺構外出土遺物②　土器類（遺物番号161～174）
図版50　遺物写真　B地区第2面遺構外出土遺物③　土器類（遺物番号175～193）
図版51　遺物写真　B地区第2面遺構外出土遺物④　土器類（遺物番号194～210）
図版52　遺物写真　B地区第2面遺構外出土遺物⑤　土器類（遺物番号211～225）
図版53　遺物写真　B地区第2面遺構外出土遺物⑥　土器類（遺物番号226～241）
図版54　遺物写真　B地区第2面遺構外出土遺物⑦　土器類（遺物番号242～257）
図版55　遺物写真　B地区第2面遺構外出土遺物⑧　木製品（遺物番号258～261）
図版56　遺物写真　B地区第2面遺構外出土遺物⑨　木製品・石製品（遺物番号262～270）
図版57　遺物写真　C地区遺構内および遺構外出土遺物　土器類（遺物番号271～284）
図版58　遺物写真　C地区遺構外出土遺物　土器類・石器（遺物番号285～289）
図版59　遺物写真　漆紙および墨書土器赤外線写真

挿　図　目　次

第1図　遺跡位置図〔1〕（1／15万）
第2図　遺跡位置図〔2〕（1／5万）
第3図　遺跡位置図〔3〕（1／2万5千）
第4図　遺跡地図〔1〕（1／1万5千）
第5図　遺跡地図〔2〕（1／1万5千）

第６図　調査対象地区位置図（１／３千）
第７図　Ｂ・Ｃ地区基本層序
第８図　Ａ～Ｃ地区時期別遺構分布図〔１〕９世紀（１／600）
第９図　Ａ～Ｃ地区時期別遺構分布図〔２〕11世紀～13世紀前半（１／600）
第10図　Ａ～Ｃ地区時期別遺構分布図〔３〕13世紀後半～14世紀中頃（１／600）
第11図　Ａ～Ｃ地区時期別遺構分布図〔４〕近世（１／600）

挿　表　目　次

第１表　掘立柱建物（案）一覧表

別　表　目　次

別表　遺物観察表

第１章　序　　説

第１節　遺跡概観

１．環境

地理的概観

高岡市の地形を概観すると、庄川及び小矢部川により形成された沖積地と、石川県宝達山より派生する丘陵地や二上山周辺の丘陵地、金山丘陵西縁に発達した芹谷段丘に分けられ、大部分は庄川扇状地の先端部及び飛騨山中に源を発する庄川・小矢部川の形成した三角州と氾濫源が占める。これらの河川は幾度も氾濫を繰り返してきたものの、古来より穀物を生産するうえで大きな恵みをもたらし、現在においても平野部に広がる水田地帯に潤いを与えている。

丘陵地は、高岡市の北西部に広がるもので通称西山丘陵と呼ばれ、富山県と石川県の県境をなしている。西山丘陵は、新生代第三紀層の中新世、鮮新世の地層を主体とし、北東側は海老坂の断層崖を経て二上丘陵へと続き、南西側は福岡町や小矢部市内の丘陵、さらには西砺波丘陵（石動丘陵）へと連なる。この丘陵には幾重にも開析谷が入り込み、谷内には集落が点在する一方で小河川の水流を利用した棚状の水田が営まれている。

手洗野

西山丘陵より発して開析谷をなし、小矢部川へ注ぎ込む河川に頭川川と広谷川がある。この２つの川が形成する開析谷に挟まれた尾根の裾部に間尽遺跡が所在する手洗野集落が位置する。古代砺波郡と射水郡との境界は、この付近に推定されている。古代の北陸道は小矢部市桜町付近から西山丘陵沿いに北上し、手洗野付近を通って、二上山南麓へ至る。そして、二上地区で小矢部川を渡るか、あるいは越中国府に達するとされている。近世に入ると山根道と氷見往来が通り、古くから交通の要衝として位置してきた。さらに越中最古の曹洞宗寺院である国上山信光寺が手洗野に建立されていることからみても、この地域が長く交通の要衝であったことが窺われる。

手洗野地区は、江戸時代から明治22年までは手洗野村であり、その後は、西砺波郡国吉村に所属した。昭和26年に国吉村が高岡市と合併することに伴い、高岡市の大字となり現在に至っている。この地区北側の頭川川の開析谷は頭川（旧頭川村）、東側の平野部は岩坪（旧岩坪村）、南側の広谷川の開析谷は月野谷（旧月野谷村）である。

２．従来の知見

間尽遺跡

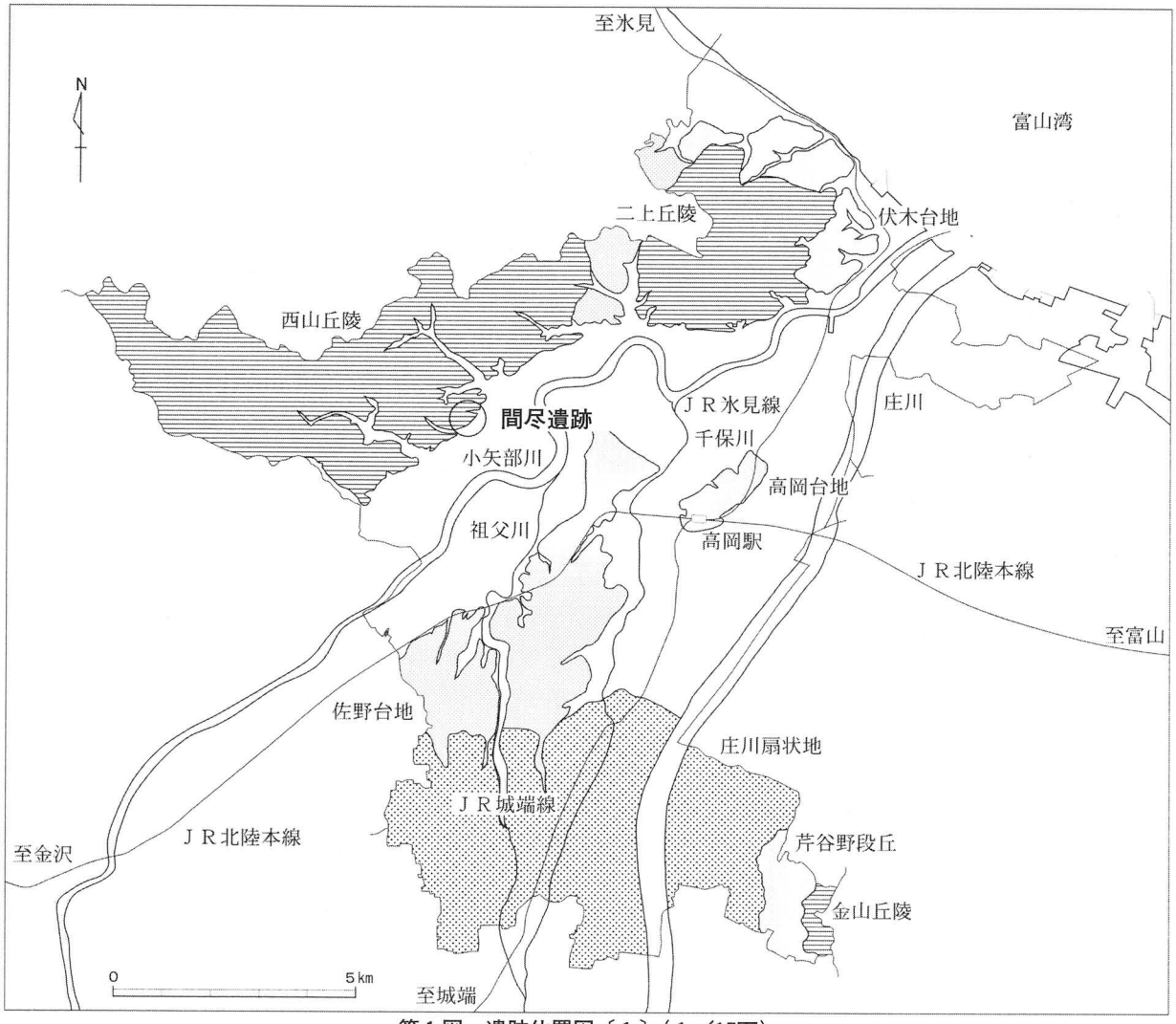
間尽遺跡は、ＪＲ高岡駅の西方約5.2㎞の手洗野地区に位置し、西山丘陵の一角に立地する。昭和45年から昭和47年にかけて実施された圃場整備事業にて多数の土器が出土したことによって明確に認識された。し

たがって、昭和47年刊行の『富山県遺跡地図』には記載されていない。出土した土器は、弥生土器、土師器須恵器、珠洲焼等で、時代も弥生時代から中世に至るまで幅広く出土している。また、７世紀末の布目瓦や「梗令分」と判読できる墨書土器もこのときに出土している。これらの出土遺物は、高岡市立国吉公民館に保管してある。

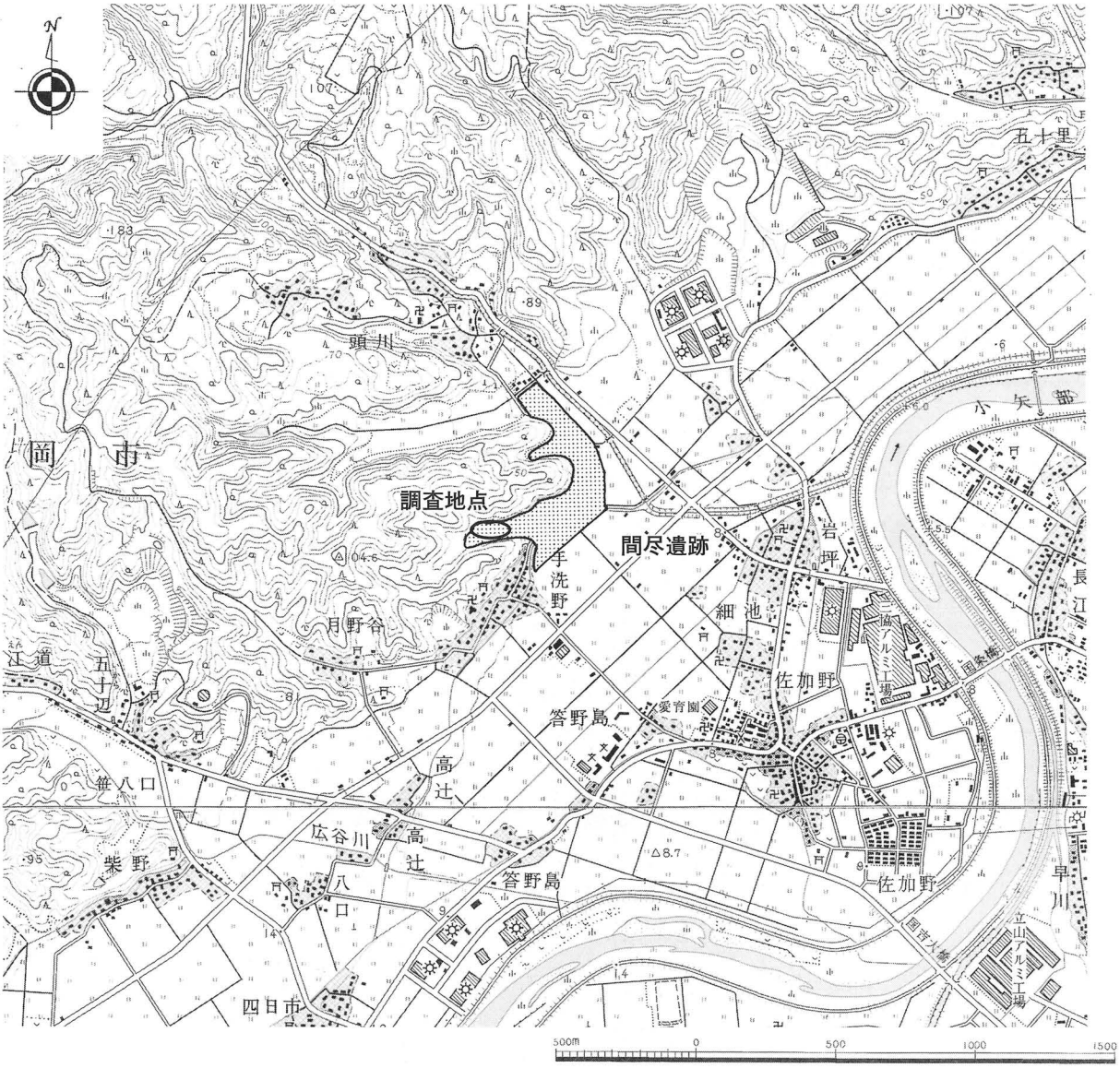
これまで、当遺跡の名称は、「頭川遺跡」「頭川間尽遺跡」「間尽遺跡」として報告されてきた。平成５年に、分布調査や過去の工事中の出土遺物などが旧地名の大字手洗野小字間尽と大字頭川小字間尽を中心に広がっていることから、名称は「間尽遺跡」とされた。

頭川遺跡

昭和49年に上野章氏が『大鏡』にて、当遺跡を「頭川遺跡」として紹介した。この報告は、当遺跡にて表採できた遺物を取り上げている。重要な点として、東日本を中心とする、弥生土器型式である「天王山式土器」を主体として出土し、さらに西日本を中心とする弥生土器型式である「櫛描文土器」が伴出することである。遺構において、「天王山式土器」と「櫛描文土器」との共伴関係の解明が当遺跡における今後の課題とされている。



第１図　遺跡位置図〔１〕（１／15万）



第２図　遺跡位置図〔２〕（１／２万５千）
※国土地埋院発行　２万５千分の１地形図「飯久保」「戸出」に加筆

分布調査

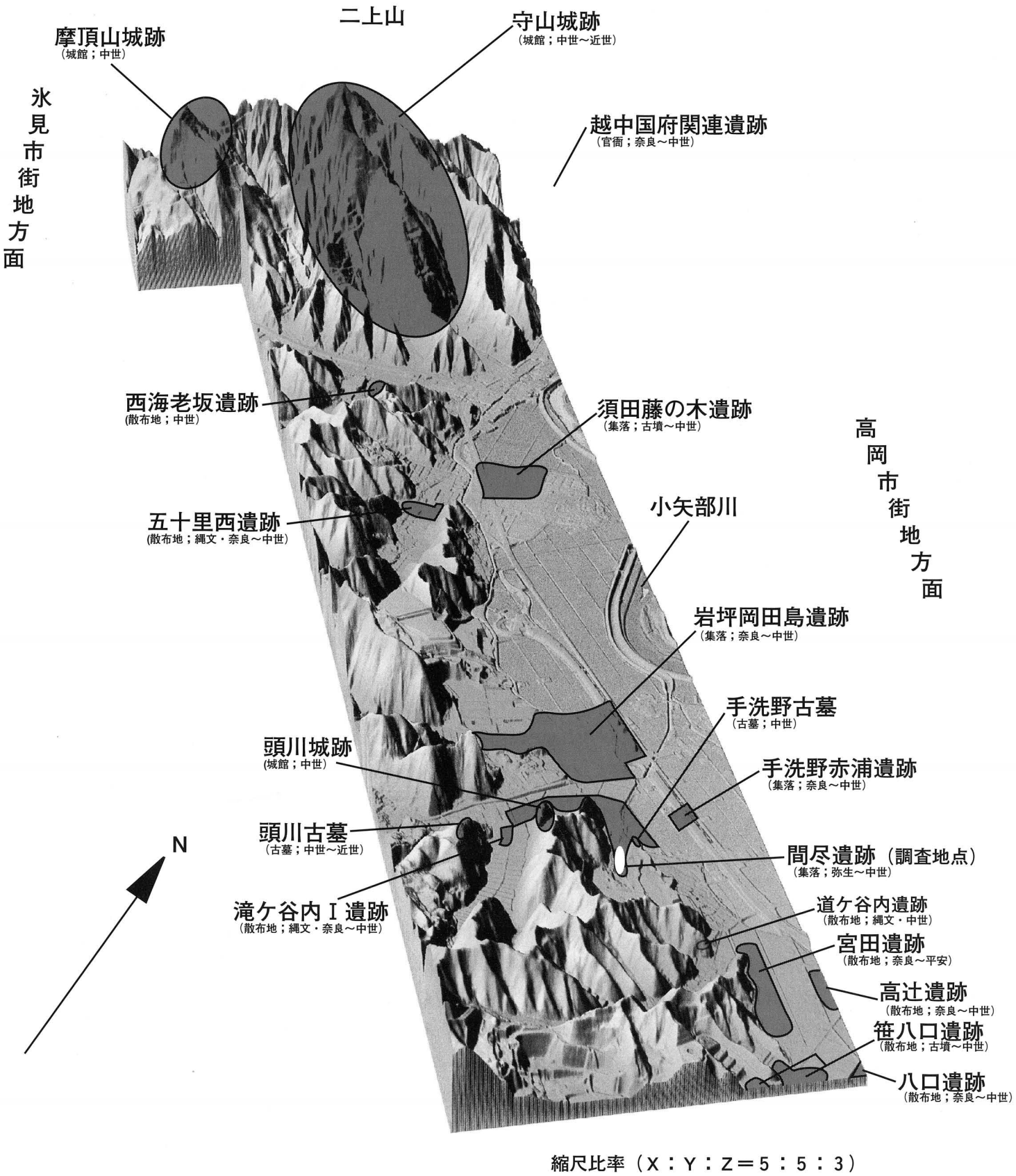
昭和59年に当遺跡を含む国吉地区において、分布調査を高岡市教育委員会が実施し、遺跡の範囲と内容を提示した。このときの成果は『西山丘陵埋蔵文化財分布調査概報』Ⅱとして報告書を刊行している。報告書に記載した出土遺物は、圃場整備事業にて出土した遺物である。

頭川間尽遺跡

昭和62年に『北陸の古代寺院』（桂書房）が発行され、その中で西井龍儀氏が「頭川間尽遺跡」として当遺跡出土の古瓦を紹介し、この古瓦が出土した地点より内面返りの須恵器の坏蓋が出土している点から、古瓦をこの須恵器と同時期のものとし、７世紀末のものと推定した。さらに、当遺跡付近に瓦の供給先、あるいは瓦窯の存在を想定した。

平成５年度本調査

平成５年度に当遺跡で個人住宅の建設に伴い本調査を実施し『市内遺跡調査概報』Ⅱで報告した。この時は、溝を１条検出したが、遺物の出土は多くなく、この地区が遺跡の北端部と推定された。



第３図　間尽遺跡周辺地形鳥瞰図及び遺跡位置図（古代～中世）

3．遺跡の分布状態

頭川谷をめぐる遺跡

間尽遺跡は、頭川川が南東方向に流れている開析谷の入口の右岸平野部一帯に位置している。間尽遺跡の背後の丘陵尾根上には、安居山古墳群と四十九古墳群が所在している。安居山古墳群は３基の長方墳からなり、もっとも大きい規模である東側の墳丘は、東西14m、南北22m、高さ2.8mを計る。河原石が葺かれているが、古墳群の西側に空堀状の大溝があり、砦などの基壇状遺構の可能性もある。四十九古墳群は5基の円墳からなり、２基の大型円墳を基幹としている。大きさは、第１号墳が直径44m、高さ６mを計り、円墳では県内3番目の大きさである。

間尽遺跡の対岸の位置に、頭川城ヶ平横穴墓群が所在している。頭川城ヶ平横穴墓群は、頭川谷左岸の丘陵崖面にあり、20基の横穴墓を確認している。頭川城ヶ平横穴墓の北側には、頭川オスキノ原遺跡と頭川宮中遺跡があり、いずれも縄文時代中期の遺跡である。間尽遺跡の北端で、西に延びる支谷がある。この支谷の入口左岸には滝ヶ谷内Ⅰ遺跡がある。この遺跡からは、縄文晩期中葉の口縁に装飾突起を持つ縄文土器をはじめ、土師器、須恵器、珠洲等が出土している。滝ヶ谷内Ⅰ遺跡の北方丘陵上には頭川古墓が所在しているが、実態は不明である。支谷の奥には滝ヶ谷内Ⅱ遺跡が所在している。支谷対岸の尾根上には明田Ⅰ遺跡が所在し、弥生土器が出土している。

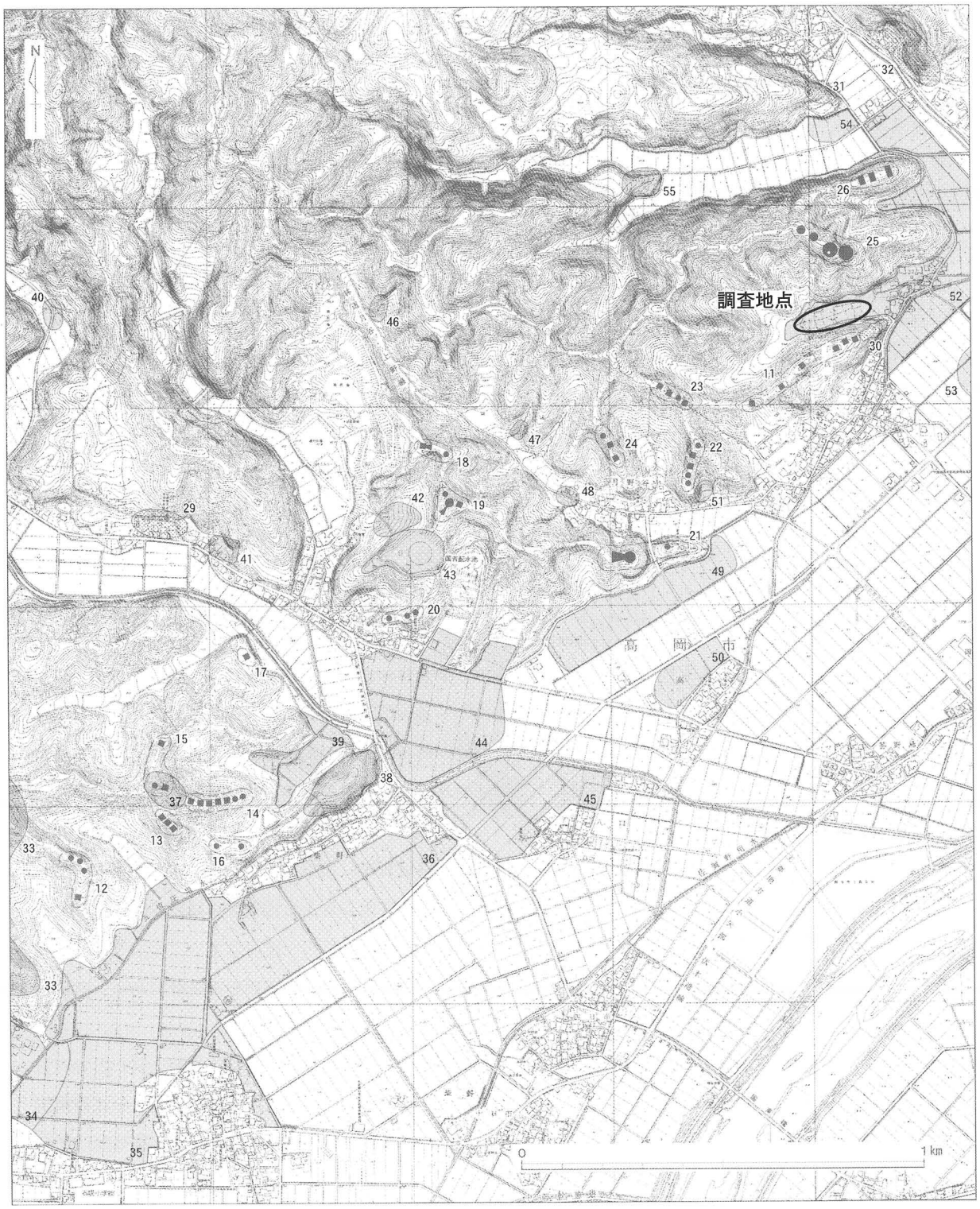
月野谷周辺の遺跡

間尽遺跡に南接する丘陵尾根上には倉谷古墳群がある。平成９年からの発掘調査で弥生終末期の方形台状墓と判明した。この尾根づたいに南へ行くと、道ヶ谷内Ⅰ～Ⅲ古墳群が所在している。道ヶ谷内Ⅰ～Ⅲ古墳群の麓に月野谷集落がある。集落の西側には道ヶ谷内遺跡がある。集落の南側の小丘陵上には立山古墳群があり、第１号墳は全長67mを計る前方後円墳になる可能性がある。月野谷の中程に月野谷千草遺跡があり、谷奥には月野谷大谷内遺跡がある。さらに、谷を遡ったところに月野谷石飛遺跡がある。月野谷の右岸尾根上には、男撲古墳群、釈迦堂古墳群がある。男撲古墳群は、平成11年に富山考古学会により測量調査が行われ、全長58mの前方後円墳を基幹として、方墳1基と円墳1基の計３基からなる古墳群と確認された。この前方後円墳は前方部と後円部との比高差が６mと大きく、また古墳裾の高さが一定ではないことなどから、出現期の前方後円墳と推測される。釈迦堂古墳群は、前方後円墳1基と円墳1基からなる古墳群である。立山古墳群の南側平野部には宮田遺跡、高辻遺跡が拡がる。

男撲古墳群の西側の谷は広谷川によって造られた開析谷で、この谷の左岸に江道横穴墓群、笹八口谷内古墳群、円通庵遺跡、笹八口遺跡、篠八口砦跡、釈迦堂遺跡が所在する。江道横穴墓群は、平成８年に高岡市教育委員会が発掘調査を行い、新たに９基の横穴墓を加え、20基からなる横穴墓群であることを確認している。

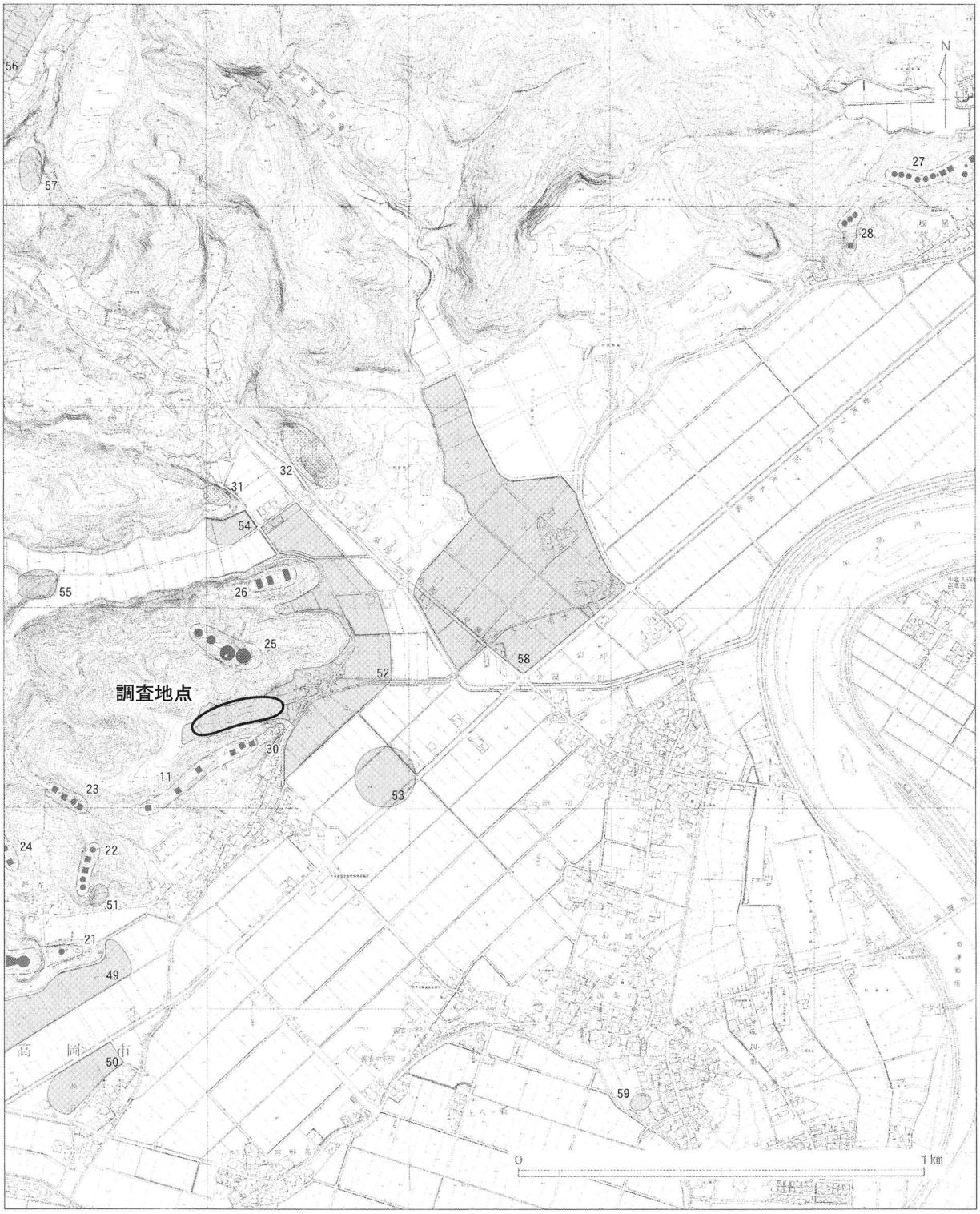
岩坪周辺の遺跡

富山県西部と能登地域を結ぶ能越自動車道が国吉地区を通ることになり、そのため平成10年に財団法人富山県文化振興財団によって遺跡の分布調査および試掘調査が行われ、２つの新しい遺跡が確認された。間尽遺跡の南方約300mの位置に手洗野赤浦遺跡がある。この遺跡は平成11年に財団法人富山県文化振興財団が発掘調査を行い、中・近世の遺構を検出した。また、間尽遺跡から北東約600mの位置に岩坪岡田島遺跡があり、平成11年に高岡市教育委員会が試掘調査をした結果、中世の井戸址や溝等を検出した。とりわけ、珠洲Ⅰ・Ⅱ期を中心とした中世前期の遺物が多量に出土した。



第４図　遺跡地図〔１〕（１／１万５千）

11. 倉谷古墳群、12. 麻生谷殿谷内古墳群、13. 柴野口割Ⅰ古墳群、14. 柴野口割Ⅱ古墳群、15. 柴野口割Ⅲ古墳群、16. 柴野口割Ⅳ古墳群
17. 柴野春日古墳、18. 釈迦堂古墳群、19. 男撲古墳群、20. 笹八口谷内古墳群、21. 立山古墳群、22. 道ヶ谷内Ⅰ古墳群
23. 道ヶ谷内Ⅱ古墳群、24. 道ヶ谷内Ⅲ古墳群、25. 四十九古墳群、26. 安居山古墳群、29. 江道横穴墓群、30. 手洗野古墓群
31. 頭川古墓群、32. 頭川城ヶ平横穴墓群、33. 麻生谷殿谷内城跡、34. 麻生谷新生園遺跡、35. 麻生谷遺跡、36. 柴野遺跡
37. 柴野城ヶ平城跡、38. 柴野高の宮城跡、39. 柴野守善寺遺跡、40. 境久寺遺跡、41. 円通庵遺跡、42. 釈迦堂遺跡、43. 篠八口砦跡
44. 笹八口遺跡、45. 八口遺跡、46. 月野谷石飛遺跡、47. 月野谷干草遺跡、48. 月野谷大谷地遺跡、49. 宮田遺跡、50. 高辻遺跡
51. 道ヶ谷内遺跡、52. 間尽遺跡、53. 手洗野赤浦遺跡、54. 滝ヶ谷内Ⅰ遺跡、55. 滝ヶ谷内Ⅱ遺跡



第５図　遺跡地図〔２〕（１／１万５千）

11. 倉谷古墳群、21. 立山古墳群、22. 道ヶ谷内Ⅰ古墳群、23. 道ヶ谷内Ⅱ古墳群、24. 道ヶ谷内Ⅲ古墳群、25. 四十九古墳群
26. 安居山古墳群、27. 板屋谷内Ｂ古墳群、28. 板屋谷内Ｃ古墳群、30. 手洗野古墓群、31. 頭川古墓群、32. 頭川城ヶ平横穴墓群
49. 宮田遺跡、50. 高辻遺跡、51. 道ヶ谷内遺跡、52. 間尽遺跡、53. 手洗野赤浦遺跡、54. 滝ヶ谷内Ⅰ遺跡、55. 滝ヶ谷内Ⅱ遺跡
56. 頭川オスキノ原遺跡、57. 頭川宮中遺跡、58. 岩坪岡田島遺跡、59. 佐加野ラントウ遺跡

第２節　調査に至る経緯

遺跡概観

当調査区は、砺波平野西部を流れる小矢部川左岸に形成された西山丘陵の一角にある開析谷に位置している。また、土壌の性質は砂質土を主体としており木製品が遺存するなど調査時においても軟弱で湿気がちであることがみてとれ、建物を建築する上で不利な条件であったことが窺われる。

古代には、交通の動脈である北陸道が通り、礪波郡及び射水郡の境界が近傍にあったとされている。また、平成11年度には北東に2ｋｍ程度離れた五十里地区において掘立柱建物などをはじめとして木簡や墨書土器が確認され、東大寺領荘園である須加荘ではないかと判断されている。

中世には、越中国最古とされる曹洞宗寺院国上山信光寺が造営されるなど信仰の拠点が各所に営まれた。さらには、能越自動車道本線工事に係る調査においては集落跡などの居住域の存在が確認されており、着実に往時の地域像が明らかになりつつある。また、周辺には頭川古墓や安居山城など様々な種類の生活痕跡が認められる。

当調査区は、このような環境下においてあえて倉庫群や溝などを整備された意義を考えさせ、地勢的に比較的閉鎖環境にある地域において古代から中世にかけての人々がどのような生活を営んでいたのであろうか探るうえで少なからず判断材料を与えたものといえる。

調査にいたる経緯

当調査は、能越自動車道土砂採取関連遺跡の調査である。

平成９年度

調査は、北陸地方建設局富山工事事務所長から高岡市建設部長を経て依頼があり、試掘調査を実施するにいたった。現地調査は、民間調査機関（(有）山武考古学研究所）により実施された。現地調査期間は、平成９年11月19日から同年12月26日である。調査成果は、古代及び中世の遺構面などが確認され、土木工事等の実施に際しては事前調査が必要であることが判断された。

平成13年度

本発掘調査（Ａ地区）ならびに試掘調査（Ｂ・Ｃ地区）が実施された。調査に先立ち国土交通省の工事計画変更に伴い開発区域の変更が生じた旨、建設部能越自動車道対策課を経由して申し入れがあった。この計画変更により試掘調査が実施されていない箇所が認められたことから試掘調査が実施された。試掘調査の結果は、新たに本発掘調査が必要とされることが判明し翌年度において本発掘調査を実施することが決まった。現地調査期間は、平成13年８月27日から同年12月26日である。現地調査は、(有）山武考古学研究所が受託し実施された。

平成14年度

本発掘調査（Ｂ・Ｃ地区）が実施された。調査は大成エンジニアリング㈱が受託して実施された。現地調査期間は、平成14年７月31日から同年12月26日である。

第３節　調査概観

１．調査の方法

調査地区の設定

今回の調査においては調査対象地域北側にある工事用車両進入路より南側の地域を発掘調査の対象とした。また、Ｃ地区の工事用車両進入路北側に位置する狭小部分については、進入路南側における遺構確認面までの掘削深度を根拠として発掘調査不可能と判断されたため、今回の発掘調査においては工事用進入路の直下と併せて未調査となっている。なお、Ｃ地区においては撹乱による客土が深く大量に調査対象地域を覆っていたため、掘削法面に犬走りを設定するなど、安全に配慮した対策を講じたことから、調査面積は減少している。未調査となっているＢ地区道路下、提体下も調査可能と判断している。これらの箇所は地中レーダー探査によって遺構の有無などを確認し、現地に保護措置をはかっている。

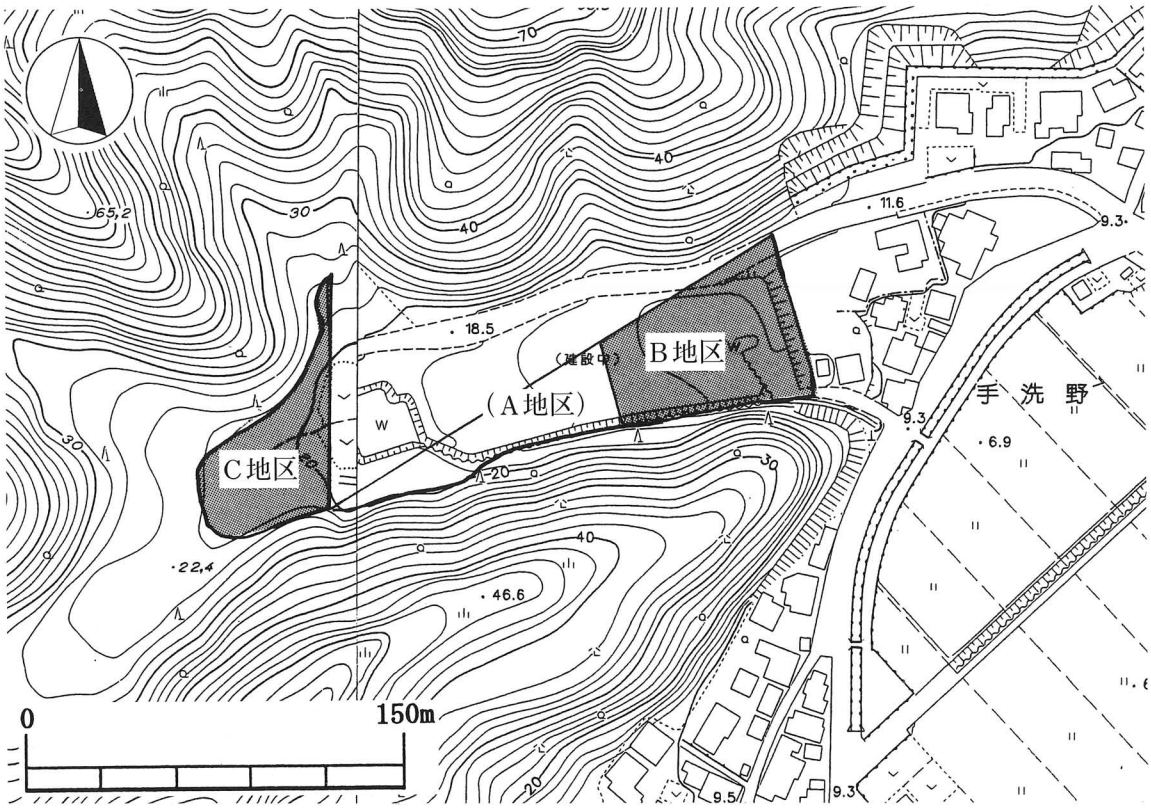
調査対象面積および発掘調査面積は以下の通りである。

Ｂ地区：調査対象面積＝4,000㎡

発掘調査面積＝3,160㎡　×　２面

Ｃ地区：調査対象面積＝2,050㎡

発掘調査面積＝1,720㎡



第６図　調査対象地区　位置図（１／3000）高岡市発行『高岡市都市計画基本図』に加筆

遺構調査

Ｂ地区、Ｃ地区ともに遺構確認面までの表土除去作業にはバックホーを用いた。その後の遺構確認、遺構覆土除去等、精査にあたっては鋤簾、移植ゴテ等を用いた。また、Ｂ地区第１面から第２面への包含層の除去にあたっても同様の手法を用いた。

重機による表土除去作業終了後、公共座標（世界測地系）を基準とした一辺10mの正方形グリッド杭を設定した。座標杭には、北から南へＡ・Ｂ…、東から西へ１、２…、その交点をＡ－１・Ｂ－１…と称号を付し、北東隅にあたる杭の称号をもってグリッドの呼称とした。なお、Ａのラインより北側に張出した調査区についてはＺを呼称とした。包含層等の遺構外出土遺物の取上げにあたっては、各グリッドの名称を使用した。

遺構覆土等の排出について、Ｂ地区西側においてはベルトコンベアーを導入して調査区外（Ａ地区北側地域）へ搬出し、Ｂ地区東側及びＣ地区においては調査区内で大きく撹乱を受けている地域に置くことで解決した。

写真撮影

写真撮影は、35㎜白黒・35㎜カラーリバーサル・35㎜カラーネガフィルムを用いて発掘調査における各段階を記録した。撮影にあたっては、地形の状態、遺物の出土層位が明示できるように留意して、調査工程の記録を行った。なお、遺跡の全景写真については、地上での撮影のほか、ラジコンヘリ及び実機ヘリによる航空写真も加えた。

遺構実測

各遺構図面（平面図、土層断面図、遺物分布図等）の縮尺は1／20を基本としたが、遺構の検出状況によっては臨機応変に他の縮尺を採用した場合もある。遺構全体図の作成にあたってはラジコンヘリ及び実機ヘリを利用した空中写真測量で対応し、等高線は25㎝間隔とした。

２．調査の経過

Ｂ地区とＣ地区はＡ地区により分断されているため、Ｂ地区から開始してＣ地区へと移行した。調査経過の概略は以下の通りである。

平成１４年７月３１日	Ｂ地区：重機による表土掘削を開始
８月　５日	Ｂ地区：人力による遺構検出作業を開始
９日	Ｂ地区：ベルトコンベアー24台を搬入
１９日	Ｂ地区：重機による表土掘削および排土の搬出を完了
２２日	安全大会を実施
２９日	Ｂ地区：ラジコンヘリによる第１面の遺構検出状況の空撮を実施
３０日	Ｂ地区：第１面の各検出遺構の調査開始
９月１０日	Ｂ地区：実機ヘリによる第１面遺構完掘状況の空撮を実施
１１日	Ｂ地区：遺構の個別写真撮影および実測
１２日	Ｂ地区：人力による第２面までの包含層の除去を開始
３０日	Ｂ地区：第２面の遺構プラン検出を開始
１０月　４日	Ｂ地区：ラジコンヘリによる第２面の遺構検出状況の空撮を実施
７日	Ｂ地区：第２面の各検出遺構の調査開始

１９日	Ｂ地区：実機ヘリによる第２面遺構完掘状況の空撮を実施
２２日	Ｂ地区・Ｃ地区：発掘調査不可能とした部分の地下レーダー探査を実施
１１月１１日	Ｂ地区：ラジコンヘリによる第２面の空撮を再度実施
２０日	Ｂ地区：実機ヘリによる第２面の遺構完掘状況の空撮を再度実施
	Ｃ地区：重機による表土掘削を開始
２８日	Ｃ地区：重機による表土除去作業終了　グリッド杭設置
３０日	Ｃ地区：調査区壁面をブルーシートにより養生
１２月　３日	Ｂ地区：実機ヘリによる第２面の遺構完掘状況の空撮を再々度実施
８日	Ｂ地区：発掘調査終了
９日	Ｃ地区：ラジコンヘリによる遺構検出状況の空撮を実施　グリッド杭設置
	各検出遺構の調査開始
１２月２０日	Ｃ地区：ラジコンヘリによる遺構完掘状況の空撮を実施
２６日	Ｃ地区：発掘調査終了

３．調査の概要

Ｂ地区の遺構確認面は、試掘調査の結果等から、当初第３面まで設定されていた。しかしながら、第３面とされる遺構確認面は第２面との変化に乏しく、調査の時点では遺構・遺物に明確な差異は認められなかったため、第３面を「第２面下部遺構確認面」として第２面と同一の位置づけとし、同時に調査を進めることとした。

Ｂ地区第１面からは調査区中央付近から南西部にかけて溝跡を32条検出した。主軸方位を見ると約10度程度西偏して南北方向に走る。他はこれにほぼ直行する状態で東西方向に走る。第1面を鳥瞰すれば、いわゆる畝状になっており、近世の耕作によるものと考えられる。Ａ地区においても同様の畝状の溝が検出されているが、おそらくは同じ時期のものであることが予想される。

Ｂ地区第２面からは掘立柱建物跡18棟、土坑13基、柵列２基、溝跡27条、性格不明遺構２基を検出した。遺構分布は調査区西側に偏りを見せるが、Ａ地区に見られる大型の総柱建物跡は発見されず、当該遺構確認面における遺跡の主要部がＡ地区にあることを示すものと判断される。出土遺物から判断すれば大きく２時期に分けられ、遺構の重複関係から少なくとも４時期に細分されることが判明した。　溝跡は、第１面とは異なり、掘立柱建物跡との相関性に鑑みて区画溝と思われる。なお、掘立柱建物跡は立替等による重複関係にあるものは同じ遺構番号としたため、実質的には18棟に5棟を加えた23棟が想定される。遺物は溝ＳＤ59から多量の木製品が出土し、Ｚ－３グリッドを中心として須恵器等の土器類が比較的多く分布していた。

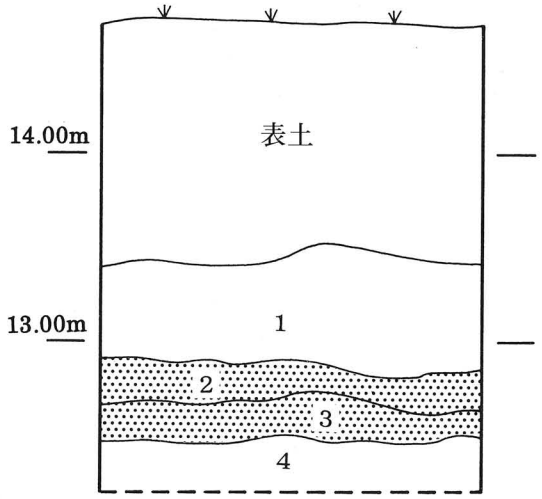
Ｃ地区は大きな撹乱により南北に２分され、北側から掘立柱建物跡13棟、土坑14基、溝跡24条が検出された。南側については遺構が検出されなかったわけだが、遺構確認面の直上まで撹乱層の堆積が確認されていることから、本来の遺構確認面が大きく破壊されている可能性が高いと思われる。掘立柱建物跡や溝跡の重複関係から、少なくとも４時期に細分されることが判明している。この点からＣ地区の遺構確認面はＢ地区第２面の遺構確認面と同じ時期であると考えられるが、Ｂ地区第１面に相当する遺構確認面は検出できなかった。調査区南側と同様、撹乱によって破壊されている可能性が高い。また、遺物の出土量もＢ地区に比較して少なく、この点にも撹乱による破壊の影響が見て取れる。

4．基本層序

Ｂ地区は調査区南壁中央部付近、Ｃ地区は調査区南側部分の土層観察によるが、いずれも覆土の残りが悪いため、試掘調査時の観察結果も参照して基本層序を図示すると以下（第７図）の通りとなる。

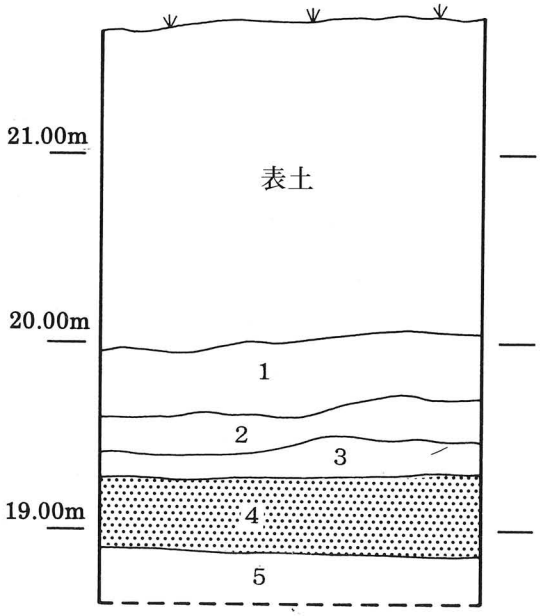
Ｂ地区は２層が第１面の包含層、３層が第２面の包含層である。Ｃ地区は第４層が包含層である。

Ｂ地区



１、黄褐色砂質土
２、黒褐色砂質土　（包含層）
（第１遺構確認面（近世））
３、暗褐色砂質土　（包含層）
（第２遺構確認面（古代～中世））
４、灰褐色砂質土　（地山層）

Ｃ地区



１、黒色砂質土
２、暗褐色砂質土
３、黒褐色砂質土
４、黒色砂質土　（包含層）
（遺構確認面（古代～中世））
５、灰色砂質土　（地山層）

第７図　Ｂ・Ｃ地区基本層序

第２章　Ｂ地区第１面

第１節　概観

概観

検出された遺構は全て溝跡である。第１章第３節でも述べた通り、検出された溝は畝状を呈しており、近世の耕作跡と判断される。試掘調査のトレンチが東西方向に３条存在している。（第11図、図面01、図版01－２・05・06－１）

第２節　遺構

１．溝

32条を検出した。主軸方向を見ると約10度程度西偏して南北方向に走る。他はこれに直行する状態で東西方向に走る。これに則さないものが２条あるが意図的とは思われない。まとめると次のようになる。

南北方向（約10度西偏）：27条＝溝ＳＤ01～20、溝ＳＤ24～30

東西方向（約10度北偏）：８条＝溝ＳＤ02、溝ＳＤ05、溝ＳＤ08、溝ＳＤ21～23、溝ＳＤ31・32

南北方向（約50度西偏）：１条＝溝ＳＤ11（北部約10m分）

南北方向（約20度西偏）：１条＝溝ＳＤ19

遺構覆土は一様で、茶褐色土粒子を少量含む灰褐色砂質土である。重複関係にあるものについては覆土の差異が顕著ではないことから時期差はほとんどないものと判断される。

溝ＳＤ01（図面01）

Ｂ６からＣ５区に存在する。全長南北約13.5m、幅0.25m、深さ0.05m、主軸方向は約10度西偏する。土師器小破片が出土している。

溝ＳＤ02（図面01）

Ａ６からＣ５区に存在する。全長南北約20m、さらに南端から約4.2m東へと屈折して延びている。幅1.2～0.8m、深さ0.22m、主軸方向は約10度西偏する。土師器および須恵器小破片が出土している。

溝ＳＤ03（図面01）

Ｃ５区に存在する。全長南北約５m、幅0.5m、深さ0.1m、主軸方向は約10度西偏する。土師器小破片が出土している。

溝ＳＤ04（図面01）

Ｂ５・Ｃ５区に存在する。全長南北約16.2m、幅0.3～0.6m、深さ0.12m、主軸方向は約10度西偏する。溝ＳＤ21と重複関係にある。

溝ＳＤ05（図面01）

Ｂ５・Ｃ５区に存在する。全長南北約16m、さらに南端から約3.8m東へと屈折して延びている。幅0.4～0.6m、深さ0.1m、主軸方向は約10度西偏する。溝ＳＤ08および溝ＳＤ21と重複関係にある。土師器および須恵器小破片が出土している。

溝ＳＤ06（図面01）

Ｂ５・Ｃ５区に存在する。全長南北約6.2m、さらに南端から約１m東へと曲がって延びている。幅0.35m、深さ01m。主軸方向は約10度西偏する。溝ＳＤ07および溝ＳＤ21と重複関係にある。土師器および須恵器小破片が出土している。

溝ＳＤ07（図面01）

Ｃ５区に存在する。全長南北約5.5m、幅0.3m、深さ0.07m、主軸方向は約10度西偏する。溝ＳＤ06と重複関係にある。

溝ＳＤ08（図面01）

Ｂ５からＣ４区に存在する。全長は南北約16.5m、さらに南端から約4.7m東へと屈折して延びている。幅0.4～0.6m、深さ0.08～0.1m、主軸方向は約10度西偏する。溝ＳＤ05・溝ＳＤ09・溝ＳＤ21～23と重複関係にある。４世紀前半のものと思われる漆町編年５・６群の土師器［遺物番号８（Ｒ081)］（図面33、図版26）が出土している。また、土師器・須恵器および陶器小破片が出土している。

溝ＳＤ09（図面01）

Ｂ４・Ｃ４区に存在する。全長南北約17m、幅0.35m、深さ0.08m、主軸方向は約10度西偏する。溝ＳＤ08・溝ＳＤ21・溝ＳＤ23と重複関係にある。土師器および須恵器小破片が出土している。

溝ＳＤ10（図面01）

Ｃ４区に存在する。全長南北約５m、幅0.3m、深さ0.04m、主軸方向は約10度西偏する。鉄製品［遺物番号９（Ｒ010)］（図面33、図版26）が出土している。須恵器小破片が出土している。

溝ＳＤ11（図面01）

Ｚ５からＣ４区に存在する。全長南北約30.5m、さらに北端から約10m北西へと曲がって延びている。幅0.4m、深さ0.1～015m、主軸方向は約10度西偏する。溝ＳＤ21と重複関係にある。土師器および陶器小破片が出土している。

溝ＳＤ12（図面01）

Ａ４からＣ３区に存在する。全長南北約18.8m、幅0.45～0.9m、深さ0.18m、主軸方向は約10度西偏する。土師器・須恵器および陶器小破片が出土している。

溝ＳＤ13（図面01）

Ｂ３・Ｃ３区に存在する。全長南北約3.7m、幅0.25m、深さ0.05m、主軸方向は約10度西偏する。

溝ＳＤ14（図面01）

Ｂ３・Ｃ３区に存在する。全長南北約14.8m、幅0.3～0.5m、深さ0.05m、主軸方向は約10度西偏する。土師器小破片が出土している。

溝ＳＤ15（図面01）

Ｂ３・Ｃ３区に存在する。全長南北約12.8m、幅0.35m、深さ0.1m、主軸方向は約10度西偏する。土師器小破片が出土している。

溝ＳＤ16（図面01）

Ｂ３・Ｃ３区に存在する。全長南北約９m、幅0.3m、深さ0.04m、主軸方向は約10度西偏する。

溝ＳＤ17（図面01）

Ａ３・Ｂ３区に存在する。全長南北約8.1m、幅0.22～0.5m、深さ0.06m、主軸方向は約10度西偏する。土師器小破片が出土している。

溝ＳＤ18（図面01）

Ａ６からＣ５区に存在する。全長南北約7.8m、幅1.2～0.8m、深さ0.22m、主軸方向は約10度西偏。土師器・須恵器および陶器の小破片が出土している。

溝ＳＤ19（図面01）

Ｂ３・Ｃ３区に存在する。全長南北約5.4m、幅0.3m、深さ0.04m、主軸方向は約20度西偏する。

溝ＳＤ20（図面01）

Ｂ３・Ｃ３区に存在する。全長南北約3.6m、幅0.3m、深さ0.1m、主軸方向は約10度西偏する。

溝ＳＤ21（図面01）

Ｂ４からＣ５区に存在する。全長東西約16m、幅0.38～0.62m、深さ0.1～0.17m、主軸方向は約10度北偏する。溝ＳＤ04～06・溝ＳＤ08・溝ＳＤ09・溝ＳＤ11と重複関係にある。土師器小破片が出土している。

溝ＳＤ22（図面01）

Ｂ４区に存在する。全長東西約2.1m、幅0.2m、深さ0.04m、主軸方向は約10度北偏する。溝ＳＤ08・溝ＳＤ09・溝ＳＤ23と重複関係にある。須恵器小破片が出土している。

溝ＳＤ23（図面01）

Ｂ４区に存在する。全長東西約3.25m、幅0.36m、深さ0.04m、主軸方向は約10度北偏する。溝ＳＤ08・溝ＳＤ09・溝ＳＤ22と重複関係にある。

溝ＳＤ24（図面01）

Ｂ５区に存在する。全長南北約1.75m、幅0.25m、深さ0.03m、主軸方向は約10度西偏する。

溝ＳＤ25（図面01）

Ｂ４区に存在する。全長南北約1.25m、幅0.25m、深さ0.1m、主軸方向は約10度西偏する。

溝ＳＤ26（図面01）

Ａ４・Ｂ４区に存在する。全長南北約3.3m、幅0.3m、深さ0.03m、主軸方向は約10度西偏する。

溝ＳＤ27（図面01）

Ａ４・Ｂ４区に存在する。全長南北約４m、幅0.3～0.5m、深さ0.03m、主軸方向は約10度西偏する。

溝ＳＤ28（図面01）

Ｂ５区に存在する。全長南北約1.2m、幅0.25m、深さ0.05m、主軸方向は約10度西偏する。

溝ＳＤ29（図面01）

Ｚ６・Ａ６区に存在する。全長南北約2.8m、幅0.6m、深さ0.1m、主軸方向は約10度西偏する。

溝ＳＤ30（図面01）

Ｃ５区に存在する。全長南北約１m、幅0.12m、深さ0.13m、主軸方向は約10度西偏する。

溝ＳＤ31（図面01）

Ｃ５からＤ６区に存在する。全長東西約３m、幅0.8～1.1m、深さ0.05m、主軸方向は約10度北偏する。溝ＳＤ02と重複関係にある。

溝ＳＤ32（図面01）

Ｂ１区に存在する。全長東西約７m、幅0.3～0.4m、深さ0.1m、主軸方向は約10度北偏する。

第３節　遺物

第１面から出土した遺物は、器種、時代ともに様々である。出土遺物の傾向は第２面と同様であるため、本来は第２面のものであった遺物が、遺跡の地理的条件や近世の耕作等の事由によって第１面において検出された可能性が非常に高い。［遺物番号146・175～178・231～233・254～257・265・271（全てＲ001もしくはＲ002）］（図面52・53・56・58・60、図版48・50・52～54・56）

遺構より出土した遺物は４世紀前半のものと思われる漆町編年５・６群の土師器［遺物番号８（Ｒ081）］（図面33、図版26）と、時期は不明の鉄製品［遺物番号９（Ｒ010）］（図面33、図版26）で、それぞれ甕の口縁部破片と刀子と思われる。土師器は溝ＳＤ08から、鉄製品は溝ＳＤ10から検出された。

遺構外出土遺物は、４世紀前半のものと思われる漆町編年５・６群の土師器高坏脚部片［遺物番号146］、９世紀前半から中頃のものと思われる田嶋編年Ⅳ２（新）からＶ２期の須恵器蓋［遺物番号175～178］・同坏［遺物番号231～233］、中世のものと思われる土錘［遺物番号254～257］、古墳時代のものと思われる碧玉製勾玉［遺物番号265］、閃緑岩製打製石斧［遺物番号267］、石灰質砂岩製砥石［遺物番号271］である。上記の理由により、第２面出土遺物とまとめて述べることとした。

第３章　Ｂ地区第２面

第１節　概観

概観

検出された遺構は掘立柱建物、柵列、土坑、小ピット、溝跡、性格不明遺構である。遺構の重複関係、出土遺物の時期、検出遺構の傾向から９世紀と、11世紀末から13世紀前半の２時期に大別される。それらをさらに２分し、計４期に細分した。（第８・９図、図面02、図版02－１・03）Ａ地区においては、13世紀後半から14世紀中頃までの遺構が確認されているが、Ｂ・Ｃ地区の調査において該期の遺構の存在を明確にできなかった。

掘立柱建物には柱根が良好に残っているものもあり、土坑や溝からも木製品が出土するなど、砂質土を主体とした湿った土地ならではの調査成果が得られている。その他の出土遺物を概観すると、古墳時代の碧玉製勾玉や土師器、８世紀後半から９世紀の須恵器、中世の珠洲焼や土師質土器、漆器等の木製品などが検出されている。

掘立柱建物の時期については、自然科学分析結果、構造的条件、平面プラン軸線の傾き、区画溝との関連性、出土遺物、重複関係などを総合的に判断し、下記の通りⅠ期からⅣ期を設定した。

Ⅰ期：９世紀前半＝南北方向に長軸が設定される。柱穴は比較的しっかりとして大きな堀方を持つ。２連の束柱がある。中世（本項Ⅲ期以降）の区画溝である溝ＳＤ38、溝ＳＤ40、溝ＳＤ59に切られる。軸線は西へ15°～20°傾く。

Ⅱ期：９世紀後半＝Ⅰ期の建て替え。東西方向にも長軸が設定されるものが出てくる。柱穴は比較的しっかりとして大きな堀方を持つ。中世（本項Ⅲ期以降）の区画溝である溝ＳＤ38、溝ＳＤ40、溝ＳＤ59に破壊される。軸線は東西に15°～20°傾く。

Ⅲ期：11世紀から12世紀中頃＝Ａ地区より続く区画溝である溝ＳＤ41に伴う。確認された柱穴は比較的小さい。平面プランは細長く、長軸と短軸の比率が１：２の前後もしくはそれ以上である。軸線は約20°～25°程度東西に傾き、比較的大きい。軸線を揃えることよりも区画溝を意識しているものと思われる。

Ⅳ期：12世紀後半から13世紀前半＝珠洲焼（吉岡編年Ⅰ期）を伴う［遺物番号５（Ｒ268・525)］（図面33、図版26)。平面プランは多様化する。軸線は15°～20°程度東西に傾くものを基本として、区画溝である溝ＳＤ42に従って30°～40°程度傾くものがある。柱穴はしっかりとして大きな堀方を持つものが含まれる。

また、上記に伴い、柵址、土坑、区画溝などの各遺構についても同様のⅠ～Ⅳ期を当てはめることとした。

なお、例言にも付記した通り、掘立柱建物は全て「案」である。よって、重複関係と出土遺物の傾向から想定された４期区分を採用するのが最も妥当と考えられるが、勿論４期以上に細分できる可能性もある。出土遺物などから、敢えて積極的にⅣ期以降の時期を当てはめることをしなかったが、Ａ地区においてはさら

に２時期（13世紀後半から14世紀前半とそれに続く14世紀中頃の二時期）続くことが報告されている。

概観すれば、Ｂ地区第２面においては９世紀の遺構と11世紀から13世紀前半の遺構が同一面で確認されていることになる。Ａ地区における第３面を同時に検出したものと思われるが、これには開析谷であることの地理的条件と、これに伴う覆土堆積状況の複雑さが影響しているものと思われる。

第２節　遺構

１．掘立柱建物

詳細については一覧表（第１表）を附した。各々の掘立柱建物を前述の細分に当てはめると次のようになる。（図面02～13、図版02・03・06～10）

Ⅰ期：６棟＝掘立柱建物ＳＢ02（案）、掘立柱建物ＳＢ03－１（案）、掘立柱建物ＳＢ04－１（案）、掘立柱建物ＳＢ05（案）、掘立柱建物ＳＢ06（案）、掘立柱建物ＳＢ10（案）

Ⅱ期：５棟＝掘立柱建物ＳＢ03－２（案）、掘立柱建物ＳＢ04－２（案）、掘立柱建物ＳＢ08（案）、掘立柱建物ＳＢ11（案）、掘立柱建物ＳＢ12（案）

Ⅰ期ないしⅡ期：２棟＝掘立柱建物ＳＢ14－１・２（案）

Ⅲ期：３棟＝掘立柱建物ＳＢ01（案）、掘立柱建物ＳＢ16（案）、掘立柱建物ＳＢ18（案）

Ⅳ期：６棟＝掘立柱建物ＳＢ04－３（案）、掘立柱建物ＳＢ07（案）、掘立柱建物ＳＢ09（案）、掘立柱建物ＳＢ13（案）、掘立柱建物ＳＢ15（案）、掘立柱建物ＳＢ17（案）

掘立柱建物ＳＢ14－１・２（案）については、どちらかが建替えであると思われるが、残念ながら新旧関係は不明である。当該地域における同一位置での建替えについては、他の掘立柱建物が全て９世紀であることなどから、掘立柱建物ＳＢ14－１・２（案）も９世紀である可能性が高いと考えられる。また、掘立柱建物ＳＢ07（案）については面取りされた長方形断面の角柱が使用されていることが確認されたが、非常に脆く、慎重に取上げたがその後すぐに崩壊してしまった。

なお、Ａ地区で検出された掘立柱建物ＳＢ405（案）については、Ｂ地区においてそれに続く柱穴を２基のみ確認している。（図面20、図版03）

掘立柱建物ＳＢ01（案）（図面03、図版06）

Ｃ５・Ｃ６区に存在する。東西２間（４ｍ）、南北４間（8.2ｍ）が想定された。溝ＳＤ41に規制されるものと判断される。柱穴は遺構検出面での直径が約0.28～0.7ｍ、深さは約0.18～0.74ｍである。柱間は1.9～2.2ｍで、主軸の傾きは15度西偏する。掘立柱建物ＳＢ13（案）と重複関係にある。共伴遺物なし。

掘立柱建物ＳＢ02（案）（図面04、図版06～08）

Ａ４からＢ５区にかけて存在する。東西２間（3.45ｍ）、南北２間（3.65ｍ）の総柱建物である。束柱は東西方向に２本配置され、構造上中央に仕切りのある倉庫類の建物が予想される。柱穴は遺構検出面での直径が約0.45～0.77ｍ、深さは約0.21～0.52ｍである。柱穴４基から柱根が検出された［遺物番号20～23（Ｒ643～646）］（図面34・35、図版27・28）。樹種同定の結果クリ材であることが判明しているが、その報告書の中でクリ材の選択的な利用が指摘されている。主軸の傾きは20度北偏する。溝ＳＤ40と重複関係にある。また、性格不明遺構ＳＸ01は本遺構に関係する遺構、例えば倉庫入口の普請施設等、であった可能性を指摘できるだろう。

掘立柱建物ＳＢ03－１（案）（図面04、図版08）

Ａ４・Ａ５区に存在する。東西２間（3.1m）、南北２間（3.35m）の総柱建物である。束柱はほぼ中央に２本配置され、掘立柱建物ＳＢ02（案）と同様に構造上中央に仕切りのある倉庫類の建物が予想される。柱穴は遺構検出面での直径が約0.4～0.6m、深さは約0.08～0.4mである。主軸の傾きは20度西偏する。溝ＳＤ40と重複関係にある。建替えが認められる。共伴遺物なし。

掘立柱建物ＳＢ03－２（案）（図面04、図版08）

Ａ４・Ａ５区に存在する。東西２間（2.9m）、南北２間（3.4m）の側柱建物である。柱穴は遺構検出面での直径が約0.23～0.5m、深さは約0.08～0.4mである。柱穴１基から柱根が検出された［遺物番号24（Ｒ647)］（図面35、図版28)。樹種同定の結果クリ材であることが判明している。主軸の傾きは15度西偏し、建替えられたものと判断される。溝ＳＢ40と重複関係にある。

掘立柱建物ＳＢ04－１（案）（図面05、図版09）

Ｂ４区に存在する。東西２間（2.95m)、南北２間（3.2m）の総柱建物で、倉庫類の建物が予想される。柱穴は遺構検出面での直径が約0.37～0.95m、深さは約0.18～0.47mである。主軸の傾きは26度西偏し、建替えが認められる。また、掘立柱建物ＳＢ02（案）の場合と同様に、性格不明遺構ＳＸ02は本遺構に関係する遺構であった可能性を指摘できる。土坑ＳＫ02、溝ＳＤ40と重複関係にある。また、本遺構の柱穴から採取された木炭について放射性炭素による年代測定を実施し、ＢＰ1380±50年・１σ615ＡＤ（62.8%）690ＡＤ、ＢＰ1310±50年・１σ660ＡＤ（47.0%）730ＡＤという測定結果が得られている。土師器小破片が出土している。

掘立柱建物ＳＢ04－２（案）（図面05、図版09）

Ｂ４区に存在する。東西２間（2.8m）、南北２間（3.4m）の側柱建物である。柱穴は遺構検出面での直径が約0.37～0.95m、深さは約0.18～0.56mである。主軸の傾きは33度西偏し、建替えられたものと判断される。また、掘立柱建物ＳＢ02（案）の場合と同様に、性格不明遺構ＳＸ02は本遺構に関係する遺構であった可能性を指摘できる。土坑ＳＫ02、溝ＳＤ40と重複関係にある。土師器小破片が出土している。

掘立柱建物ＳＢ04－３（案）（図面06、図版09）

Ｂ４区に存在する。東西２間（4.4m）、南北３間（4.7m）の側柱建物である。柱穴は遺構検出面での直径が約0.45～0.75m、深さは約0.35～0.7mである。北側に並ぶ柱穴３基から柱根が検出され［遺物番号25～27（Ｒ641・642・686)］（図面36、図版28・29)、樹種同定の結果クリ材であることが判明している。主軸の傾きは21度西偏する。土坑ＳＫ02、土坑ＳＫ11、溝ＳＤ40、性格不明遺構ＳＸ02と重複関係にある。

なお、本遺構は規模や主軸の傾き、他の遺構との重複関係等から、前出の掘立柱建物ＳＢ04－１（案）ないし掘立柱建物ＳＢ04－２（案）の建替えではないと判断される。土師器小破片が出土している。

掘立柱建物ＳＢ05（案）（図面07、図版03）

Ｚ２・Ａ２区に存在する。東西１間（3.4m)、南北３間（４m）が想定された。柱穴は遺構検出面での直径が約0.52～0.7m、深さは約0.16～0.54mである。柱間は1.5～3.4mで、主軸の傾きは15度西偏する。掘立柱建物ＳＢ08（案)、柵址ＳＡ01、溝ＳＤ44、溝ＳＤ45と重複関係にある。出土遺物は９世紀前半と思われる田嶋編年Ⅳ２（新）期の須恵器蓋［遺物番号１（Ｒ526)］（図面33、図版26）である。また、本遺構の柱穴から採取された木炭について放射性炭素による年代測定を実施し、ＢＰ1720±50年・１σ250ＡＤ（68.2%）400ＡＤという測定結果が得られている。

掘立柱建物ＳＢ06（案）（図面07、図版03）

Ｚ１・Ｚ２区に存在する。遺構北側は調査区外へ続くものと思われ、全体像は不明であるが、東西３間（8.3m）分が検出されている。柱穴は遺構検出面での直径が約0.48～0.76m、深さは約0.52mである。柱間は2.5～３mで、主軸の傾きは15度西偏するものと思われる。掘立柱建物ＳＢ11（案）、土坑ＳＫ06、溝ＳＤ38と重複関係にある。共伴遺物なし。

掘立柱建物ＳＢ07（案）（図面08、図版03）

Ｚ４・Ａ４区に存在する。東西２間（4.6m）、南北２間（4.45m）が想定された。柱穴は遺構検出面での直径が約0.27～0.63m、深さは約0.07～0.3mである。柱間は2.1～2.45mで、主軸の傾きは20度北偏する。柱穴４基に柱根がわずかながら残されており、柱の横断面は面取りされた長方形の材が使用されていた。樹種同定の結果クリ材であることが判明しており、材としては他の掘立柱建物の柱材と同じではあるが、角材が使用されている点に注目すれば、倉庫というよりは居住施設であった可能性が高いといえるだろう。

出土遺物は９世紀前半と思われる田嶋編年Ⅳ２（新）期の須恵器蓋［遺物番号２（Ｒ651)］（図面33、図版26）と８世紀後半と思われる田嶋編年Ⅳ２（古）期坏［遺物番号３（Ｒ651)］（図面33、図版26）でいずれも古代の遺物であるが、溝ＳＤ40と溝ＳＤ59に規制され、またすぐ近くに土坑ＳＫ08（井戸）も存在することを考えれば、本遺構が中世の遺構である可能性が高いと推察される。土師器小破片が出土いている。

掘立柱建物ＳＢ08（案）（図面09、図版03）

Ａ２・Ａ３区に存在する。遺構南西側は撹乱によって消失しているが、東西２間（7.1m）、南北１間（3.2m）分を検出した。柱間は3.1～４mである。柱穴は遺構検出面での直径が約0.64～1.4m、深さは約0.4～0.68mである。主軸の傾きは15度西偏する。掘立柱建物ＳＢ05（案）、柵址ＳＡ01と重複関係にある。共伴遺物なし。

掘立柱建物ＳＢ09（案）（図面09、図版03）

Ｚ１・Ａ１区に存在する。東西１間（3.45m）、南北２間（5.1m）が想定された。柱間は2.45～3.45mである。柱穴は遺構検出面での直径が約0.28～0.98m、深さは約0.38～0.76mである。主軸の傾きは17度西偏する。共伴遺物なし。

掘立柱建物ＳＢ10（案）（図面10、図版13）

Ｚ３区に存在する。遺構西側が溝ＳＤ59によって消失しているが、南北２間（3.9m）の建物が想定された。柱間は1.8～2.1mである。柱穴は遺構検出面での直径が約0.53～0.74m、深さは約0.6～0.8mである。主軸の傾きは20度西偏するものと思われる。柱穴の調査状況から、建替えが行われている可能性もある。共伴遺物なし。

掘立柱建物ＳＢ11（案）（図面07、図版03）

Ｚ１・Ｚ２区に存在する。遺構北側は調査区外へ続くものと思われ、全体像は不明であるが、東西１間（3.8m）分が検出された。柱穴は遺構検出面での直径が約0.67～1.1m、深さは約0.4～0.56mである。主軸の傾きは15度西偏する。掘立柱建物ＳＢ06（案）、溝ＳＤ38と重複関係にある。共伴遺物なし。

掘立柱建物ＳＢ12（案）（図面10、図版03）

Ｚ５区に存在する。遺構北側は調査区外へ続くものと思われ、全体像は不明であるが、東西２間（2.55m）分が検出された。柱間は1.25～1.3mである。柱穴は遺構検出面での直径が約0.25～0.58m、深さは約0.2～0.52mである。主軸の傾きは27度西偏するものと推察される。共伴遺物なし。

掘立柱建物ＳＢ13（案）（図面10、図版03）

Ｂ６・Ｃ５・Ｃ６区に存在する。東西１間（5.1m）、南北３間（6.15m）分が検出された。柱間は1.1～

5.1mである。柱穴は遺構検出面での直径が約0.18～0.32m、深さは約0.07～0.45mである。主軸の傾きは40度西偏することから、溝ＳＤ42の西部分に規制されて存在するものと思われ、掘立柱建物ＳＢ01（案）と重複関係にある。共伴遺物なし。

掘立柱建物ＳＢ14－１（案）（図面11、図版03）

Ｃ５区に存在する。遺構東側は溝ＳＤ55よって消失しているため全体像は不明であるが、南北２間（3.05m）分が検出された。柱間は1.35～1.7mである。柱穴は遺構検出面での直径が約0.32～0.37m、深さは約0.16～0.28mである。主軸の傾きは15度西偏する。３基の柱穴は全て２つの柱穴が連結しており（掘立柱建物ＳＢ14－２（案）とした）、建替えが行われたことを示していると推察される。新旧関係は不明である。共伴遺物なし。

掘立柱建物ＳＢ14－２（案）（図面11、図版03）

Ｃ５区に存在する。掘立柱建物ＳＢ14－１（案）と同様に、遺構東側は溝ＳＤ55よって消失しているため全体像は不明であるが、南北２間（3.30m）分が検出された。柱間は1.6～1.7mである。柱穴は遺構検出面での直径が約0.32～0.37m、深さは約0.15～0.35mである。主軸の傾きは15度西偏する。前述の通り建替えを指摘できる。新旧関係は不明である。共伴遺物なし。

掘立柱建物ＳＢ15（案）（図面11、図版03）

Ｃ３・Ｃ４区に存在する。東西２間（3.6m）、南北１間（3.25m）の建物が想定された。柱間は1.7～3.25mである。柱穴は遺構検出面での直径が約0.24～0.46m、深さは約0.1～0.52mである。主軸の傾きは15度北偏する。溝ＳＤ40、溝ＳＤ43、溝ＳＤ47と重複関係にある。共伴遺物なし。

掘立柱建物ＳＢ16（案）（図面12、図版03）

Ｃ２からＣ３区にかけて存在する。遺構中央部は溝ＳＤ59によって消失しているものと思われるが、東西推定５間（10m）、南北１間（3.95m）が想定された。柱間は1.5～3.95mである。柱穴は遺構検出面での直径が約0.32～0.6m、深さは約0.1～0.27mである。主軸の傾きは23度北偏する。共伴遺物なし。

掘立柱建物ＳＢ17（案）（図面13、図版03）

Ｃ０・Ｃ１区に存在する。遺構南側は調査区外へ続くものと思われ、全体像は不明であるが、東西３間（5.35m）分が検出された。柱間は1.7～1.95mである。柱穴は遺構検出面での直径が約0.25～0.46m、深さは約0.08～0.14mである。主軸の傾きは15度北偏するものと推察される。共伴遺物なし。

掘立柱建物ＳＢ18（案）（図面13、図版03）

Ｚ０からＡ１区にかけて存在する。東西２間（4.25m）、南北１間（2.25m）分が検出された。柱間は2～2.25mである。柱穴は遺構検出面での直径が約0.3～0.52m、深さは約0.23～0.7mである。主軸の傾きは23度北偏する。共伴遺物なし。

２．柵址

南北方向に走る２列が明らかとなった。

柵址ＳＡ01（図面13）

Ｚ２・Ａ２区に存在する。全長は10mで６基の柱穴が直列する。柱間は1.6～2.4m、柱穴は直径0.42～0.68m、深さ0.68～0.94m。溝ＳＤ44ないし溝ＳＤ45に平行し、土坑ＳＫ06までをその線上に規制している。溝ＳＤ59ともほぼ平行関係にある点も含め、前述のⅣ期に属していると想定される。主軸は約20度西偏する。掘立柱建物ＳＢ05（案）および掘立柱建物ＳＢ08（案）と重複関係にある。共伴遺物なし。

柵址ＳＡ02（図面13）

Ｂ２・Ｃ２区に存在する。全長は7.2mで４基の柱穴が直列する。本来は５基並んでいたものと思われるが、撹乱により消失しているものと考えられる。柱間は1.8m、柱穴は直径0.45m、深さ0.26～0.4m。溝ＳＤ35に平行し、溝ＳＤ59ともほぼ平行関係にある。主軸は約10度西偏する。共伴遺物なし。

３．土坑

13基検出された。土坑ＳＫ08は井戸であり、曲物を井戸枠に使用している（図面16、図版11）。また、検出状況から下記Ⅳは井戸である可能性も否めないが土坑ＳＫ08のように、井戸枠の検出等の判断材料に乏しく、遺構確認面から30ｃｍ程度掘ると湧水してしまうことなどから井戸と確定するには至らなかった。

土坑ＳＫ06から出土した珠洲焼の甕の破片が溝ＳＤ59から出土したものと接合している［遺物番号５（Ｒ268・525)］（図面33、図版26)。また、土坑ＳＫ01の覆土中から包丁傷のついた曲物の底板が出土している［遺物番号28～30（Ｒ274・278・279)］（図面37、図版29・30)。これらの遺構は前述の、期に該当する可能性が高いと考えられる。

土坑ＳＫ11についてはⅢ・Ⅳ期の遺構と重複関係にあり、９世紀の遺構とは重複関係にないことから、９世紀の遺構であると判断される。他の遺構については時期、性格ともに不明と言わざるをえない。

土坑ＳＫ01（図面14、図版11）

Ｂ５区に存在する。遺構プランは隅丸方形で東西1.26m、南北1.14m、深さ0.94m、断面形状は逆台形である。覆土は黒色土で、木製品［遺物番号28～31（Ｒ274・278・279・280)］（図面37、図版29・30）が４点出土している。俎板に転用されたと思われる曲物の底板が３点含まれるが、樹種同定の結果スギ材が１点、ヒノキ属のものが２点であることが判明している。土師器小破片が出土している。

土坑ＳＫ02（図面14、図版09）

Ｂ４区に存在する。遺構プランは円形で直径約1.08m、深さ0.62m、断面形状は逆台形である。掘立柱建物ＳＢ04（案）と重複関係にある。覆土は黒色土である。共伴遺物なし。

土坑ＳＫ03（図面14、図版11）

Ｂ６区に存在する。遺構プランは長方形で長辺約2.96m、短辺約1.08m、深さ約0.37m、断面形状は逆台形である。土師器および須恵器小破片が出土している。

土坑ＳＫ04（図面14、図版11）

Ｚ４・Ｚ５区に存在する。遺構プランは円形で直径約２～2.15m、深さ0.6m、断面形状は弧形である。覆土は褐色砂質土の下層に黒色土と黒褐色砂質土がレンズ状に堆積する。土師器小破片が出土している。

土坑ＳＫ05（図面15、図版12）

Ｃ４区に存在する。遺構プランはＴ字状を呈しており、長方形の土坑２基が重複していたものである可能性が指摘できる。東西約3.33m、南北約2.3m、深さ0.68m、断面形状は逆台形といえる。覆土は上層から黒褐色土、褐色砂質土、灰黄褐色砂質土、黒色土の順で堆積している。土師器および須恵器小破片が出土している。

土坑ＳＫ06（図面15）

Ｚ２区に存在する。遺構プランは不整円形で長軸約3.74m、短軸約2.74m、深さ0.85m、断面形状は弧形である。覆土は上層から黄灰色砂質土、黒褐色土、灰褐色砂質土の順で堆積している。掘立柱建物ＳＢ06（案）と重複関係にある。特筆すべき出土遺物には、漆紙が付着した９世紀前半と思われる田嶋編年Ⅳ２

（新）期の須恵器坏の底部破片［遺物番号４（Ｒ267）］（図面33、図版26）、溝ＳＤ59出土の破片と接合した11世紀後半から12世紀前半と思われる吉岡編年Ⅰ期の珠洲甕の口縁部［遺物番号５（Ｒ268・525）］（図面33、図版26）、扇子模様の漆絵が描かれている漆器椀［遺物番号32（Ｒ266）］（図面38、図版31）が挙げられる。なお、この漆器椀の樹種はブナ属で、漆塗膜について放射性炭素による年代測定を実施し、ＢＰ880±60年・１σ1110ＡＤ（44.3％）1220ＡＤという測定結果が得られている。

須恵器は９世紀、珠洲焼は11世紀後半から12世紀前半と判断され、漆器椀は自然科学分析の項で四柳氏の所見によると15～16世紀と考察されているが、３点の取り上げ番号（Ｒ番号）が連続していることから、これらの遺物が本遺構の年代を決定し得るとは明言できない。なお、第１層より検出された木炭について放射性炭素による年代測定を実施し、ＢＰ410±50年・１σ1430ＡＤ（58.1％）1520ＡＤという測定結果が得られている。

土坑ＳＫ07（図面16）

Ｂ５・Ｃ５区に存在する。遺構プランは円形で直径約1.12m、深さ0.66m、断面形状は逆台形である。覆土は黒色土で、溝ＳＤ42と重複関係にある。共伴遺物なし。

土坑ＳＫ08（図面16、図版12）

Ｚ４区に存在する。遺構プランは円形で直径約1.9m、深さ0.44m以上、調査実施深度までの断面形状は弧形である。覆土は黒褐色土の下層に黒色土が堆積しており、黒色土中から、井戸枠を含め、多くの木製品が出土している［遺物番号33～52］（図面38～41、図版31～35）。井戸枠［遺物番号33・34（Ｒ702－２・１）］（図面38、図版31）は曲物を使用したもので、他の土坑とは異なり、本遺構が井戸であることを示す資料である。樹種同定の結果スギであることが判明している。

また、漆器椀が１点、井戸枠内から出土している［遺物番号37（Ｒ705）］（図面39、図版32）。樹種同定の結果トチノキで作られていることが判明し、四柳氏の所見によると14世紀に類似の例を見ることができると指摘されている。覆土堆積状況と出土遺物などから判断して、本遺構の築造年代および使用年代は不明といわざるを得ないが、少なくとも14世紀において開口していたことを指摘できる。

土坑ＳＫ09（図面16）

Ｚ４区に存在する。遺構プランは楕円形で長軸約2.65m、短軸約2.42m、深さ0.9m、断面形状は逆台形といえる。覆土は上層から黒色土、黒褐色土、黒色土の順でレンズ状に堆積している。出土遺物は８世紀中頃と思われる田嶋編年Ⅳ１期の須恵器甕［遺物番号７（Ｒ001・104・164・165・381・382）］（図面33、図版26）と中世のものと思われる土錘［遺物番号６（Ｒ381）］（図面33、図版26）が出土している。土師器および須恵器小破片が出土している。

土坑ＳＫ10（図面16）

Ｚ５区に存在する。遺構プランは隅丸方形で東西約0.8m、南北約0.92m、深さ0.1m、断面形状は弧形である。覆土は黒褐色土の下層に黄褐色砂質土がレンズ状に堆積している。共伴遺物なし。

土坑ＳＫ11（図面17、図版09）

Ｂ４区に存在する。遺構プランは不定形で長軸は約2.2m、短軸約1.7m、深さ0.66m、断面形状は逆台形といえる。覆土は上層から暗褐色土、黒褐色土、灰褐色土の順でレンズ状に堆積している。掘立柱建物ＳＢ04－３（案）、溝ＳＤ40、溝ＳＤ42と重複関係にある。須恵器小破片が出土している。

土坑ＳＫ12（図面17）

Ｃ１区に存在する。遺構プランは円形で直径約1.5m、深さ0.46m、断面形状は弧形といえる。覆土は黒

褐色砂質土の下層に灰褐色砂質土が堆積している。共伴遺物なし。

土坑ＳＫ13（図面17）

Ｂ４・Ｃ３区に存在する。遺構プランは長方形と推察され、南北約１ｍ、短軸約0.55ｍ、深さ0.2ｍ、断面形状は弧形といえる。覆土は灰褐色砂質土の下層に黒褐色砂質土がレンズ状に堆積している。共伴遺物なし。

4．小ピット

調査区全体に数多く検出された。直径も様々で、20㎝を超えるものから数㎝のものまで存在する。柱穴、柵址等が考えられたが、確定的な要素を欠いたため小ピットとした。著しい偏在傾向は見られなかった。

5．溝

区画溝と思われる27条を検出した。主軸方向を見ると約10度程度傾くものと約20°程度傾くものとに大別される。ただし、溝ＳＤ52は溝ＳＤ42に伴うと思われ、溝ＳＤ53・54は溝ＳＤ56の延長部分にあたるのではないかと思われるが、敢えて下記に当てはめることをしなかった。

なお、溝ＳＤ33についてはこれらに合致しないが、近世以降の溝であることが判明している。本来は第１面乃至それ以前に調査されているべきものではあるが、覆土除去作業が第２面において実施され、平面図が作成された経緯もあり、やむを得ず第２面において掲載している。

南北方向（約10°西偏）：３条＝溝ＳＤ34、47、51

東西方向（約10°北偏）：３条＝溝ＳＤ37、48、49

南北方向（約20°西偏）：10条＝溝ＳＤ35、36、39、40、44、45、46、55、57、59

東西方向（約20°北偏）：６条＝溝ＳＤ38、41、42（約10ｍ分が40°西偏）、43、50、54、56、58

主要な溝跡について他の遺構との相関性を中心に見てゆくと、溝ＳＤ40は溝ＳＤ41・43・50と直交し、掘立柱建物ＳＢ02（案）・03（案）・04－１～３（案）・15（案）と重複している。さらには溝ＳＤ43から直交して延びる溝ＳＤ55は掘立柱建物ＳＢ01（案）を規制し、掘立柱建物ＳＢ14（案）と重複する。溝ＳＤ59は溝ＳＤ35・44と平行、溝ＳＤ38・42と直交して存在し、掘立柱建物ＳＢ10（案）・16（案）と重複、掘立柱建物ＳＢ07（案）を規制する。溝ＳＤ42は掘立柱建物ＳＢ04－３（案）・13（案）・15（案）を規制し、溝ＳＤ35は掘立柱建物ＳＢ17（案）、溝ＳＤ38・44は掘立柱建物ＳＢ09（案）をそれぞれ規制している。溝ＳＤ43は掘立柱建物ＳＢ16（案）に到達する直前で止まっており、溝ＳＤ49は掘立柱建物ＳＢ16（案）の南西角を意識するかのようにわずかながら屈曲を見せる。

上記の理由によって、下記の通り各期に当てはめることが妥当と考える。

Ⅰ期：溝ＳＤ34、37、47

Ⅱ期：溝ＳＤ48、51

Ⅲ期：溝ＳＤ40、41、43、45、46、49、50、55、57

Ⅳ期：溝ＳＤ35、36、38、39、42、44、53、54、56、59

不明：溝ＳＤ33、52、58

溝ＳＤ33（図面02）

Ｃ０からＤ６区、調査区南端に横たわるように存在する。検出された長さは58.6ｍだが、東西両方向ともに調査区外へと延びる。南側も調査区外になるため、幅は不明といわざるをえない。深さは0.44～0.68ｍ、

主軸方向は約10度北偏するものと推察される。溝ＳＤ59と重複する。出土遺物には４世紀前半と思われる漆町編年５・６群の土師器、中世のものと思われる土師質土器や珠洲焼など、種類や時代もばらばらであるため流れ込みによるものと思われる［遺物番号10～13（Ｒ001・Ｒ224）］（図面33、図版26）。共伴遺物には土師器、須恵器、陶器の小破片がある。

溝ＳＤ34（図面02）

Ｂ５・Ｃ５区に存在する。全長南北約13.8m、幅0.84～1.18m、深さ0.21m、主軸方向は約10度西偏する。覆土は黒褐色土である。溝ＳＤ42および溝ＳＤ56と重複関係にある。出土遺物には４世紀前半と思われる漆町編年５・６群の土師器甕［遺物番号14（Ｒ272・352・409）］（図面33、図版26）の口縁部が出土している。共伴遺物には土師器および須恵器小破片が出土している。

溝ＳＤ35（図面02）

Ｂ１・Ｃ１区に存在する。全長南北約10.6m、幅0.58～0.74m、深さ0.14～0.32m、主軸方向は約20度西偏する。覆土は灰褐色砂質土と黒褐色砂質土である。共伴遺物なし。

溝ＳＤ36（図面02）

Ｂ３・Ｃ３区に存在する。全長南北約4.6m、幅0.88～1.26m、深さ0.14～0.32m、主軸方向は約20度西偏する。覆土は黒褐色砂質土である。溝ＳＤ43と重複関係にある。共伴遺物には土師器および須恵器小破片が出土している。

溝ＳＤ37（図面02）

Ｃ３区に存在する。全長東西約3.54m、幅0.44m、深さ0.1m、主軸方向は約10度北偏する。覆土は暗褐色砂質土である。共伴遺物なし。

溝ＳＤ38（図面02）

Ｚ１・Ｚ２区に存在する。全長東西約10.2m、幅0.2～0.64m、深さ0.08～0.16m。主軸方向は約20度北偏する。覆土は灰褐色砂質土である。掘立柱建物ＳＢ06（案）及び掘立柱建物ＳＢ11（案）と重複関係にある。共伴遺物には須恵器小破片が出土している。

溝ＳＤ39（図面02）

Ｂ３区に存在する。全長南北約5.06m、幅0.9m、深さ0.2～0.3m、主軸方向は約20度西偏する。覆土は黒褐色土の下層に暗褐色砂質土が堆積している。共伴遺物なし。

溝ＳＤ40（図面02）

Ｚ５からＣ４区にかけて存在する。２箇所途切れるが、連続性が認められることから一連の遺構とした。北から10.2m、2.75m、16.46mで、それぞれ１mと1.7mの間隔で途切れている。幅0.3～0.5m、深さ0.8～0.16m、主軸方向は約20度西偏する。覆土は黒褐色砂質土。掘立柱建物ＳＢ02（案）、掘立柱建物ＳＢ03（案）、掘立柱建物ＳＢ04（案）、掘立柱建物ＳＢ15（案）、溝ＳＤ42、溝ＳＤ43と重複関係にある。共伴遺物には須恵器小破片が出土している。

溝ＳＤ41（図面02）

Ｃ４からＤ６区にかけて存在する。全長東西約8.69m、幅0.34m、深さ0.1m、主軸方向は約20度北偏する。覆土は灰褐色砂質土である。共伴遺物なし。

溝ＳＤ42（図面02）

Ｂ３からＢ５区にかけて存在する。全長は約30.3mで、釣針型に屈曲するプランを呈している。幅0.2～1.04m、深さ0.2m、主軸方向は約20度北偏するが、西端10m分は途中で西40度方向に傾きを変え、東端2.8

m分は逆S字を呈する。覆土は灰褐色砂質土である。土坑ＳＫ07、土坑ＳＫ11、溝ＳＤ34、溝ＳＤ40、溝ＳＤ56と重複関係にある。土師器および須恵器小破片が出土している。

溝ＳＤ43（図面02）

Ｃ３からＣ５区にかけて存在する。全長東西約12.95m、幅0.3～0.6m、深さ0.18m、主軸方向は約20度北偏する。覆土は灰褐色砂質土である。掘立柱建物ＳＢ15（案）、溝ＳＤ36、溝ＳＤ40、溝ＳＤ47、溝ＳＤ55と重複関係にある。共伴遺物なし。

溝ＳＤ44（図面02）

Ｚ２・Ａ２区に存在する。全長南北約6.1m、幅0.36m、深さ0.1m、主軸方向は約20度西偏する。掘立柱建物ＳＢ05（案）と重複関係にある。出土遺物はいずれも９世紀前半から中頃と思われる田嶋編年Ⅳ２（新）・Ⅴ１の須恵器坏［遺物番号15～17（Ｒ001・385・387・388・389）］（図面33、図版27）である。

溝ＳＤ45（図面02）

Ｚ２・Ａ２区に存在する。全長南北約5.3m、幅0.34m、深さ0.08m、主軸方向は約20度西偏する。掘立柱建物ＳＢ05（案）と重複関係にある。共伴遺物なし。

溝ＳＤ46（図面02）

Ｂ４・Ｃ４区に存在する。全長南北約2.1m、幅0.28m、深さ0.3m、主軸方向は約20度西偏する。覆土は黒褐色砂質土の下層に灰褐色砂質土が堆積する。溝ＳＤ42と重複関係にある。共伴遺物なし。

溝ＳＤ47（図面02）

Ｂ４からＣ３区にかけて存在する。全長南北約8.8m、幅0.3m、深さ0.14～0.32mm、主軸方向は約10度西偏する。覆土は黒褐色砂質土である。掘立柱建物ＳＢ15（案）、土坑ＳＫ13、溝ＳＤ42、溝ＳＤ43と重複関係にある。共伴遺物なし。

溝ＳＤ48（図面02）

Ｃ３区に存在する。全長東西約2.7m、幅0.6m、深さ0.14m、主軸方向は約10度北偏する。覆土は暗褐色砂質土と灰褐色砂質土である。土師器小破片が出土している。

溝ＳＤ49（図面02）

Ｃ２・Ｃ３に存在する。全長東西約3.75m、幅0.25～0.35m、深さ0.08m、主軸方向は約10度北偏する。覆土は灰褐色砂質土である。西端に北への屈曲がわずかに認められる。共伴遺物なし。

溝ＳＤ50（図面02）

Ｂ４・Ｂ５区に存在する。全長東西約8.12m、幅0.3m、深さ0.08m、主軸方向は約20度北偏する。覆土は黒色土の下層に暗褐色土が堆積している。共伴遺物なし。

溝ＳＤ51（図面02）

Ｂ５区に存在する。全長南北約1.48m、幅0.26m、深さ0.12m、主軸方向は約10度西偏する。覆土は灰褐色砂質土である。共伴遺物なし。

溝ＳＤ52（図面02）

Ｂ４区に存在する。全長南北約1.6m、幅0.26m、深さ0.1m、主軸方向は約40度西偏する。覆土は灰褐色砂質土である。共伴遺物なし。

溝ＳＤ53（図面02）

Ｂ４・Ｃ４区に存在する。全長南北約1.54m、幅0.4m、深さ0.06m、主軸方向は約20度東偏する。覆土は灰褐色砂質土である。溝ＳＤ42と重複関係にある。土師器小破片が出土している。

溝ＳＤ54（図面02）

Ｂ４区に存在する。全長南北約1.25m、幅0.36m、深さ0.12m、主軸方向は約10度西偏する。覆土は灰褐色砂質土の下層に暗褐色砂質土が堆積している。共伴遺物なし。

溝ＳＤ55（図面02）

Ｃ５区に存在する。全長南北約6.84m、幅0.48m、深さ0.12m、主軸方向は約20度西偏する。覆土は灰褐色砂質土の下層に暗褐色砂質土が堆積している。掘立柱建物ＳＢ14（案）、溝ＳＤ43、溝ＳＤ56と重複関係にある。共伴遺物なし。

溝ＳＤ56（図面02）

Ｃ４・Ｃ５区に存在する。全長東西約5.3mで、Ｓ字プランを呈することが予想される。幅0.2m、深さ0.05m、主軸方向は約20度北偏する。覆土は暗褐色砂質土の下層に灰褐色砂質土が堆積している。溝ＳＤ34、溝ＳＤ42、溝ＳＤ55と重複関係にある。共伴遺物なし。

溝ＳＤ57（図面02）

Ｂ５・Ｃ５区に存在する。全長南北約１m、幅0.42m、深さ0.08m、主軸方向は約20度西偏する。覆土は暗褐色砂質土である。共伴遺物なし。

溝ＳＤ58（図面02）

Ｂ４区に存在する。全長東西約2.45m、幅0.26m、深さ0.08m、主軸方向は約20度北偏する。覆土は暗褐色砂質土である。掘立柱建物ＳＢ04－３（案）と重複関係にある。共伴遺物なし。

溝ＳＤ59（図面02・18、図版13～15）

Ｚ３からＣ２区にかけて存在する。全長東西約36.6mで、途中撹乱により分断されている。幅２～4.22m、深さ0.12～0.7m、主軸方向は約20度西偏する。覆土は灰褐色砂質土と暗褐色砂質土に黒褐色土の堆積も認められる。撹乱により分断された北側部分において、遺物が集中して出土しており、昆虫遺体や種実遺体、曲物や漆器椀などの木製品が良好な状態で検出された。詳細は自然科学分析の項に報告文をそのまま掲載しているのでご参照戴きたいが、鑑賞用ないし食用に供される種類の有用植物が認められている。また、木製品については、イスノキ製の櫛［遺物番号58（Ｒ613）］（図面42、図版36）やケヤキ製の漆器椀［遺物番号56（Ｒ680）］（図面42、図版35）などを除き、ほとんどの木製品にスギ材が使用されていたことが樹種同定の結果として報告されている。また、出土した木製品の中で４点について放射性炭素による年代測定を実施しているが、出土遺物の項でそれぞれについて言及することにする。

種実遺体ならびに昆虫遺体についても分析、同定されており、クリの果実、カナムグラの種子、ナス科の種子、メロン類の種子、水棲昆虫のヒメガムシ、草木の葉を食べるマメコガネ・ヒメコガネ・ヨモギハムシ、動物の糞や腐敗物に集まるクロマルエンマコガネやコブマルエンマコガネ、花粉などを食べるハナムグリやコアオハナムグリ、朽木などに集まるキマワリなどの各種遺体が検出されている。詳細については自然科学分析の項において分析結果を報告文のまま掲載している。なお、メロン類の種子については放射性炭素による年代測定を実施し、ＢＰ960±50年・１σ1080ＡＤ（39.8%）1160ＡＤという測定結果が得られている。

本遺構は北側調査区外へと続くと考えられるが、調査区周辺の地中レーダー探査を実施した結果において考古学的な遺構の可能性を有する反射を長さ約５m分確認している。

6．性格不明遺構

性格不明遺構ＳＸ01（図面19、図版08）

掘立柱建物ＳＢ02（案）の西側直近から検出された。平面プランは不整形で細長く、長軸約2.7m、短軸約0.84m、深さ約0.18m。底面の凹凸が他の遺構に比べて顕著である。土師器小破片が出土している。

性格不明遺構ＳＸ02（図面19、図版09）

掘立柱建物ＳＢ04－１・２（案）の西側直近から検出された。平面プランは不整形で細長く、長軸約2.96m、短軸約0.65m、深さ約0.12m。底面の凹凸は顕著ではない。掘立柱建物ＳＢ04－３（案）と重複関係にあり、柱穴に切られている。覆土上面から４世紀前半と思われる漆町編年５・６群の土師器高坏［遺物番号18（Ｒ392)］（図面33、図版27）の脚部が、底面直上からは９世紀前半と思われる田嶋編年Ⅳ２（新）の須恵器坏［遺物番号19（Ｒ398)］（図面33、図版27）がそれぞれ出土している。共伴遺物には土師器および須恵器小破片が出土している。

第３節　遺物

1．遺構出土遺物

土師器

溝ＳＤ33から２点、溝ＳＤ34から１点、性格不明遺構ＳＸ02から１点出土している［遺物番号10（Ｒ224)・11（Ｒ224)・14（Ｒ272・352・409)・18（Ｒ392)］（図面33、図版26・27)。いずれも高坏脚部破片であり、４世紀前半と思われる漆町編年５・６群の遺物と考えられるが、遺構に伴うものではなく流れ込みによるものと判断される。

須恵器

蓋、坏、甕が出土している。詳細は別表の遺物観察表によるが、９世紀前半、田嶋編年Ⅳ２期を中心とした時期であると判断される。検出遺構は掘立柱建物ＳＢ05（案)・07（案)、土坑ＳＫ06・09、溝ＳＤ44、性格不明遺構ＳＸ02であるが、これらの須恵器が各遺構に本来伴うものであるかは、床面直上から出土した性格不明遺構ＳＸ02以外は疑問と言わざるを得ない。

特筆されるのは２点で、ひとつは土坑ＳＫ06から出土した漆紙の付着した９世紀前半と思われる田嶋編年Ⅳ２（新）期の高台坏の底部破片［遺物番号４（Ｒ267)］（図面33、図版26）である。漆紙には赤外線映像により墨痕が確認されたが、判読は不可能であった（図版59)。当該遺物の漆膜については放射性炭素による年代測定を実施し、ＢＰ1150±40年・１σ860ＡＤ（57.6%）980ＡＤという測定結果が得られている。もうひとつは、溝ＳＤ44から出土した９世紀中頃と思われる田嶋編年Ⅴ１期の高台坏の底部破片［遺物番号16（Ｒ385)］（図面33、図版27）である。この遺物には底部外面に矢印に似た、いわゆる鳥足型の漆記号が描かれている。遺構外からの出土遺物の中にも数点同様の漆記号を持つ須恵器が確認されている。

珠洲

甕の破片が出土している。土坑ＳＫ06から出土したものと溝ＳＤ59から出土したものが接合した［遺物番

号５（Ｒ268・525)］(図面33、図版26)。口縁部から頸部にかけての形状から11世紀後半から12世紀中頃と思われる吉岡編年Ⅰ～Ⅱ期の遺物と推察される。また、溝ＳＤ33からも甕（もしくは壺）の胴部破片が出土しているが時期は不明である［遺物番号13（Ｒ001・224)］(図面33、図版26)。

土師質土器

溝ＳＤ33から出土している。中世の灯明皿と推察される。［遺物番号12（Ｒ224)］(図面33、図版26)

土製品

土錘［遺物番号６（Ｒ381)］(図面33、図版26）で、土坑ＳＤ09から出土した。時期は中世と思われる。

木製品

便宜上、掘立柱建物から検出された柱根も含めている。掘立柱建物ＳＢ02（案）から４本［遺物番号20～23（Ｒ643～647)］(図面34・35、図版27・28)、掘立柱建物ＳＢ03（案）から１本［遺物番号24（Ｒ647)］(図面35、図版28)、掘立柱建物ＳＢ04－３（案）から３本［遺物番号25～27（Ｒ641・642・686)］(図面36、図版28・29）が検出された。いずれもクリ材であることが判っている。なお、前述した通り、掘立柱建物ＳＢ07（案）から検出された４本については、実測不可能なほど崩壊したため掲載できなかった。また、土坑ＳＫ08は曲物を枠に使用した井戸である［遺物番号33・34（Ｒ702－２・１)］(図面38、図版31)。溝ＳＤ59から多量に木製品が出土しているが、ほとんどが用途不明なものばかりである。

生活雑器の類では、漆器椀、曲物、櫛などが出土している。特筆される遺物としては、土坑ＳＫ01から出土した曲物の板部分３点［遺物番号28～30（Ｒ274・278・279)］(図面37、図版29・30）と溝ＳＤ59から出土した曲物の板部分３点［遺物番号67・78・100（Ｒ559・577・606)］(図面44・45・47、図版37・39・41）がある。いずれにも包丁傷があり、俎板に転用されたと推察される遺物である。また、漆器椀は土坑ＳＫ06から１点［遺物番号32（Ｒ266)］(図面38、図版31)、土坑ＳＫ08から１点［遺物番号37（Ｒ705)］(図面39、図版32)、溝ＳＤ59から２点［遺物番号56・57（Ｒ680・561)］(図面42、図版35・36）出土した。中でも土坑ＳＫ06から出土したものには扇子模様の漆絵が描かれている。櫛は溝ＳＤ59から１点出土している［遺物番号58（Ｒ613)］(図面42、図版36）が、時期は不明である。

このほか、蒲鉾板［遺物番号75（Ｒ572)］(図面45、図版38）や下駄の差歯［遺物番号108（Ｒ664)］(図面48、図面42）と見られる遺物も出土している。また、漆かきとり痕跡を残す２点［遺物番号54・55（Ｒ531－２・１)］(図面42、図版35)、良好な状態で出土しており、漆の付着した木片も２点［遺物番号40・59（Ｒ696・59)］(図面40・43、図版33・36）出土している。

板材のほか、木釘のついたままであったり、釘穴の開いた木製品が数点見られる［遺物番号62～64・96・97・127（Ｒ570・571・602・600・601・557－１)］(図面43・47・50、図版37・41・45)。これは井戸や板塀の横桟である可能性が高い。また、先端が焼けている材［遺物番号86・115・131～136・140（Ｒ589・545－11・612－１～３・612－５・612－６、653－４)］(図面46・49・50・51、図版40・43・46）も見られるが用途は不明である。

溝ＳＤ59から出土した木製品４点について放射性炭素による年代測定を実施した。資料としたのは、漆かきとり痕跡を残す２点［遺物番号54・55（Ｒ531－２・１)］(図面42、図版35）から採取された漆樹液、漆器椀２点［遺物番号56・57（Ｒ680・561)］(図面42、図版35・36）から採取された漆塗膜である。測定結果

は遺物番号54がＢＰ160±50年・１σ1720ＡＤ（33.0％）1820ＡＤ、遺物番号55がＢＰ60±50年・１σ1870ＡＤ（28.4％）1920ＡＤ、遺物番号56がＢＰ570±50年・１σ1300ＡＤ（41.4％）1360ＡＤ、遺物番号57がＢＰ880±50年・１σ1150ＡＤ（36.6％）1220ＡＤというものであった。

２．遺構外出土遺物

土師器

４世紀前半と思われる漆町編年５・６群の高坏、壺、甕の破片が出土している［遺物番号144～151（Ｒ227・113・001・039・527・335・359）］（図面52、図版48）。小型甕［遺物番号150（Ｒ335）］（図面52、図版48）は、丁寧な作りではないものの、底部に粘土をうすく輪状に貼って高台を作り出している。

須恵器

蓋、坏、椀、長頸瓶、壺、鉢、甕が出土している。詳細は別表の遺物観察表によるが、遺構出土の須恵器と同様に９世紀（田嶋編年第Ｖ１・Ｖ２期乃至その前後）の範疇に納まるものと判断される。

これらのうち、特筆されるべき事柄が数点ある。はじめに、墨書土器が３点確認されている。１点は９世紀後半と思われる田嶋編年Ⅵ１期の蓋［遺物番号172（Ｒ631）］（図面53、図版49、55）で、外面に「万呂」、内面に「未」が書かれている。残り２点は坏である。９世紀前半と思われる田嶋編年Ⅳ２（新）の坏で、底部破片で外面に墨書が僅かに認められるものが１点［遺物番号190（Ｒ112）］（図面53、図版50）と、９世紀中頃と思われる田嶋編年Ｖ１期の坏で底部外面に「成」と書かれたものが１点［遺物番号207（Ｒ346）］（図面54、図版51・55）である。特に「万呂」の文字は肉眼観察では見逃してしまうほどの痕跡であり、国立歴史民俗博物館平川南教授の研究室のご指導、ご協力による赤外線写真によってはっきりと確認されたものであった。

次に漆紙が付着またはその痕跡のある遺物が２点出土している。１点は９世紀中頃と思われる田嶋編年Ｖ２期の坏［遺物番号224（Ｒ513）］（図面56、図版52）で明らかな紙質を有している。当該遺物の漆膜について放射性炭素による年代測定を実施しており、ＢＰ1230±50年・１σ760ＡＤ（54.0％）890ＡＤという測定結果が得られている。もう１点は９世紀中頃と思われる田嶋編年Ｖ２期の椀［遺物番号237（Ｒ347・410・627・632）］（図面56、図版53）で、紙質は残っていないもののその痕跡が認められた。当該遺物については３点の漆膜について放射性炭素による年代測定を実施しているが、これは整理作業において接合を実施する前に年代測定を依頼したからであり、のちに同一個体と判明したからである。３点についての測定結果は、それぞれＢＰ1240±50年・１σ690ＡＤ（68.2％）870ＡＤ、ＢＰ1280±50年・１σ670ＡＤ（68.2％）780ＡＤ、ＢＰ1260±50年・１σ680ＡＤ（64.7％）810ＡＤというものであった。なお、双方とも赤外線撮影において墨痕などは見つからなかった。

次に、漆記号を有するものである。前述した「鳥足」が５点［遺物番号165・184・189・203・232（Ｒ416・442・456・504・097・196・089・339・329・001）］（図面52～54・56、図版49～51・53）で、そのうち９世紀中頃と思われる田嶋編年Ｖ２期の坏［遺物番号232］以外は全て９世紀前半と思われる田嶋編年Ⅳ２（新）期の坏となる。「立」と書かれた９世紀前半と思われる田嶋編年Ⅳ２（新）期の坏が１点［遺物番号216（Ｒ468）］（図面55、図版52）、「大」と書かれた９世紀前半と思われる田嶋編年Ⅳ２（新）期の坏が１点［遺物番号217（Ｒ469）］（図面55、図版52）出土した。また、判読不明のものも４点［遺物号186・201・204・222（Ｒ354・329・329・506）］（図面53・54・56、図版50～52）出土しており、８世紀後半と思われる

田嶋編年Ⅳ２（古）期の坏が１点、９世紀前半と思われる田嶋編年Ⅳ２（新）期の坏が２点、９世紀後半と思われる田嶋編年Ⅵ１期の坏が１点となる。他に漆の付着が認められるものは５点［遺物番号160・180・185・198・233（R374・240・099・103・001）］（図面52～54・56、図版48・50・51・53）で、９世紀前半と思われる田嶋編年Ⅳ２（新）期のものが３点［遺物番号160・180・198（R374・240・103）］、９世紀後半と思われる田嶋編年Ⅵ１期のものが２点［遺物番号185・233（R099・001）］である。なお、遺物番号185の漆膜については放射性炭素による年代測定を実施しており、ＢＰ1210±50年・１σ770ＡＤ（62.5％）890ＡＤという測定結果が得られている。器種としては、蓋が遺物番号160と165の２点のみで、あとは全て坏であった。

次に、ヘラ記号を有するものである。内訳をみると「#」（それと想定されるものも含める）が２点［遺物番号166・167（R440・347）］（図面52、図版49）、「＋」（それと想定されるものも含める）が４点［遺物番号170・181・193・219（R363・286・329・300・480）］（図面53～55、図版49～52）、「大」が１点［遺物番号199（R329）］（図面54、図版51）、「－」（それと想定されるものも含める）が６点［遺物番号186・190・202・210・218・227（R354・112・329・441・469・396）］（図面53～56、図版50～53）、「＝」が１点［遺物番号240（R049・105・166・354・355・377）］（図面57、図版53）となっている。８世紀後半と思われる田嶋編年Ⅳ２（古）期の坏が２点［遺物番号199・210（R329・441）］（図面54、図版51・52）、９世紀前半と思われる田嶋編年Ⅳ２（新）期の蓋が１点［遺物番号166（R440）］（図面52、図版49）と坏が５点［遺物番号186・190・193・202・227（R354・112・300・329・396）］（図面53・54・56、図版50・51・53）、９世紀中頃と思われる田嶋編年Ⅴ１期の蓋が２点［遺物番号167・170（R347・363）］（図面52・53、図版49）と坏が２点［遺物番号181・218（R286・329・477）］（図面53・55、図版50・52）と瓶が１点［遺物番号240（R049・105・166・354・355・377）］（図面57、図版53）である。

次に、硯として転用されたもの（それと想定されるものを含める）は、蓋が７点［遺物番号158・160・161・165・166・171・177（R378・376・001・346・416・442・456・504）］（図面52・53、図版48～50）、坏が２点［遺物番号216・231（R468・001）］（図面55・56、図版52・53）出土しており、９世紀前半と思われる田嶋編年Ⅳ２（新）期のものが７点［遺物番号160・161・165・166・171・177・216（R378・376・001・346・416・442・456・504・468）］（図面52・53・55、図版48～50・52）、９世紀中頃と思われる田嶋編年Ⅴ１期のものが１点［遺物番号231（R001）］、Ⅴ２期のものが１点［遺物番号158（R378）］（図面52、図版48）である。

最後に灯明皿として使用されたと思われるものは７点［遺物番号196・209・211・219・220・221・228（R310・410・416・475・476・451・453・503・480・484・515・492・649）］（図面54～56、図版51～53）出土しており、内訳は９世紀中頃と思われる田嶋編年Ⅴ１期のものが５点［遺物番号209・211・219・220・228（R410・416・475・476・451・453・503・480・484・515・649）］（図面54～56、図版51～53）、Ⅴ２期のものが１点［遺物番号221（R492）］（図面55、図版52）、９世紀後半と思われる田嶋編年Ⅵ１期のものが１点［遺物番号196（R310）］（図面54、図版51）で、器種は全て坏である。

土師質土器

１点出土している［遺物番号257（R001）］（図面58、図版54）。中世の灯明皿と推察されるが詳しい時期は不明である。

土製品

10点すべて土錘である［遺物番号247～256（R106・106・111・056・305・045・039・001・001・001)］(図面58、図版54)。時期はいずれも中世と思われる。

古銭

「元祐通寶」が1点出土している［遺物番号258（R109)］(図面58、図版54)。初鋳年は西暦1086年である。次代に鋳造される「紹聖元寶」の初鋳年は西暦1094年であるから、おおよそ11世紀の終わり頃までには当地において開発を開始していたことが想定できる。

木製品

6点掲載した内、1点について先端部が焼けているものがある［遺物番号260（R553－1)］(図面59、図版55)。用途、時期とも不明である。

石製品

碧玉製勾玉が1点［遺物番号265（R002)］(図面60、図版56)、打製石斧が2点［遺物番号266・267（R527・001)］(図面60、図版56)、硯が1点［遺物番号268（R090)］(図面60、図版56)、砥石が3点［遺物番号269～271（R030・074・329・001)］(図面60、図版56）出土している。勾玉は古墳時代のものであると思われるが他の遺物については時期不明と言わざるを得ない。

第４章　Ｃ地区

第１節　概観

概観

本調査区はＢ地区の西方、標高18.5～21.1mを測る開析谷の奥に位置し、東方に向かい緩傾斜を成している。当初は試掘の結果から遺構の存在は希薄と思われていたが、調査区北側において多数の遺構が検出された。検出された遺構は掘立柱建物、土坑、溝、小ピットである。出土遺物や遺構検出状況から判断し、Ｂ地区第２面に相当するものと思われる。Ｃ地区の遺構確認面までは、客土が厚く堆積しており、Ａ・Ｂ地区の第１面に相当する近世の遺構確認面についてはすでに破壊されているものと判断された。

なお、想定される時期についてもＢ地区第２面と同様である。

第２節　遺構

１．掘立柱建物

合計13棟検出された。詳細については一覧表（第１表）を附した。遺構に共伴する出土遺物は無かったものの、他の検出遺構との関係や重複関係等から、Ｂ地区第２面で述べたⅠ期からⅣ期の細分に下記の通り当てはめることができる。なお、建替えは確認されていない。（図面22～30、図版02・16・17・19・20）

Ⅰ期：４棟＝掘立柱建物ＳＢ03（案）、掘立柱建物ＳＢ06（案）、掘立柱建物ＳＢ07（案）、
　　掘立柱建物ＳＢ12（案）

Ⅱ期：３棟＝掘立柱建物ＳＢ05（案）、掘立柱建物ＳＢ09（案）、掘立柱建物ＳＢ11（案）

Ⅲ期：３棟＝掘立柱建物ＳＢ04（案）、掘立柱建物ＳＢ08（案）、掘立柱建物ＳＢ13（案）

Ⅳ期：３棟＝掘立柱建物ＳＢ01（案）、掘立柱建物ＳＢ02（案）、掘立柱建物ＳＢ10（案）

掘立柱建物ＳＢ01（案）（図面22、図版19）

Ａ１・Ｂ１区に存在する。遺構東側は調査区外へ続くものと思われ、東西１間（2.3m）、南北１間（2.15m）だけが想定された。溝ＳＤ10に規制されるものと判断される。柱穴は遺構検出面での直径が約0.32～0.5m、深さは約0.05～0.4mである。主軸の傾きは34度西偏する。柱根、共伴遺物なし。

掘立柱建物ＳＢ02（案）（図面22、図版20）

Ｃ２区に存在する。東西２間（4.1m）、南北２間（4.2m）の側柱建物が想定された。溝ＳＤ08に規制されるものと判断される。柱穴は遺構検出面での直径が約0.24～0.5m、深さは約0.06～0.3mである。主軸の傾きは34度西偏する。掘立柱建物ＳＢ11（案）と重複関係にある。柱根、共伴遺物なし。

掘立柱建物ＳＢ03（案）（図面23、図版17）

Ａ１・Ｂ１・Ｂ２区に存在する。遺構南側は調査区外へ続くものと思われ、東西４間（7.4m）、南北２間

(3.5m) が検出された。柱穴は遺構検出面での直径が約0.2～0.36m、深さは約0.08～0.4mである。主軸の傾きは48度東偏する。掘立柱建物ＳＢ05（案）と重複関係にある。柱根、共伴遺物なし。

掘立柱建物ＳＢ04（案）（図面24、図版17）

Ｂ２区に存在する。遺構北側は調査区外へ続くものと思われ、東西２間（3.75m）分が検出されている。が想定された。柱穴は遺構検出面での直径が約0.28～0.36m、深さは約0.1～0.44mである。主軸の傾きは20度西偏する。柱根、共伴遺物なし。

掘立柱建物ＳＢ05（案）（図面24、図版17）

Ｂ１・Ｂ２区に存在する。南東隅の柱穴は撹乱で破壊されていると考えられるが、東西２間（5.9m）、南北２間（４m）の側柱建物が想定された。柱穴は遺構検出面での直径が約0.16～0.28m、深さは約0.06～0.28mである。主軸の傾きは60度東偏する。掘立柱建物ＳＢ03（案）と重複関係にある。柱根、共伴遺物なし。

掘立柱建物ＳＢ06（案）（図面25、図版17）

Ｂ２区に存在する。遺構北側は調査区外へ続くものと思われ、全体像は不明であるが、東西２間（４m）、南北２間（５m）分が検出されている。柱穴は遺構検出面での直径が約0.2～0.4m、深さは約0.04～0.22mである。主軸の傾きは40度東偏する。柱根、共伴遺物なし。

掘立柱建物ＳＢ07（案）（図面26、図版16）

Ｂ３・Ｂ４・Ｃ３区に存在する。遺構北側は調査区外へ続くものと思われ、全体像は不明であるが、東西２間（４m）、南北３間（5.5m）分が検出されている。柱穴は遺構検出面での直径が約0.24～0.42m、深さは約0.06～0.36mである。主軸の傾きは50度西偏する。掘立柱建物ＳＢ08（案）、掘立柱建物ＳＢ09（案）と重複関係にある。柱根、共伴遺物なし。

掘立柱建物ＳＢ08（案）（図面27、図版16）

Ｂ３・Ｃ３区に存在する。東西２間（3.2m）、南北４間（8.2m）の側柱建物が想定された。柱間は1.5～2.3mである。柱穴は遺構検出面での直径が約0.24～0.42m、深さは約0.06～0.36mである。主軸の傾きは67度西偏する。掘立柱建物ＳＢ07（案）、掘立柱建物ＳＢ09（案）と重複関係にある。柱根、共伴遺物なし。

掘立柱建物ＳＢ09（案）（図面28、図版16）

Ｂ３・Ｃ３・Ｃ４区に存在する。東西２間（4.7m）、南北２間（4.4m）の総柱建物が想定された。柱間は2.1～2.4mである。柱穴は遺構検出面での直径が約0.2～0.52m、深さは約0.05～0.3mである。主軸の傾きは57度東偏する。掘立柱建物ＳＢ07（案）、掘立柱建物ＳＢ08（案）、掘立柱建物ＳＢ10（案）と重複関係にある。柱根、共伴遺物なし。

掘立柱建物ＳＢ10（案）（図面29、図版16）

Ｃ３区に存在する。東西１間（2.25m）、南北２間（4.4m）の建物が想定された。柱間は1.9～2.5mである。柱穴は遺構検出面での直径が約0.22～0.4m、深さは約0.06～0.28mである。主軸の傾きは31度西偏する。掘立柱建物ＳＢ09（案）と重複関係にある。柱根、共伴遺物なし。

掘立柱建物ＳＢ11（案）（図面29、図版17）

Ｃ２・Ｃ３区に存在する。遺構南側は調査区外へ続くものと思われ、全体像は不明であるが、東西２間（5.2m）、南北１間（2.95m）分が検出された。柱間は2.3～2.9mである。柱穴は遺構検出面での直径が約0.28～0.52m、深さは約0.1～0.58mである。主軸の傾きは57度東偏する。掘立柱建物ＳＢ02（案）と重複

関係にある。柱根、共伴遺物なし。

掘立柱建物ＳＢ12（案）（図面30、図版16）

Ｃ４区に存在する。東西３間（4.8m）、南北２間（2.35m）の側柱建物が想定された。柱間は0.95～2.4mである。柱穴は遺構検出面での直径が約0.2～0.4m、深さは約0.06～0.14mである。主軸の傾きは45度東偏する。柱根、共伴遺物なし。

掘立柱建物ＳＢ13（案）（図面30、図版16）

Ｃ４・Ｃ５区に存在する。遺構西側は調査区外へ続くものと思われ、全体像は不明であるが、東西１間（1.45m）、南北２間（3.6m）分が検出された。柱間は1.3～1.8mである。柱穴は遺構検出面での直径が約0.2～0.45m、深さは約0.08～0.15mである。主軸の傾きは72度東偏するものと推察される。柱根、共伴遺物なし。

２．土坑

14基検出された。遺構の性格や時代等は不明である。

土坑ＳＫ01（図面31、図版21）

Ｃ３区に存在する。遺構プランは円形で直径約0.9m、深さ0.36m、断面形状は逆台形である。９世紀中頃と思われる田嶋編年Ｖ２期に属する須恵器蓋［遺物番号272（Ｒ1028）］（図面61、図版53）が出土している。

土坑ＳＫ02（図面31、図版21）

Ｂ３区に存在する。遺構プランは円形で直径約0.66m、深さ0.14m、断面形状は弧形である。土坑ＳＫ03を切る。共伴遺物なし。

土坑ＳＫ03（図面31、図版21）

Ｂ３区に存在する。遺構プランは方形で一辺約0.5m、深さ0.1m、断面形状は逆台形である。土坑ＳＫ02に切られる。共伴遺物なし。

土坑ＳＫ04（図面31、図版21）

Ｂ１区に存在する。遺構プランは円形で直径約0.68m、深さ0.17m、断面形状は逆台形である。共伴遺物なし。

土坑ＳＫ05（図面31、図版22）

Ｂ３・Ｂ４区に存在する。遺構プランは円形で直径約0.8m、深さ0.2m、断面形状は逆台形である。共伴遺物なし。

土坑ＳＫ06（図面31、図版22）

Ｃ４区に存在する。遺構プランは不定形で長軸約0.78m、短軸約0.52m、深さ0.24m、断面形状は逆台形である。共伴遺物なし。

土坑ＳＫ07（図面31、図版22）

Ｂ３区に存在する。遺構プランは不整円形で長軸約1.05m、短軸約0.66m、深さ0.16m、断面形状は逆台形である。共伴遺物なし。

土坑ＳＫ08（図面31、図版23）

Ｂ３区に存在する。遺構プランは円形で直径約0.8m、深さ0.2m、断面形状は弧形である。土坑ＳＫ09を切る。共伴遺物なし。

土坑ＳＫ09（図面31、図版23）

Ｂ３区に存在する。遺構プランは不定形で長軸は約0.66mが残存、短軸約0.7m、深さ0.08m、断面形状は不整形である。土坑ＳＫ08に切られる。共伴遺物なし。

土坑ＳＫ10（図面31、図版23）

Ｂ２区に存在する。遺構プランは不整円形で長軸約0.54m、短軸約0.38m、深さ0.2m、断面形状は逆台形である。共伴遺物なし。

土坑ＳＫ11（図面32、図版23）

Ｂ２区に存在する。遺構プランは円形で直径約1.18m、深さ0.2m、断面形状は逆台形である。共伴遺物なし。

土坑ＳＫ12（図面32、図版24）

Ｂ２区に存在する。遺構プランは円形で直径約0.7m、深さ0.1m、断面形状は逆台形である。共伴遺物なし。

土坑ＳＫ13（図面32、図版24）

Ｂ３区に存在する。遺構プランは不定形で長軸は約0.84m、短軸約0.66m、深さ0.34m、断面形状は不整形である。共伴遺物なし。

土坑ＳＫ14（図面32、図版24）

Ｂ２区に存在する。遺構プランは円形で直径約0.74m、深さ0.14m、断面形状は逆台形である。９世紀のものと思われる須恵器甕［遺物番号273（Ｒ1034）］（図面61、図版53）が出土している。

３．小ピット

調査区北側においてのみ数多く検出された。傾向はＢ区第２面と同様である。柱穴、柵址等が考えられたが、確定的な要素を欠いたため小ピットとした。

小ピットＳＰ30（図面32、図版20）

Ｂ３区に存在する。遺構プランは円形で直径約0.26m、深さ0.12m。覆土は暗褐色砂質土である。11世紀前半のものと思われる漆町編年11群の土師質土器［遺物番号276（Ｒ1021）］（図面61、図版53）が出土している。

４．溝

区画溝と思われる24条を検出した。主軸方向を見ると、約20度程度傾くものと約30°程度傾くもの、さらに約40°程度傾くものの３通りに大別される。南北方向に走るものが主体となる。なお、溝ＳＤ15および溝ＳＤ17については主軸不明とした。

南北方向（約20°西偏）：条＝溝ＳＤ02、03、04、09、11、13、14、19、21

南北方向（約30°西偏）：条＝溝ＳＤ05、06、07、16、20、22、

東西方向（約30°北偏）：条＝溝ＳＤ12、

南北方向（約30°西偏し鉤状に折れる）：条＝溝ＳＤ08、10、24

南北方向（約40°西偏）：条＝溝ＳＤ01、18

東西方向（約40°北偏）：条＝溝ＳＤ23

主要な溝跡について他の遺構との相関性を中心に見てゆくと、

溝ＳＤ01は掘立柱建物ＳＢ12（案）を規制し、主軸方向は掘立柱建物ＳＢ03（案）と同一である。溝ＳＤ02は掘立柱建物ＳＢ12（案）と重複し、掘立柱建物ＳＢ13（案）を規制する。溝ＳＤ04は溝ＳＤ02と平行し、掘立柱建物ＳＢ08（案）を規制して、掘立柱建物ＳＢ09（案）と掘立柱建物ＳＢ10（案）と重複関係にある。溝ＳＤ08は掘立柱建物ＳＢ02（案）を規制し、掘立柱建物ＳＢ11（案）と重複する。溝ＳＤ10は掘立柱建物ＳＢ01（案）を規制。溝ＳＤ22は掘立柱建物ＳＢ06（案）と、溝ＳＤ24は掘立柱建物ＳＢ04（案）とそれぞれ重複する。

上記の理由によって、下記の通り各期に当てはめることが妥当と考える。

Ⅰ期：溝ＳＤ01、16、18

Ⅱ期：溝ＳＤ09、11、19、20

Ⅲ期：溝ＳＤ02、03、04、05、06、13、14、21、22

Ⅳ期：溝ＳＤ07、08、10、24

不明：溝ＳＤ12、15、17、23

溝ＳＤ01（図面21）

Ｃ４からＤ３区に存在する。全長南北約12.8m、幅0.6～0.8m、深さ0.3～0.5m、主軸方向は約40度西偏する。覆土は黒褐色砂質土である。溝ＳＤ03と重複する。共伴遺物なし。

溝ＳＤ02（図面21）

Ｃ４・Ｄ４区に存在する。全長南北約10.4m、幅0.35m、深さ0.08m、主軸方向は約20度西偏する。覆土は黒褐色砂質土である。共伴遺物なし。

溝ＳＤ03（図面21）

Ｃ５区に存在する。全長南北約10.4m、幅0.25m、深さ0.07m、主軸方向は約20度西偏する。覆土は暗褐色砂質土である。溝ＳＤ01と重複する。共伴遺物なし。

溝ＳＤ04（図面21）

Ｂ３・Ｃ３区に存在する。全長南北約11m、幅0.3m、深さ0.16m、主軸方向は約20度西偏する。覆土は暗褐色砂質土である。共伴遺物なし。

溝ＳＤ05（図面21）

Ｂ５・Ｃ５区に存在する。全長南北約1.5m、幅0.28m、深さ0.08m、主軸方向は約30度西偏する。覆土は暗褐色砂質土である。共伴遺物なし。

溝ＳＤ06（図面21）

Ｃ３区に存在する。全長南北約2.85m、幅0.32m、深さ0.1m。主軸方向は約30度西偏する。覆土は暗褐色砂質土である。共伴遺物なし。

溝ＳＤ07（図面21）

Ｃ３区に存在する。全長南北約1.8m、幅0.32m、深さ0.07m、主軸方向は約30度西偏する。覆土は暗褐色砂質土である。共伴遺物なし。

溝ＳＤ08（図面21）

Ｂ２からＣ２区に存在する。全長は約12.7mで、Ｓ字形に屈曲するプランを呈している。幅0.7～1.1m、深さ0.32m、主軸方向は約30度西偏するが、途中で東へ90度方向を変える。覆土は暗褐色砂質土の下層に黒褐色土が堆積している。４世紀前半のものと思われる漆町編年５・６群の壺［遺物番号274（Ｒ1009・1023）］（図面61、図版53）と小型台付甕［遺物番号275（Ｒ1009・1039）］（図面61、図版53）が出土してい

る。

溝ＳＤ09（図面21）

Ｃ３区に存在する。全長南北約1.1m、幅0.4m、深さ0.06m、主軸方向は約20度西偏する。覆土は暗褐色砂質土である。共伴遺物なし。

溝ＳＤ10（図面21）

Ａ１・Ｂ１区に存在する。全長は約6.8mで、鉤型に屈曲するプランを呈している。幅0.4～0.6m、深さ0.08m、主軸方向は約30度西偏するが、途中で東へ90度方向を変える。覆土は暗褐色砂質土である。共伴遺物なし。

溝ＳＤ11（図面21）

Ｂ３・Ｃ３区に存在する。全長南北約1.3m、幅0.28m、深さ0.08m、主軸方向は約20度西偏する。覆土は暗褐色砂質土である。共伴遺物なし。

溝ＳＤ12（図面21）

Ｃ５区に存在する。全長東西約１m、幅0.3～0.4m、深さ0.1m、主軸方向は約30度北偏する。覆土は暗褐色砂質土である。共伴遺物なし。

溝ＳＤ13（図面21）

Ｃ４区に存在する。全長南北約1.3m、幅0.23m、深さ0.1m、主軸方向は約20度西偏する。覆土は暗褐色砂質土である。共伴遺物なし。

溝ＳＤ14（図面21）

Ｃ４区に存在する。全長南北約1.3m、幅0.2～0.38m、深さ0.08m、主軸方向は約20度西偏する。覆土は暗褐色砂質土である。共伴遺物なし。

溝ＳＤ15（図面21）

Ｂ３に存在する。北側調査区外へ続くため全長、幅、主軸方向は不明である。深さ0.1m、覆土は暗褐色砂質土である。共伴遺物なし。

溝ＳＤ16（図面21）

Ｃ３区に存在する。全長南北約４m、幅0.4m、深さ0.12m、主軸方向は約30度西偏する。覆土は暗褐色砂質土である。溝ＳＤ04と重複関係にある。共伴遺物なし。

溝ＳＤ17（図面21）

Ｂ３に存在する。北側調査区外へ続くため主軸方向は不明といわざるをえない。検出された長さ0.7m、幅0.22m、深さ0.04m。覆土は暗褐色砂質土である。共伴遺物なし。

溝ＳＤ18（図面21）

Ｂ３区に存在する。全長南北約1.6m、幅0.26m、深さ0.08m、主軸方向は約40度西偏。覆土は暗褐色砂質土である。共伴遺物なし。

溝ＳＤ19（図面21）

Ｃ２区に存在する。全長南北約1.3m、幅0.3m、深さ0.04m、主軸方向は約20度西偏する。覆土は暗褐色砂質土である。共伴遺物なし。

溝ＳＤ20（図面21）

Ｃ２区に存在する。全長南北約0.42m、幅0.2m、深さ0.05m、主軸方向は約30度西偏する。覆土は暗褐色砂質土である。共伴遺物なし。

溝ＳＤ21（図面21）

Ｃ２区に存在する。全長南北約3.1m、幅0.4～0.55m、深さ0.1m、主軸方向は約20度西偏する。覆土は暗褐色砂質土である。共伴遺物なし。

溝ＳＤ22（図面21）

Ｂ２・Ｂ３区に存在する。全長南北約5.2m、幅0.26～0.38m、深さ0.1m、主軸方向は約30度西偏する。覆土は暗褐色砂質土である。共伴遺物なし。

溝ＳＤ23（図面21）

Ａ１区に存在する。全長東西約1.1m、幅0.22m、深さ0.06m、主軸方向は約40度北偏する。覆土は暗褐色砂質土である。共伴遺物なし。

溝ＳＤ24（図面21）

Ｂ２区に存在する。北側調査区外へ続くため主軸方向は不明といわざるをえない。検出された長さ3.6m、幅1.1m、深さ0.06m。覆土は暗褐色砂質土である。共伴遺物なし。

第３節　遺物

１．遺構出土遺物

土師器

溝ＳＤ08からは、壺［遺物番号274（Ｒ1009・1023）］（図面61、図版53）と小型台付甕［遺物番号275（Ｒ1009・1039）］（図面61、図版53）が出土している。前者は断面に輪積み痕を残し、器表面は摩滅が顕著ではあるが僅かにハケメが認められる。後者は内面にミガキが認められる。いずれも４世紀前半と思われる漆町編年５・６群の遺物と考えられ、本来は遺構に伴うものではなく、流れ込みによるものと判断される。

須恵器

蓋、坏、甕の破片が出土している。詳細は別表の遺物観察表によるが、９世紀中頃と思われる田嶋編年Ｖ１・Ｖ２期のものと判断される。土坑ＳＫ01から蓋［遺物番号272（Ｒ1028）］（図面61、図版53）が、土坑ＳＫ14から甕［遺物番号273（Ｒ1034）］（図面61、図版53）が、小ピットＳＰ31からは坏［遺物番号277（Ｒ1022）］（図面61、図版53）がそれぞれ出土した。

土師質土器

小ピットＳＰ30から１点出土している［遺物番号276（Ｒ1021）］（図面61、図版53）。完形で11世紀前半と思われる漆町編年11群のものであろう。

２．遺構外出土遺物

土師器

高坏、器台、壺の破片が出土している［遺物番号278～284（Ｒ1009・1006・1003・1009・1006・1009・1009・1020）］図面61、図版53）。高坏の坏部破片［遺物番号278（Ｒ1009）］図面61、図版53）には内外面に朱が認められる。器台は２個体［遺物番号281・282（Ｒ1006・1009）］図面61、図版53）出土しており、い

ずれも脚部上方に円形のスカシを３ヶ所設けている。いずれも４世紀前半のものと思われる漆町編年５・６群の遺物と判断された。

須恵器

坏、瓶、擂鉢が出土している［遺物番号285～288（Ｒ1004・1013・1006・1003）］（図面61、図版53）。詳細は別表の遺物観察表によるが、遺構出土の須恵器と同様に９世紀中頃と思われる田嶋編年Ｖ１・Ｖ２期のものと判断される。墨書土器等の特筆されるべき遺物は出土していない。

石製品

打製石斧が２点［遺物番号289・290（Ｒ1001・1002）］（図面61、図版53）出土している。前者は安山岩製、後者は砂岩製である。

第５章　結語

調査成果から予想される間尽遺跡の性格について

間尽遺跡Ｂ・Ｃ地区は、小矢部川左岸に形成されている西山丘陵の一角に位置する開析谷のうちに古代～中世にかけての掘立柱建物群（総柱構造・側柱構造）や大規模な区画溝などが確認された。このような在り方は、Ｂ地区に隣接し、前年度に調査されたＡ地区における調査結果と調和的なものと考えられる。当調査では、開析谷といった地形の特殊性から各時代の生活面の残り具合は地点ごとに一貫していない調査結果とならざるを得なかった。

当地における生活は、古墳時代に帰属すると考えられる土器や碧玉製勾玉といった遺物が散見されることから、周囲には該期の生活遺構の存在が想定されたものの、Ｂ・Ｃ地区においては該期の遺構は確認できなかった。このことは、掘立柱建物の柱穴から検出された木炭を年代測定した結果からも傍証できよう（自然科学分析参照）。

ついで、古代においては出土遺物の検証結果から９世紀代を通じて集落が営まれていたことが明らかとなった。また、建物は区画溝に囲まれた高床式の倉庫と考えられる掘立柱建物群が並ぶことから、一般的な集落に関わるものではなく官衙関連遺跡であることを端的に示している。

当調査区の地理的な在り方は、湊を背後地にかかえる越中国府から南西に約９㎞小矢部川を遡った左岸段丘面に立地しており、その西側に連なる丘陵の一部にある開析谷に営まれたものである。これらの諸条件をみれば、政治経済の地方拠点である国府に向かう重要交通網である古代北陸道（小矢部川の左岸段丘面上に位置したとみられる）及び水利交通としての小矢部川が存在することから物資の流通などに有利であったと考えられる。また、２㎞下流には東大寺領荘園のうち須加荘にあたると考えられている須田藤ノ木遺跡が存在していることも、遺跡の変遷を考える上で興味深い。

間尽遺跡における古代集落の性格は、出土した文字資料ならびに関連資料、さらに漆痕跡を有する資料によって類推することができよう。まず文字資料は、墨書土器と漆紙文書に大別される。前者は、須恵器杯蓋［遺物番号172（Ｒ631)］「万呂」（外面）・「未」（内面）、須恵器［遺物番号207（Ｒ346)］「成」、須恵器［遺物番号190（Ｒ112)］「□」がみてとれる。一方後者は、赤外線撮影及び漆膜分析といった自然科学的手法により、反古紙と考えられる紙質の存在や依存状態が悪く文字が未解読な文書が確認された（図版59参照）。また、文字関連資料は須恵器杯蓋などを２次利用した転用硯が出土しているが、製品としての硯は確認されていない。このように文字資料の存在は、当地に識字層がおり、彼らが貴重品であった紙を反古紙といった形で入手できた集団であったことがわかる。漆痕跡を有する資料としては須恵器杯内面に漆が付着するものが多数出土している。このことは、漆容器としての須恵器杯に固化防止のための蓋紙として使用した反古紙という関係が成り立ち、当地は漆製品を製造する工房及び付属する倉庫が設けられていた生業拠点のうちであったと考えられる。

越中国においては、国守大伴家持の積極的な関与も影響して、８世紀後半から東大寺領荘園の開発が盛んとなるが、間尽遺跡の集落を営んだ集団もこの影響下に活動したものと想定される。しかし、検出された建物はそれほど大規模とはいえない事や、緑釉陶器などの所謂「貴重品」が出土していない事などから、それ

ほど地位の高い役人の関与はなかったと考えられる。

また、10世紀に帰属する遺物が出土していないことは、全国的な動向として開墾や税等の徴収に関する国郡の役人が行なう不正に対する引き締めがなされた9世紀末～10世紀初頭と期を同じくして当地が放棄された可能性があるのではなかろうか。

次いで当地に拠点を置いた集団は、11世紀に入ってから造成を行なったと考えられる。その根拠となるのはC地区小ピットSP30出土の土師質土器［遺物番号276（R1021）］（図面61、図版53）である。また、「元祐通寶」［遺物番号258（R109）］（図面58、図版54）の出土は11世紀における当集落の活動の時期を推る上で、上限を窺える補完資料となろう。

次に、11世紀以降の土地利用形態についてみていくと、A地区とは様相が多少異なりしっかりとした柱穴を持つ大型の総柱建物は検出されていない。区画溝は、古代におけるそれと違って、幅の広い溝で大きな区画を設定し、さらにその区画内において比較的幅の狭い溝で掘立柱建物を取り囲むような構成となっている。溝SD59は、比較的規模の大きい区画溝であるが、11世紀後半から12世紀前半のものと考えられる珠洲（吉岡編年Ⅰ～Ⅱ期）を共伴しており、ウリ類の種子を年代測定した結果からは960±50BP（1σ1080AD（39.8%）1160AD）［AMS MAZ14－14］というデータが得られている。また、B地区の調査区域外には地中レーダー探査の結果溝SD59と併行する溝の存在を予見させている。（この所見は、調査管理者が探査結果のアニメーションをみて感じたことであり探査技術者の考えは反映させていない。）したがって、11世紀後半以降（当遺跡での第Ⅳ期）は溝SD59などの区画溝に区切られた土地利用がなされていたことがみてとれる。出土遺物は、非常に湿潤であることから木製品の残りが良く、大半は溝SD59からの出土である［遺物番号53～143］（図面42～51、図版35～47）。種別は、漆器椀［遺物番号56（R680）ケヤキ・57（R561）スギ］（図面42、図版35・36）や櫛［遺物番号58（R613）イスノキ］（図面42、図版36）、曲物を転用した俎板［遺物番号67（R559）スギ・78（R577）スギ・100（R606）スギ］（図面44・45・47、図版37・39・41）や蒲鉾板［遺物番号75（R572）スギ］（図面45、図版38）、下駄の差歯［遺物番号108（R664）スギ］（図面48、図版42）など、消費生活を感じさせる遺物が多い。また、杉材に木釘を打ちつけたものは、残存寸法などからみると、木箱などの部材ではないかと思われる。建物は、比較的大型の側柱構造をもつ掘立柱建物の存在や幅広な区画溝などとを巡らせるなど、一般的な生産集落とは異なる印象が持たれる。

中世の集落形態の一類型としては、生産地に続く開析谷の中段平場に柵や溝で縄張りを設けて屋敷地とし、その上方に山城や牧を築く例として神奈川県海老名市上浜田遺跡があるが、中世の間尽遺跡はこれに合致するものと思われる。関東と北陸との地域的な差異はあるだろうが、屋敷地周辺の空間構成要素を考える上では貴重な事例といえるだろう。木製品に対して土器類の出土量が少なく、青磁や白磁の出土が少量でも認められるのは、当該地が屋敷地の範囲内である可能性を示唆している。

B地区に営まれた集落は、14世紀中頃に廃絶した後、近世に入ってから生産地（水稲耕作など）として利用され、現在に至ったものと思われる。また、漆かき痕跡のある木製品が出土しており、自然科学分析による年代測定の結果近世以降のものであることが報告された［遺物番号54（R531－2）］（図面42、図版35）160±50BP（1σ1720AD（33.0%）1820AD）［AMS MAZ14－13］、［遺物番号55（R531－1）］（図面42、図版35）60±50BP（1σ1870AD（28.4%）1920AD）［AMS MAZ14－12］が、間尽遺跡に集落を営んだ各集団において漆生産が脈脈と続けられたことを表している。また、遺跡周辺の植生を考える上でも貴重な遺物であるといえるだろう。

第１表　掘立柱一建物（案）一覧表

図面	図版	調査区	遺構番号（全て「案」）	東西×南北（間）	長軸の傾き（※は想定）	東西（m）		南北（m）		面積（㎡）	比率	特記事項
						全長	柱間隔	全長	柱間隔		短軸：長軸	
03	06	B地区	掘立柱建物SB01	2×4	西　15°	4.00	2.00	8.20	1.90～2.20	32.8	1：2.05	
04	06	B地区	掘立柱建物SB02	2×2	西　20°	3.45	1.00～1.85	3.65	1.70～1.95	12.6	1：1.06	東柱2本。柱根4本残存。
04	08	B地区	掘立柱建物SB03-1	2×2	西　20°	3.10	1.45・1.65	3.35	1.65・1.70	10.4	1：1.08	東柱2本。柱根1本残存。
04	08	B地区	掘立柱建物SB03-2	2×2	西　15°	2.90	1.30～1.60	3.40	1.50～1.80	9.9	1：1.17	SB03-1の建替か。
05	09	B地区	掘立柱建物SB04-1	2×2	西　26°	2.95	1.35～1.60	3.20	1.60	9.4	1：1.08	東柱あり。
05	09	B地区	掘立柱建物SB04-2	2×2	西　33°	2.80	1.40	3.40	1.50・1.90	9.5	1：1.21	SB04-1の建替か。
06	09	B地区	掘立柱建物SB04-3	2×3	西　21°	4.40	2.00～2.40	4.70	1.50・1.60	20.7	1：1.07	柱根3本残存。
07	03	B地区	掘立柱建物SB05	(1×3)	西　15°	3.40	3.40	5.35	0.60～3.70	18.2	1：1.57	
07	03	B地区	掘立柱建物SB06	(3×※)	西　15°※	8.30	2.50・2.90	不明				調査区北側へと続く。
08	03	B地区	掘立柱建物SB07	2×2	東　70°	4.60	2.15～2.45	4.45	2.10～2.35	20.5	1：1.03	柱根4本残存。面取された角柱を使用。
09	03	B地区	掘立柱建物SB08	不明	東　75°※	不明	(3.10～4.00)	不明	(3.20)			南西部は撹乱に壊されている。
09	03	B地区	掘立柱建物SB09	1×2	西　17°	3.45	3.45	5.10	2.45～2.65	17.6	1：1.48	
10	03	B地区	掘立柱建物SB10	(※×2)	西　20°※	不明		3.90	1.80・2.10			西側はSD59に壊されている。建替の可能性あり。
07	03	B地区	掘立柱建物SB11	(1×※)	西　15°※	3.80	3.80	不明				調査区北側へと続く。
10	03	B地区	掘立柱建物SB12	(2×※)	西　27°※	2.55	1.25・1.30	不明				調査区北側へと続く。
10	03	B地区	掘立柱建物SB13	1×3	西　40°	5.10	5.10	6.15	1.10～2.90	31.4	1：1.21	
11	03	B地区	掘立柱建物SB14-1	(※×2)	西　15°※	不明		3.05	1.35・1.70			東側はSD55に壊されている。建替の順番不明。
11	03	B地区	掘立柱建物SB14-2	(※×2)	西　15°※	不明		3.30	1.60・1.70			東側はSD55に壊されている。建替の順番不明。
11	03	B地区	掘立柱建物SB15	1×2	東　75°	3.25	3.25	3.60	1.70・1.90	11.7	1：1.11	
12	03	B地区	掘立柱建物SB16	1×5	東　67°	3.95	3.95	10.00	1.50～2.30	39.5	1：2.53	
13	03	B地区	掘立柱建物SB17	(3×※)	東　75°※	5.35	1.70～1.90	不明				南側はSD33に壊されている。
13	03	B地区	掘立柱建物SB18	1×2	東　67°	2.25	2.25	4.25	2.00・2.25	9.6	1：1.89	
22	19	C地区	掘立柱建物SB01	不明	東　56°	不明	2.30	不明	2.15			東側と南側はSD55に壊されている。
22	20	C地区	掘立柱建物SB02	2×2	西　34°	4.10	1.45～2.65	4.20	2.00～4.20	17.2	1：1.02	
23	15	C地区	掘立柱建物SB03	(4×2)	東　48°※	7.40	1.60～2.30	3.55	1.50～2.00	26.3	1：2.08	南側は撹乱に壊されている。
24	15	C地区	掘立柱建物SB04	(2×※)	西　20°※	3.75	1.80・1.95	不明				調査区北側へと続く。
24	15	C地区	掘立柱建物SB05	2×2	東　60°	4.05	1.40～2.10	5.90	2.90～3.00	23.9	1：1.46	南東部は撹乱に壊されている。
25	15	C地区	掘立柱建物SB06	不明	東　40°※	4.00	1.70・2.30	5.05	2.40・2.65	20.2	1：1.26	北西部は調査区外へと続く。
26	14	C地区	掘立柱建物SB07	(2×※)	西　50°※	4.00	1.70・2.30	5.45	1.50～2.25	21.8	1：1.36	北部は調査区外へと続く。
27	14	C地区	掘立柱建物SB08	2×4	西　23°	3.20	1.50・1.70	8.20	1.90～2.35	26.2	1：2.56	
28	14	C地区	掘立柱建物SB09	2×2	東　57°	4.40	2.10・2.30	4.70	2.30・2.40	20.7	1：1.07	総柱建物。
29	14	C地区	掘立柱建物SB10	1×2	西　31°	2.25	2.25	4.40	1.90～2.50	9.9	1：1.96	
29	15	C地区	掘立柱建物SB11	(※×2)	東　57°※	不明	2.95	5.20	2.30・2.90			南側は撹乱に壊されている。
30	14	C地区	掘立柱建物SB12	2×3	東　45°	2.35	0.95～1.40	4.80	1.45～2.40	11.3	1：2.04	
30	14	C地区	掘立柱建物SB13	(2×※)	東　72°※	3.60	1.80	不明	(1.30～1.45)			東側は調査区外へと続く。

引用・参考文献

石川県立埋蔵文化財センター　1986　『漆町遺跡Ⅰ』

池野正男　1996　「越中における9世紀代の土器様相」『北陸の9世紀代の土器様相』第77回北陸古代土器研究会例会　北陸古代土器研究会

宇野隆夫　1982　「井戸考」『史林』第65巻5号　史学研究会

越前慎子　1996　「梅原胡摩堂遺跡出土中世土師器皿の編年」『梅原胡摩堂遺跡発掘調査報告書（遺物編）』　富山県文化振興財団

神奈川考古同人会　1986　『シンポジウム古代末期～中世における在地系土器の諸問題』神奈川考古第21号

加賀真樹　1997　「珠洲窯」『中・近世の北陸－考古学が語る社会史－』　桂書房

九州近世陶磁学会　2000　『九州陶磁の編年－九州近世陶磁学会10周年記念－』

佐々木幹雄　1981　「三輪山及びその周辺出土の子持勾玉」『古代』第71号　早稲田大学考古学会

静岡県菊川町教育委員会　1999　『横地城跡－総合調査報告書－』

鈴木公雄　1999　『出土銭貨の研究』　東京大学出版社

高岡市教育委員会　1988　『越中国府関連遺跡調査概報Ⅲ』

高岡市教育委員会　1991　『越中国府関連遺跡調査概報Ⅴ』

高岡市教育委員会　1994　『越中国府関連遺跡調査概報Ⅵ』

高岡市教育委員会　1996　『越中国府関連遺跡調査概報Ⅶ』

高岡市教育委員会　2000　『間尽遺跡調査報告』高岡市埋蔵文化財調査報告第5冊

高岡市教育委員会　2002　『倉谷古墳群調査報告』高岡市埋蔵文化財調査報告第9冊

富山考古学会　1999　『富山平野の出現期古墳』富山考古学会創立50周年記念シンポジウム

永井久美男編　1994　『中世の出土銭－出土銭の調査と分類－』　兵庫埋蔵銭調査会

中屋克彦　1994　「加賀における近江系土器について」『庄内式土器研究』Ⅵ　庄内式土器研究会

永井久美男編　1996　『日本出土銭総覧』1996年版　兵庫埋蔵銭調査会

福光町教育委員会　2001　『富山県福光町在房遺跡Ⅰ』

北陸中世土器研究会　1988　『北陸における中世土師器・陶磁器・漆器』

北陸中世土器研究会　1991　『城館遺跡出土の土器·陶磁器・漆器』

北陸中世土器研究会　1993　『中世北陸の家・屋敷・暮らしぶり』

北陸中世土器研究会　1994　『中世北陸の寺院と墓地』

北陸古代土器研究会　1997　『北陸の10・11世紀代の土器様相』第83回北陸古代土器研究会例会

北陸古代土器研究会　1999　『須恵器貯蔵具を考えるⅠ　つぼとかめ』北陸古代土器研究第8号

北陸古代土器研究会　2001　『須恵器貯蔵具を考えるⅡ　つぼとかめのつくり方』北陸古代土器研究第9号

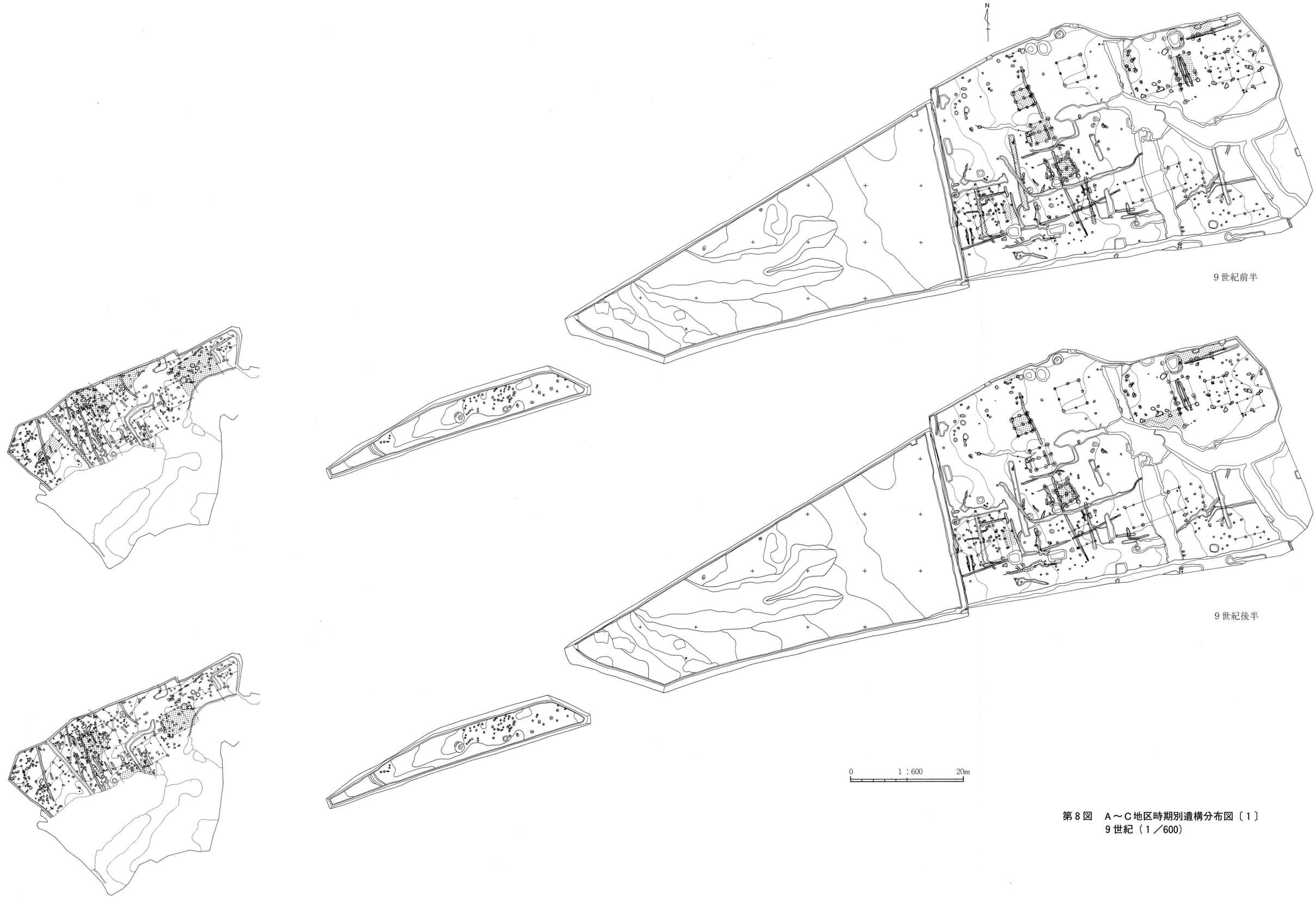
宮田進一　1992　「越中における中世土師器の編年」『中世前期の遺跡と土器・陶磁器・漆器』　北陸中世土器研究会

宮田進一　1997　「越中国における土師器の編年」『中・近世の北陸－考古学が語る社会史－』　桂書房

奈良文化財研究所編　2003　『古代の官衙遺跡Ⅰ遺構編』　奈良文化財研究所

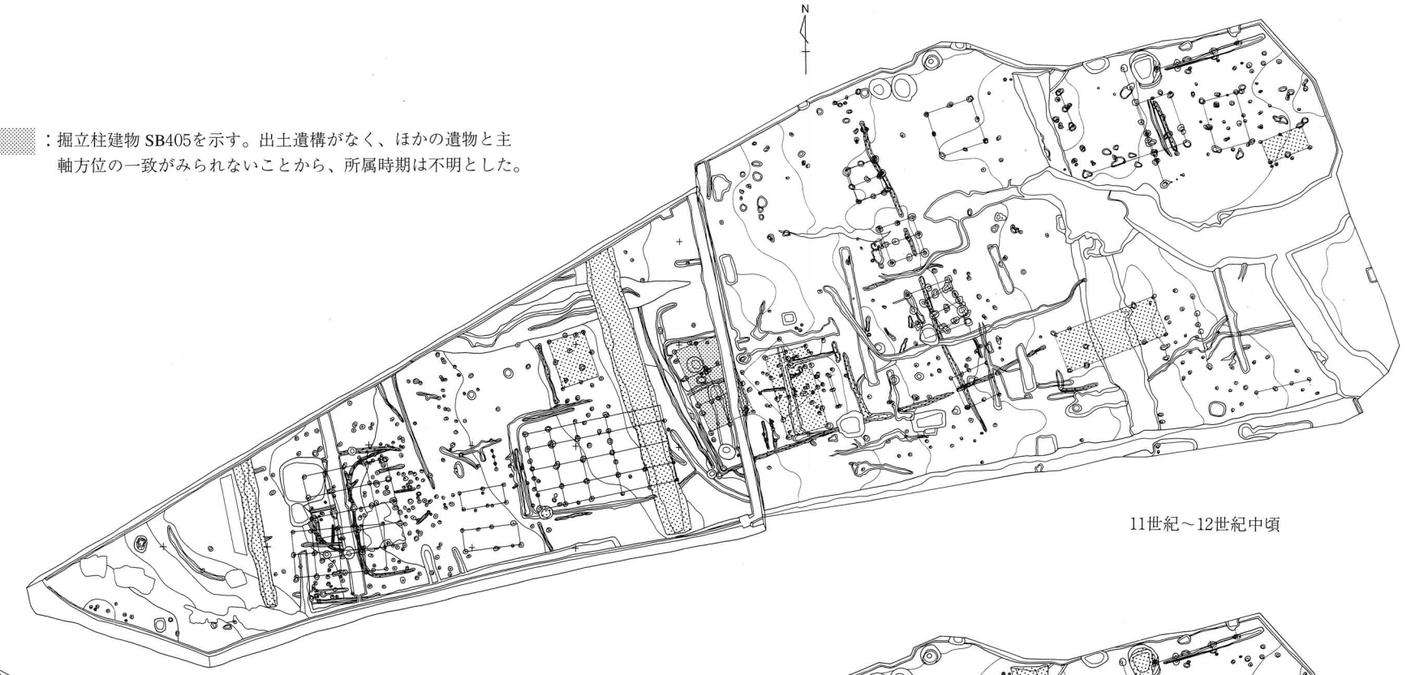
吉岡康暢　1994　『中世須恵器の研究』　吉川弘文館

横田賢次郎・森田　勉　1978　「大宰府出土の輸入陶磁器について－型式分類と編年を中心として－」『九州歴史資料館研究論集』4　九州歴史資料館普及会

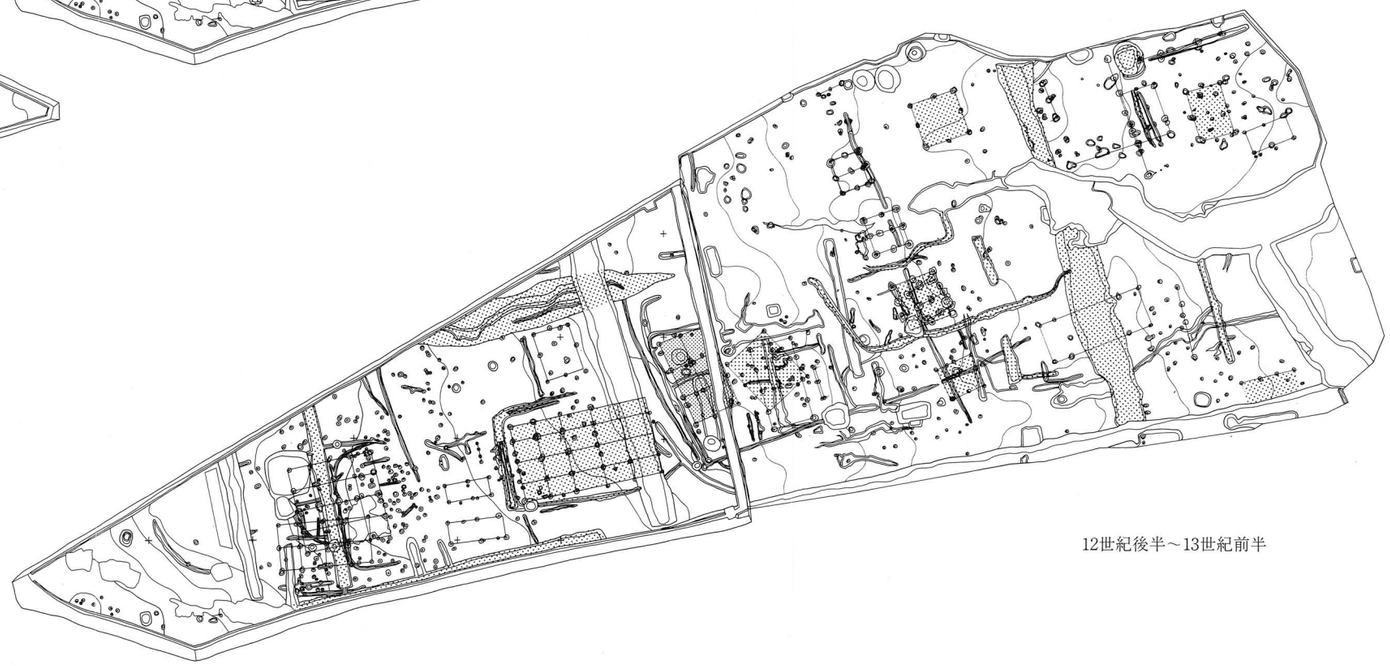


第８図　Ａ～Ｃ地区時期別遺構分布図〔１〕
９世紀（１／600）

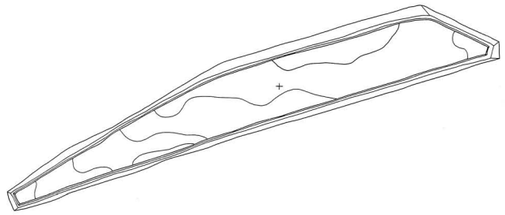
：掘立柱建物 SB405を示す。出土遺構がなく、ほかの遺物と主軸方位の一致がみられないことから、所属時期は不明とした。

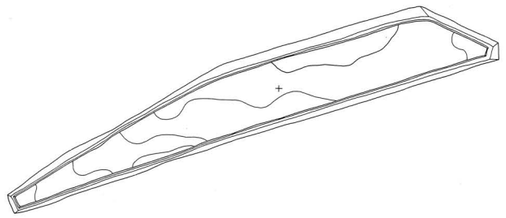


11世紀～12世紀中頃



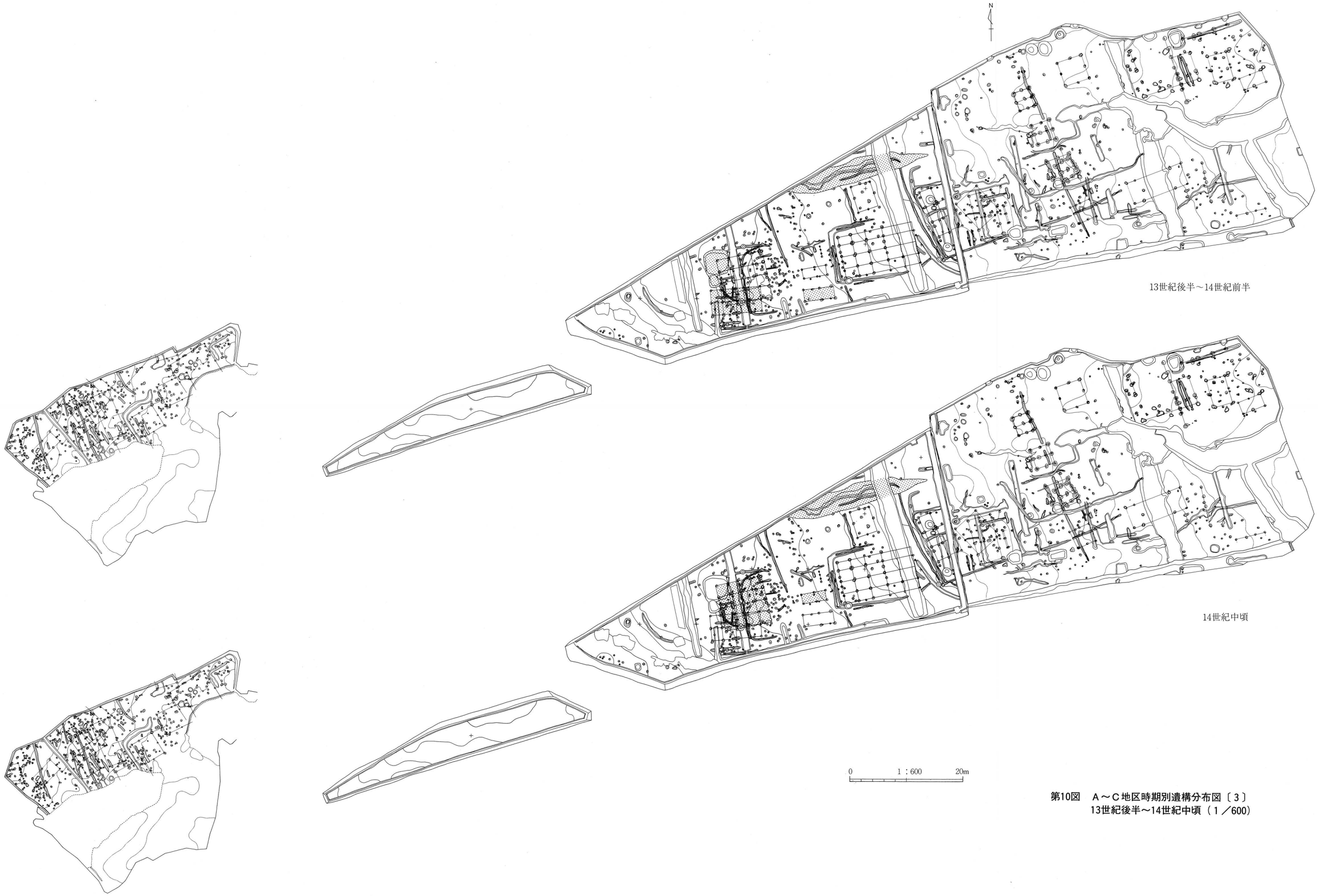
12世紀後半～13世紀前半



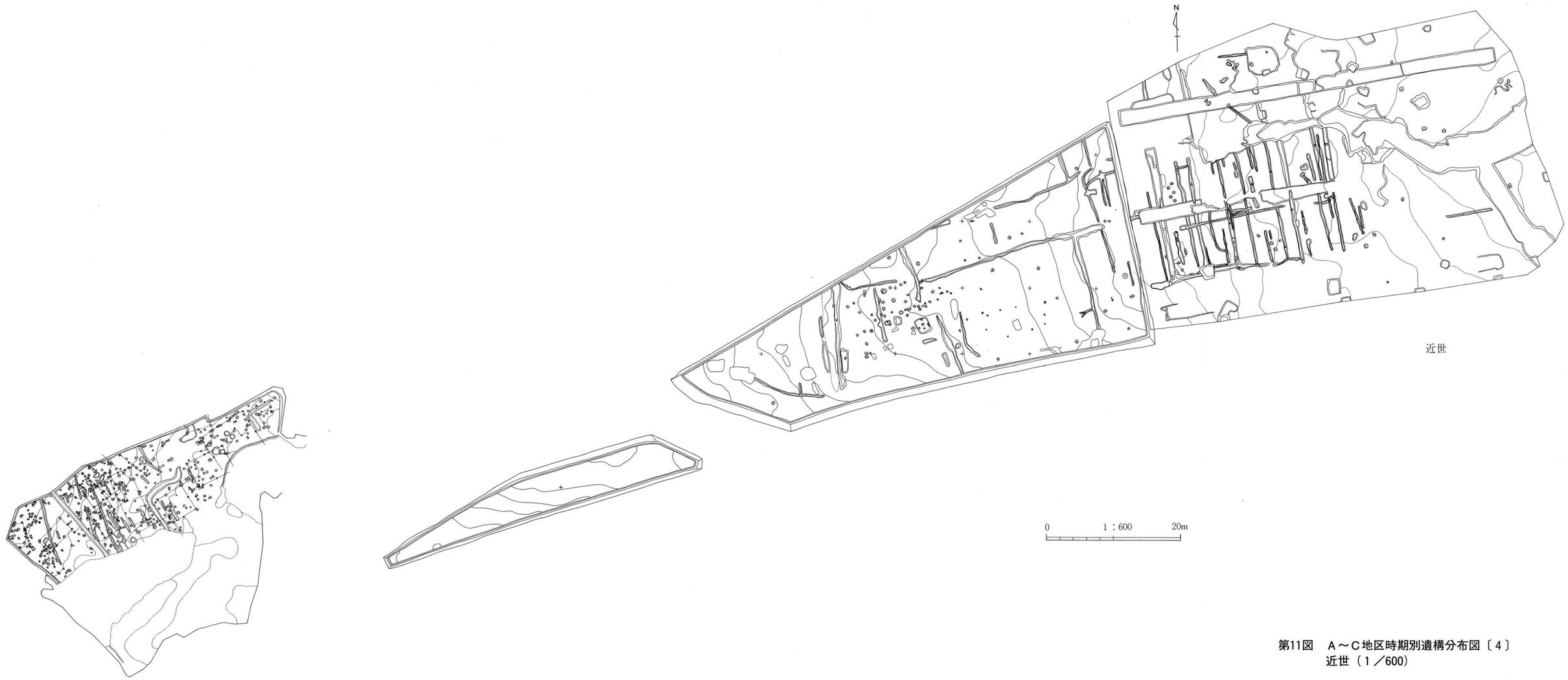


0　1：600　20m

第９図　Ａ～Ｃ地区時期別遺構分布図〔２〕
11世紀～13世紀前半（１／600）



第10図　A～C地区時期別遺構分布図〔3〕
13世紀後半～14世紀中頃（1／600）



第11図　Ａ～Ｃ地区時期別遺構分布図〔４〕
近世（１／600）

※C地区については近世の遺構を検出していないが、位置関係を示すために掲載した。

富山県高岡市間尽遺跡出土漆器の科学分析

漆器文化財科学研究所　四柳嘉章

Ⅰ．はじめに

平成14年度の富山県高岡市手洗野所在、間尽遺跡の発掘調査（Ｂ・Ｃ地区）において出土した、漆器及び須恵器転用の漆液容器の分析結果を報告する。

Ⅱ.分析の方法

漆器は階層や価格に応じた各種の製品が生産され、その品質が考古学的には所有階層復元の手がかりとなる。この品質差を材料や技術的側面から評価する場合、肉眼による表面観察では使用や廃棄後の劣化を含めた表面の塗りと加飾部分でしか判断できず、それも専門的な経験に左右される。しかし漆器本来の耐久・堅牢性は塗装工程にあり、この塗膜の下に隠された情報は、塗膜分析によって引き出される。

塗膜分析は漆器の内外面数箇所から数㎜の塗膜片を採取し実体顕微鏡顕で観察した後、ポリエステル系樹脂に包埋後その断面を研磨のうえプレパラートに接着し、さらに研磨を加えて（＃100～3000）金属・偏光顕微鏡で観察する方法である。サンプルである手板試料と比較検討しながら塗装工程や下地材料の同定を行うが、これによって表面観察ではわからない時代的地域的な特色、製品の品質が把握できるので、遺跡における所有階層の推定やデータが集積されれば製品の流通問題にも迫ることができる[1)]。また塗料の直接的な分析は、赤外線を固有の振動をしている分子に波長を連続的に変化させて照射して、分子構造を解析するフーリエ変換赤外分光法（ＦＴ－ＩＲ）を、赤色顔料の分析にはエネルギー分散型蛍光Ｘ線分析法を用いた（後述）[1)]。なお、本稿で用いる用語については基本的には漆工用語に従うこととし、意味が曖昧で誤解をまねくものについては、以下のように規定して使用する。

①赤色漆

赤色の主な顔料である朱(HgS)やベンガラ（Fe_2O_3）が未同定の場合には「赤色漆（未同定）」と最初に断って使用し、同定済みは「赤色（朱）漆」「朱漆」「ベンガラ漆」などと表記する。よく使われる「赤漆（あかうるし）」は「赤漆（せきしつ）」（木地を蘇芳で染め透漆を施したもの）との混同をさけるために用いない。内外面とも赤色漆の場合は、未同定は「総赤色（未同定）漆」、同定ずみの場合は「総赤色（朱）漆」、あるいは慣例による「総（惣）朱」「皆朱」「朱漆器」などを用いる。

②黒色漆と黒色系漆

黒色の顔料である炭素粒子や鉄系化合物粒子などを含むものを「黒色漆」、まぎらわしいが黒色顔料を含まないものを「黒色系漆」として区別する。なぜならば「黒色系漆」においては、黒色顔料を含まずとも漆自体の表層が茶黒色に変質し、さらに下地色を反射して肉眼では黒色に見えるからである。近年の筆者の調査では古代以来こうした方法が一般的と考えられるので、技術や材料科学の上からも両者の区別が必要となっている。未同定の場合は、はじめに「黒色漆（未同定）」とことわる。内外面とも黒色漆の場合は「総黒色漆」、同じく黒色系は「総黒色系漆」（いわゆる「総黒」は両者

を含んだもの）、内面赤色外面黒色は「内赤外黒色漆」、同じく「内赤外黒色系漆」とする。赤色顔料が同定されている場合は「内朱外黒色漆」あるいは「内赤（ベンガラ）外黒色漆」などと呼称する。

③下地の分類ー漆下地と渋下地

一般の粗い鉱物粒子を用いたものは「地の粉漆下地」、珪藻土使用は「珪藻土漆下地」、より細かい砥の粉類似は「サビ漆下地」、膠使用は「地の粉またはサビ膠下地」、炭粉は漆を用いたものは「炭粉漆下地」、柿渋を用いたものは「炭粉渋下地」とする。

Ⅲ．分析結果

塗膜分析を行った漆製品は13点で、１点につき内外面各３点の試料を作成し平均値を算出した。したがって必ずしも図版のスケールとは一致しない。以下、木胎（木地）から順に番号（①～）を付して説明する。赤色漆の色調表現はマンセル値によるもので、「４Ｒ　４／11」とあるものは、４Ｒは色相で、４／11は明度／彩度である。下地の炭粉粒子は下記のように３分類する。なお、№は分析番号である。

細粒…破砕工程が中粒炭粉より細かく炭粉粒子は均一で、針葉樹などの木口組織を全くとどめないもの。

中粒…炭粉粒子は1～２μｍ×５～10μｍ程度の針状粒子と長径５μｍ前後の多角形粒子などからなり、針葉樹などの木口組織はごく一部にしか認められないもの。

粗粒…破砕工程が粗く針葉樹などの木口組織を各所にとどめるもの。炭粉粒子は不均一で各種形状のものを含み、長径30μｍ前後の針状ないし棒状粒子を含むことが多い。

塗膜分析

◇№１（資料番号R561）　椀（総黒色系）

器形・表面観察

ゆるやかに立ち上がる身の浅い総黒色系椀（口径15.7cm、器厚4.4cm）。高台裏は畳付の周囲に凹溝を巡らしただけのもので、露胎となっている。ヨコ木（柾目）取り。

塗膜分析

内外面①炭粉渋下地層。層厚150μｍ前後。炭粉は中粒。②渋層。層厚20μｍ。地固めとしての渋層。③漆層。層厚14μｍ前後。④漆層。層厚30μｍ前後。

◇№２（資料番号R705）椀

器形・表面観察

全体に木地だけの露胎状態であるが、部分的に茶黒色部分が見られる。内面はカンナ筋が顕著で、茶黒色がかっている。外面はよく調整されている。底部裏は端部の周囲に凹溝を巡らしただけの、いわゆる碁笥底である。口径15cm、器厚6.5cm。ヨコ木（柾目）取り。

塗膜分析

内面①渋層。層厚10μｍ前後。②渋層。層厚10μｍ前後。木地の上に２層の塗膜が観察されるが、柿渋あるいはほかの付着物から形成されたと考えられ、漆液の可能性は少ない。

外面①炭粉渋下地層。層厚120μｍ前後。表層10μｍが分離。②漆層。層厚17μｍ前後。

◇№３（資料番号R266、SK06）　椀（総黒色系）

器形・表面観察

半球状に立ち上がるやや大ぶりの総黒色系椀。内面のみこみ全体に赤色漆絵による大きな扇文が描かれている。外面の４箇所にも扇文が配されている。全体に塗りは薄く、特に外面塗膜の剥離が著しい。赤色（朱）漆絵のマンセル値は9Ｒ　3.5／8.5（赤錆色）。ヨコ木（柾目）取り。

塗膜分析

内外面①炭粉渋下地層。層厚は薄く10～24μm。炭粉粒子は中粒。②漆層。剥離が著しいが、層厚30μm前後であろう。

◇№.4（資料番号R680）　皿（総黒色系）

器形・表面観察

水平に張り出した腰から斜上方に立ち上がる総黒色系皿（口径15cm、器厚３cm）。身が浅く薄手である。高台裏は露胎で、４箇所に穿孔が施されている。杓子など何らかに転用されたものだろう。ヨコ木（柾目）取り。

塗膜分析

内外面①炭粉渋下地層。層厚25μm前後。炭粉粒子は中粒。表層２μmが分離。②漆層。層厚は薄く10μm前後。

◇№.5（資料番号R513）　坏（須恵器、漆液容器）

器形・表面観察

斜上方に立ち上がる無台の坏。焼成は普通だが、青灰色を呈し、胎土は精良。内面全体に漆紙が覆っている。底部から紙表面までの厚さは最大約３mm。

塗膜分析

内面Ａサンプル①漆層。層厚200μm前後。②漆層。層厚392μm前後。中層以上が褐色に変質。③漆層。層厚200μm前後。全体が褐色に変質。

内面Ｂサンプル①漆層。層厚392μm前後。一部針葉樹の炭化片、鉱物粒子が混在。②漆層。層厚200μm前後。③漆層。層厚540μm前後。全体が褐色に変質。

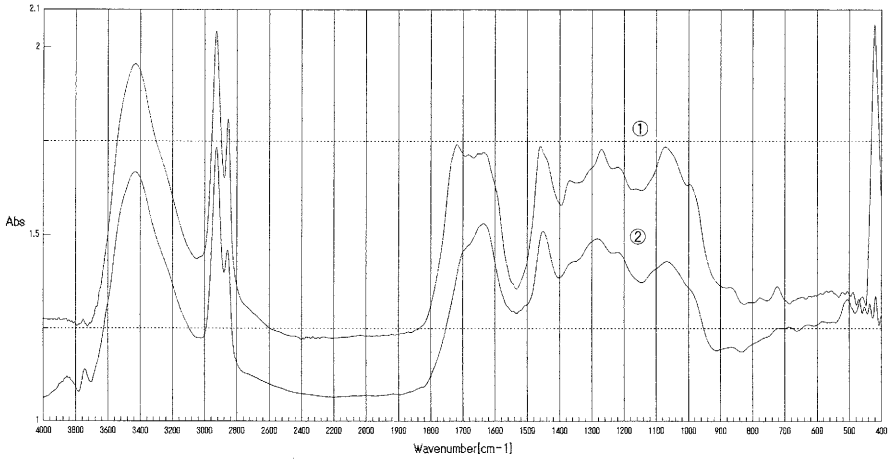
赤外分光分析

分光学（Spectroscopy）は「光と物質との相互作用によって生じる光の強度やエネルギー変化を調べる学問」[2)]と定義され、固有の振動をしている分子に波長を連続的に変化させて赤外線を照射してゆくと、分子の固有振動と同じ周波数の赤外線が吸収され、分子構造に応じたスペクトルが得られる。このスペクトルから分子構造を解析する方法を赤外線吸収スペクトル法（Infrared Absorption Spectroscopy）という[3)]。

漆塗膜の分析にはフーリエ変換赤外分光法（Fourier Transform Infrared Spectroscopy、FT-IR）を用いる。赤外光は近赤外（波数14000～4000cm^{-1}、波長700nm～2.5μm）、普通赤外（波数4000～400cm^{-1}、波長2.5～25μm）、遠赤外（波数400～10cm^{-1}、波長25μm～１mm）に分けられるが、ここでは通赤外光を用いる。波数は１cm当たりの波の数で、振動数を光速度で割ったものであり、波長の逆数である。FT-IRは普通赤外の場合は波数4000～400cm^{-1}の光を２つの光束に分割し、１つは固定し（固定鏡）、他方の光路長は可動ミラー（可動鏡）を用いて変化させる。つまり干渉計から位相の異なる光が出るわけで、２つの光束間の距離が変化すると干渉の結果、加え合わさった部分と差し引かれた部分の系列が生ずることによって強度の変化が起こる。すなわち干渉図形が得られる。フーリエ変換という数学的操作を行うと、干渉図形は時間領域から振動数領域のスペクトル点の１つに変換される。ピストンの長さを連続的に変化させ、ミラーＢの位置を調節して光束Ｂの光路を変化させる。この変化させた各点において、つぎつぎとフーリエ変換を行うと完全な赤外スペクトルが得られる[4)]。

このようにして得られたスペクトルをあらかじめ得られている基準のスペクトルと比較することによって、塗装液の同定ができる。分析試料は２mgを採取しKBr（臭化カリウム）100mgをメノウ鉢で磨り潰して、これを錠剤成形器で加圧成形したものを用いた（錠剤法）。測定条件は分解能４cm^{-1}、

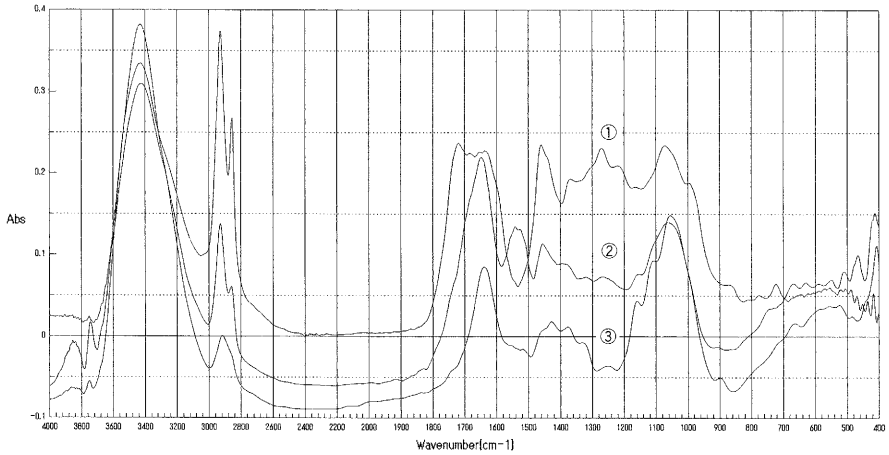
図１　赤外線吸収スペクトル



分解　4 cm-1
積算回数　16
アポダイゼーション　Cosine

①生漆(1990年作製)
②須恵器漆液容器

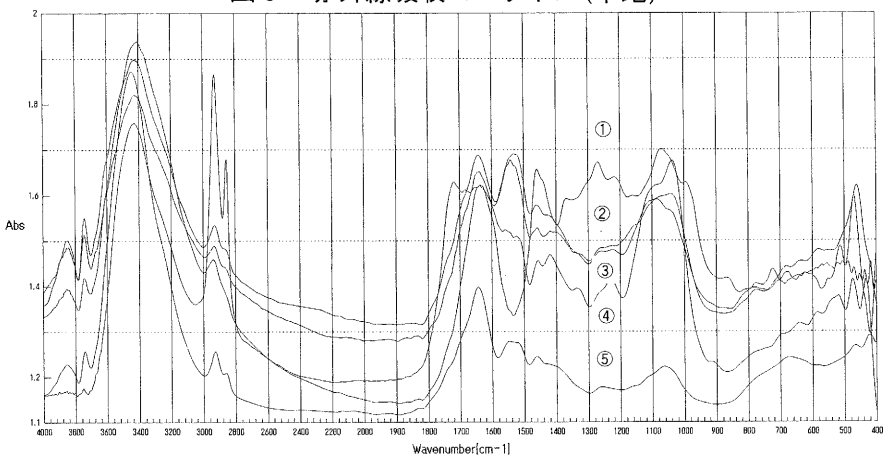
図２　赤外線吸収スペクトル



分解　4 cm-1
積算回数　16
アポダイゼーション　Cosine

①生漆(1990年作製)
②須恵器漆液容器蓋紙(繊維)
③ミツマタ

図３　赤外線吸収スペクトル(下地)



試料名
分解　4 cm-1
積算回数　16
アポダイゼーション　Cosine

①生漆(1990年作製)
②No. 4 下地
③No. 1 下地
④No. 3 下地

図４　蛍光Ｘ線定性分析チャート（No.３赤色漆絵）

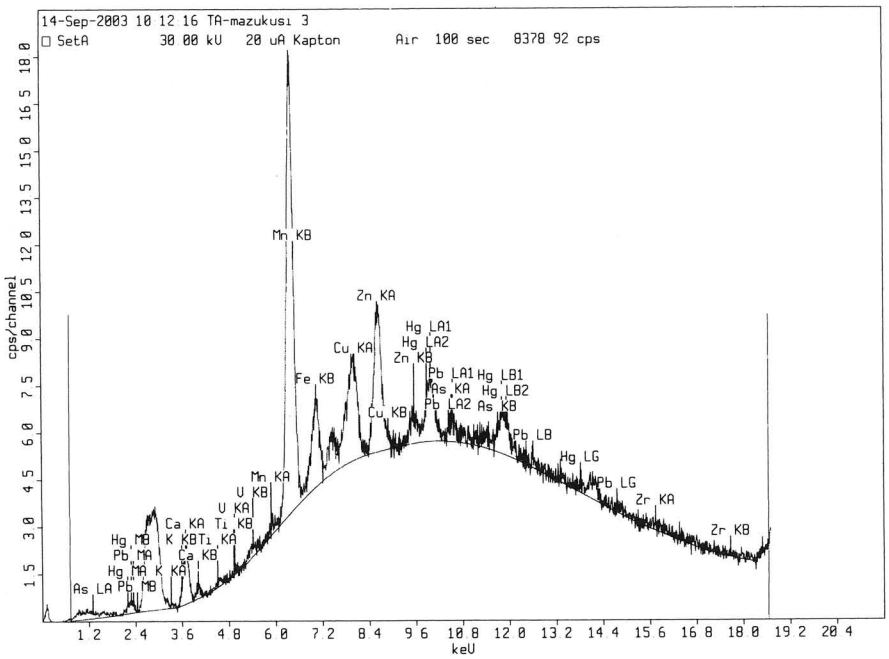
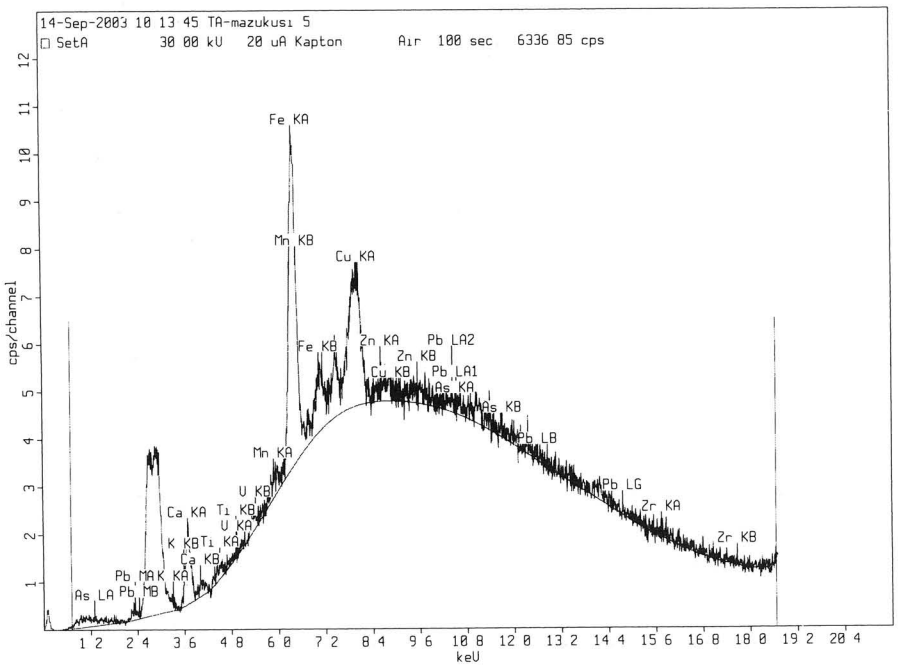
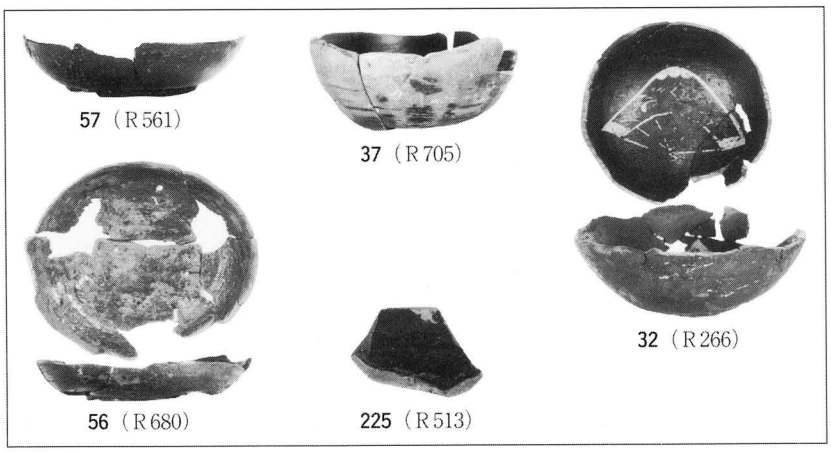


図５　蛍光Ｘ線定性分析チャート（漆液）





積算回数16、アポダイゼーション関数Cosine。縦軸は吸光度（Abs）、横軸は波数（cm^{-1}）である。測定機器は日本分光製FT-IR420。

図１は№５（①須恵器坏、漆液容器）の内面塗膜と生漆（②岩手県浄法寺産生漆塗膜、1990年作製）塗膜の赤外線吸収スペクトル（ノーマライズ、以下同）である。№５は3400cm^{-1}（水酸基、OH伸縮）、2925cm^{-1}、 2850cm^{-1}、1720～1710cm^{-1}(カルボニル基)、1650～1630cm^{-1}（糖タンパク）、1465cm^{-1}（活性メチレン基）1280cm^{-1}（フェノール）を中心とした左右のショルダー（1215cm^{-1}、1375cm^{-1}）、1075～1030cm^{-1}（ゴム質）の吸収が確認できる。ほとんど劣化もなく、経過した時間を考えると極めて良好な漆塗膜といえる。

図２は№５（②須恵器坏、漆液容器）の蓋紙部分と和紙（③ミツマタ）、生漆（①岩手県浄法寺産生漆塗膜、1990年作製）塗膜の赤外線吸収スペクトルである。①の漆成分のほかの吸収があり、ミツマタの吸収を重ねると天然繊維のセルロース（多糖類）の吸収が1070～1010cm^{-1}付近に強く現れていることがわかる（蓋紙がミツマタというわけではない）。

図３は№１・３・４の下地と現代の炭粉渋下地（⑤、1991年作製、朴炭）、生漆（②岩手県浄法寺産生漆塗膜、1990年作製）塗膜の赤外線吸収スペクトルである。柿渋は単体では特徴的な吸収を示すが、炭粉と混ぜた場合指紋領域（1500～650cm^{-1}）においては炭粉成分の吸収が強く現れ判別がしにくい。炭粉漆下地の場合は1465cm^{-1}（活性メチレン基）や1280cm^{-1}（フェノール）の吸収がより強い。また2850cm^{-1}付近のCH_2の吸収が微量であること（側鎖があまりない）、膠など他の膠着材成分の吸収がみられない点や顕微鏡による観察所見等から総合して渋下地と判断した。

なおカキの渋味はカキ果のタンニンの中に含まれている可溶性タンニンに起因する。柿渋の主成分（渋味成分）はカキタンニンで、それは基本骨格が加水分解されない縮合型タンニンとよばれるものである。化学構造については未解決な部分も多いが松尾友明・伊藤三郎氏の研究によって、エピカテキン、カテキン―３―ガレート、エピガロテキン、ガロテキン―３―ガレートの４種類のフエノール化合物から成ることが判明した。その比は１：１：２：２で、フラバノール分子間C_4位とC_6位、もしくはC_8位で順位結合し、繰り返し構造を持っている（分子量１万５千前後の高分子プロアントシアニジンのポリマー）[5)]。

蛍光Ｘ線分析

蛍光Ｘ線分析は試料にＸ線を当てると、元素特有のＸ線（特性Ｘ線ないし固有Ｘ線）が発生（放出）する。この波長と強度を測定することによって元素の定性や定量分析を行う方法である。

分析対象：漆絵に用いられた赤色漆塗膜の顔料。

使用機器：PHILIPS／PW4025、エネルギー分散型蛍光Ｘ線分析装置。

使用管球：Rhターゲット９Ｗ。

検出器　：高分解能電子冷却Ｓｉ半導体検出器。

測定条件：30ｋＶ、20μＡ、フィルター　Kapton、100sec。

測定室雰囲気：大気。測定部径は２㎜。サンプルカップに入れて測定。

分析結果：№３（椀、総黒色系）の赤色漆絵（扇文）の顔料はHgS(朱・硫化水銀)。重鉱物Feのピークが強く出ているが、漆塗膜からのものも含まれている。

Ⅳ.おわりに

以上分析結果を報告してきたが、漆器考古学的所見を若干補足して結びにかえたい。

№１・４は畳付け内面を抉って高台を作り出した身の浅い椀で、器形的には古い様相を呈している。

№.２はいわゆる碁笥底であるが、類似した例は石川県穴水町西川島遺跡群美麻奈比古神社前遺跡５号土坑（14世紀）から出土している。これも部分的に炭粉粒子が付着した木地椀である[6)]。

№.３は半球状に立ち上がるやや大ぶりの総黒色系椀で、渋下地であるが内面のみこみ全体と外面の４箇所の扇文はベンガラではなく朱漆によるもので、当初は見栄えのよい製品であったろう。№.３が検出されたSK06は井戸の可能性が高いと推測されており、時期的には15～16世紀と考えられる。

№.５の須恵器坏は漆液容器に転用されたもので、内面全体を覆った蓋紙が遺存している。墨書土器はじめ各種遺物から検討しなければならないが、遺構としては総柱の倉庫群やこれらを囲む溝などが検出されており、官衙や在地領主クラスに帰属する可能性がある。

漆液容器の存在は漆工作業がおこなわれたことを示証拠品であり、遺跡の性格を探る上においても重要な遺物である。古代においては生産量に限りある貴重な漆は、寺院建立や調度品製作などの需要を満たすために支配者層に独占されていた。国家は漆樹の植栽を奨励し、中男作物・交易雑物・諸国年料として貢納させ、地方の官衙でも単に漆の集荷だけでなく漆器の生産を行っていた[7)]、また寺院、富豪層の自家工房においても同様のことが行われていた[8)]。たとえば「沼垂城」「郡司符」木簡などが出土した新潟県三島郡和島村八幡林遺跡（８～９世紀）[9)]では、壷・蓋・漆塗円形容器（大型合子蓋）などとともに漆刷毛も出土している。八幡林遺跡の漆器にはローカル色が見られるので、ここで製作されたとみて大過ないであろう[10)]。富山県入善町じょうべのま遺跡[11)]でも漆篦や漆刷毛が出土しているし、何らかの漆工作業を示す須恵器・土師器を転用したパレット類の出土は石川県松任市横江荘家遺跡[12)]、同・輪島市釜屋谷Ｂ遺跡[13)]、同・金沢市畝田ナベタ遺跡[14)]をはじめとして類例が増えつつある。また加賀では弘仁13年（823）の木簡が出土し加賀立国直前の官衙関連遺跡として注目された金沢市戸水大西遺跡[15)]からも、高杯・稜椀・皿・合子、そして漆革箱と思われる漆器が出土している。これも地方ではまれにみる多種の出土例であり、在地産の可能性が高いとみている。

近年注目されるのは能登半島先端部の石川県珠洲市北方Ｅ遺跡（７世紀後半）からは「宮」と漆書きされた須恵器（４点）の坏とともに、漆液の運搬容器や漆パレットなどが多数出土した。宮は宮家の略で官倉を意味し、大宝令（701年）以前に畿内以外においても漆が収公されていた可能性が浮上してきている[16)]。また馬越遺跡では８世紀段階の蓋紙付きの漆液容器（須恵器坏）や９世紀末～10世紀前半段階ではかなりのパレットと地の粉漆下地漆器、曲物漆液容器が確認されている。いま一つ注目されるのは、掻き目があるウルシノキ（枝漆）が出土して注目を集めた石川県宇ノ気町指江Ｂ遺跡[17)]である。小枝の先まで掻き取られたもので（セシメ漆）、たまたま杭に使用するために集落に持ち込まれたことによって、今日に伝えられることになった貴重な例である。以上簡単に関連する動向を紹介した。他の遺物・遺構と総合的に比較検討することによって、遺跡の性格にせまることが可能になろう。

註

１）四柳嘉章「考古資料の修復と文化財科学ー福井県家久遺跡・礫槨墓出土漆器の事例から」『國學院大學博物館学紀要』第27号　國學院大學博物館学研究室

２）尾崎幸洋『分光学への招待』産業図書、1997

３）山田富貴子「赤外線吸収スペクトル法」『機器分析のてびき』化学同人、1988

４）SILVERSTEIN・WEBSTER、荒木峻・益子洋一郎ほか訳『有機化合物のスペクトルによる同定法―MS、IR、NMRの併用　第６版』東京化学同人、1999

５）伊藤三郎「脱渋の基礎」『果樹全書　カキ・キウイ』農産漁村文化協会、1985

西岡五夫「タンニンの化学―最新の研究」『化学と生物』第２４巻７号、日本農芸化学会、1986

６）四柳嘉章編『西川島―能登における中世村落の調査』石川県穴水町教育委員会、1987

７）玉田芳英「漆付着土器の研究」『文化財論叢Ⅱ』同朋舎出版、1995

四柳嘉章「備後国府関連遺跡出土漆の科学的分析」『府中市内遺跡４』広島県府中市教育委員会、1999

四柳嘉章「府中市金龍寺東遺跡出土の須恵器壷内面付着物について」『金龍寺東遺跡』広島県府中市教育委員会、1997

四柳嘉章「輪島市釜屋谷Ｂ遺跡出土の古代漆器―古代漆器生産と出土遺跡の性格をめぐって」『輪島市釜屋谷Ｂ遺跡』石川県輪島市教育委員会、1997

真保昌弘「上宿遺跡」『栃木県埋蔵文化財保護行政年報平成４年度』栃木県教育委員会、1994

上宿遺跡からは漆工房と考えられる竪穴住居跡（８世紀中）が検出されている。それは約４ｍ四方程度のもので北側にカマドが設置され、南側が１ｍほど拡張されている。後述する遺物が南側テラスから出土しているので製品や漆工具の置き場と考えられ、漆塗りにおいては埃を防ぐための仕切りなど空間処理の工夫もなされたであろう。遺物は漆紙文書、漆液容器（甕）、漆が付着した麻布（漉布）、漆器、漆塗膜片、その他土師器、須恵器類がある。漆液容器の蓋紙であった漆紙文書には「高一尺長□　廣一尺四寸五分　九横杖□」の記載が見られた。この寸法は調度類と考えられており、官衙や寺院の付属工房を示す貴重な事例といえよう。

８）四柳嘉章「古代～近世漆器の変遷と塗装技術」『石川考古学研究会々誌』第34号、1991

四柳嘉章「北陸・東北における古代・中世漆器の・漆技術と画期」『石川考古学研究会々誌』第35号、1992

９）坂井秀弥・田中　靖「新潟県八幡林遺跡と出土木簡」『日本歴史』第521号、1991

「八幡林遺跡現地説明会資料」新潟県教育委員会、和島村教育委員会、1992

和島村教育委員会『八幡林遺跡』1992～1994年

10）四柳嘉章「北陸出土の古代～中世漆器の塗膜分析報告」『北陸の漆器考古学―中世とその前後』北陸中世土器研究会、1997

11）阿部義平・高島忠平ほか『井波町高瀬遺跡・入善町じょうべのま遺跡発掘調査報告書』富山県教育委員会、1974

12）吉岡康暢・浅香年木ほか『東大寺領横江庄遺跡』石川県松任市教育委員会・石川考古学研究会、1983

木田　清・前田清彦ほか『東大寺領横江庄遺跡Ⅱ』石川県松任市教育委員会、1996

13）四柳嘉章「輪島市釜屋谷Ｂ遺跡出土の古代漆器―古代漆器生産と出土遺跡の性格をめぐって」『輪島市釜屋谷Ｂ遺跡』石川県輪島市教育委員会、1997

14）布尾幸恵「畝田ナベタ遺跡」『石川県埋蔵文化財情報』第６号、石川県埋蔵文化財センター、2001

15）出越茂和『戸水大西遺跡Ⅰ』石川県金沢市教育委員会、 2003

出越茂和編『戸水大西遺跡Ⅲ』石川県金沢市教育委員会、 2003

四柳嘉章「金沢市戸水大西遺跡出土漆革箱の科学分析」『戸水大西遺跡Ⅲ』金沢市教育委員会、2003

16）四柳嘉章「漆の技術と文化―出土漆器の世界」『いくつもの日本　第Ⅱ巻・あらたな歴史へ』岩波書店、2002

17）久田正弘・大西　顕ほか『指江遺跡・指江Ｂ遺跡』石川県教育委員会・石川県埋蔵文化財センター、2002

四柳嘉章・四柳嘉之「宇ノ気町指江Ｂ遺跡出土漆器の科学的分析」『指江遺跡・指江Ｂ遺跡』石川県教育委員会・石川県埋蔵文化財センター、2002

間尽遺跡の土壌分析

パリノ・サーヴェイ株式会社

はじめに

間尽遺跡(富山県高岡市手洗野所在)は、高岡市西部、小矢部川と丘陵地に挟まれて立地する。遺跡が位置するのは、丘陵を開析する小谷が射水平野に注ぐ地点付近である。今回は、古代から中世の SD59 ならびに古代・中世～現代の基本層序について珪藻分析、花粉分析、花粉イネ属同定、植物珪酸体分析を実施し、当時の古環境に関する情報を得る。

1.試料

分析試料は 12 点である。基本層序では試料番号 1～7 の 7 点の試料が採取されている。試料番号 1 は表土、試料番号 2、3 は近・現代、試料番号 4 は近世、試料番号 5-1、5-2、6 は古代～中世に相当する。また、ＳＤ59 は古代～中世に相当し、試料番号１～５の５点が採取されている（なお、層序によるものではなく、最下層の木製品出土地点周辺からのランダムサンプリングである)。

2.分析方法

(1)珪藻分析

試料を湿重で 7g 前後秤量し、過酸化水素水、塩酸処理、自然沈降法の順に物理・化学処理を施して、珪藻化石を濃集する。検鏡に適する濃度まで希釈した後、カバーガラス上に滴下し乾燥させる。乾燥後、プリュウラックスで封入して、永久プレパラートを作製する。検鏡は、光学顕微鏡で油浸 600 倍あるいは 1000 倍で行い、メカニカルステージでカバーガラスの任意の測線に沿って走査し、珪藻殻が半分以上残存するものを対象に 200 個体以上同定・計数する(化石の少ない試料はこの限りではない)。種の同定は、原口ほか(1998)、Krammer(1992)、Krammer and Lange-Bertalot(1986,1988,1991a,1991b)、Witkowski etal(2000)などを参照する。

同定結果は、淡水～汽水生種、淡水生種の順に並べ、その中の各種類をアルファベット順に並べた一覧表で示す。なお、淡水生種はさらに細かく生態区分し、塩分・水素イオン濃度(pH)・流水に対する適応能についても示す。また、環境指標種についてはその内容を示す。そして、産出個体数 100 個体以上の試料については、産出率 3.0%以上の主要な種類について、主要珪藻化石群集の層位分布図を作成する。また、産出化石が現地性か異地性かを判断する目安として、完形殻の出現率を求める。堆積環境の解析は、海水～汽水生種については小杉(1988)、淡水生種については安藤(1990)、陸生珪藻については伊藤・堀内(1991)、汚濁耐性については、Asai and Watanabe(1995)の環境指標種を参考とする。

(2)花粉分析・イネ属同定

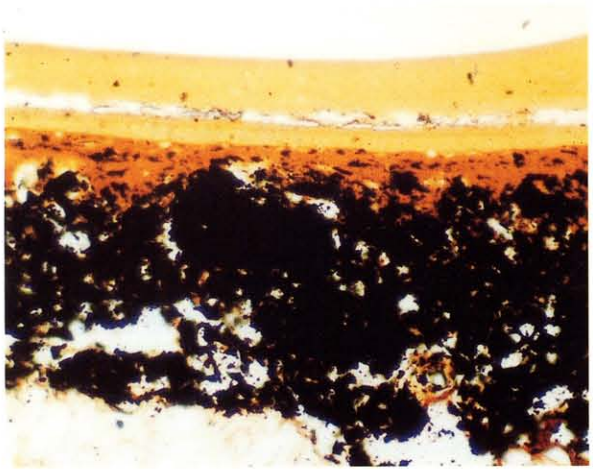
試料約 10gについて、水酸化カリウムによる泥化、篩別、重液(臭化亜鉛:比重 2.3)よる有機物の分離、フッ化水素酸による鉱物質の除去、アセトリシス(無水酢酸9:濃硫酸1の混合液)処理の順に物理・化学的処理を施して花粉を濃集する。残渣をグリセリンで封入してプレパラートを作成し、光学顕微鏡下でプレパラート全面を走査し、出現する全ての種類(Taxa)について同定・計数する。結果は、木本花粉は木本花粉総数を、草本花粉・シダ類胞子は総数から不明花粉を除いたものをそれぞれ基数として、百分率で出現率を算出し図示する。図表中で複数の種類をハイフォンで結んだものは、種類間の区別が困難なものである。

なおイネ属同定は、検出されるイネ科花粉の表面微細構造・発芽孔の肥厚の状況・粒径などを考慮して、中村(1974)を参考にしてイネ属と他のイネ科に分類する。

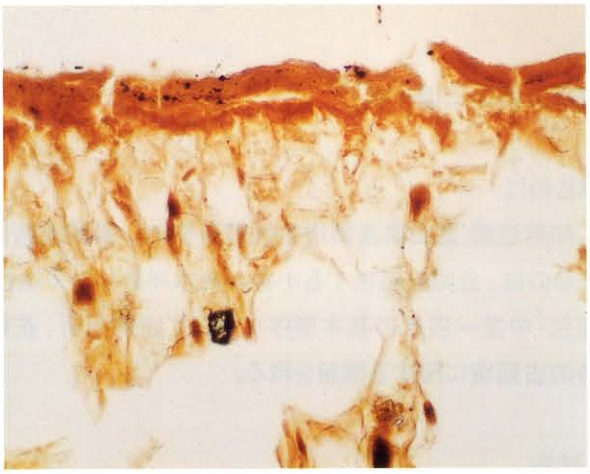
(3)植物珪酸体分析

湿重 5g前後の試料について過酸化水素水、塩酸処理、沈定法、重液分離法(ポリタングステン酸ナトリウム,

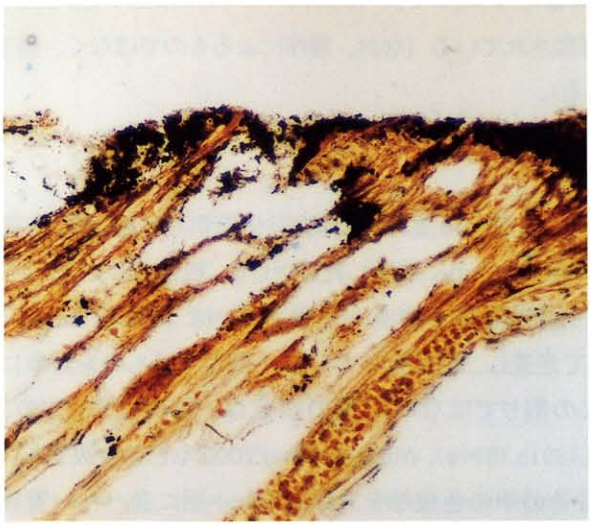
漆器塗膜断面の顕微鏡写真



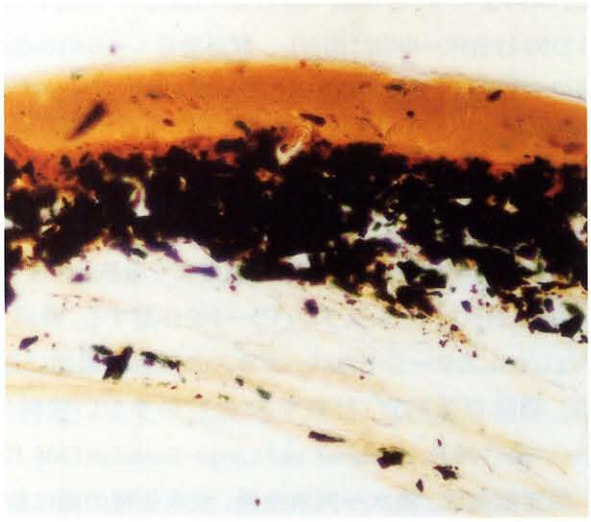
No.1　外面　×260



No.2　内面　×260

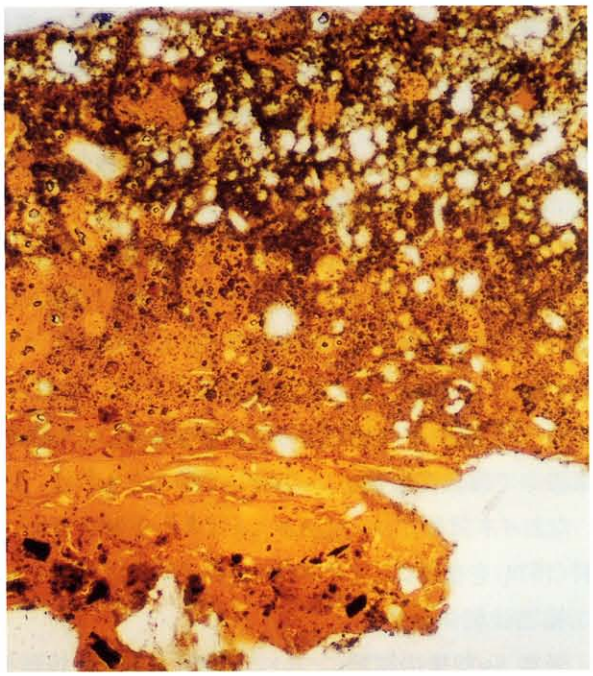


No.3　外面　×260



No.4　外面　×520

No.5　須恵器内面の漆液　×130



同左　×130

比重 2.5)の順に物理・化学処理を行い、植物珪酸体を分離、濃集する。検鏡しやすい濃度に希釈し、カバーガラス上に滴下、乾燥させる。乾燥後、プリュウラックスで封入してプレパラートを作製する。400 倍の光学顕微鏡下で全面を走査し、その間に出現するイネ科葉部(葉身と葉鞘)の葉部短細胞に由来した植物珪酸体(以下、短細胞珪酸体と呼ぶ)および葉身機動細胞に由来した植物珪酸体(以下、機動細胞珪酸体と呼ぶ)、およびこれらを含む珪化組織片を近藤・佐瀬(1986)の分類に基づいて同定し、計数する。

結果は、検出された種類とその個数の一覧表で示す。また、検出された植物珪酸体の出現傾向から古植生や稲作について検討するために、植物珪酸体群集と珪化組織片の産状を図化する。各種類の出現率は、短細胞珪酸体と機動細胞珪酸体の珪酸体毎に、それぞれの総数を基数とする百分率で求める。

3.結果

(1)珪藻分析

結果を図 1、表 1 に示す。珪藻化石は、SD59 と基本層序試料番号 1～3 から産出するが、試料番号 4～6 は少ないか無化石である。化石が産出した試料の完形殻の出現率は、50%以下と化石の保存状態は良くない。産出分類群数は、合計で 22 属 85 種類である。以下に珪藻化石群集の特徴を述べる。

・基本層序

試料番号 3 は、淡水域に生育する水生珪藻が優占する。産出種の特徴は、流水にも止水にも普通に見られる流水不定性種の *Amphora affinis*、*Cymbella silesiaca*、*C. tumida* が約 20%産出し、同じ生態性の *Gomphonema angustatum*、*Pinnularia mesolepta* 等を伴う。試料番号 2・1 は、陸上のコケや土壌表面など好気的環境に耐性のある陸生珪藻が優占することを特徴とする。主要種は、陸生珪藻の中でも耐乾性の高い陸生珪藻A群(伊藤・堀内, 1991)の *Hantzschia amphioxys*、*Navicula mutica* が 15-30%産出し、未区分陸生珪藻(伊藤・堀内, 1991)の *Pinnularia schoenfelderi*、陸域にも水域にも生育する陸生珪藻 B 群(伊藤・堀内, 1991)の *Stauroneis obtuse* 等を伴う。珪藻の化石の少なかった試料番号 4 は、試料番号 3 とほぼ同様な種類が産出する。なお、試料番号 5-1 と 5-2、試料番号 6 は珪藻化石が殆ど産出しない。

・SD59

試料番号 1～5 とも珪藻化石が近似する。流水不定性種の *Amphora affinis* が約 30%産出し、同じ生態性の *Gomphonema parvulum*、*Cymbella silesiaca*、*C. tumida* 等を伴う。また、陸生珪藻A群の *Hantzschia amphioxys* を伴う。

(2)花粉分析・イネ属同定

結果を図 2、表 2 に示す。基本層序で花粉化石が検出されたのは、試料番号 1 のみである。試料番号 1 は木本花粉が多い組成を示し、その中でもスギ属の割合が高い。その他の木本花粉として、マツ属などが検出されるが、種類数は少ない。草本花粉はイネ属を含むイネ科ややや多く検出されるものの、他は少ない。

SD59 の組成は、5 点ともほぼ同様な組成を示す。全体的にみると、草本花粉が主体の組成を示している。木本花粉は、スギ属の割合が高く、マツ属、ブナ属、ウルシ属などが検出される。草本花粉はイネ科の割合が高く、その中にはイネ属も多く含まれる。クワ科(クワ科には木本・草本両方あるが、便宜上草本に含めている)も比較的多いが、特に試料番号 1 で多くなっている。その他アカザ科、ヨモギ属、オナモミ属、ソバ属などが含まれている。

(3)植物珪酸体分析

結果を図 3、表 3 に示す。各試料からは植物珪酸体が検出されるものの、保存状態が悪く、表面に多数の小孔(溶食痕)が認められる。基本層序では、試料番号 6、5-2、5-1 で検出個数が少なく、クマザサ属やネザ

サ節を含むタケ亜科などがわずかに認められる程度である。また、試料番号 5-1 では栽培植物であるイネ属の短細胞珪酸体が検出される。試料番号 4 から 1 ではイネ属、キビ属、タケ亜科(クマザサ属やネザサ節を含む)、ヨシ属、ウシクサ族(コブナグサ属やススキ属を含む)、イチゴツナギ亜科(オオムギ族を含む)などが認められる。また、イネ属に由来する珪化組織片も数多く認められる。なお、キビ属とオオムギ族は栽培種を含む種類であるが、検出された植物珪酸体の形態からは栽培種か否かの判別が困難である。

SD59 試料番号 1～5 では産状が類似しており、イネ属の機動細胞珪酸体の産出が目立ち、珪化組織片も多い。イネ属の産出を除けば、基本層序の古代～中世とされる試料番号 6、5-2、5-1 と産状が類似している。

4.考察

(1)基本層序

古代～中世の堆積物からは、珪藻、花粉、植物珪酸体ともにほとんどみられない。植物珪酸体は、土壌中での植物珪酸体量が生産量に比べて大幅に少ないことから、植物に再び吸収されたり粘土の形成に関与したりして、比較的早い段階で消失する可能性が指摘されている(近藤, 1988)。また、土壌中の珪酸分の溶脱と沈殿や再結晶化(千木良, 1995)などによって珪酸分がしだいに風化する状況も推測される。一方、花粉化石は、好気的状況下による酸化により分解・消失しやすいことが指摘されている(中村,1967)。遺跡の立地や土質から考えて、基本層序は谷や河川からの氾濫堆積物に由来すると思われるが、長期にわたって離水・地表面化するなどして、微化石が風化分解を受けやすい環境になっていたものと思われる。

近世以降の堆積物をみると、植物珪酸体ではイネ属の割合が高く、表層に向かって増加している。また、稲藁や稲籾に由来する珪化組織片もみられることから、これらは近世以降の稲作に由来すると思われる。現在遺跡周辺の土地利用はほとんど水田であることから、矛盾しない結果である。また、珪藻化石をみると、表層に向けて陸生珪藻の割合が高くなっている。本遺跡は小矢部川や丘陵を開析する谷などによって、水の影響を受けやすい場所であると思われるが、陸生珪藻の増加は、近年の治水事業の効果によって、氾濫の影響を受けにくくなってきたことに起因すると思われる。花粉化石ではスギ属の割合が高く、マツ属も検出される。後背の現存植生をみると、広葉樹の雑木林に混じってスギやマツの植林地がみられることから(宮脇編著,1985)、周辺植生に由来すると思われる。ただし、スギやマツは風媒花で花粉生産量も非常に多いことから(塚田,1974)、実際に被覆している植生の割合よりも花粉化石群集が高くなっていると思われる(Faegri&Iversen,1989 etc.)。

(2)SD59

分析を行った 5 点は、珪藻化石、花粉化石、植物珪酸体ともに、その組成が類似している。珪藻化石群集は、流水にも止水にも生育する流水不定性種が優占し、中～下流性河川指標種群(安藤, 1990)の *Achnanthes lanceolata*、*Meridion circulae* var. *constrictum* 等を伴う。なお、中～下流性河川指標種群は、河川中～下流部や河川沿いの河岸段丘、扇状地、自然堤防、後背湿地などに集中して出現する種群である。このことから、SD59 には流れがあった可能性がある。

花粉化石群集をみると、イネ科の割合が高く、イネ属も多産している。また、植物珪酸体でもイネ属の割合が高く、稲藁や稲籾に由来する珪化組織片もみられる。このことから、遺跡周辺では古代～中世当時稲作が行われていたと考えられ、イネ属の割合が非常に高いことから SD59 には稲籾や稲藁などの植物体が混入あるいは廃棄されたことが考えられる。なお、SD59 内からは、回虫や鞭虫に由来する寄生虫卵が検出される。寄生虫卵は、トイレ遺構の場合は堆積物1g あたり数千個以上と多産する(金原正明・金原正子, 1992)。今回は、寄生虫卵に着目した分析方法を行っていないが、1g あたりおおよそ 100 個程度含まれるのではないかと思われる。これまでの分析例ではトイレ遺構以外から少量ではあるが寄生虫卵が検出される事例はいくつか知られ

ている(辻本・田中,1997, パリノ・サーヴェイ株式会社、1996 など)。したがって、検出された寄生虫卵は、周辺の居住域などから SD59 内に流れ込んだ可能性もある。ただし、ヒトと動物の寄生虫卵を現段階では明確に区別できないことから、詳細は不明である。金原正明・金原正子(1992)でも、寄生虫卵の全体的な組成からヒト由来であると推測しており、形態的にヒトと他の動物のものを分類しているわけではない。トイレ以外から出土する寄生虫卵の解釈については、寄生虫卵の詳細な形態分類等を含めて今後の課題である。また、ソバ属の花粉化石も検出されており、周辺での栽培が示唆される。一方、植物珪酸体でみられるキビ属やオオムギ族は、二毛作や救荒作物としての雑穀類栽培に由来する可能性もあるが、雑穀類の植物珪酸体は、栽培種と近縁の野生種との区別が付かないため、断定はできない。栽培種以外の草本花粉をみると、イネ科、クワ科、カヤツリグサ科、ヨモギ属などがみられる。これらは人里など開けた場所に草地を作ることから、水田開発などによって低地が開かれ、草地化した場所に生育していたと考えられる。

また、古墳時代以前の射水平野は、ハンノキなどの湿地林が優勢であったと考えられている (安田, 1982a; 1982b; パリノ・サーヴェイ株式会社, 1991)。したがって、古代～中世になると低地の開発が進んで湿地林が減少し、耕作地や草地が拡大するという植生変化が付近で起こったことが推定される。今回検出された木本花粉をみると、スギ属が多い。先述した文献では、縄文時代にはスギ属も多く検出されているが、これに伴って落葉広葉樹も多く検出されており、その種類構成は豊富である。古代～中世以降におけるスギ属の増加はおそらく有用材としてのスギの植林や保護に由来すると推定され、マツ属の増加は丘陵地の植生改変に伴う植林や二次林に由来すると考えられる。当社で行った射水平野や富山平野の花粉分析結果でも、中近世においてスギ属やマツ属の割合が増加する傾向にあり(未公表試料等)、地域的な変化であるといえる。

引用文献

安藤　一男,1990,淡水産珪藻による環境指標種群の設定と古環境復元への応用.東北地理,42,73-88.

Asai,K. and Watanabe,T.,1995,Statistic Classification of Epilithic Diatom Species into Three Ecological Groups relating to Organic Water Pollution(2)Saprophilous and saproxenous taxa. *Diatom*,10,35-47.

千木良　雅弘,1995,風化と崩壊.近未来社,204p.

原口　和夫・三友　清・小林　弘,1998,埼玉の藻類　珪藻類.埼玉県植物誌,埼玉県教育委員会,527-600.

伊藤　良永・堀内　誠示,1991,陸生珪藻の現在に於ける分布と古環境解析への応用.珪藻学会誌,6,23-45.

金原　正明・金原　正子,1994,堆積物中の情報の可視化,可視化情報,14,9-14.

Knut Faegri&Johs.Iversen,1989,Textbook of Pollen Analysis.The Blackburn Press.

近藤　練三,1988,植物珪酸体(Opal Phytolith)からみた土壌と年代.ペトロジスト,32,189-202.

近藤　錬三・佐瀬　隆,1986,植物珪酸体分析,その特性と応用,第四紀研究,25,31-64.

小杉　正人,1988,珪藻の環境指標種群の設定と古環境復原への応用.第四紀研究,27,1-20.

Krammer, K.,1992,*PINNULARIA,eine Monographie der europaischen Taxa*.BIBLIOTHECA DIATOMOLOGICA, BAND 26,J Cramer,353p.

Krammer,K. and Lange-Bertalot,H.,1986,*Bacillariophyceae,Teil 1*,Naviculaceae.Band 2/1 von:Die Suesswasser-flora von Mitteleuropa, Gustav Fischer Verlag, 876p.

Krammer,K. and Lange-Bertalot,H.,1988,*Bacillariophyceae,Teil 2*,Epithemiaceae, Bacillariaceae, Surirellaceae. Band 2/2 von:Die Suesswasserflora von Mitteleuropa, Gustav Fischer Verlag, 536p.

Krammer,K. and Lange-Bertalot,H.,1991a,*Bacillariophyceae,Teil 3*,Centrales,Fragilariaceae,Eunotiaceae.Band 2/3 von:Die Suesswasserflora von Mitteleuropa, Gustav Fischer Verlag, 230p.

Krammer,K. and Lange-Bertalot,H.,1991b,*Bacillariophyceae,Teil 4*,Achnanthaceae, Kritsche Ergaenzungen zu Navicula(Lineolatae) und Gomphonema.Band 2/4 von:Die Suesswasserflora von Mitteleuropa,Gustav Fischer Verlag, 248p.

宮脇　昭編著,1985,日本植生誌　中部,至文堂,604p.

中村　純,1967,花粉分析,古今書院,232p.

中村　純,1974,イネ科花粉について,とくにイネ(Oryza sativa)を中心として.第四紀研究,13,187-193.

パリノ・サーヴェイ株式会社,1991,布目沢東遺跡自然科学分析報告.大門町埋蔵文化財調査報告第7集　大門町企業団地内遺跡発掘調査報告(1)　ー布目沢東遺跡・布目沢西遺跡ー,富山県埋蔵文化財センターー・大門町教育委員会,p.81-118.

パリノ・サーヴェイ株式会社,1996,自然科学分析.葛飾区遺跡調査会調査報告第 35 集　上千葉遺跡　葛飾区西亀有1丁目 12 番地点発掘調査報告書,葛飾区遺跡調査会,242-275.

辻本　裕也・田中　義文,1997,田井中遺跡 95-2 区・志紀遺跡 95-2 区における古環境復元,大阪文化財調査研究センター調査報告書第 23 集　田井中遺跡(1～3次)・志紀遺跡(防1次)　陸上自衛隊八尾駐屯地内施設建設事業に伴う発掘調査報告書,大阪文化財調査研究センター,242-277.

塚田　松雄,1972,花粉は語る,岩波書店,231p.

Witkowski,A., Lange-Bertalot,H., and Metzeltin,D.,2000,*Diatom flora of Marine coast I.* Iconographia Diatomologica,7, Koeltz Scientific Books, 881p.

安田　喜憲,1982a,花粉分析.大門町埋蔵文化財報告第 5 集　小泉遺跡　ー県道改修工事に伴う調査ー,大門町教育委員会,48-62.

安田　喜憲,1982b,花粉分析からみた富山湾沿岸の縄文前期の遺跡　ーナラ林文化と環日本海文化圏ー.大門町埋蔵文化財報告第 5 集　小泉遺跡　ー県道改修工事に伴う調査ー,大門町教育委員会,99-108.

表1. 珪藻分析結果(1)

種　類	生態性			環境	基本層序							SD59				
	塩分	pH	流水	指標種	1	2	3	4	5-1	5-2	6	1	2	3	4	5
Anomoeoneis sphaerophora (Kuetz.)Pfitzer	Ogh-Meh	al-bi	ind		–	–	–	–	–	–	–	1	1	1	–	1
Fragilaria brevistriata Grunow	Ogh-Meh	al-il	l-ph	U	–	–	–	–	–	–	–	–	–	1	–	–
Navicula goeppertiana (Bleisch)H.L.Smith	Ogh-Meh	al-il	ind	S	1	–	–	–	–	–	–	–	–	–	–	–
Navicula veneta Kuetzing	Ogh-Meh	al-il	ind	S	1	–	–	–	–	–	–	–	–	–	–	–
Nitzschia palea (Kuetz.)W.Smith	Ogh-Meh	ind	ind	S	–	–	–	–	–	–	–	–	–	–	1	–
Rhopalodia gibberula (Ehr.)O.Muller	Ogh-Meh	al-il	ind		1	1	–	–	–	–	–	–	–	–	–	1
Achnanthes hungarica Grunow	Ogh-ind	al-il	ind	U	–	–	–	–	–	–	–	–	–	–	–	1
Achnanthes lanceolata (Breb.)Grunow	Ogh-ind	ind	r-ph	K,T	–	2	–	1	–	–	–	2	1	2	3	1
Achnanthes minutissima Kuetzing	Ogh-ind	al-il	ind	U	1	–	–	–	–	–	–	–	–	–	–	–
Amphora affinis Kuetzing	Ogh-ind	al-il	ind	U	1	1	23	5	–	–	–	38	27	42	46	34
Amphora montana Krasske	Ogh-ind	ind	ind	RA,U	1	1	–	–	–	–	–	–	–	–	–	–
Caloneis aerophila Bock	Ogh-ind	al-il	ind	RA	7	–	–	–	–	–	–	–	–	–	–	–
Caloneis leptosoma Krammer & Lange-Bertalot	Ogh-ind	ind	l-ph	RB	–	–	–	–	–	–	–	2	2	1	–	2
Caloneis silicula (Ehr.)Cleve	Ogh-ind	al-il	ind		–	–	–	2	–	–	–	3	1	1	3	1
Cocconeis disculus (Schumann)Cleve	Ogh-ind	al-il	l-bi		–	–	–	–	–	–	–	–	–	1	–	–
Craticula cuspidata (Kuetz.)D.G.Mann	Ogh-ind	al-il	ind	S	–	–	–	–	–	–	–	1	–	–	1	–
Cymbella aspera (Ehr.)Cleve	Ogh-ind	al-il	ind	O,T	–	–	–	–	–	–	–	–	–	1	–	–
Cymbella heteropleura var. minor Cleve	Ogh-hob	ac-il	l-ph		–	–	–	–	–	–	–	–	1	–	–	–
Cymbella mesiana Cholnoky	Ogh-ind	al-bi	l-bi	O	–	–	1	–	–	–	–	–	–	–	–	–
Cymbella silesiaca Bleisch	Ogh-ind	ind	ind	T	1	1	18	–	–	–	–	3	1	6	5	4
Cymbella tumida (Breb. ex Kuetz.)V.Heurck	Ogh-ind	al-il	ind	T	–	–	23	1	–	–	–	2	4	6	7	3
Cymbella spp.	Ogh-unk	unk	unk		–	–	–	–	–	1	–	–	–	–	–	1
Diploneis ovalis (Hilse)Cleve	Ogh-ind	al-il	ind	T	–	–	4	1	–	–	–	2	2	1	–	2
Diploneis parma Cleve	Ogh-ind	ind	ind		–	–	–	–	–	–	–	2	2	2	2	1
Diploneis spp.	Ogh-unk	unk	unk		–	–	–	1	–	–	–	–	–	–	–	–
Eunotia pectinalis var. minor (Kuetz.)Rabenhorst	Ogh-hob	ac-il	ind	O,T	–	–	–	–	–	–	–	–	1	–	1	–
Eunotia praerupta Ehrenberg	Ogh-hob	ac-il	l-ph	RB,O,T	–	–	–	–	–	–	–	–	–	–	–	1
Eunotia praerupta var. bidens Grunow	Ogh-hob	ac-il	l-ph	RB,O	–	–	–	–	–	–	–	–	–	–	–	1
Fragilaria capucina var. gracilis (Oestr.)Hustedt	Ogh-ind	al-il	l-ph	T	–	–	–	–	–	–	–	–	–	1	–	–
Fragilaria construens fo. venter (Ehr.)Hustedt	Ogh-ind	al-il	l-ph	S	–	–	–	–	–	–	–	–	–	1	–	–
Fragilaria pinnata Ehrenberg	Ogh-ind	al-il	l-ph	S	–	–	–	–	–	–	–	–	3	4	2	1
Fragilaria pinnata var. lancettula (Schum.)Hustedt	Ogh-ind	al-il	l-ph	S	–	–	–	–	–	–	–	–	–	–	2	–
Fragilaria ulna (Nitzsch)Lange-Bertalot	Ogh-ind	al-il	ind		–	–	–	–	–	–	–	1	1	–	–	2
Frustulia vulgaris (Thwait.)De Toni	Ogh-ind	al-il	ind	U	–	–	–	–	–	–	–	1	–	–	–	–
Gomphonema angustatum (Kuetz.)Rabenhorst	Ogh-ind	al-il	ind	U	–	2	13	1	–	–	–	1	5	1	5	3
Gomphonema gracile Ehrenberg	Ogh-ind	al-il	l-ph	O,U	–	–	–	–	–	–	–	1	1	–	1	–
Gomphonema parvulum Kuetzing	Ogh-ind	ind	ind	U	–	3	3	1	–	–	–	15	14	5	6	6
Gomphonema spp.	Ogh-unk	unk	unk		–	–	–	–	–	–	–	2	–	–	–	1
Hantzschia amphioxys (Ehr.)Grunow	Ogh-ind	al-il	ind	RA,U	22	30	1	1	–	–	–	3	14	5	1	7
Meridion circulae var. constrictum (Ralfs)V.Heurck	Ogh-ind	al-il	r-bi	K,T	–	–	–	–	–	–	–	2	1	3	2	2
Navicula confervacea (Kuetz.)Grunow	Ogh-ind	al-bi	ind	RB,S	1	–	–	–	–	–	–	3	–	3	–	1
Navicula constans var. symmetrica Hustedt	Ogh-unk	unk	unk		–	–	–	–	–	–	–	–	–	1	1	–
Navicula contenta Grunow	Ogh-ind	al-il	ind	RA,T	2	4	1	–	–	–	–	2	1	1	–	1
Navicula contenta fo. biceps (Arnott)Hustedt	Ogh-ind	al-il	ind	RA,T	7	–	1	–	–	–	–	–	1	–	–	–
Navicula elginensis (Greg.)Ralfs	Ogh-ind	al-il	ind	O,U	3	1	–	–	–	–	–	–	–	–	–	–
Navicula elginensis var. neglecta (Krass.)Patrick	Ogh-ind	al-il	r-ph	U	–	–	–	–	–	–	–	–	–	1	–	–
Navicula mutica Kuetzing	Ogh-ind	al-il	ind	RA,S	60	23	5	4	–	–	–	2	4	2	1	4
Navicula mutica var. ventricosa (Kuetz.)Cleve	Ogh-ind	al-il	ind	RI	1	–	–	–	–	–	–	–	–	–	–	–
Navicula paramutica Bock	Ogh-ind	ind	ind	RB	2	1	–	–	–	–	–	–	–	–	–	–
Neidium alpinum Hustedt	Ogh-unk	unk	ind	RA	10	2	–	–	–	–	–	–	–	–	–	–
Neidium ampliatum (Ehr.)Krammer	Ogh-ind	ind	l-ph		–	–	1	–	–	–	–	–	–	–	–	–
Nitzschia amphibia Grunow	Ogh-ind	al-bi	ind	U	–	1	–	–	–	–	–	–	–	–	–	1
Nitzschia brevissima Grunow	Ogh-ind	al-il	ind	RB,U	1	–	–	–	–	–	–	–	–	–	–	–
Nitzschia debilis (Arnott)Grunow	Ogh-ind	al-il	ind	RB,U	1	1	–	–	–	–	–	–	–	–	–	–
Nitzschia fonticola Grunow	Ogh-ind	al-bi	ind	T	1	–	–	–	–	–	–	–	–	–	–	–
Nitzschia hantzschiana Rabenhorst	Ogh-ind	al-bi	ind	U	1	–	–	–	–	–	–	–	–	–	–	–
Nitzschia cf. perminuta (Grun.)Peragallo	Ogh-ind	ind	ind	RI	–	1	–	–	–	–	–	–	–	–	–	1
Nitzschia sinuata var. delognei (Grun.)Lange-Bertalot	Ogh-ind	al-il	l-ph	U	–	–	–	–	–	–	–	–	–	–	1	–
Nitzschia tubicola Grunow	Ogh-ind	al-il	ind	S	1	–	–	–	–	–	–	–	–	–	–	–
Pinnularia acrosphaeria W.Smith	Ogh-ind	al-il	l-ph	O	–	–	–	–	–	–	–	–	–	1	–	–
Pinnularia borealis Ehrenberg	Ogh-ind	ind	ind	RA	4	8	–	–	–	–	–	1	–	–	1	1
Pinnularia brevicostata Cleve	Ogh-ind	ac-il	ind		–	–	–	–	–	–	–	2	2	1	1	1
Pinnularia gibba Ehrenberg	Ogh-ind	ac-il	ind	O,U	–	–	2	–	–	–	–	–	–	–	1	–
Pinnularia gibba var. linearis Hustedt	Ogh-hob	ac-il	ind		–	–	–	–	–	–	–	1	–	–	–	–
Pinnularia lenticuloides H.Kobayasi	Ogh-ind	ac-il	l-ph		1	–	–	–	–	–	–	–	–	–	–	–
Pinnularia mesolepta (Ehr.)W.Smith	Ogh-ind	ind	ind	S	1	–	7	–	–	–	–	–	–	–	–	–
Pinnularia obscura Krasske	Ogh-ind	ind	ind	RA	3	–	–	–	–	–	–	–	–	–	–	–
Pinnularia schoenfelderi Krammer	Ogh-ind	ind	ind	RI	12	9	–	–	–	–	–	1	1	–	–	–
Pinnularia schroederii (Hust.)Krammer	Ogh-ind	ind	ind	RI	–	–	–	–	–	–	–	–	2	2	1	–
Pinnularia subcapitata Gregory	Ogh-ind	ac-il	ind	RB,S	3	1	–	–	–	–	–	–	–	–	–	–
Pinnularia substomatophora Hustedt	Ogh-hob	ac-il	l-ph		1	–	–	–	–	–	–	–	–	–	–	–
Pinnularia ueno Skvortzow	Ogh-hob	ac-il	l-ph		–	1	–	–	–	–	–	–	–	–	–	–
Pinnularia viridis (Nitz.)Ehrenberg	Ogh-ind	ind	ind	O	2	–	1	2	–	–	–	2	–	–	2	1
Pinnularia spp.	Ogh-unk	unk	unk		2	–	1	1	–	–	–	4	1	1	–	4
Rhopalodia gibba (Ehr.)O.Muller	Ogh-ind	al-il	ind		2	–	–	–	–	–	–	–	–	–	–	–
Sellaphora laevissima (Kuetz.)Mann	Ogh-ind	ind	ind		–	–	–	–	–	–	–	–	–	–	–	2
Sellaphora pseudopupula (Krasske)Lange-B.	Ogh-ind	ind	ind		2	–	–	–	–	–	–	–	–	–	–	–
Stauroneis acuta W.Smith	Ogh-ind	al-il	l-ph		–	–	1	3	–	–	–	1	4	2	1	4
Stauroneis anceps Ehrenberg	Ogh-ind	ind	ind	T	–	–	1	–	–	–	–	–	–	–	–	–
Stauroneis borrichii (Pet.)Lund	Ogh-ind	ind	ind	RI	5	4	–	1	–	–	–	–	–	–	–	–
Stauroneis kriegeri Patrick	Ogh-ind	ind	ind	T	2	–	–	–	–	–	–	–	–	–	–	–
Stauroneis obtusa Lagerstedt	Ogh-ind	ind	ind	RB	23	6	–	–	–	–	–	–	–	–	–	–
Stauroneis phoenicenteron (Nitz.)Ehrenberg	Ogh-ind	ind	l-ph	O	–	–	–	–	–	–	–	1	–	–	–	–
Stauroneis phoenicenteron var. signata Meister	Ogh-ind	ind	ind		–	–	–	–	–	–	–	–	1	–	1	–

表1. 珪藻分析結果(2)

種　　類	生態性 塩分	生態性 pH	生態性 流水	環境指標種	基本層序 1	2	3	4	5-1	5-2	6	SD59 1	2	3	4	5
Stauroneis prominula Hustedt	Ogh-ind	ind	unk		1	–	–	–	–	–	–	–	–	–	–	–
Stauroneis thermicola (Petersen)Lund	Ogh-unk	unk	unk	RI	2	–	–	–	–	–	–	–	–	–	–	–
Stauroneis spp.	Ogh-unk	unk	unk		–	–	–	–	–	–	–	–	2	–	1	3
Surirella angusta Kuetzing	Ogh-ind	al-il	r-bi	U	1	1	–	–	–	–	–	–	–	–	–	–
Surirella linearis W.Smith	Ogh-ind	ind	l-ph		–	–	–	1	–	–	–	–	–	–	–	–
Surirella ovata var. pinnata (W.Smith)Hustedt	Ogh-ind	al-il	r-ph	U	–	–	–	1	–	–	–	–	–	–	–	–
海水生種					0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0
海水～汽水生種					0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0
汽水生種					0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0
淡水～汽水生種					3	1	0	0	0	0	0	1	1	2	1	2
淡水生種					191	104	107	27	0	1	0	101	100	98	99	98
珪藻化石総数					194	105	107	27	0	1	0	102	101	100	100	100

凡例

H.R.:塩分濃度に対する適応性
- Ogh-Meh :淡水ー汽水生種
- Ogh-hil :貧塩好塩性種
- Ogh-ind :貧塩不定性種
- Ogh-hob :貧塩嫌塩性種
- Ogh-unk :貧塩不明種

pH:水素イオン濃度に対する適応性
- al-bi :真アルカリ性種
- al-il :好アルカリ性種
- ind :pH 不定性種
- ac-il :好酸性種
- ac-bi :真酸性種
- unk :pH 不明種

C.R.:流水に対する適応性
- l-bi :真止水性種
- l-ph :好止水性種
- ind :流水不定性種
- r-ph :好流水性種
- r-bi :真流水性種
- unk :流水不明種

環境指標種群
K:中～下流性河川指標種, O:沼沢湿地付着生種(以上は安藤, 1990)
S:好汚濁性種, U:広域適応性種, T:好清水性種(以上はAsai and Watanabe, 1995)
R:陸生珪藻(RA:A群, RB:B群, RI:未区分、伊藤・堀内, 1991)

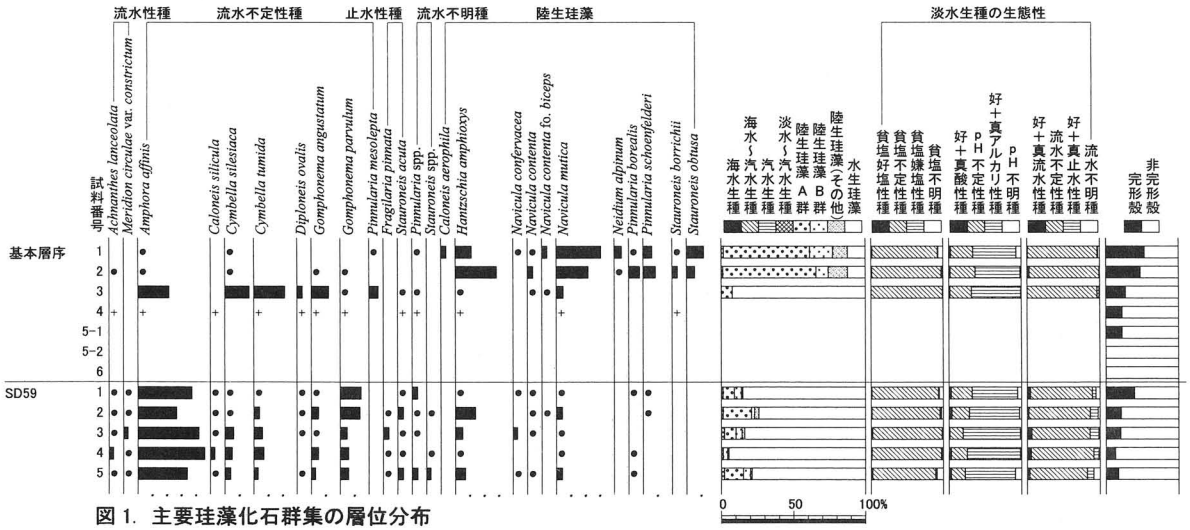


図 1. 主要珪藻化石群集の層位分布

海水ー汽水ー淡水生種産出率・各種産出率・完形殻産出率は全体基数、淡水生種の生態性の比率は淡水生種の合計を基数として百分率で算出した。
いずれも 100 個体以上検出された試料について示す。なお、●は3%未満、＋は 100 個体未満の試料について検出した種類を示す。

表2. 花粉分析・イネ属同定結果

種　類	基本層序							SD59				
試料番号	1	2	3	4	5-1	5-2	6	1	2	3	4	5
木本花粉												
モミ属	–	–	–	–	–	–	–	4	1	4	–	1
ツガ属	–	–	–	–	–	–	–	–	1	1	3	2
トウヒ属	–	–	–	–	–	–	–	–	1	–	1	–
マツ属単維管束亜属	–	–	–	–	–	–	–	–	–	–	1	–
マツ属複維管束亜属	8	–	–	–	–	–	–	1	3	5	1	2
マツ属(不明)	41	–	–	–	–	–	–	8	15	17	3	20
コウヤマキ属	–	–	–	–	–	–	–	–	1	–	–	–
スギ属	224	–	–	–	–	–	–	41	47	43	63	54
イチイ科－イヌガヤ科－ヒノキ科	–	–	–	–	–	–	–	1	–	1	2	3
ノグルミ属	–	–	–	–	–	–	–	1	–	–	–	–
サワグルミ属	–	–	–	–	–	–	–	1	3	–	3	1
クルミ属	2	–	–	–	–	–	–	–	1	–	–	–
クマシデ属－アサダ属	2	–	–	–	–	–	–	2	2	–	2	2
カバノキ属	–	–	–	–	–	–	–	1	–	–	–	1
ハンノキ属	1	–	–	–	–	–	–	–	1	1	1	2
ブナ属	–	–	–	–	–	–	–	13	12	6	4	1
コナラ属コナラ亜属	3	–	–	–	–	–	–	2	4	2	1	4
コナラ属アカガシ亜属	–	–	–	–	–	–	–	–	2	3	–	1
クリ属	–	–	–	–	–	–	–	10	2	3	3	1
シイノキ属	–	–	–	–	–	–	–	6	1	–	2	1
ニレ属－ケヤキ属	2	–	–	–	–	–	–	1	4	3	4	2
キハダ属	–	–	–	–	–	–	–	–	–	–	1	–
ウルシ属	–	–	–	–	–	–	–	4	9	8	5	5
トチノキ属	–	–	–	–	–	–	–	–	–	–	–	2
ブドウ属	–	–	–	–	–	–	–	–	–	1	–	–
ツバキ属	–	–	–	–	–	–	–	–	1	–	–	–
ウコギ科	–	–	–	–	–	–	–	2	1	1	–	–
トネリコ属	–	–	–	–	–	–	–	–	–	–	1	–
ガマズミ属	–	–	–	–	–	–	–	2	1	3	1	–
草本花粉												
イネ属	17	–	–	–	–	–	–	43	73	83	57	42
他のイネ科	17	–	–	–	–	–	–	83	111	115	113	86
カヤツリグサ科	1	–	–	–	–	–	–	14	22	21	21	19
ミズアオイ属	–	–	–	–	–	–	–	–	–	1	1	–
ユリ科	–	–	–	–	–	–	–	–	1	–	–	1
クワ科	–	–	–	–	–	–	–	252	78	44	54	53
サナエタデ節－ウナギツカミ節	–	–	–	–	–	–	–	32	14	12	–	9
タデ属	–	–	–	–	–	–	–	–	1	2	1	–
ソバ属	–	–	–	–	–	–	–	1	3	2	2	–
アカザ科	–	–	–	–	–	–	–	10	9	13	11	12
ナデシコ科	–	–	–	–	–	–	–	–	5	8	7	10
キンポウゲ科	–	–	–	–	–	–	–	1	–	3	–	1
アブラナ科	–	–	–	–	–	–	–	6	4	10	4	6
バラ科	–	–	–	–	–	–	–	–	3	–	1	2
マメ科	–	–	–	–	–	–	–	–	–	–	–	1
セリ科	–	–	–	–	–	–	–	2	1	3	1	3
オオバコ属	–	–	–	–	–	–	–	1	–	1	1	1
オミナエシ属	–	–	–	–	–	–	–	–	1	–	–	–
ゴキヅル属	–	–	–	–	–	–	–	1	–	–	–	–
ヨモギ属	1	–	–	–	–	–	–	19	14	33	29	10
オナモミ属	–	–	–	–	–	–	–	11	12	1	1	6
キク亜科	–	–	–	–	–	–	–	–	5	5	1	1
タンポポ亜科	–	1	–	–	–	–	–	1	1	1	1	–
不明花粉	2	–	–	–	–	–	–	11	7	8	7	4
シダ類胞子												
ヒカゲノカズラ属	–	–	–	–	–	–	–	–	–	–	–	1
ゼンマイ属	–	–	–	–	–	–	–	–	–	–	1	–
イノモトソウ属	–	–	–	–	–	–	1	–	–	1	–	–
他のシダ類胞子	110	9	23	6	–	1	1	45	73	63	53	51
合　計												
木本花粉	283	0	0	0	0	0	0	100	113	102	102	105
草本花粉	36	1	0	0	0	0	0	477	358	358	306	263
不明花粉	2	0	0	0	0	0	0	11	7	8	7	4
シダ類胞子	110	9	23	6	0	1	2	45	73	64	54	52
総計(不明を除く)	429	10	23	6	0	1	2	622	544	524	462	420
その他												
回虫卵	–	–	–	–	–	–	1	79	29	7	8	17
鞭虫卵	–	–	–	–	–	–	–	17	2	2	2	10
横川吸虫卵	–	–	–	–	–	–	–	1	–	–	–	–

表3. 植物珪酸体分析結果

種　類	基本層序							SD59				
試料番号	1	2	3	4	5-1	5-2	6	1	2	3	4	5
イネ科葉部短細胞珪酸体												
イネ族イネ属	79	58	21	26	1	−	−	2	4	3	8	8
キビ族キビ属	3	2	2	−	−	−	−	−	−	−	−	−
タケ亜科クマザサ属	27	15	6	21	7	1	1	2	−	5	2	5
タケ亜科ネザサ節	12	6	8	15	2	1	−	1	−	3	1	1
タケ亜科	14	60	48	102	29	−	18	5	9	18	9	15
ヨシ属	4	6	−	4	−	−	−	2	−	1	−	−
ウシクサ族コブナグサ属	−	2	5	2	−	−	−	2	−	−	−	−
ウシクサ族ススキ属	7	4	3	3	−	−	−	2	−	−	2	3
イチゴツナギ亜科オオムギ族	2	5	−	2	−	−	−	−	−	−	−	−
イチゴツナギ亜科	8	12	4	5	1	−	−	−	−	2	−	−
不明キビ型	9	29	18	29	−	−	−	4	7	3	5	4
不明ヒゲシバ型	3	4	2	2	−	−	−	−	1	1	1	1
不明ダンチク型	7	8	7	6	−	−	−	−	2	2	3	4
イネ科葉身機動細胞珪酸体												
イネ族イネ属	67	50	38	33	−	−	−	42	99	71	108	119
キビ族	2	2	1	−	−	−	−	−	−	−	−	−
タケ亜科クマザサ属	13	19	11	14	10	1	−	2	−	3	3	3
タケ亜科ネザサ節	4	3	5	8	−	−	−	4	−	4	2	3
タケ亜科	14	29	38	36	30	6	17	14	20	15	15	21
ヨシ属	4	6	−	3	−	−	−	4	5	−	6	−
ウシクサ族	8	7	8	5	−	−	−	2	11	5	8	11
不明	12	16	23	19	2	−	−	13	10	13	17	9
合　計												
イネ科葉部短細胞珪酸体	175	211	124	217	40	2	19	20	23	38	31	41
イネ科葉身機動細胞珪酸体	124	132	124	118	42	7	17	81	145	111	159	166
総　計	299	343	248	335	82	9	36	101	168	149	190	207
珪化組織片												
イネ属穎珪酸体	59	21	13	11	−	−	−	10	28	25	20	16
イネ属短細胞列	41	28	4	6	1	−	−	−	3	1	4	4
イネ族葉部組織片	34	8	3	−	−	−	−	−	−	−	−	−

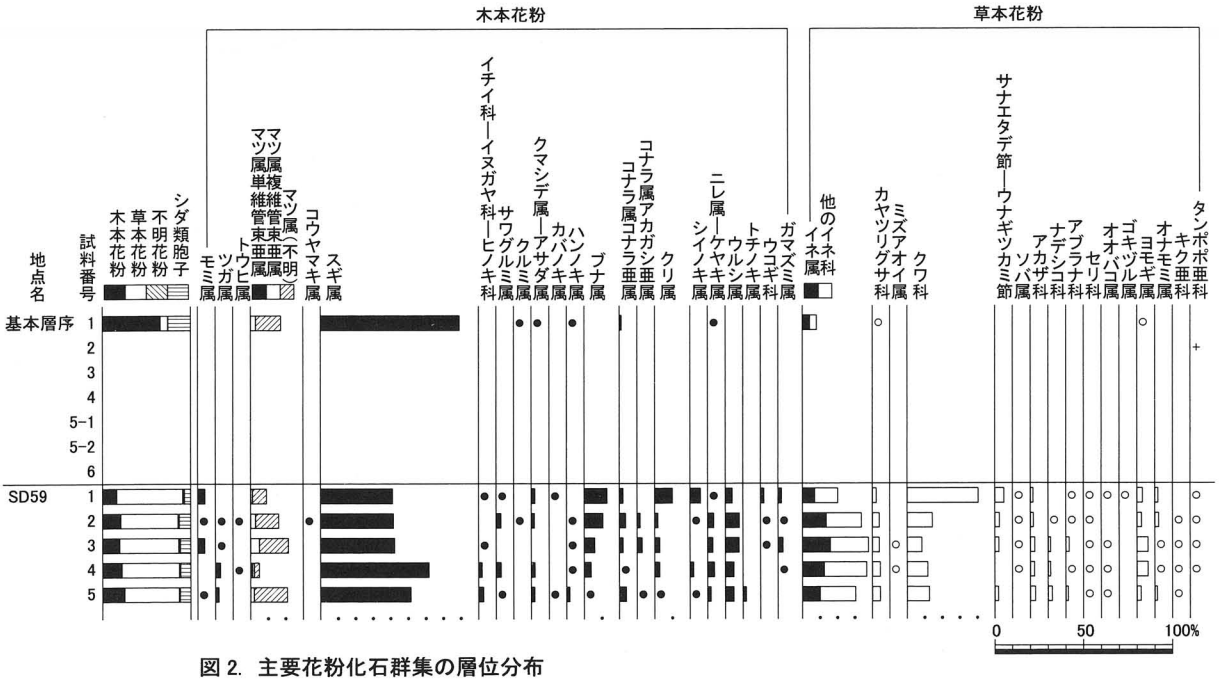


図 2. 主要花粉化石群集の層位分布

出現率は、木本花粉は木本花粉化石総数、草本花粉・シダ類胞子は総数より不明花粉を除く数を基数として百分率で算出した。なお、●○は1%未満、＋は木本花粉 100 個体未満の試料について検出した種類を示す。

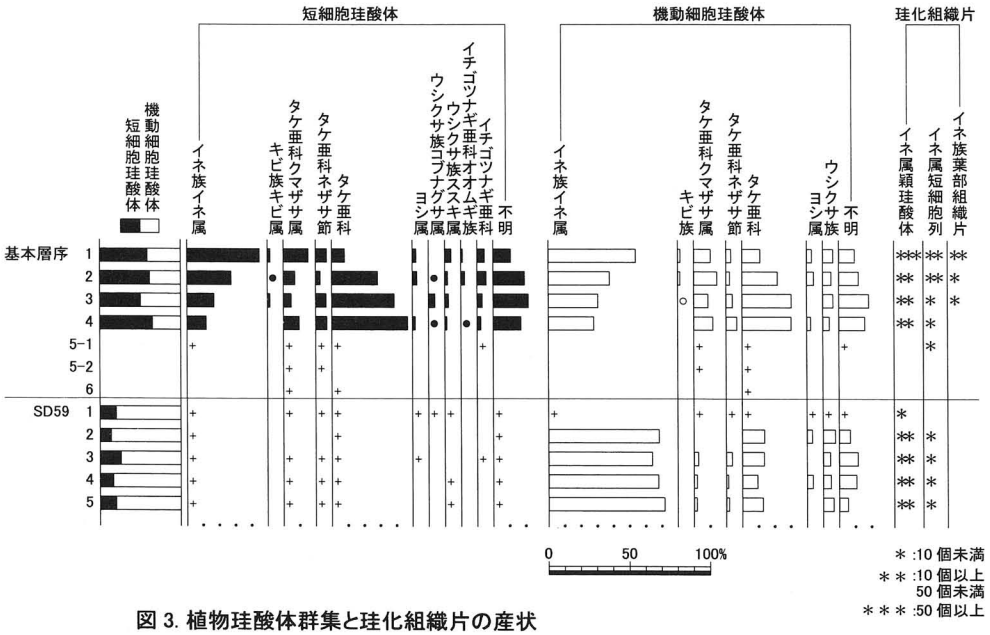
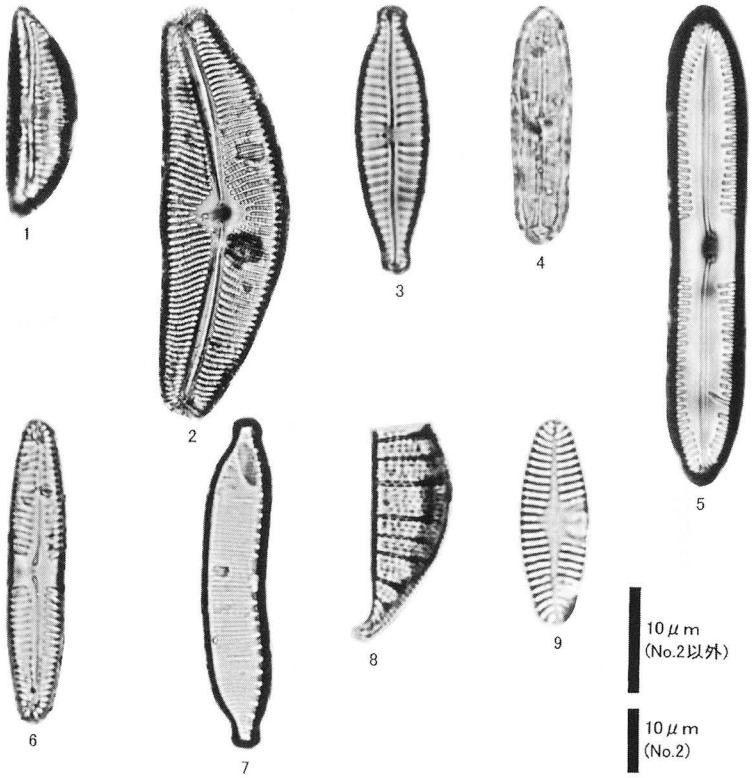


図 3. 植物珪酸体群集と珪化組織片の産状

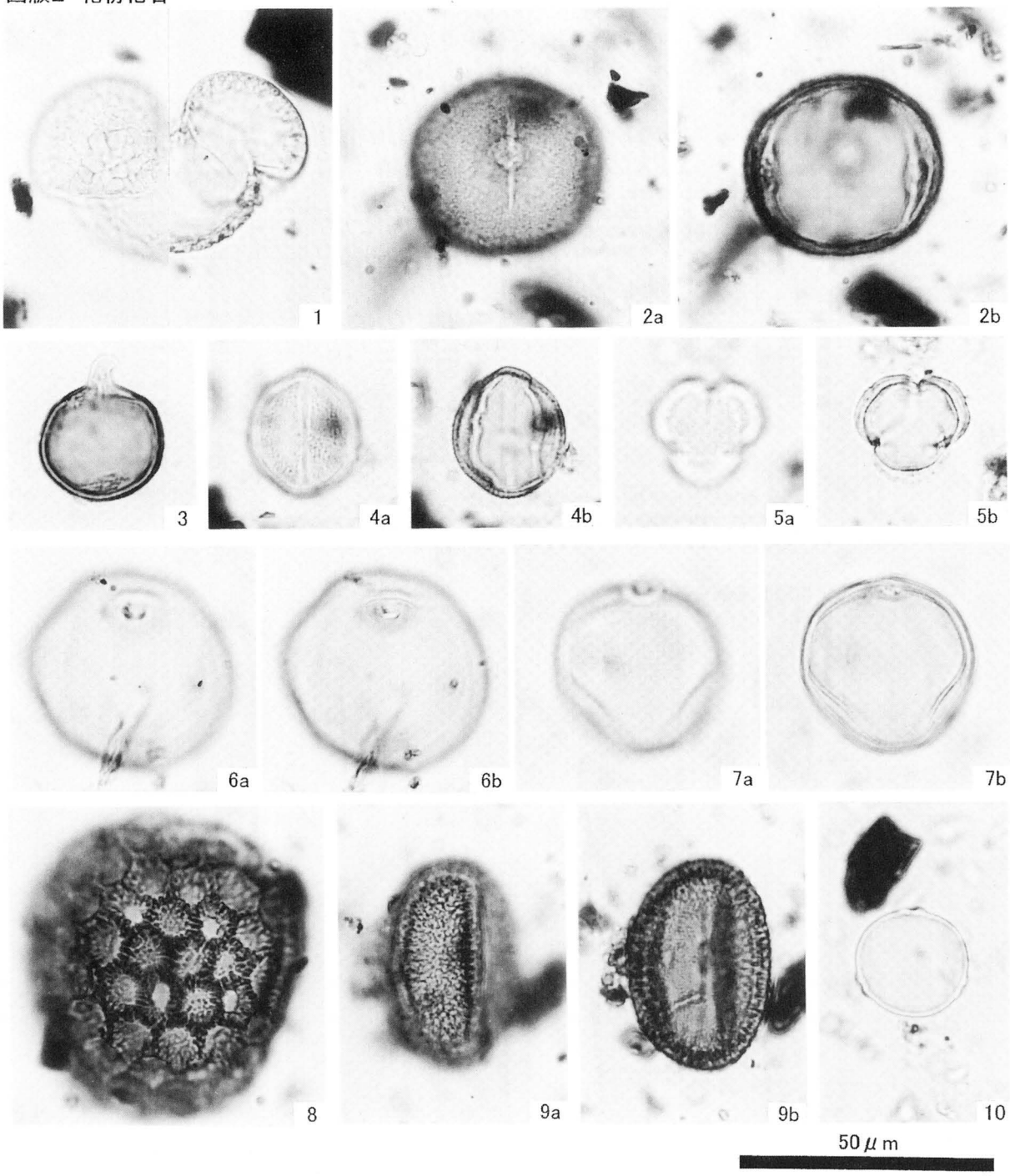
出現率は、イネ科葉部短細胞珪酸体、イネ科葉身機動細胞珪酸体の総数を基数として百分率で算出した。
なお、●○は1%未満の種類を示す。また、珪化組織片の産状を＊で示す。

図版1　珪藻化石



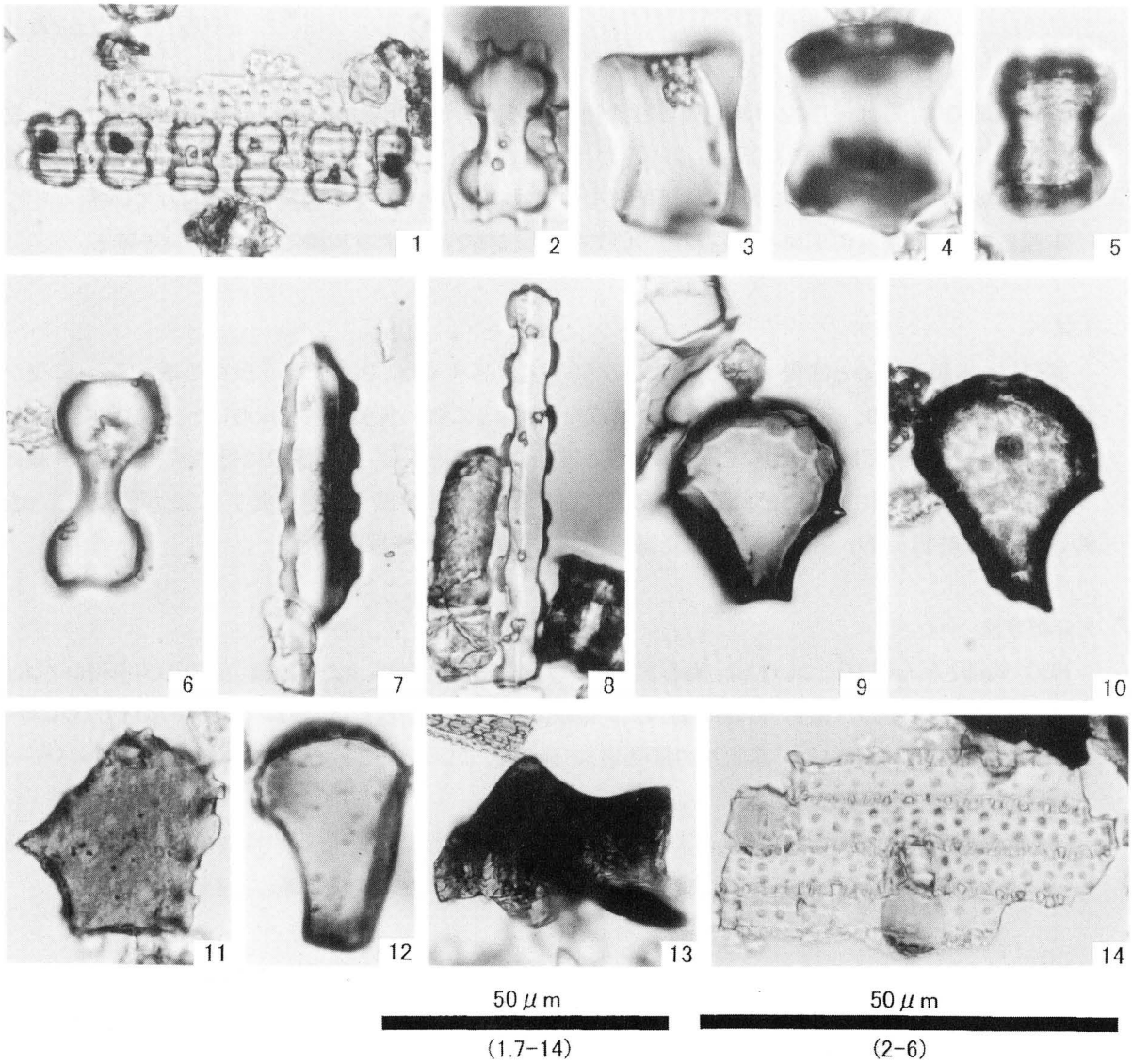
1 . *Amphora affinis* Kuetzing(基本層序;3)
2 . *Cymbella tumida* (Breb. Ex Kuetz.)V.Heurck(基本層序;3)
3 . *Gomphonema parvulum* Kuetzing(SD59;1)
4 . *Neidium alpinum* Hustedt(基本層序;1)
5 . *Pinnularia schroederii* (Hust.)Krammer(SD59;3)
6 . *Pinnularia schoenfelderi* Krammert(基本層序;2)
7 . *Hantzschia amphioxys* (Her.)Grunowt(基本層序;1)
8 . *Rhopalodia gibberula* (Her.)O.Muller(SD59;5)
9 . *Achnanthes lanceolata* (Breb.)Grunow(SD59;3)

図版2　花粉化石



1．マツ属(基本層序;1)
2．ブナ属(SD59;2)
3．スギ属(基本層序;1)
4．ウルシ属(SD59;2)
5．ヨモギ属(SD59;1)
6．イネ属(SD59;2)
7．イネ科(SD59;1)
8．サナエタデ節－ウナギツカミ節(SD59;2)
9．ソバ属(SD59;2)
10．クワ科(SD59;1)

図版3　植物珪酸体



1．イネ属短細胞列(基本層序;1)
2．キビ属短細胞珪酸体(基本層序;2)
3．クマザサ属短細胞珪酸体(基本層序;1)
4．ネザサ節短細胞珪酸体(基本層序;1)
5．コブナグサ属短細胞珪酸体(基本層序;3)
6．ススキ属短細胞珪酸体(基本層序;4)
7．オオムギ族短細胞珪酸体(基本層序;1)
8．イチゴツナギ亜科短細胞珪酸体(基本層序;1)
9．イネ属機動細胞珪酸体(基本層序;1)
10．イネ属機動細胞珪酸体(SD59;5)
11．クマザサ属機動細胞珪酸体(基本層序;1)
12．ウシクサ族機動細胞珪酸体(基本層序;1)
13．イネ属穎珪酸体(基本層序;1)
14．イネ族葉部組織片(基本層序;1)

間尽遺跡から出土した木製品の樹種

パリノ・サーヴェイ株式会社

はじめに

間尽遺跡では、古代～中世の溝や掘立柱建物跡等の遺構が検出されている。これらの遺構からは、柱材等の構築材の一部や木製品および種実遺体等が出土している。これまでに木製品の一部については樹種同定が実施されており、全体的にスギ材の利用が多いが、柱材にはクリが多い傾向が認められている。

本報告では、漆椀等の木製品や柱材について樹種同定を行い、木材利用に関する資料を得る。

1.試料

試料は、木製品 4 点と柱根 2 点である。このうち、木製品 4 点は、PEG による保存処理と接合・修復が終了した状態であったため、破損部等を利用して目立たないように数mm角の木片を採取した。なお、木製品のうち、R575 は肉眼で木材ではなくヒョウタン類の果皮と推定されたことから、試料採取は行わず、試料の外観観察による同定を行う。柱根は、それぞれ多数の破片に割れており、接合関係等を把握することが困難であったたため、明らかに柱根と分かる部位（底面が認識できる破片）から試料を採取した。

2.分析方法

PEG 処理された試料については、ぬるま湯につけて PEG を溶脱した。その後、剃刀の刃を用いて木口（横断面）・柾目（放射断面）・板目（接線断面）の 3 断面の徒手切片を作製し、ガム・クロラール（抱水クロラール，アラビアゴム粉末，グリセリン，蒸留水の混合液）で封入し、プレパラートを作製する。作製したプレパラートは、生物顕微鏡で観察・同定する。

遺物番号 R575 については、肉眼および双眼実体顕微鏡下で観察し、形態的特徴を現生標本および原色日本植物種子写真図鑑(石川,1994)、日本植物種子図鑑(中山ほか,2000)等と比較し、種類を同定した。

3.結果

同定結果を表 1 に示す。遺物番号 R575 を除く木製品と柱根は、針葉樹 1 種類（スギ）と広葉樹 2 種類（クリ・トチノキ）に同定された。また、遺物番号 R575 はヒョウタン類の果皮に同定された。木材各種類の解剖学的特徴とヒョウタン類の外観的特徴を記す。

表1.樹種同定結果

番号	遺構	器種	性状	樹種	備考
R557		木製品（板状）	木材	スギ	板目板
R575		瓢箪？	種実	ヒョウタン（果皮）	
R600		木製品（板状）	木材	スギ	板目板
R705	SK08	漆椀	木材	トチノキ	横木取
R659	SB07 No.1	柱根	木材	クリ	
R658	SB07 No.2	柱根	木材	クリ	

・スギ（*Cryptomeria japonica* (L. f.) D. Don）　スギ科スギ属

軸方向組織は仮道管と樹脂細胞で構成され、仮道管の早材部から晩材部への移行はやや急で、晩材部の幅は比較的広い。樹脂細胞はほぼ晩材部に限って認められる。放射組織は柔細胞のみで構成され、柔細胞の壁は滑らか。分野壁孔はスギ型で、1 分野に 2-4 個。放射組織は単列、1-15 細胞高。

・クリ（*Castanea crenata* Sieb. et Zucc.）　ブナ科クリ属

環孔材で、孔圏部は 2-4 列、孔圏外で急激～やや緩やかに管径を減じたのち、漸減しながら火炎状に配列する。道管は単穿孔を有し、壁孔は交互状に配列する。放射組織は同性、単列、1-15 細胞高。

・トチノキ（*Aesculus turbinata* Blume）　トチノキ科トチノキ属

散孔材で、管壁は厚く、横断面では角張った楕円形、単独または 2-3 個が複合して散在する。道管は単穿

孔を有し、壁孔は交互状に配列、内壁にはらせん肥厚が認められる。放射組織は同性、単列、1-15 細胞高。トチノキの特徴である放射組織ので階層状配列は明瞭ではない。

・ヒョウタン類(*Lagenaria siceraria* Standl)　　ウリ科ヒョウタン属

果実の破片に同定された。頂部破片で浅い椀形、大きさ 7.5-8cm 程度。頂部中央には径 9mm 程度の果柄の着点がある。果皮外面は茶褐色でやや平滑、内面は淡褐色、スポンジ状で果柄着点から放射状に走る維管束の筋が目立つ。断面は柵状で厚さ 6-7mm 程度。

4.考察

木製品のうち、R557 と R600 は共に板目板である。R557 は一方が尖り、3 ヶ所に穿孔が認められる。また、R600 は、2 ヶ所に木釘が認められる。樹種は、いずれも針葉樹のスギであった。スギは木理が通直で割裂性が高く、加工は容易である。本遺跡では、これまでに行われた木製品の樹種同定でもスギが多く確認されている。とくに板状の木製品では、そのほとんどがスギであり、今回の結果とも調和的である。スギの利用は、割裂性が高く板の製作が容易である材質を利用したことが推定される。また、周辺地域で行われた花粉分析の結果(パリノ・サーヴェイ株式会社,1991)から、低地にスギが広く生育していた可能性があり、入手が容易なことも多く利用された背景の一つとして考えられる。

井戸枠内から出土した漆椀は、樹木の軸方向が椀の横軸方向になる横木取りで、椀の底が柾目となる木取りと考えられるが、碗底の木目は漆塗りのために確認できなかった。漆は内面・外面とも黒色で模様は認められない。椀底には同心円状の加工痕が認められ、ろくろを使用して成形が行われたことが推定される。樹種は、広葉樹のトチノキであった。トチノキの木材は、気乾比重 0.52 で広葉樹材としては中程度、乾燥による収縮は大きいが、加工は容易である。本遺跡では、これまでに漆器椀にスギ、ブナ属、ケヤキの 3 種類が確認されているが、トチノキは確認されていない。ただし、各地で行われた調査では、トチノキはブナ属やケヤキと共に漆器椀によく利用される樹種の一つである。

SB07 の柱根は、2 点ともクリであった。クリは重硬で強度や耐朽性に優れているが、加工は困難な部類に入る。本遺跡では、古代の掘立柱建物跡から出土した柱材の調査においても全点がクリであり、今回の結果とも調和的である。さらに、本遺跡におけるこれまでの調査では、柱材以外の用途ではクリは全く確認されていないことから、クリが柱材として選択的に利用されていた可能性がある。

R575 はヒョウタン類の果実の破片であった。ヒョウタン類は、栽培植物として大陸より持ち込まれた種類と考えられている。果実は容器などに利用可能であり、本遺跡でも利用されていたと考えられる。本試料は、周辺で栽培されていたものが加工された、または容器などの加工品が搬入されたなどが考えられるが、本遺跡周辺における栽培の有無については今後の検討課題として残される。

引用文献

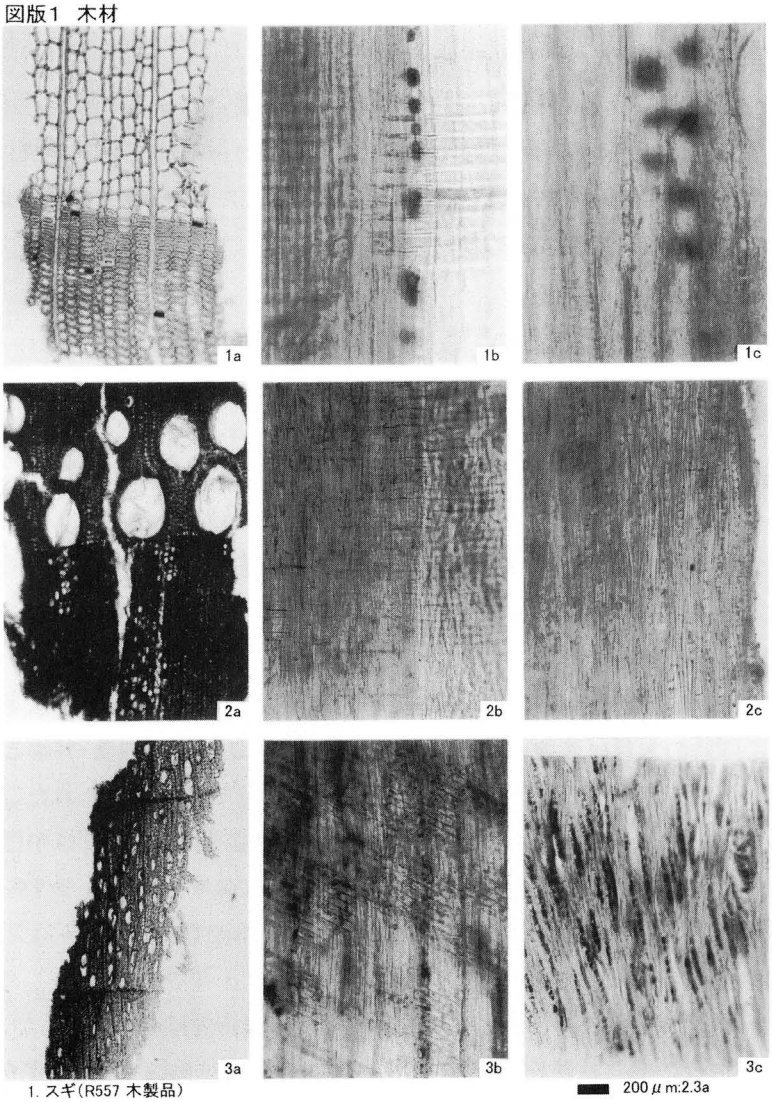
藤下　典之,1984,出土遺体よりみたウリ科植物の種類と変遷とその利用法.古文化財の自然科学的研究,古文化財編集委員会編,同朋舎,638-654.

石川　茂雄,1994,原色日本植物種子写真図鑑.石川茂雄図鑑刊行委員会,328p.

中山　至大・井之口　希秀・南谷　忠志,2000,日本植物種子図鑑.東北大学出版会,642p.

パリノ・サーヴェイ株式会社,1991,布目沢東遺跡　自然科学分析報告.「大門町埋蔵文化財調査報告第 7 集　大門町企業団地内遺跡発掘調査報告(1)　布目沢東遺跡・布目沢北遺跡」,81-118,富山県埋蔵文化財センター・大門町教育委員会.

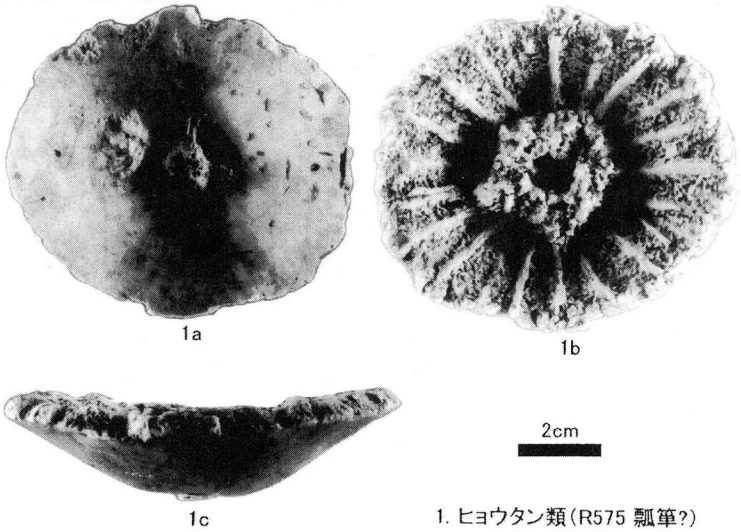
図版1　木材



1. スギ(R557 木製品)
2. クリ(R654 SB07 No.1)
3. トチノキ(井戸枠内 漆椀)
a:木口, b:柾目, c:板目

200 μm:2.3a
200 μm:1a,2.3b,c
100 μm:1b,c

図版2　種実遺体



1. ヒョウタン類(R575 瓢箪?)

間尽遺跡から出土した木材の樹種

パリノ・サーヴェイ株式会社

はじめに

間尽遺跡では、古代～中世の溝や掘立柱建物跡等の遺構が検出されている。これらの遺構からは、柱材等の構築材の一部や木製品等の木質遺物や種実遺体等の植物遺体が出土している。

本報告では、各遺構から出土した木製品の樹種同定を行い、木材利用に関する資料を得る。

1.試料

試料は、各遺構から出土した木製品 52 点である。このうち、R602 は木釘の付いた板状の製品であるため、本体と木釘の 2 点について樹種同定を行う。したがって、合計点数は 53 点である。各試料の詳細は、樹種同定結果と共に表 1 に記した。

2.分析方法

剃刀の刃を用いて木口（横断面）・柾目（放射断面）・板目（接線断面）の3断面の徒手切片を作製し、ガム・クロラール（抱水クロラール，アラビアゴム粉末，グリセリン，蒸留水の混合液）で封入し、プレパラートを作製する。作製したプレパラートは、生物顕微鏡で木材組織を観察し、その特徴から種類を同定する。

3.結果

樹種同定結果を表 1 に示す。木製品は、針葉樹 3 種類（スギ・ヒノキ・ヒノキ属）と、広葉樹 8 種類（アサダ・ブナ属・ケヤキ・クリ・イスノキ・サクラ属・ウルシ・アワブキ属）に同定された。各種類の解剖学的特徴等を記す。

・スギ（*Cryptomeria japonica* (L. f.) D. Don）　スギ科スギ属

軸方向組織は、仮道管と樹脂細胞で構成され、仮道管の早材部から晩材部への移行はやや急で、晩材部の幅は広い。樹脂細胞は晩材部にのみ認められる。放射組織は柔細胞のみで構成され、柔細胞の壁は滑らか。分野壁孔はスギ型で、1 分野に 2-4 個。放射組織は単列、1-15 細胞高。

・ヒノキ（*Chamaecyparis obtusa* (Sieb. et Zucc.)Endlcher）　ヒノキ科ヒノキ属

軸方向組織は、仮道管と樹脂細胞で構成され、仮道管の早材部から晩材部への移行は緩やか～やや急で、晩材部の幅は狭い。樹脂細胞は晩材部付近に認められるが、顕著ではない。放射組織は柔細胞のみで構成され、柔細胞壁は滑らか。分野壁孔はヒノキ型～トウヒ型で、1 分野に 1-3 個。放射組織は単列、1-15 細胞高。

・ヒノキ属（*Chamaecyparis*）　ヒノキ科

軸方向組織は仮道管と樹脂細胞で構成され、仮道管の早材部から晩材部への移行は緩やか～やや急で、晩材部の幅は狭い。樹脂細胞は晩材部付近に認められる。放射組織は柔細胞のみで構成され、柔細胞壁は滑らか。分野壁孔はヒノキ型～スギ型と考えられるが、保存が悪い。放射組織は単列、1-15 細胞高。

上記のヒノキまたは同属のサワラと考えられるが、分野壁孔の観察が十分ではないため、種の同定には至らず、ヒノキ属とした。

・アサダ（*Ostrya japonica* Sarg.）　カバノキ科アサダ属

散孔材で、管孔は単独または放射方向に 2-4 個が複合して散在し、年輪界付近で径を漸減させる。道管は単穿孔を有し、壁孔は交互状に配列、内壁にはらせん肥厚が認められる。放射組織は同性、1-3 細胞幅、1-30 細胞高。

表1.樹種同定結果

R番号	種別	器種	時期	樹種	備考
266	木製品	漆器椀(漆絵描画)		ブナ属	
274	木製品	曲物		スギ	
278	木製品	曲物		ヒノキ属	
279	木製品	曲物		ヒノキ	
280	木製品			ケヤキ	
397	木製品	栓状		アサダ	
531	木製品	漆の木		ウルシ	漆掻き跡
545	木製品			スギ	
545-2	木製品			スギ	
555	木製品	井戸枠		スギ	
558	木製品	板状(細)		スギ	
559	木製品			スギ	
561	木製品	漆器椀		スギ	
570	木製品	木釘付板状(細)		スギ	
571	木製品	木釘付板状(細)		スギ	
572	木製品			スギ	
577	木製品			スギ	
588	木製品	板状(細)		スギ	
591	木製品	板状(細)		スギ	
592	木製品	曲物		スギ	
599	木製品	下駄(差歯？)		スギ	
601	木製品	木釘付板状(細)		スギ	
602	木製品	木釘付板状(細)		スギ	
		木釘		スギ	
605	木製品	曲物(蓋or底)		スギ	
606	木製品	板状		スギ	
608	木製品	板状(細)		スギ	
609	木製品	曲物(蓋or底)		スギ	
613	木製品	櫛		イスノキ	
615	木製品			アワブキ属	
616	木製品	杭状？		サクラ属	
641	木製品	柱根	古代	クリ	
642	木製品	柱根	古代	クリ	
643	木製品	柱根	古代	クリ	
644	木製品	柱根	古代	クリ	
645	木製品	柱根	古代	クリ	
646	木製品	柱根	古代	クリ	
647	木製品	柱根	古代	クリ	
653	木製品	板状		スギ	
654	木製品	漆器椀		ケヤキ	
657	木製品	柱根	古代	クリ	
664	木製品			スギ	
668	木製品	柱材		スギ	
669	木製品			スギ	
677	木製品	板状(細)		スギ	
679	木製品	板状(細)		スギ	
680	木製品	漆器椀		ケヤキ	
686	木製品	柱根	古代	クリ	
687	木製品			スギ	
688	木製品	板状		スギ	
691	木製品	板状		スギ	
693	木製品	板状		スギ	
697	木製品	板状		スギ	

・ブナ属(*Fagus*)　　ブナ科

散孔材で、管孔は単独または放射方向に 2-3 個が複合して散在し、年輪界付近で径を減ずる。道管の分布密度は高い。道管は単穿孔および階段穿孔を有し、壁孔は対列状～階段状に配列する。放射組織は同性～異性、単列、数細胞高のものから複合放射組織まである。

・クリ（*Castanea crenata* Sieb. et Zucc.）　ブナ科クリ属

環孔材で、孔圏部は 1-3 列、孔圏外で急激～やや緩やかに管径を減じたのち、漸減しながら火炎状に配列する。道管は単穿孔を有し、壁孔は交互状に配列する。放射組織は同性、単列、1-15 細胞高。

・ケヤキ（*Zelkova serrata* (Thunb.) Makino）　ニレ科ケヤキ属

環孔材で、孔圏部は 1-2 列、孔圏外で急激に管径を減じたのち漸減、塊状に複合し接線・斜方向の紋様をなす。道管は単穿孔を有し、壁孔は交互状に配列、小道管内壁にはらせん肥厚が認められる。放射組織は異性、1-6 細胞幅、1-50 細胞高。放射組織の上下縁辺部を中心に結晶細胞が認められる。

・イスノキ（*Distylium racemosum* Sieb. et Zucc.）　マンサク科イスノキ属

散孔材で、道管はほとんど単独で散在する。道管の分布密度は比較的高い。道管は階段穿孔を有するが、段数は5前後で少ない。放射組織は異性、1-3 細胞幅、1-20 細胞高。柔組織は、独立帯状または短接線状で、放射方向にほぼ等間隔に配列する。

・サクラ属（*Prunus*）　バラ科

散孔材で、管壁厚は中庸、横断面では角張った楕円形、単独または 2-8 個が複合して、晩材部へ向かって管径を漸減させながら散在する。道管は単穿孔を有し、壁孔は交互状に配列、内壁にはらせん肥厚が認められる。放射組織は異性、1-3 細胞幅、1-30 細胞高。

道管配列がやや環孔材的で、放射組織が比較的大型となることから、サクラ属の中でも栽培種のウメ等の可能性がある。しかし、現生標本と完全には一致しないため、本報告ではサクラ属とする。

・ウルシ（*Rhus verniciflua* Stockes）　ウルシ科ウルシ属

環孔材で、孔圏部は 1-5 列、孔圏外への移行は緩やかで、小道管は年輪界に向かって漸減しながら単独または 2-4 個が放射方向に複合して配列する。道管は単穿孔を有し、壁孔は交互状に配列する。放射組織は異性、1-2 細胞幅、1～20 細胞高で、時に上下に連結する。

・アワブキ属（*Meliosma*）　アワブキ科

散孔材で、管孔は単独または 2-4 個が放射方向に複合して散在する。道管は単穿孔および階段穿孔を有し、階段穿孔の段数は5前後で少ない。壁孔は交互状に配列する。放射組織は大型の異性、1-3 細胞幅、1-50 細胞高。

4.考察

樹種同定を行った木製品は、古代の掘立柱建物跡の木柱や板材などの構築材、漆器椀、曲物、櫛等があるが、用途の詳細が不明の試料もある。各器種別の種類構成を表 2 に示す。

古代の木柱は、全てクリであった。他にクリが確認されていないことを考慮すれば、クリ材の選択的な利用が推定される。クリ材は、強度や耐朽性に優れていることから、材質を考慮した木材利用と考えられる。

一方、その他の木製品では、井戸枠、板状、曲物、下駄等にスギ材が多用されている。スギ材が利用されている製品の多くは、板状あるいは角材状等の加工を施す点で共通点がある。スギ材は、木理が通直で割裂性が高く、板材や角材等への加工が容易である。このようなスギ材の加工性が利用された背景に考えられる。また、スギは水湿に富んだ土地を好む種類であり、富山県内では現在でも入善町にスギの低地林（杉沢の沢杉）が残っている。このようなスギ林は、花粉分析の結果等から、縄文時代以降、低地に広く生育していたことが推定される（パリノ・サーヴェイ株式会社,1991）。スギ材の入手が容易な環境も、多用されている背景に考えられる。

一方、漆器椀は 4 点中 3 点が広葉樹でブナ属とケヤキが確認された。ブナ属とケヤキは、漆器木地とし

ては最も一般的な種類であり、これまでにも多くの報告例が知られている（島地・伊東,1988）。これらの樹種は、現在でも漆器木地としてよく利用される種類でもある（橋本,1979）。民俗事例では、木材をいくつかに分類しており、ブナ属は散孔材のブナ・トチノキ系、ケヤキは環孔材のケヤキ系の木材に分類される。ブナ・トチノキ系の木材の特徴は、加工は容易であるが、乾燥が難しく変形しやすい。しかし、入手量が多いため、使用量も多いとされる。一方、ケヤキ系の木材は、重硬であるが靭性があり、薄手物に適するとされる。このような材質の違いは、漆器の形状に影響を与える他、製作に要する時間や漆器のランクにも関わっている可能性がある。しかし、現時点では樹種と器形やランクとの関係については不明な点が多い。漆器では、漆塗りの技法もランクによって異なることから、今後漆塗膜断面の観察も行い、総合的に検討したい。

表2.器種別種類構成

時期・器種 ＼ 樹種			スギ	ヒノキ	ヒノキ属	アサダ	ブナ属	クリ	ケヤキ	イスノキ	サクラ属	ウルシ	アワブキ属	合計
古代	柱根							9						9
	井戸枠		1											1
	漆器椀		1				1		2					4
	曲物	蓋or底	2											2
		曲物	2	1	1									4
	栓状					1								1
	櫛									1				1
	下駄（差歯？）		1											1
	木釘付板状（細）	本体	4											4
		木釘	1											1
	板状		6											6
	板状（細）		6											6
	杭状？										1			1
	柱材		1											1
	漆の木											1		1
	用途不明		8						1				1	10
合　計			33	1	1	1	1	9	3	1	1	1	1	53

櫛は、イスノキであった。同様の事例は、これまでにも多く報告されており、北陸地方でも新潟県曽根遺跡で出土例がある（川村,1983;島地・伊東,1988）。民俗事例では、ツゲに次ぐ良材とされており、硬く緻密な材質が櫛の細かい加工に適していることから利用されたと考えられる。なお、イスノキは、暖温帯常緑広葉樹林を構成する常緑広葉樹で九州を中心に分布しており、現在の富山県には生育していない。そのため、イスノキが生育している西日本(主に九州)から櫛あるいは木材が搬入された可能性がある。

漆の木には、漆の樹液を掻き取った痕跡が残されていた。日本に生育するウルシ属には、いくつかの種類があるが、商業的にまかなえる量の樹液を採取できるのはウルシのみである。今回の樹種もウルシであり、本遺跡でウルシ樹液の採取が行われ、採取後の木材を何らかの用途に利用したことが推定される。ウルシは、中国原産で日本には古い時期に渡来した可能性が指摘されているが、実際に渡来なのか自生していたのか、また渡来したとすればいつ頃なのか等の詳細は明らかにされていない。しかし、各地の縄文時代の遺跡から漆塗り製品が出土しており、少なくとも縄文時代にはウルシが存在しており、その樹液を塗料として利用していたことが推定される。ウルシの利用については、今後さらに調査事例を蓄積していくことにより、明らかにしたい。

引用文献

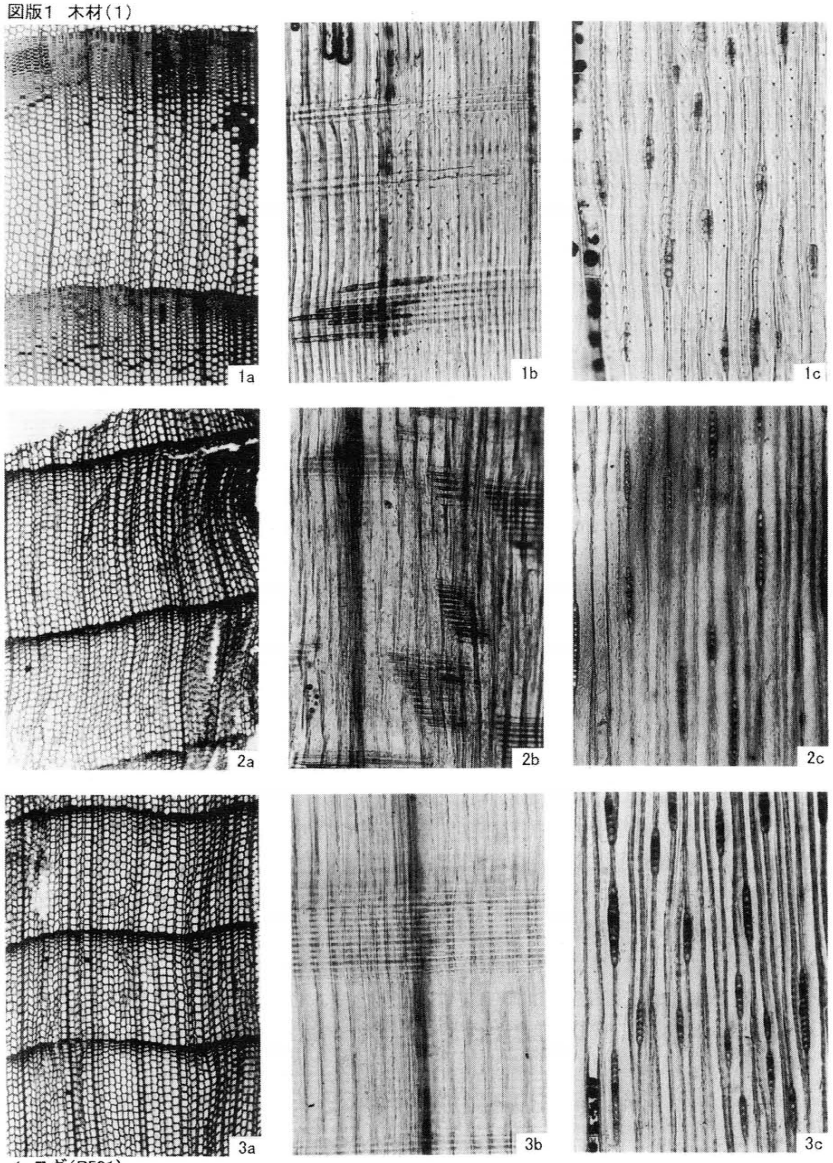
橋本　鉄男,1979,ろくろ（ものと人間の文化史31）.法政大学出版局,444p.

川村　恵洋,1983,曽根遺跡出土木材の識別.新大演報,16, 75-82.

パリノ・サーヴェイ株式会社,1991,布目沢東遺跡 自然科学分析報告.「大門町埋蔵文化財調査報告第7集 大門町企業団地内遺跡発掘調査報告（1） 布目沢東遺跡・布目沢北遺跡」,81-118,富山県埋蔵文化財センター・大門町教育委員会.

島地　謙・伊東　隆夫（編）,1988,日本の遺跡出土木製品総覧.雄山閣,296p.

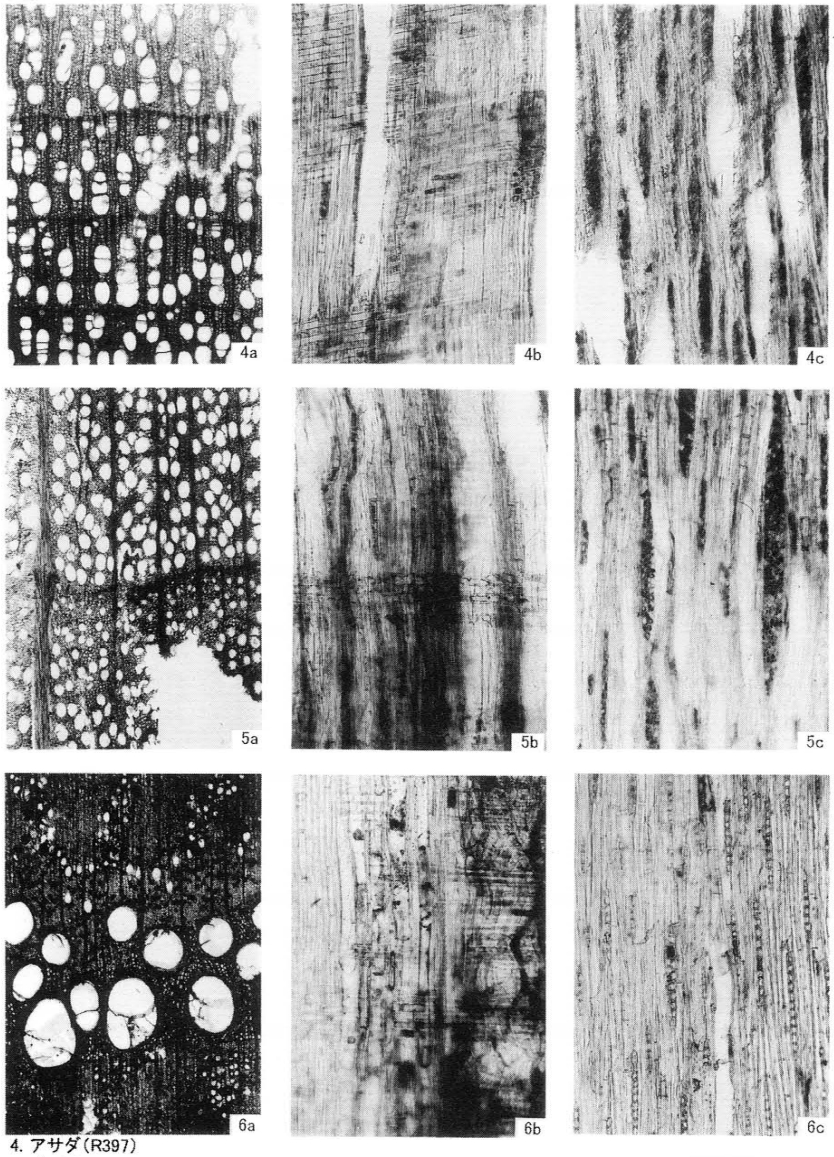
図版1　木材(1)



1. スギ(R591)
2. ヒノキ(R279)
3. ヒノキ属(R270)
a:木口, b:柾目, c:板目

200 μ m:a
200 μ m:b,c

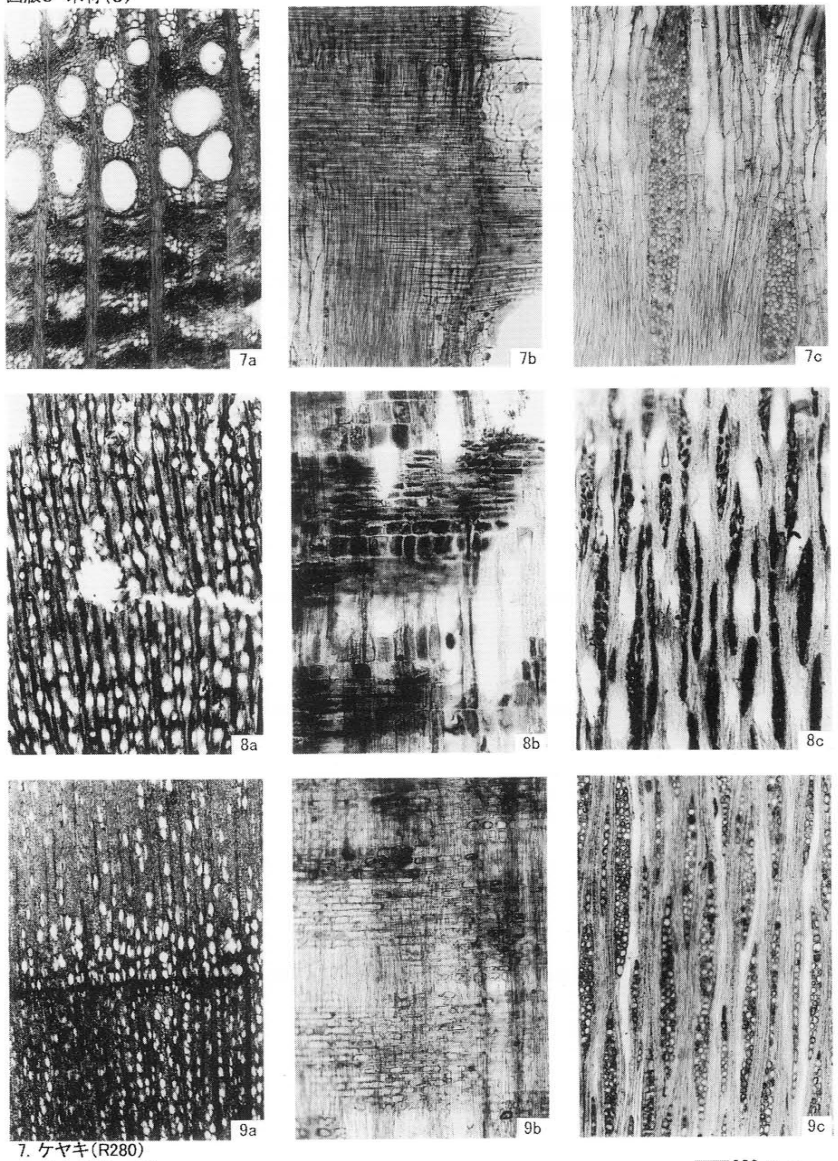
図版2　木材(2)



4. アサダ(R397)
5. ブナ属(R216)
6. クリ(R686)
a:木口, b:柾目, c:板目

200 μ m:a
200 μ m:b,c

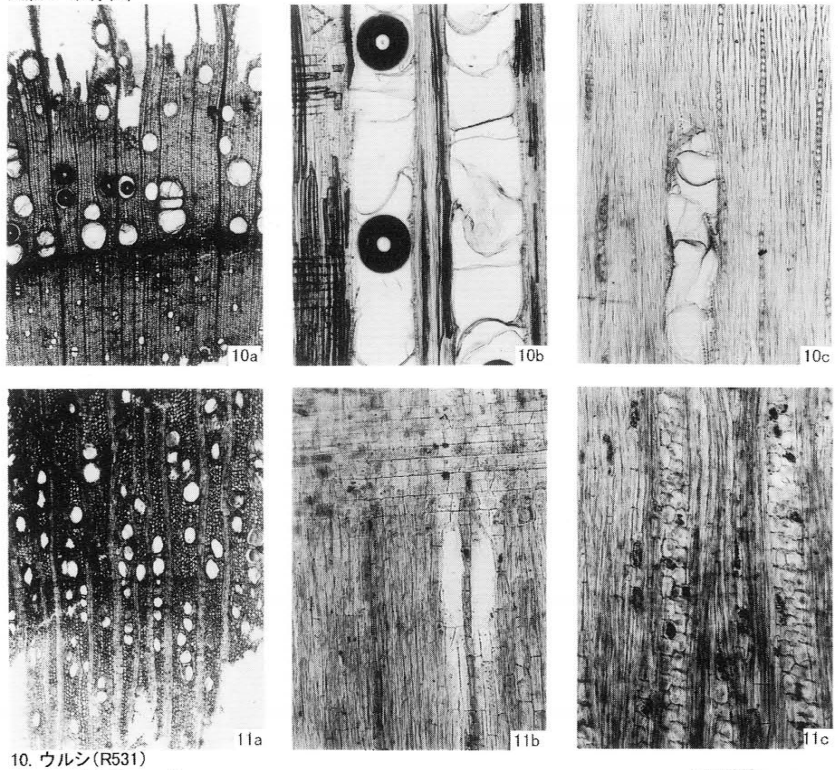
図版3　木材(3)



7. ケヤキ(R280)
8. イスノキ(R613)
9. サクラ属(R616)
a:木口, b:柾目, c:板目

200 μ m:a
200 μ m:b,c

図版4　木材(4)



10. ウルシ(R531)
11. アワブキ属(R615)
a:木口, b:柾目, c:板目

200 μ m:a
200 μ m:b,c

間尽遺跡の種実遺体分析・昆虫同定

パリノ・サーヴェイ株式会社

はじめに

高岡市の間尽遺跡では、古代～中世の溝や掘立柱建物跡等の遺構およびそれに伴う多くの遺物が検出されている。今回の自然科学分析調査では、古代～中世と考えられる溝(SD59)などから検出された種実遺体・昆虫遺体の同定を行い、当時の古環境に関する情報を得る。

1.試料

種実同定用試料は、SD59 R655、SD59 R656、SD59 R684、SB07 R652(No.3 柱穴内)、SR01 R417 の 5 点である。昆虫同定用試料は、SD59 R546、SD59 R656、SD59 R685 の3点である。1 点中には数個体～数十個体の昆虫が入っている。昆虫遺体については、便宜上各個体ごとに試料番号 1～100 を付し、分析調査を進めた。

2.分析方法

(1)種実同定

種実遺体の形態的特徴を所有の現生標本および原色日本植物種子写真図鑑(石川, 1994)、日本植物種子図鑑(中山ほか, 2000)等と比較し、種類を同定・計数した。同定後の大型植物遺体等は、種類毎にビンに入れ、70%程度のエタノール溶液による液浸保存処理を施す。

(2)昆虫同定

昆虫遺体は、泥などを洗い流したあと、1 片づつ瓶にいれ、液浸処理を施す。それぞれについて、形態的特徴をもとに種類を同定する。同定に関しては、東京農業大学農学部昆虫資源学研究室の松本 浩一氏の協力を得た。

3.結果

(1)種実同定

種実遺体結果を表 1 に示す。種実遺体の遺存状態は比較的良好である。木本2種類(広葉樹のクリ、モモ)、草本 10 種類(カナムグラ、ナス科、メロン類)の種実が同定された。以下に同定された大型植物遺体の形態的特徴などを、木本、草本、不明植物の順に記す。

表1. 種実同定結果

試料名		種類名	木本			草本		
			クリ	モモ		カナムグラ	ナス科	メロン類
		部位	果実	核		種子	種子	種子
		状態	破片	完形	破片			
SD59	R655		1	–	–	–	1	1
SD59	R656		–	–	–	7	–	8
SD59	R684		–	–	–	4	–	–
SB07	R652		–	–	1	–	–	–
SR01	R417		–	2	4	–	–	–

＜木本＞

・クリ(*Castanea crenata* Sieb. et Zucc.)ブナ科クリ属

果実破片が同定された。灰褐色。完形ならば三角状広卵形、一側面は偏平で反対面はわずかに丸みがある。大きな破片で 20mm 程度。果皮表面は平滑で、ごく浅く微細な縦筋がある。内面には内果皮(いわゆる渋皮)がある。着点は灰褐色で基部の全面を占め、ざらつく。基部に着点の一部が残る点を同定根拠とした。

・モモ(*Prunus parsica* Batsch) バラ科サクラ属

核(内果皮)の完形、破片が同定された。茶褐色、広楕円形でやや偏平。先端部はやや尖る。基部は切形で中央部に湾入した臍がある。長さ 25mm、幅 20mm、厚さ 15mm 程度。一方の側面に縫合線が発達し、縫合線

に沿って半分に割れている個体もみられる(SB07　R652)。また、縫合線上に齧歯類(ネズミなど)によると考えられる食害痕が認められるものが認められる(SR01　R417)。内果皮は厚く硬く、表面は縦に流れる不規則な線状の深い窪みがあり、全体として粗いしわ状に見える。表面が磨滅した個体もみられる(SR01　R417)。

＜草本＞

・カナムグラ(*Humulus japonicus* Sieb. et Zucc.)　クワ科カラハナソウ属

種子が同定された。果皮が付着する個体もみられる。灰～黒褐色で側面観は円形、上面観は両凸レンズ形。径 4mm、厚さ 1mm 程度。頂部はやや尖り、縦方向に一周する稜と、基部には淡黄褐色でハート形の臍点がある。種皮は薄く、表面はざらつく。

・ナス科(Solanaceae)

種子が同定された。淡褐色、歪な腎臓形で偏平。径 2.5mm 程度。種皮は薄く柔らかい。側面のくびれた部分に臍があり、表面は臍を中心として同心円状に星型状網目模様が発達する。網目模様は微細で網目を構成する壁の幅は太くしっかりしている。

・メロン類(*Cucumis melo* L.)　ウリ科キュウリ属

種子が同定された。淡灰褐色、狭倒皮針形で偏平。長さ 6～10mm、幅 3～4mm 程度。基部に倒「ハ」の字形の凹みがある。表面は比較的平滑で、縦長の細胞が密に配列する。藤下(1984)の基準によると、本遺跡出土のメロン類には、マクワ・シロウリ型の中粒種子(長さ 6.1～8.0mm)や、大粒のモモルディカメロン型(長さ 8.1mm 以上)などの混在がみられる。

(2)昆虫同定

結果を表 2 に示す。検出された種類のうち、種や属まで同定できたものは次の種類である。

ガムシ科ではヒメガムシ(*Stenolophus rufipes* (Fabricius))が検出される。コガネムシ科では、エンマコガネ属の一種(*Onthophagus* sp.)、クロマルエンマコガネ(*Onthophagus ater* Waterhouse)、コブマルエンマコガネ(*Onthophagus atripennis* Waterhouse)、マメコガネ(*Popillia japonica* Newmann)、ヒメコガネ(*Anomala rufocuprea* Motschulsky)、ヒメサクラコガネ(*Anomala geniculata* Motschulsky)、コアオハナムグリ(*Oxycetonia jucunda* (Faldermann))、ハナムグリ(*Eucetonia pilifera* (Motschulsky))、ハナムグリ属の一種(*Protaetia* sp.)が検出され、多くの種類、個数が得られている。ゴミムシダマシ科では、キマワリ(*Plesiophthalmus nigrocyaneus* Motschulsky)が検出される。ハムシ科ではヨモギハムシ(*Chrysolina aurichalcea*)が検出される。アリ科ではクロオオアリ(*Camponotus japonicus* Mayr)が検出されている。

表2. 昆虫同定結果

種類	主な出土部位	R546	R656	R685
ヒメガムシ *Stenolophus rufipes* (Fabricius)	上翅	-	2	-
エンマコガネ属の一種 *Onthophagus* sp.	腹部腹板　後脚	-	2	3
クロマルエンマコガネ *Onthophagus ater* Waterhouse	上翅　頭部　後脚	-	5	2
コブマルエンマコガネ *Onthophagus atripennis* Waterhouse	前胸・前脚	-	-	1
マメコガネ *Popillia japonica* Newmann	上翅	-	1	-
ヒメコガネ *Anomala rufocuprea* Motschulsky	上翅　後脚　小盾板	2	18	3
ヒメサクラコガネ *Anomala geniculata* Motschulsky	前胸背板　上翅	-	6	1
コアオハナムグリ *Oxycetonia jucunda* (Faldermann)	上翅	-	2	-
ハナムグリ *Eucetonia pilifera* (Motschulsky)	上翅　前翅	-	2	-
ハナムグリ属の一種 *Protaetia* sp.	上翅	-	1	-
コガネムシ科 Scarabaeidae	後翅　上翅　前胸	1	17	3
キマワリ *Plesiophthalmus nigrocyaneus* Motschulsky	上翅	-	1	-
ヨモギハムシ Chrysolina aurichalcea	上翅	-	1	-
クロオオアリ *Camponotus japonicus* Mayr	頭部	-	1	-
甲虫目 Coleoptera	腹部腹板　前胸腹板	-	6	-
不明		1	11	6

4.考察

検出された種実遺体には、有用植物が認められる。モモ、メロン類は、栽培のために古くから日本に持ち込まれた渡来種である(南木, 1991)。モモは、観賞用のほか、果実や核の中にある仁(種子)などが食用、薬用等に広く利用される。メロン類は果実が食用に利用可能である。クリは付近に自生していたものに由来すると考えられるが、子葉が生食・長期保存が可能で収量も多いことから、古くから里山で保護されてきた種類である。カナムグラやナス科の一部は、人里近くに開けた草地を形成する、いわゆる人里植物に属する種類で、流路周辺に生育していたものとみられる。

昆虫化石をみると、水棲昆虫のヒメガムシは沼沢地や沼地などに生育する種類である。遺跡の立地環境が低地で、本試料が溝から検出されていることから、周辺の水湿地や溝内に生育していたものに由来すると思われる。その他、木や草の葉を食べるマメコガネ・ヒメコガネ・ヨモギハムシ、動物の糞や腐敗物に集まるクロマルエンマコガネやコブマルエンマコガネ、花に集まり花粉などを食べるハナムグリやコアオハナムグリ、朽木などに集まるキマワリなどが検出される。これらは雑木林やその周辺の草地などに普通にみられる種類である。このことから、遺跡周辺には、明るい林地や草地、その境界付近に発達する低木等からなる林縁部が存在し、これらの昆虫はこういった場所に生育していたものと思われる。

引用文献

石川茂雄(1994)原色日本植物種子写真図鑑, 328p., 石川茂雄図鑑刊行委員会.

南木睦彦(1991)栽培植物.「古墳時代の研究　4　生産と流通Ⅰ」, 石野博信・岩崎卓也・河上邦彦・白石太一郎編, p.165-174, 雄山閣.

中山至大・井之口希秀・南谷忠志(2000)日本植物種子図鑑, 642p., 東北大学出版会.

図版1　種実遺体

1．クリ 果実(SD59 R655)
2．クリ 果実(SD59 R655)
3．モモ 核(SR01 R417)
4．モモ 核(SR01 R417)
5．モモ 核(SR01 R417)
6．カナムグラ 果実(SD59 R656)
7．カナムグラ 種子(SD59 R656)
8．ナス科 種子(SD59 R655)
9．メロン類 種子(SD59 R656)
10．メロン類 種子(SD59 R656)

年代測定結果報告書

1）年代値の算出には、Libbyの半減期5568年を使用しています。
2）BP年代値は、1950年からさかのぼること何年前かを表しています。
3）付記した誤差は、標準偏差（1σ）に相当する年代で、次のように算出しています。
複数回（通常は4回）の測定値についてχ^2検定を行い、測定値のばらつきが小さい場合には測定値の統計誤差から求めた値を用い、ばらつきが大きい場合には不偏分散の平方根（標準偏差）と統計誤差から求めた値を比較して大きい方を誤差としています。
4）$\delta^{13}C$の値は、通常は質量分析計を用いて測定しますが、AMS測定の場合に同時に測定される$\delta^{13}C$の値を用いることもあります。
$\delta^{13}C$補正をしない場合の同位体比および年代値も参考に掲載しておきます。

同位体比は、いずれも基準値からのずれを千分偏差（‰；パーミル）で表したものです。

$$\delta^{14}C = [(^{14}A_S - {}^{14}A_R) / {}^{14}A_R] \times 1000 \quad (1)$$
$$\delta^{13}C = [(^{13}A_S - {}^{13}A_{PDB}) / {}^{13}A_{PDB}] \times 1000 \quad (2)$$

ここで、　$^{14}A_S$：試料炭素の^{14}C濃度：$(^{14}C/^{12}C)_S$または$(^{14}C/^{13}C)_S$
$^{14}A_R$：標準現代炭素の^{14}C濃度：$(^{14}C/^{12}C)_R$または$(^{14}C/^{13}C)_R$

$\delta^{13}C$は、質量分析計を用いて試料炭素の^{13}C濃度（$^{13}A_S = {}^{13}C/^{12}C$）を測定し、PDB（白亜紀のベレムナイト（矢石）類の化石）の値を基準として、それからのずれを計算します。
但し、IAAでは加速器により測定中に同時に$^{13}C/^{12}C$も測定していますので、標準試料の測定値との比較から算出した$\delta^{13}C$を用いることもあります。この場合には表中に〔加速器〕と注記します。
また、$\Delta^{14}C$は、試料炭素が$\delta^{13}C = -25.0$（‰）であるとしたときの^{14}C濃度（$^{14}A_N$）に換算した上で計算した値です。（1）式の^{14}C濃度を、$\delta^{13}C$の測定値をもとに次式のように換算します。

$$^{14}A_N = {}^{14}A_S \times (0.975/(1 + \delta^{13}C/1000))^2$$ （$^{14}A_S$として$^{14}C/^{12}C$を使用するとき）
または
$$= {}^{14}A_S \times (0.975/(1 + \delta^{13}C/1000))$$ （$^{14}A_S$として$^{14}C/^{13}C$を使用するとき）

$$\Delta^{14}C = [(^{14}A_N - {}^{14}A_R) / {}^{14}A_R] \times 1000 \quad (‰)$$

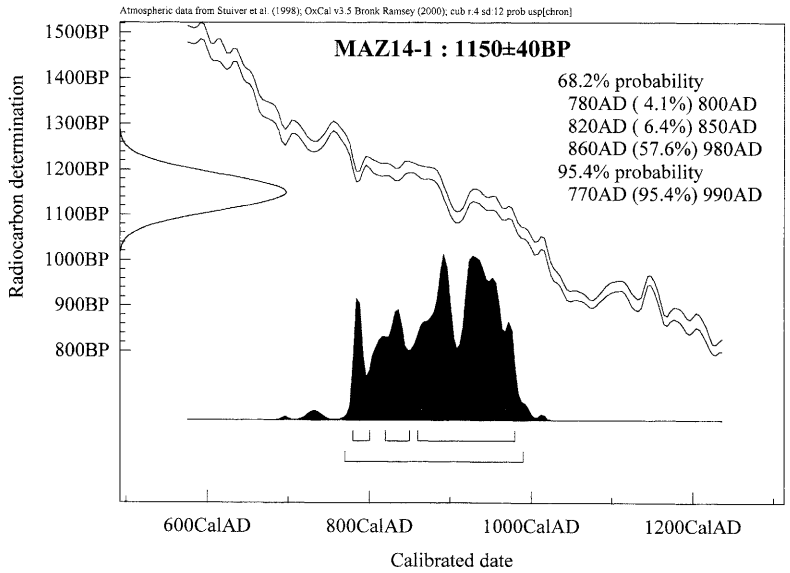
また、^{14}C濃度の現代炭素に対する割合のもう一つの表記として、pMC（percent Modern Carbon)がよく使われており、$\Delta^{14}C$との関係は次のようになります。

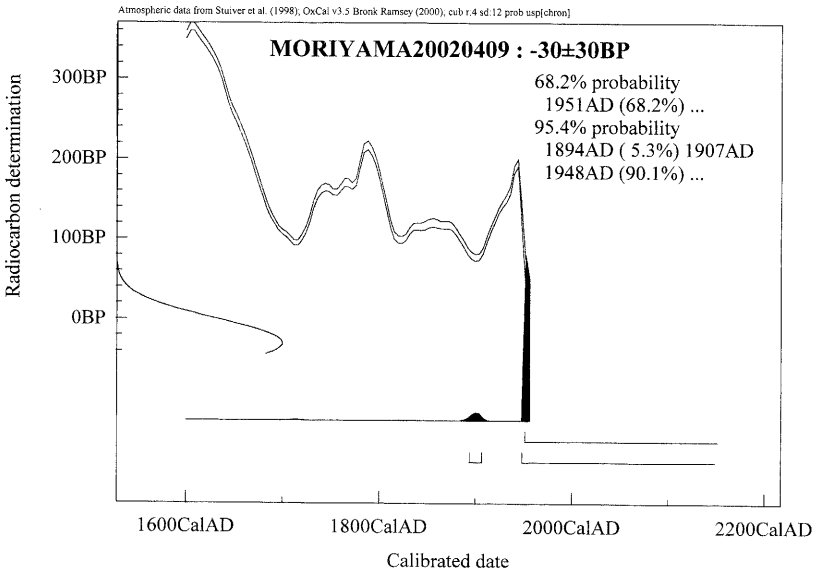
$$\Delta^{14}C = (pMC/100 - 1) \times 1000 \quad (‰)$$
$$pMC = \Delta^{14}C/10 + 100 \quad (\%)$$

国際的な取り決めにより、この$\Delta^{14}C$あるいはpMCにより、放射性炭素年代(Conventional Radiocarbon Age；yrBP）が次のように計算されます。

$$T = -8033 \times \ln[(\Delta^{14}C/1000) + 1]$$
$$= -8033 \times \ln(pMC/100)$$

IAA Code No.	試料	BP 年代および炭素の同位体比
IAAA-11551	試料採取場所 ： 高岡市手洗野字平田 試料形態 ： 漆 試料名（番号） ： MAZ14-1	Libby Age（yrBP） ： 1,150 ± 40 δ^{13}C（‰）〔加速器〕 ＝ − 31.03 ± 1.18 Δ^{14}C（‰） ＝ − 133.0 ± 4 pMC（%） ＝ 86.70 ± 0.4
	（参考） δ^{13}C の補正無し	δ^{14}C（‰） ＝ − 138.4 ± 3.8 pMC（%） ＝ 86.16 ± 0.38 Age（yrBP） ： 1,200 ± 40
IAAA-11552	試料採取場所 ： 高岡市二上 大字下八ケ字千畳敷 試料形態 ： 木炭 試料名（番号） ： MORIYAMA20020409	LibbyAge（yrBP） ： − 30 ± 30 δ^{13}C（‰）〔加速器〕 ＝ − 29.04 ± 1.09 Δ^{14}C（‰） ＝ 3.3 ± 3.1 pMC（%） ＝ 100.33 ± 0.31
	（参考） δ^{13}C の補正無し	δ^{14}C（‰） ＝ − 0.9 ± 2.9 pMC（%） ＝ 99.91 ± 0.29 Age（yrBP） ： 10 ± 20





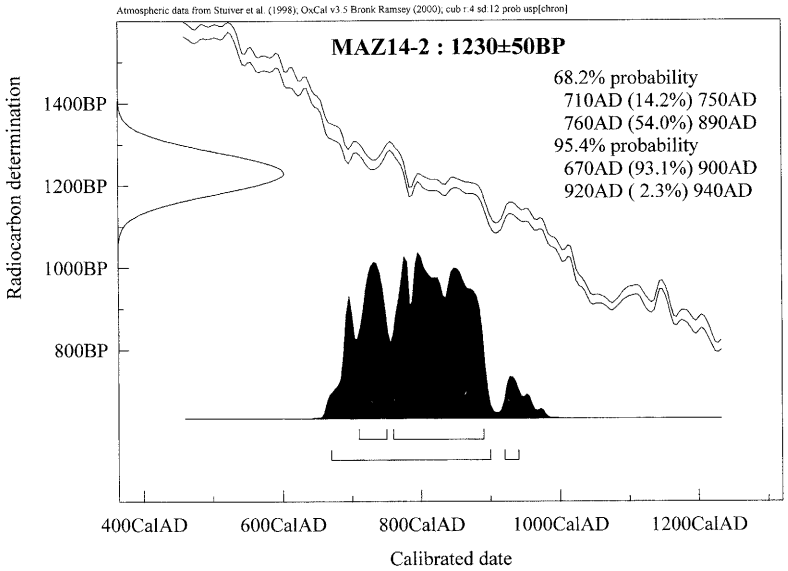
IAA Code No.	試　　料	BP 年代および炭素の同位体比
IAAA-30311	試料採取場所 ：高岡市手洗野字平田 試 料 形 態 ：漆 試料名(番号) ：MAZ14-2	Libby Age(yrBP) : 1,230 ± 50 δ ^{13}C(‰)、(加速器) = -22.54 ± 1.52 Δ ^{14}C(‰) = -142.0 ± 5.0 pMC(%) = 85.80 ± 0.50
	(参考)　δ ^{13}C の補正無し	δ ^{14}C(‰) = -137.7 ± 4.3 pMC(%) = 86.23 ± 0.43 Age (yrBP) : 1,190 ± 40
IAAA-30312	試料採取場所 ：高岡市手洗野字平田 試 料 形 態 ：木炭 試料名(番号) ：MAZ14-3	Libby Age(yrBP) : 410 ± 50 δ ^{13}C(‰)、(加速器) = -24.67 ± 1.48 Δ ^{14}C(‰) = -50.0 ± 5.7 pMC(%) = 95.00 ± 0.57
	(参考)　δ ^{13}C の補正無し	δ ^{14}C(‰) = -49.4 ± 5.0 pMC(%) = 95.06 ± 0.50 Age (yrBP) : 410 ± 40
IAAA-30313	試料採取場所 ：高岡市手洗野字平田 試 料 形 態 ：木炭 試料名(番号) ：MAZ14-4	Libby Age(yrBP) : 1,720 ± 50 δ ^{13}C(‰)、(加速器) = -25.25 ± 1.77 Δ ^{14}C(‰) = -192.8 ± 5.2 pMC(%) = 80.72 ± 0.52
	(参考)　δ ^{13}C の補正無し	δ ^{14}C(‰) = -193.2 ± 4.3 pMC(%) = 80.68 ± 0.43 Age (yrBP) : 1,720 ± 40
IAAA-30314	試料採取場所 ：高岡市手洗野字平田 試 料 形 態 ：漆 試料名(番号) ：MAZ14-5	Libby Age(yrBP) : 1,240 ± 50 δ ^{13}C(‰)、(加速器) = -22.79 ± 1.49 Δ ^{14}C(‰) = -143.0 ± 5.2 pMC(%) = 85.70 ± 0.52
	(参考)　δ ^{13}C の補正無し	δ ^{14}C(‰) = -139.1 ± 4.5 pMC(%) = 86.09 ± 0.45 Age (yrBP) : 1,200 ± 40
IAAA-30315	試料採取場所 ：高岡市手洗野字平田 試 料 形 態 ：木炭 試料名(番号) ：MAZ14-6	Libby Age(yrBP) : 1,690 ± 50 δ ^{13}C(‰)、(加速器) = -13.84 ± 1.47 Δ ^{14}C(‰) = -189.9 ± 4.7 pMC(%) = 81.01 ± 0.47
	(参考)　δ ^{13}C の補正無し	δ ^{14}C(‰) = -171.3 ± 4.2 pMC(%) = 82.87 ± 0.42 Age (yrBP) : 1,510 ± 40

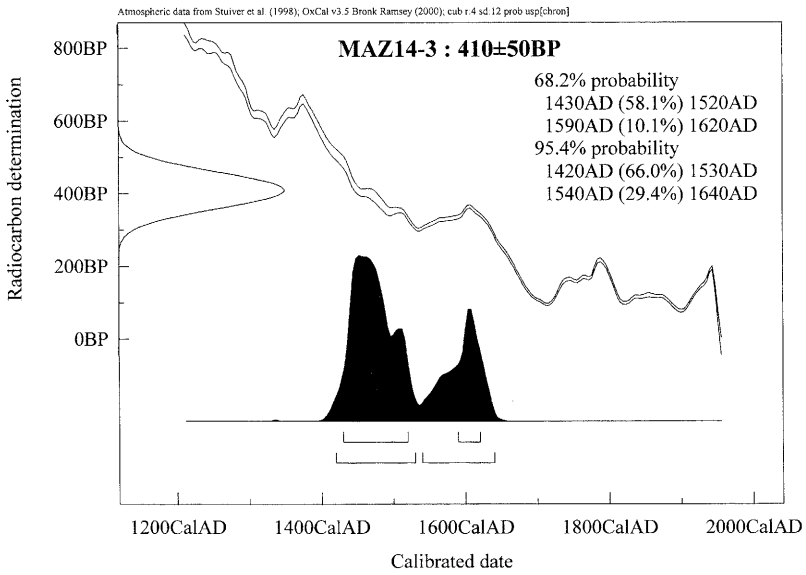
IAAA-30316	試料採取場所 ：高岡市手洗野字平田	Libby Age(yrBP)	:	1,380 ±	50
		δ ^{13}C(‰)、(加速器)	=	-18.80 ±	1.80
	試 料 形 態 ：木炭	Δ ^{14}C(‰)	=	-157.5 ±	5.6
	試料名(番号) ：MAZ14-7	pMC(%)	=	84.25 ±	0.56
	(参考) δ ^{13}C の補正無し	δ ^{14}C(‰)	=	-146.8 ±	4.8
		pMC(%)	=	85.32 ±	0.48
		Age (yrBP)	:	1,270 ±	50
IAAA-30317	試料採取場所 ：高岡市手洗野字平田	Libby Age(yrBP)	:	1,310 ±	50
		δ ^{13}C(‰)、(加速器)	=	-25.60 ±	1.56
	試 料 形 態 ：木炭	Δ ^{14}C(‰)	=	-150.3 ±	5.1
	試料名(番号) ：MAZ14-8	pMC(%)	=	84.97 ±	0.51
	(参考) δ ^{13}C の補正無し	δ ^{14}C(‰)	=	-151.3 ±	4.3
		pMC(%)	=	84.87 ±	0.43
		Age (yrBP)	:	1,320 ±	40
IAAA-30318	試料採取場所 ：高岡市手洗野字平田	Libby Age(yrBP)	:	1,210 ±	50
		δ ^{13}C(‰)、(加速器)	=	-31.08 ±	1.57
	試 料 形 態 ：漆	Δ ^{14}C(‰)	=	-139.3 ±	5.4
	試料名(番号) ：MAZ14-10	pMC(%)	=	86.07 ±	0.54
	(参考) δ ^{13}C の補正無し	δ ^{14}C(‰)	=	-150.0 ±	4.6
		pMC(%)	=	85.00 ±	0.46
		Age (yrBP)	:	1,310 ±	40
IAAA-30319	試料採取場所 ：高岡市手洗野字平田	Libby Age(yrBP)	:	60 ±	50
		δ ^{13}C(‰)、(加速器)	=	-28.60 ±	1.78
	試 料 形 態 ：漆樹液	Δ ^{14}C(‰)	=	-6.9 ±	6.5
	試料名(番号) ：MAZ14-12	pMC(%)	=	99.31 ±	0.65
	(参考) δ ^{13}C の補正無し	δ ^{14}C(‰)	=	-14.3 ±	5.3
		pMC(%)	=	98.57 ±	0.53
		Age (yrBP)	:	120 ±	40
IAAA-30320	試料採取場所 ：高岡市手洗野字平田	Libby Age(yrBP)	:	160 ±	50
		δ ^{13}C(‰)、(加速器)	=	-19.63 ±	1.70
	試 料 形 態 ：漆樹液	Δ ^{14}C(‰)	=	-20.1 ±	6.1
	試料名(番号) ：MAZ14-13	pMC(%)	=	97.99 ±	0.61
	(参考) δ ^{13}C の補正無し	δ ^{14}C(‰)	=	-9.3 ±	5.2
		pMC(%)	=	99.07 ±	0.52
		Age (yrBP)	:	70 ±	40

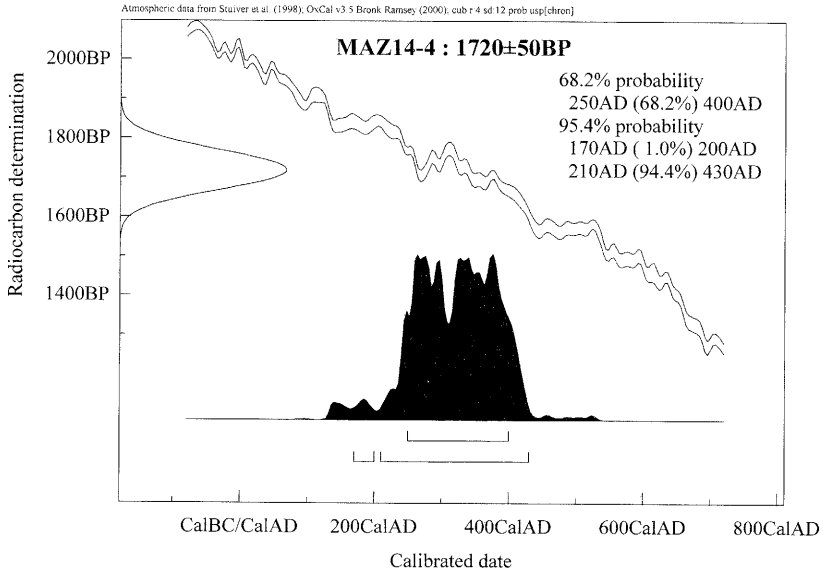
IAAA-30321	試料採取場所 ：高岡市手洗野字平田	Libby Age(yrBP)	:	960 ±	50
		δ ^{13}C(‰)、(加速器)	=	-21.50 ±	1.79
	試 料 形 態 ：種子	Δ ^{14}C(‰)	=	-112.4 ±	5.8
	試料名(番号) ：MAZ14-14	pMC(%)	=	88.76 ±	0.58
	(参考) δ ^{13}C の補正無し	δ ^{14}C(‰)	=	-106.0 ±	4.8
		pMC(%)	=	89.40 ±	0.48
		Age (yrBP)	:	900 ±	40
IAAA-30322	試料採取場所 ：高岡市手洗野字平田	Libby Age(yrBP)	:	880 ±	60
		δ ^{13}C(‰)、(加速器)	=	-27.70 ±	1.92
	試 料 形 態 ：漆	Δ ^{14}C(‰)	=	-104.1 ±	6.1
	試料名(番号) ：MAZ14-15	pMC(%)	=	89.59 ±	0.61
	(参考) δ ^{13}C の補正無し	δ ^{14}C(‰)	=	-109.1 ±	4.9
		pMC(%)	=	89.09 ±	0.49
		Age (yrBP)	:	930 ±	50
IAAA-30323	試料採取場所 ：高岡市手洗野字平田	Libby Age(yrBP)	:	1,280 ±	50
		δ ^{13}C(‰)、(加速器)	=	-24.77 ±	1.60
	試 料 形 態 ：漆	Δ ^{14}C(‰)	=	-147.5 ±	5.4
	試料名(番号) ：MAZ14-16	pMC(%)	=	85.25 ±	0.54
	(参考) δ ^{13}C の補正無し	δ ^{14}C(‰)	=	-147.1 ±	4.6
		pMC(%)	=	85.29 ±	0.46
		Age (yrBP)	:	1,280 ±	40
IAAA-30324	試料採取場所 ：高岡市手洗野字平田	Libby Age(yrBP)	:	1,260 ±	50
		δ ^{13}C(‰)、(加速器)	=	-26.59 ±	1.43
	試 料 形 態 ：漆	Δ ^{14}C(‰)	=	-145.5 ±	5.2
	試料名(番号) ：MAZ14-17	pMC(%)	=	85.45 ±	0.52
	(参考) δ ^{13}C の補正無し	δ ^{14}C(‰)	=	-148.3 ±	4.6
		pMC(%)	=	85.17 ±	0.46
		Age (yrBP)	:	1,290 ±	40
IAAA-30325	試料採取場所 ：高岡市手洗野字平田	Libby Age(yrBP)	:	570 ±	50
		δ ^{13}C(‰)、(加速器)	=	-23.49 ±	1.53
	試 料 形 態 ：漆	Δ ^{14}C(‰)	=	-68.4 ±	5.6
	試料名(番号) ：MAZ14-18	pMC(%)	=	93.16 ±	0.56
	(参考) δ ^{13}C の補正無し	δ ^{14}C(‰)	=	-65.6 ±	4.8
		pMC(%)	=	93.44 ±	0.48
		Age (yrBP)	:	540 ±	40

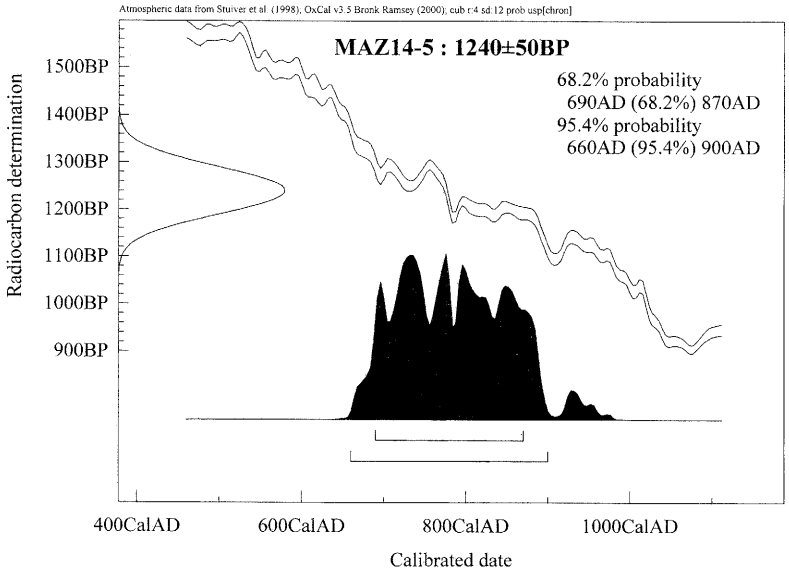
IAA

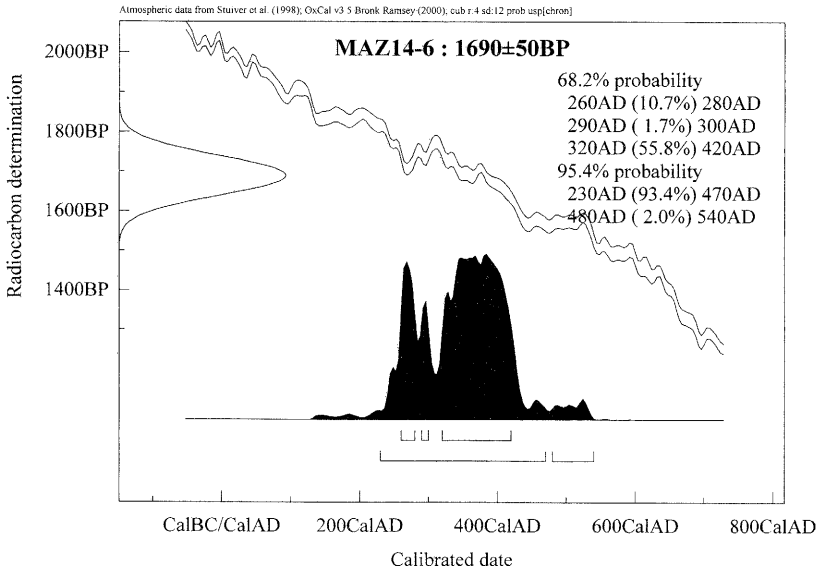
IAAA-30326	試料採取場所 ：高岡市手洗野字平田	Libby Age(yrBP)	:	880 ±	50
		δ ^{13}C(‰)、(加速器)	=	-23.61 ±	1.46
	試 料 形 態 ：漆	Δ ^{14}C(‰)	=	-104.1 ±	5.3
	試料名(番号) ：MAZ14-19	pMC(%)	=	89.59 ±	0.53
	(参考) δ ^{13}C の補正無し	δ ^{14}C(‰)	=	-101.6 ±	4.6
		pMC(%)	=	89.84 ±	0.46
		Age (yrBP)	:	860 ±	40

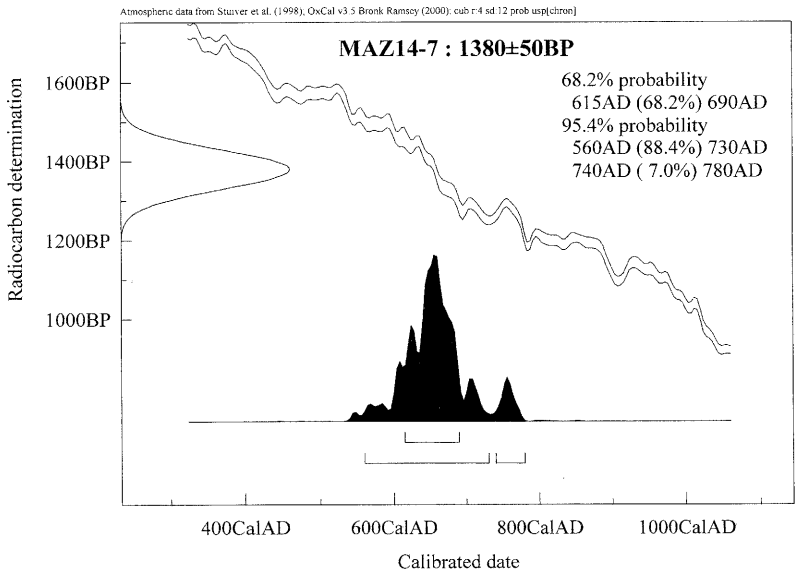


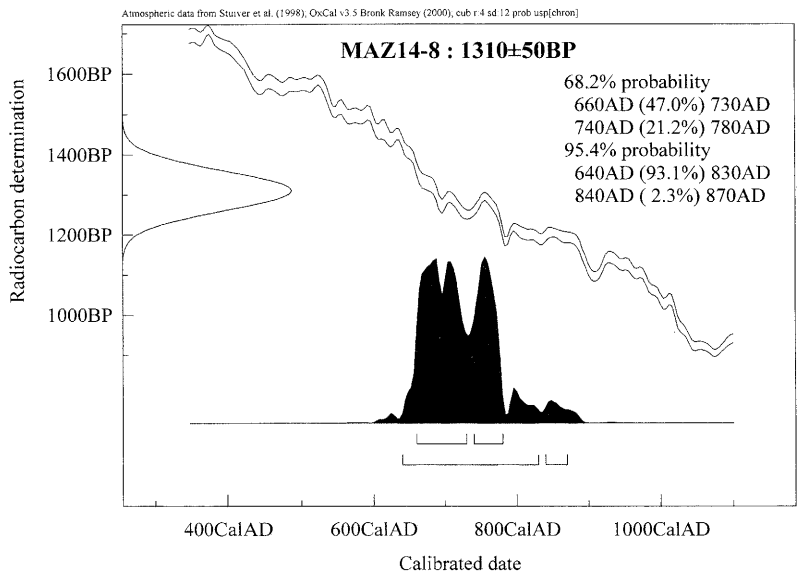


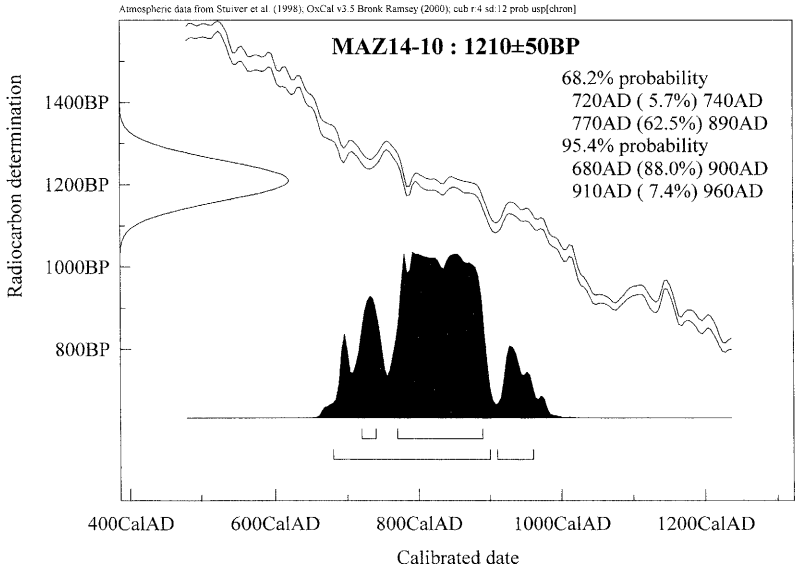

Atmospheric data from Stuiver et al. (1998); OxCal v3.5 Bronk Ramsey (2000); cub r:4 sd:12 prob usp[chron]
MAZ14-4 : 1720±50BP
68.2% probability
250AD (68.2%) 400AD
95.4% probability
170AD (1.0%) 200AD
210AD (94.4%) 430AD
Radiocarbon determination
2000BP
1800BP
1600BP
1400BP
CalBC/CalAD
200CalAD
400CalAD
600CalAD
800CalAD
Calibrated date

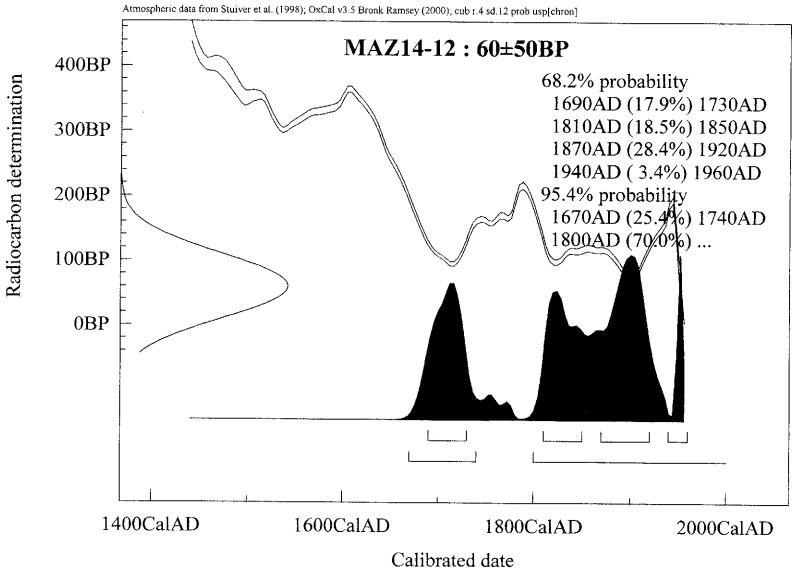

Atmospheric data from Stuiver et al. (1998); OxCal v3.5 Bronk Ramsey (2000); cub r:4 sd:12 prob usp[chron]
MAZ14-5 : 1240±50BP
68.2% probability
690AD (68.2%) 870AD
95.4% probability
660AD (95.4%) 900AD
Radiocarbon determination
1500BP
1400BP
1300BP
1200BP
1100BP
1000BP
900BP
400CalAD
600CalAD
800CalAD
1000CalAD
Calibrated date

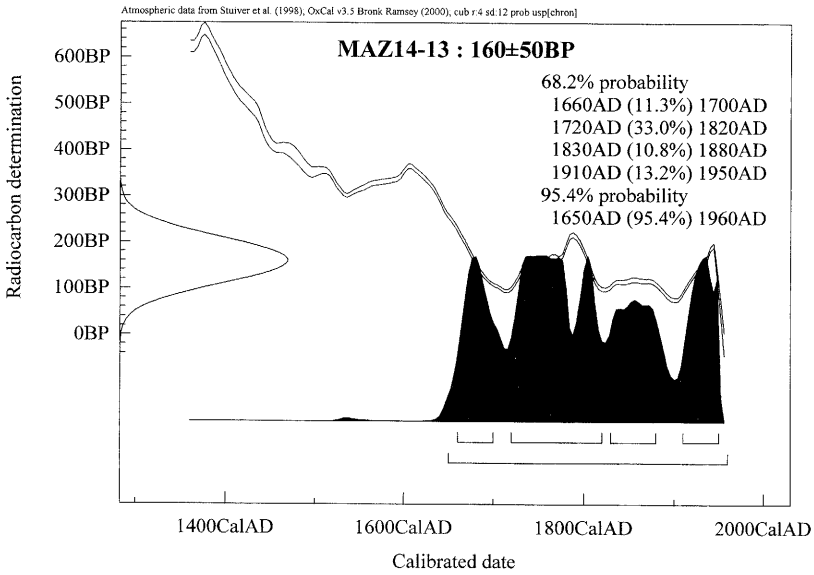

Atmospheric data from Stuiver et al. (1998); OxCal v3.5 Bronk Ramsey (2000); cub r:4 sd:12 prob usp[chron]
MAZ14-6 : 1690±50BP
68.2% probability
260AD (10.7%) 280AD
290AD (1.7%) 300AD
320AD (55.8%) 420AD
95.4% probability
230AD (93.4%) 470AD
480AD (2.0%) 540AD
Radiocarbon determination
2000BP
1800BP
1600BP
1400BP
CalBC/CalAD
200CalAD
400CalAD
600CalAD
800CalAD
Calibrated date

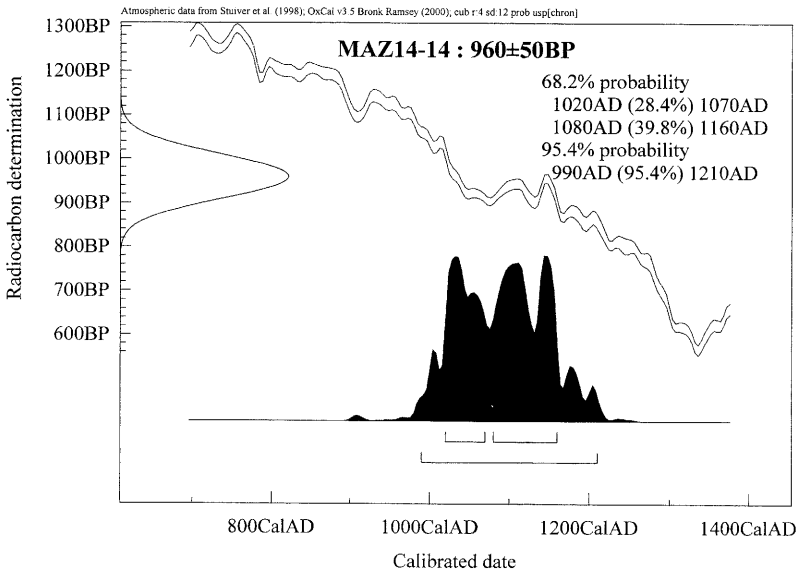

Atmospheric data from Stuiver et al. (1998); OxCal v3.5 Bronk Ramsey (2000); cub r:4 sd:12 prob usp[chron]
MAZ14-7 : 1380±50BP
68.2% probability
615AD (68.2%) 690AD
95.4% probability
560AD (88.4%) 730AD
740AD (7.0%) 780AD
Radiocarbon determination
1600BP
1400BP
1200BP
1000BP
400CalAD
600CalAD
800CalAD
1000CalAD
Calibrated date

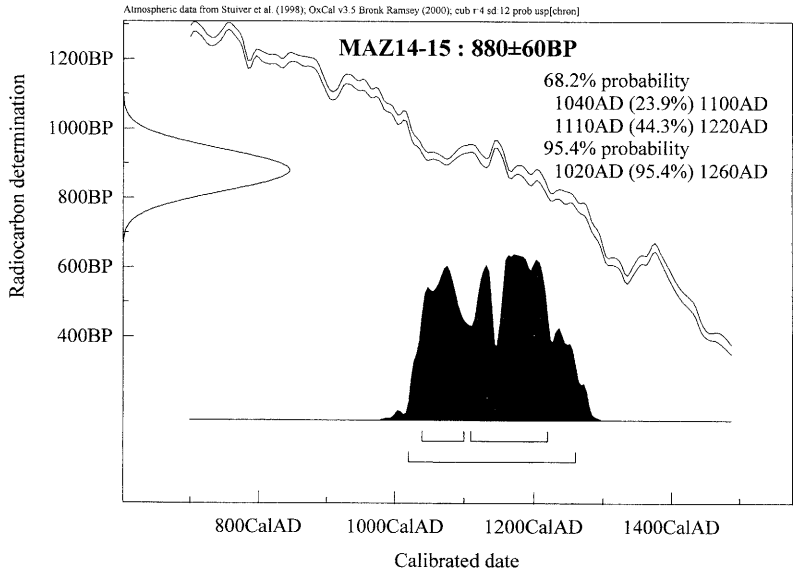

Atmospheric data from Stuiver et al. (1998); OxCal v3.5 Bronk Ramsey (2000); cub r:4 sd:12 prob usp[chron]
MAZ14-8 : 1310±50BP
68.2% probability
660AD (47.0%) 730AD
740AD (21.2%) 780AD
95.4% probability
640AD (93.1%) 830AD
840AD (2.3%) 870AD
Radiocarbon determination
1600BP
1400BP
1200BP
1000BP
400CalAD
600CalAD
800CalAD
1000CalAD
Calibrated date

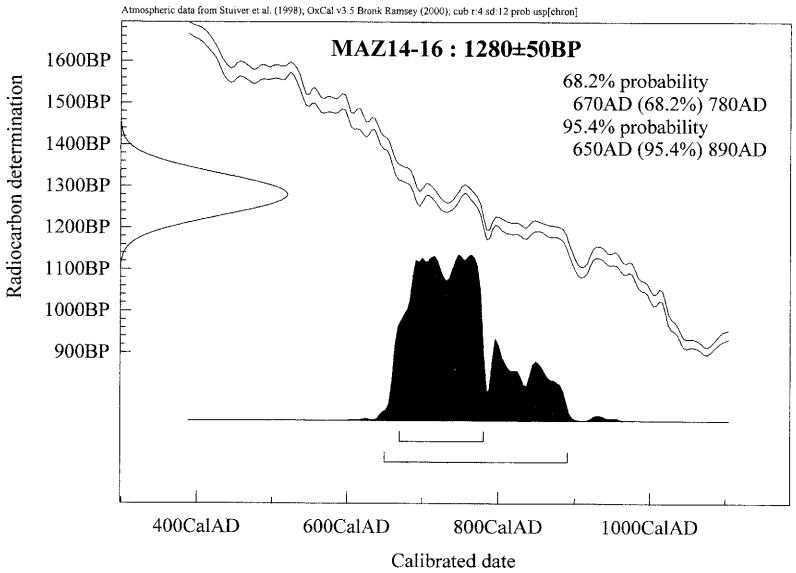

Atmospheric data from Stuiver et al. (1998); OxCal v3.5 Bronk Ramsey (2000); cub r:4 sd:12 prob usp[chron]
MAZ14-10 : 1210±50BP
68.2% probability
720AD (5.7%) 740AD
770AD (62.5%) 890AD
95.4% probability
680AD (88.0%) 900AD
910AD (7.4%) 960AD
Radiocarbon determination
1400BP
1200BP
1000BP
800BP
400CalAD
600CalAD
800CalAD
1000CalAD
1200CalAD
Calibrated date

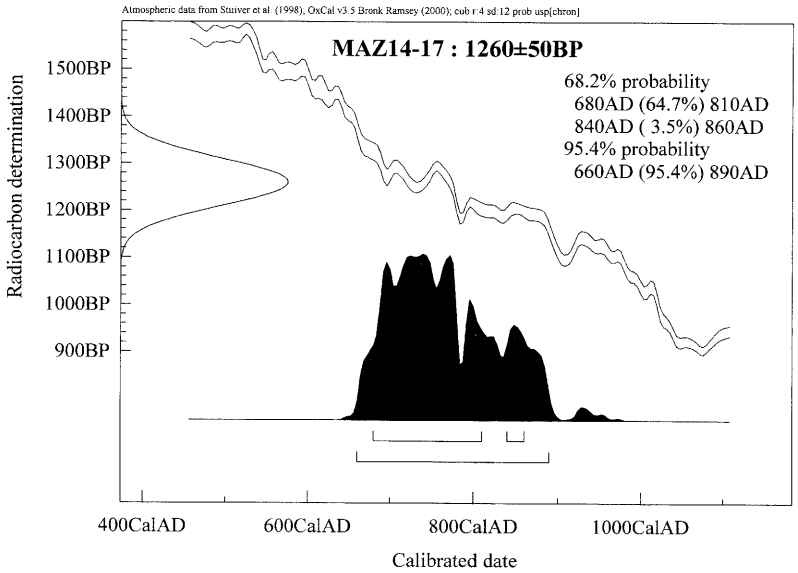

Atmospheric data from Stuiver et al. (1998); OxCal v3.5 Bronk Ramsey (2000); cub r:4 sd:12 prob usp[chron]
MAZ14-12 : 60±50BP
68.2% probability
1690AD (17.9%) 1730AD
1810AD (18.5%) 1850AD
1870AD (28.4%) 1920AD
1940AD (3.4%) 1960AD
95.4% probability
1670AD (25.4%) 1740AD
1800AD (70.0%) ...
Radiocarbon determination
400BP
300BP
200BP
100BP
0BP
1400CalAD
1600CalAD
1800CalAD
2000CalAD
Calibrated date

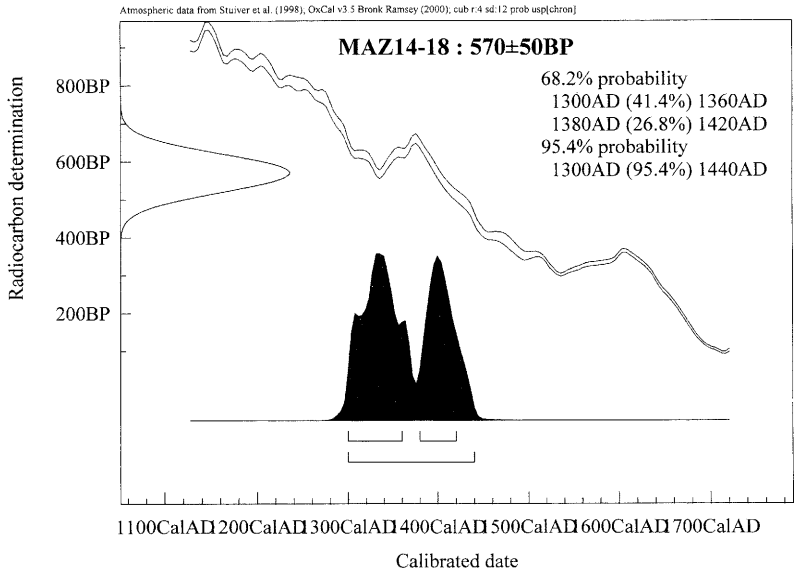

Atmospheric data from Stuiver et al. (1998); OxCal v3.5 Bronk Ramsey (2000); cub r:4 sd:12 prob usp[chron]
MAZ14-13 : 160±50BP
68.2% probability
1660AD (11.3%) 1700AD
1720AD (33.0%) 1820AD
1830AD (10.8%) 1880AD
1910AD (13.2%) 1950AD
95.4% probability
1650AD (95.4%) 1960AD
Radiocarbon determination
600BP
500BP
400BP
300BP
200BP
100BP
0BP
1400CalAD
1600CalAD
1800CalAD
2000CalAD
Calibrated date

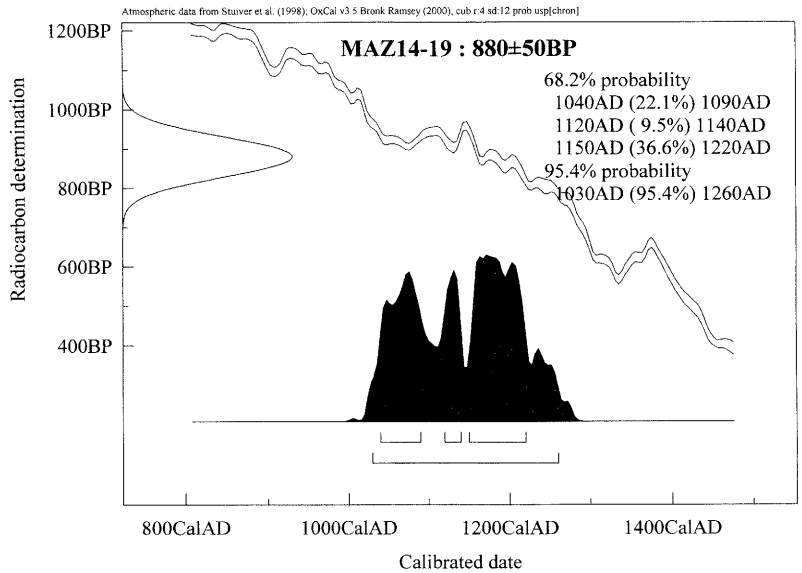

Atmospheric data from Stuiver et al. (1998); OxCal v3.5 Bronk Ramsey (2000); cub r:4 sd:12 prob usp[chron]
MAZ14-14 : 960±50BP
68.2% probability
1020AD (28.4%) 1070AD
1080AD (39.8%) 1160AD
95.4% probability
990AD (95.4%) 1210AD
Radiocarbon determination
1300BP
1200BP
1100BP
1000BP
900BP
800BP
700BP
600BP
800CalAD
1000CalAD
1200CalAD
1400CalAD
Calibrated date


Atmospheric data from Stuiver et al. (1998); OxCal v3.5 Bronk Ramsey (2000); cub r:4 sd:12 prob usp[chron]
MAZ14-15 : 880±60BP
68.2% probability
1040AD (23.9%) 1100AD
1110AD (44.3%) 1220AD
95.4% probability
1020AD (95.4%) 1260AD
Radiocarbon determination
1200BP
1000BP
800BP
600BP
400BP
800CalAD
1000CalAD
1200CalAD
1400CalAD
Calibrated date


Atmospheric data from Stuiver et al. (1998); OxCal v3.5 Bronk Ramsey (2000); cub r:4 sd:12 prob usp[chron]
MAZ14-16 : 1280±50BP
68.2% probability
670AD (68.2%) 780AD
95.4% probability
650AD (95.4%) 890AD
Radiocarbon determination
1600BP
1500BP
1400BP
1300BP
1200BP
1100BP
1000BP
900BP
400CalAD
600CalAD
800CalAD
1000CalAD
Calibrated date


Atmospheric data from Stuiver et al. (1998); OxCal v3.5 Bronk Ramsey (2000); cub r:4 sd:12 prob usp[chron]
MAZ14-17 : 1260±50BP
68.2% probability
680AD (64.7%) 810AD
840AD (3.5%) 860AD
95.4% probability
660AD (95.4%) 890AD
Radiocarbon determination
1500BP
1400BP
1300BP
1200BP
1100BP
1000BP
900BP
400CalAD
600CalAD
800CalAD
1000CalAD
Calibrated date


Atmospheric data from Stuiver et al. (1998); OxCal v3.5 Bronk Ramsey (2000); cub r:4 sd:12 prob usp[chron]
MAZ14-18 : 570±50BP
68.2% probability
1300AD (41.4%) 1360AD
1380AD (26.8%) 1420AD
95.4% probability
1300AD (95.4%) 1440AD
Radiocarbon determination
800BP
600BP
400BP
200BP
1100CalAD
1200CalAD
1300CalAD
1400CalAD
1500CalAD
1600CalAD
1700CalAD
Calibrated date


Atmospheric data from Stuiver et al. (1998); OxCal v3.5 Bronk Ramsey (2000); cub r:4 sd:12 prob usp[chron]
MAZ14-19 : 880±50BP
68.2% probability
1040AD (22.1%) 1090AD
1120AD (9.5%) 1140AD
1150AD (36.6%) 1220AD
95.4% probability
1030AD (95.4%) 1260AD
Radiocarbon determination
1200BP
1000BP
800BP
600BP
400BP
800CalAD
1000CalAD
1200CalAD
1400CalAD
Calibrated date

間尽遺跡出土の種実遺体

中村　亮仁

１．試料と処理方法

間尽遺跡は富山県高岡市に所在する集落遺跡である。遺跡の主体となる時期は古代から中世で、掘立柱建物・土抗・溝などが多数検出されており、集落の様相が確認された貴重な例となっている。

今回取り扱った試料は、大きく分けて２種類ある。１つは発掘調査中に現地で直接拾い上げられた、比較的大きい試料（種実遺体）６点と、もう１つは溝SD59内の覆土から得られた堆積物１点である。堆積物については塊状で採取されており、黒褐色有機質細～中粒砂である。試料採取はいずれも高岡市教育委員会がおこない、筆者はその後の処理を行った。堆積物の試料については8000ccをオープニング1.0㎜の篩で水洗選別し、そのうちの100ccについては更にオープニング0.25㎜の篩を用いて水洗を行った。これら篩の上に残った堆積物を双眼実体顕微鏡下で精査し、同定可能な種実遺体を選別し、拾い上げた。選び出された種実遺体を分類・同定し、分類群ごとに個体数を数えた。同定に際しては主に現生標本との対比で行った。

２．結果

同定の結果、検出された分類群は木本８、木本と草本を含む２、草本38の計48分類群であった。結果は表１と表２にまとめ、学名、和名、部位、個数を記した。表１には現地で直接採取された種実遺体の同定結果をまとめ、表２には水洗選別を行った溝内堆積物の同定結果についてまとめた。栽培植物を中心に主要な分類群については写真に示した。

現地で直接拾い上げられた種実遺体は木本でモモとトチノキの２分類群であった。トチノキは種子のみが得られており、遺存状態は良好であった。モモは核が検出されており、齧歯類などによる食害の痕跡は確認されなかった。モモは栽培される果樹であり、果実は食用となる。トチノキはしばしば肥沃で水辺などのやや湿っているような場所に自生し、種子は水さらしなどのアク抜きをすれば食用となる。

溝内堆積物から得られた種実遺体群は木本と草本とを比べると種数・個数ともに草本が卓越している。同定された木本はクワ属、カジノキ属、キイチゴ属、アカメガシワ、マタタビ属、ガマズミ属の６分類群であった。検出量が最も多いのはクワ属で、次にキイチゴ属・マタタビ属とつづく。これら検出された分類群の多くは、林縁や伐採地などの比較的日当たりの良い場所に生育し、その種実類はしばしば鳥や小動物などによって分布範囲を広げる、いわゆる鳥獣散布型の生活サイクルをもつ分類群である。また、クワ属は栽培種を含む可能性のある分類群である。草本についてはヘラオダカ、オモダカ科、イネ、イネ科、ウキヤガラ、ホタルイ属、スゲ属、カヤツリグサ科、イボクサ、コナギ、カナムグラ、ミゾソバ、タデ属A、タデ属B、タデ属C、タデ属D、カラムシ属、アカザ属、ヒユ属、ナデシコ科A、ナデシコ科B、キンポウゲ属、クサネム、カタバミ属、エノキグサ、ヤブジラミ、セリ科、チドメグサ属、ゴマ、キランソウ属、エゴマ、シソ属、ナス、ナス科A、ナス科B、ウリ類、タカサブロウ、キク科の38分類群が同定された。個数ではヘラオモダカ・ミゾソバが最も多く検出されており、カナムグラ・スゲ属がつづく。タデ属A・B・C、ナデシコ科A、イネ科、ホタルイ属もやや多く検出されている。草本の中には生育場所の環境条件によって水湿地性植物と陸性植物の大きく２つに分けることができる。検出された分類群のうち、水湿地性植物に含まれるものとしては、ヘラオモダカ、オモダカ科、イネ、ウキ

ヤガラ、ホタルイ属、イボクサ、コナギ、ミゾソバ、タカサブロウの９分類群があげられ、栽培植物であるイネを除くと８分類群である。これらは沈水性や浮葉性といった池や沼などの比較的水位のある場所に生育する分類群ではなく、湿地あるいは比較的水位の低い、溝や水田といった場所に生育する抽水性の植物を含む分類群である。陸性植物にはカナムグラ、アカザ属、ヒユ属、ナデシコ科A・B、カタバミ属、エノキグサ、ヤブジラミ、ゴマ、キランソウ属、エゴマ、シソ属、ナス、ナス科A・B、ウリ類、キク科の17分類群があり、栽培植物のゴマ、エゴマ、シソ属、ナス、ウリ類の５分類群を除くと12分類群である。これらは田畑や荒れ地、道ばたなどのやや乾燥した環境に生育する分類群である。水湿地性植物のヘラオモダカ、ウキヤガラ、イボクサ、コナギ、ミゾソバ、タカサブロウや陸性植物のカナムグラ、エノキグサ、ヤブジラミは集落の周辺や田畑などに生育する、いわゆる「人里植物」と呼ばれるもので、ホタルイ属、アカザ属、ヒユ属、ナデシコ科A・B、カタバミ属、ナス科A・B、キク科も人里植物を多く含む分類群である。こうしてみると、検出された分類群は人間が管理する環境や作物栽培がおこなわれるような環境下で生育する人里植物が優占していることが分かる。

栽培植物にはイネ、ゴマ、エゴマ、シソ属、ナス、ウリ類の６分類群があり、クワ属、アカザ属、ヒユ属についても栽培されていた可能性のある分類群である。このうち、最も多いのがウリ類で、次にシソ属、ナス、イネとつづく。イネは未炭化の穎と炭化果実（炭化米）が含まれており、ウリ類についてはしいな（未成熟の種子）が少量含まれていた。

３．古植生と植物利用

ここでは主に溝内堆積物から得られた同定結果や観察結果などの知見から、堆積状況や当時の植生、植物利用について考えてみる。

まず、堆積状況について考えてみる。堆積状況については、最も重要なことは現地での層序や土層断面観察であるが、今回はしていないため不明な点が多い。しかし、採取された塊状の堆積物試料から推察すると、粒径や比重も比較的均質で、淘汰は良好である。有機物は未分解で、遺存状態も良い。有機物が集中する部分はレンズ状もしくはラミナ状に堆積している。これらのことから、試料である堆積物は、水成堆積物で形成されており、人為的な影響をあまり受けていない状況下で自然に堆積したと考えられる。堆積物の一部である種実遺体群も自然堆積に近い状況で堆積したと考えられる。

次に当時の植生について述べる。検出された分類群で木本と草本を比べると、種数・個体数ともに草本が卓越している。木本では林縁や伐採地などの比較的日当たりの良い場所に生育する分類群が優占していることから、遺跡内は基本的に日当たりの良いやや開けた環境であったと考えられる。つまり、溝SD59周辺には樹木を主要構成要素とする森や林などは分布せず、樹木が生育していたとしても孤立木程度であったと考えられる。草本については水湿地性植物と陸性植物とが混在している。種数は栽培植物を除くと、水湿地植物が９分類群、陸性植物が13分類群であり、個体数では水湿地植物が優占し、種数ではやや陸性植物が多い結果であった。分類群別にみると水湿地性植物のヘラオモダカ、ミゾソバが著しく多量に検出されている。また、ミゾソバ、ヘラオモダカの遺存状態は良好で、ヘラオモダカについては集塊で検出されている。水湿地性植物と陸性植物が混在することは一見矛盾しているように見受けられる。しかし、堆積地が遺跡内の溝であることから、溝SD59周辺ではカナムグラ、ナデシコ科Ａ・Ｂ、ヤブジラミ、ナス科Ａ・Ｂなどが生育する開けた日当たりの良い、やや乾燥した環境であり、溝内にはミゾソバやヘラオモダカなどの水湿地植物が生育可能な湿地的な環境であったと考えられる。これらのことは、溝SD59の周辺に建物跡など日常生活に密着した遺構があるという発掘調査で得れた結果と矛盾し

ない。

以上のことをまとめると、木本で検出量の多いクワ属については孤立木または数本程度が、遺跡内、特に堆積地にほど近い場所に生育していた可能性がある。また、キイチゴ属、アカメガシワ、マタタビ属、ガマズミ属は堆積地よりやや離れた遺跡周辺に生育していたものが、鳥や小動物によってもたらされたものが、水流などで移動・運搬されて堆積したと考えられる。建物周辺の日当たりの良いやや乾燥した場所には、カナムグラ、ナデシコ科A・B、ヤブジラミなどの陸性植物が生育し、堆積地の溝SD59には水湿地性植物であるヘラオモダカやミゾソバが優占的に繁茂していたと考えられる。

植物利用につては、栽培されていた分類群がイネ、ゴマ、エゴマ、シソ属、ナス、ウリ類の６分類群である。これらの中でゴマについては県内で初見であるが、それ以外のものは中世遺跡から普通に検出されている分類群である。また、クワ属、アカザ属、ヒユ属の３分類群についても栽培されていた可能性がある。これらの栽培植物は、日常生活の場から逸脱したものや、不用になったものを投棄したり破棄されたものが溝ＳＤ59に流入し、堆積したと考えられる。

栽培植物の記載

イネ　*Oryza sativa* Linn.　穎果・炭化果実

穎果は淡褐色～黄褐色で、平面は楕円形を呈する。表面には微細な顆粒状突起がみられる。長さ6.8～7.3㎜。幅3.0～3.6㎜。

炭化果実は黒色～黒褐色で、平面は楕円形を呈す。炭化果実の表面には長軸方向に数本の溝が走る。長さ4.2～4.8㎜、幅2.4～3.3㎜。

モモ　*Prunus persica* Batsch.　核

核は茶褐色で、平面は先端がとがる卵形を呈する。側面に縫合線が巡り、表面には特有の隆起がみられる。長さ22.7～32.8㎜、幅16.6～22.8㎜、厚さ14.3～15.4㎜。

モモ核の研究は、小清水（1963）の弥生時代以降に品種改良がおこなわれ、大型化するという指摘がある一方で、金原（1996）は時期における形態分類をおこなっている。

ゴマ *Sesamum indicum* Linn.　種子

種子は淡褐色～茶褐色で、平面は卵形を呈する。表面には筋状の網目模様がみられる。長さ2.7～3.0㎜、幅1.9～2.1㎜。今回、ゴマの出土は富山県下で初見となる貴重な資料である。

エゴマ　*Perilla frutescens* Britt. var. cf. *japonica* Hara　果実

果実は茶褐色で、球形を呈する。下端は唇状にやや突出し、点状のヘソがある。表面には大きな網目状の構造を有する。直径2.3㎜。シソ属との識別は大きさで行っており、直径1.2～1.8㎜をシソ属とし、直径2.3㎜と大きいものをエゴマとした。

シソ属　*Perilla*　果実

果実は茶褐色で、球形を呈す。下端は唇状にやや突出し、点状のヘソがある。表面には大きな網目状の構造を有する。径1.2～1.8㎜。

ナス　*Solanum melongena* Linn.　種子

種子は淡褐色～茶褐色で、平面形は円形を呈する。ヘソは大きく開きくぼんでいる。表面には畝状の網目構造が発達する。直径2.5～3.9㎜。

ウリ類　*Cucumis melo* Linn.　種子

種子は黄褐色で、平面は長卵形を呈す。一端の両面には「ハ」字状にくぼむ。長さ4.6～9.4㎜、幅2.3

～3.7㎜。検出された種子には未成熟な種子が含まれていた。

ウリ類については藤下の研究（1982）があり、本遺跡出土で計測可能な個体は97点あり、そのうち長さ6.0㎜以下の小粒種子（雑草メロン型）が12点、長さ6.1～8.0㎜の中粒種子（マクワ・シロウリ型）が72点、長さ8.0㎜以上の大粒種子（モモルディカメロン型）が13点であった。これら小粒種子、中粒種子、大粒種子の割合は、他の中世～近世の遺跡出土の例と大差なく、中粒種子のマクワ・シロウリ型が優占している。なお、ここでいうウリ類とは藤下のいうメロン仲間に相当する。

引用・参考文献

金原正明（1996）　「古代モモの形態と品種」『考古学ジャーナル№409』ニュー・サイエンス社

小清水卓二（1963）　「古代日本の住居跡から出土する桃について」『近畿古文化論巧』吉川弘文館

粉川昭平・吉井亮一（1984）　「江上遺跡群出土の植物遺体」『北陸自動車道遺跡報告－上市町木製品・総括編－』富山県教育委員会

中村亮仁（1998）　「石名田木舟遺跡出土の種実遺体」『富山考古学研究　創刊号』財団法人富山県文化振興財団埋蔵文化財調査事務所

中村亮仁（2003）　「富山県における植物利用－栽培植物の導入期と変革期－」『続文化財学論集』文化財学論集刊行会

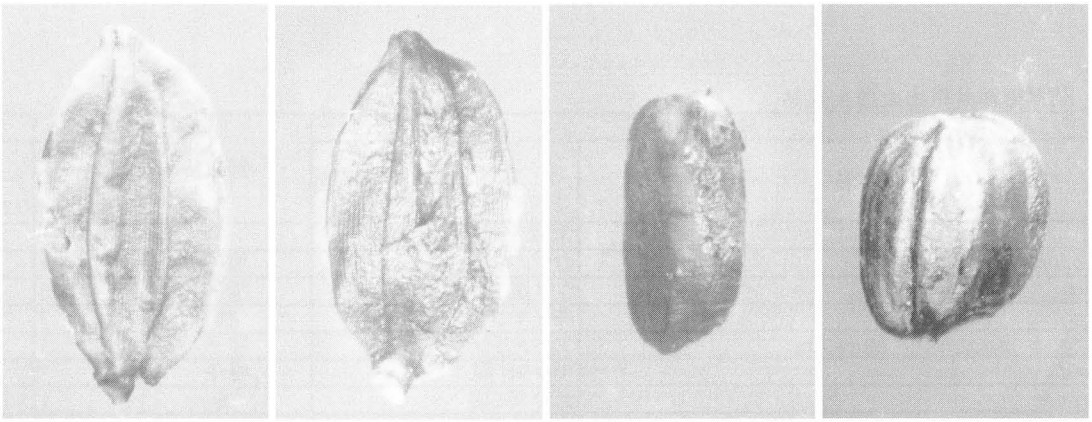
藤下典之（1992）　「出土種子からみた古代日本のメロンの仲間－その種類、渡来、伝播、利用について－」『考古学ジャーナル№354』ニュー・サイエンス社

表1

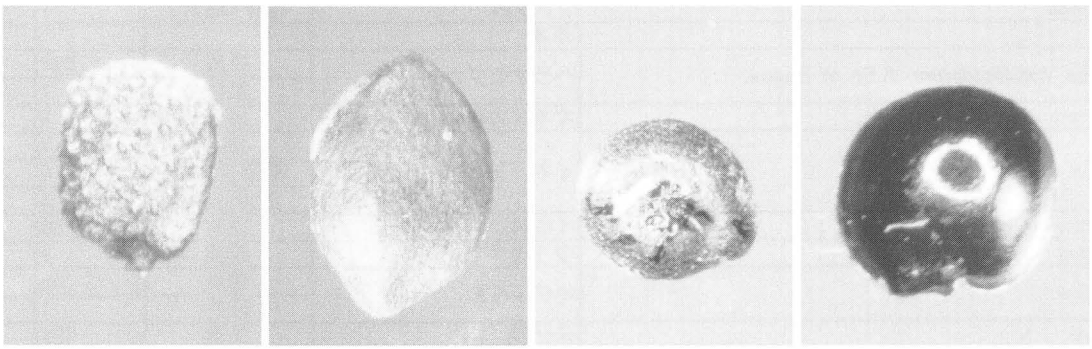
遺跡名	R番号	グリッド	層位	遺構	年月日	分類群				計測値（㎜）
						和名	学名	部位	個数	長さ×幅×厚さ
MAZ9	798-19	－	－	SD225-№19	011210	モモ	*Prunus persica* Batsch.	核	1	32.8×22.8×14.4
MAZ9	972	P23-NE	下層	SD268	011218	トチノキ	*Aesculus turbinata* Blume	種子	4	直径25.7～34.6
MAZ9	664の1/2曲物と分離	－	－	SK119№2	011130	モモ	*Prunus persica* Batsch.	核	1	27.0×21.6×15.0
MAZ9	170	－	－	SD209	011025	モモ	*Prunus persica* Batsch.	核	1	22.7×16.6×14.3
MAZ9	197	－	－	SD205	011026	モモ	*Prunus persica* Batsch.	核	1	29.3×21.0×15.4
MAZ9	873	P24-NW	下層	SD268	011212	モモ	*Prunus persica* Batsch.	核（半分）	1	28.6×22.4×－
						トチノキ	*Aesculus turbinata* Blume	種子（半分）	1	－

表2 間尽遺跡井戸出土種実遺体

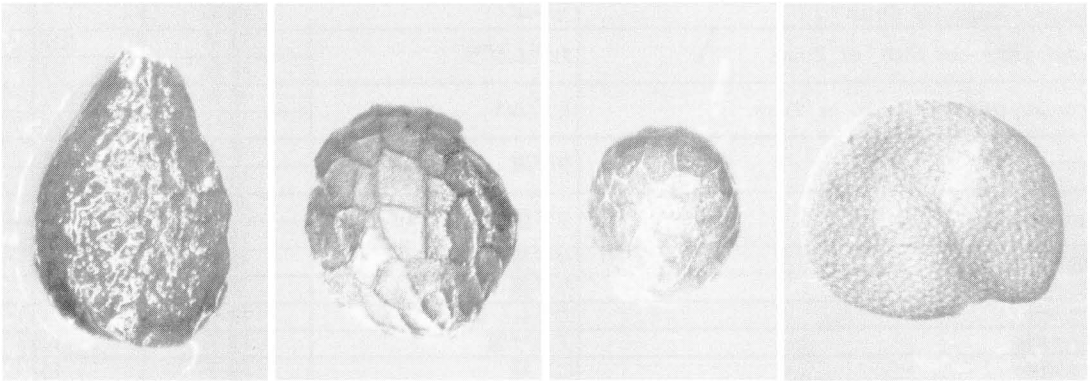
分類群		部位	8000cc	100cc
学名	和名		オープニング 1.0mm	オープニング 0.25mm
arbor	木本			
Broussonetia	カジノキ属	種子	1	
Morus	クワ属	種子	29	
Rubus	キイチゴ属	核	7	
Mallotus japonicus Muell.Arg.	アカメガシワ	種子	1	
Actinidia	マタタビ属	種子	7	
Viburnum	ガマズミ属	核	1	
arbor and herb	木本と草本			
Araliaceae	ウコギ科	種子	1	
Vitaceae	ブドウ科	種子(破片)	1	
herb	草本			
Alisma canaliculatum A.Br. et Beauv.	ヘラオモダカ	果実	848	91
		集塊	1	
Alismataceae	オモダカ科	種子	2	
Oryza sativa Linn.	イネ	穎果	7	
		穎果(破片)	6	1
		炭化果実	3	
Gramineae	イネ科	穎果	58	4
Scirpus yagara Ouwi	ウキヤガラ	果実	1	
Scirpus	ホタルイ属	果実	59	2
		破片	1	1
Carex	スゲ属	果実	299	10
Cyperaceae	カヤツリグサ科	果実	4	13
Aneilema keisak Hassk.	イボクサ	種子	11	5
Monochoria vaginalis Presl	コナギ	種子		9
Humulus japonicus Sieb. et Zucc.	カナムグラ	種子	318	19
		半分	41	2
Polygonum thubergii Sieb. et Zucc.	ミゾソバ	果実	1022	16
		半分	23	7
Polygonum A	タデ属 A	果実	116	8
		破片	3	
Polygonum B	タデ属 B	果実	177	
		破片	6	
Polygonum C	タデ属 C	果実	7	
Polygonum D	タデ属 D	果実	5	
Boehmeria	カラムシ属	種子	1	
Chenopodium	アカザ属	種子	18	3
Amaranthus	ヒユ属	種子	15	
Caryophyllaceae A	ナデシコ科A	種子	90	1
Caryophyllaceae B	ナデシコ科B	種子	29	10
Ranunculus	キンポウゲ属	果実	17	2
Aeschynomene indica Linn.	クサネム	豆果	2	
Oxalis	カタバミ属	種子	1	
Acalypha australis Linn.	エノキグサ	種子	1	
Torilis japonica DC	ヤブジラミ	果実	13	
		破片	15	4
Umbelliferae	セリ科	果実	5	
Hydrocotyle	チドメグサ属	果実	5	4
Sesamum indicum Linn.	ゴマ	種子	6	
Ajuga	キランソウ属	果実	1	
Perilla frutescens Britt. Var. Cf. japonica Hara	エゴマ	果実	1	
Perilla	シソ属	果実	61	2
Solanum melongena Linn.	ナス	種子	30	
Solanaceae A	ナス科A	種子	5	
		破片	2	
Solanaceae B	ナス科B	種子	28	
Cucumis melo Linn.	ウリ類	種子	102	
		破片	13	
Eclipta prostrata Linn.	タカサブロウ	果実	7	
Comositae	キク科	果実	1	4
tortal	合計		3534	218
Unknown	不明		19	0



1　イネ　穎果　　2　イネ　穎果　　3　イネ　炭化果実　　4　イネ　炭化果実



5　カジノキ属 種子　6　クワ属　種子　　7　アカザ属　種子　8　ヒユ属　種子



9　ゴマ　種子　　10　エゴマ　果実　　11　シソ属　果実　12　ナス　種子

13　ウリ類　種子　　14　ウリ類　種子　　15　ウリ類　種子　　16　ウリ類　種子

1mm　1～4，13～16
1mm　12
1mm　6，9
1mm　5，7，8，10，11

別表　遺物観察表

B地区

図面	図版	遺物番号	R番号	検出面	遺構番号	出土位置	種別	器種	口径(長さ)	底径(幅)	器高(厚さ)	重さ	遺存率	成・整形、技法等の特徴	色調	樹種石材	時期・備考
33	26	1	R526	第2面	SB05	P7	須恵器	蓋	(11.4)	ツマミ 2.4	—	—	1/2	上部回転ヘラ削り後ナデ	灰色		9C前(田嶋Ⅳ2新)
33	26	2	R651	第2面	SB07	P3	須恵器	蓋	12.2	ツマミ 2.2	3.5	—	完形	上部回転ヘラ削り後ナデ	灰色		9C前(田嶋Ⅳ2新)
33	26	3	R651	第2面	SB07	P3	須恵器	坏	11.9	(8.0)	3.3	—	1/2	底部回転ヘラ切り	灰色		8C後(田嶋Ⅳ2古)
33	26	4	R267	第2面	SK06		須恵器	坏	—	(9.8)	—	—	底部片	内部に漆紙付着。	灰色		9C前(田嶋Ⅳ2新) AMS MAZ14-1(漆膜) 1150±40BP 1σ860AD(57.6%)980AD
33	26	5	R268/R525	第2面	SK06 SD59	B-2	珠洲	甕	(39.0)	—	—	—	口縁部片	外面にタタキ目、内面にあて具痕	暗灰色		11C後～12C前 (吉岡Ⅰ～Ⅱ)
33	26	6	R381	第2面	SK09		土製品	土錘	5.9	(5.0)	孔径 (1.2)	—	1/3	焼成はよくない	浅黄橙		中世
33	26	7	R001/R104/ R164/R165/ R381/R382	第2面	SK09	Z-4	須恵器	甕	(19.0)	—	—	—	口縁部片	外面にタタキ目、内面にあて具痕。	灰色		8C中(田嶋Ⅳ1)
33	26	8	R081	第1面	SD08		土師器	甕	(16.0)	—	—	—	口縁部片	有段の口縁部で、やや外反。器表面の風化が顕著	淡黄		4C前(漆町5・6群)
33	26	9	R010	第1面	SD10		鉄製品	刀子	(2.4)	(5.9)	(0.2)	—	刃先部	マチ・ナカゴ欠損	—		
33	26	10	R224	第2面	SD33		土師器	高坏	—	—	—	—	脚部	内面輪積痕が残る	橙		4C前(漆町5・6群)
33	26	11	R224	第2面	SD33		土師器	高坏	—	—	—	—	脚部	胎土粒子細かい、焼成はよいとはいえない	淡黄橙		4C前(漆町5・6群)
33	26	12	R224	第2面	SD33		土師質土器		(9.8)	(4.0)	2.0	—	1/3	底部回転ヘラ切り後ナデ、灯明皿として使用	黄橙		中世
33	26	13	R001/R224	第2面	SD33	包含層	珠洲	甕	—	—	—	—	胴部片	外部にタタキ目、内面にあて具痕	灰色		中世
33	26	14	R272/R352/ R409	第2面	SD34	A-5 B-5	土師器	甕	(22.0)	—	—	—	口縁部片	やや外反する「く」の字口縁で、外面にハケメが認められる。器面の風化顕著。	褐色		4C前(漆町5・6群)
33	27	15	R387/R389	第2面	SD44		須恵器	坏	11.6	8.0	3.8	—	2/3	底部回転ヘラ切り	灰白色		9C前(田嶋Ⅳ2新)
33	27	16	R385	第2面	SD44		須恵器	坏	(11.6)	(7.7)	4.3	—	1/2	底部に漆記号、底部回転ヘラ切り、輪高台付	灰色		9C中(田嶋Ⅴ1)
33	27	17	R001/R388	第2面	SD44	包含層	須恵器	坏	(12.0)	(9.0)	3.4	—	1/2	底部回転ヘラ切り	黄灰色		9C前(田嶋Ⅳ2新)
33	27	18	R392	第2面	SX-2		土師器	高坏	—	—	—	—	脚部	脚部内面ケズリ、器表面の風化が顕著	橙		4C前(漆町5・6群)
33	27	19	R398	第2面	SX-2		須恵器	坏	12.6	9.0	3.2	—	口縁部一部欠損	底部回転ヘラ切り、底部にヘラ記号	灰白色		9C前(田嶋Ⅳ2新)
34	27	20	R643	第2面	SB02	P1	木製品	柱根	25.6	14.2	13.4	—				クリ	
34	27	21	R644	第2面	SB02	P6	木製品	柱根	73.3	25.6	25.4	—				クリ	
35	28	22	R645	第2面	SB02	P7	木製品	柱根	46.0	28.0	21.4	—				クリ	
35	28	23	R646	第2面	SB02	P10	木製品	柱根	27.8	12.9	10.6	—				クリ	
35	28	24	R647	第2面	SB03	P1	木製品	柱根	67.4	21.5	22.0	—				クリ	
36	28	25	R641	第2面	SB04	P11	木製品	柱根	64.8	28.0	27.5	—				クリ	
36	29	26	R642	第2面	SB04	P12	木製品	柱根	45.8	25.8	18.2	—				クリ	
36	29	27	R686	第2面	SB04	P13	木製品	柱根	37.4	26.2	26.1	—				クリ	
—	—	—	R659	第2面	SB07	P1	木製品	柱根	—	—	—	—		樹種同定のみ		クリ	
—	—	—	R658	第2面	SB07	P2	木製品	柱根	—	—	—	—		樹種同定のみ		クリ	
37	29	28	R274	第2面	SK01		木製品	曲物	31.0	16.2	1.2	—	1/2	組板に転用。包丁傷あり。		スギ	
37	30	29	R278	第2面	SK01		木製品	曲物	33.5	11.1	1.0	—		組板に転用。包丁傷あり。		ヒノキ属	
37	30	30	R279	第2面	SK01		木製品	曲物	22.9	12.0	0.7	—	1/2	組板に転用。包丁傷あり。		ヒノキ	
37	30	31	R280	第2面	SK01		木製品		31.3	25.6	7.3	—				ケヤキ	
38	31	32	R266	第2面	SK06		木製品	漆器椀	5.5	5.2	—	—		扇子模様の漆絵描画あり。		ブナ属	漆塗膜No3(15～16Cか?) AMS MAZ14-15(漆塗膜) 880±60BP 1σ1110AD(44.3%)1220AD
38	31	33	R702－2	第2面	SK08		木製品	井戸枠	50.4	60.5	—	—		曲物井戸		スギ	

B地区

図面	図版	遺物番号	R番号	検出面	遺構番号	出土位置	種別	器種	口径(長さ)	底径(幅)	器高(厚さ)	重さ	遺存率	成・整形、技法等の特徴	色調	樹種石材	時期・備考
38	31	34	R702-1	第2面	SK08		木製品	井戸枠	32.4	62.8	−	−		曲物井戸		スギ	
39	32	35	R704	第2面	SK08		木製品		35.0	17.0	2.1	−					
39	32	36	R703	第2面	SK08		木製品		28.7	9.6	3.3	−					
39	32	37	R705	第2面	SK08		木製品		15.0	8.5	6.8	−				トチノキ	
40	32	38	R687	第2面	SK08		木製品		53.0	6.1	0.9	−				スギ	
40	32	39	R688	第2面	SK08		木製品		43.5	10.1	1.0	−				スギ	
40	33	40	R696	第2面	SK08		木製品		44.4	6.2	0.9	−		漆付着			
40	33	41	R693	第2面	SK08		木製品		31.9	9.9	1.1	−				スギ	
40	33	42	R695	第2面	SK08		木製品		31.2	6.5	0.5	−					
41	33	43	R691	第2面	SK08		木製品		24.8	8.3	0.7	−				スギ	
41	33	44	R692	第2面	SK08		木製品		14.9	3.2	0.5	−					
41	33	45	R694	第2面	SK08		木製品		22.3	6.3	0.6	−					
41	34	46	R697-1	第2面	SK08		木製品		25.5	7.7	0.8	−				スギ	
41	34	47	R697-2	第2面	SK08		木製品		10.9	5.1	0.3	−				スギ	
41	34	48	R698	第2面	SK08		木製品		16.6	5.2	0.2	−					
41	34	49	R699	第2面	SK08		木製品		25.0	4.2	0.7	−					
41	34	50	R700-1	第2面	SK08		木製品		9.6	4.6	0.5	−					
41	35	51	R700-2	第2面	SK08		木製品		12.2	3.2	0.2	−					
41	35	52	R700-3	第2面	SK08		木製品		9.5	3.2	0.2	−					
42	35	53	R668	第2面	SD59		木製品		17.9	5.0	0.7	−				スギ	
42	35	54	R531-2	第2面	SD59		漆の木		20.8	4.0	4.0	−		漆かき痕跡		ウルシ	AMS MAZ14-13(漆樹液) 160±50BP 1σ1720AD(33.0%)1820AD
42	35	55	R531-1	第2面	SD59		漆の木		34.5	4.9	3.8	−		漆かき痕跡		ウルシ	AMS MAZ14-12(漆樹液) 60±50BP 1σ1870AD(28.4%)1920AD
42	35	56	R680	第2面	SD59		木製品	漆器椀	15.6	7.6	3.0	−				ケヤキ	漆塗膜No4 AMS MAZ14-18(漆塗膜) 570±50BP 1σ1300AD(41.4%)1360AD
42	36	57	R561	第2面	SD59		木製品	漆器椀	15.7	9.4	4.4	−				スギ	漆塗膜No1 AMS MAZ14-19(漆塗膜) 880±50BP 1σ1150AD(36.6%)1220AD
42	36	58	R613	第2面	SD59		木製品	櫛	3.7	11.25	0.7	−				イスノキ	
43	36	59	R592	第2面	SD59		木製品		13.7	7.8	1.1	−		漆付着		スギ	
43	36	60	R605	第2面	SD59		木製品	曲物	15.3	6.1	1.1	−				スギ	
43	37	61	R609	第2面	SD59		木製品	曲物	16.6	4.9	0.5	−				スギ	
43	37	62	R570	第2面	SD59		木製品		50.0	2.6	1.2	−		木釘付き		スギ	
43	37	63	R571	第2面	SD59		木製品		49.2	1.85	1.9	−		木釘付き		スギ	
43	37	64	R602	第2面	SD59		木製品		40.2	2.5	2.2	−		木釘一点採取		スギ	
43	37	65	R558	第2面	SD59		木製品		44.2	1.9	1.9	−				スギ	
44	37	66	R530	第2面	SD59		木製品		41.8	18.0	1.9	−					
44	37	67	R559	第2面	SD59		木製品	曲物	30.7	4.6	0.7	−		組板に転用。包丁傷あり。		スギ	
44	38	68	R562	第2面	SD59		木製品		14.3	1.5	0.4	−					

B地区

図面	図版	遺物番号	R番号	検出面	遺構番号	出土位置	種別	器種	口径(長さ)	底径(幅)	器高(厚さ)	重さ	遺存率	成・整形、技法等の特徴	色調	樹種石材	時期・備考
44	38	69	R563	第2面	SD59		木製品		16.7	3.9	2.3	−					
44	38	70	R564	第2面	SD59		木製品		11.2	2.2	0.4	−					
44	38	71	R565	第2面	SD59		木製品		16.3	3.2	0.4	−					
44	38	72	R566	第2面	SD59		木製品		14.0	1.8	0.3	−					
45	38	73	R567	第2面	SD59		木製品		11.9	1.0	1.6	−					
45	38	74	R569	第2面	SD59		木製品		12.9	5.8	0.4	−					
45	38	75	R572	第2面	SD59		木製品	蒲鉾板	14.3	0.7	0.7	−				スギ	
45	39	76	R573	第2面	SD59		木製品		9.1	3.0	3.5	−					
45	39	77	R574	第2面	SD59		木製品		24.3	1.6	0.6	−					
45	39	78	R577	第2面	SD59		木製品	曲物	32.6	5.1	0.5	−		俎板に転用。包丁傷あり。		スギ	
45	39	79	R578	第2面	SD59		木製品		20.9	1.3	0.4	−					
45	39	80	R579	第2面	SD59		木製品		18.4	1.7	0.4	−					
45	39	81	R580	第2面	SD59		木製品		17.0	1.5	0.3	−					
45	39	82	R582	第2面	SD59		木製品		9.4	1.6	0.4	−					
45	39	83	R584	第2面	SD59		木製品		20.3	6.6	0.9	−					
45	39	84	R586	第2面	SD59		木製品		9.2	1.8	0.3	−					
45	40	85	R587	第2面	SD59		木製品		9.8	1.85	0.4	−					
46	40	86	R589	第2面	SD59		木製品		21.5	2.5	0.8	−		先端が焼けて炭化している。			
46	40	87	R590	第2面	SD59		木製品		22.1	1.5	0.4	−					
46	40	88	R593	第2面	SD59		木製品		17.0	3.5	0.4	−					
46	40	89	R594	第2面	SD59		木製品		19.2	1.3	0.7	−					
46	40	90	R595	第2面	SD59		木製品		19.7	1.6	0.3	−					
46	40	91	R597	第2面	SD59		木製品		19.3	2.0	0.9	−					
46	40	92	R598	第2面	SD59		木製品		11.3	3.3	0.4	−					
46	40	93	R591	第2面	SD59		木製品		38.2	2.4	0.9	−				スギ	
46	40	94	R588	第2面	SD59		木製品		68.9	3.4	1.1	−				スギ	
47	41	95	R599	第2面	SD59		木製品		22.1	6.0	2.4	−		ホゾ穴らしきものが開けられている		スギ	
47	41	96	R600	第2面	SD59		木製品		18.9	2.3	1.3	−		木釘あり		スギ	
47	41	97	R601	第2面	SD59		木製品		36.5	2.1	1.3	−		木釘あり		スギ	
47	41	98	R603	第2面	SD59		木製品		12.4	0.7	0.6	−					
47	41	99	R604	第2面	SD59		木製品		19.1	1.4	0.4	−					
47	41	100	R606	第2面	SD59		木製品	曲物	32.5	9.0	0.7	−		俎板に転用。包丁傷あり。		スギ	
47	41	101	R607	第2面	SD59		木製品		18.2	4.6	0.65	−					
48	41	102	R610	第2面	SD59		木製品		20.1	1.5	0.9	−					
48	42	103	R611	第2面	SD59		木製品		11.6	1.45	0.3	−					
48	42	104	R614	第2面	SD59		木製品		15.1	4.2	1.6	−					
48	42	105	R669	第2面	SD59		木製品		58.5	2.1	1.1	−				スギ	
48	42	106	R666	第2面	SD59		木製品		7.5	9.5	5.4	−					
48	42	107	R608	第2面	SD59		木製品		47.2	3.3	1.1	−				スギ	
48	42	108	R664	第2面	SD59		木製品		4.3	5.4	1.9	−		下駄の歯の可能性あり		スギ	
48	43	109	R616	第2面	SD59		木製品		27.0	12.85	6.7	−				サクラ属	

B地区

図面	図版	遺物番号	R番号	検出面	遺構番号	出土位置	種別	器種	口径(長さ)	底径(幅)	器高(厚さ)	重さ	遺存率	成・整形、技法等の特徴	色調	樹種石材	時期・備考
49	43	110	R671	第2面	SD59		木製品		17.3	4.6	0.3	−					
49	43	111	R678	第2面	SD59		木製品		17.3	1.0	0.6	−					
49	43	112	R679	第2面	SD59		木製品		21.8	1.2	0.6	−				スギ	
49	43	113	R683	第2面	SD59		木製品		8.1	4.3	1.1	−					
49	43	114	R545-1	第2面	SD59		木製品		15.1	4.3	3.8	−				スギ	
49	43	115	R545-11	第2面	SD59		木製品		40.8	2.5	0.6	−		先端が焼けて炭化している。		スギ	
49	44	116	R545-10	第2面	SD59		木製品		11.2	2.95	1.1	−				スギ	
49	44	117	R545-2	第2面	SD59		木製品		18.8	2.25	0.5	−				スギ	
49	44	118	R545-3	第2面	SD59		木製品		23.3	4.8	0.8	−				スギ	
49	44	119	R545-4	第2面	SD59		木製品		10.5	0.9	0.3	−				スギ	
49	44	120	R545-5	第2面	SD59		木製品		18.9	1.1	1.0	−				スギ	
49	44	121	R545-6	第2面	SD59		木製品		18.0	3.7	0.6	−				スギ	
49	44	122	R677	第2面	SD59		木製品		36.5	1.1	1.0	−		表面全体が焼けて炭化している。		スギ	
50	44	123	R545-7	第2面	SD59		木製品		17.7	1.45	0.8	−				スギ	
50	45	124	R545-8	第2面	SD59		木製品		16.7	4.7	0.8	−				スギ	
50	45	125	R545-9	第2面	SD59		木製品		11.2	1.5	0.5	−				スギ	
50	45	126	R557-2	第2面	SD59		木製品		10.7	3.4	0.8	−					
50	45	127	R557-1	第2面	SD59		木製品		31.4	4.35	0.9	−		釘穴6ヶ所		スギ	
50	45	128	R617-4	第2面	SD59		木製品		72.8	3.9	1.3	−					
50	45	129	R617-1	第2面	SD59		木製品		11.0	0.8	0.8	−					
50	45	130	R617-2	第2面	SD59		木製品		10.9	0.5	0.5	−					
50	45	131	R612-1	第2面	SD59		木製品		23.8	2.3	1.3	−		先端が焼けて炭化している。			
50	45	132	R612-2	第2面	SD59		木製品		22.9	1.4	1.4	−		先端が焼けて炭化している。			
50	46	133	R617-3	第2面	SD59		木製品		28.7	3.85	3.3	−		先端が焼けて炭化している。			
50	46	134	R617-5	第2面	SD59		木製品		23.6	4.7	1.7	−		先端が焼けて炭化している。			
51	46	135	R617-6	第2面	SD59		木製品		33.3	3.1	1.05	−		先端が焼けて炭化している。			
51	46	136	R617-7	第2面	SD59		木製品		12.4	2.0	0.9	−					
51	46	137	R653-1	第2面	SD59		木製品		42.1	2.2	1.3	−				スギ	
51	46	138	R653-2	第2面	SD59		木製品		27.5	4.5	1.0	−				スギ	
51	46	139	R653-3	第2面	SD59		木製品		13.7	4.7	0.7	−		片面全体が焼けて炭化している。		スギ	
51	46	140	R653-4	第2面	SD59		木製品		6.2	2.4	2.0	−		先端が焼けて炭化している。		スギ	
51	47	141	R655-1	第2面	SD59		木製品		8.4	4.1	0.6	−					
51	47	142	R655-2	第2面	SD59		木製品		8.0	4.2	0.6	−					
51	47	143	R575	第2面	SD59		自然遺体		2.8	7.8	2.4	−				ヒョウタン	
52	48	144	R227	第2面		B-6	土師器	高坏	−	−	−	−	皿部一部	表面の風化顕著。調整不明瞭。	褐色		4C前(漆町5・6群)
52	48	145	R113	第2面		B-3	土師器	高坏	−	−	−	−	脚部	内面ケズリ	褐色		4C前(漆町5・6群)
52	48	146	R001	第1面		包含層	土師器	高坏	−	−	−	−	脚部片	焼成は比較的良いといえる	橙		4C前(漆町5・6群)
52	48	147	R039	第2面		D-5	土師器	壺	(12.1)	−	−	−	破片	頸部を意識したはっきりした稜をつくる外面に比べ内面はなめらか。	橙色		4C前(漆町5・6群)
52	48	148	R527	第2面		Z-4	土師器	壺	(19.6)	−	−	−	口縁部片	有段の口縁部で、やや外反。器表面の風化が顕著	淡黄橙		4C前(漆町5・6群)
52	48	149	R527	第2面		Z-4	土師器	壺	−	−	−	−	頸部～胴部	接合痕が認められる、器表面の風化が顕著	淡黄橙		4C前(漆町5・6群)
52	48	150	R335	第2面		A-5	土師器	小型甕	(11.2)	5.0	8.9	−	1/4	外面は口縁部を除いた全体にハケメ。口縁部は内部のみハケメ。	橙		4C前(漆町5・6群)

B地区

図面	図版	遺物番号	R番号	検出面	遺構番号	出土位置	種別	器種	口径(長さ)	底径(幅)	器高(厚さ)	重さ	遺存率	成・整形、技法等の特徴	色調	樹種石材	時期・備考
52	48	151	R359	第2面		Z-4	土師器	甕	(22.8)	—	—	—	口縁部片	ほぼ直線的に立ち上がる。器表面の風化が顕著	淡黄橙		4C前(漆町5・6群)
52	48	152	R001/R238/R287	第2面		A-1 A-2	須恵器	蓋	(17.6)	—	—	—	1/5	上部回転ヘラ削り、歪み顕著。	灰色		9C前(田嶋Ⅳ2新)
52	48	153	R240/R366	第2面		A-1 A-2	須恵器	蓋	(17.1)	ツマミ 2.6	4.2	—	2/3	上部回転ヘラ削り後ナデ	灰色		9C中(田嶋Ⅴ1)
52	48	154	R408	第2面		A-3	須恵器	蓋	(11.0)	—	<1.7>	—	1/3	上部回転ヘラ削り後ナデ	灰色		9C中(田嶋Ⅴ1)
52	48	155	R101	第2面		A-5	須恵器	蓋	(12.2)	ツマミ 2.0	3.0	—	1/4	上部回転ヘラ削り	灰色		9C中(田嶋Ⅴ1)
52	48	156	R111	第2面		A-6	須恵器	蓋	(11.9)	ツマミ 2.4	2.0	—	1/2	上部回転ヘラ削り	暗灰色		9C中(田嶋Ⅴ2)
52	48	157	R168/R171	第2面		A-6	須恵器	蓋	(14.4)	—	—	—	1/4	上部回転ヘラ削り	灰色		9C中(田嶋Ⅴ1)
52	48	158	R378	第2面		B-6	須恵器	蓋	(14.0)	ツマミ 2.6	2.4	—	1/4	上部回転ヘラ削り、墨付着、内面転用硯	灰色		9C中(田嶋Ⅴ2)
52	48	159	R554	第2面		D-4	須恵器	蓋	(12.6)	ツマミ 2.6	3.0	—	1/3	焼成不良、上部回転ヘラ削り	淡黄橙		9C前 (田嶋Ⅳ2新)
52	48	160	R376	第2面		Z-1	須恵器	蓋	(15.5)	ツマミ 3.3	3.0	—	1/3	上部回転ヘラ削り後ナデ。ツマミ直下に漆付着。内面に磨耗がみられ、硯に転用された可能性あり。	黄灰色		9C前(田嶋Ⅳ2新)
52	49	161	R001/R346	第2面		Z-2	須恵器	蓋	(19.8)	ツマミ 2.8	2.2	—	1/4	内面に磨耗が見られ硯に転用の可能性あり	灰色		9C前(田嶋Ⅳ2新)
52	49	162	R001/R329/R360	第2面		A-2 Z-2	須恵器	蓋	(12.0)	ツマミ(1.9)	(2.7)	—	1/3	上部回転ヘラ削り	灰色		9C中(田嶋Ⅴ1)
52	49	163	R435	第2面		Z-3	須恵器	蓋	12.2	ツマミ 2.3	2.9	—	完形	上部回転ヘラ削り後ナデ	灰色		9C中(田嶋Ⅴ1)
52	49	164	R459	第2面		Z-3	須恵器	蓋	13.1	ツマミ 2.1	2.4	—	ほぼ完形	上部回転ヘラ削り後ナデ	灰白色		9C前 (田嶋Ⅳ2新)
52	49	165	R416/R442/R456/R504	第2面		Z-3	須恵器	蓋	17.2	—	—	—	2/3	上部回転ヘラ削り。裏面に漆記号・墨付着。蓋を硯に転用している。ツマミを意図的に打ち欠いている可能性あり。	灰白色		9C前(田嶋Ⅳ2新)
52	49	166	R440	第2面		Z-3	須恵器	蓋	(11.0)	(7.2)	(3.1)	—	破片	内面に磨耗が見られ硯に転用された可能性あり。ヘラ記号。	灰色		9C前(田嶋Ⅳ2新)
52	49	167	R347	第2面		Z-4	須恵器	蓋	(11.7)	ツマミ 2.1	2.9	—	2/3	内部にヘラ記号	灰色		9C中(田嶋Ⅴ1)
53	49	168	R164	第2面		Z-4	須恵器	蓋	(19.0)	—	—	—	破片	上部回転ヘラ削り	灰色		9C前(田嶋Ⅳ2新)
53	49	169	R001/R363	第2面		Z-4	須恵器	蓋	(11.9)	ツマミ 2.2	2.4	—	2/3	上部回転ヘラ削り	灰色		9C前(田嶋Ⅳ2新)
53	49	170	R363	第2面		Z-4	須恵器	蓋	—	—	—	—	破片	上部回転ヘラ削り、外面にヘラ記号	灰色		9C中(田嶋Ⅴ1)
53	49	171	R384/R533	第2面		Z-4	須恵器	蓋	(13.0)	ツマミ 2.4	2.6	—	1/5	上部回転ヘラ削り、内面磨耗。転用硯の可能性あり。	灰色		9C前(田嶋Ⅳ2新)
53	49	172	R631	第2面		Z-4	須恵器	蓋	—	ツマミ 2.4	—	—	破片	上部回転ヘラ削り後ナデ。内面に「未」、外面に「万呂」の墨書あり。	灰白色		9C後(田嶋Ⅵ1)
53	49	173	R165/R178	第2面		Z-5	須恵器	蓋	(12.1)	ツマミ 2.6	(4.4)	—	2/3	内外面に多量の灰釉が付着	灰色		8C中(田嶋Ⅳ1)
53	49	174	R348	第2面		Z-6	須恵器	蓋	—	ツマミ 2.8	—	—	破片	上部回転ヘラ削り	灰白色		8C中(田嶋Ⅳ1)
53	50	175	R001	第1面		包含層	須恵器	蓋	(19.6)	—	—	—	1/3	上部回転ヘラ削り、外面に自然釉。	灰色		9C前(田嶋Ⅳ2新)
53	50	176	R001	第1面		包含層	須恵器	蓋	—	—	—	—	破片	上部回転ヘラ削り	灰色		9C中(田嶋Ⅴ1)
53	50	177	R001	第1面		包含層	須恵器	蓋	(11.2)	ツマミ 2.5	2.6	—	1/2	上部回転ヘラ削り、内面磨耗。転用硯の可能性あり。	赤灰色		9C前(田嶋Ⅳ2新)
53	50	178	R001	第1面		包含層	須恵器	蓋	(12.4)	ツマミ 2.2	3.0	—	1/4	上部回転ヘラ削り後ナデ	灰白色		9C中(田嶋Ⅴ2)
53	50	179	R405	第2面		A-1	須恵器	坏	11.3	(7.4)	4.0	—	1/3	底部回転ヘラ切り、貼付高台	灰白色		9C中(田嶋Ⅴ2)
53	50	180	R240	第2面		A-1	須恵器	坏	(11.2)	—	—	—	口縁部片	内面に漆付着	灰色		9C前(田嶋Ⅳ2新)
53	50	181	R286/R329	第2面		A-1 Z-2	須恵器	坏	11.6	6.8	3.4	—	2/3	底部右回転糸切り、外面ヘラ記号	灰色		9C中(田嶋Ⅴ1)
53	50	182	R196	第2面		A-2	須恵器	坏	(12.9)	(9.0)	3.4	—	1/3	底部回転ヘラ切り	灰白色		9C前(田嶋Ⅳ2新)
53	50	183	R239	第2面		A-2	須恵器	坏	(11.8)	8.0	3.2	—	1/3	底部回転ヘラ切り	浅黄色		9C前(田嶋Ⅳ2新)
53	50	184	R097/R196	第2面		A-2	須恵器	坏	(10.3)	(7.0)	3.9	—	1/2	底部回転ヘラ切り、底部に漆記号、貼付高台	灰色		9C前(田嶋Ⅳ2新)
53	50	185	R099	第2面		A-3	須恵器	坏	(12.0)	(7.6)	3.5	—	2/3	底部回転ヘラ切り。内面に漆付着	灰色		9C中(田嶋・1) AMS MAZ14-10(漆膜) 1210±50BP 1σ770AD(62.5%)890AD

B地区

図面	図版	遺物番号	R番号	検出面	遺構番号	出土位置	種別	器種	口径(長さ)	底径(幅)	器高(厚さ)	重さ	遺存率	成・整形、技法等の特徴	色調	樹種石材	時期・備考
53	50	186	R354	第2面		A-5	須恵器	坏	—	(8.0)	—	—	底部片	底部回転ヘラ切り、底部ヘラ記号、漆付着	灰色		9C前(田嶋Ⅳ2新)
53	50	187	R407/R528	第2面		A-5 A-6	須恵器	坏	(11.2)	(7.0)	3.0	—	1/2	底部回転ヘラ切り、内面漆付着、底部藁状圧痕あり	灰色		9C後(田嶋Ⅵ1)
53	50	188	R407	第2面		A-5	須恵器	坏	(11.2)	7.7	3.4	—	底部片	底部回転ヘラ切り	灰白色		9C後(田嶋Ⅵ1)
53	50	189	R089/R339	第2面		A-5 B-5	須恵器	坏	10.8	7.2	3.7	—	1/2	底部に漆記号、貼付高台	灰色		9C前(田嶋Ⅳ2新)
53	50	190	R112	第2面		B-3	須恵器	坏	—	—	—	—	底部片	底部回転ヘラ切り、底部に墨書・ヘラ記号	灰色		9C前(田嶋Ⅳ2新)
53	50	191	R316	第2面		B-4	須恵器	坏	11.8	7.5	3.1	—	一部欠損	底部回転ヘラ切り	灰色		9C中(田嶋Ⅴ1)
54	50	192	R327/R361	第2面		B-4	須恵器	坏	(13.3)	(8.5)	3.2	—	2/3	底部回転ヘラ切り	浅黄色		9C中(田嶋Ⅴ2)
54	50	193	R300	第2面		B-5	須恵器	坏	—	(9.5)	—	—	底部片	底部にヘラ記号、貼付高台	灰色		9C前(田嶋Ⅳ2新)
54	51	194	R301	第2面		B-5	須恵器	坏	(12.2)	(9.0)	3.1	—	1/3	底部回転ヘラ切り	灰白色		9C中(田嶋Ⅴ2)
54	51	195	R094	第2面		B-6	須恵器	坏	(12.8)	9.5	3.4	—	2/3	底部回転ヘラ切り後ナデ	灰白色		9C前(田嶋Ⅳ2新)
54	51	196	R310	第2面		Z-1	須恵器	坏	(11.8)	—	—	—	口縁部片	口縁部内に煤付着、灯明皿として使用	灰白色		9C後(田嶋Ⅵ1)
54	51	197	R103	第2面		Z-2	須恵器	坏	(12.0)	(6.5)	4.2	—	1/2	貼付高台	灰白色		9C前(田嶋Ⅳ2新)
54	51	198	R103	第2面		Z-2	須恵器	坏	—	(7.5)	—	—	底部片	底部回転ヘラ切り、底部に漆付着	灰黄色		9C前(田嶋Ⅳ2新)
54	51	199	R329	第2面		Z-2	須恵器	坏	(11.4)	6.5	3.2	—	2/3	底部回転ヘラ切り、底部ヘラ記号「大」	灰黄色		8C後(田嶋Ⅳ2古)
54	51	200	R329	第2面		Z-2	須恵器	坏	(11.4)	7.2	4.1	—	1/2	貼付高台	灰色		9C前(田嶋Ⅳ2新)
54	51	201	R329	第2面		Z-2	須恵器	坏	(10.4)	6.8	4.7	—	2/3	底部回転ヘラ切り、底部に漆付着、貼付高台	明紫灰色		8C後(田嶋Ⅳ2古)
54	51	202	R329	第2面		Z-2	須恵器	坏	—	—	—	—	底部片	底部にヘラ記号	灰色		9C前(田嶋Ⅳ2新)
54	51	203	R329	第2面		Z-2	須恵器	坏	—	(8.6)	—	—	底部片	底部回転ヘラ切り後ナデ、底部に漆記号	灰白色		9C前(田嶋Ⅳ2新)
54	51	204	R329	第2面		Z-2	須恵器	坏	(11.6)	(7.2)	2.9	—	1/4	底部回転ヘラ切り、体部外面に漆付着	灰黄色		9C後(田嶋Ⅵ1)
54	51	205	R329	第2面		Z-2	須恵器	坏	(11.0)	(7.0)	(2.7)	—	1/4	底部回転ヘラ切り	灰白色		9C前(田嶋Ⅳ2新)
54	51	206	R346	第2面		Z-2	須恵器	坏	(12.0)	(7.2)	3.1	—	1/2	底部回転ヘラ切り後ナデ	灰色		9C前(田嶋Ⅳ2新)
54	51	207	R346	第2面		Z-2	須恵器	坏	(12.0)	(7.5)	3.2	—	2/3	底部回転ヘラ切り、底部に墨書「成」	灰白色		9C中(田嶋Ⅴ1)
54	51	208	R220	第2面		Z-3	須恵器	坏	(10.8)	(7.4)	3.2	—	1/4	底部回転ヘラ切り	灰白色		9C前(田嶋Ⅳ2新)
54	51	209	R410/R416/ R475/R476	第2面		Z-3	須恵器	坏	11.2	(8.0)	3.3	—	2/3	底部回転ヘラ切り、口縁内外面煤付着。灯明皿として使用	灰色		9C中(田嶋Ⅴ1)
54	52	210	R441	第2面		Z-3	須恵器	坏	(11.8)	(7.6)	3.6	—	1/3	貼付高台、底部ヘラ記号	灰色		8C後(田嶋Ⅳ2古)
55	52	211	R451/R453/ R503	第2面		Z-3	須恵器	坏	(11.9)	—	—	—	口縁部～底部片	口縁部内外面に煤付着、灯明皿として使用	灰色		9C中(田嶋Ⅴ1)
55	52	212	R453	第2面		Z-3	須恵器	坏	(11.2)	7.1	4.4	—	2/3	底部回転ヘラ切り後板ナデ、底部内面ナデ、貼付高台	灰白色		9C前(田嶋Ⅳ2新)
55	52	213	R461	第2面		Z-3	須恵器	坏	11.1	7.5	3.0	—	一部欠損	底部回転ヘラ切り、底部内面ナデ	灰色		9C後(田嶋Ⅵ1)
55	52	214	R462	第2面		Z-3	須恵器	坏	(12.0)	(7.4)	2.9	—	1/4	底部回転ヘラ切り後板ナデ	灰黄色		9C中(田嶋Ⅴ2)
55	52	215	R463	第2面		Z-3	須恵器	坏	(11.4)	(7.8)	3.1	—	1/4	底部回転ヘラ切り後ナデ	灰白色		9C中(田嶋Ⅴ2)
55	52	216	R468	第2面		Z-3	須恵器	坏	10.9	6.9	4.5	—	口縁部一部欠損	底部回転ヘラ切り、底部に漆及び漆記号。貼付高台。転用硯の可能性あり。	灰白色		9C前(田嶋Ⅳ2新)
55	52	217	R469	第2面		Z-3	須恵器	坏	10.8	7.8	2.9	—	口縁部一部欠損	底部回転ヘラ切り後ハケ状工具によるナデ、底部漆記号	灰色		9C前(田嶋Ⅳ2新)
55	52	218	R477	第2面		Z-3	須恵器	坏	(11.4)	(7.0)	2.9	—	1/3	底部回転ヘラ切り、底部ヘラ記号	灰白色		9C中(田嶋Ⅴ1)
55	52	219	R480	第2面		Z-3	須恵器	坏	11.7	6.7	3.1	—	完形	底部回転糸切り。口縁部内外面煤付着。灯明皿として使用。外面にヘラ記号。	灰褐色		9C中(田嶋Ⅴ1)
55	52	220	R484/R515	第2面		Z-3	須恵器	坏	11.7	8.5	3.2	—	1/2	底部回転ヘラ切り、口縁部内外面に煤付着、灯明皿として使用か	灰色		9C中(田嶋Ⅴ1)
55	52	221	R492	第2面		Z-3	須恵器	坏	11.8	8.0	3.0	—	口縁部一部欠損	底部回転ヘラ切り、口縁部内外面に煤付着、灯明皿として使用	明赤灰色		9C中(田嶋Ⅴ2)
56	52	222	R506	第2面		Z-3	須恵器	坏	—	(8.0)	—	—	底部片	底部回転ヘラ切り、底部に漆記号の痕跡あり	灰色		9C前(田嶋Ⅳ2新)

B地区

図面	図版	遺物番号	R番号	検出面	遺構番号	出土位置	種別	器種	口径(長さ)	底径(幅)	器高(厚さ)	重さ	遺存率	成・整形、技法等の特徴	色調	樹種石材	時期・備考
56	52	223	R509/R522	第2面		Z-3	須恵器	坏	(12.3)	8.4	3.3	−	一部欠損	底部回転ヘラ切り後板ナデ	灰黄色		9C前(田嶋Ⅳ2新)
56	52	224	R513	第2面		Z-3	須恵器	坏	(12.3)	(3.0)	(8.0)	−	口縁部片	底部回転ヘラ切り、内面に漆紙付着、外面にも漆付着	暗灰色		9C中(田嶋Ⅴ2) AMS MAZ14-2(漆膜) 1230±50BP 1σ760AD(54.0%)890AD
56	53	225	R516/R517	第2面		Z-3	須恵器	坏	(11.3)	(7.0)	3.8	−	1/3	貼付高台	灰白色		9C中(田嶋Ⅴ1)
56	53	226	R542	第2面		Z-3	須恵器	坏	(11.1)	(8.0)	3.6	−	1/3	底部回転ヘラ切り	灰色		9C前(田嶋Ⅳ2新)
56	53	227	R396	第2面		Z-4	須恵器	坏	11.7	8.0	3.4	−	一部欠損	底部回転ヘラ切り、底部ヘラ記号	灰白色		9C前(田嶋Ⅳ2新)
56	53	228	R649	第2面		Z-4	須恵器	坏	(12.2)	−	−	−	口縁部片	口縁部内に煤付着、灯明皿として使用	灰色		9C中(田嶋Ⅴ1)
56	53	229	R001	第1面		包含層	須恵器	坏	(11.0)	(7.2)	(3.1)	−	1/4	底部回転ヘラ切り	灰色		9C前(田嶋Ⅳ2新)
56	53	230	R001	第1面		包含層	須恵器	坏	(12.4)	(8.0)	3.2	−	1/4	底部回転ヘラ切り	灰白色		9C前(田嶋Ⅳ2新)
56	53	231	R001	第1面		包含層	須恵器	坏	(12.6)	(8.6)	3.2	−	1/2	底部回転ヘラ切り、内面に磨耗が見られる。転用硯の可能性あり。	灰白色		9C中(田嶋Ⅴ1)
56	53	232	R001	第1面		包含層	須恵器	坏	(11.0)	(8.0)	−	−	底部片	底部回転ヘラ切り。底部に漆記号	灰白色		9C中(田嶋Ⅴ2)
56	53	233	R001	第1面		包含層	須恵器	坏	(11.0)	−	−	−	口縁片	内側に漆が塊で付着、外面にヘラ記号	灰白色		9C中(田嶋Ⅴ1)
56	53	234	R124	第2面		包含層	須恵器	坏	(12.3)	(8.4)	2.9	−	1/4	底部回転ヘラ切り、内面に漆付着か	灰色		9C前(田嶋Ⅳ2新)
56	53	235	R394	第2面		包含層	須恵器	坏	(12.0)	4.0	3.8	−	1/3	底部回転ヘラ切り	暗灰色		9C前(田嶋Ⅳ2新)
56	53	236	R619	第2面		包含層	須恵器	坏	10.9	8.0	2.5	−	完形	底部回転ヘラ切り	灰色		9C中(田嶋Ⅴ2)
56	53	237	R347/R410/ R627/R632	第2面		Z-3 Z-4	須恵器	椀	(16.4)	9.4	7.0	−	1/3	内側に漆紙の痕跡があるが、紙質の残存は認められない。貼付高台	灰色		9C中(田嶋Ⅴ2) AMS(漆膜) MAZ14-5 1240±50BP 1σ690AD(68.2%)870AD AMS14-16 1280±50BP 1σ670AD(68.2%)780AD AMS14-17 1260±50BP 1σ680AD(64.7%)810AD ※分析した3点は整理作業時に同一個体と判明した。
56	53	238	R443/R471/ R473	第2面		Z-3	須恵器	椀	(14.4)	(8.7)	6.5	−	1/2	貼付高台、外面に自然釉付着、底部内面ナデ	灰色		9C前(田嶋Ⅳ2新)
57	53	239	R395/R474/ R493/R494	第2面		Z-3	須恵器	長頸瓶	9.8	9.8	23.5	−	底部完存、胴部から口縁部約7割残存	自然釉付着。貼付高台。	灰白色		9C前(田嶋Ⅳ2新)
57	53	240	R049/R105/ R166/R354/ R355/R377	第2面		A-5 A-6 Z-5	須恵器	瓶	−	9.0	−	−	底部片	底部にヘラ記号、貼付高台	灰白色		9C中(田嶋Ⅴ1)
57	53	241	R445/R542/ R547	第2面		Z-3	須恵器	広口壺	15.0	−	−	−	口縁部～頸部片	内外面に釉付着。頸部に横位の平行沈線三条	暗灰色		8C後(田嶋Ⅳ2古)
57	54	242	R394	第2面		トレンチ1包含層	須恵器	鉢	20.3	(10.0)	9.8	−	1/6	底部回転糸切り、内外面釉付着	灰色		9C前(田嶋Ⅳ2新)
57	54	243	R001	第1面		包含層	須恵器	鉢	(32.0)	−	−	−	口縁片	内面にヘラ書きの痕跡あり。判読は不可能である。	灰色		8C後(田嶋Ⅳ2古)
57	54	244	R395/R425/ R487/R523/ R527	第2面		Z-3 Z-4	須恵器	甕	(52.4)	−	−	−	口縁片	ハケメ後ナデ消し、外面口縁部付近に波状紋	灰色		7C末(田嶋Ⅱ2)か?

B地区

図面	図版	遺物番号	R番号	検出面	遺構番号	出土位置	種別	器種	口径(長さ)	底径(幅)	器高(厚さ)	重さ	遺存率	成・整形、技法等の特徴	色調	樹種石材	時期・備考
57	54	245	R001/R421/R422/R423/R424/R427/R430/R431/R446/R447/R448/R449/R465/R470/R479/R481/R482/R486/R488/R490/R496/R507/R512/R645/R650	第2面	(SB02 P7)	Z-3	須恵器	甕	−	6.4	<30.5>	−	胴部～底部	外面にタタキ目、内面にあて具痕	灰色		8C後(田嶋Ⅳ2古)
58	54	247	R106	第2面		A-4	土製品	土錘	5.2	−	孔径 (1.7)	−	1/2	焼成は良いとはいえない	浅黄色		中世
58	54	248	R106	第2面		A-4	土製品	土錘	5.2	(5.0)	孔径 (1.5)	−	1/4	焼成は良いとはいえない	浅黄色		中世
58	54	249	R111	第2面		A-6	土製品	土錘	5.6	4.5	孔径 1.9	−	完形	焼成は比較的良いといえる	浅黄色		中世
58	54	250	R056	第2面		B-5	土製品	土錘	4.8	4.7	孔径 1.6	−	完形	焼成は良いとはいえない	浅黄色		中世
58	54	251	R305	第2面		C-4	土製品	土錘	6.0	5.8	孔径 1.7	−	完形	焼成は良いとはいえない	浅黄色		中世
58	54	252	R045	第2面		C-5	土製品	土錘	5.5	5.5	孔径 1.3	−	一部欠損	焼成は良いとはいえない	褐色		中世
58	54	253	R039	第2面		D-5	土製品	土錘	5.3	(4.7)	孔径 (1.6)	−	1/3	焼成は比較的良いといえる	淡黄橙		中世
58	54	254	R001	第1面		包含層	土製品	土錘	5.0	5.3	孔径 1.5	−	一部欠損	焼成は比較的良いといえる	淡黄橙		中世
58	54	255	R001	第1面		包含層	土製品	土錘	3.7	3.0	孔径 1.1	−	一部欠損	焼成は比較的良いといえる	橙		中世
58	54	256	R001	第1面		包含層	土製品	土錘	(5.7)	1.5	孔径 1.5	−	一部欠損	焼成は比較的良いといえる	淡黄		中世
58	54	257	R001	第1面		包含層	土師質土器		(8.3)	(6.9)	1.7	−	1/4	底部回転糸切り、内面に煤付着、灯明皿として使用	淡黄橙		中世
58	54	258	R109	第2面		A-5	古銭	元祐通寶	−	−	−	1.9 g	完形				中世
59	55	259	R406	第2面		A-5	木製品		12.35	5.2	1.2	−					
59	55	260	R553-1	第2面		Z-3	木製品		18.7	2.4	1.0	−		先端が焼けて炭化している			
59	55	261	R553-2	第2面		Z-3	木製品		10.7	5.2	0.7	−					
59	55	262	R519	第2面		Z-3	木製品		29.3	7.8	1.1	−					
59	56	263	R520	第2面		Z-3	木製品		63.9	7.3	2.1	−					
59	56	264	R397	第2面		トレンチ1	木製品		8.7	5.2	4.9	−				アサダ	
60	56	265	R002	第1面		包含層	石製品	勾玉	1.7	1.0	0.6	0.8 g	完形	表面に荒い研磨痕が見られる		碧玉	古墳時代
60	56	266	R527	第2面		Z-4	石製品	打製石斧	19.4	9.0	3.2	632 g	刃部欠損	中央よりやや上にくびれあり、鍬の可能性大		閃緑岩	
60	56	267	R001	第1面		包含層	石製品	打製石斧	(14.1)	(9.6)	(3.8)	508 g	基部欠損	中央よりやや上にくびれあり、刃部両面に磨耗が認められる		閃緑岩	
60	56	268	R090	第2面		B-3	石製品	硯	(6.4)	(4.9)	0.5	34 g	破片	下端部のみ残存		粘板岩	
60	56	269	R030/R074	第2面		B-6	石製品	砥石	5.7	4.4	3.9	125 g	完形	4面に研磨が認められる		石灰質砂岩	
60	56	270	R329	第2面		Z-2	石製品	砥石	(5.3)	(4.1)	(2.8)	41 g	破片	2面に研磨が認められる、片面は欠損面を使用		石灰質砂岩	
60	56	271	R001	第1面		包含層	石製品	砥石	11.6	6.9	2.4	285 g	完形	4面に研磨が認められる、1面は顕著だが、他の面は一部に使用が認められるのみ		石灰質砂岩	

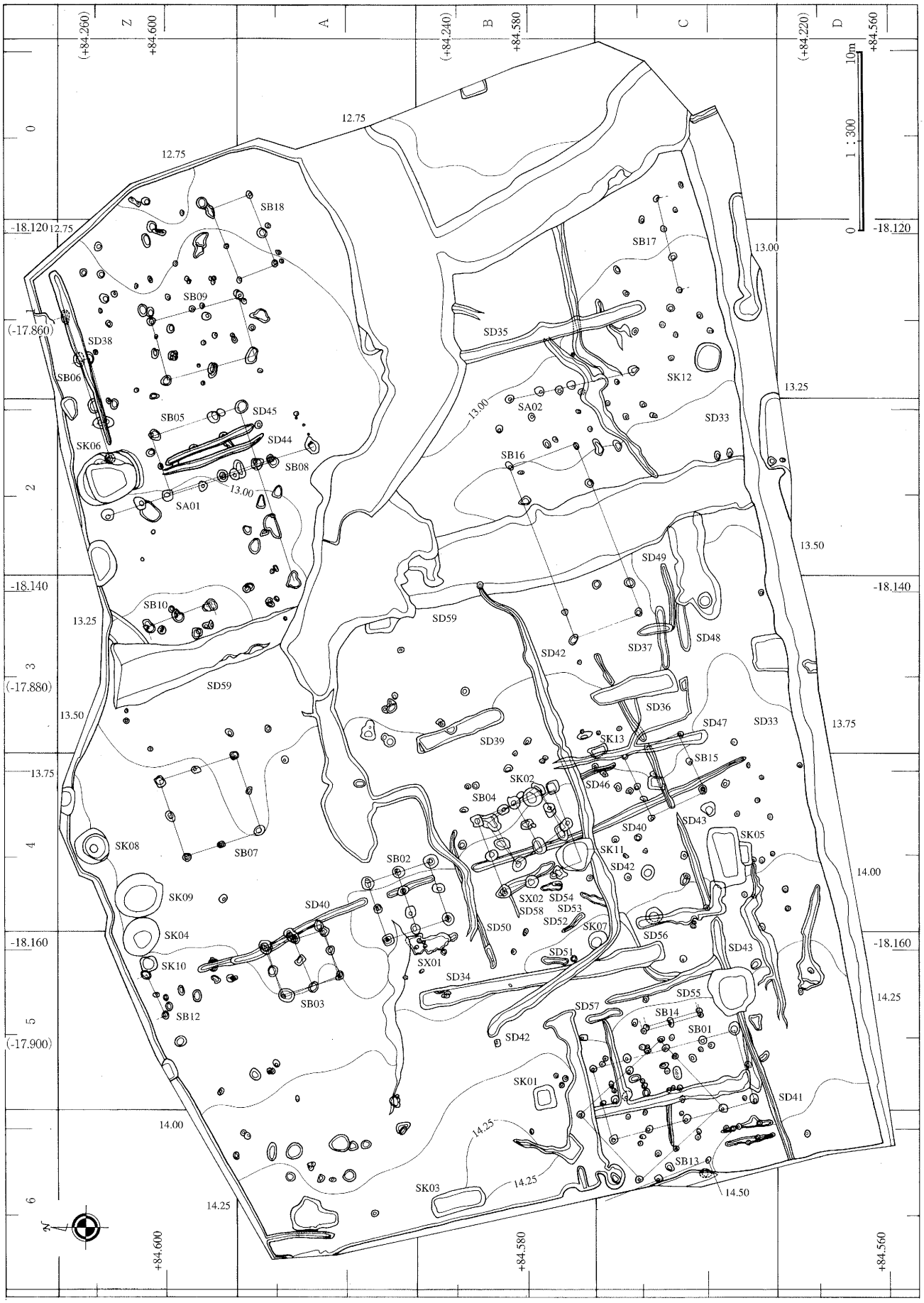
C地区

図面	図版	遺物番号	R番号	検出面	遺構番号	出土位置	種別	器種	口径(長さ)	底径(幅)	器高(厚さ)	重さ	遺存率	成・整形、技法等の特徴	色調	樹種石材	時期・備考
61	53	272	R1028	第2面相当	SK01		須恵器	蓋	(14.4)	−	−	−	1/6	上部回転ヘラ削り	灰白色		9世紀
61	53	273	R1034	第2面相当	SK14		須恵器	甕	−	−	−	−	胴部片	外面タタキ目、内面当具痕	暗灰色		9世紀
61	53	274	R1009/R1023	第2面相当	SD08	C-3	土師器	壺	(16.3)	−	−	−	口縁～胴部	僅かにハケメが認められる。	淡黄色		漆町編年5・6群
61	53	275	R1009/R1039	第2面相当	SD08	C-3	土師器	小型台付甕	(15.0)	(8.4)	(9.6)	−	口縁部・底部一部欠損	ヘラ削り後ナデ、ミガキが認められる。貼付高台	淡黄色		漆町編年5・6群
61	53	276	R1021	第2面相当	SP30		土師質土器		9.7	5.8	3.9	−	完形	底部回転糸切り（向き不明）、貼付高台	淡黄色		11世紀
61	53	277	R1022	第2面相当	SP31		須恵器	坏	(13.4)	9.1	4.2	−	2/3	底部回転ヘラ切り後ナデ、内面に磨耗が見られ、外面に付着物あり。貼付高台	灰黄色		9世紀
61	53	278	R1009	第2面相当		C-3	土師器	高坏	−	−	−	−	皿部分一部	内外面に赤彩、ヘラ磨き	黄橙		漆町編年5・6群
61	53	279	R1006	第2面相当		C-2	土師器	高坏	−	−	−	−	胴部片	内面ケズリ後ナデ	淡黄橙		漆町編年5・6群
61	53	280	R1003/R1009	第2面相当		C-3	土師器	高坏	−	−	−	−	脚部破片	内面ケズリ	黄橙		漆町編年5・6群
61	53	281	R1006	第2面相当		C-2	土師器	器台	(8.8)	(12.3)	(7.9)	−	1/5	脚部上方に円形の小スカシが認められる。孔数は3箇所と判断される。	淡黄橙		漆町編年5・6群
61	53	282	R1009	第2面相当		C-3	土師器	器台	(9.9)	12.3	7.3	−	底部一部欠損	脚部上方に円形の小スカシが認められる。孔数は3箇所と判断される。	淡黄橙		漆町編年5・6群
61	53	283	R1009	第2面相当		C-3	土師器	高坏又は器台	−	−	−	−	脚部破片	口縁部内外面及び外面全体に赤彩	黄橙		漆町編年5・6群
61	53	284	R1020	第2面相当		B-2	土師器	壺	(13.5)	−	−	−	口縁～頸部片	内外面にハケメ。接合痕が確認できる。「コ」の字開口する。	橙		漆町編年5・6群
61	53	285	R1004	第2面相当		B-2	須恵器	坏	(12.7)	(9.0)	3.6	−	1/4	底部回転ヘラ切り	黄橙		9世紀
61	54	286	R1013	第2面相当		C-3	須恵器	坏	−	−	(8.0)	−	底部片	底部回転ヘラ切り、内部に磨耗が見られる、貼付高台	灰色		9世紀
61	54	287	R1006	第2面相当		C-2	須恵器	瓶	(11.6)	−	−	−	口縁部片	自然釉付着	暗灰色		9世紀
61	54	288	R1003	第2面相当		包含層	須恵器	擂鉢	−	−	−	−	口縁部片	櫛目幅3㎝、13本。間隔を密に施条。外面下方にスス付着。"	暗灰色		9世紀
61	54	289	R1001	第2面相当		包含層	石製品	打製石斧	11.6	6.6	2.5	209g	完形			安山岩	
61	54	290	R1002	第2面相当		包含層	石製品	打製石斧	(6.3)	(7.3)	(2.1)	140g	基部・刃部欠損			砂岩	

図　　面

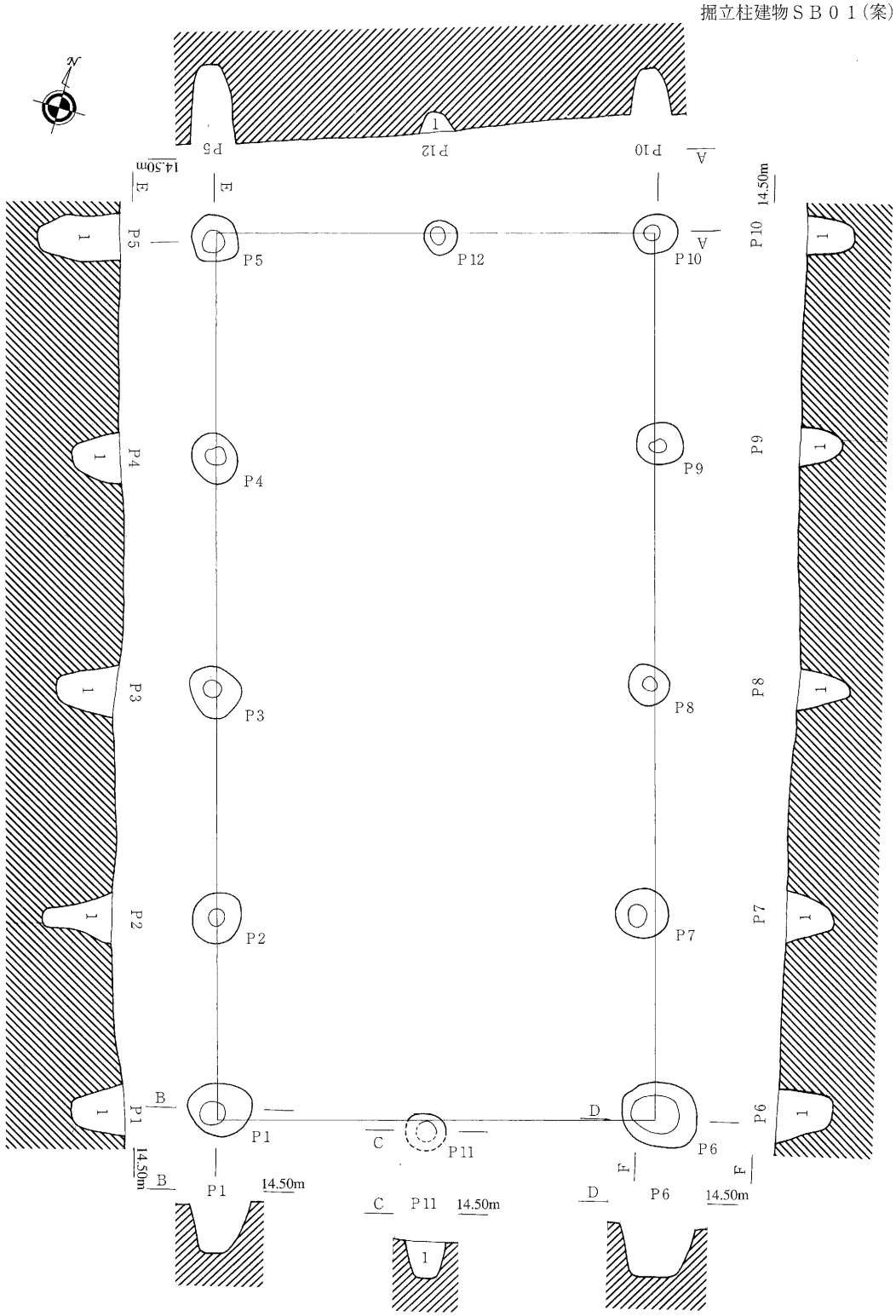
B地区第１面遺構配置図　　縮尺１／300

図面〇二　遺構実測図



B地区第２面遺構配置図　　縮尺１／300

掘立柱建物ＳＢ０１（案）

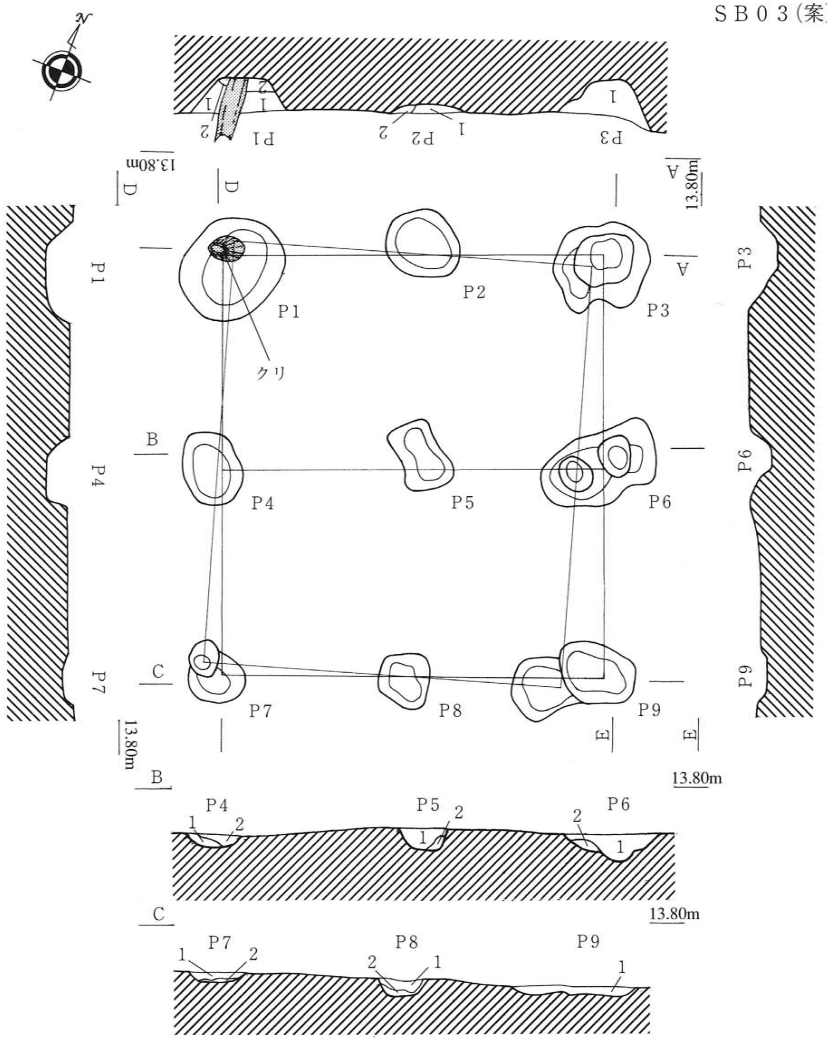


1．黒褐色土：やや粘りあり。締りあり。

0　1：60　2m

［Ｂ地区］掘立柱建物ＳＢ01（案）　　縮尺１／60

掘立柱建物
ＳＢ０３（案）

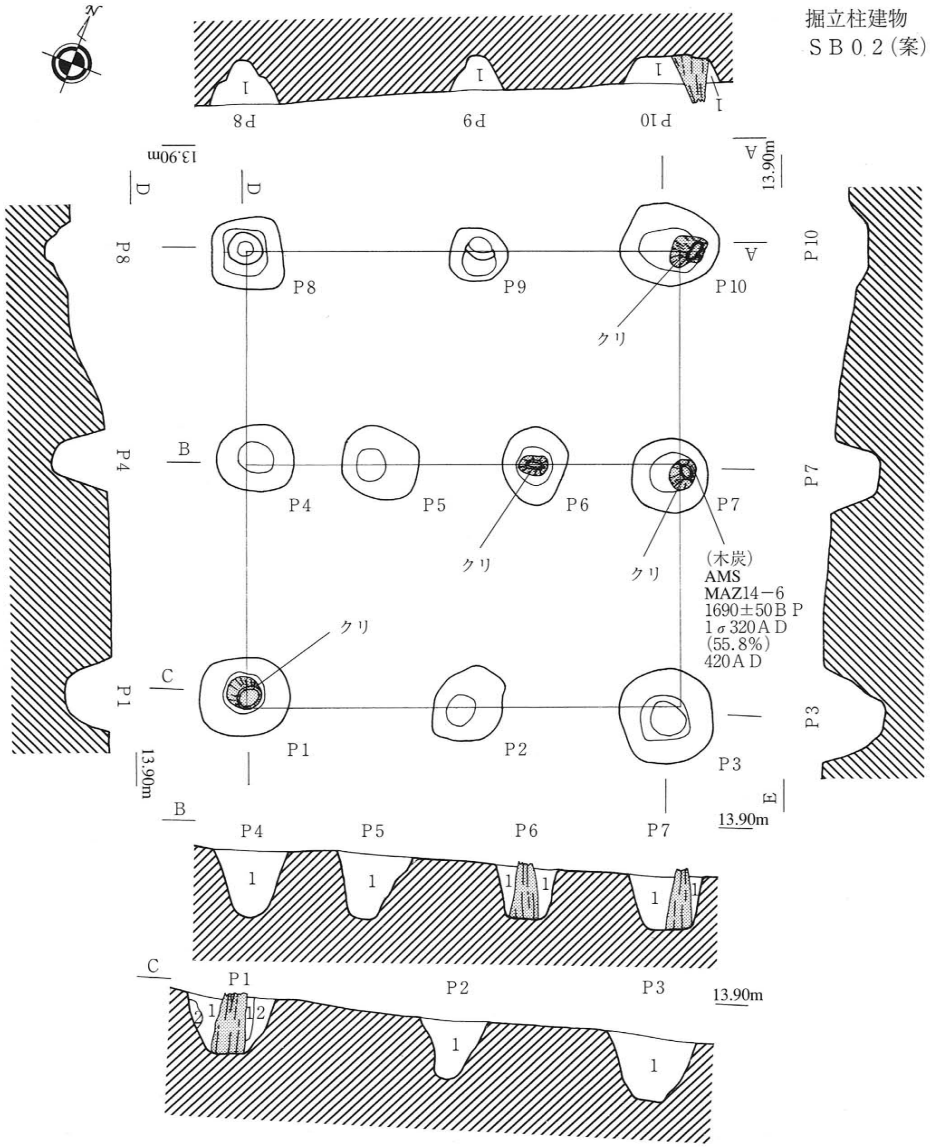


1．黒褐色砂質土：灰褐色粘土ブロック少量含む。
　やや粘り強い。締り弱い。
2．灰褐色砂質土：粘り、締り弱い。

0　1：60　2m

縮尺１／60

掘立柱建物
ＳＢ０２（案）

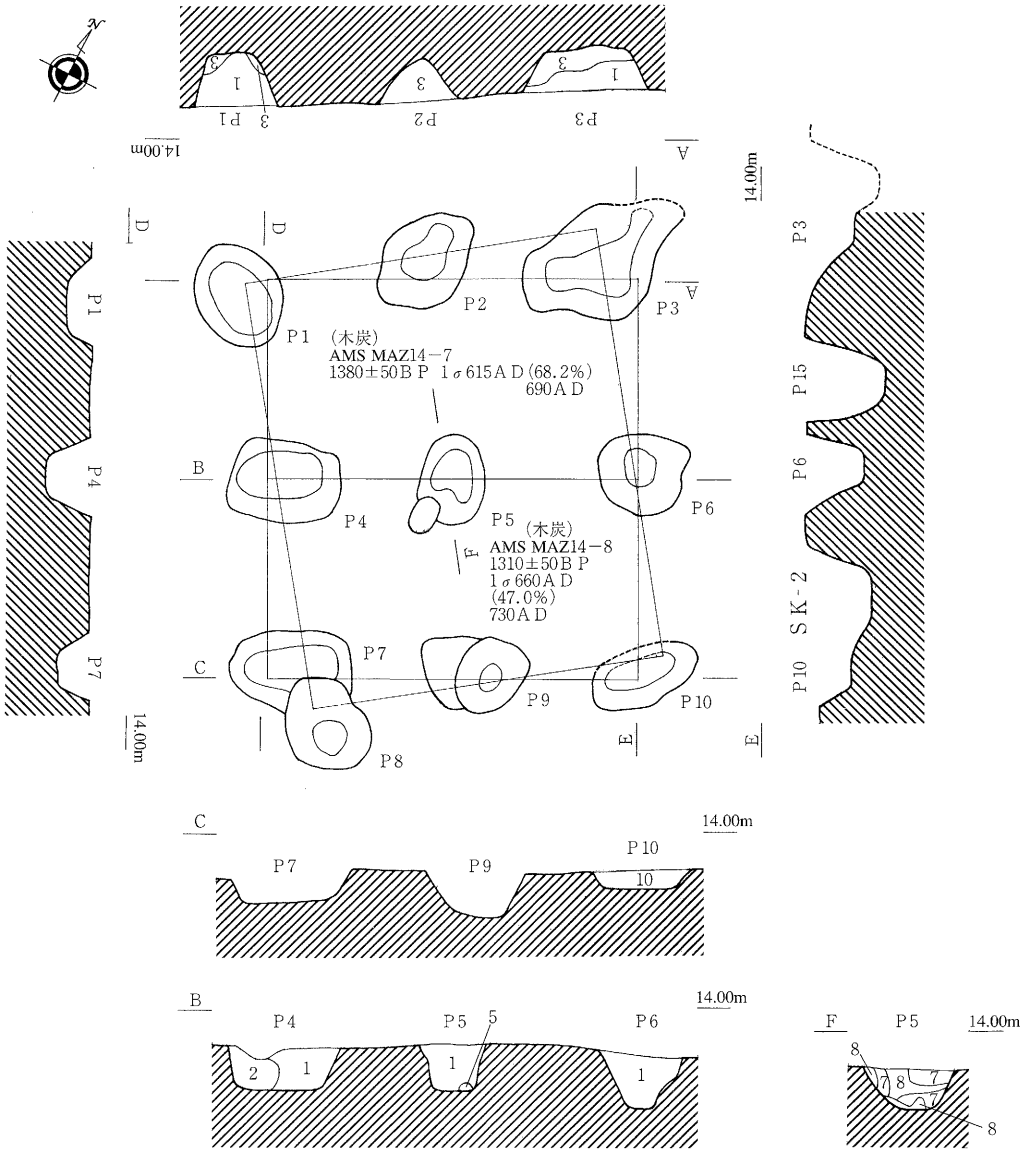


1．黒褐色砂質土：暗褐色土ブロック少量含む。やや粘り、
　締り強い。
2．暗褐色砂質土：やや粘り、締り強い。

0　1：60　2m

図版○図　遺構実測図

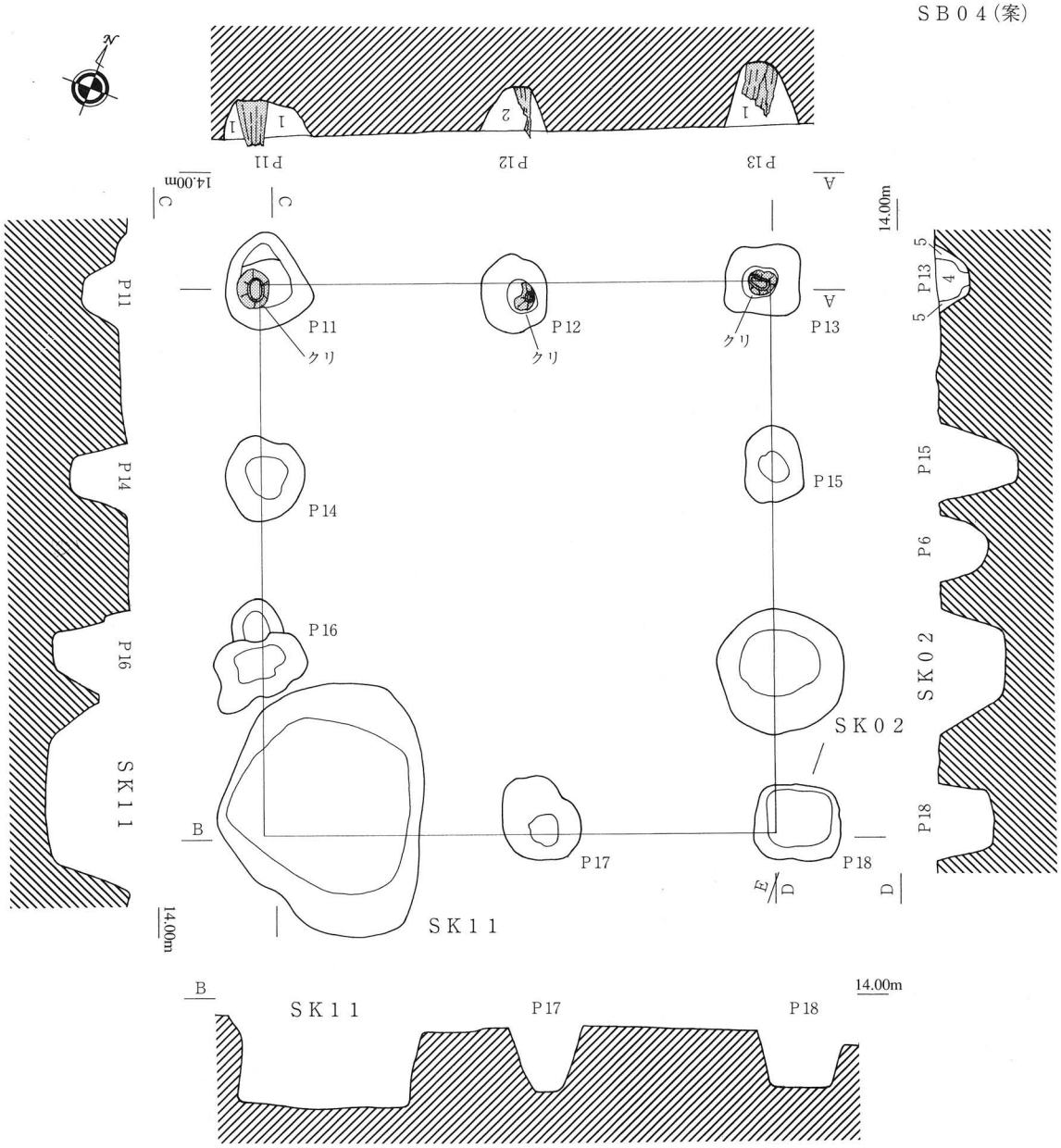
掘立柱建物
ＳＢ０４(案)



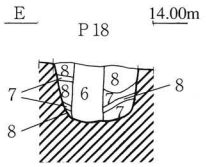
1．黒褐色土：褐色土ブロック少量含む。やや粘り、締り強い。
2．黒褐色土：粘り強い。やや締りあり。
3．黒褐色土：褐色土ブロック多量含む。やや粘り、締り強い。
4．暗褐色土：やや粘り、締り強い。
5．暗褐色土：褐色土粒多量含む。粘り、締り強い。
6．黒色土：ほぼ単一土。粘り、締り弱い。
7．黒褐色土：赤褐色土ブロック（２～４㎝）を含む。粘りなし。
　　締り強い。
8．赤褐色土：黄灰色の砂質土が縦縞状に入る。粘りなし。締り強い。
9．極暗赤褐色土：黄灰色の砂質土が縦縞状に入る。粘りなし。
　　締り強い。
10．黒褐色土：暗褐色土粒多量含む。やや粘り、締り強い。

0　1：60　2m

掘立柱建物
ＳＢ０４（案）

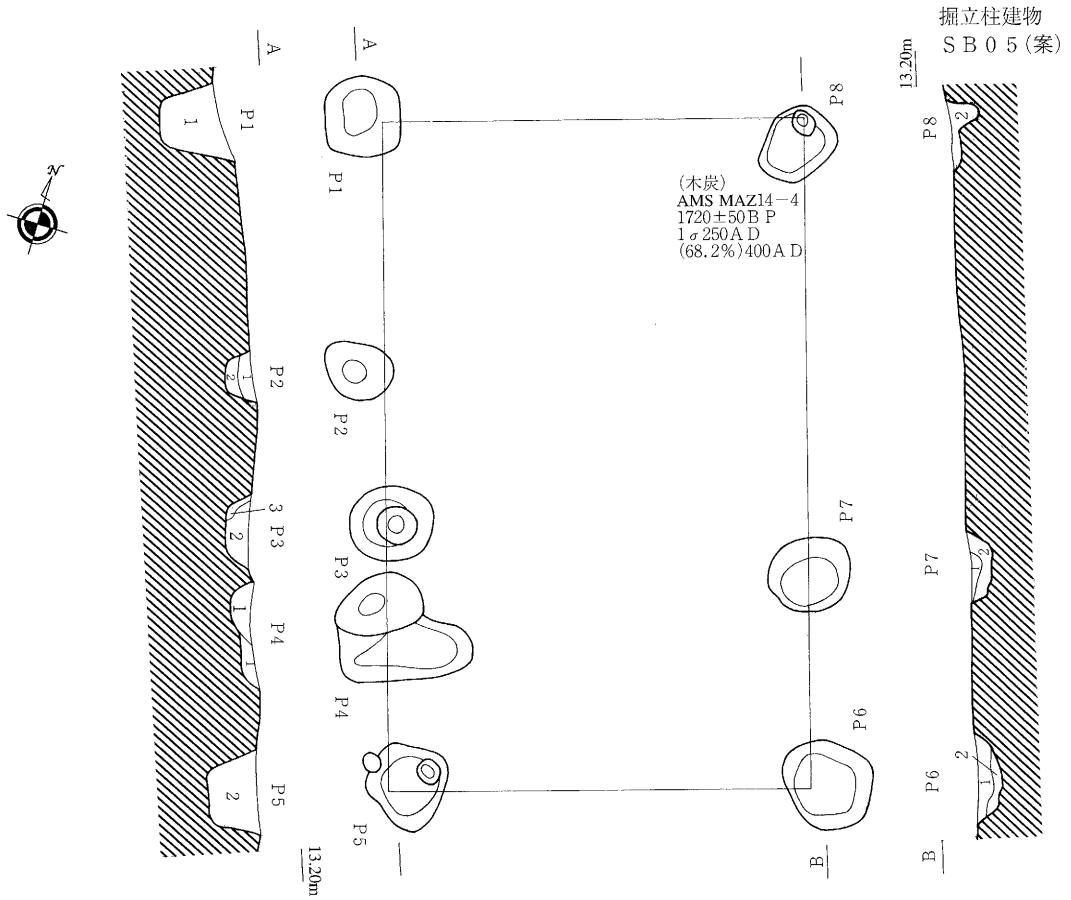


1．黒褐色土：褐色土ブロック少量含む。やや粘り、締り強い。
2．黒褐色土：粘り強い。やや締りあり。
3．黒褐色土：褐色土ブロック多量含む。やや粘り、締り強い。
4．暗褐色土：やや粘り、締り強い。
5．暗褐色土：褐色土粒多量含む。粘り、締り強い。
6．黒色土：ほぼ単一土。粘り、締り弱い。
7．黒褐色土：赤褐色土ブロック（２～４cm）を含む。粘りなし。
　　締り強い。
8．赤褐色土：黄灰色の砂質土が縦縞状に入る。粘りなし。締り強い。
9．極暗赤褐色土：黄灰色の砂質土が縦縞状に入る。粘りなし。
　　締り強い。
10．黒褐色土：暗褐色土粒多量含む。やや粘り、締り強い。

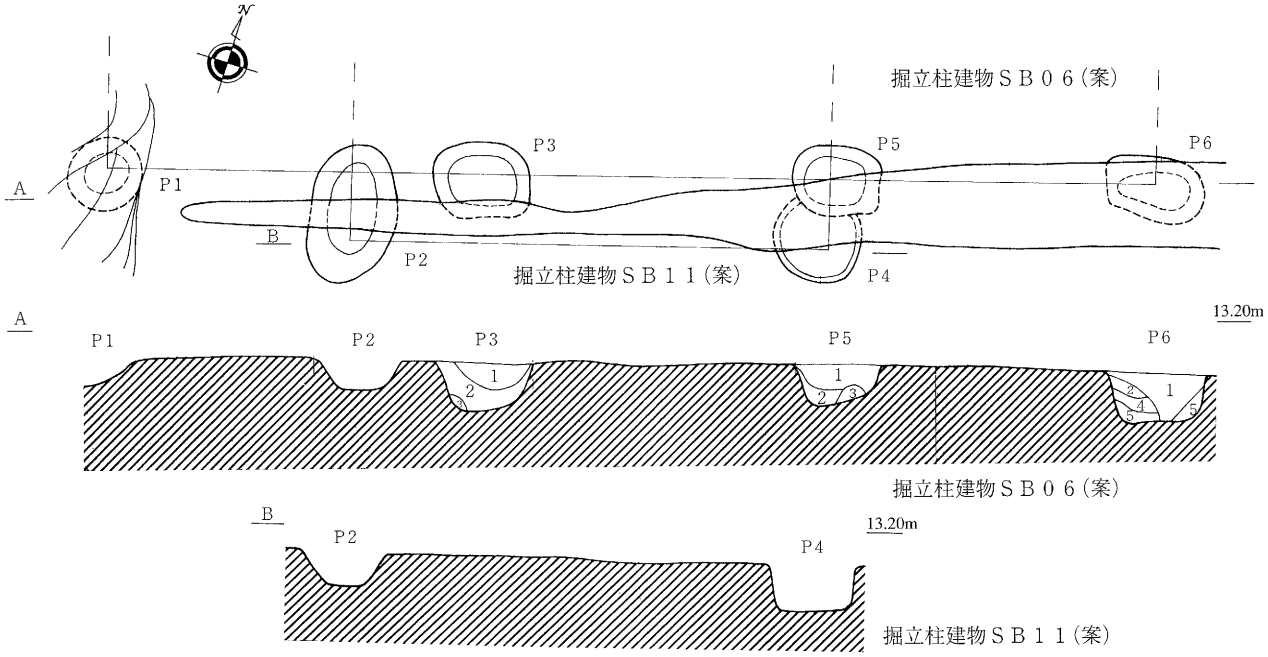


0　1：60　2m

［Ｂ地区］掘立柱建物ＳＢ04（案）　　縮尺１／60



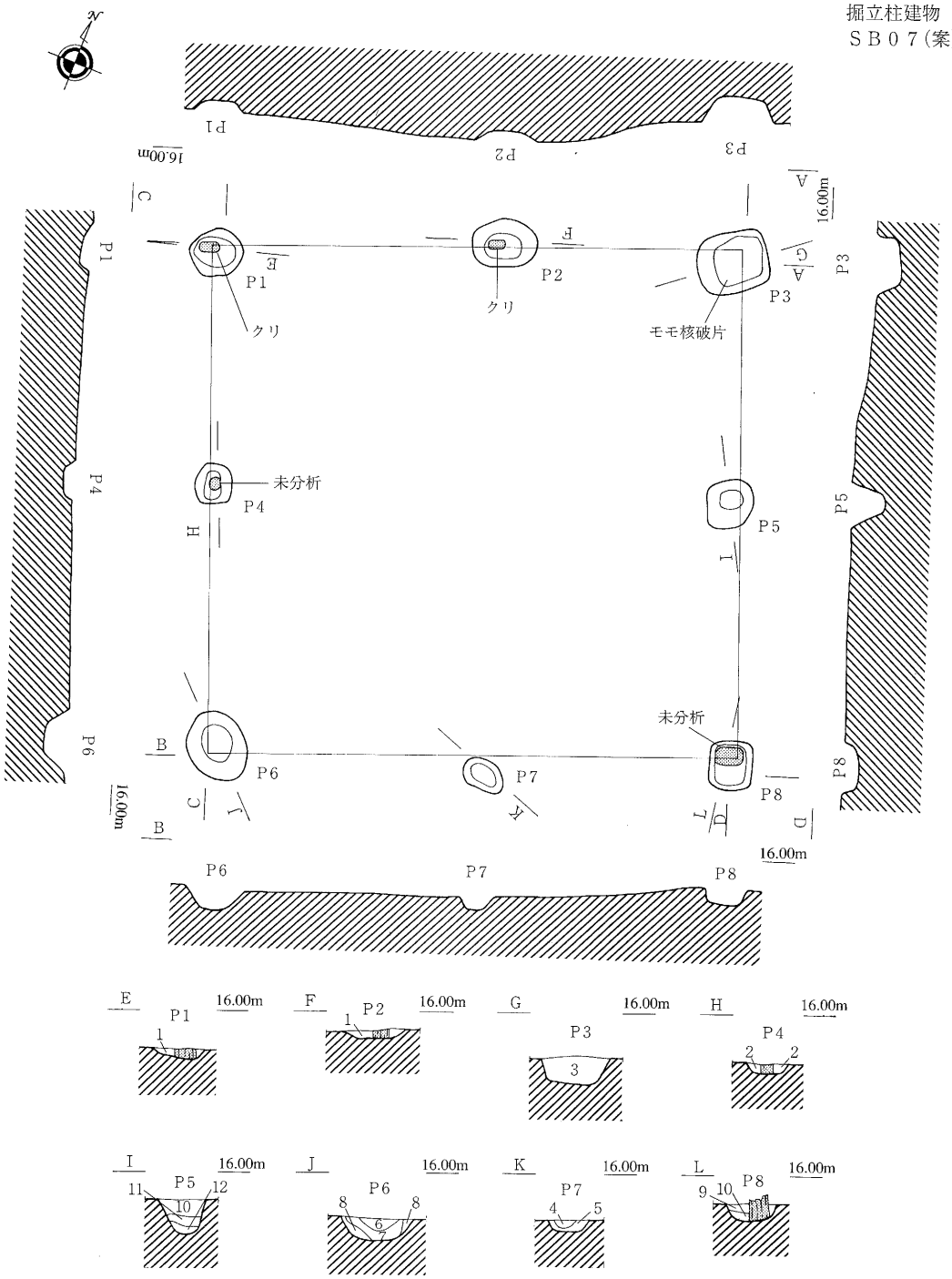
1．黒褐色土：灰褐色土粒少量含む。粘り、締り弱い。
2．黒褐色土：褐色土粒少量含む。粘り弱い。やや締りあり。
3．黒褐色土：粘り、締り強い。
4．黒褐色土：粘り、締り強い。
5．褐色土：粘り、締り強い。
6．褐色土：粘り、締り弱い。



1．黒褐色土：灰褐色土ブロック少量含む。粘り、締り弱い。
2．黒褐色土：１層より締り強い。
3．暗褐色土：やや粘り強い。締り弱い。
4．黒褐色土：粘り強い。
5．黒褐色土：暗褐色土粒子多量含む。粘り締り

［Ｂ地区］掘立柱建物ＳＢ05（案）・掘立柱建物ＳＢ06（案）・掘立柱建物ＳＢ11（案）　　縮尺１／60

掘立柱建物
ＳＢ０７(案)

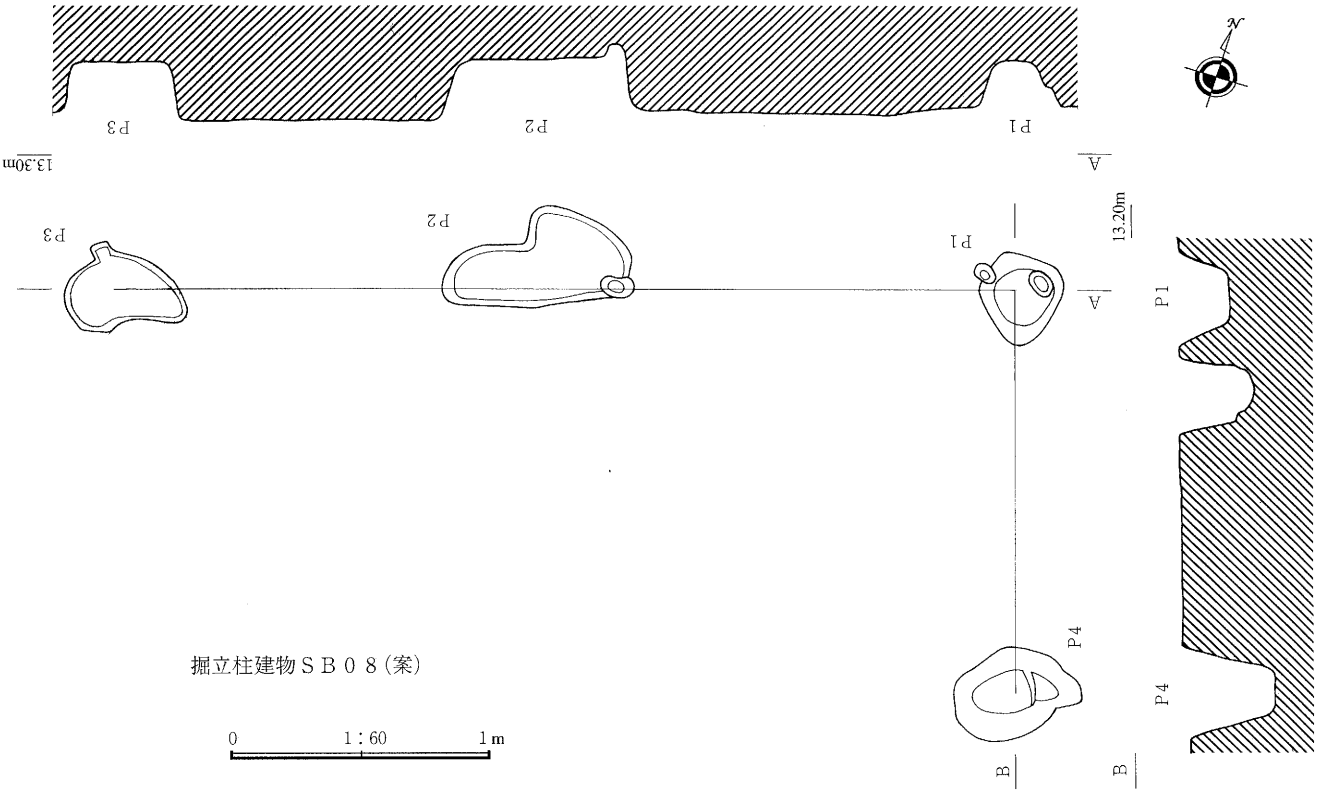


1．灰オリーブ色土：砂質土と炭化物少々あり。やや粘りあり。やや締り弱い。
2．灰色土：黒色土マーブル状（砂質土）。やや粘り弱い。締りあり。
3．灰色土：粒子細。黒色土がマーブル状に混入。粘りあり。締り強い。
4．黒色土：粒子細。砂質土と炭化物の混入少々あり。粘り強い。締りあり。
5．黄灰色土：粒子細。砂質土。やや粘りあり。
6．灰色土：粒子細。砂質土と炭化物の混入少々あり。粘り強い。締りあり。
7．灰色土：粒子細。炭化物粒子少々あり。
8．黄灰色土：粒子細。砂質土。
9．灰色土：やや粒子細。砂質土。地山質黒色土がブロック状に混入。締りなし。
10．黒色土：粒子細。炭化物粒子を含む。
11．灰色土：やや粒子細。砂質土。地山質黒色土がブロック状に混入。炭化物粒子混入。締りなし。
12．灰色土：砂質単一層。
13．灰色土：粒子細。黒色土が若干混入。やや締りあり。

0　1：60　2m

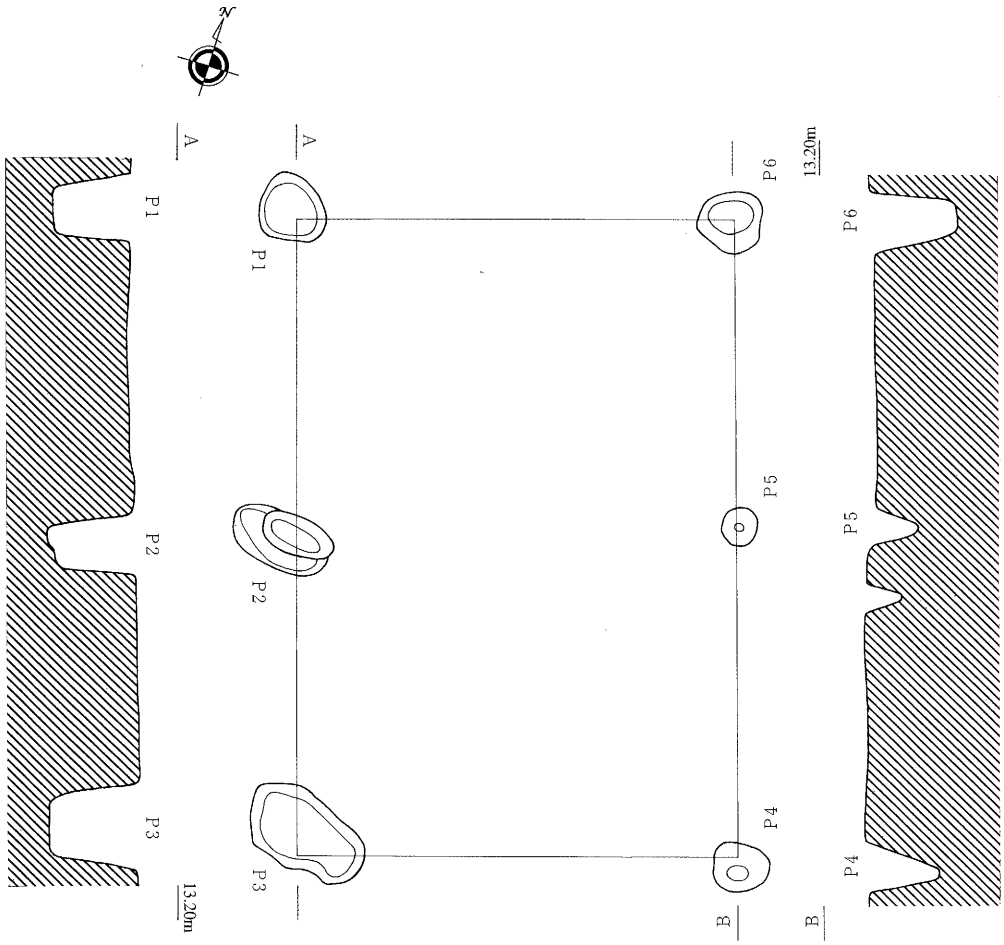
［Ｂ地区］掘立柱建物ＳＢ07（案）

縮尺１／60



掘立柱建物ＳＢ０８（案）

0　1：60　1m

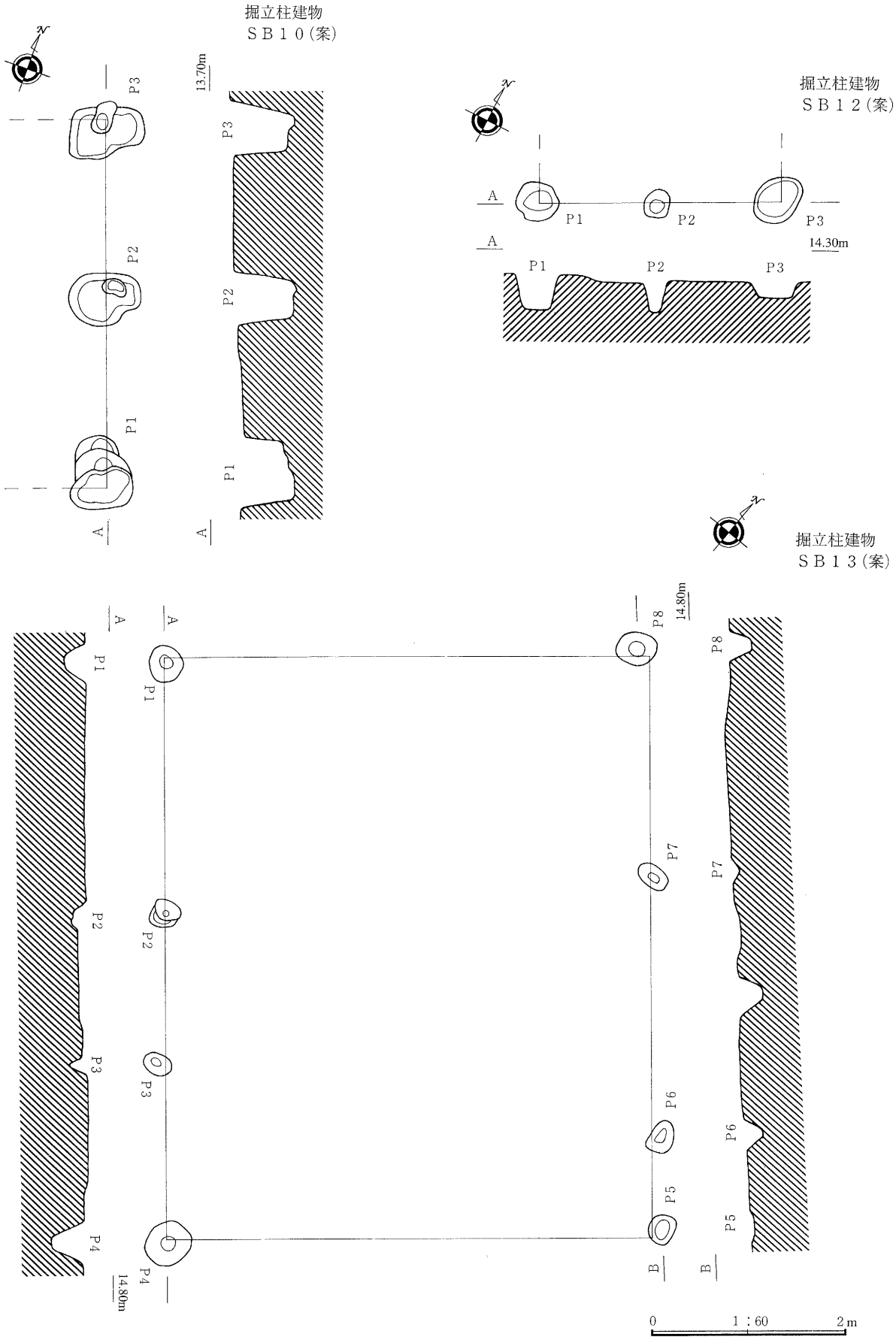


掘立柱建物ＳＢ０９（案）

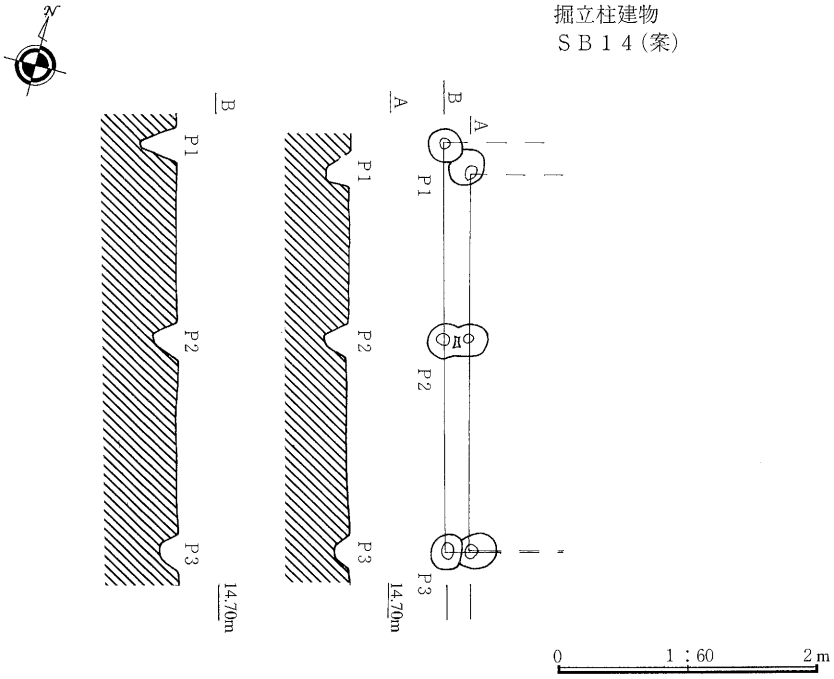
0　1：60　1m

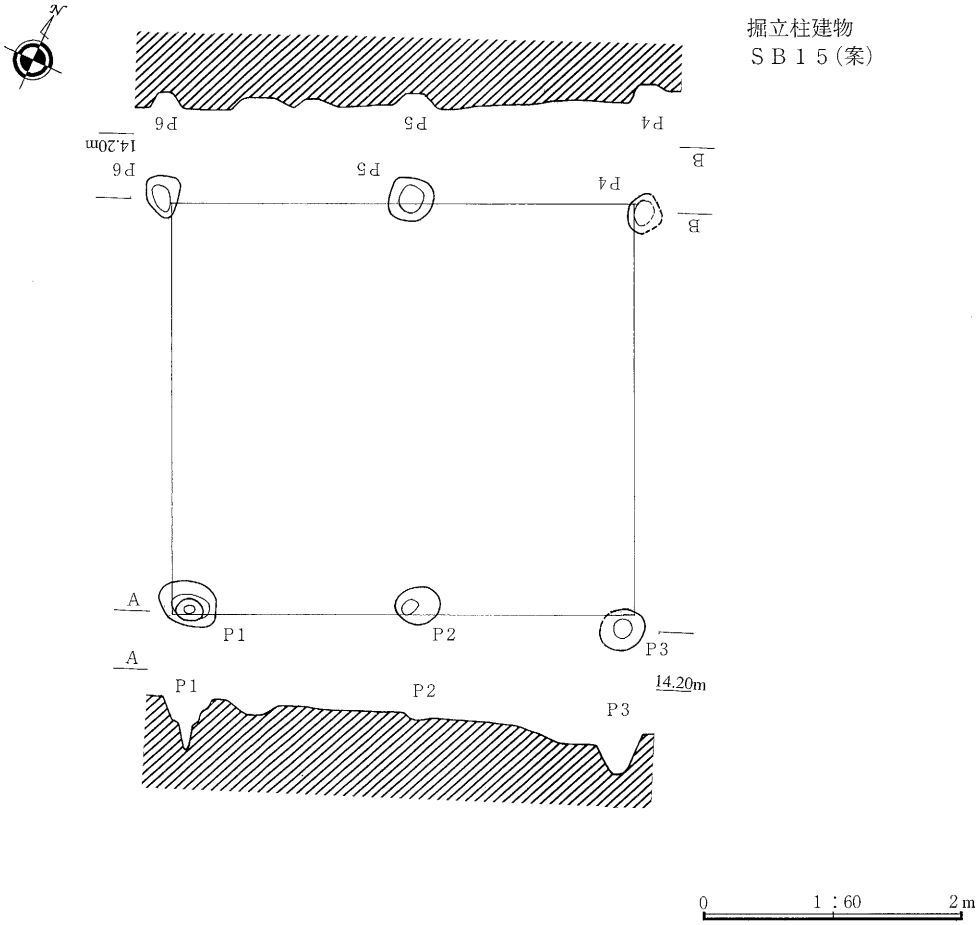
［Ｂ地区］掘立柱建物ＳＢ08（案）・掘立柱建物ＳＢ09（案）

縮尺１／60

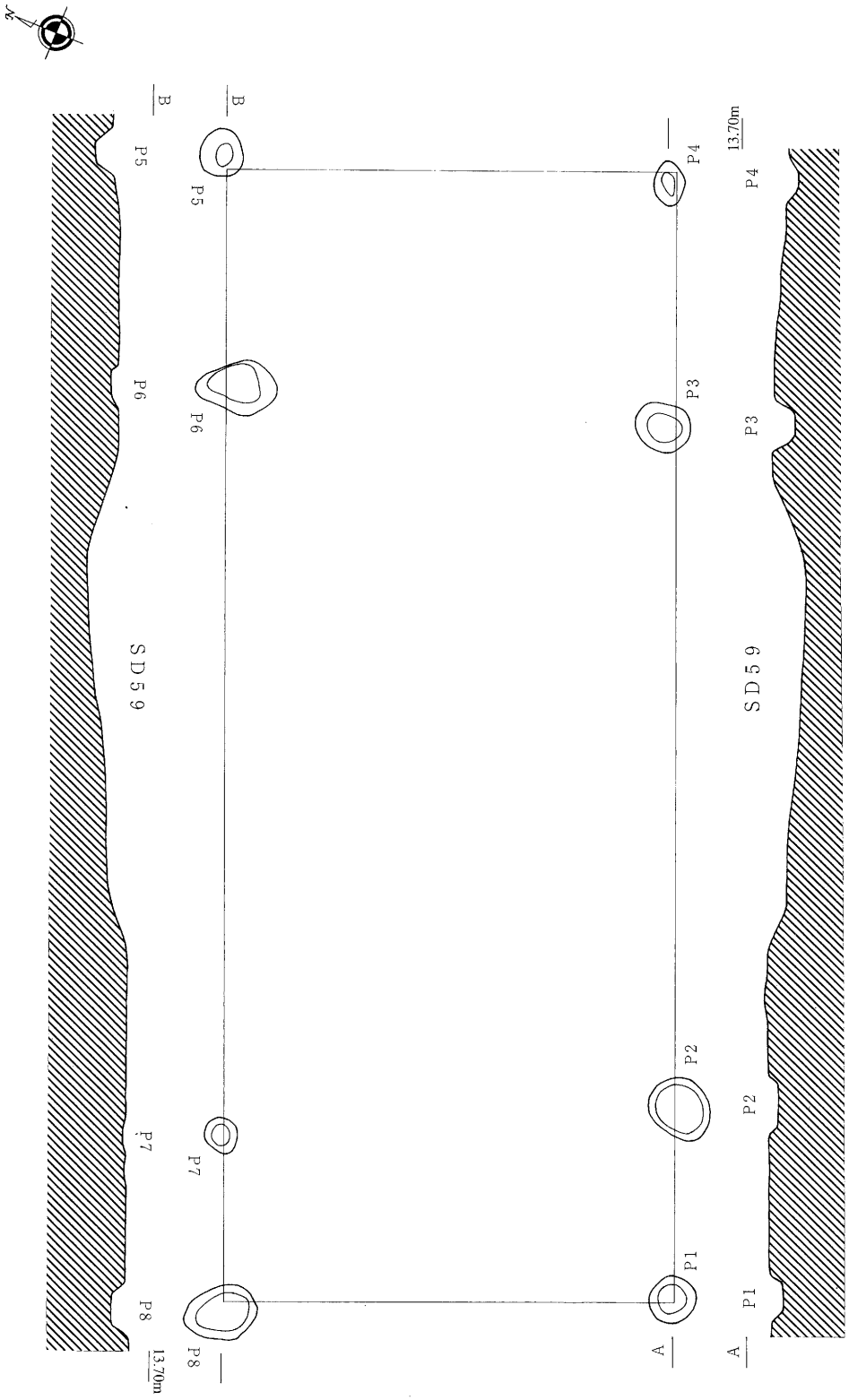


［Ｂ地区］掘立柱建物ＳＢ10（案）・掘立柱建物ＳＢ12（案）・掘立柱建物ＳＢ13（案）　　縮尺１／60





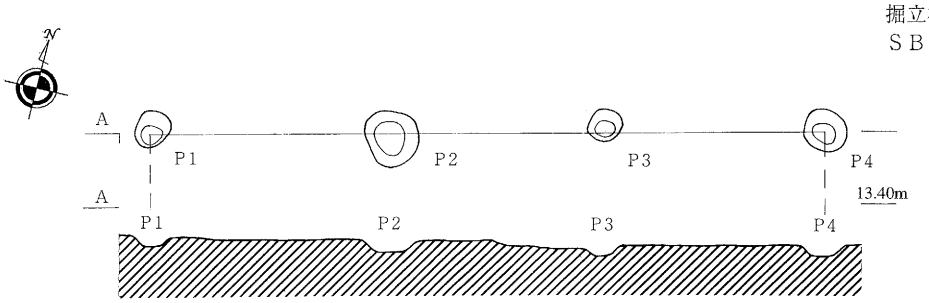
［Ｂ地区］掘立柱建物ＳＢ14（案）・掘立柱建物ＳＢ15（案）　　縮尺１／60

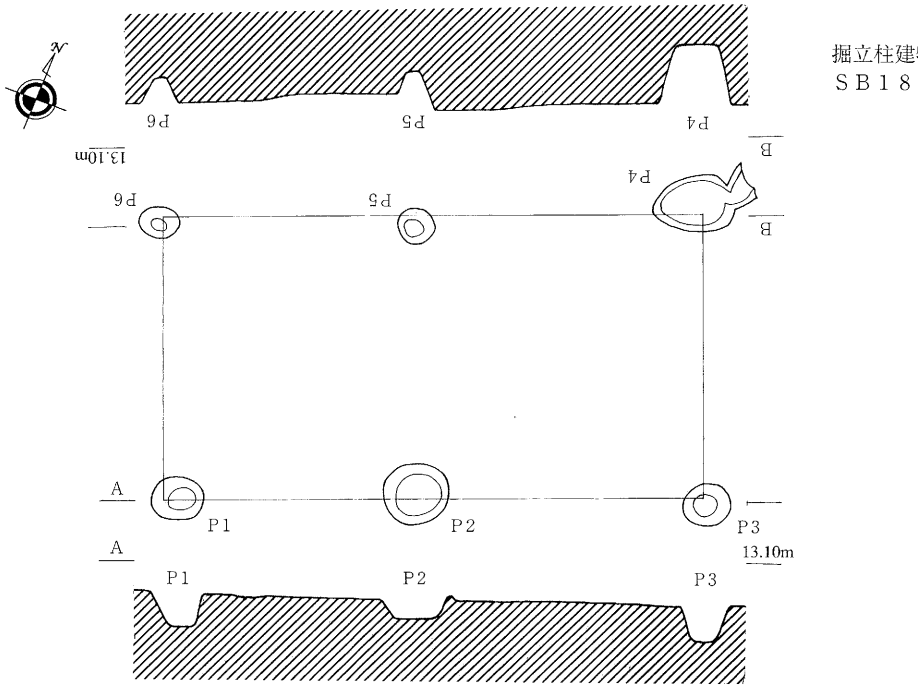


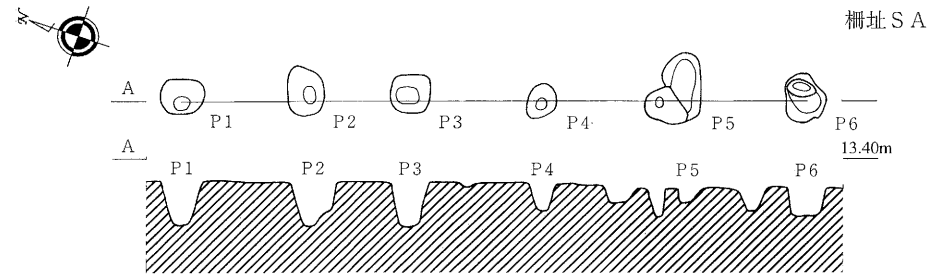
掘立柱建物ＳＢ１６（案）

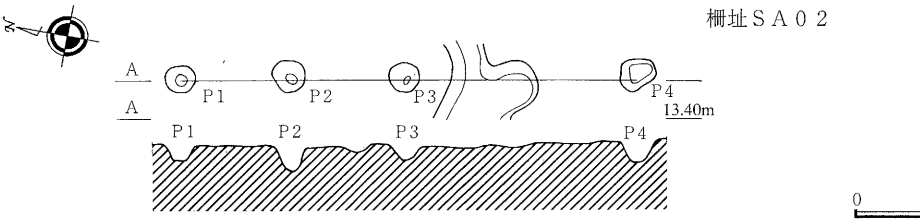
［Ｂ地区］掘立柱建物ＳＢ16（案）

縮尺１／60







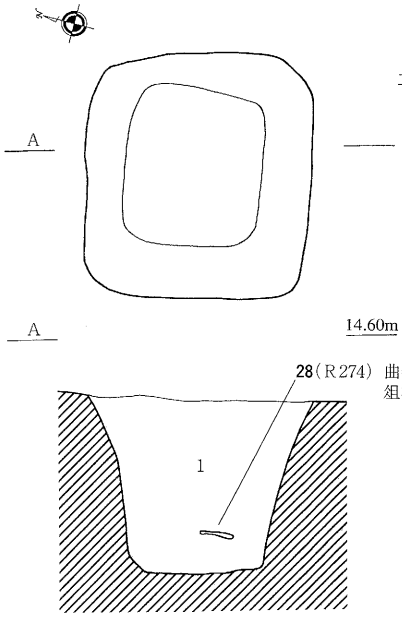


0　1：60　2m

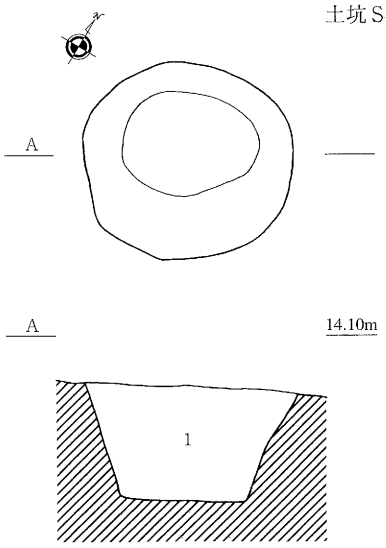
0　1：120　4m

［Ｂ地区］掘立柱建物ＳＢ17（案）・掘立柱建物ＳＢ18（案）　縮尺１／60

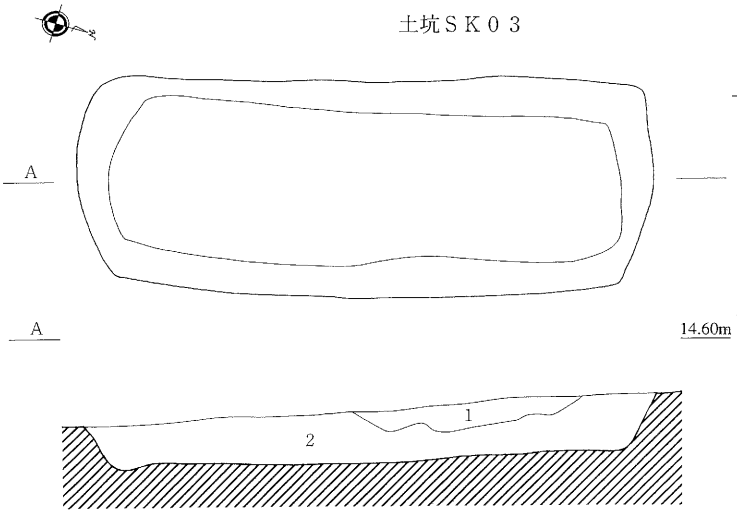
［Ｂ地区］柵址ＳＡ01・柵址ＳＡ02　縮尺１／120



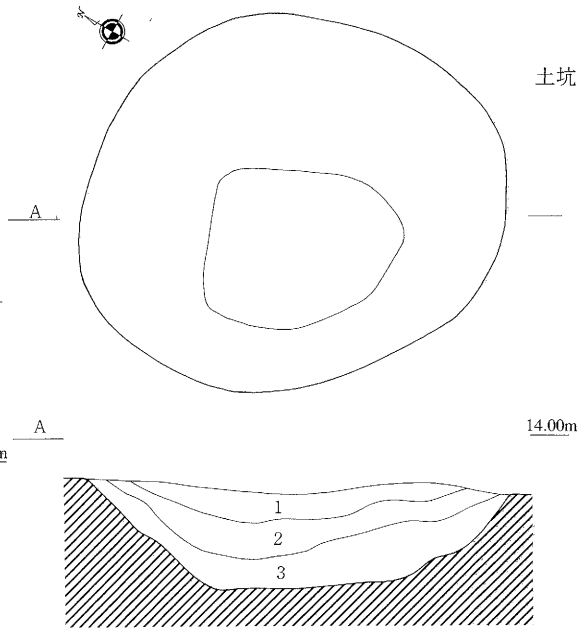
1．黒色土：粘り、締りあり。



1．黒色土：非常に粘りあり。締りあり。褐色を呈するブロックを20％程度含む。



1．黒褐色砂質土：粘りなし。締りあり。粘りなし、締りありの褐色土を20％程度含む。
2．灰黄褐色砂質土：粘りなし。締りあり。上位には一層がブロック状となり、多量に混在する。

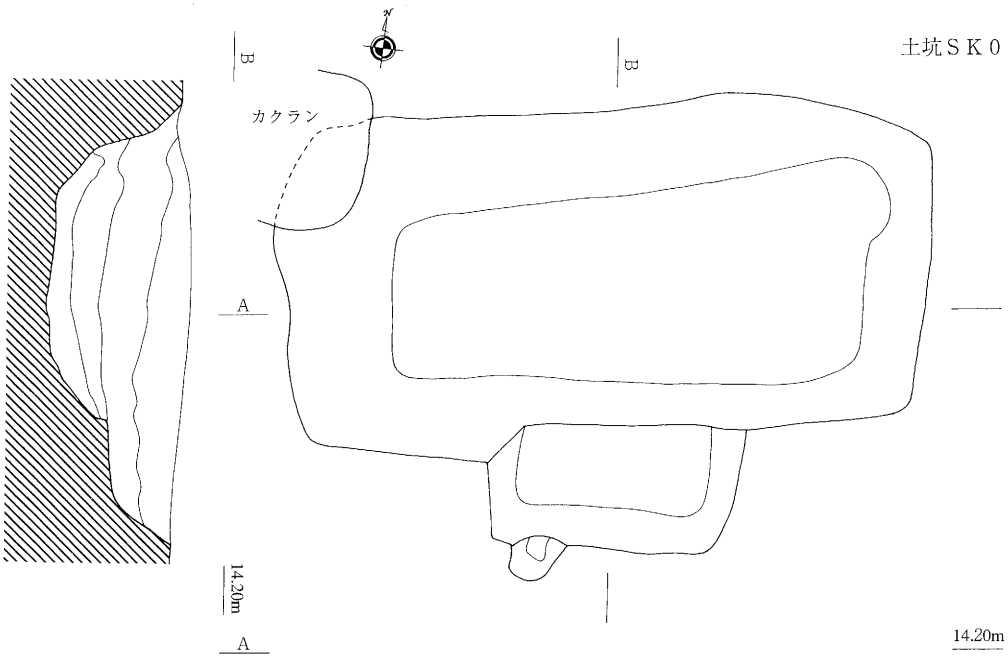


1．褐色砂質土：粘り、締りあり。レンズ状堆積を呈する。
2．黒色土：非常に粘り、締りあり。
3．黒褐色砂質土：粘りなし。やや締りあり。

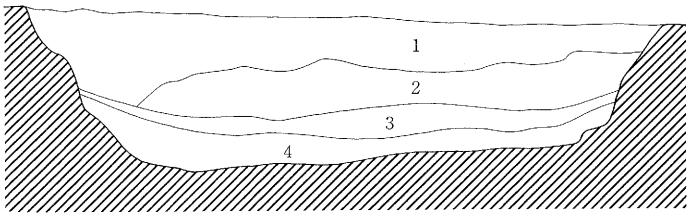
0　1：40　1m

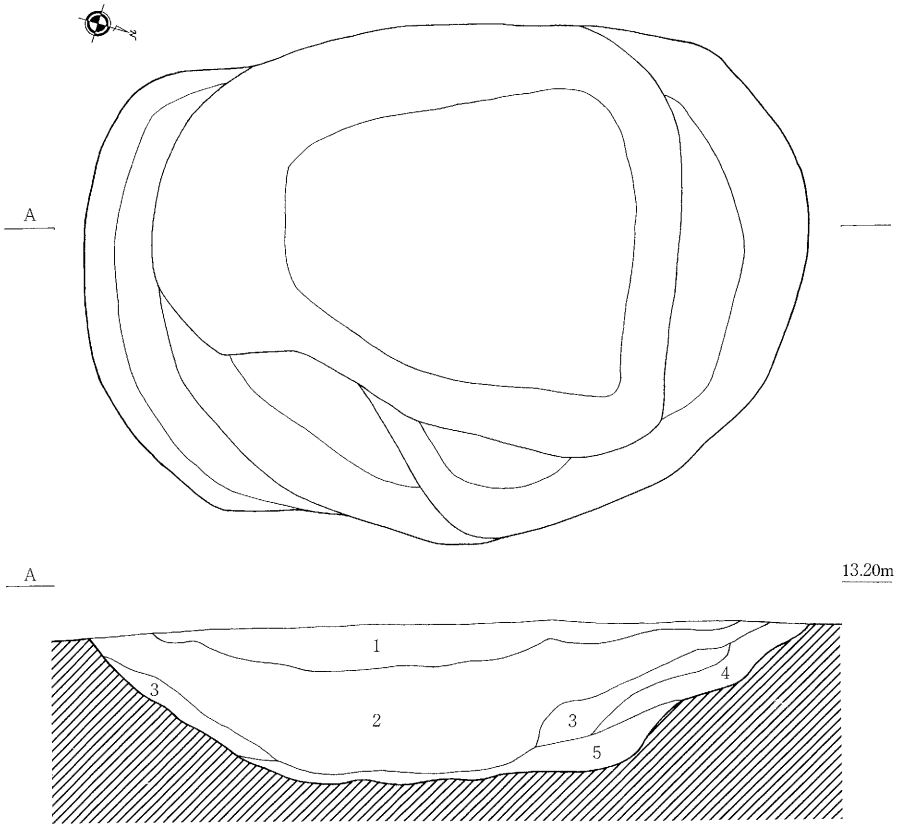
［Ｂ地区］土坑ＳＫ01～土坑ＳＫ04

縮尺１／40



1．黒褐色土：黄灰色ブロックを10％前後含む。粘りなし。締りあり。
2．褐色砂質土：一層をブロック状に含む。粘りなし。やや締りあり。
3．灰黄褐色砂質土：粘りなし。やや締りあり。
4．黒色土：自然礫を含む。粘り、締りあり。





土坑ＳＫ０６

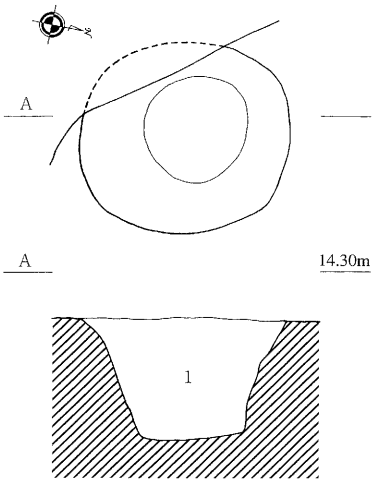
（第１層検出　木炭）
AMS MAZ14－3
410±50ＢＰ
1σ1430ＡＤ(58.1％)1520ＡＤ

1．黄灰色砂質土：粘り強い。やや締りあり。
2．黒褐色土：粘り、締り強い。
3．黒褐色土：粘り、締りやや強い。
4．灰黄褐色砂質土
5．灰黄褐色砂質土：粘り、締り弱い。

0　1：40　1m

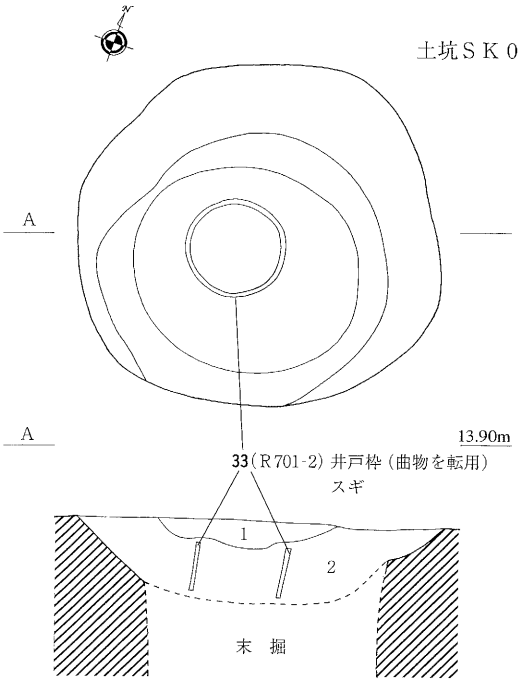
［Ｂ地区］土坑ＳＫ05・土坑ＳＫ06　　縮尺１／40

土坑ＳＫ０７



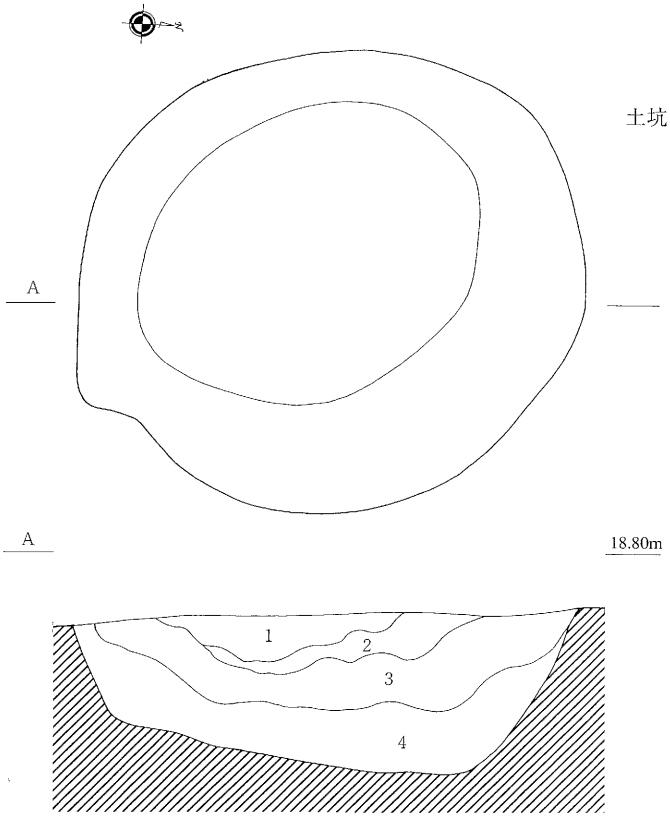
１．黒色土：粘りあり。非常に締りあり。

土坑ＳＫ０８



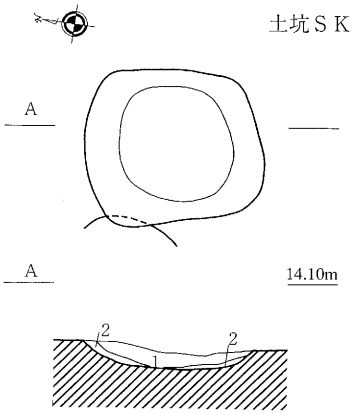
１．黒褐色土：粘りなし。やや締りあり。
２．黒色土：粘り、締りあり。灰黄褐色砂質土を混入。

土坑ＳＫ０９



１．黒色土：粘り、締りあり。
２．黒褐色土：粘りなし。やや締りあり。
３．黒褐色土：粘り、締りあり。
４．黒色土：粘りあり。非常に締りあり。灰黄褐色砂質土を含む。

土坑ＳＫ１０

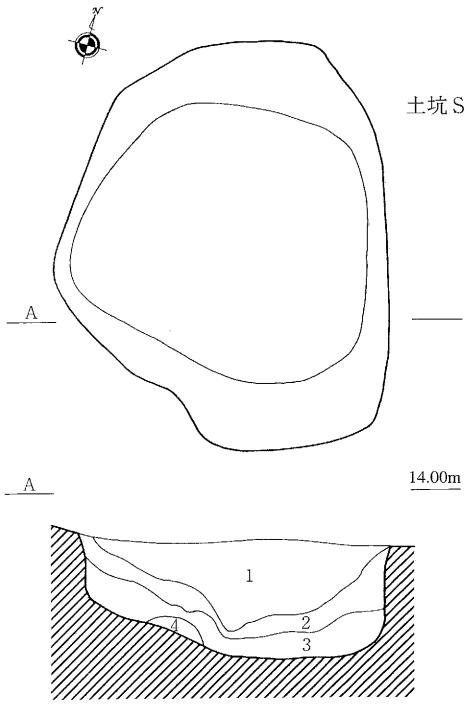


１．黒褐色土：粘り強い。締りやや弱い。
２．黄褐色砂質土：粘りなし。締りやや弱い。

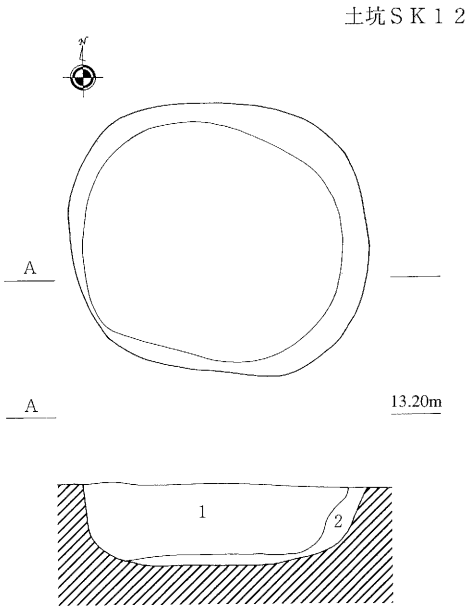
0　1：40　1m

［Ｂ地区］土坑ＳＫ07～土坑ＳＫ10

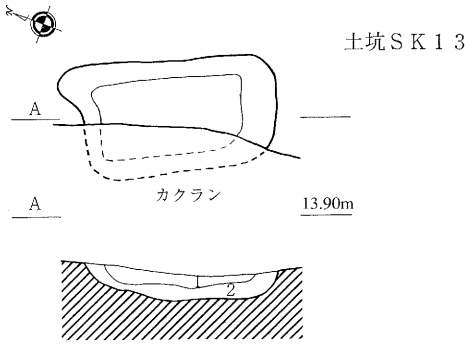
縮尺１／40



1．暗褐色土：灰褐色土、黒色土ブロック多量含む。粘り、締りやや弱い。
2．黒褐色土：灰褐色土ブロック少量含む。粘り強い。締りあり。
3．黒褐色土：2．より灰褐色土ブロック少ない。
4．灰褐色土：粘り、締り強い。



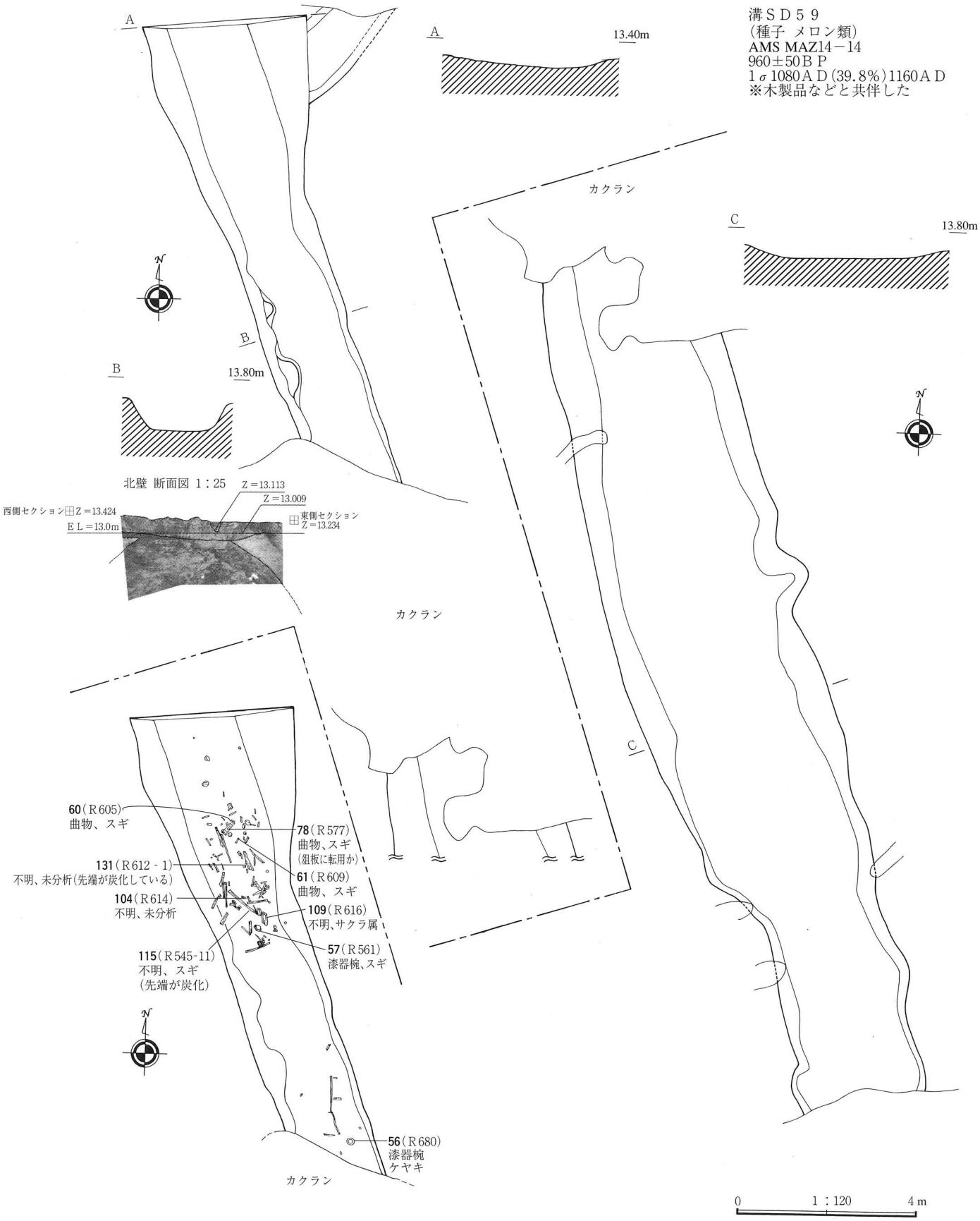
1．黒褐色砂質土：灰褐色砂ブロック多量に含む。
2．灰褐色砂質土：粘り、締り弱い。



1．灰褐色砂質土：褐色砂ブロック少量含む。粘り弱い。やや締りあり。
2．黒褐色砂質土：灰褐色砂少量含む。粘り、締りやや強い。

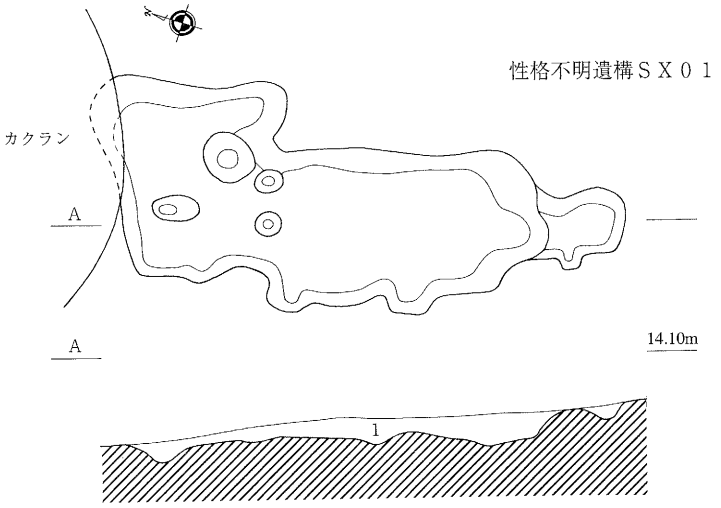
0　1：40　1m

溝ＳＤ５９
（種子 メロン類）
AMS MAZ14－14
960±50ＢＰ
1σ1080ＡＤ(39.8%)1160ＡＤ
※木製品などと共伴した

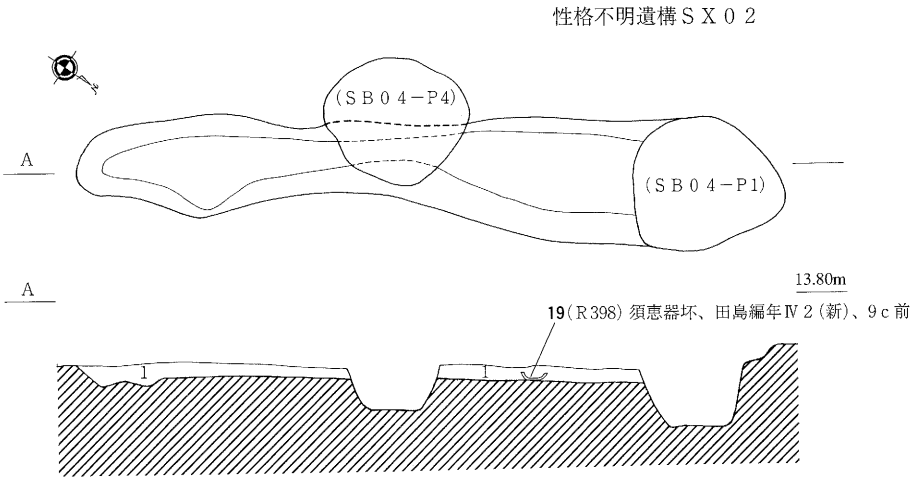


［Ｂ地区］溝ＳＤ５９

縮尺１／120



１．黒褐色砂質土：やや粘り。締り強い。

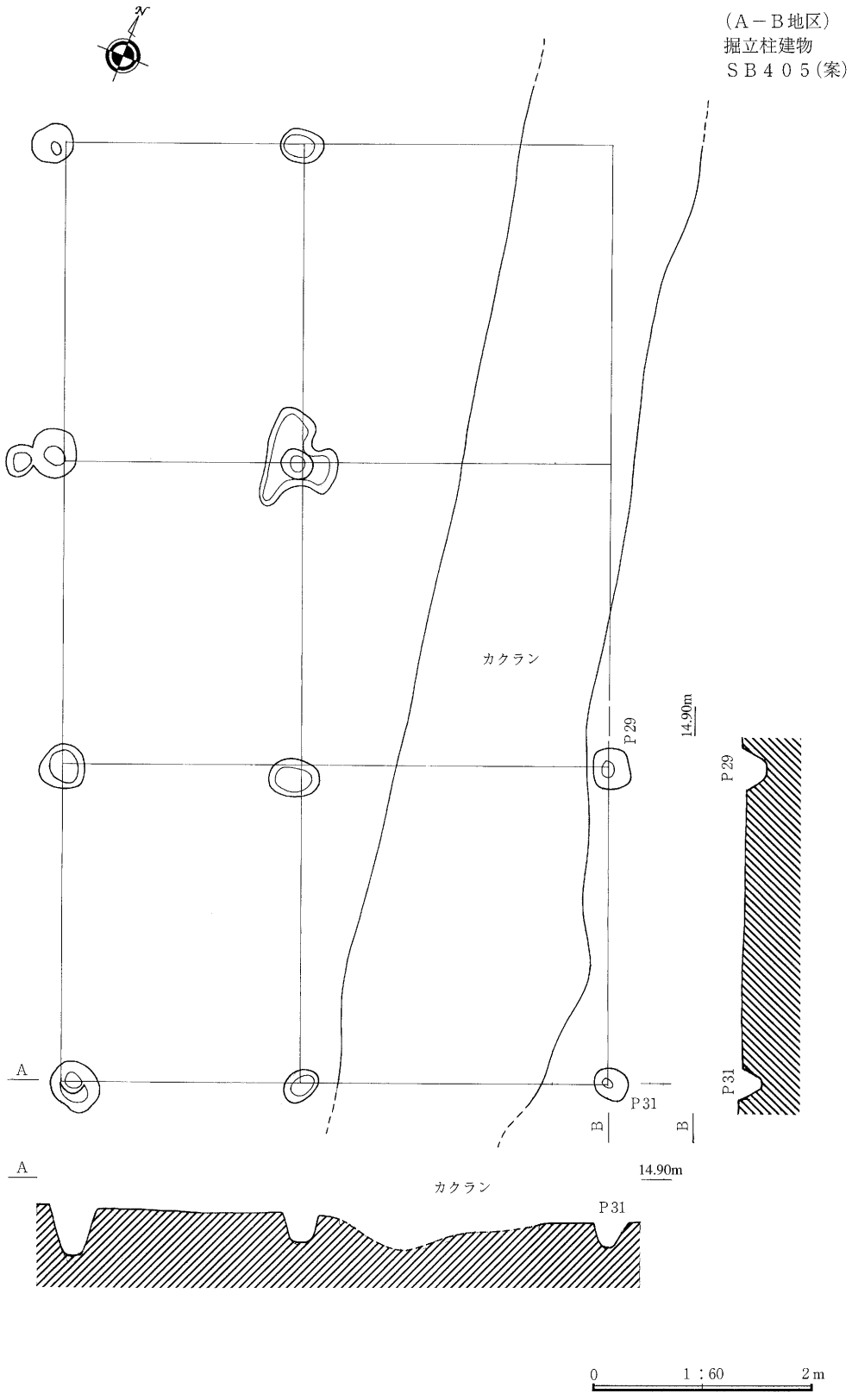


１．黒褐色土：やや粘り。締り強い。

0　1：60　20m

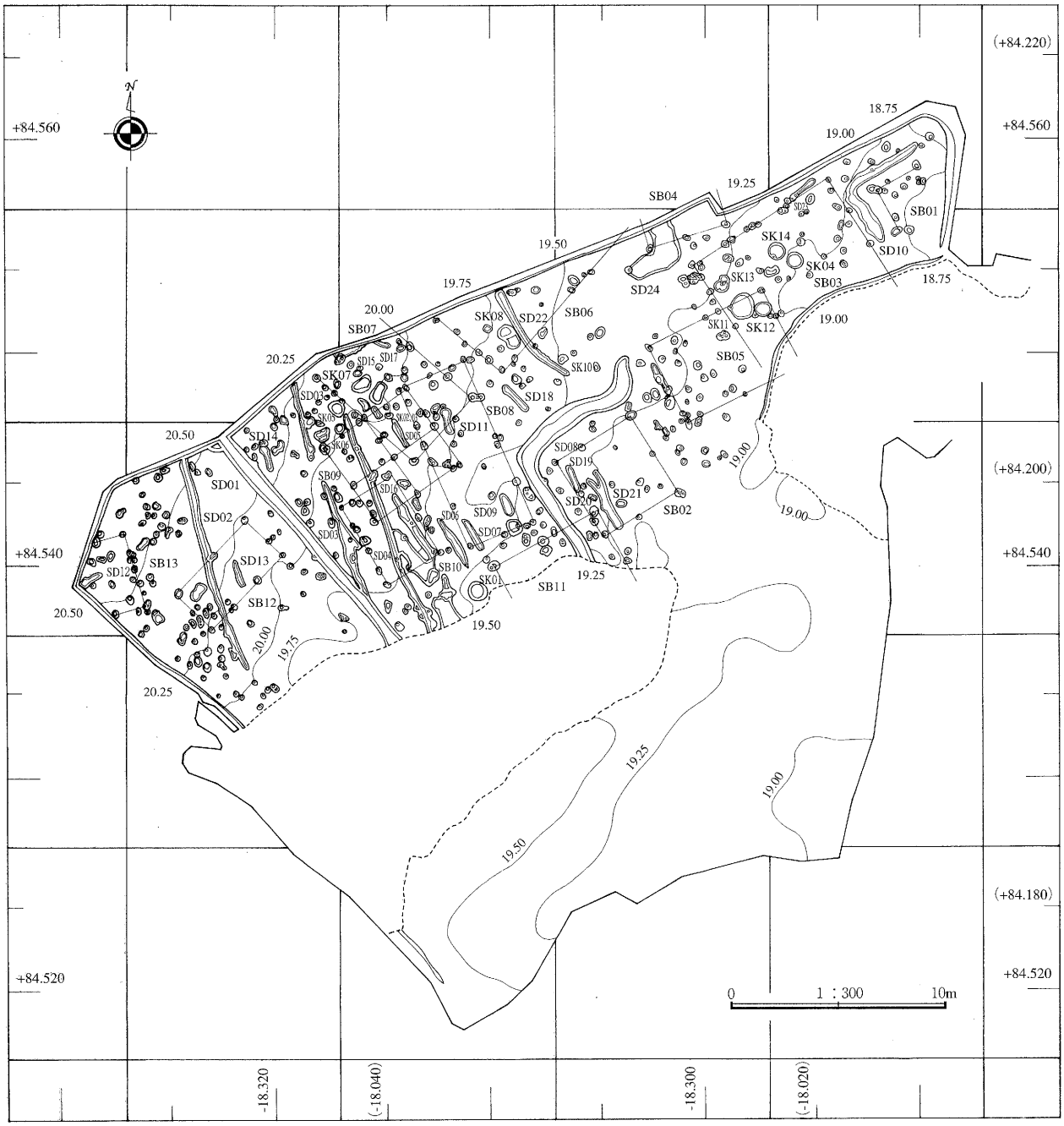
［Ｂ地区］性格不明遺構ＳＸ01・性格不明遺構ＳＸ02

縮尺１／40



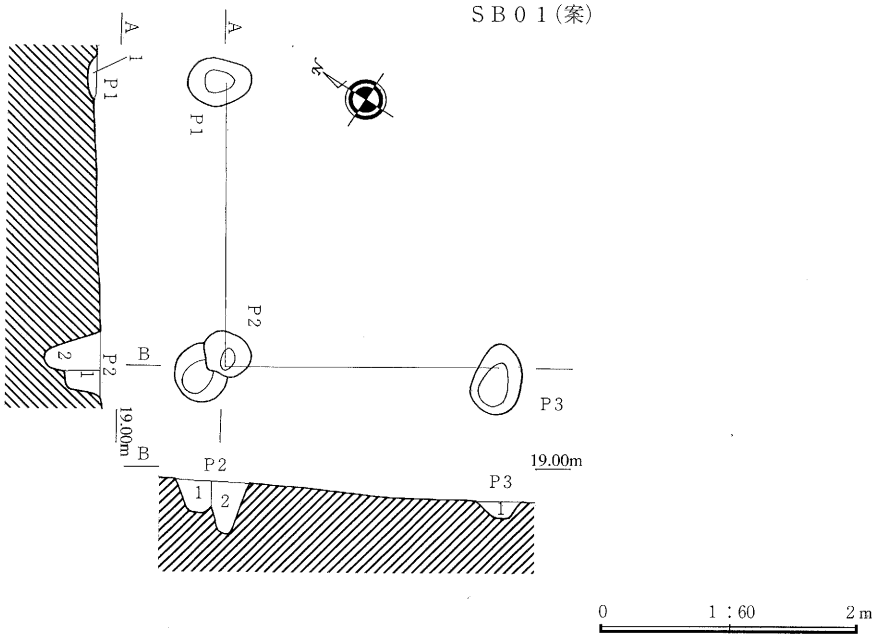
［A－B地区］掘立柱建物SB405（案）　　縮尺1／60

図面二　遺構実測図



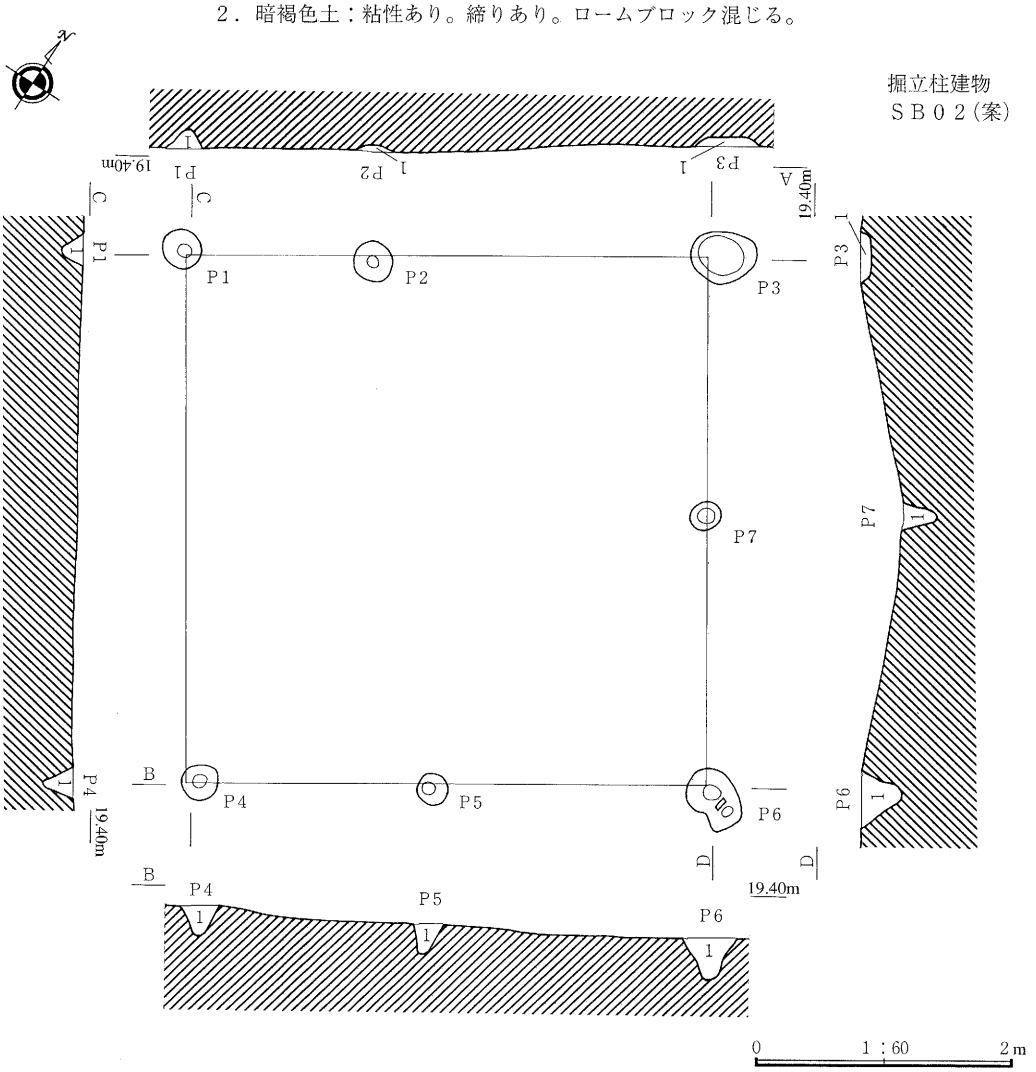
C地区遺構配置図　　縮尺１／300

掘立柱建物
ＳＢ０１(案)



1．暗褐色砂質土：粘性あり。締りあり。
2．暗褐色土：粘性あり。締りあり。ロームブロック混じる。

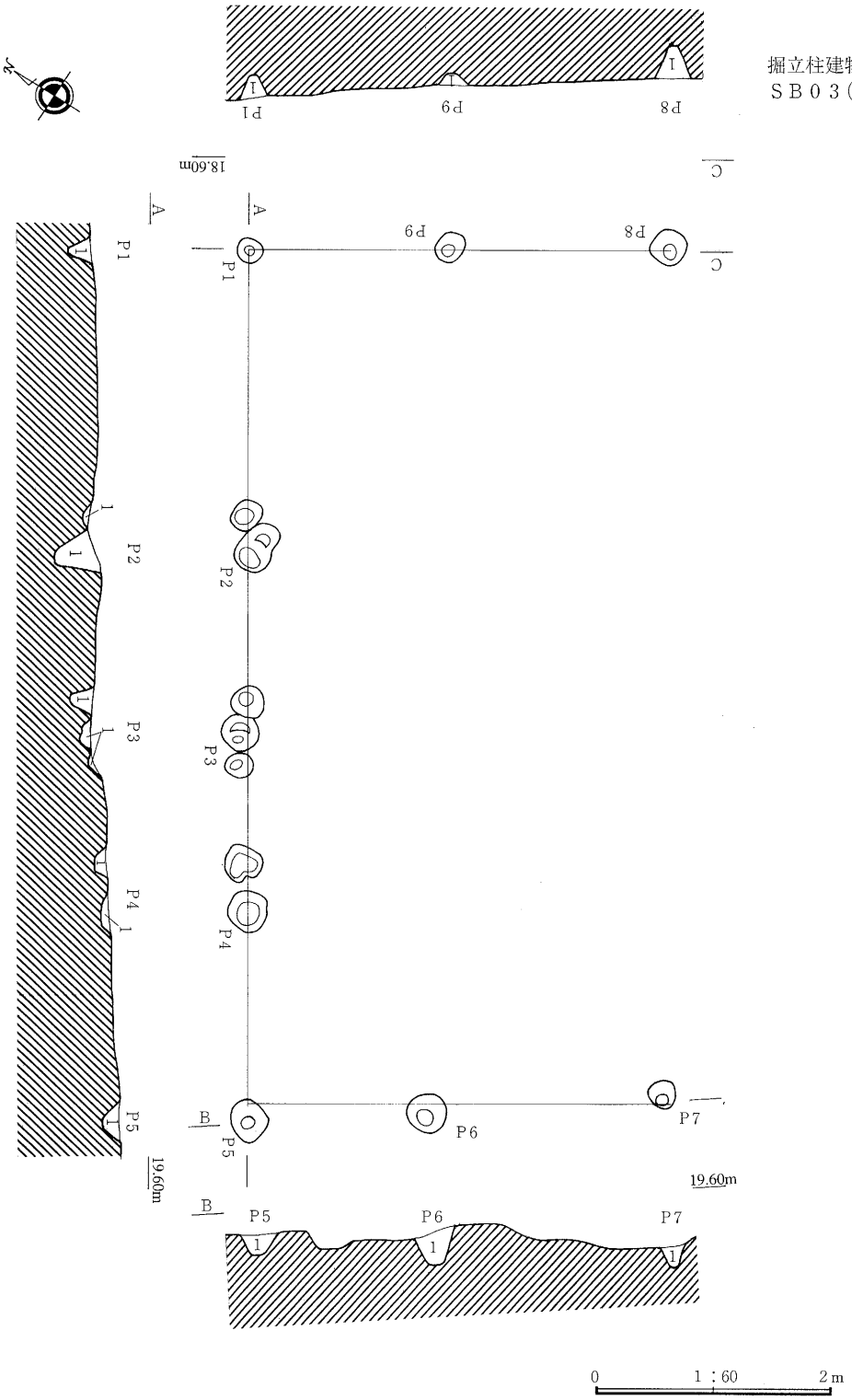
掘立柱建物
ＳＢ０２(案)



1．暗褐色砂質土：粘性あり。締りあり。

［Ｃ地区］掘立柱建物ＳＢ01（案）・掘立柱建物ＳＢ02（案）　　縮尺１／60

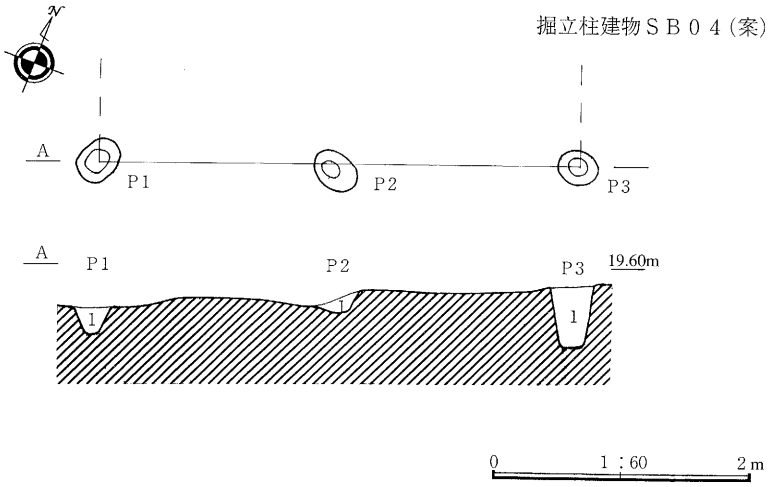
図面二三　遺構実測図



1．暗褐色砂質土：粘性あり。締りあり。

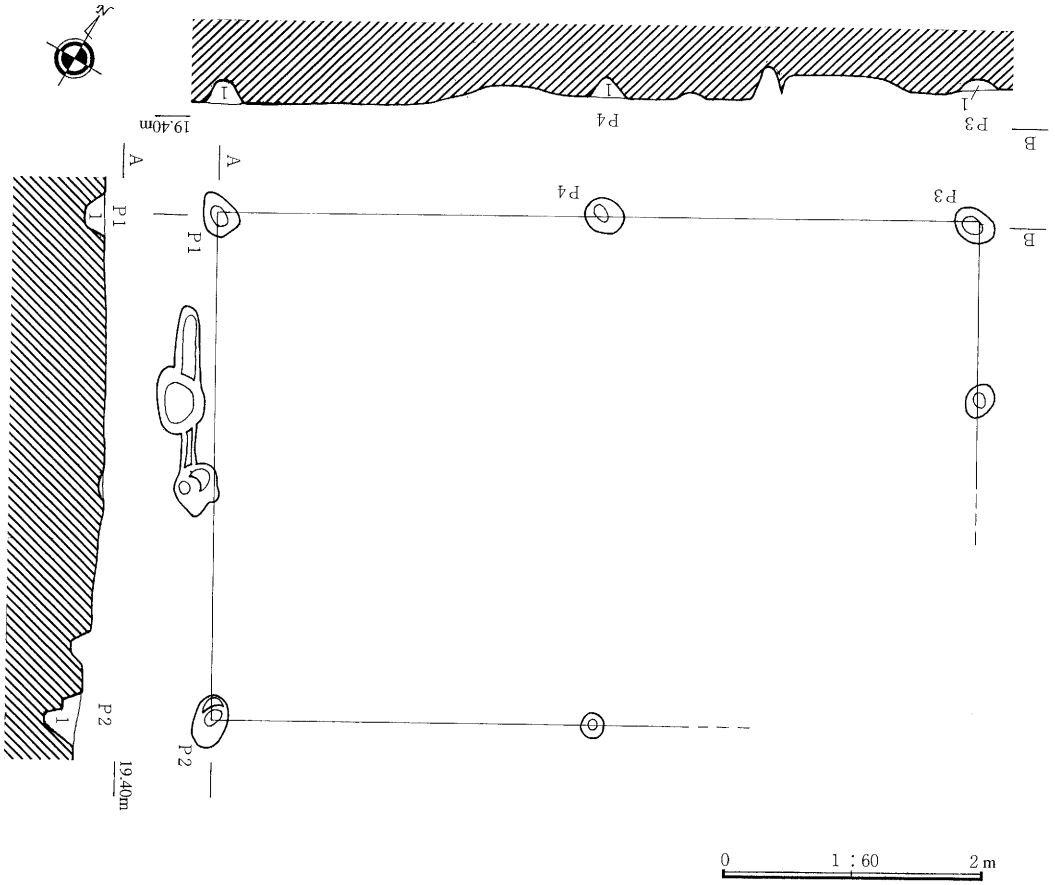
［Ｃ地区］掘立柱建物ＳＢ03（案）　　縮尺１／60

掘立柱建物ＳＢ０４（案）



１．暗褐色砂質土；粘性あり。締りあり。

掘立柱建物ＳＢ０５（案）

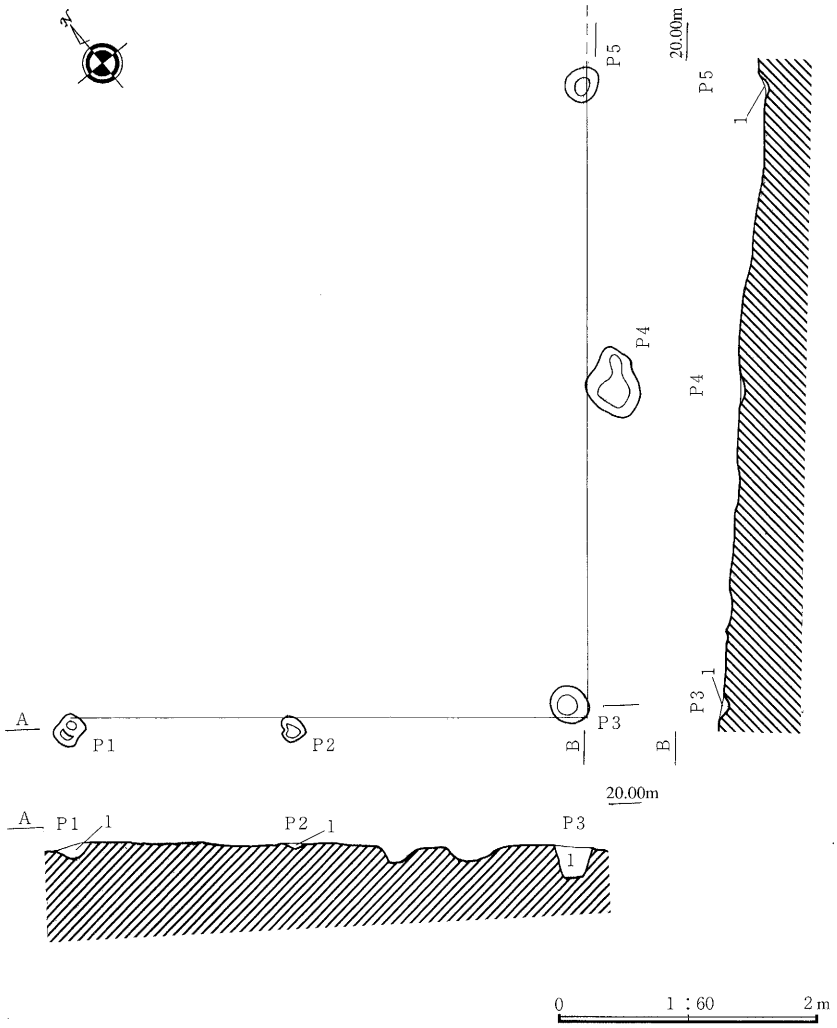


１．暗褐色砂質土：粘性あり。締りあり。

［Ｃ地区］掘立柱建物ＳＢ04（案）・掘立柱建物ＳＢ05（案）

縮尺１／60

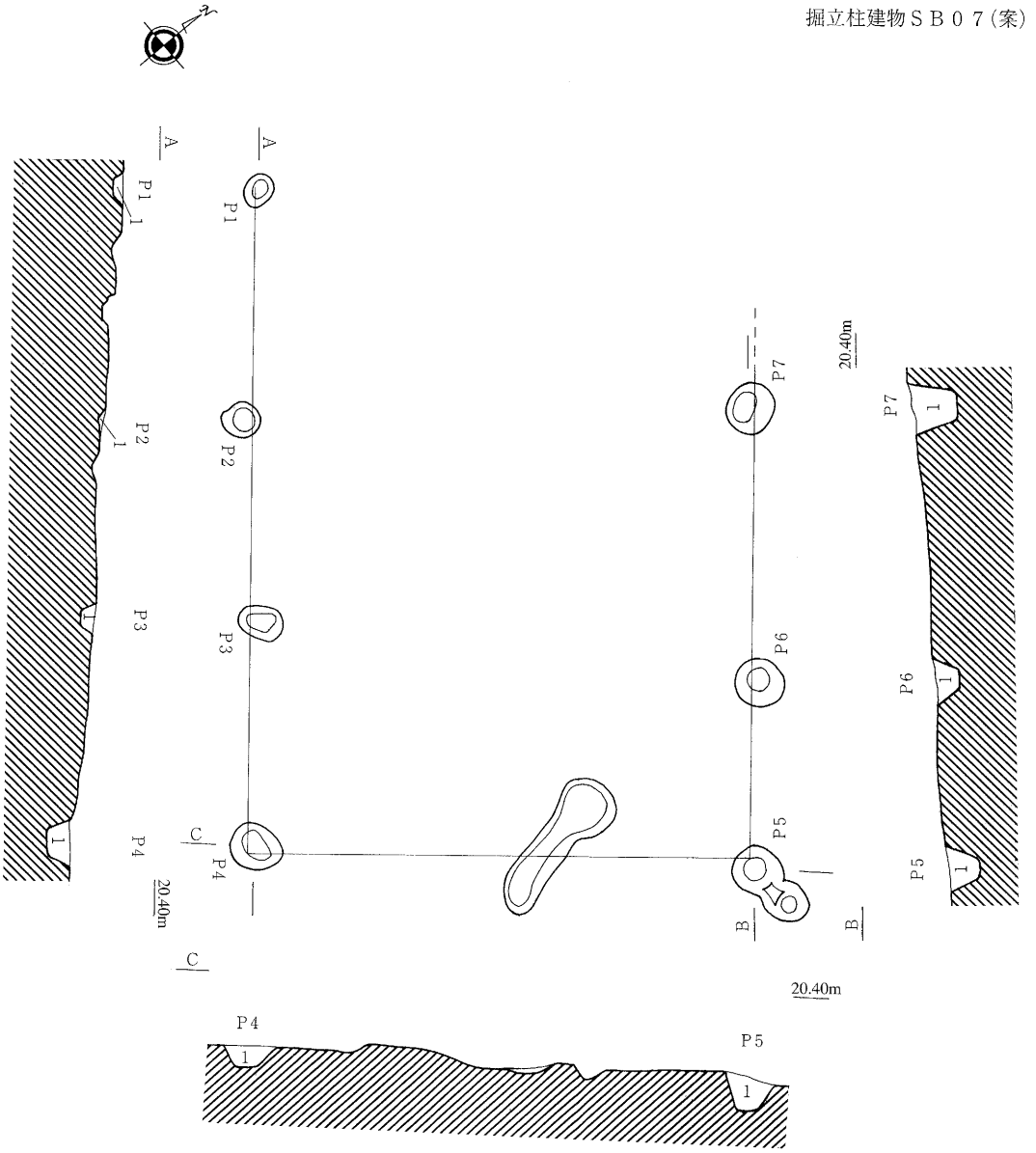
掘立柱建物ＳＢ０６（案）



１．暗褐色砂質土：粘性あり。締りあり。

［Ｃ地区］掘立柱建物ＳＢ06（案）　　縮尺１／60

掘立柱建物ＳＢ０７(案)

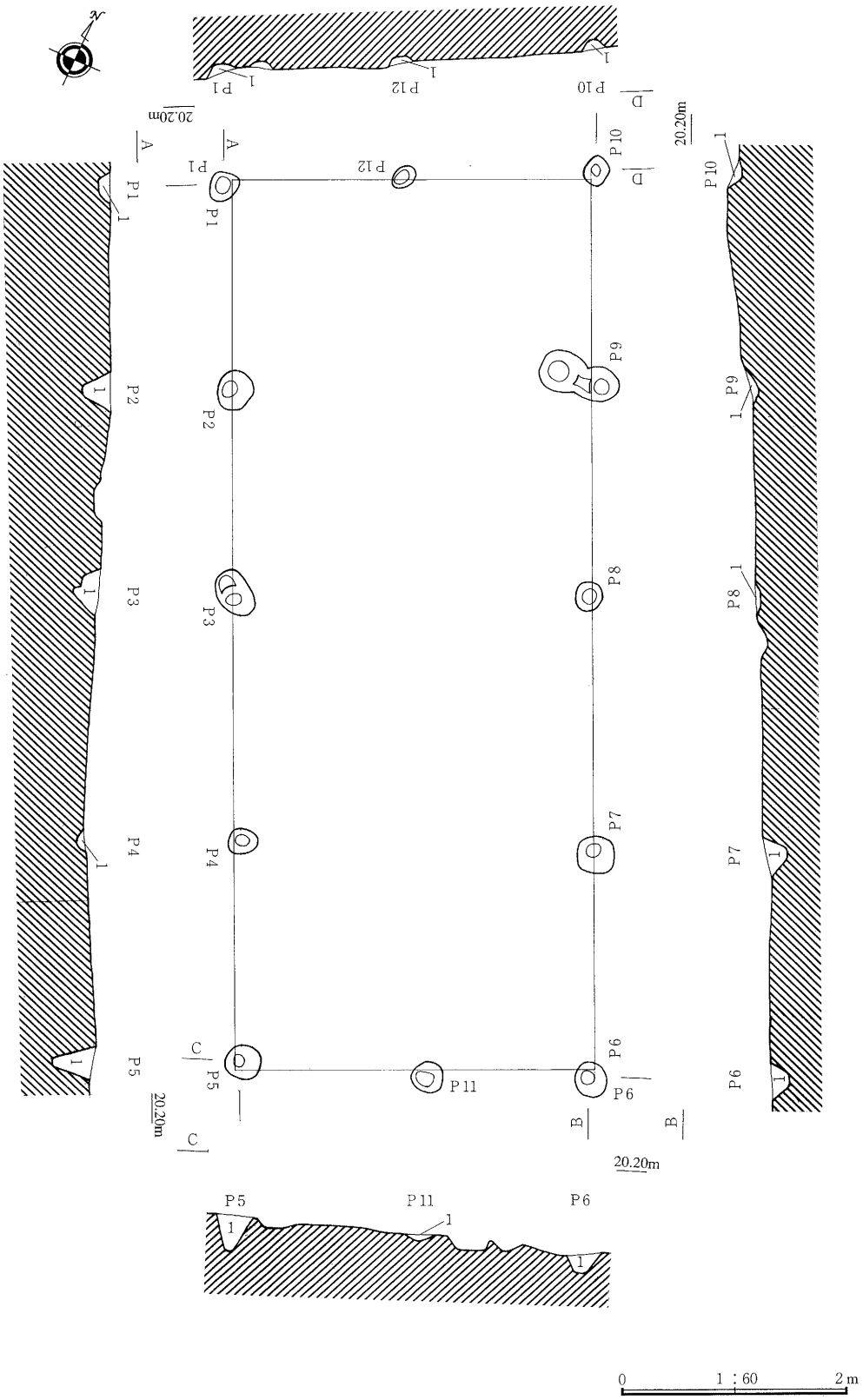


1．暗褐色砂質土：粘性あり。締りあり。

［Ｃ地区］掘立柱建物ＳＢ07（案）

縮尺１／60

掘立柱建物ＳＢ０８（案）

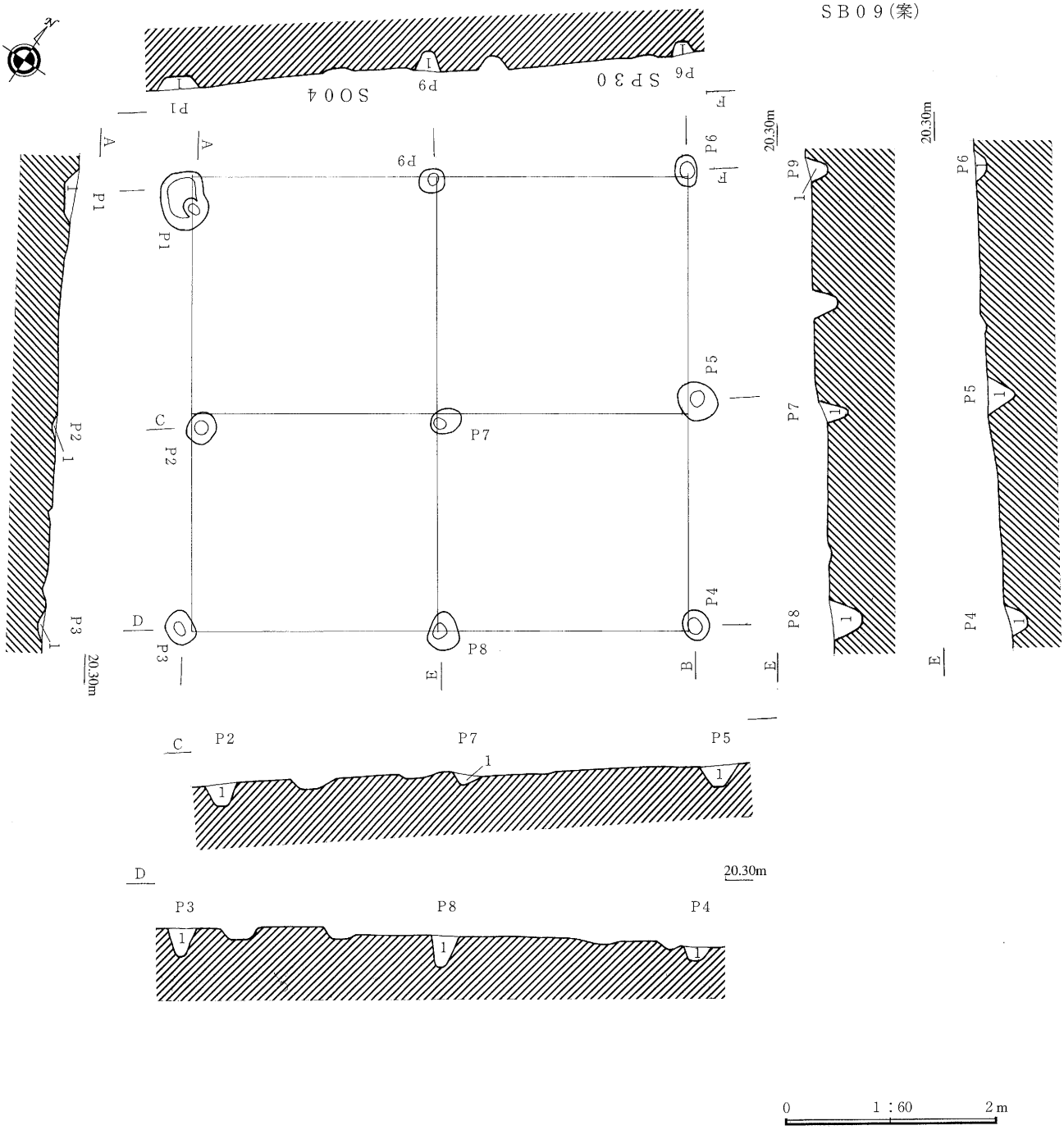


1．暗褐色砂質土：粘性あり。締りあり。

［Ｃ地区］掘立柱建物ＳＢ08（案）　　縮尺１／60

図面二八　遺構実測図

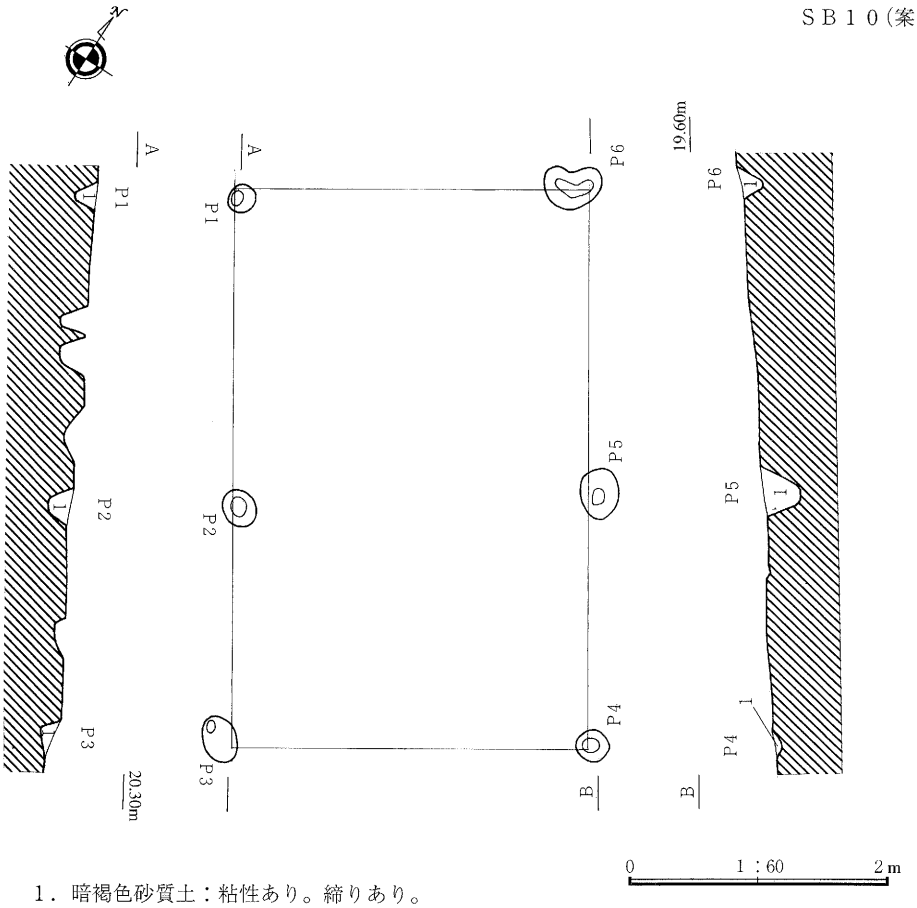
掘立柱建物
ＳＢ０９(案)



1．暗褐色砂質土：粘性あり。締りあり。

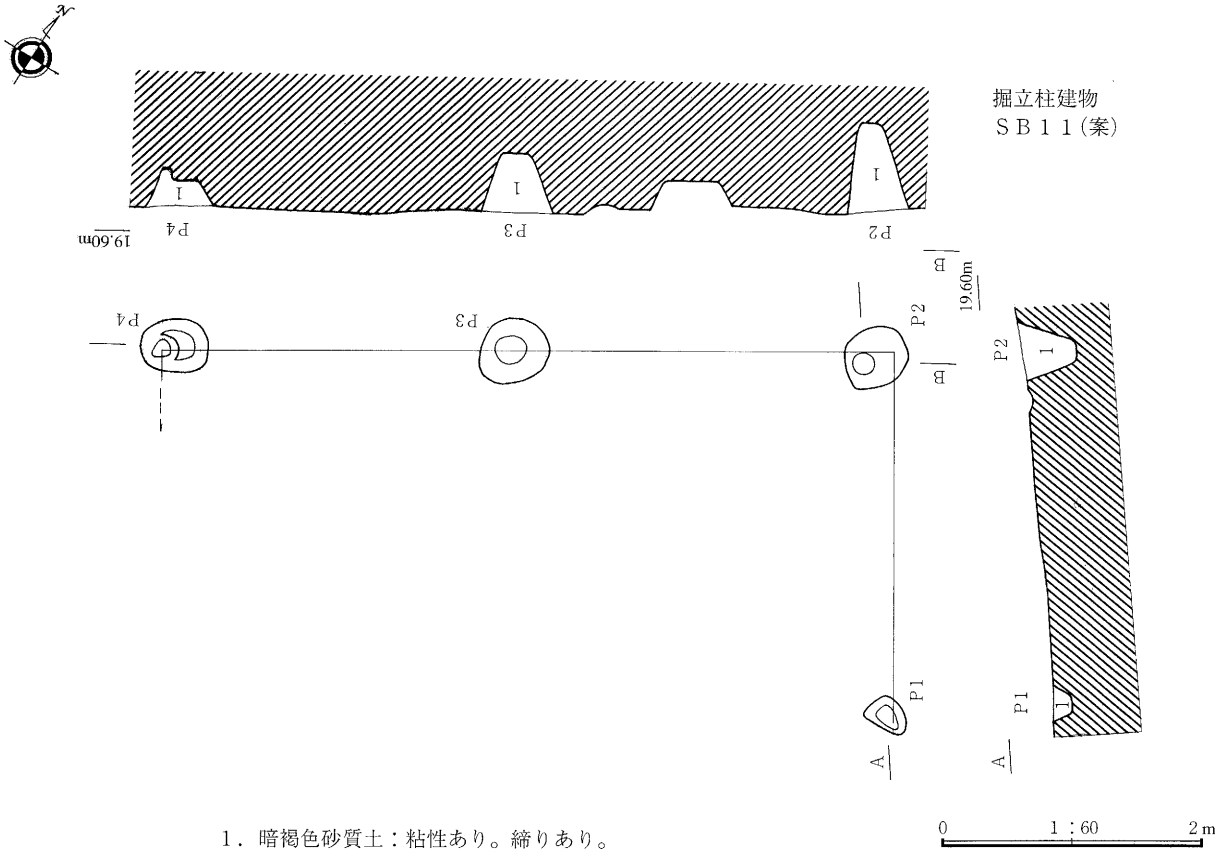
［Ｃ地区］掘立柱建物ＳＢ09（案）　　縮尺１／60

掘立柱建物
ＳＢ１０(案)



1．暗褐色砂質土：粘性あり。締りあり。

掘立柱建物
ＳＢ１１(案)

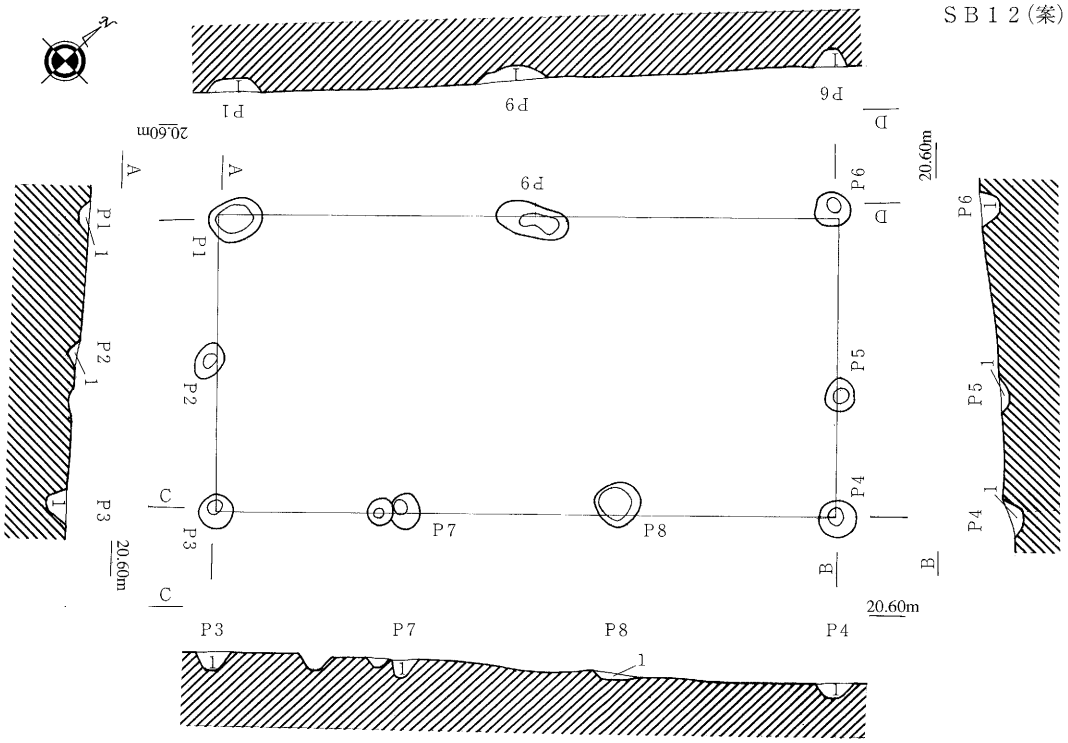


1．暗褐色砂質土：粘性あり。締りあり。

［Ｃ地区］掘立柱建物ＳＢ10（案）・掘立柱建物ＳＢ11（案）

縮尺１／60

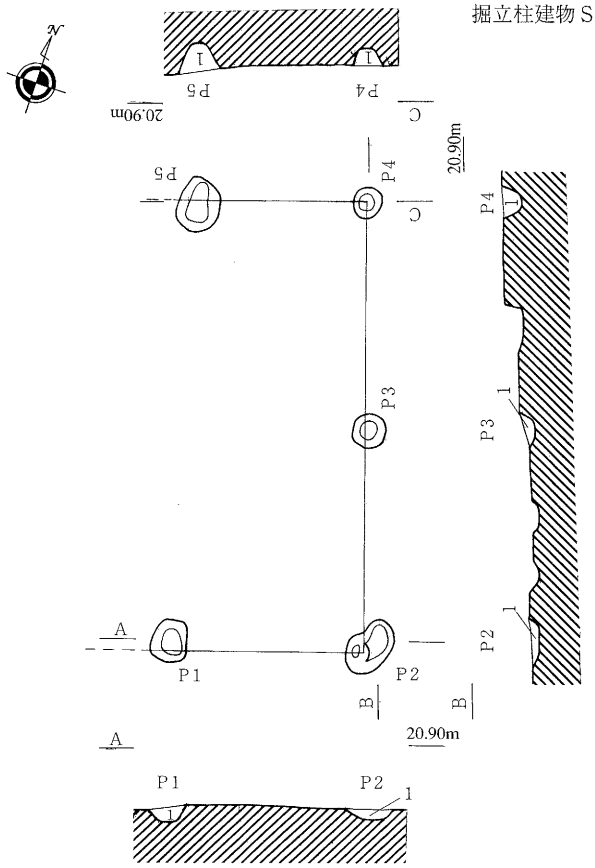
掘立柱建物
ＳＢ１２(案)



1．暗褐色砂質土：粘性あり。締りあり。

0　1：60　2m

掘立柱建物ＳＢ１３(案)

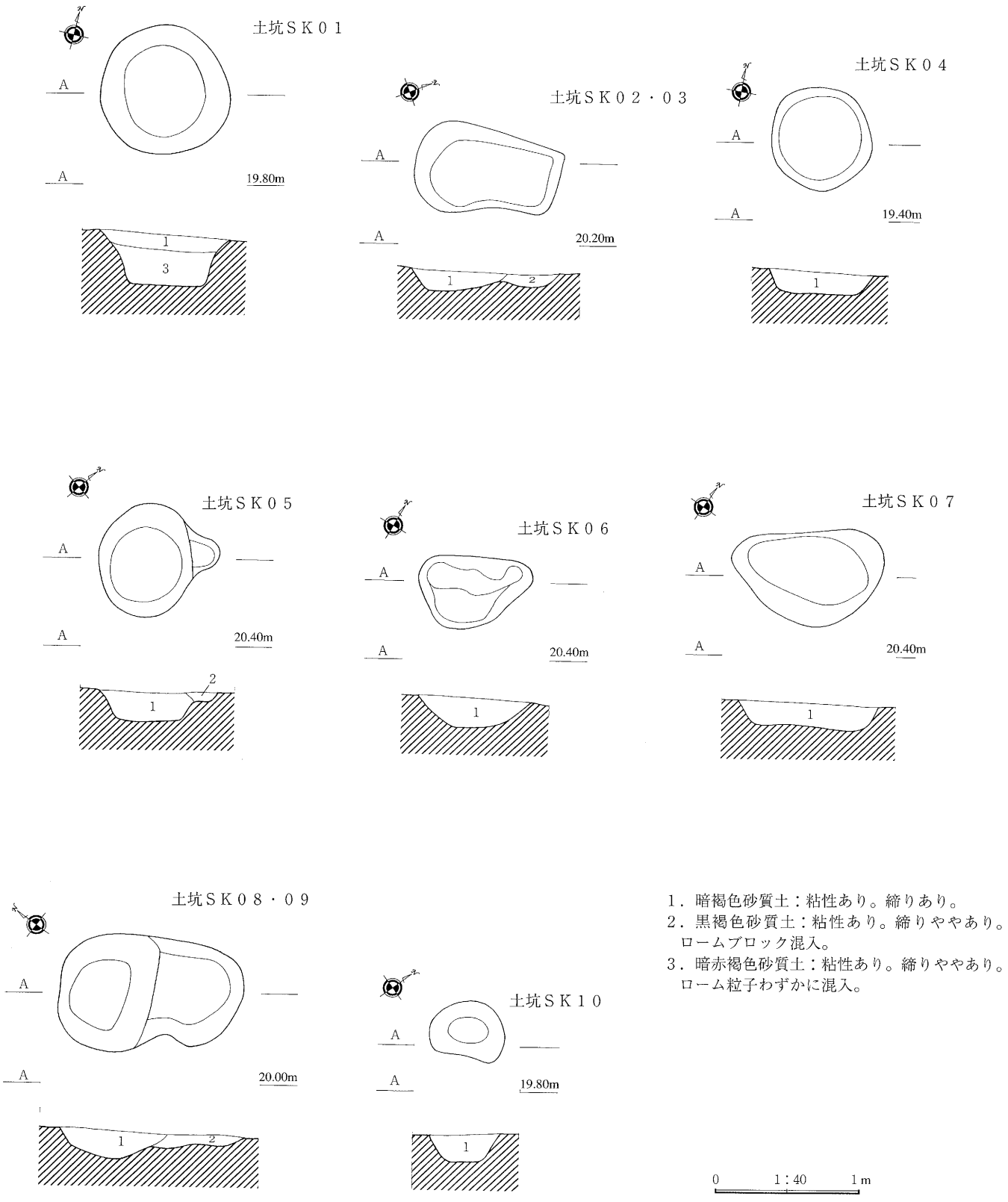


1．暗褐色砂質土：粘性あり。締りあり。

0　1：60　2m

［Ｃ地区］掘立柱建物ＳＢ12（案）・掘立柱建物ＳＢ13（案）　　縮尺１／60

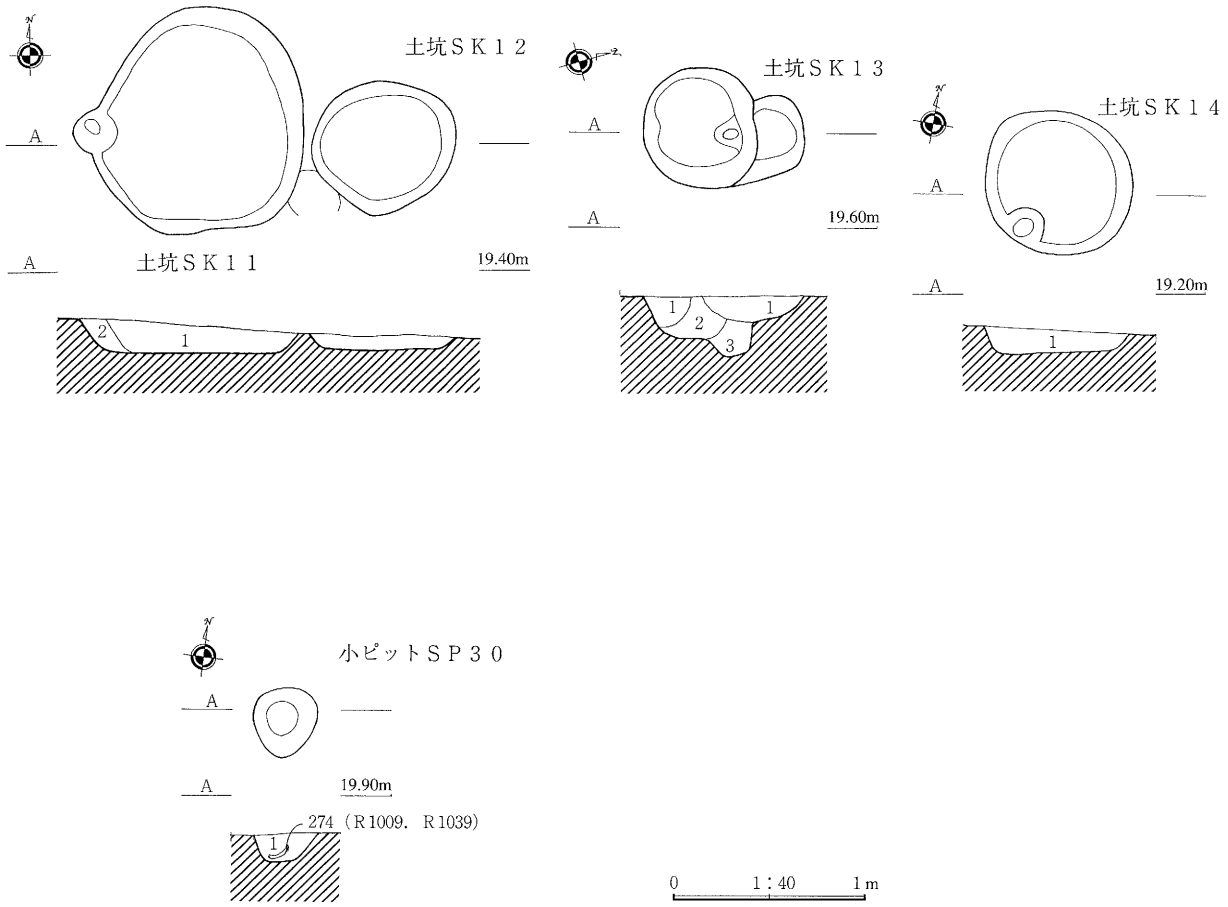
図面三一　遺構実測図



1．暗褐色砂質土：粘性あり。締りあり。
2．黒褐色砂質土：粘性あり。締りややあり。ロームブロック混入。
3．暗赤褐色砂質土：粘性あり。締りややあり。ローム粒子わずかに混入。

［Ｃ地区］土坑ＳＫ01～土坑ＳＫ10

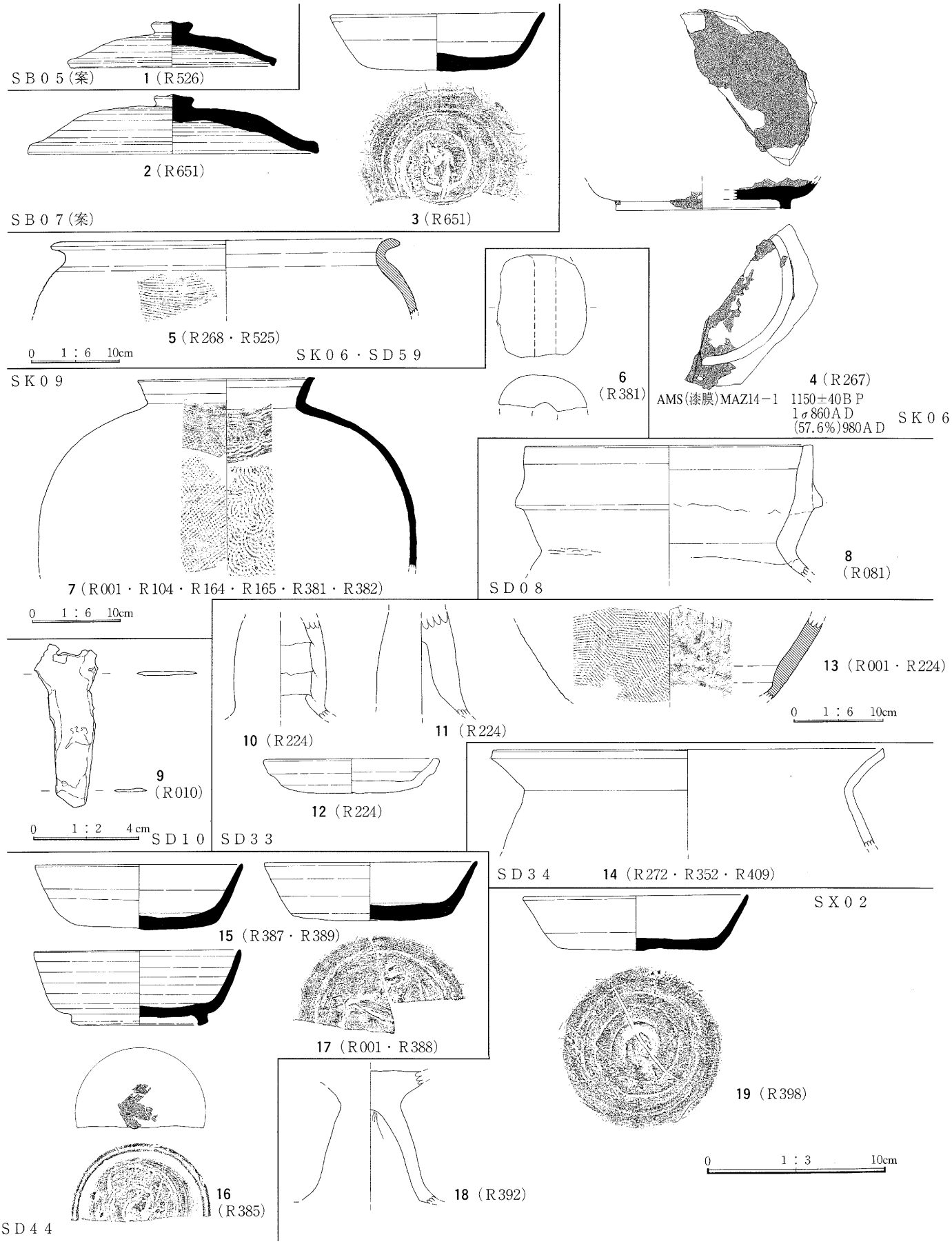
縮尺１／40



１．暗褐色砂質土：粘性あり。締りあり。
２．黒褐色砂質土：粘性あり。締りややあり。ロームブロック混入。
３．暗褐色土：粘性あり。締りあり。ローム粒子混入。

［Ｃ地区］土坑ＳＫ11～土坑ＳＫ14・小ピットＳＰ30　　縮尺１／40

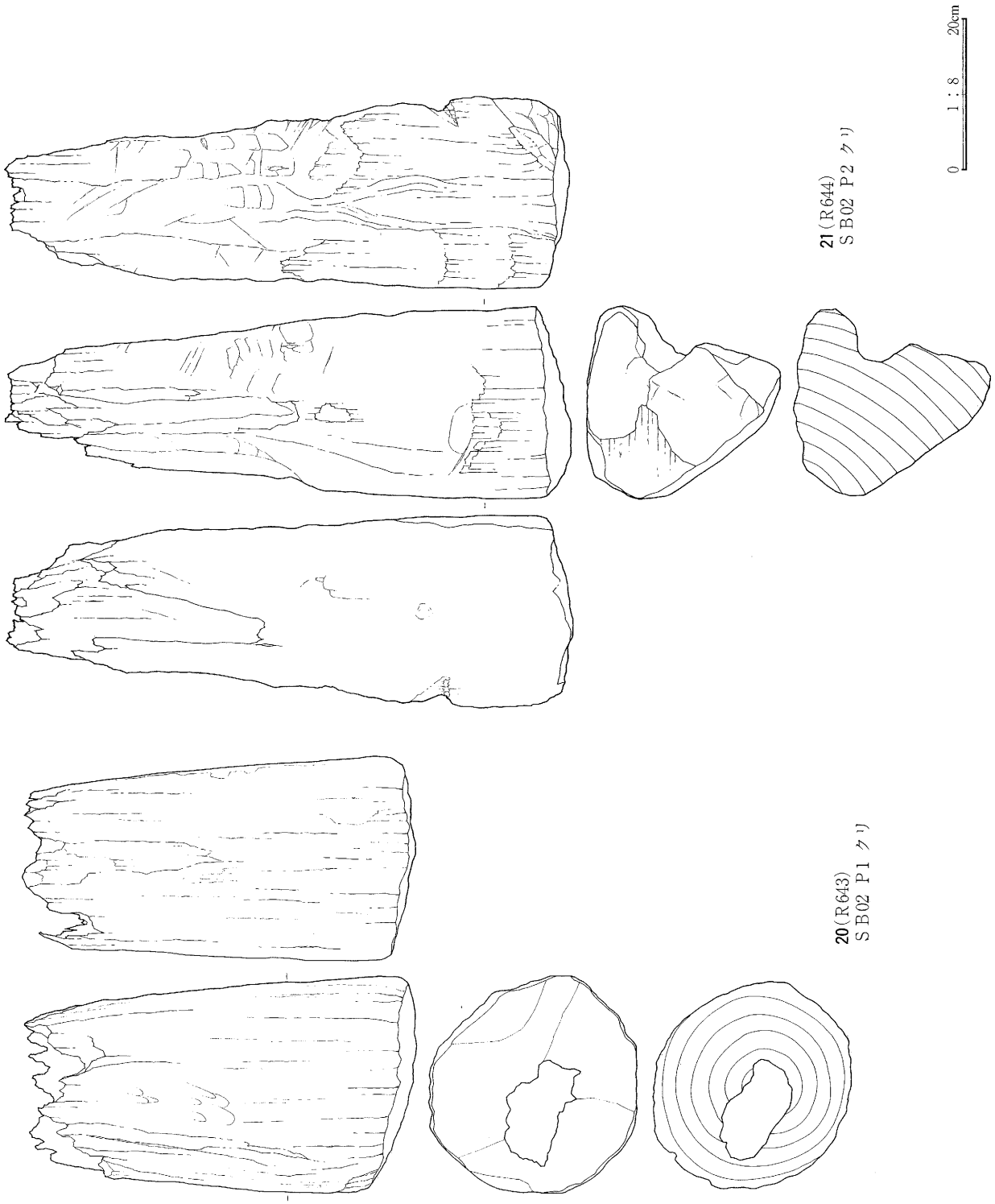
図面三三　遺物実測図



B地区遺構内出土遺物　土器類・鉄製品

縮尺1／2、1／3、1／6

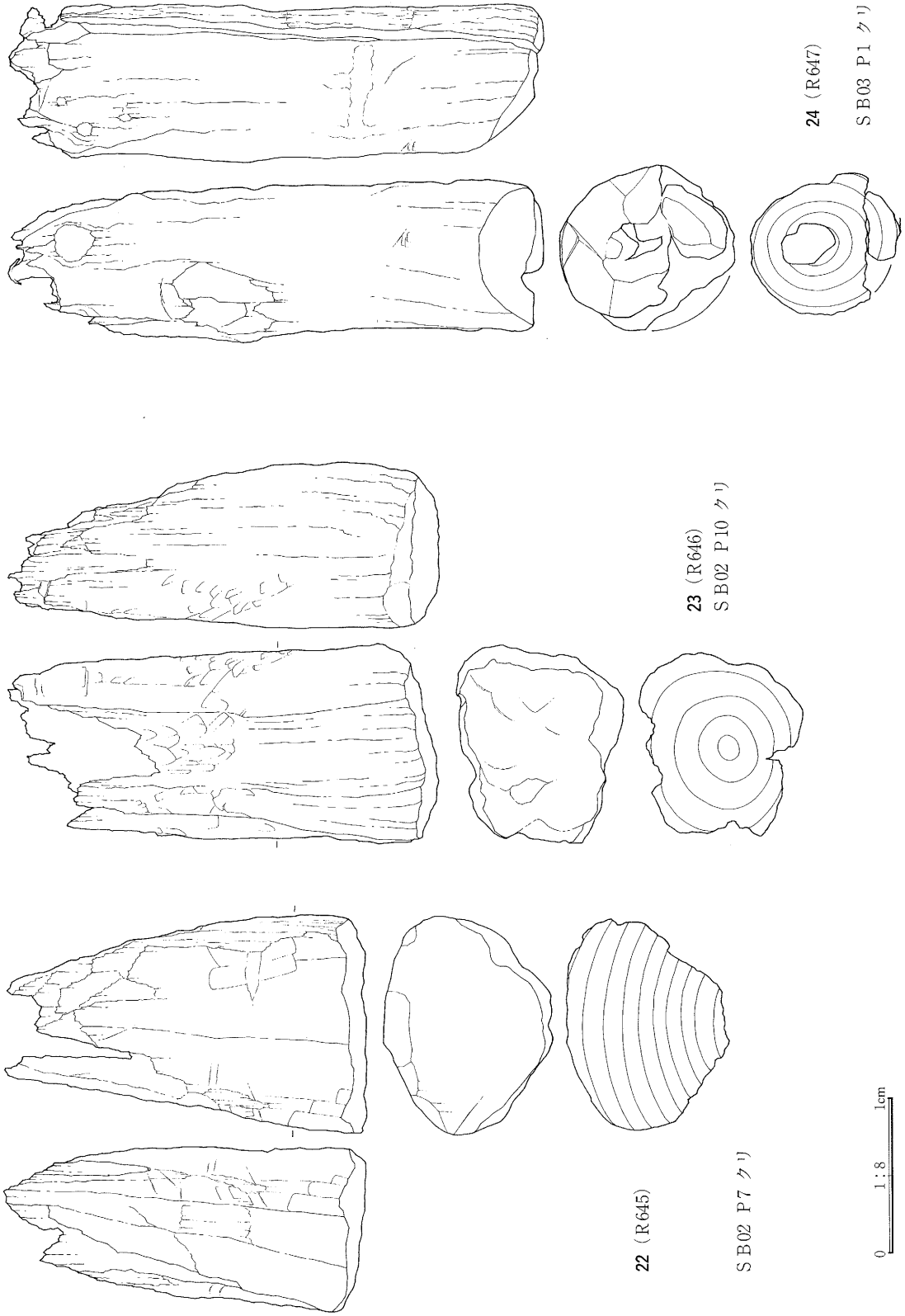
図面三四　遺物実測図



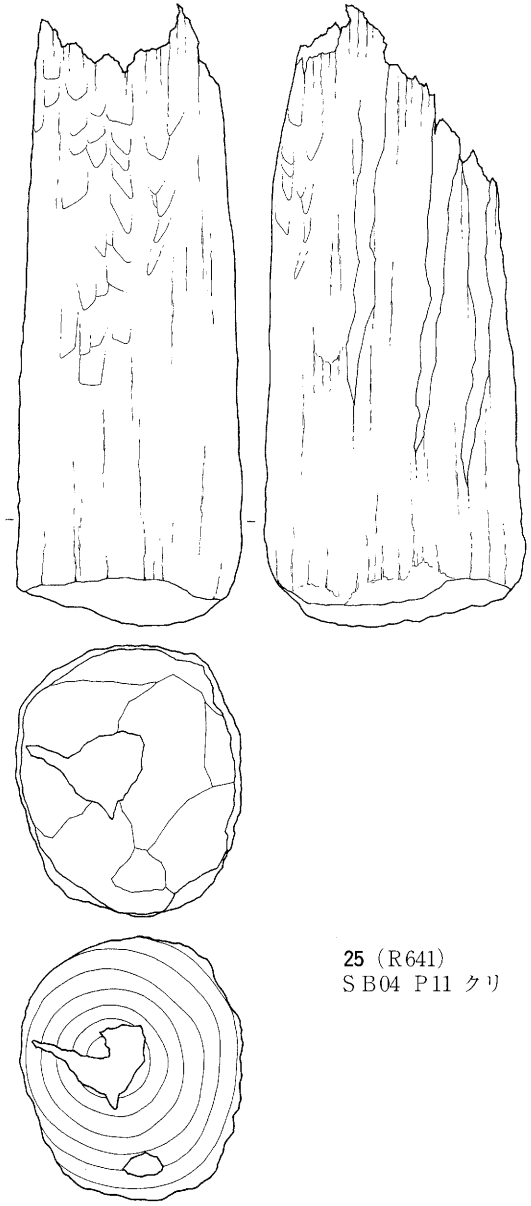
［Ｂ地区］掘立柱建物ＳＢ02（案）出土遺物　柱根

縮尺１／８

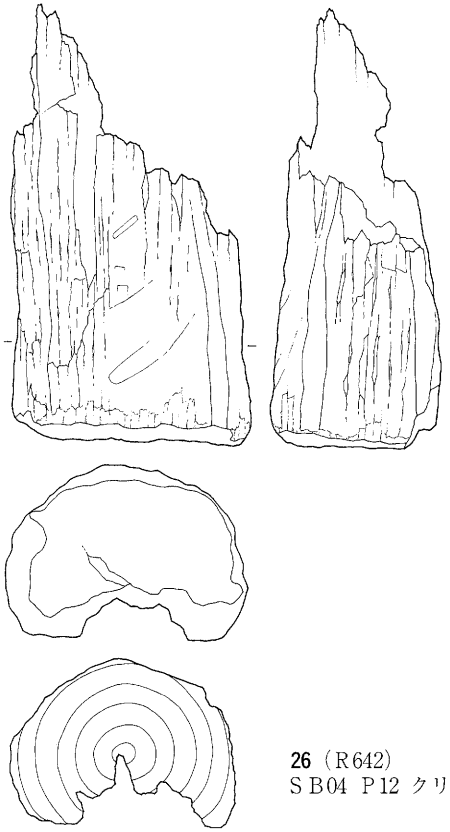
図面三五　遺物実測図



［B地区］掘立柱建物SB02（案）・掘立柱建物SB03（案）出土遺物　柱根　　縮尺1／8



25（R641）
SB04 P11 クリ



26（R642）
SB04 P12 クリ

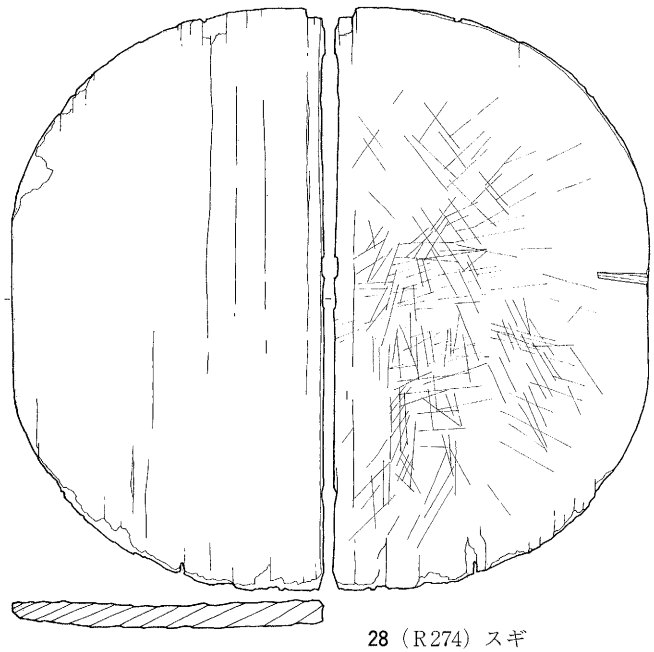
27（R686）
SB04 P13 クリ

0　1:8　20cm

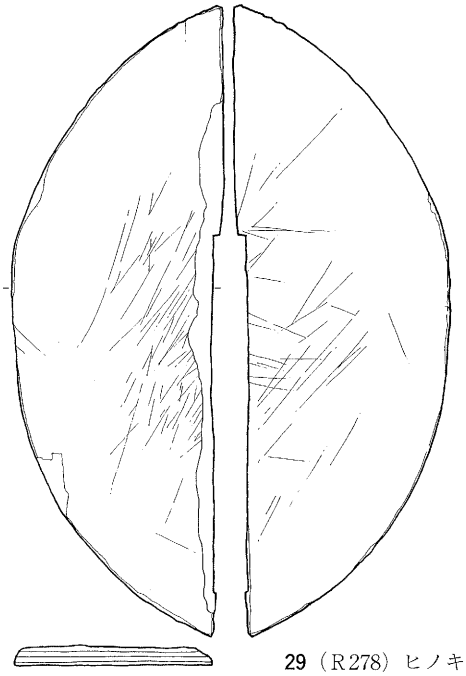
図三十六　遺物実測図

［B地区］掘立柱建物SB04（案）出土遺物　柱根

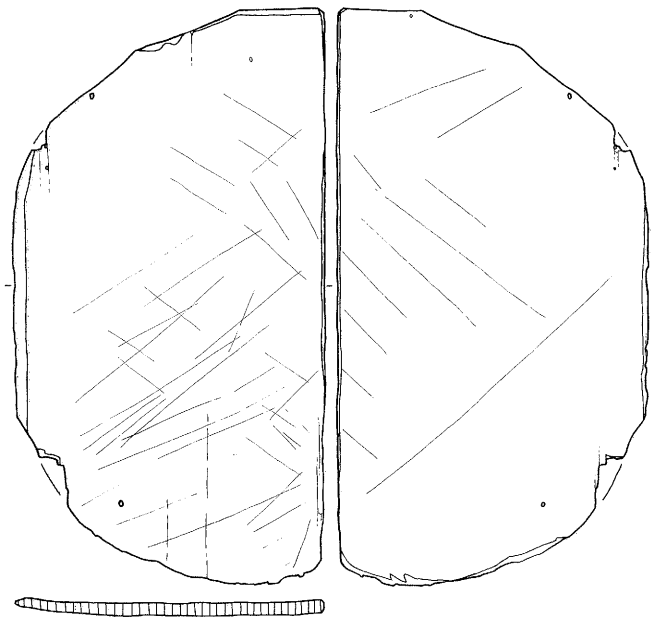
縮尺1／8



28（R274）スギ

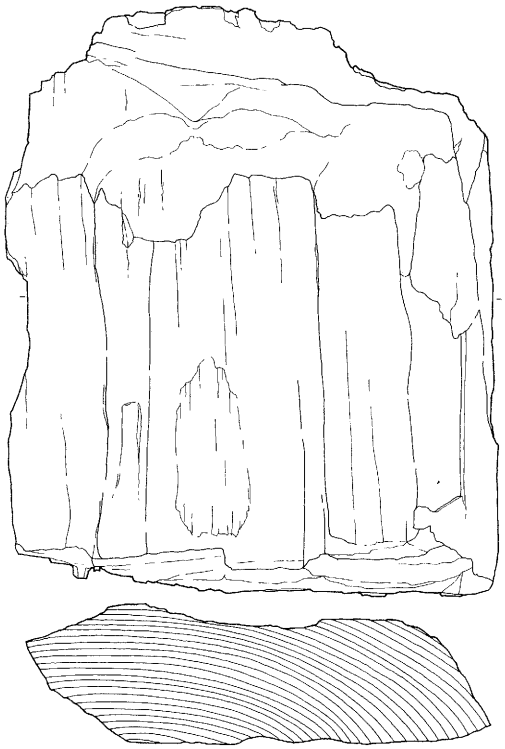


29（R278）ヒノキ属



30（R279）ヒノキ

0　1：3　10cm

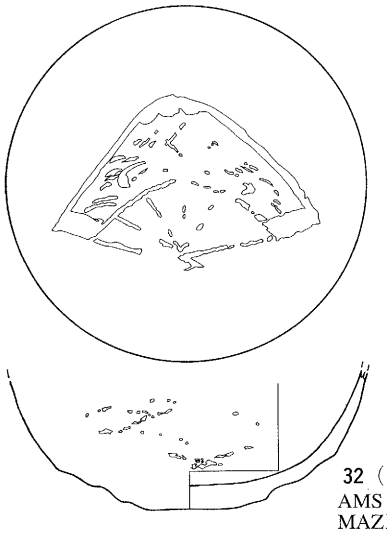


31（R280）ケヤキ

0　1：4　10cm

［B地区］土坑ＳＫ01出土遺物　木製品

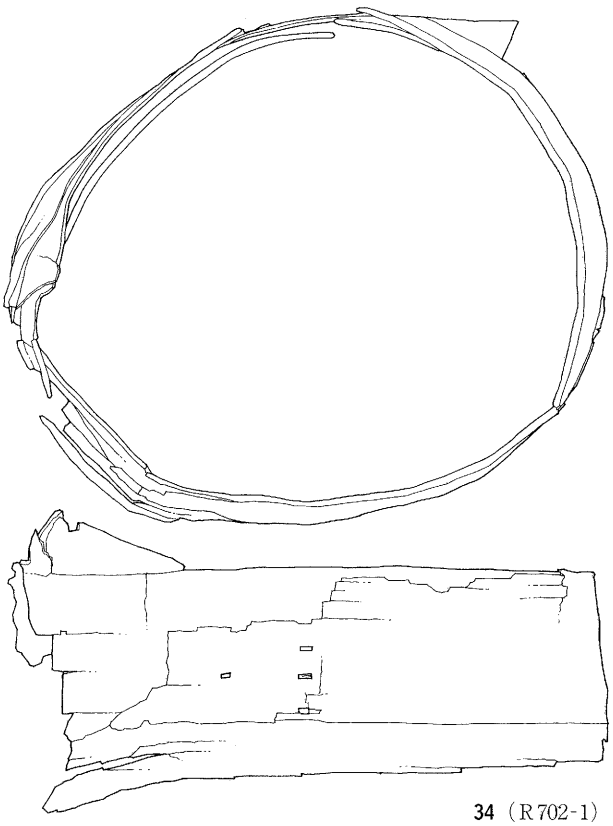
縮尺１／３、１／４



32（R266）ブナ属
AMS（漆塗膜）
MAZ14－15
880±60ＢＰ
1σ1110ＡＤ（44.3％）
1220ＡＤ
塗膜No.3

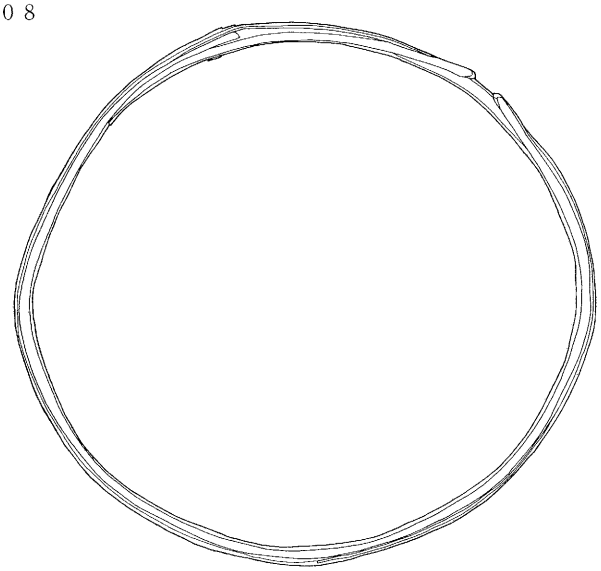
0　1：3　10cm

ＳＫ０６

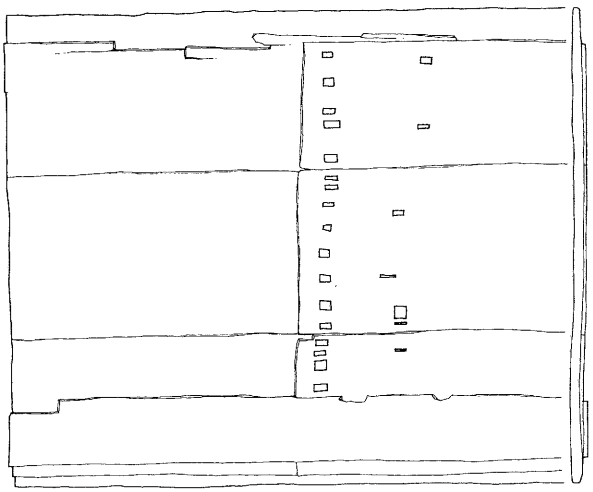


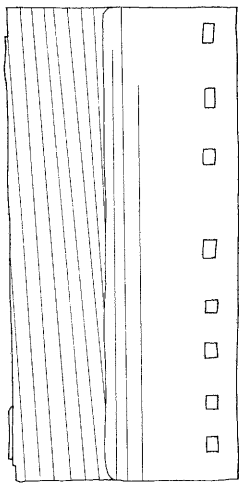
34（R702-1）
スギ

ＳＫ０８



0　1：8　40cm



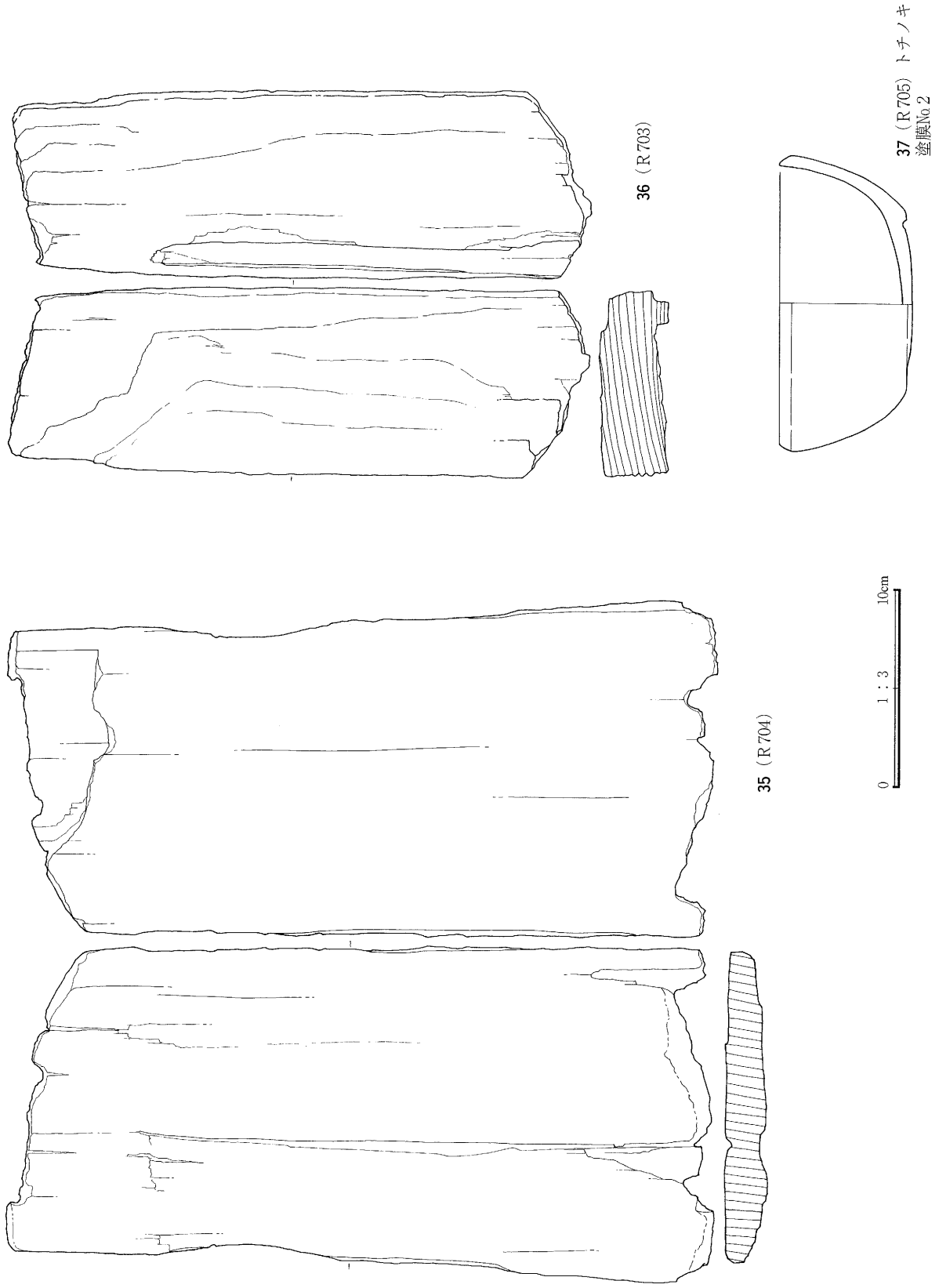


33（R702-2）
スギ

［Ｂ地区］土坑ＳＫ06・土坑ＳＫ08出土遺物　木製品

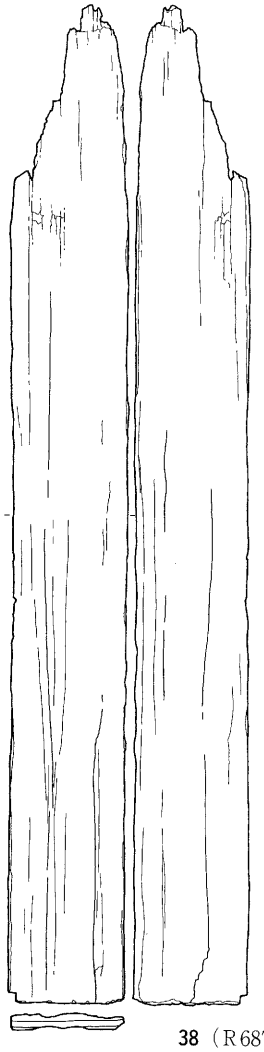
縮尺１／３、１／８

図面三九　遺物実測図

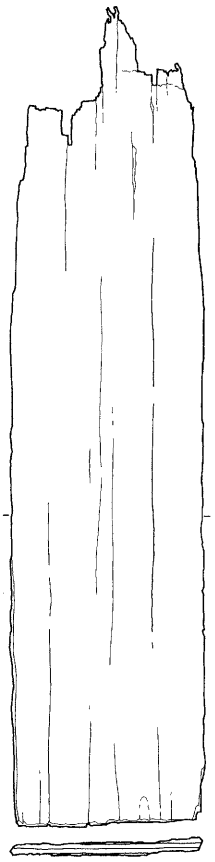


［B地区］土坑SK08出土遺物　木製品

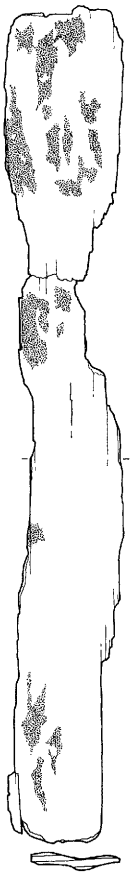
縮尺1／3



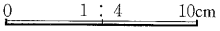
38（R687）スギ

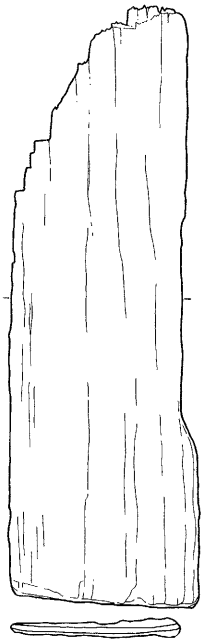


39（R688）スギ

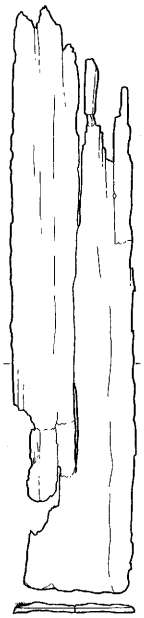


40（R696）未分析
漆付着（肉眼観察）





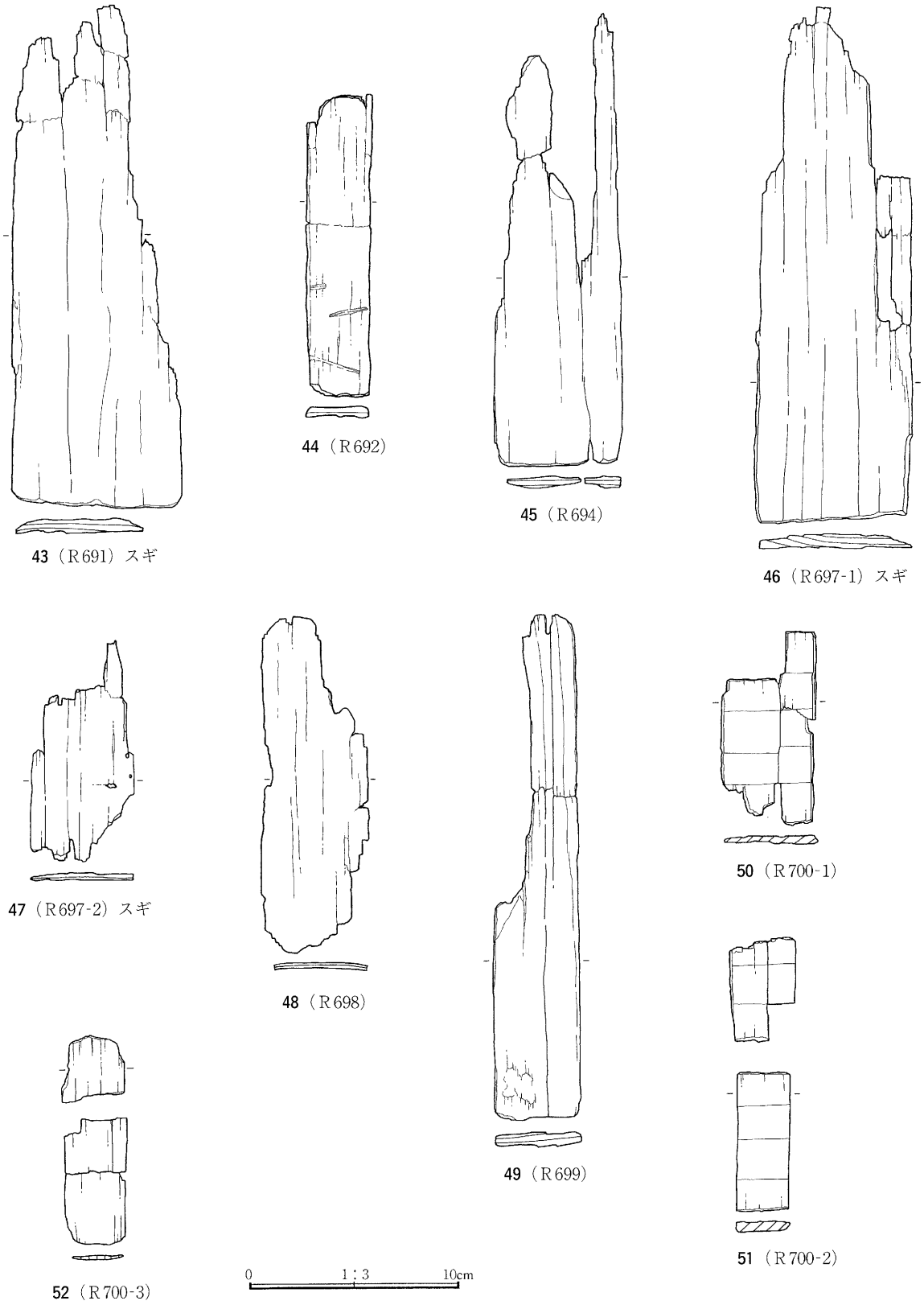
41（R693）スギ



42（R695）未分析

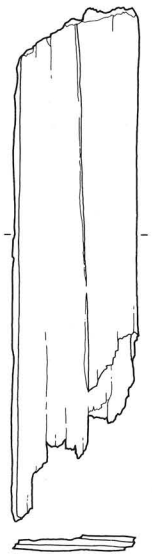
［B地区］土坑ＳＫ08出土遺物　木製品

縮尺１／４

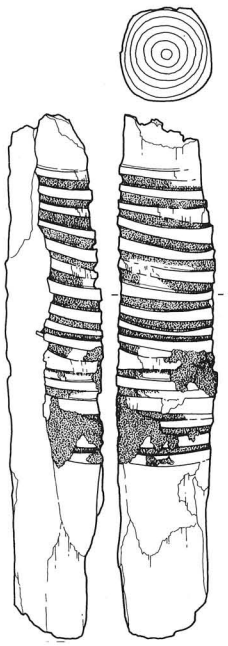


［B地区］土坑SK08出土遺物　木製品

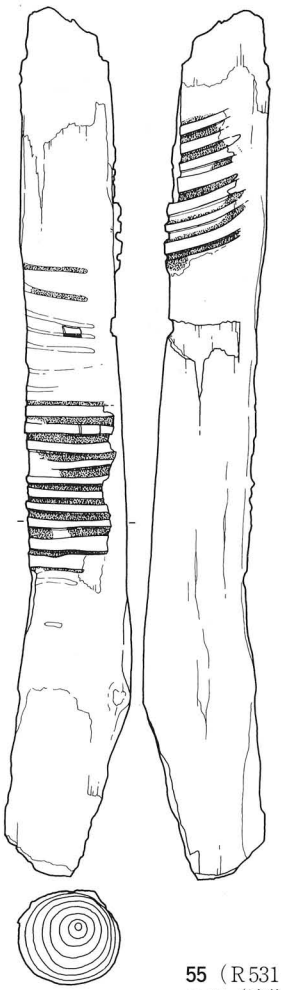
縮尺1／3



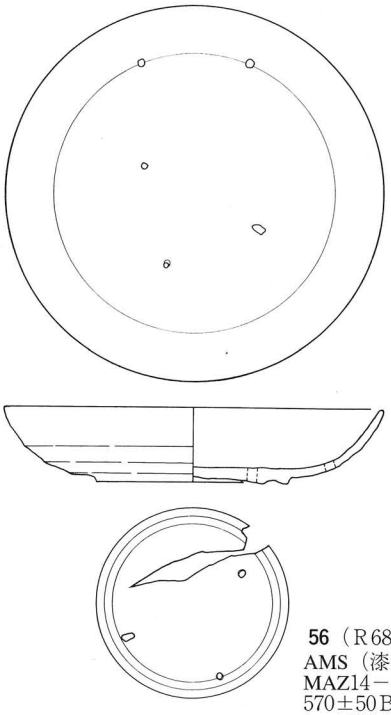
53（R668）スギ



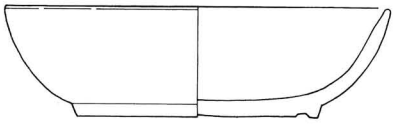
54（R531-2）ウルシ
AMS（漆樹液）
MAZ14－13
160±50ＢＰ
1σ1720ＡＤ(33.0%)1820ＡＤ



55（R531-1）ウルシ
AMS（漆樹液）
MAZ14－12
60±50ＢＰ
1σ1870ＡＤ(28.4%)1920ＡＤ

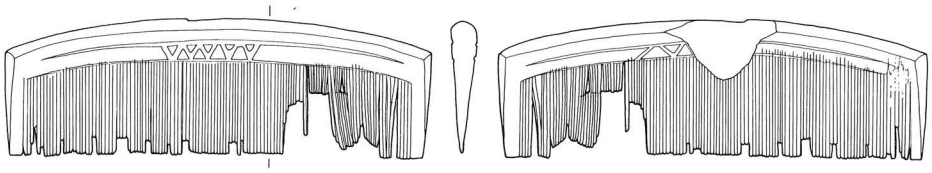


56（R680）ケヤキ
AMS（漆塗膜）
MAZ14－18
570±50ＢＰ
1σ1300ＡＤ(41.4%)1360ＡＤ
塗膜№4



57（R561）スギ
AMS（漆塗膜）
MAZ14－19
880±50ＢＰ
1σ1150ＡＤ
(36.6%)1220ＡＤ
塗膜№1

0　1：3　10cm

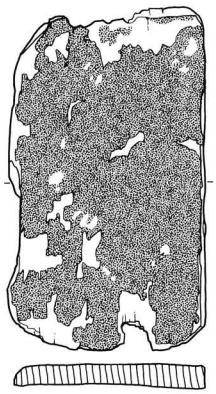


58（R613）イスノキ

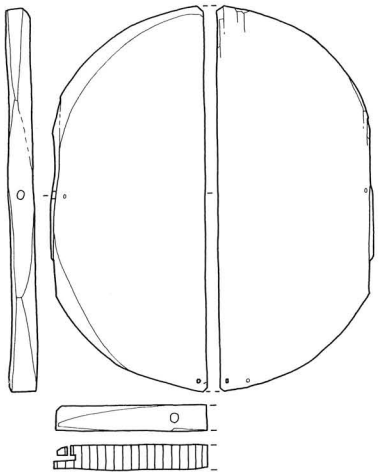
0　1：2　5cm

［Ｂ地区］溝ＳＤ59出土遺物　木製品

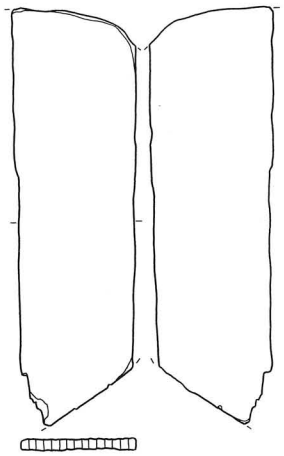
縮尺１／２、１／３



59（R592）スギ
漆付着
（肉眼観察）

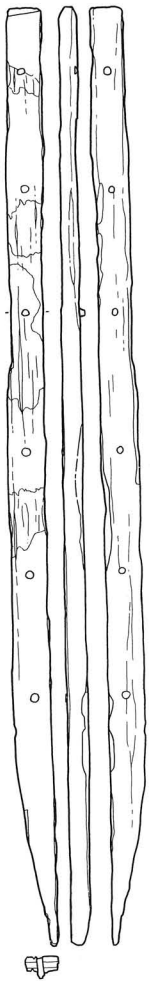


60（R605）スギ

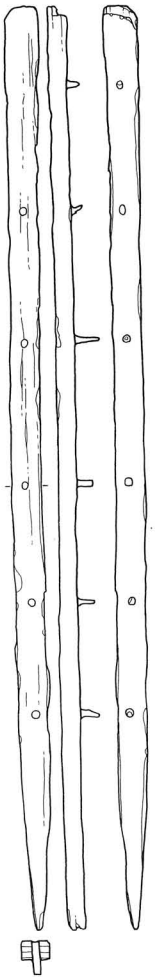


61（R609）スギ

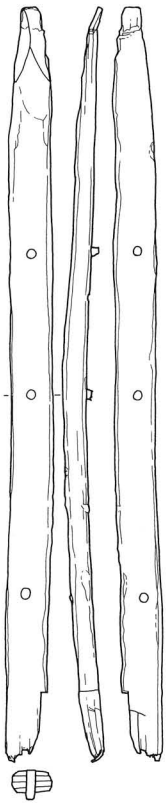
0　1：3　10cm



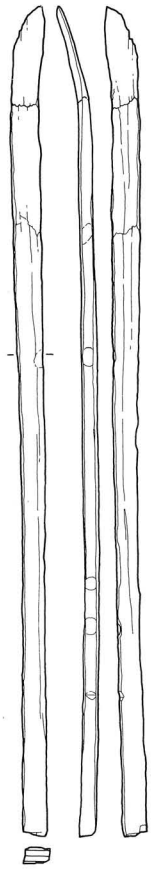
62（R570）スギ



63（R571）スギ



64（R602）スギ

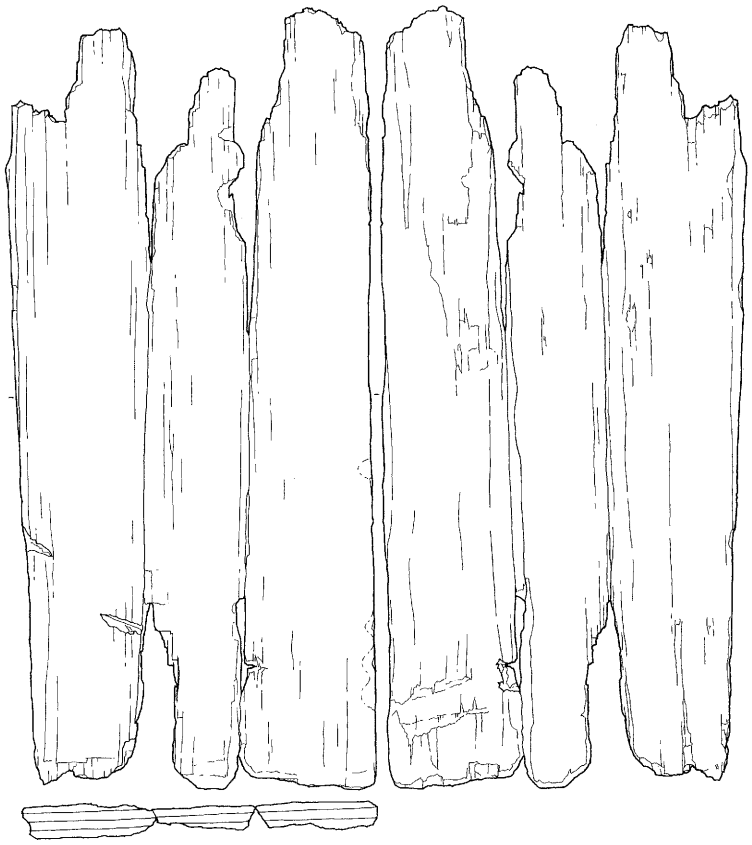


65（R558）スギ

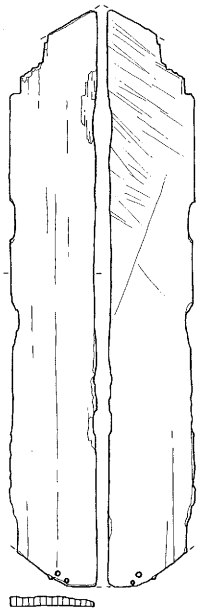
0　1：4　10cm

［B地区］溝ＳＤ59出土遺物　木製品

縮尺１／３、１／４

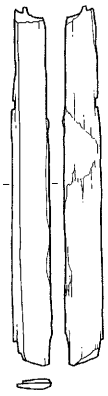


66（R530）

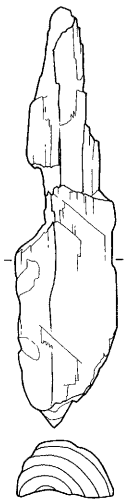


67（R559）スギ曲物

0　1：4　10cm



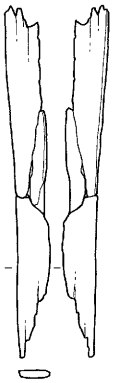
68（R562）



69（R563）

70（R564）

71（R565）



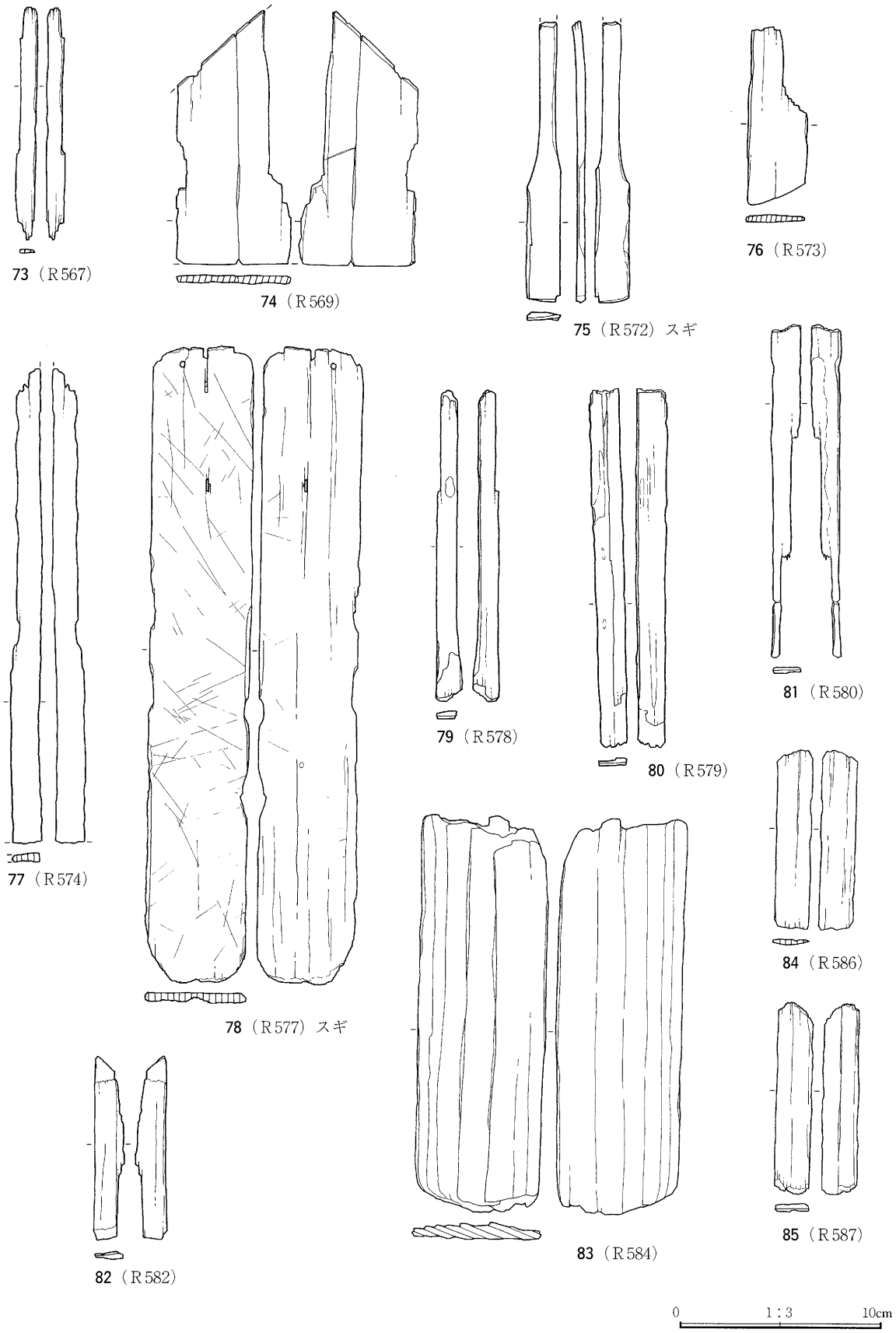
72（R566）

0　1：3　10cm

［B地区］溝ＳＤ59出土遺物　木製品

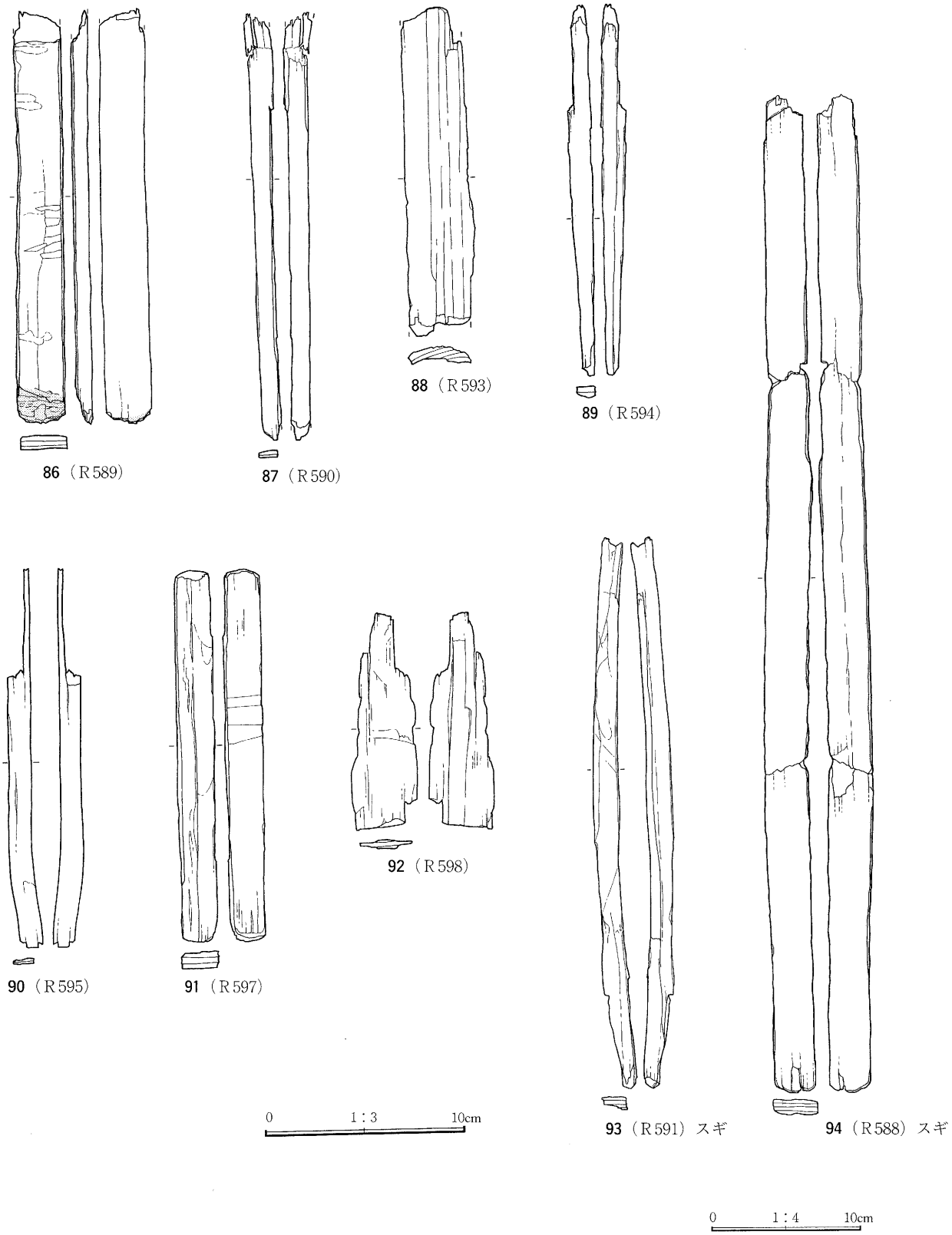
縮尺１／３、１／４

図面四五　遺物実測図



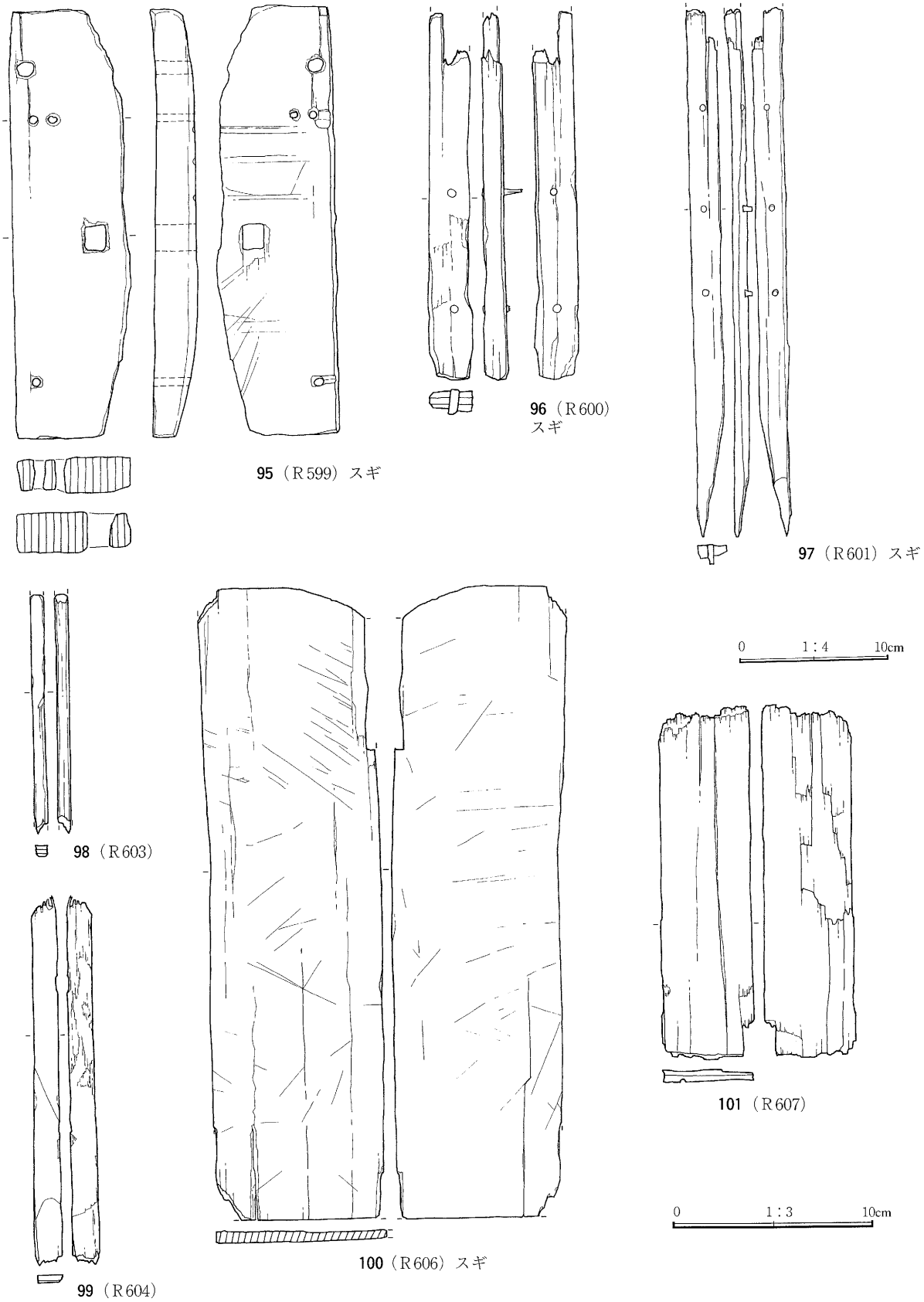
［B地区］溝SD59出土遺物　木製品

縮尺1／3



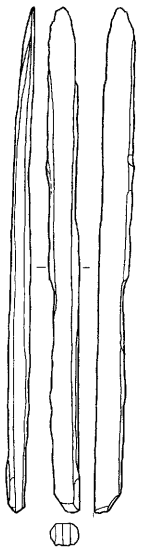
［B地区］溝SD59出土遺物　木製品

縮尺1／3、1／4



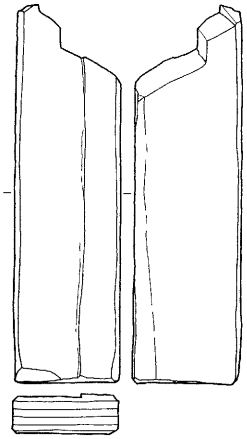
［B地区］溝SD59出土遺物　木製品

縮尺1／3

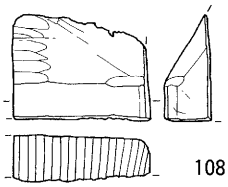


102（R610）

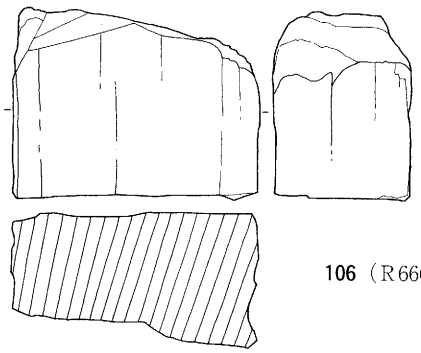
103（R611）



104（R614）

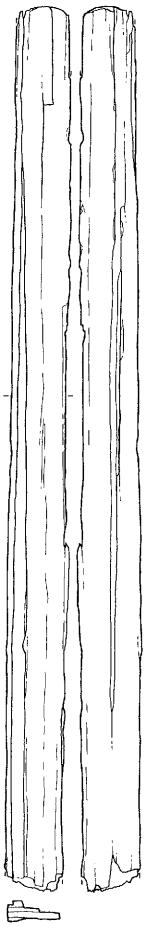


108（R664）スギ

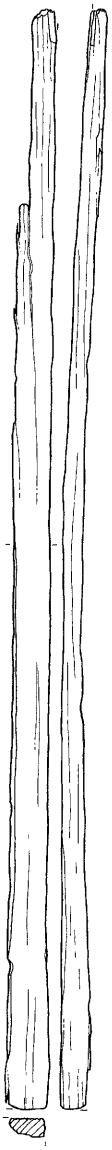


106（R666）

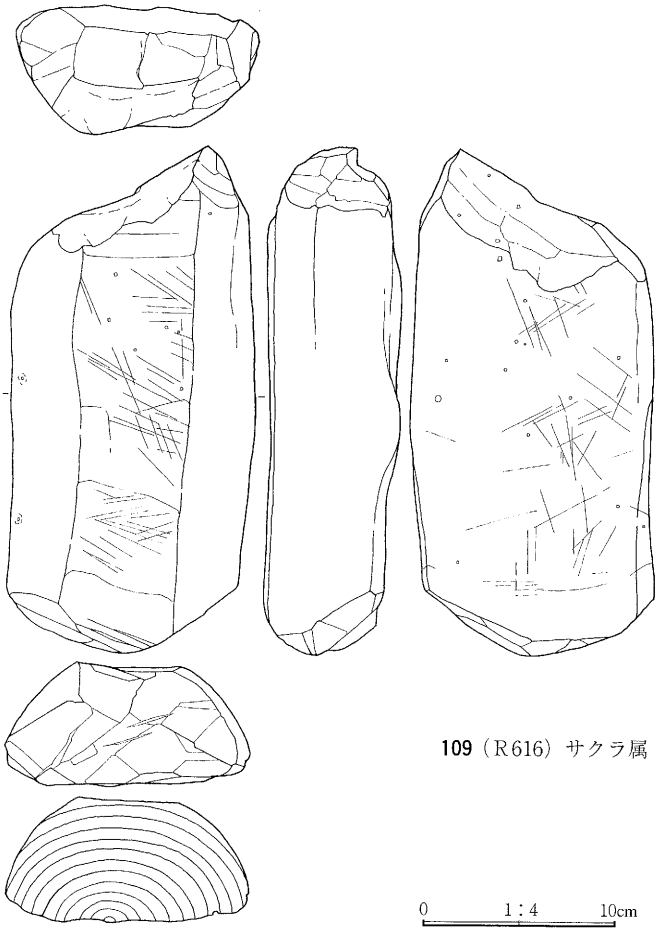
0　1：3　10cm



105（R669）スギ



107（R608）スギ

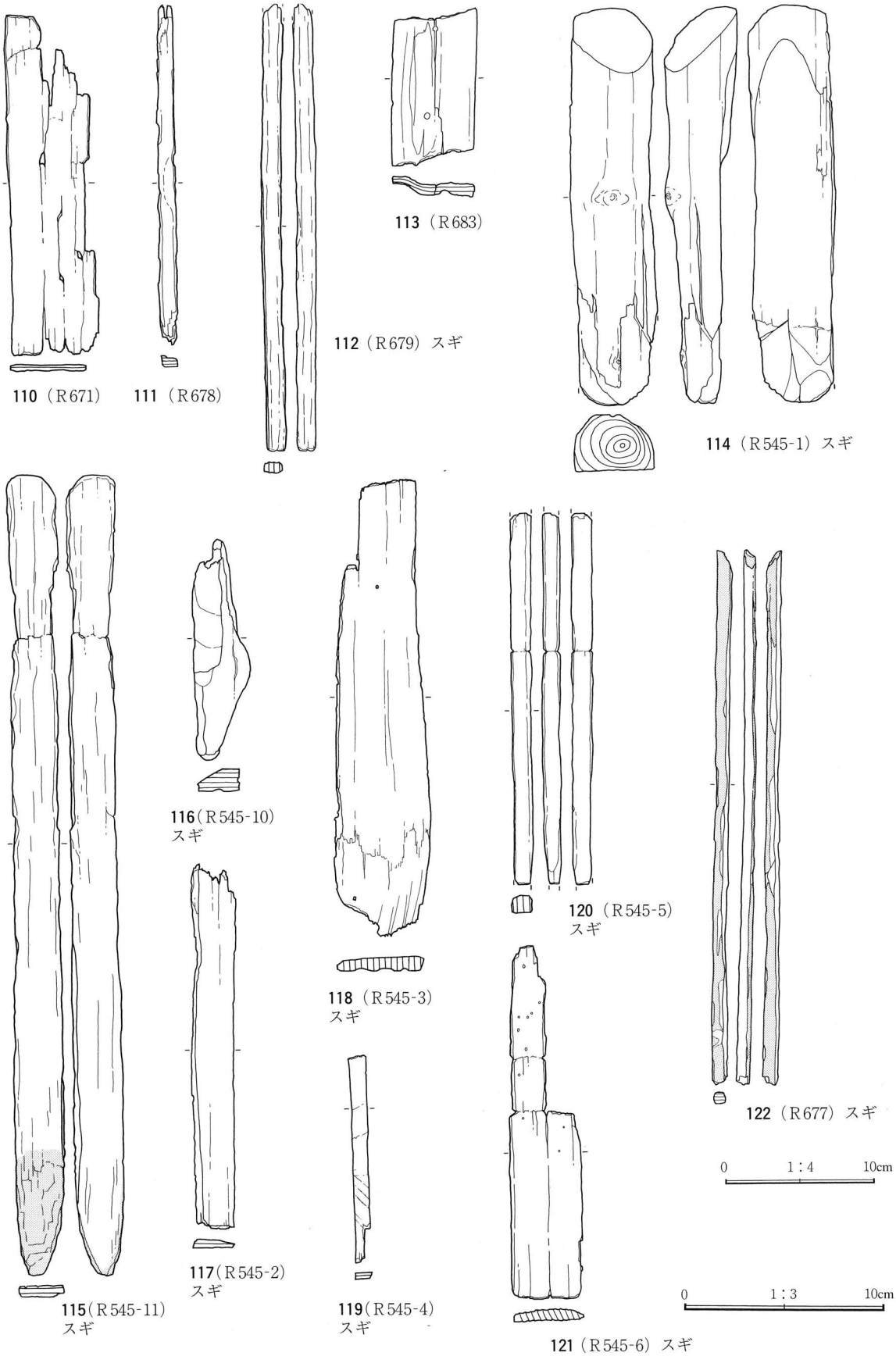


109（R616）サクラ属

0　1：4　10cm

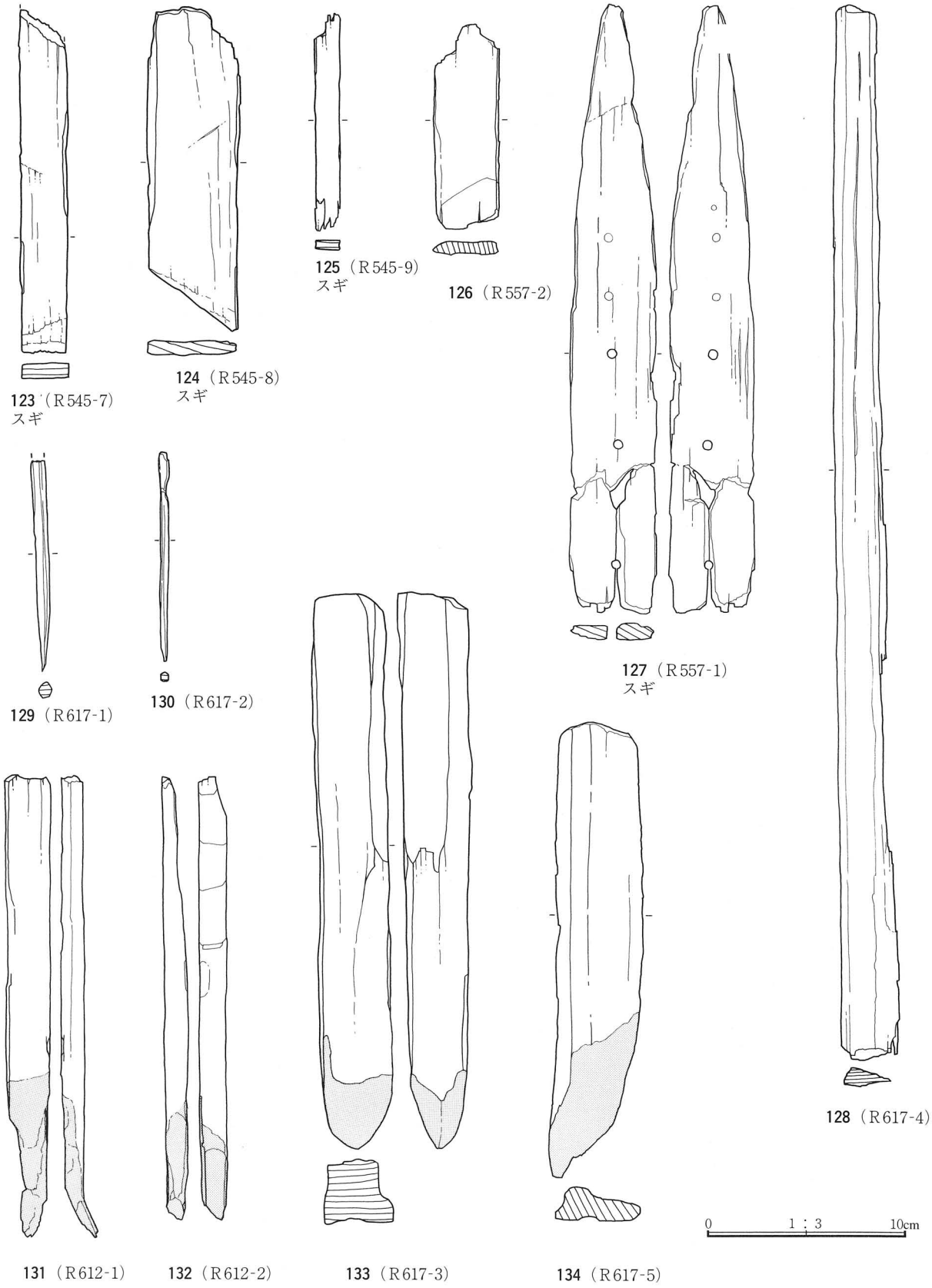
［B地区］溝ＳＤ59出土遺物　木製品

縮尺１／３、１／４



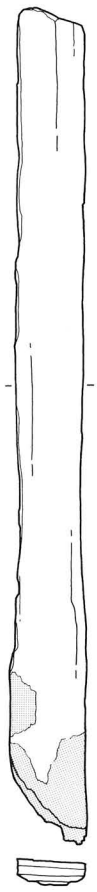
［B地区］溝ＳＤ59出土遺物　木製品

縮尺１／３、１／４

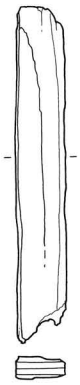


［B地区］溝ＳＤ59出土遺物　木製品

縮尺１／３



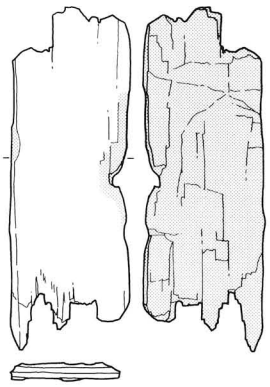
135（R617-6）



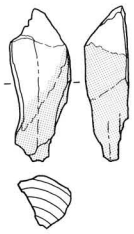
136（R617-7）

137（R653-1）スギ

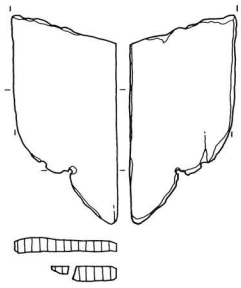
138（R653-2）スギ



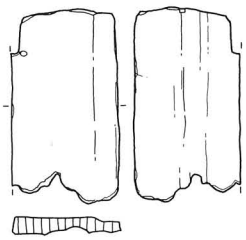
139（R653-3）スギ



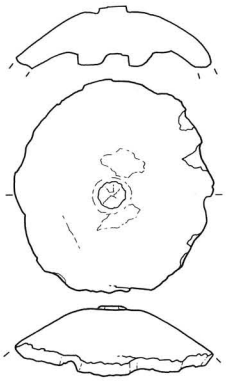
140（R653-4）スギ



141（R665-1）



142（R665-2）

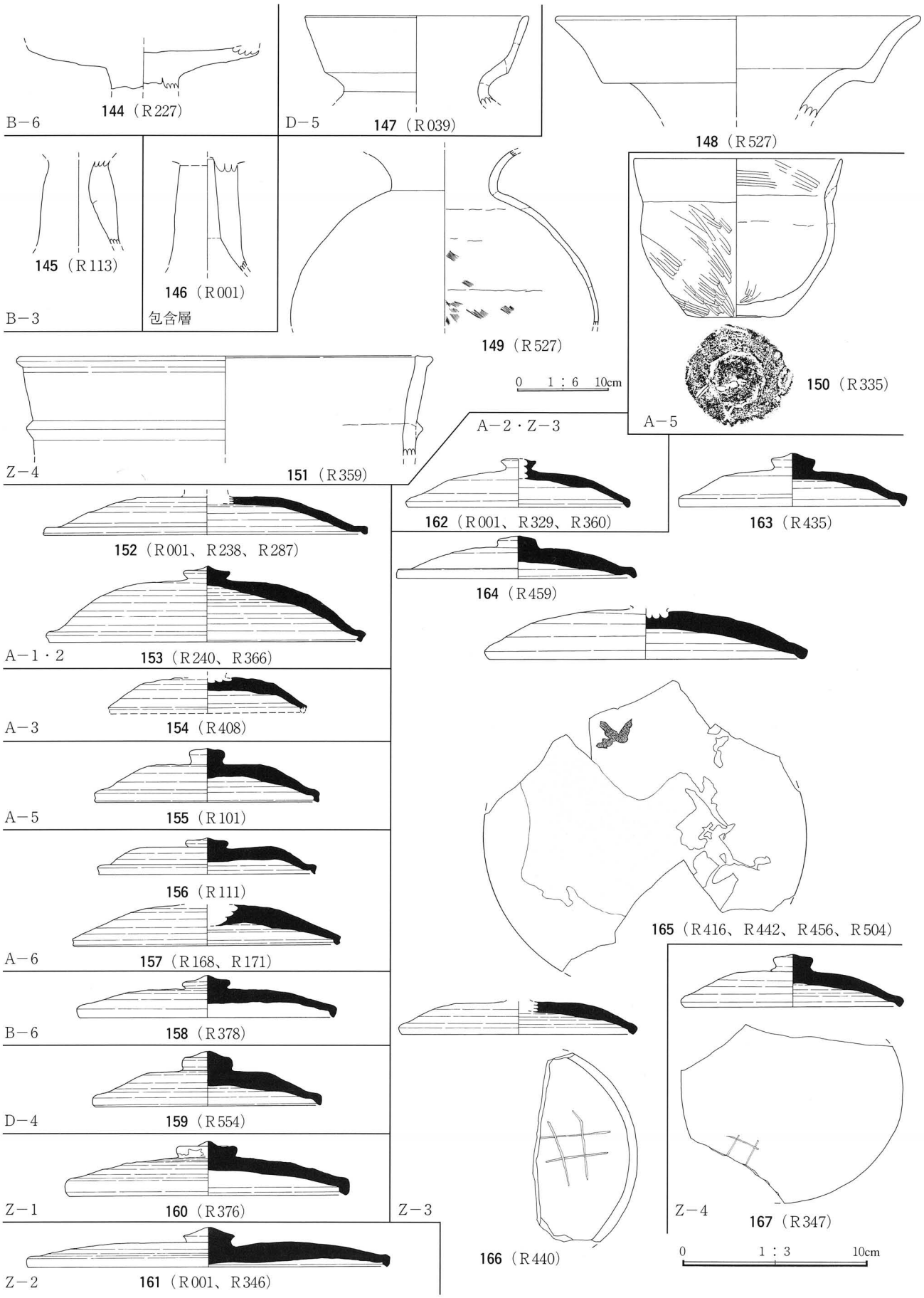


143（R575）ヒョウタン

0　1：3　10cm

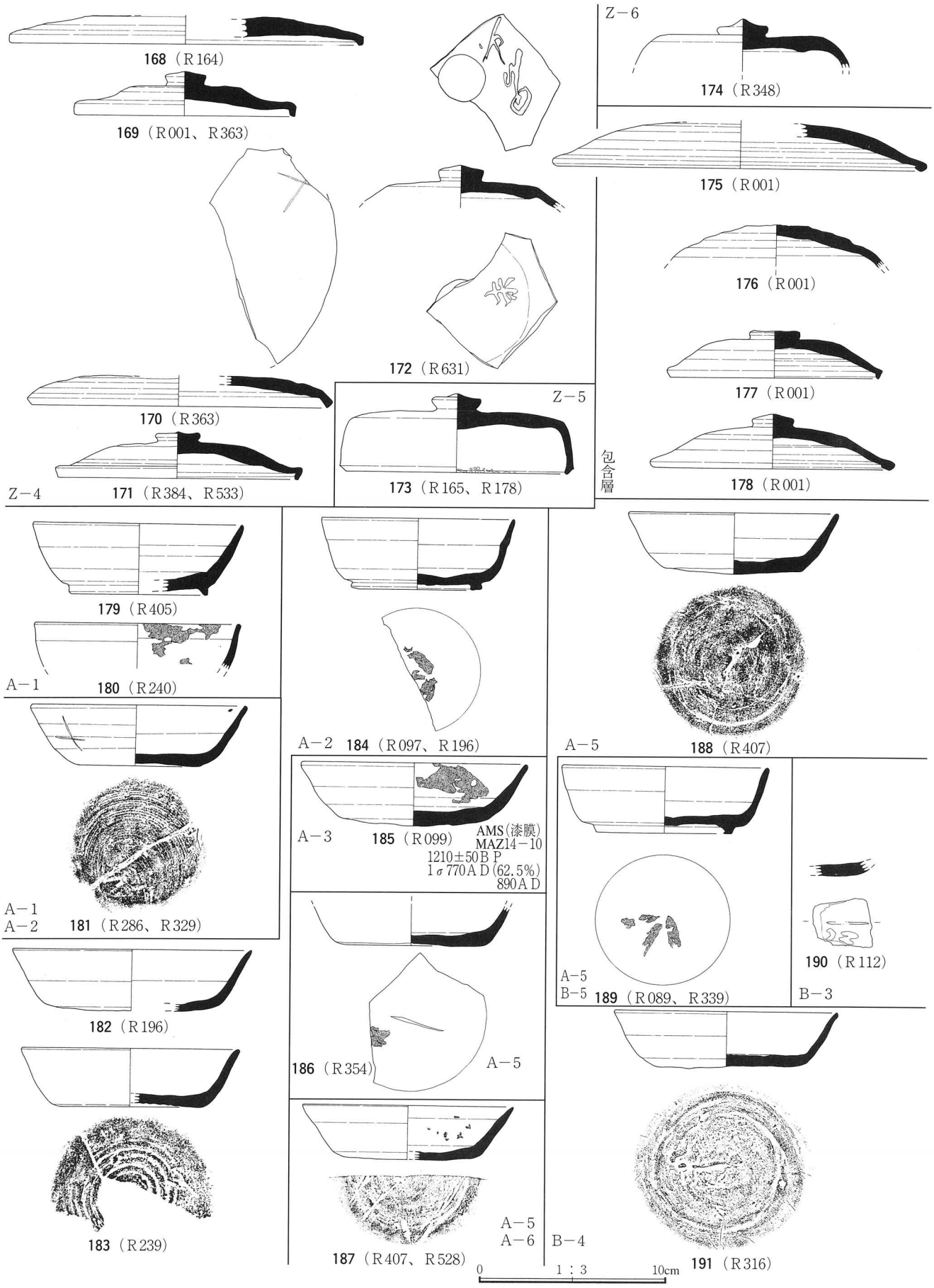
［B地区］溝ＳＤ59出土遺物　木製品

縮尺１／３



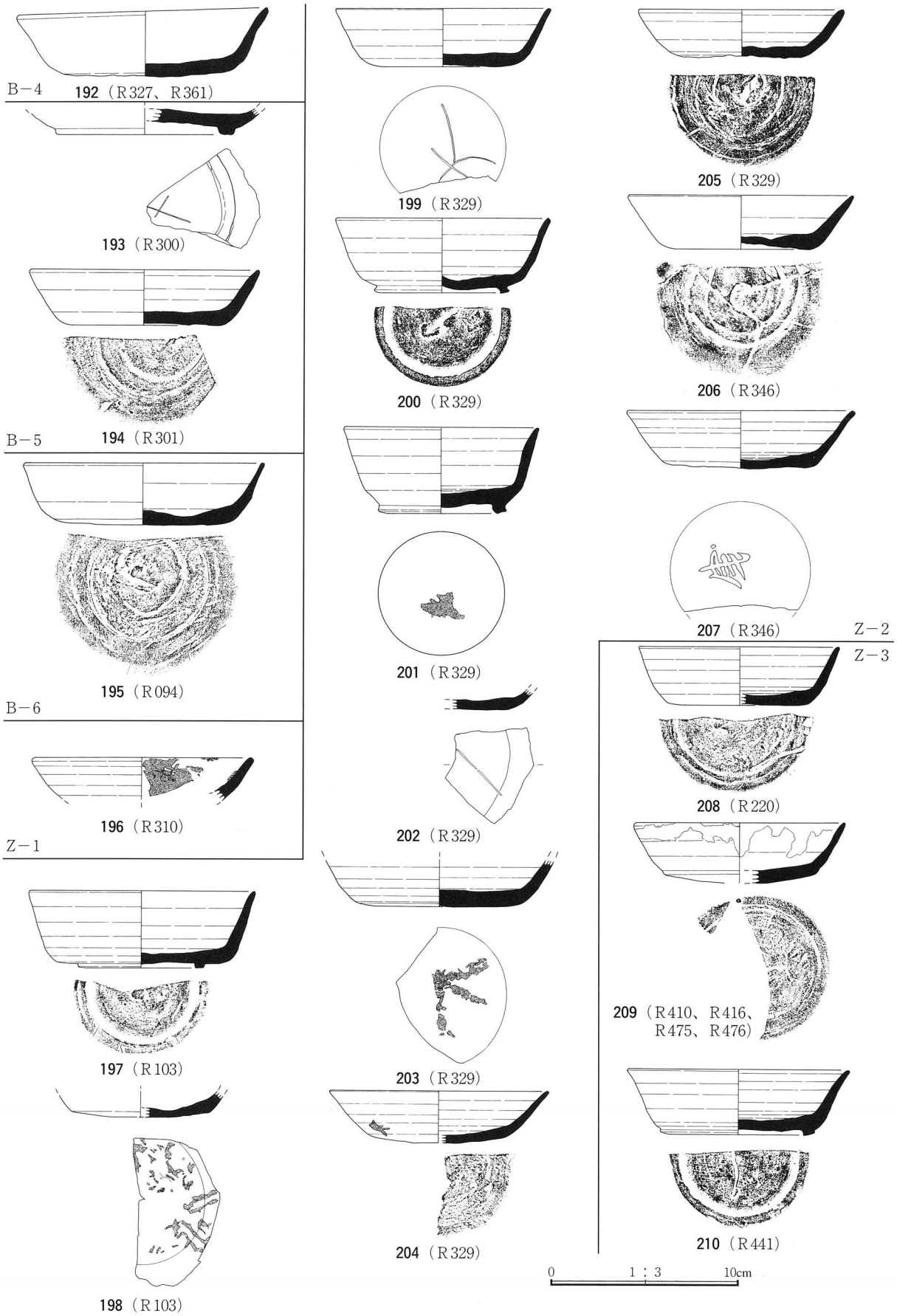
B地区第2面遺構外出土遺物　土器類

縮尺1／3、1／6



B地区第2面遺構外出土遺物　土器類

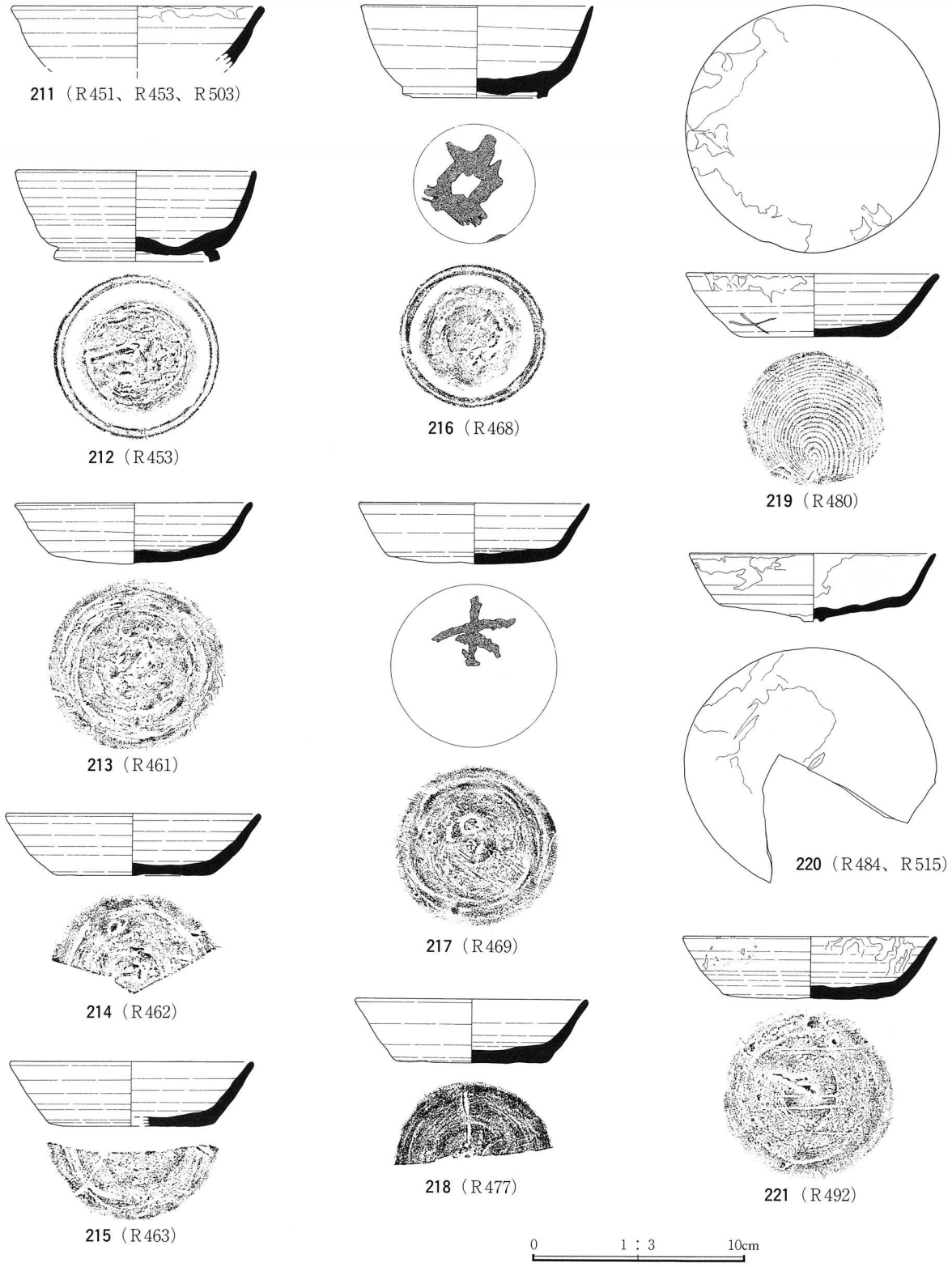
縮尺1／3



B地区第2面遺構外出土遺物　土器類

縮尺1／3

Z－3



B地区第2面遺構外出土遺物　土器類

縮尺1／3

Z－3

222（R506）

223（R509、R522）

224（R513）
AMS（漆膜）MAZ14－2
1230±50BP
1σ760AD（54.0%）890AD

225（R516、R517）

226（R542）

Z－4

227（R396）

228（R649）

229（R001）

230（R001）

231（R001）

232（R001）

233（R001）

包含層

234（R124）

235（R394）

236（R619）

237（R347、R410、R627、R632）　Z－3
AMS（漆膜）
MAZ14－5
1240±50BP
1σ690AD（68.2%）870AD
MAZ14－16
1280±50BP
1σ670AD（68.2%）780AD
MAZ14－17
1260±50BP
1σ680AD（64.7%）810AD
※整理作業時に同一個体と判明した。

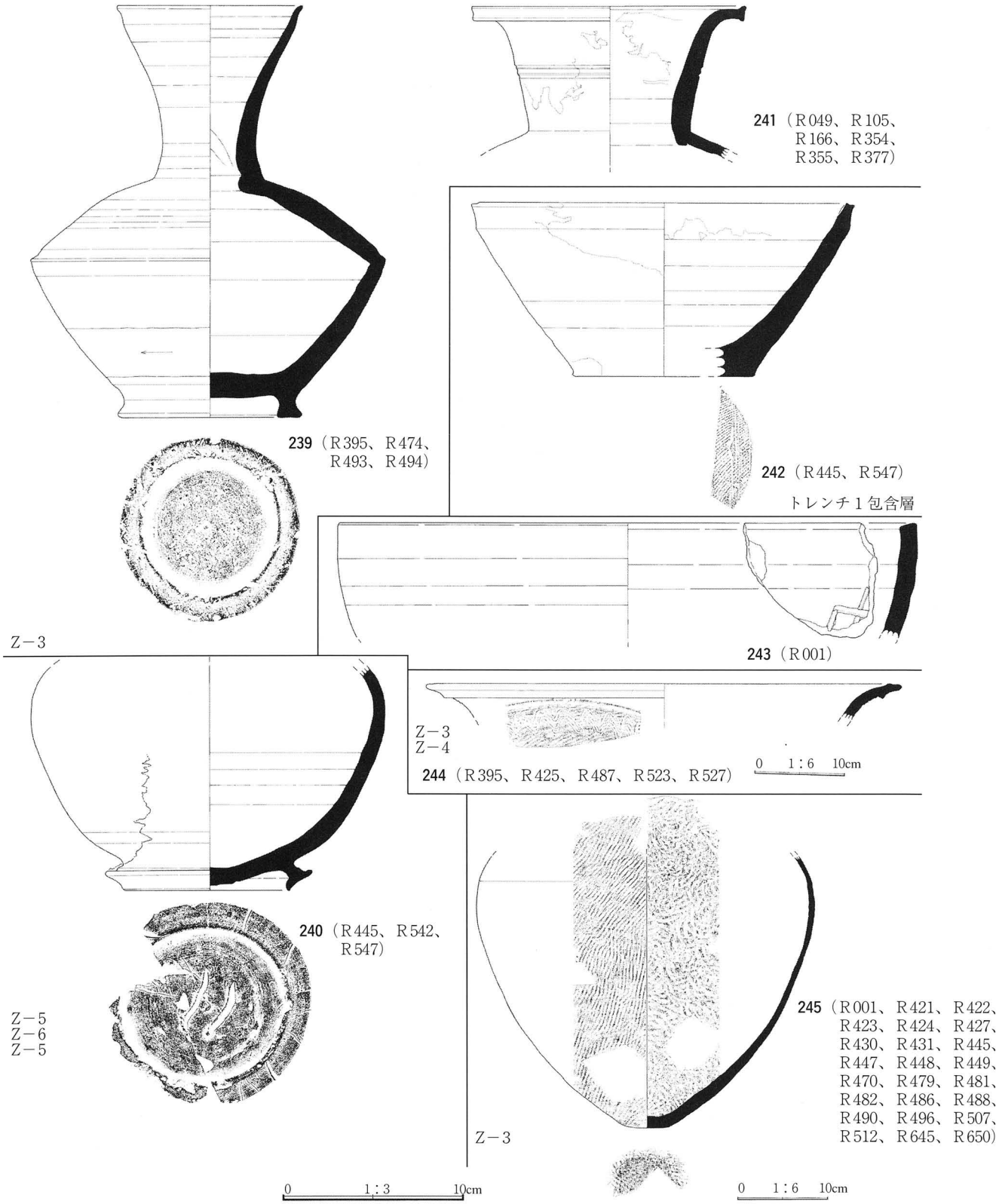
238（R443、R471、R473）　Z－3　Z－4

0　1：3　10cm

B地区第2面遺構外出土遺物　土器類

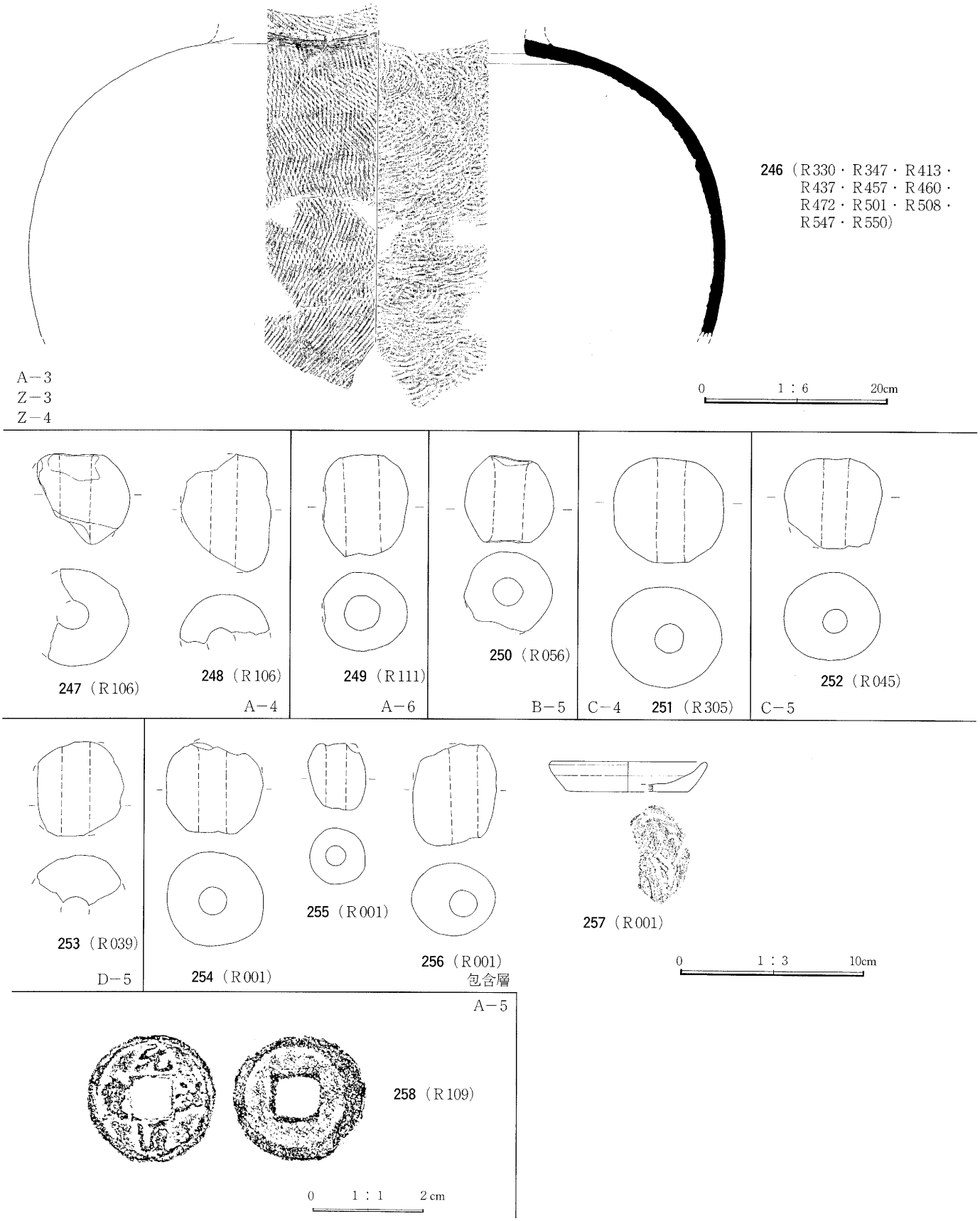
縮尺1／3

図面五七　遺物実測図



B区第2面遺構外出土遺物　土器類

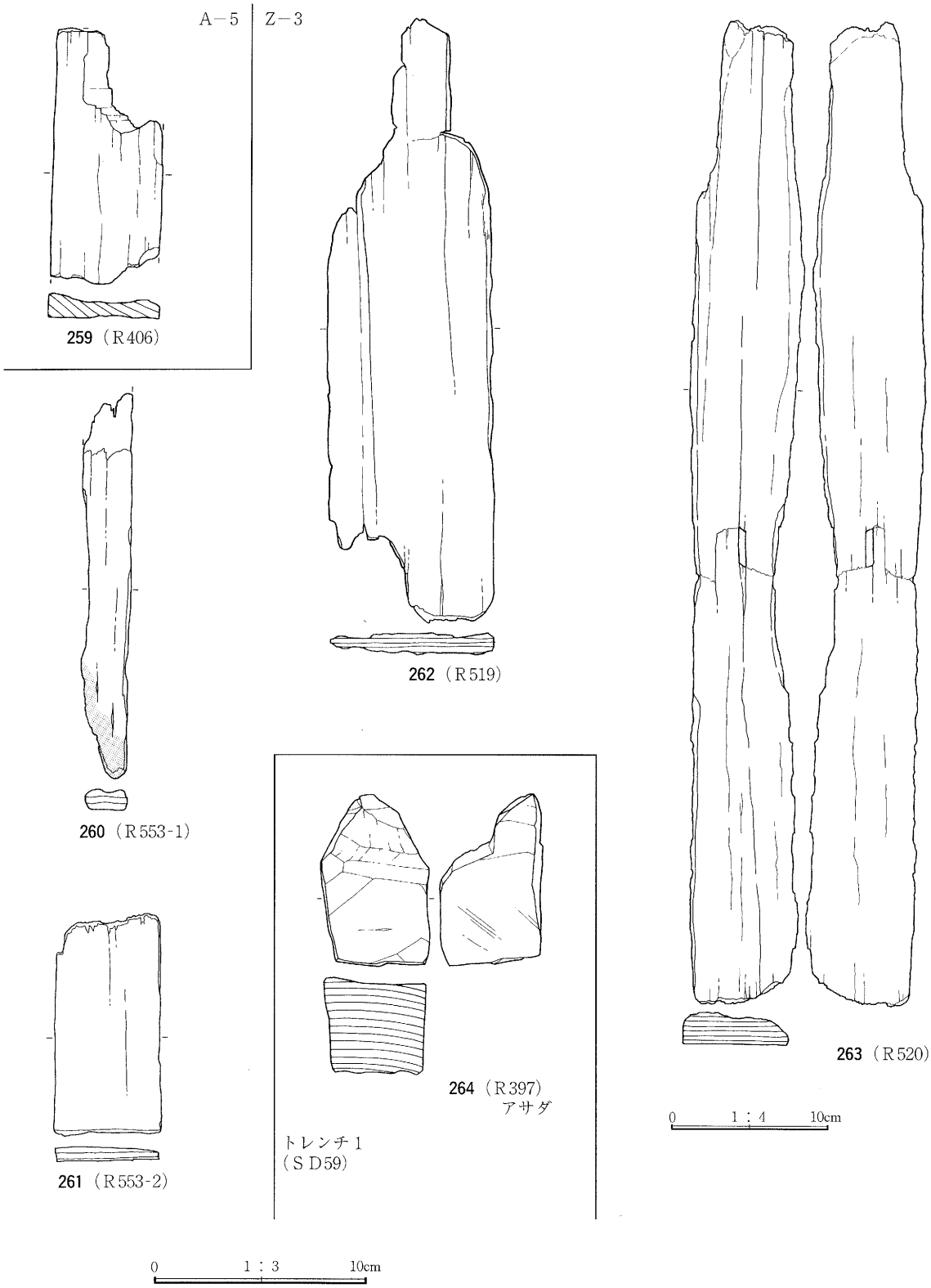
縮尺1／3、1／6



B地区第2面遺構外出土遺物　土器類・土製品・古銭

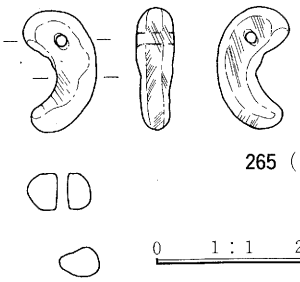
縮尺1／1、1／2、1／3

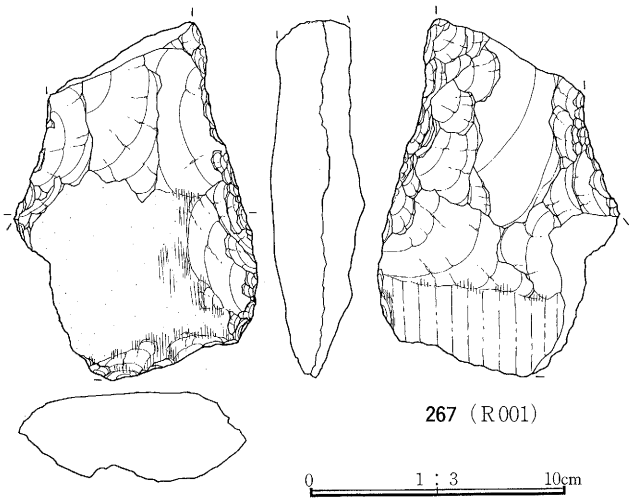
図面五九　遺物実測図

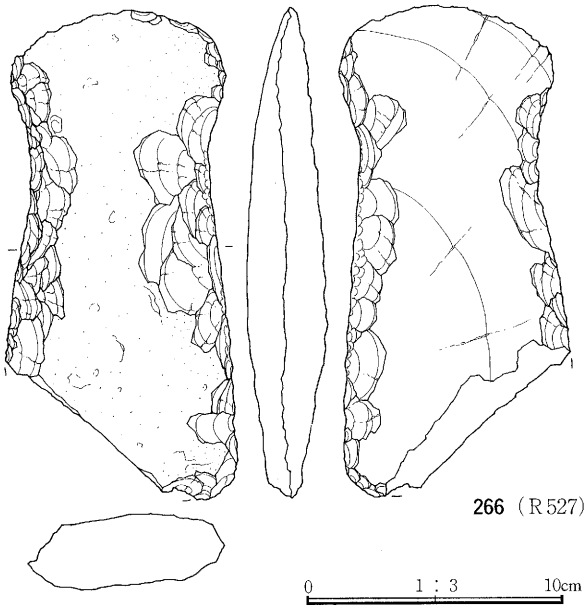


B地区第2面遺構外出土遺物　木製品

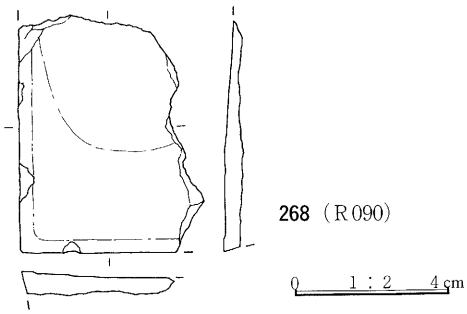
縮尺1／3、1／4





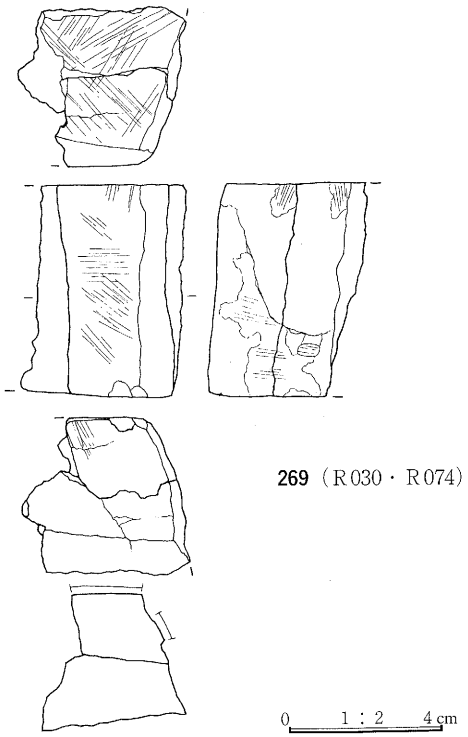


Z－4



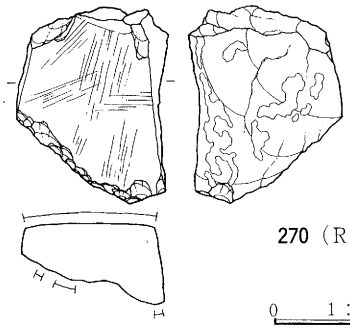
B－3

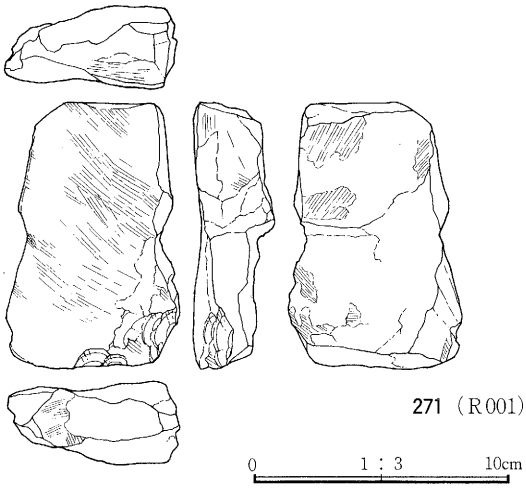
B－6



包含層

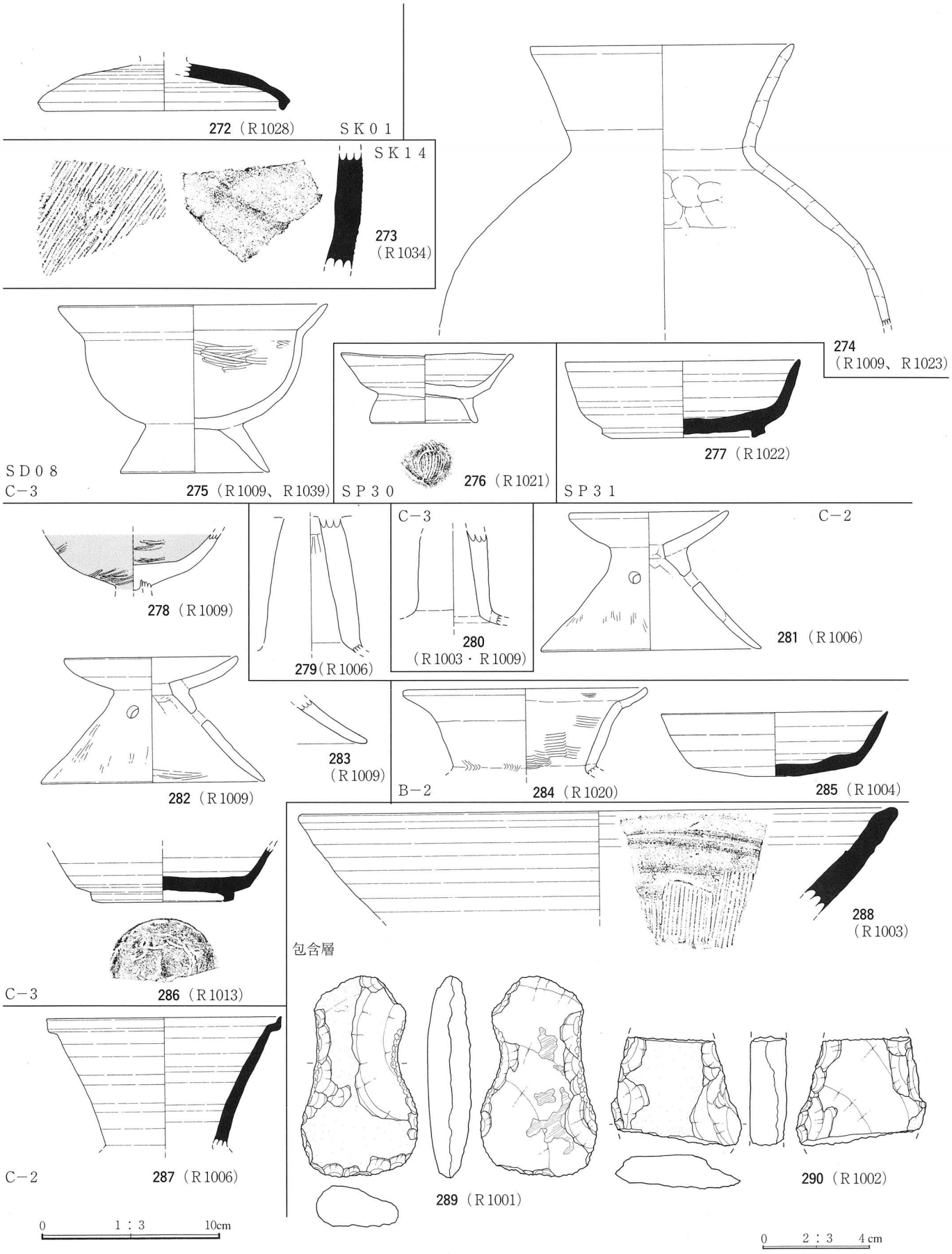
Z－2





B地区第2面遺構外出土遺物　石器類・石製品

縮尺1／1、1／2、1／3

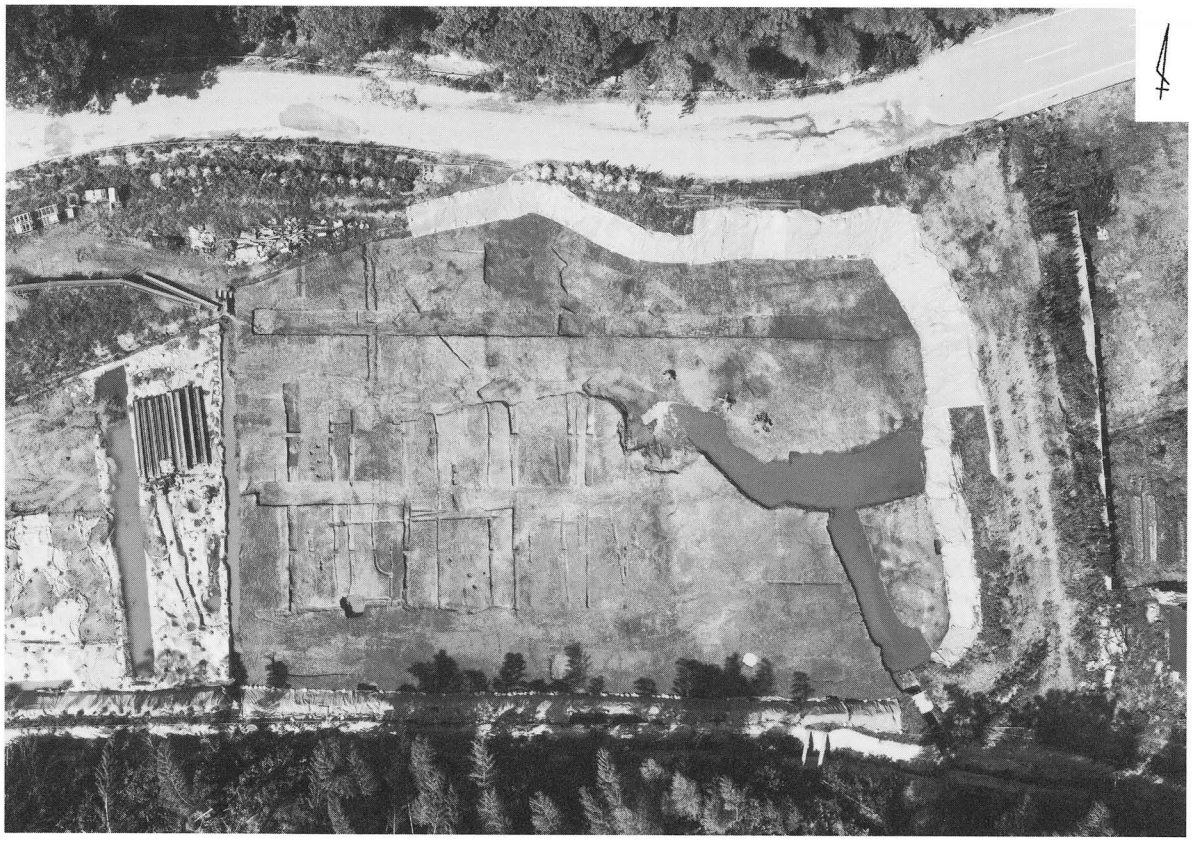


C地区出土遺物

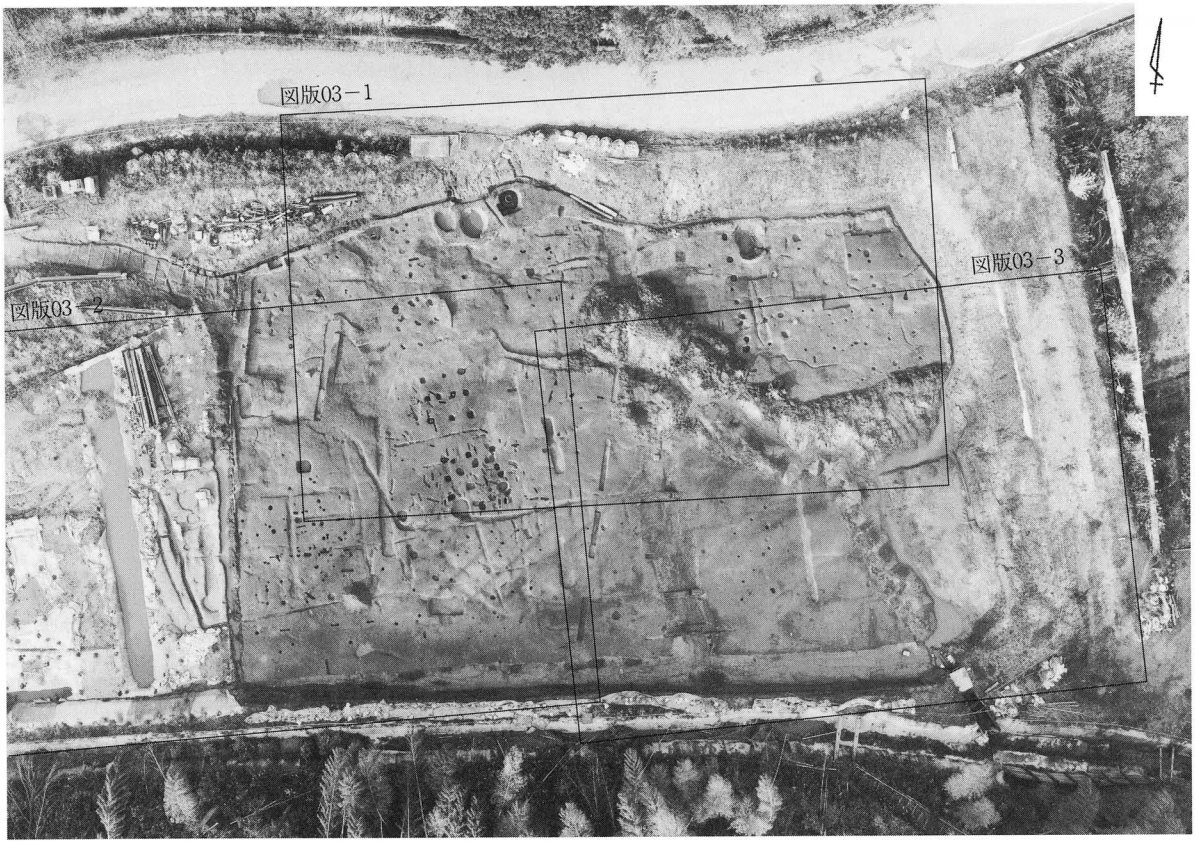
縮尺1／3、2／3

図　　版

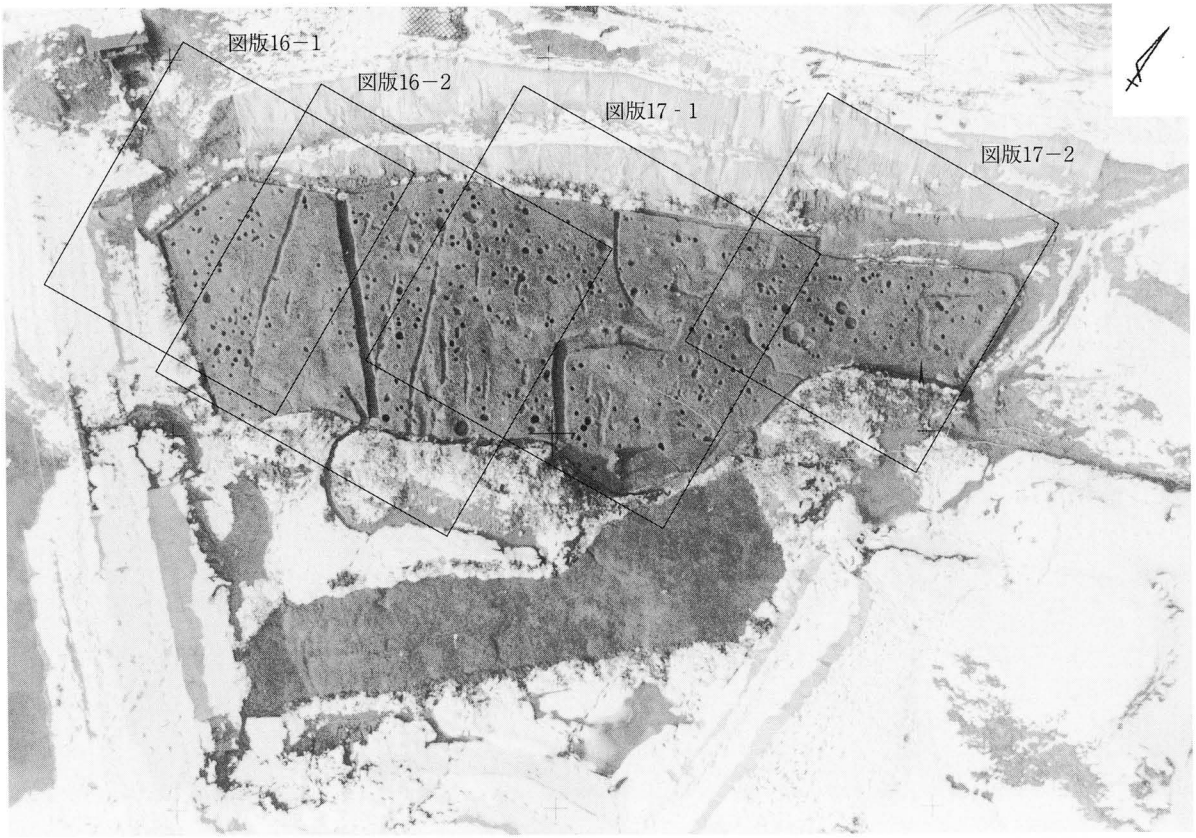
1．遺跡遠景（南西から古代越中国府方向を臨む）



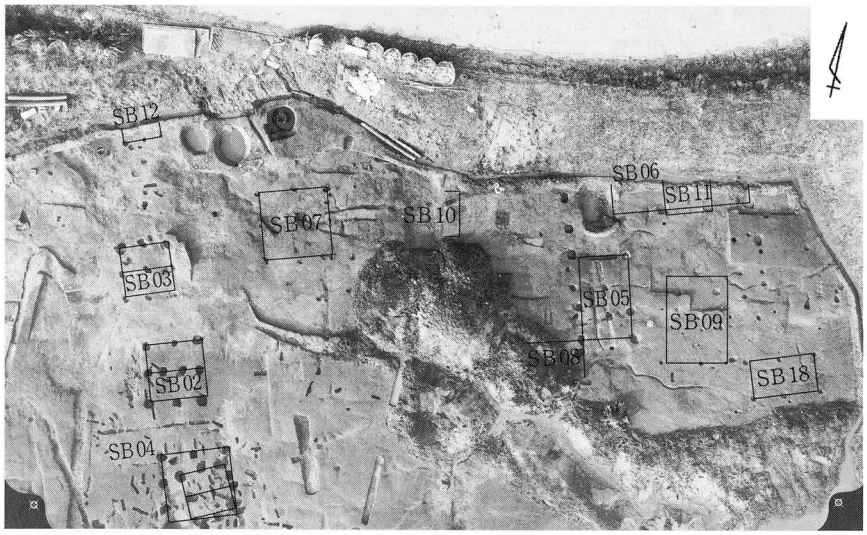
2．Ｂ地区第１面全景



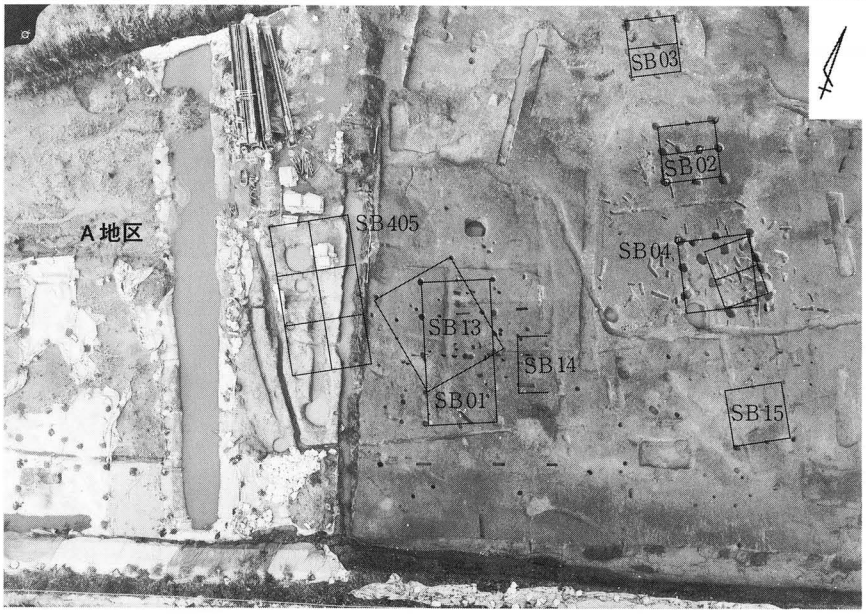
1．B地区第2面全景



2．C地区第1面全景



1．B地区第2面北東部地域



2．B地区第2面西部地域

3．B地区第2面南東部地域

図版〇四　遺構写真

1．仮設事務所等設置状況

2．安全大会

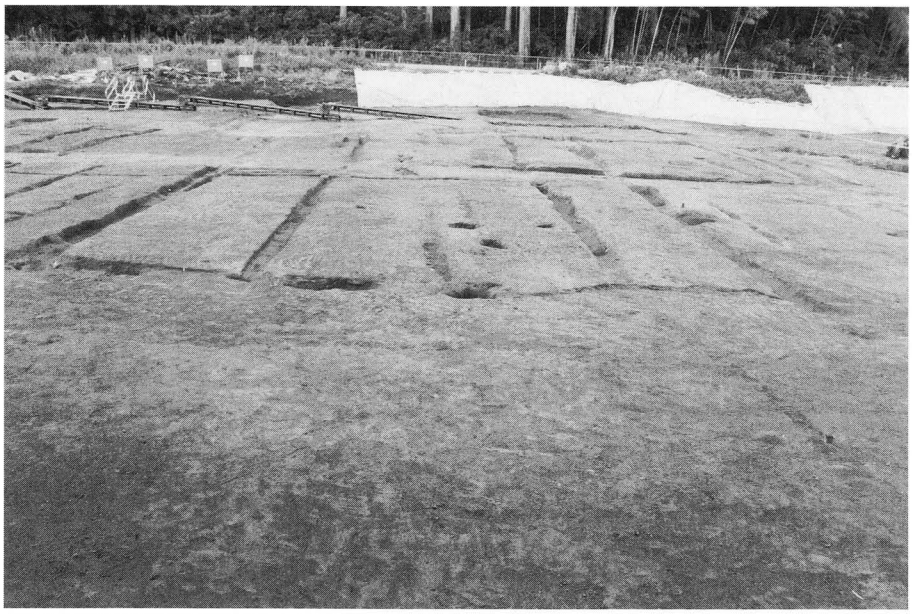
3．Ｂ地区調査前全景（東から）

1．Ｂ地区第１面表土除去作業風景

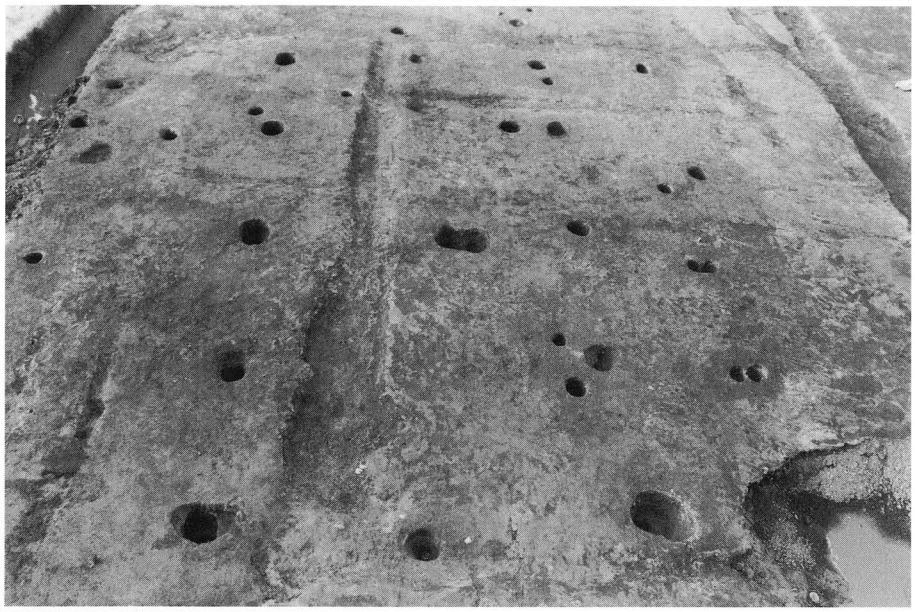
2．Ｂ地区第１面遺構検出状況

3．Ｂ地区第１面遺構覆土除去作業風景

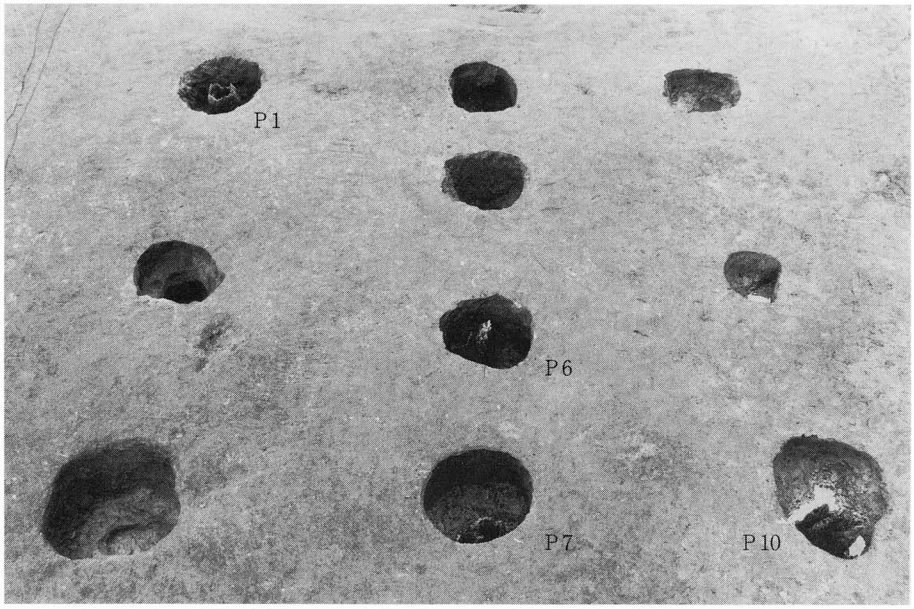
図版〇六　遺構写真



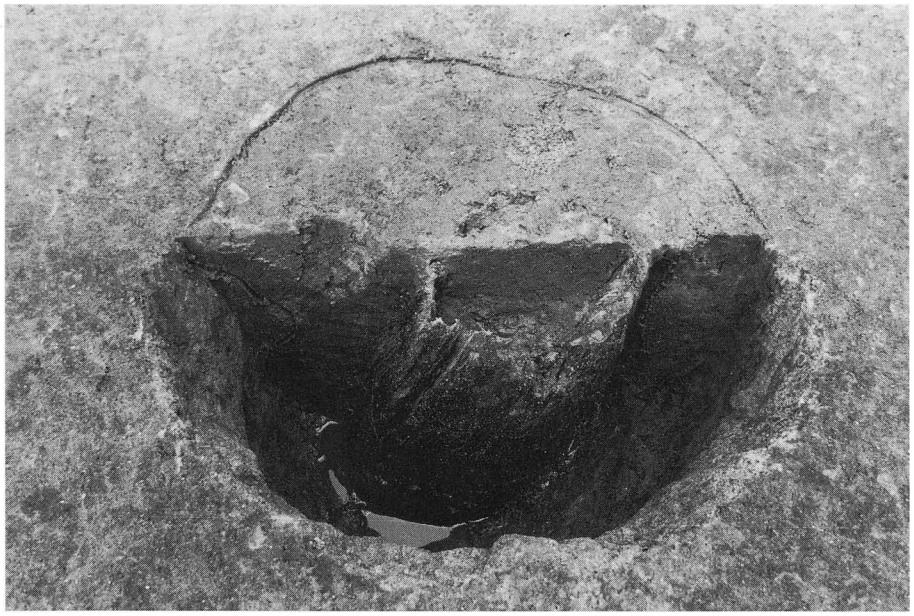
1．B地区第1面遺構覆土除去完了状況（南から）



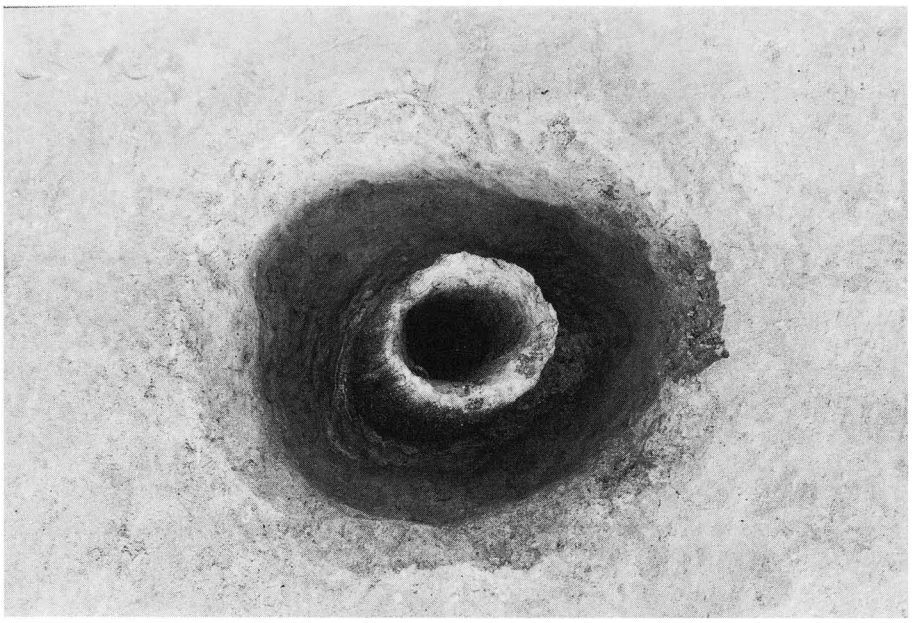
2．B地区第2面掘立柱建物SB01(案)完掘全景（南から）



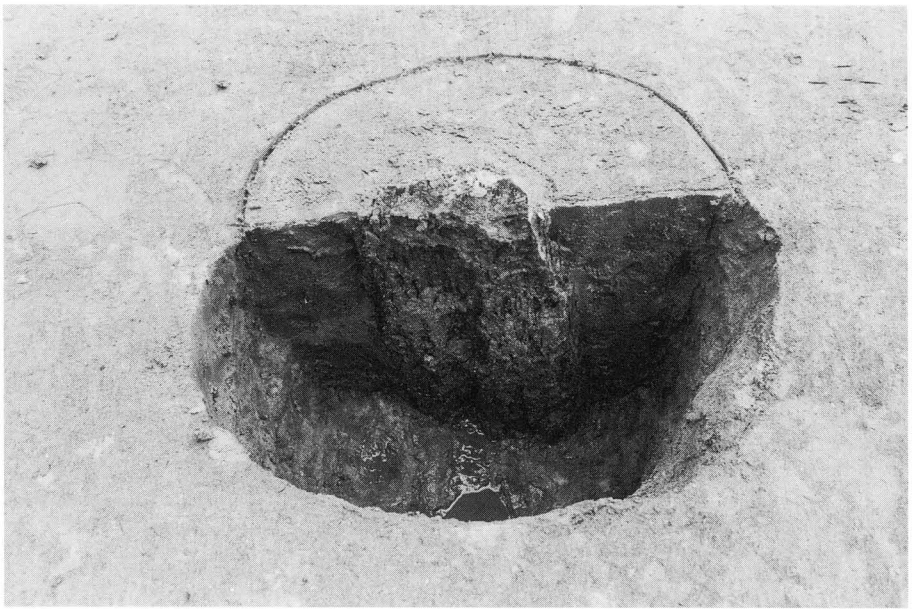
3．B地区第2面掘立柱建物SB02(案)完掘全景（東から）



1．Ｂ地区第２面掘立柱建物ＳＢ02(案)－Ｐ１半截状況（南から）

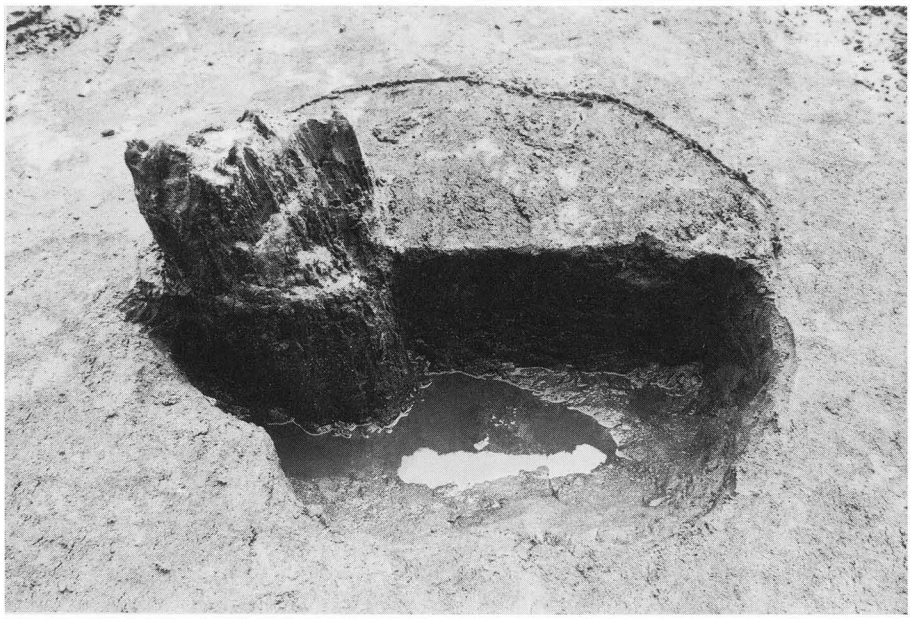


2．Ｂ地区第２面掘立柱建物ＳＢ02(案)－Ｐ１完掘

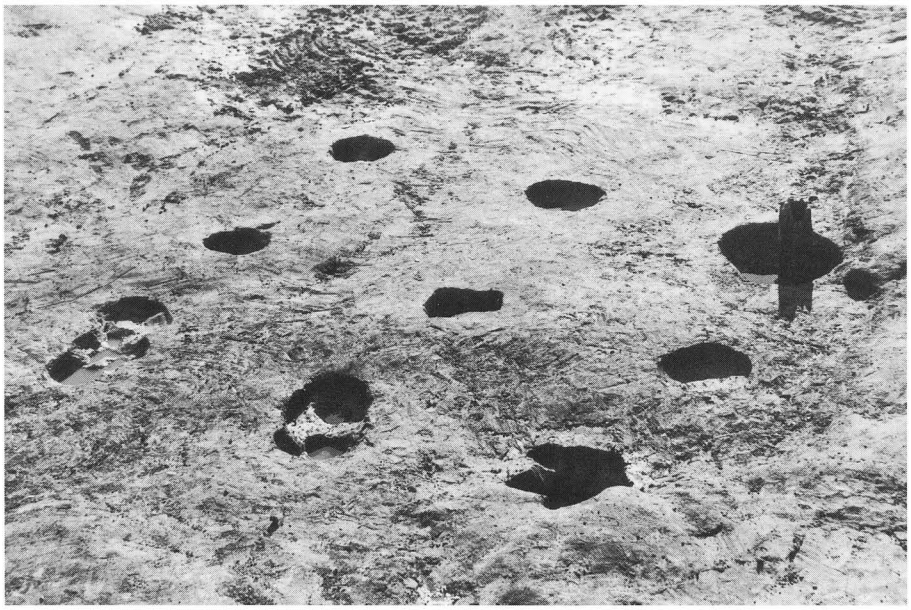


3．Ｂ地区第２面掘立柱建物ＳＢ02(案)－Ｐ６半截状況（南から）

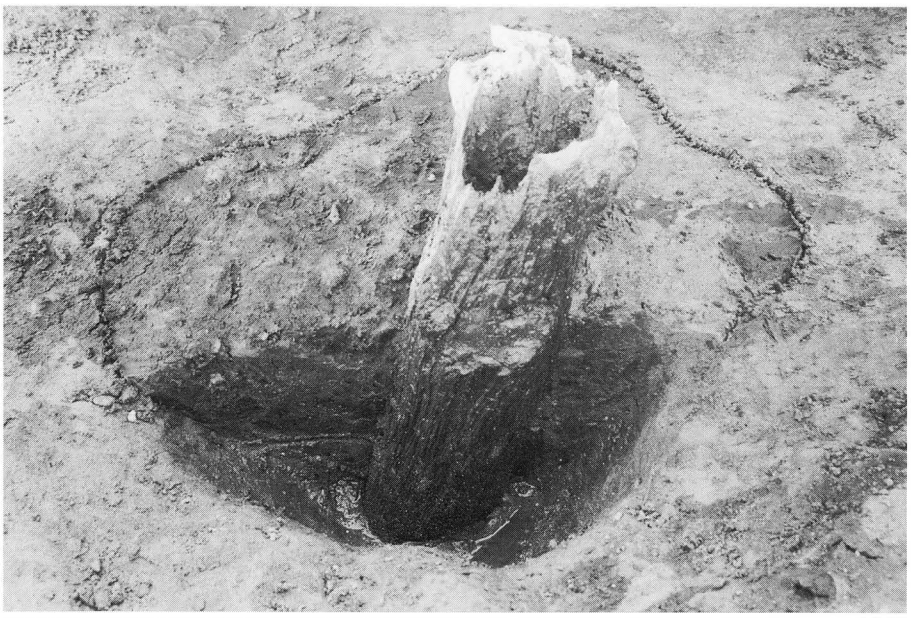
1．Ｂ地区第２面掘立柱建物ＳＢ02(案)－Ｐ７完掘（北から）



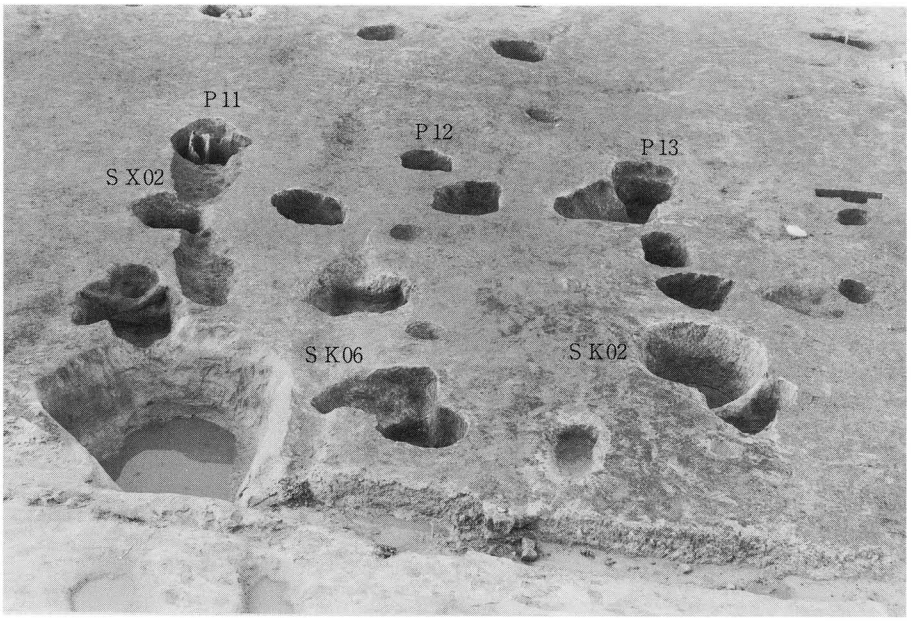
2．Ｂ地区第２面掘立柱建物ＳＢ02(案)－Ｐ10半截状況（北から）



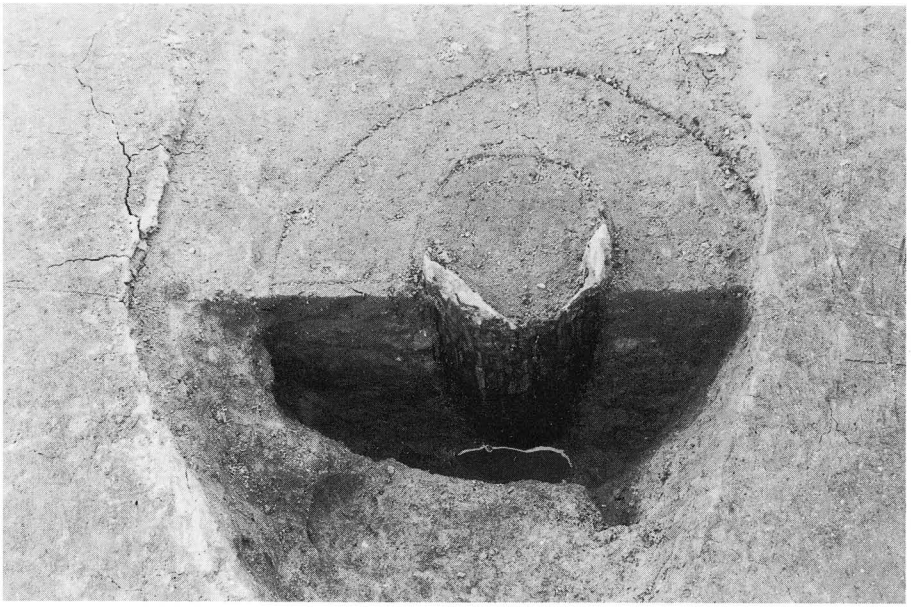
3．Ｂ地区第２面掘立柱建物ＳＢ03(案)完掘全景（東から）



1．B地区第2面掘立柱建物SB03(案)－P1半截状況（東から）

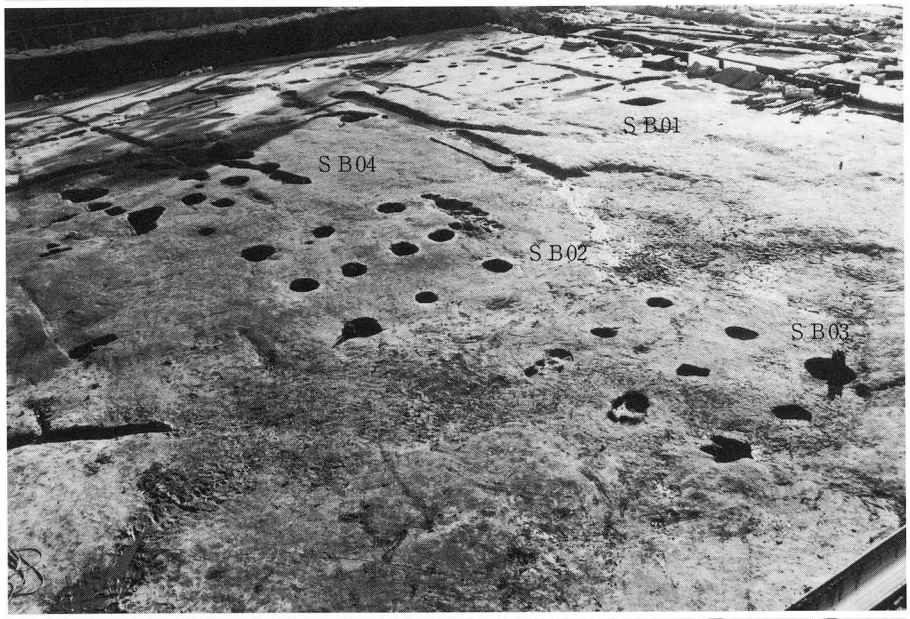


2．B地区第2面掘立柱建物SB04(案)完掘全景（南から）



3．B地区第2面掘立柱建物SB04(案)－P11半截状況（北から）

1．B地区第2面掘立柱建物SB04(案)－P11完掘（東から）



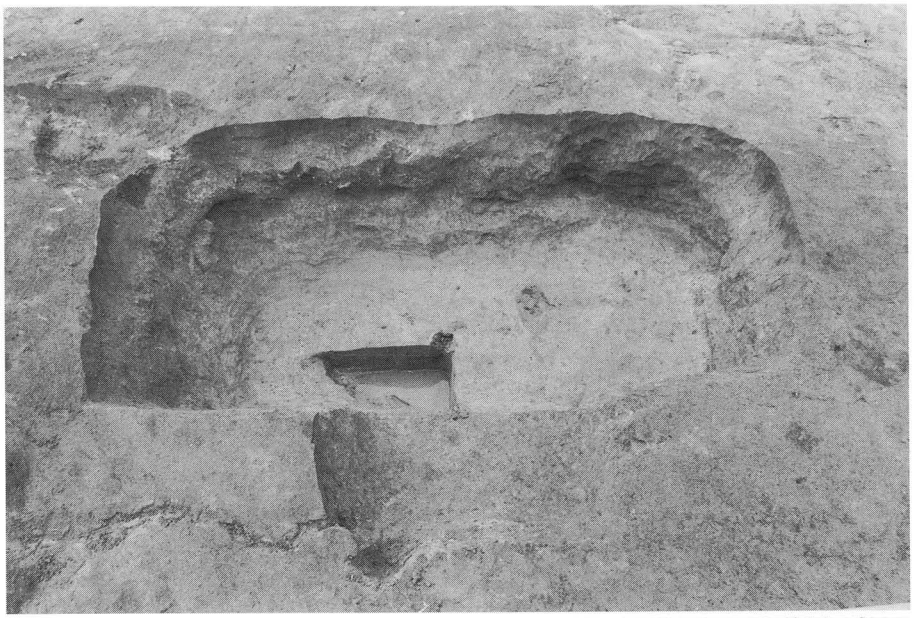
2．B地区第2面掘立柱建物SB01(案)・02(案)・03(案)・04(案)完掘（北東から）

3．B地区第2面掘立柱建物SB02(案)・03(案)・04(案)完掘（北から）

1．B地区第2面土坑SK01遺物出土状況（西から）

2．B地区第2面土坑SK03完掘（西から）

3．B地区第2面土坑SK04完掘（西から）



1．B地区第2面土坑SK05完掘（南から）

2．B地区第2面土坑SK08曲物等出土状況(南から)

3．B地区第2面土坑SK08曲物等出土状況近景（南から）

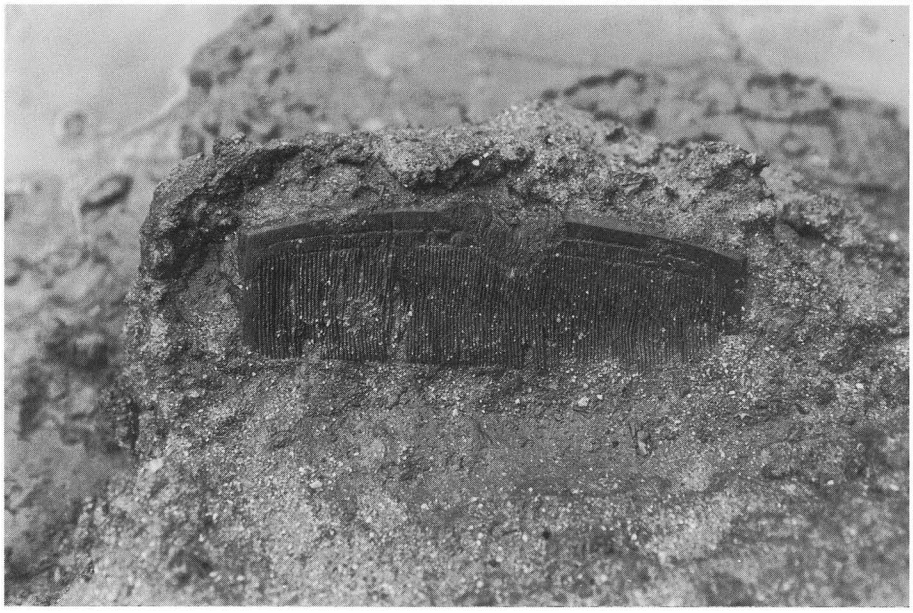
1．B地区第2面掘立柱建物SB10(案)及び溝SD59(北から)

2．B地区第2面溝SD59遺物出土状況①（北から）

3．B地区第2面溝SD59遺物出土状況②（東から）

1．B地区第2面溝SD59遺物出土状況③（北から）

2．B地区第2面溝SD59漆器椀［56（R680）］出土状況近景（西から）

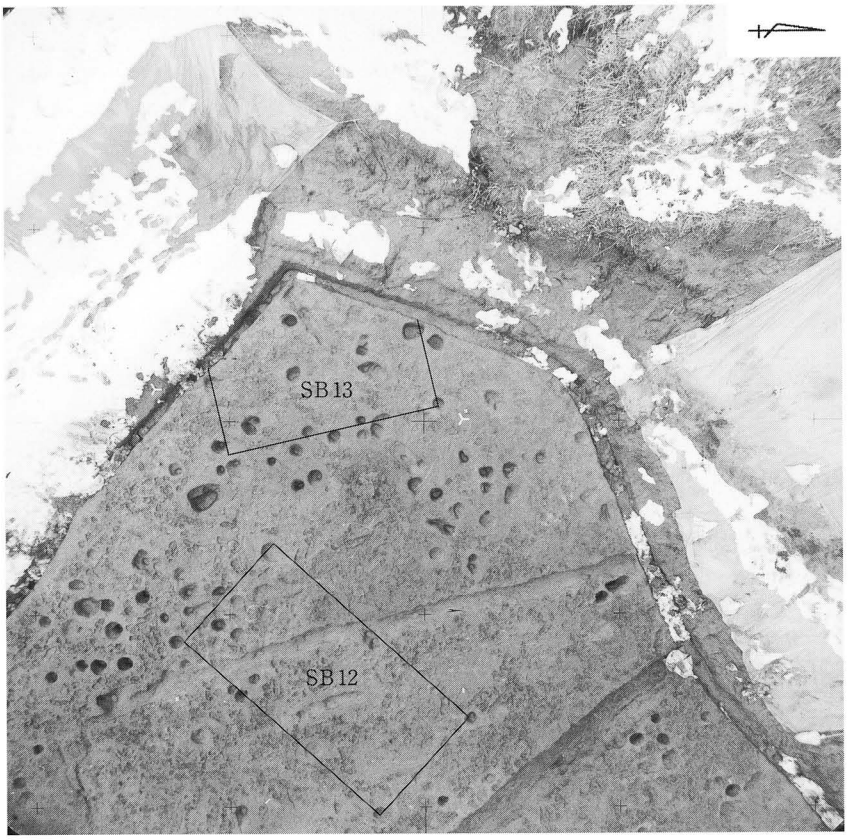


3．B地区第2面溝SD59櫛［58（R613）］出土状況近景（北から）

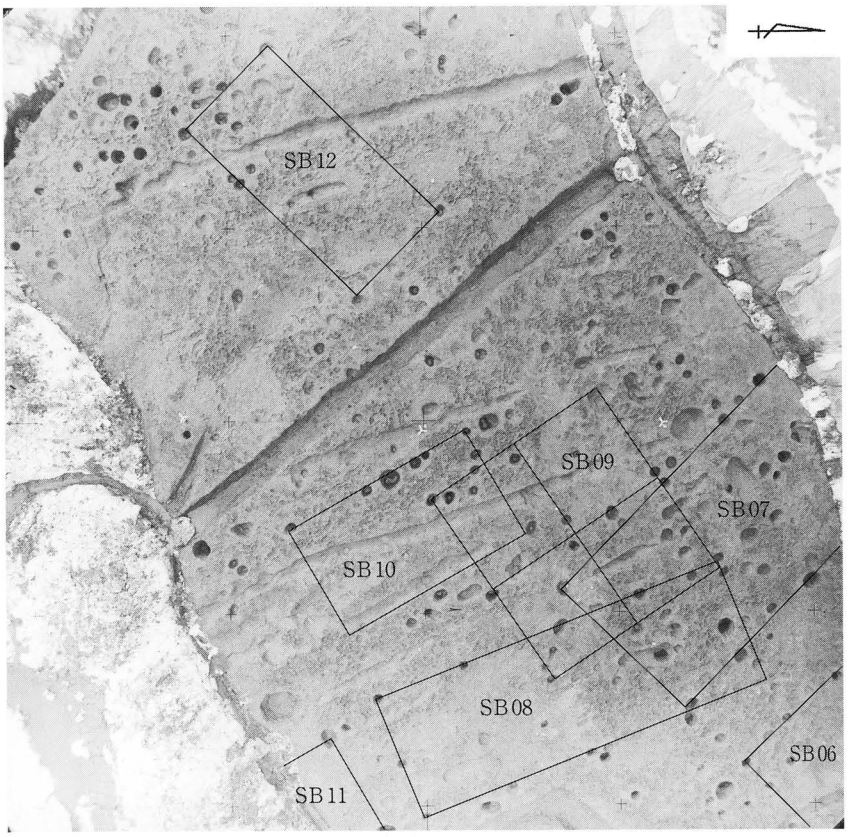
1．B地区第2面溝SD59北側セクション（南から）

2．B地区第2面発掘調査作業状況（西から）

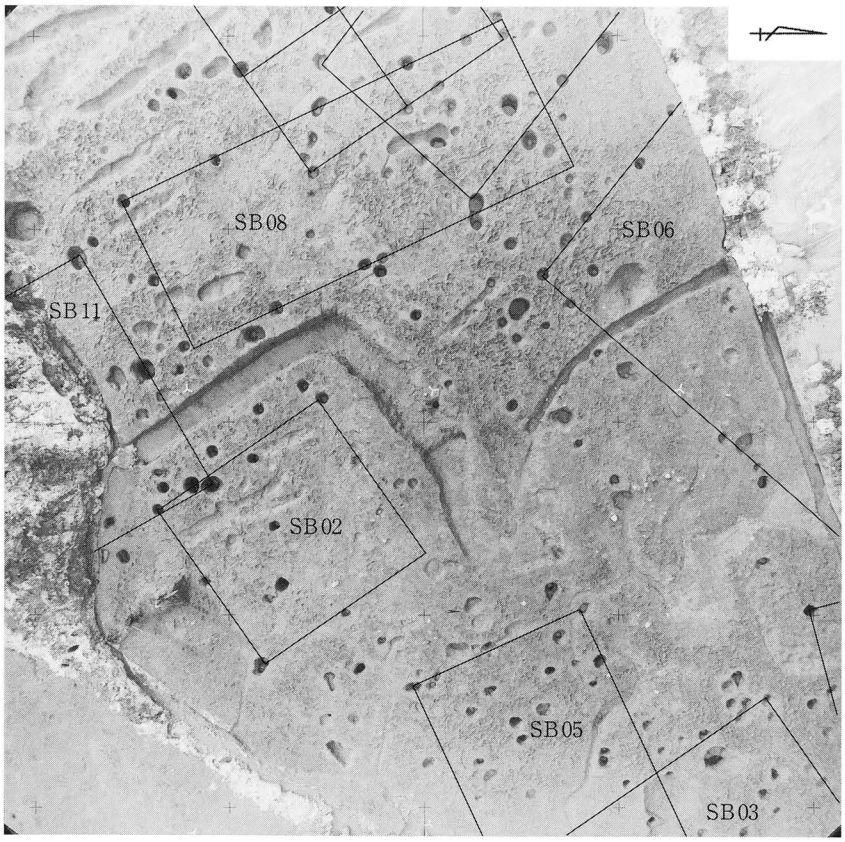
3．B地区第2面実機ヘリ空撮状況（西から）



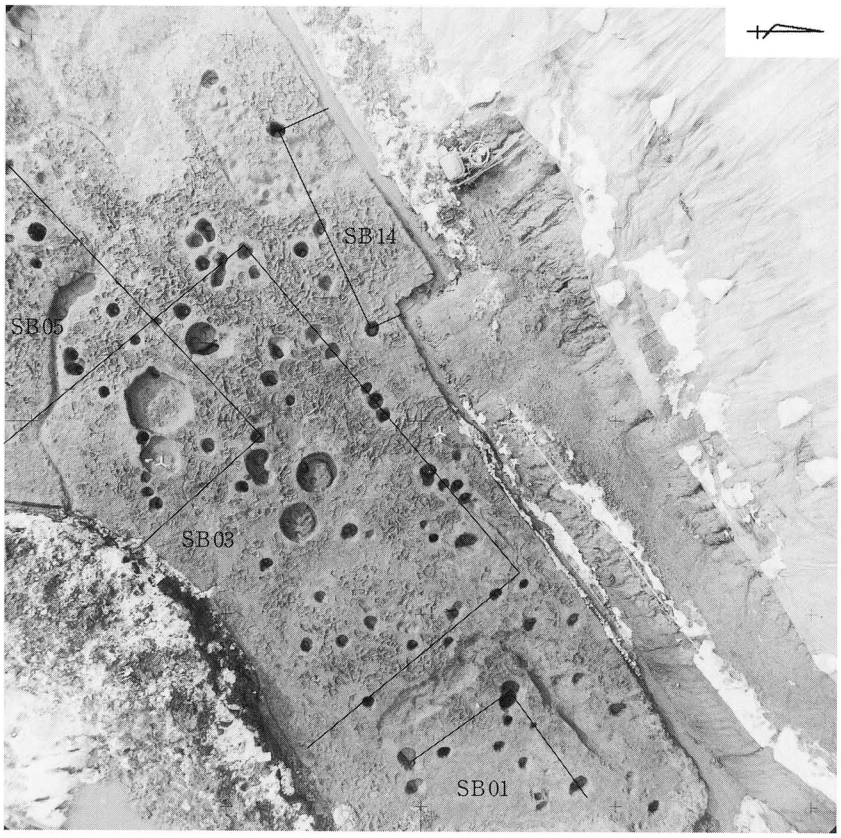
1．C地区北西部地域①



2．C地区北西部地域②



1．C地区北部地域



2．C地区北東部地域

1．C地区調査前全景（東から）

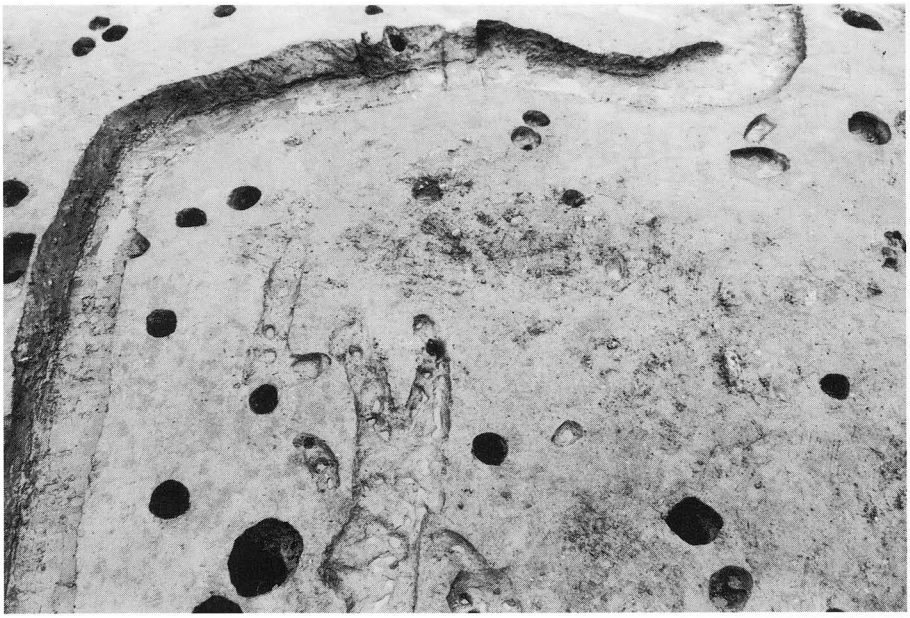
2．C地区重機搬入状況（東から）

3．C地区表土除去作業状況（北から）

1．C地区遺構検出状況（西から）

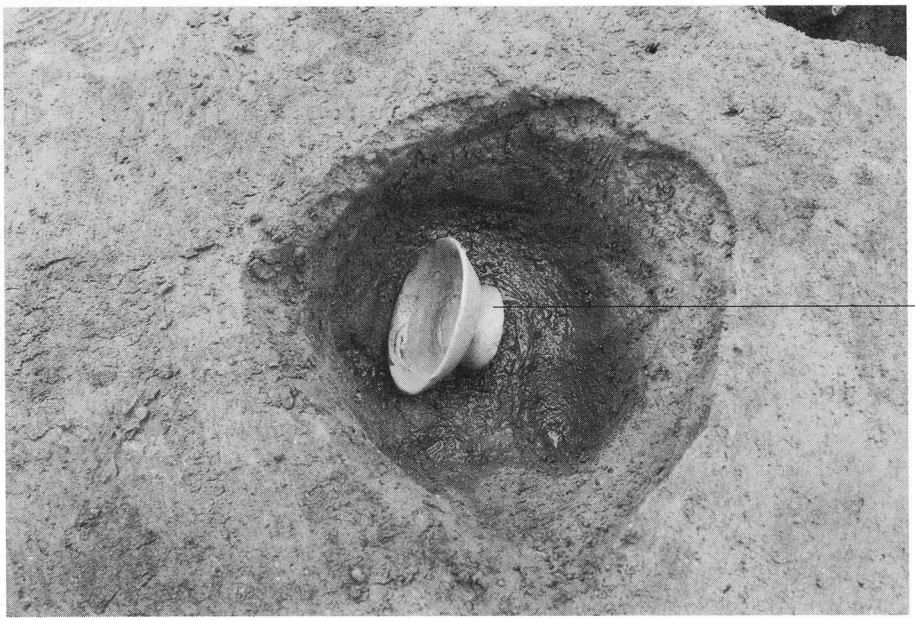
2．C地区北東部地域遺構検出状況（西から）

3．C地区掘立柱建物SB01(案)完掘（南から）



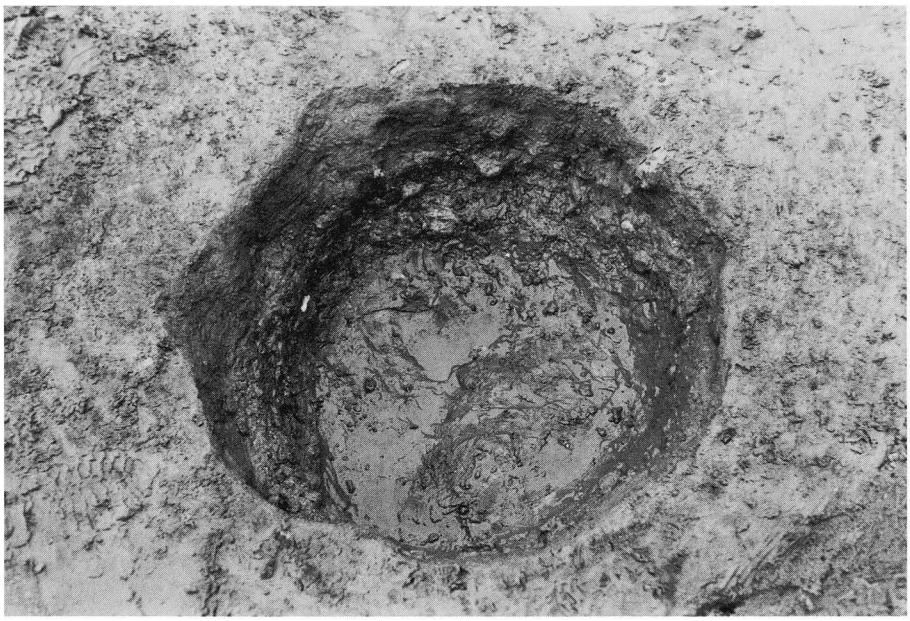
1．C地区掘立柱建物SB02(案)完掘（南から）

2．C地区溝SD01・03・04、掘立柱建物SB10(案)完掘（南東から）



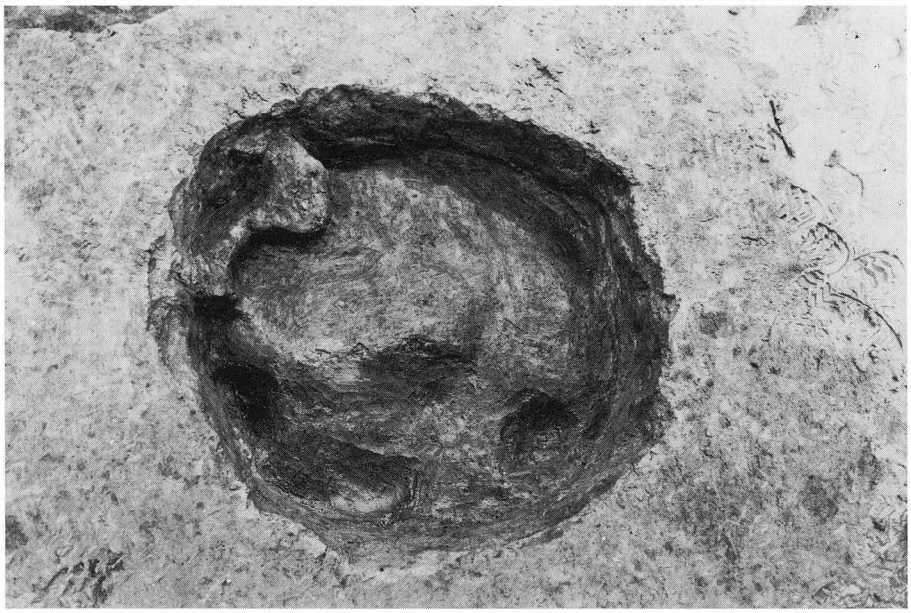
276（R1021）

3．C地区小ピットSP30遺物出土状況（北から）

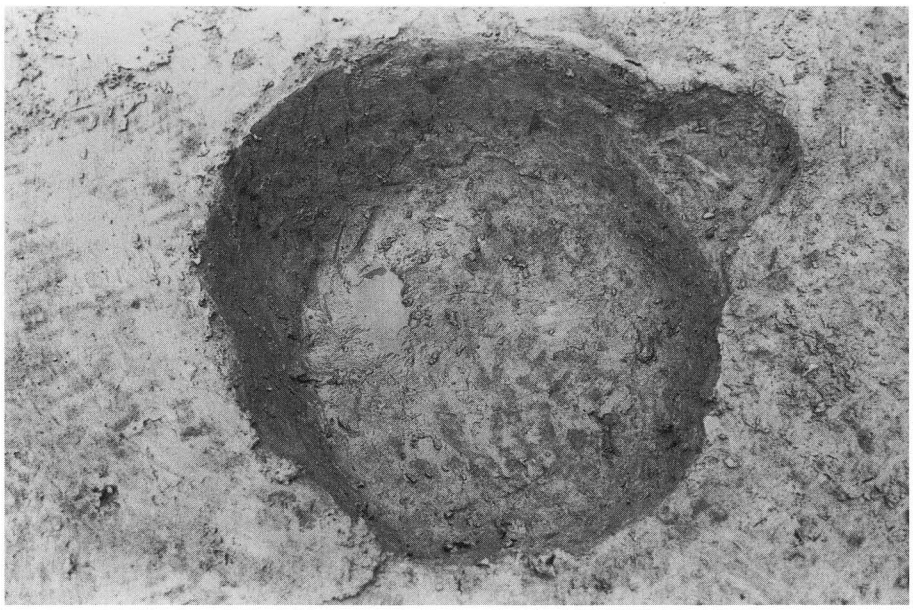


1．C地区土坑SK01完掘
（南から）

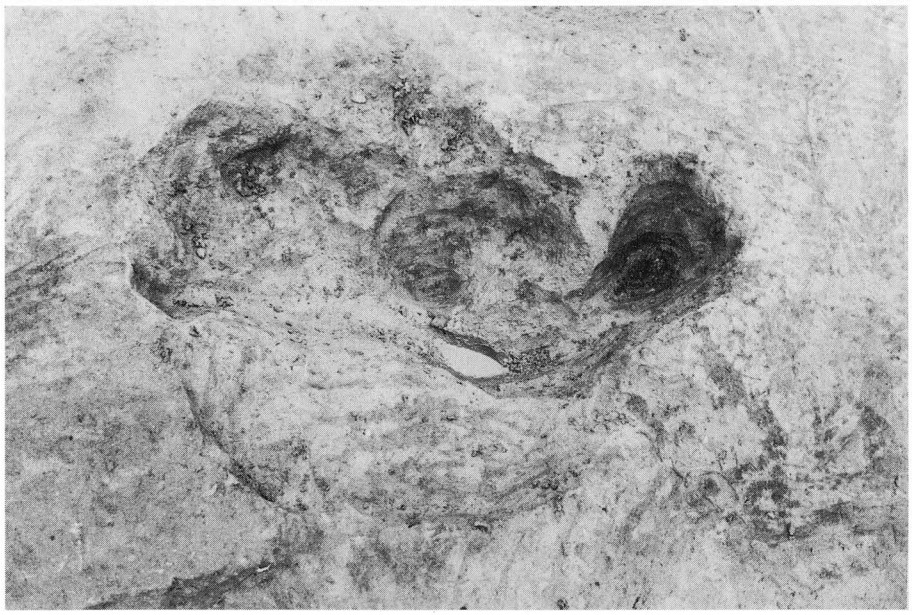
2．C地区土坑SK02・03
完掘（東から）



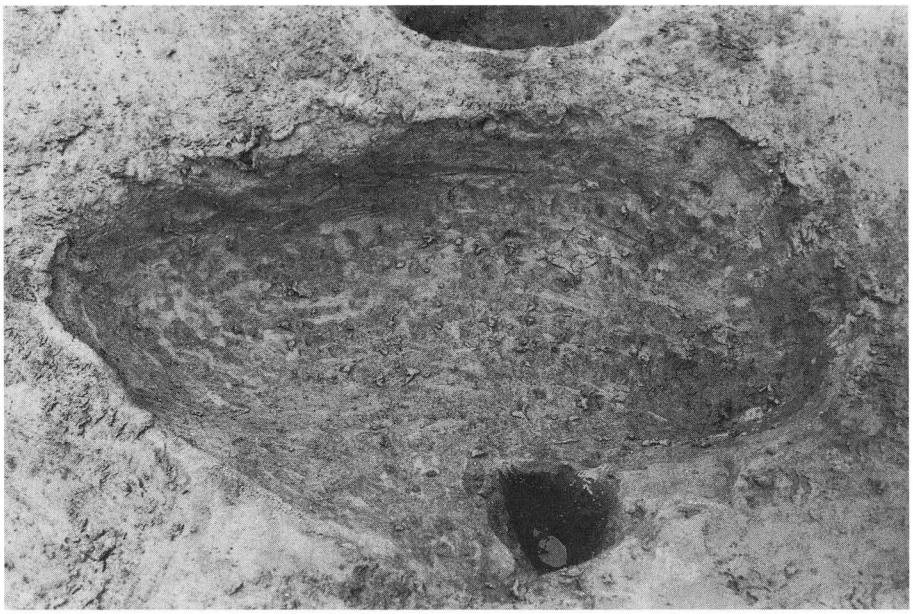
3．C地区土坑SK04完掘
（南から）



1．C地区土坑ＳＫ05完掘
（南から）

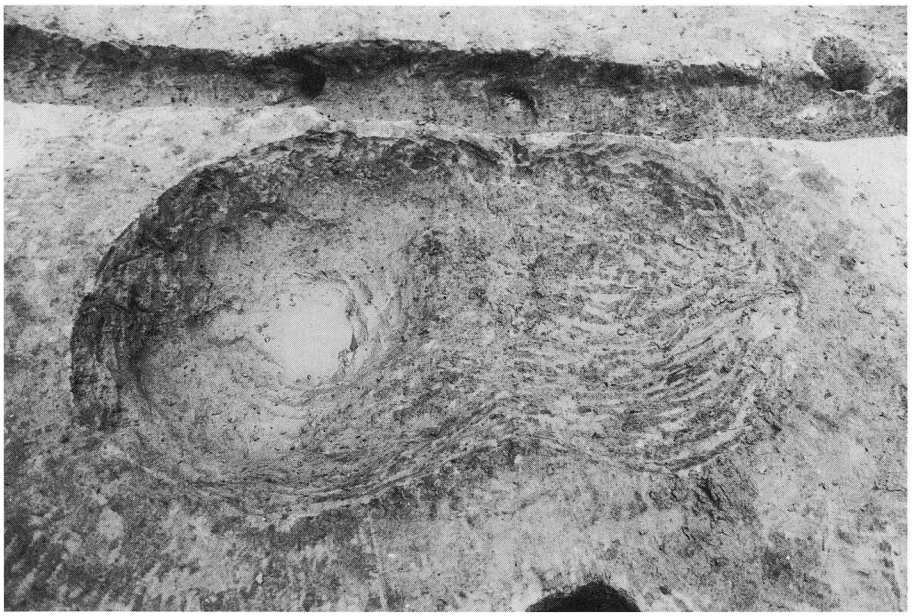


2．C地区土坑ＳＫ06完掘
（南東から）



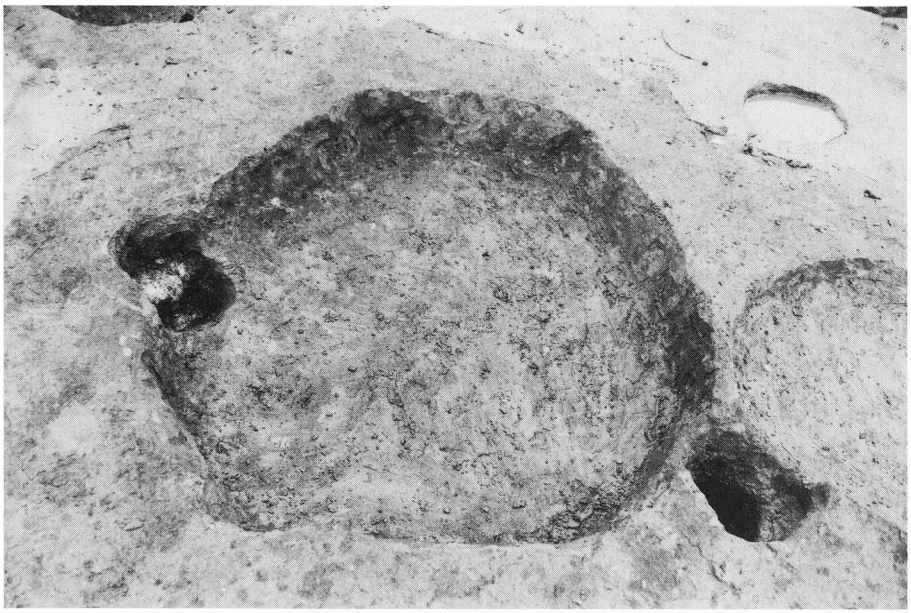
3．C地区土坑ＳＫ07完掘
（南東から）

図版二三　遺構写真



1．C地区土坑SK08・09
完掘（南西から）

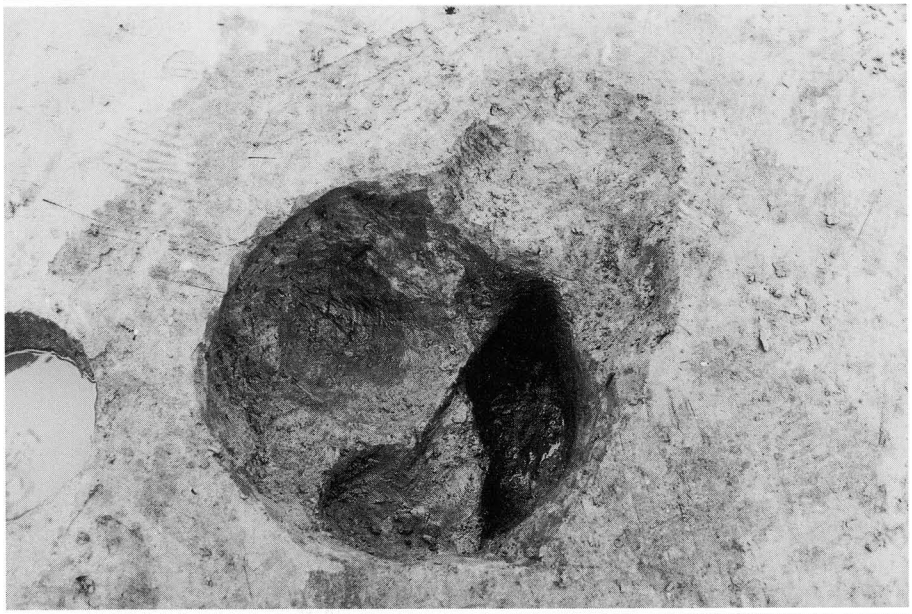
2．C地区土坑SK10完掘
（北西から）



3．C地区土坑SK11完掘
（南から）

図版二四　遺構写真

1．C地区土坑ＳＫ12完掘
（南東から）



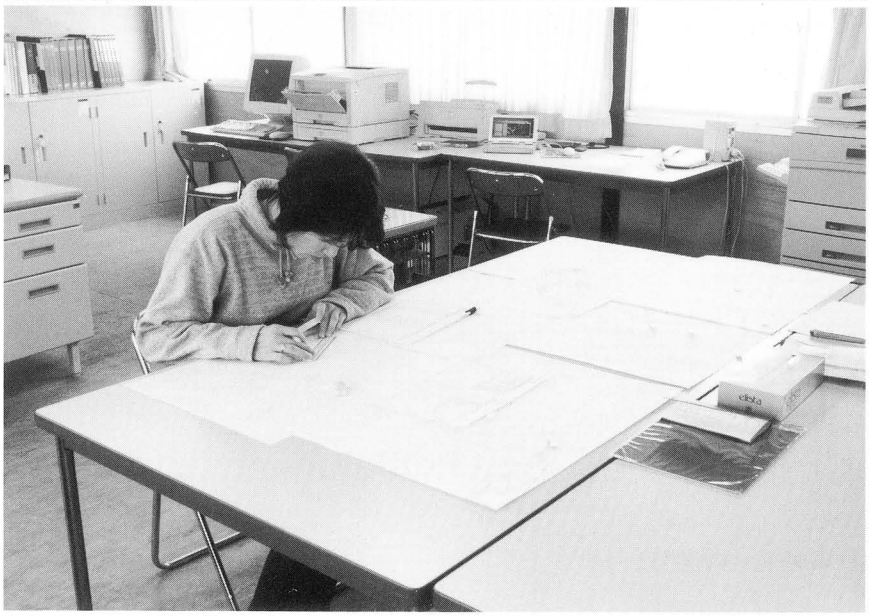
2．C地区土坑ＳＫ13完掘
（南東から）

3．C地区土坑ＳＫ14完掘
（南から）

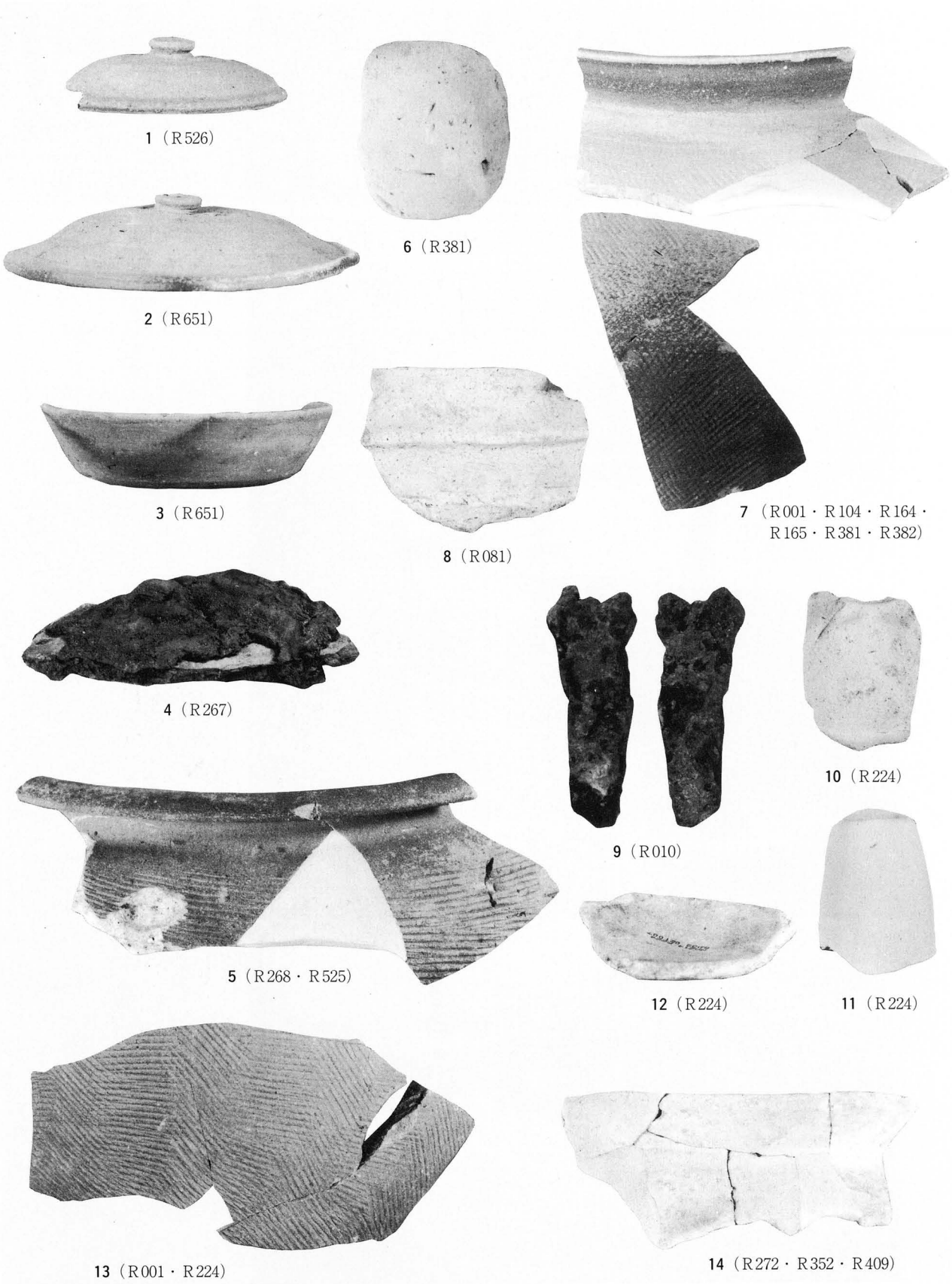
図版二五　屋内作業写真

1．遺物注記作業状況

2．遺物接合作業状況

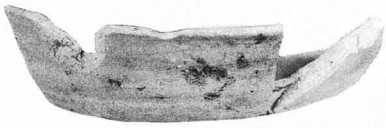


3．図面整理作業状況



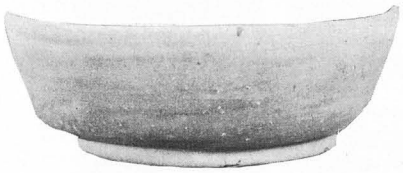
B地区遺構内出土遺物①　土器類・鉄製品（遺物番号1～14）

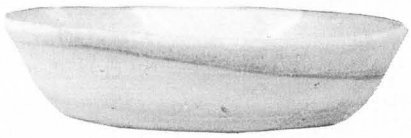
15（R387・R389）



17（R001・R388）

18（R392）

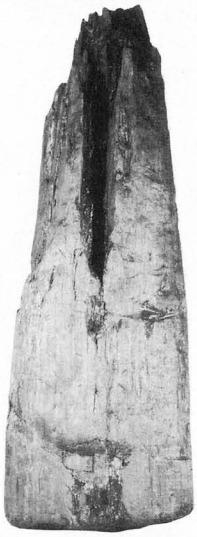




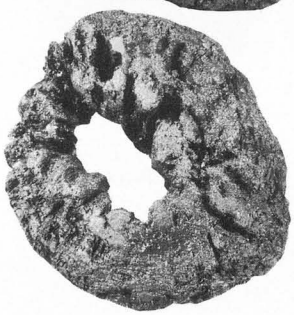
16（R385）

19（R398）

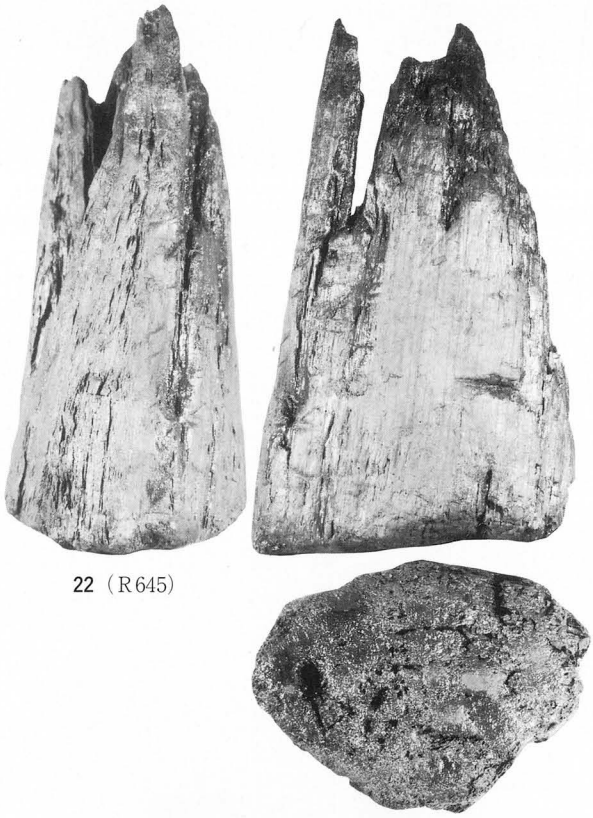
20（R643）



21（R644）



B地区遺構内出土遺物②　土器類・柱根（遺物番号15～21）



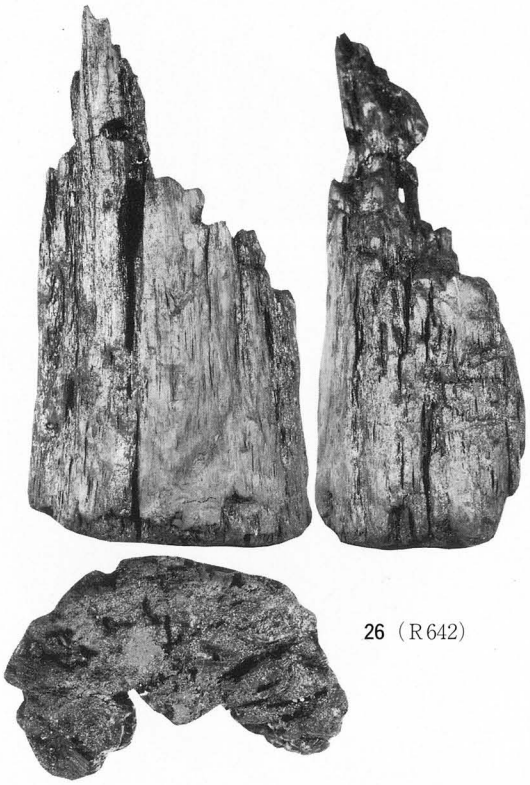
22（R645）

24（R647）

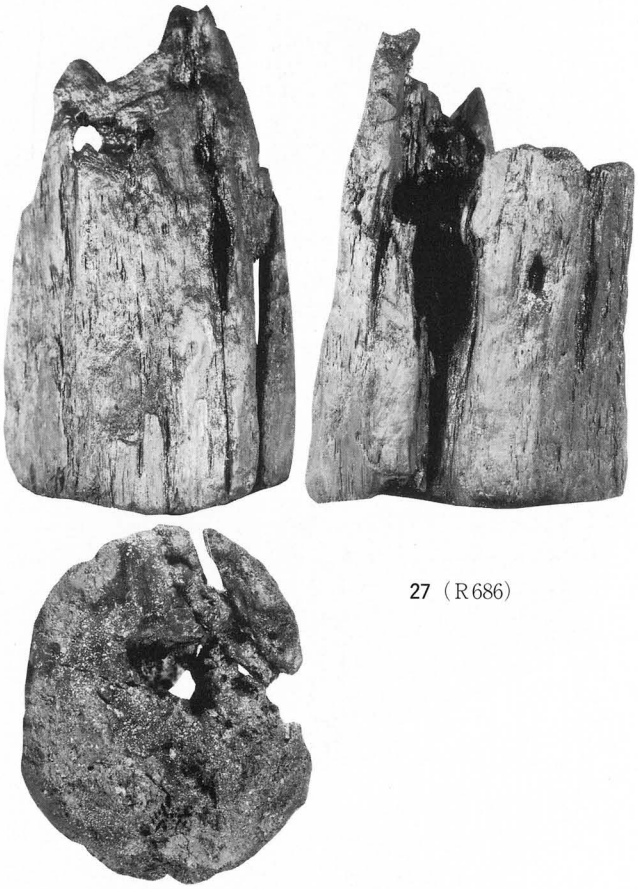
23（R646）

25（R641）

B地区遺構内出土遺物③　柱根（遺物番号22～25）



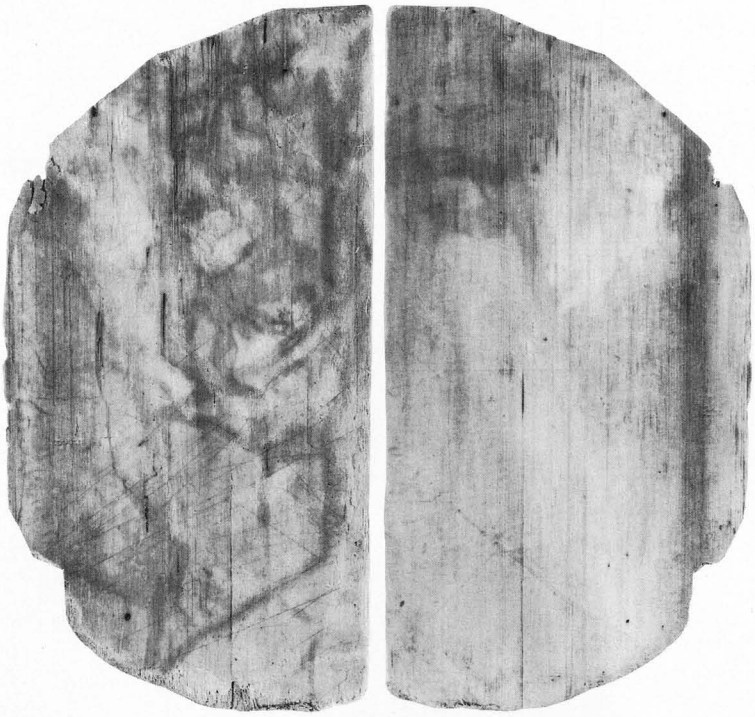
26（R642）



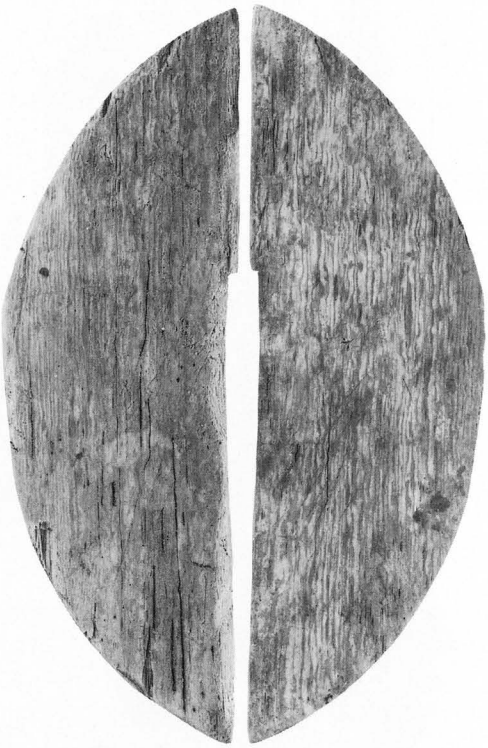
27（R686）

28（R274）

B地区遺構内出土遺物④　柱根・木製品（遺物番号26～28）



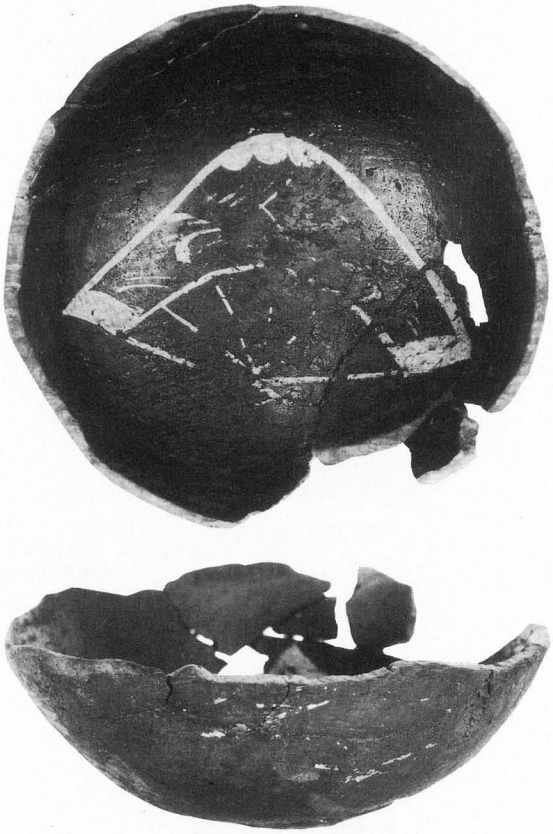
29（R278）



30（R279）

31（R280）

B地区遺構内出土遺物⑤　木製品（遺物番号29～31）

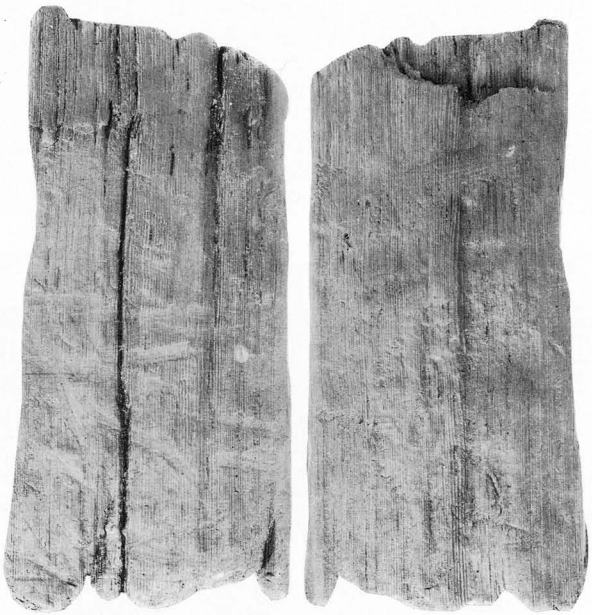


32（R266）

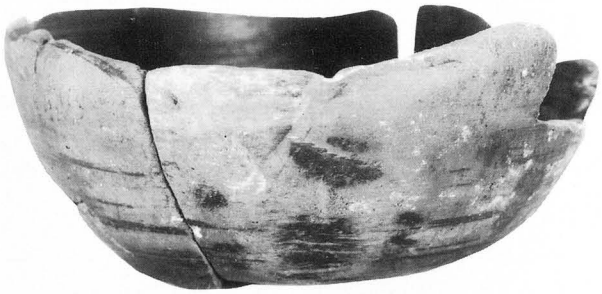
34（R702－1）

33（R702－2）

B地区遺構内出土遺物⑥　木製品（遺物番号32～34）

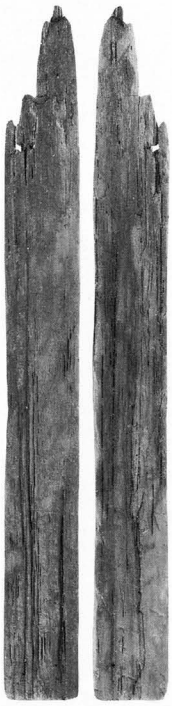


35（井戸枠内２）

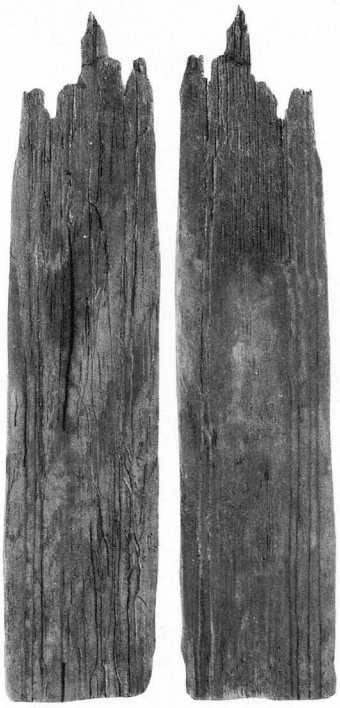


37（井戸枠内３）

36（井戸枠内１）

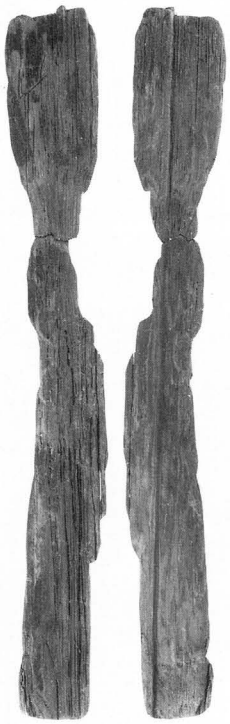


38（R687）



39（R688）

B地区遺構内出土遺物⑦　木製品（遺物番号35～39）

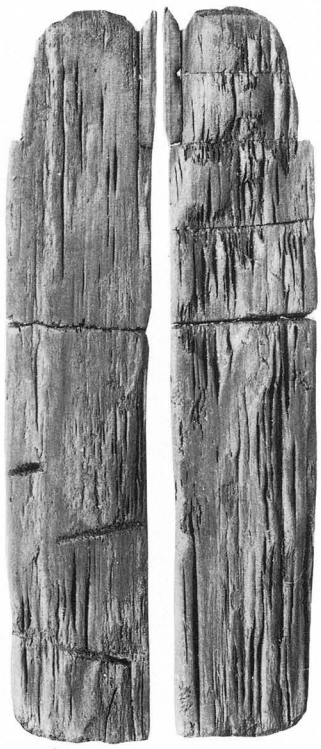


40（R696）

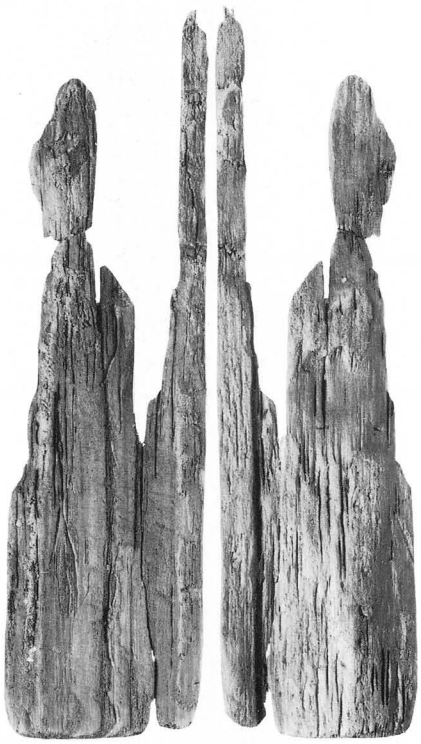
41（R693）

42（R695）

43（R691）

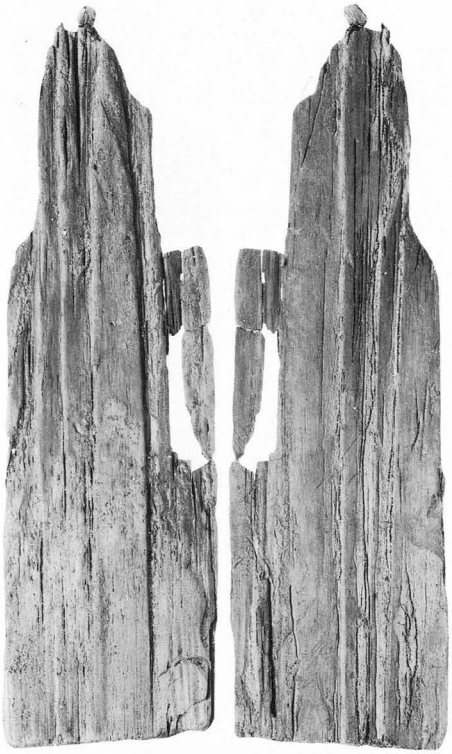


44（R692）

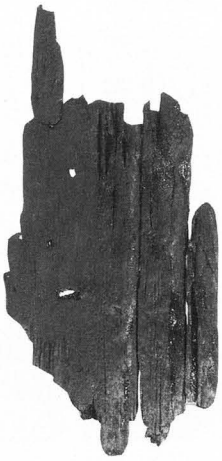


45（R694）

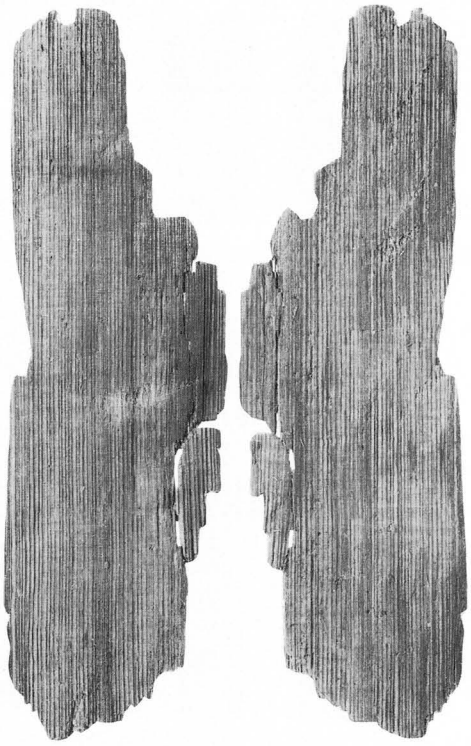
B地区遺構内出土遺物⑧　木製品（遺物番号40～45）



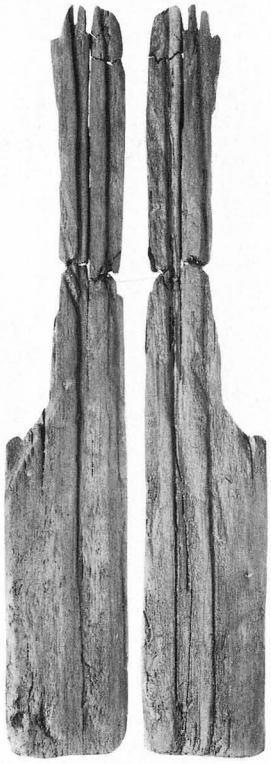
46（R697－1）



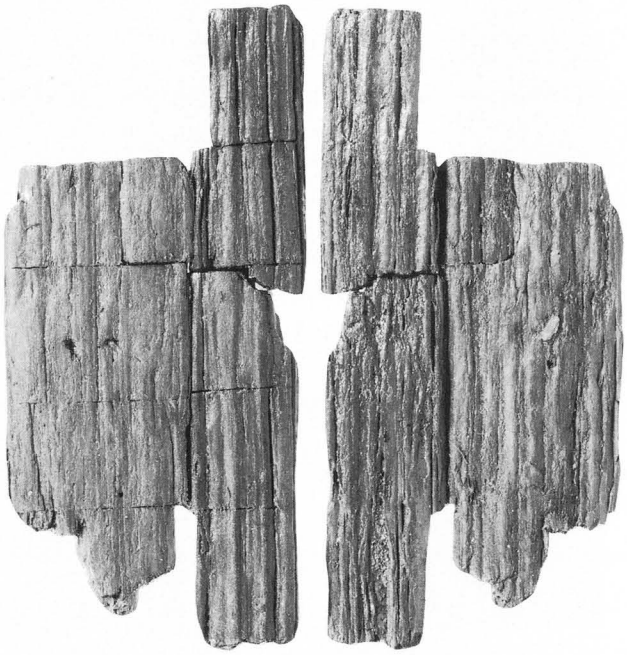
47（R697－2）



48（R698）

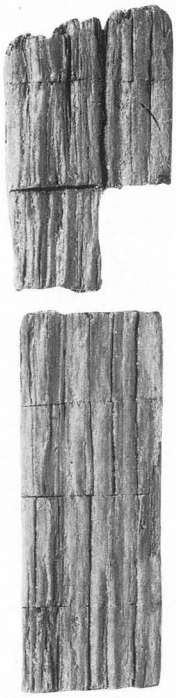


49（R699）

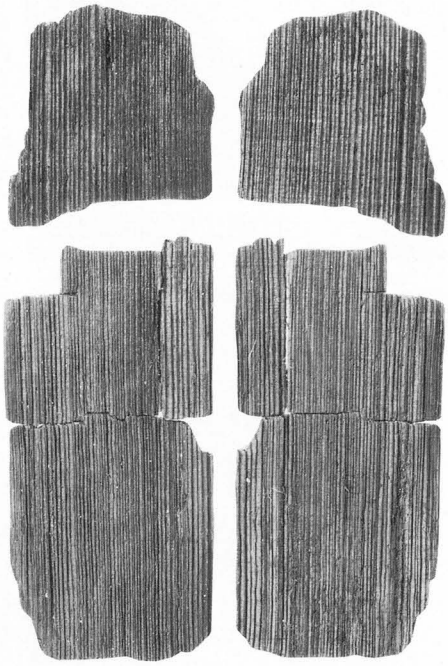


50（R700－1）

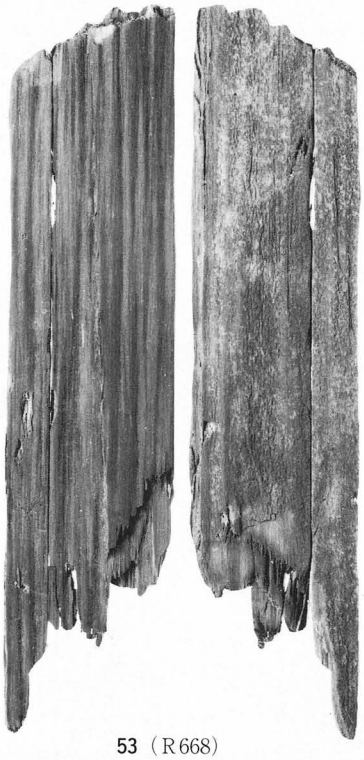
B地区遺構内出土遺物⑨　木製品（遺物番号46～50）



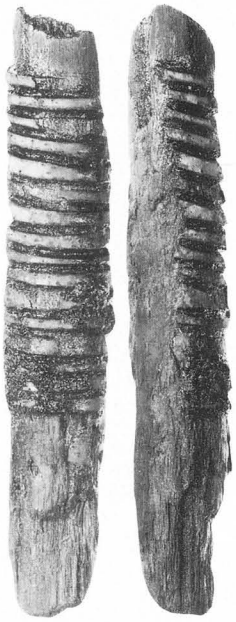
51（R700−2）



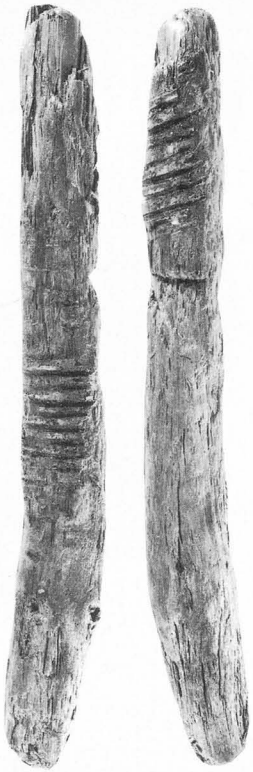
52（R700−3）



53（R668）



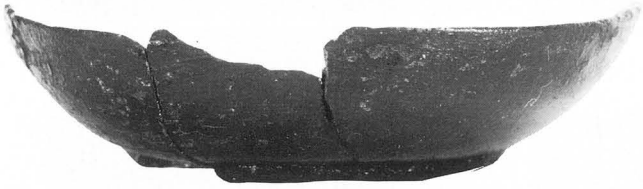
54（R531−2）



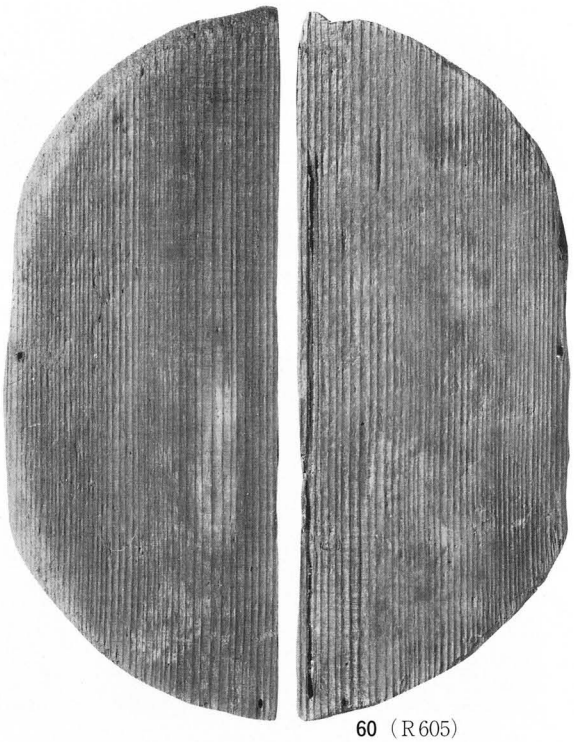
55（R531−1）

56（R680）

B地区遺構内出土遺物⑩　木製品（遺物番号51～56）

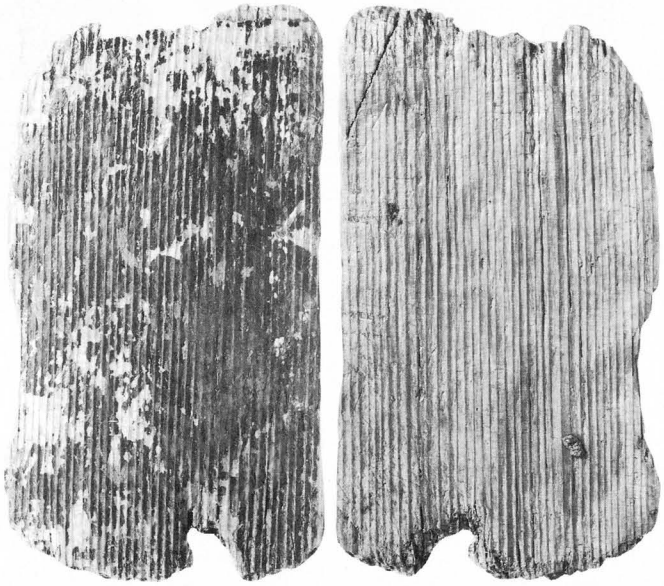


57（R561）



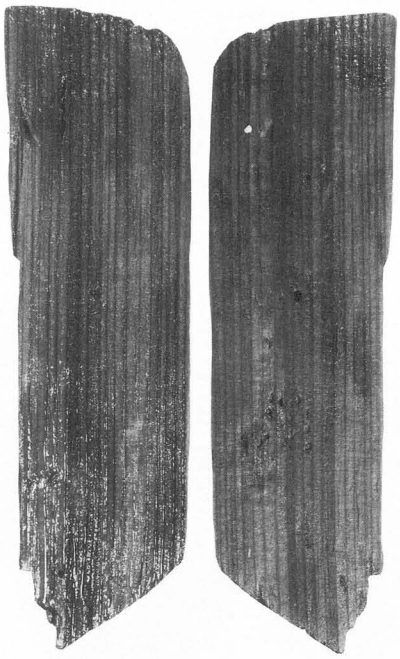
60（R605）

58（R613）



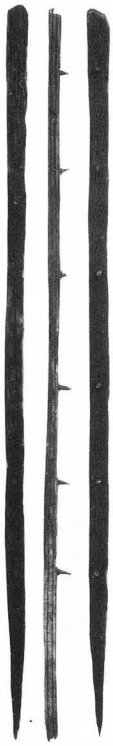
59（R592）

B地区遺構内出土遺物⑪　木製品（遺物番号57～60）

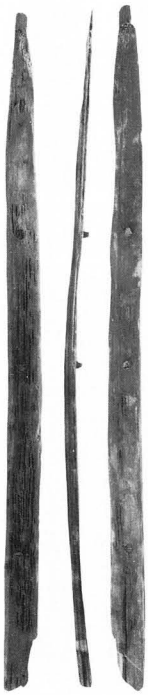


61（R609）

62（R570）

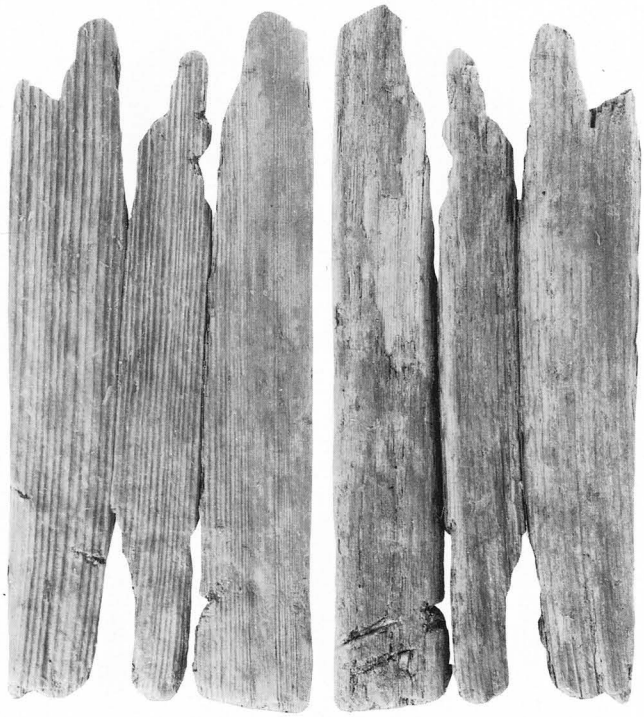


63（R571）

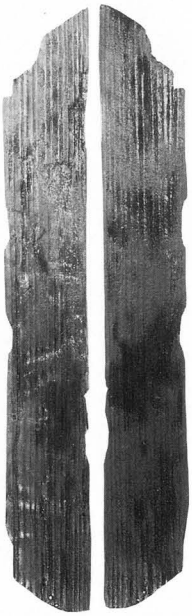


64（R602）

65（R558）

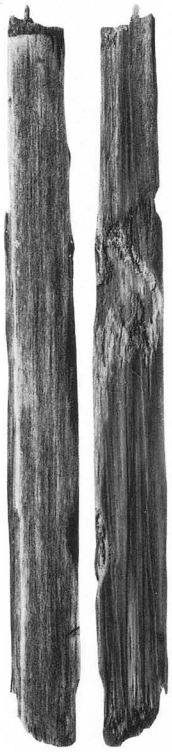


66（R530）

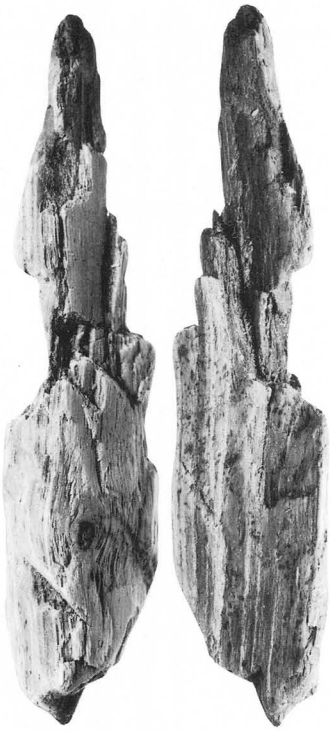


67（R559）

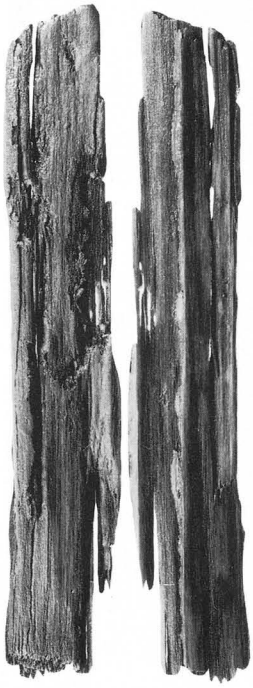
B地区遺構内出土遺物⑫　木製品（遺物番号61～67）



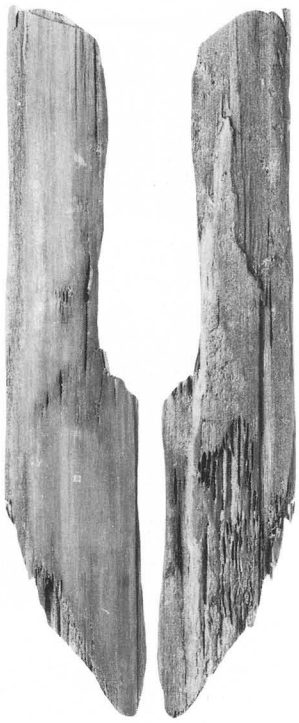
68（R562）



69（R563）



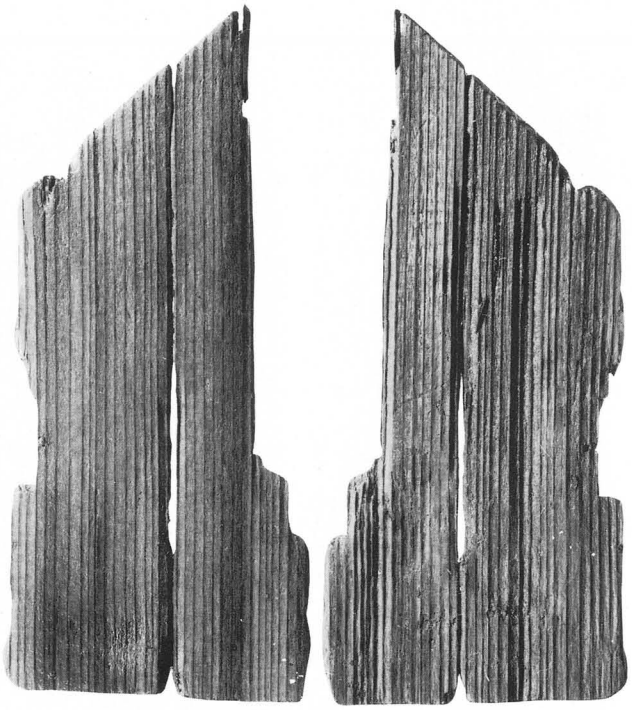
70（R564）



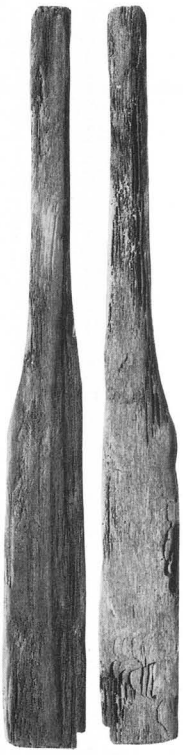
71（R565）

72（R566）

73（R567）

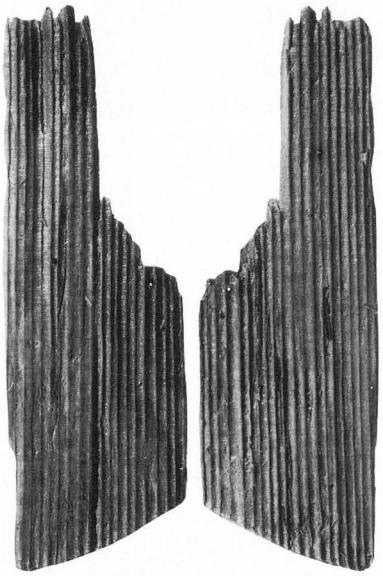


74（R569）

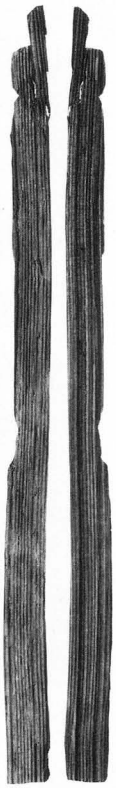


75（R572）

B地区遺構内出土遺物⑬　木製品（遺物番号68～75）



76（R573）

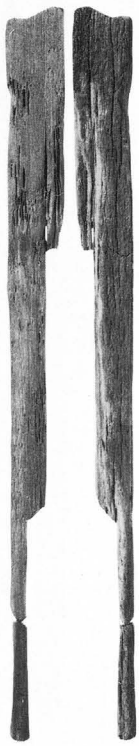


77（R574）

78（R577）

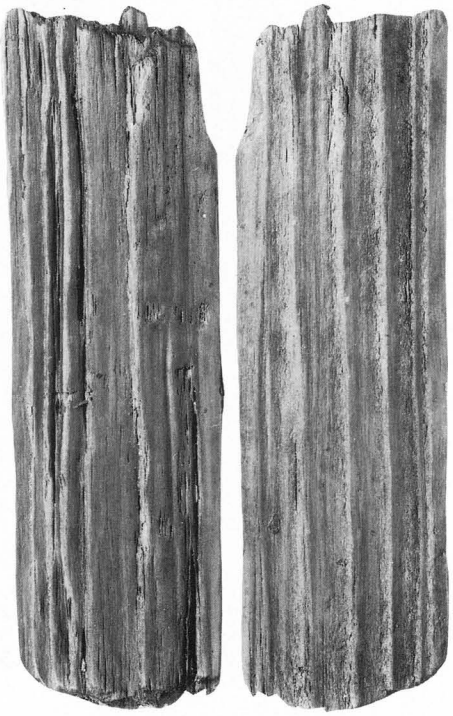
79（R578）

80（R579）



81（R580）

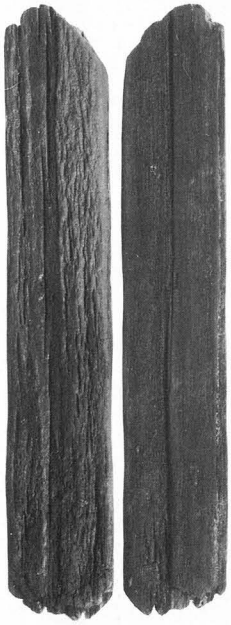
82（R582）



83（R584）

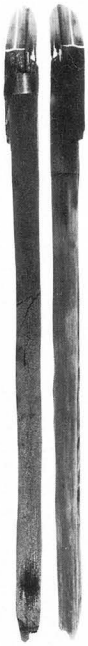
84（R586）

B地区遺構内出土遺物⑭　木製品（遺物番号76～84）

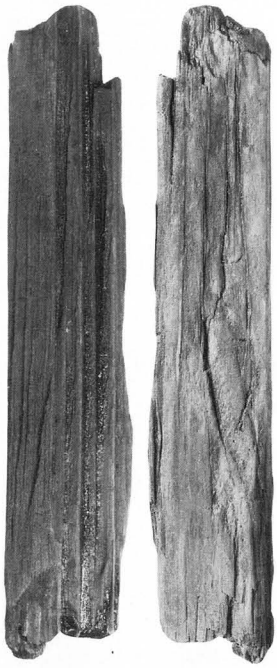


85（R587）

86（R589）



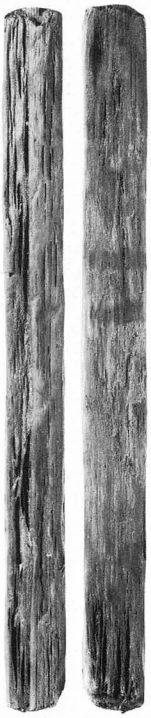
87（R590）



88（R593）

89（R594）

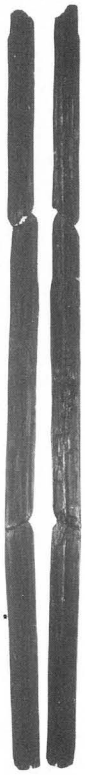
90（R595）



91（R597）

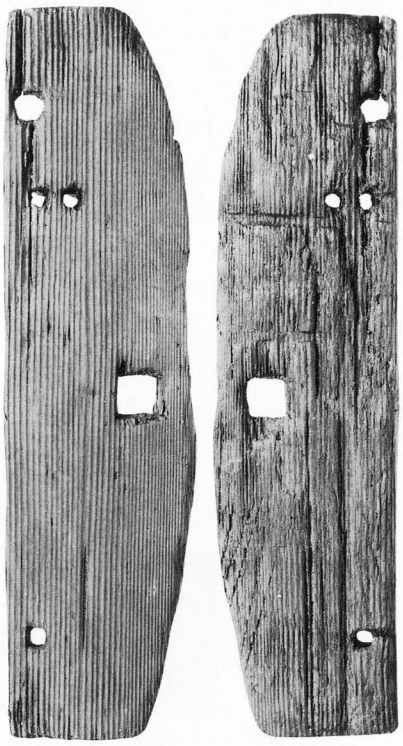
92（R598）

93（R591）

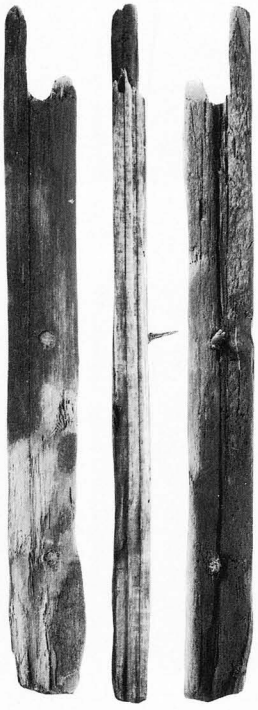


94（R588）

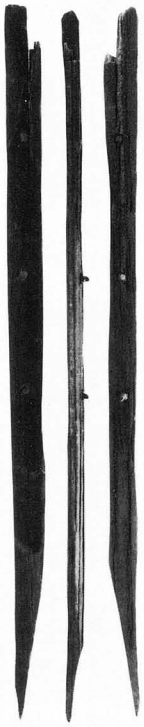
B地区遺構内出土遺物⑮　木製品（遺物番号85～94）



95（R599）



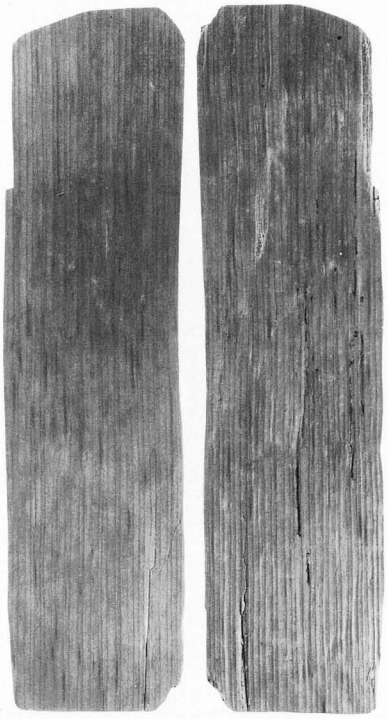
96（R600）



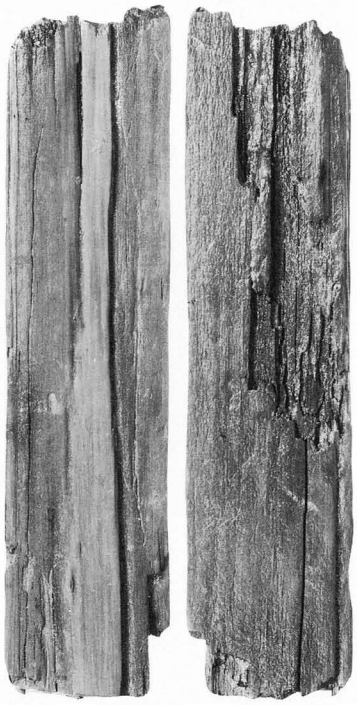
97（R601）

98（R603）

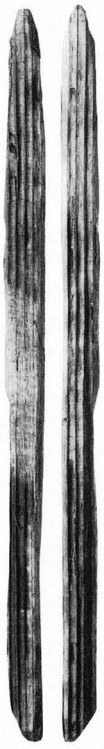
99（R604）



100（R606）

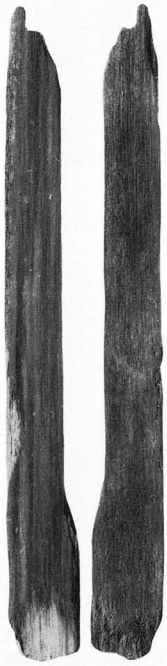


101（R607）

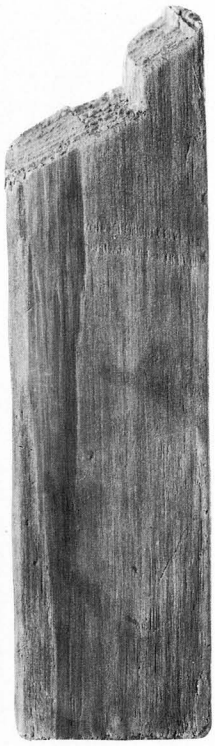


102（R610）

B地区遺構内出土遺物⑯　木製品（遺物番号95～102）

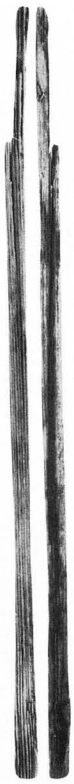


103（R611）



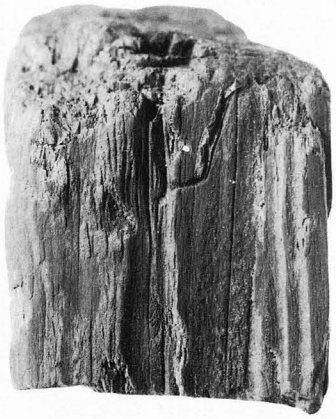
104（R614）

105（R669）



107（R608）

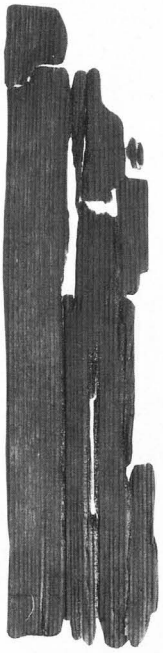
108（R664）



106（R666）

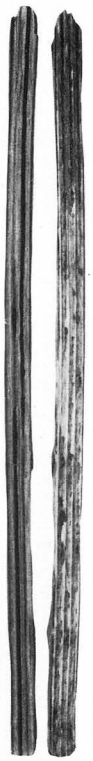
B地区遺構内出土遺物⑰　木製品（遺物番号103～108）

109（R616）



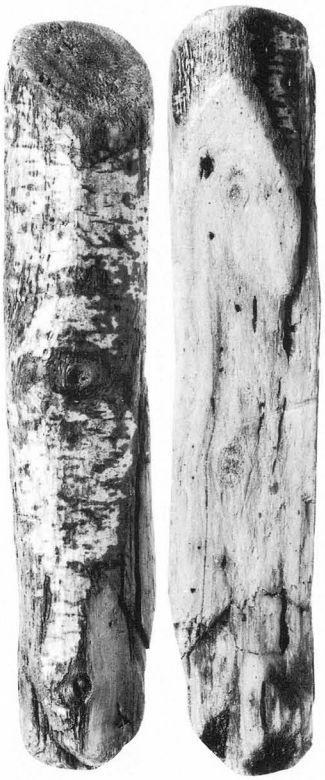
110（R671）

111（R678）



112（R679）

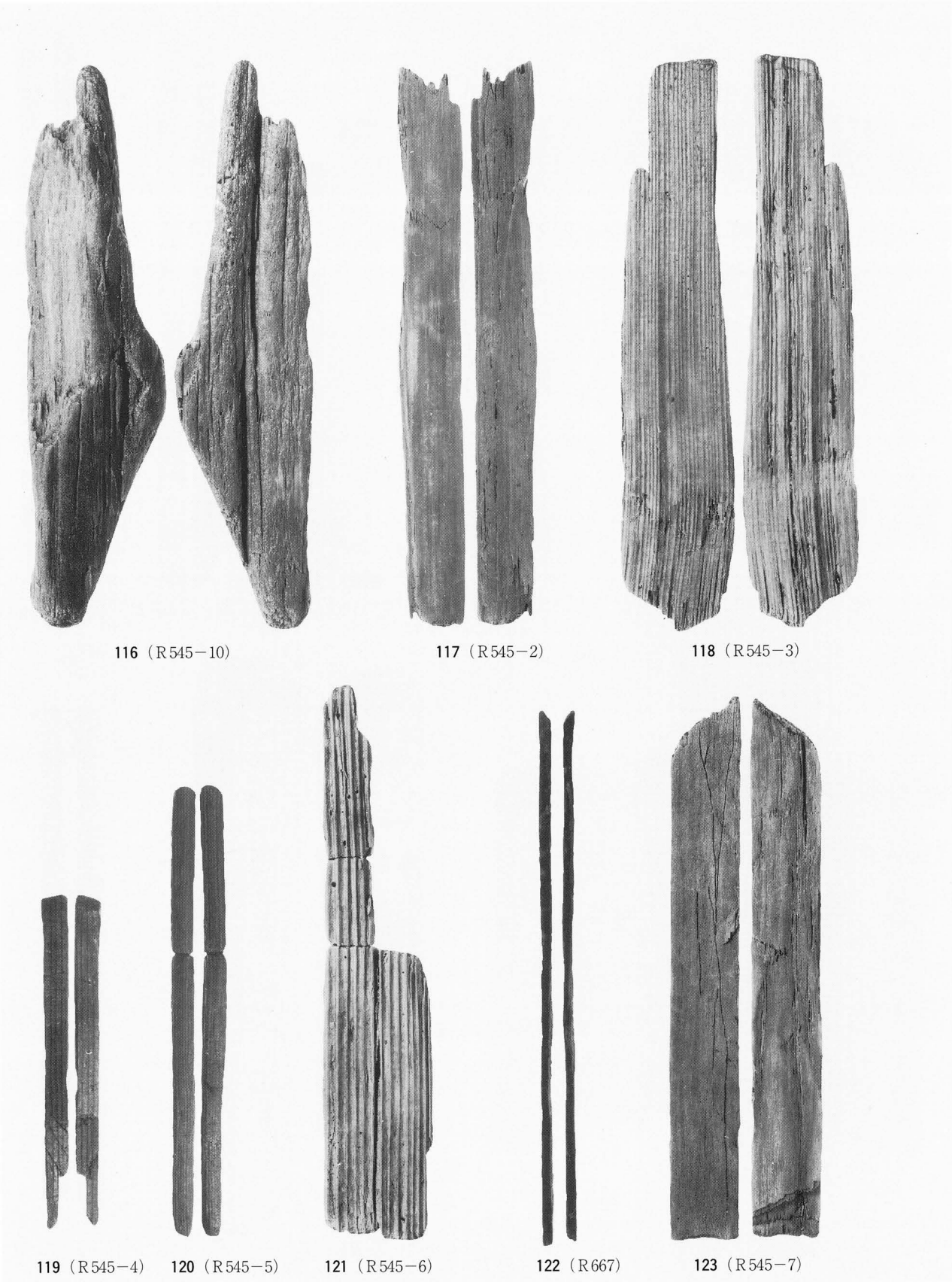
113（R683）



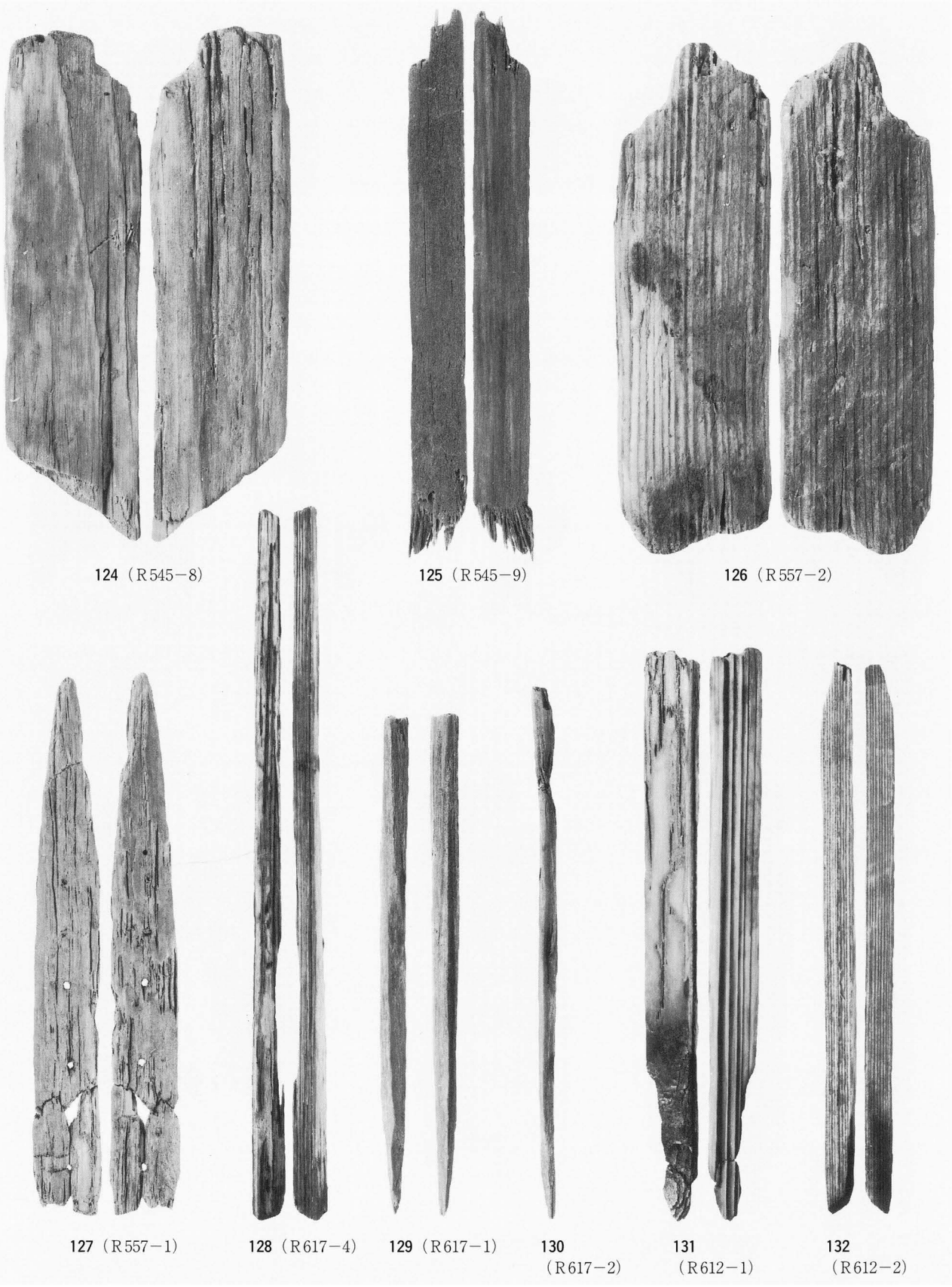
114（R545−1）

115（R545−11）

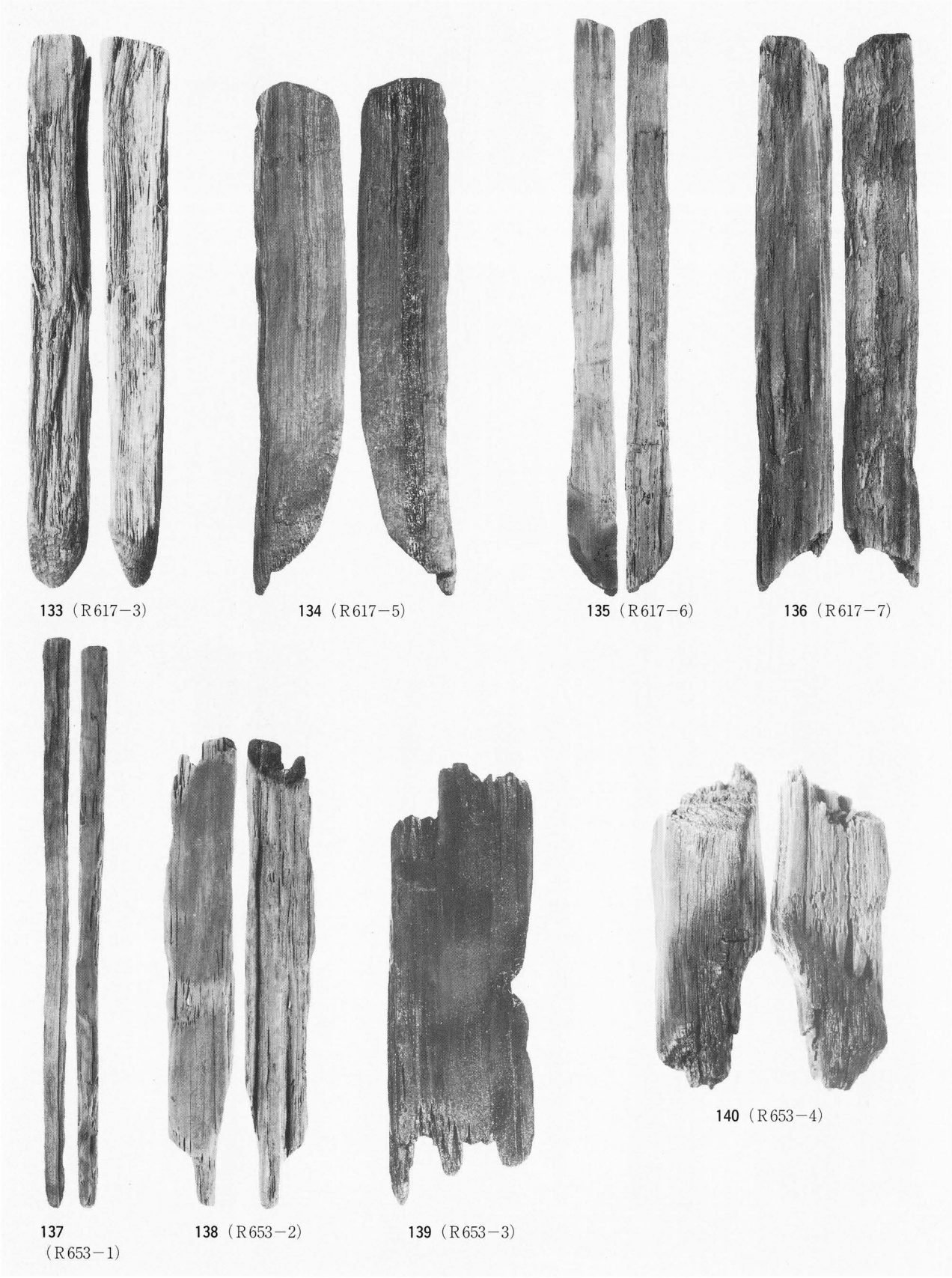
B地区遺構内出土遺物⑱　木製品（遺物番号109～115）



B地区遺構内出土遺物⑲　木製品（遺物番号116～123）



B地区遺構内出土遺物⑳　木製品（遺物番号124～132）



B地区遺構内出土遺物㉑　木製品（遺物番号133～140）

141（R655－1）

143（R575）

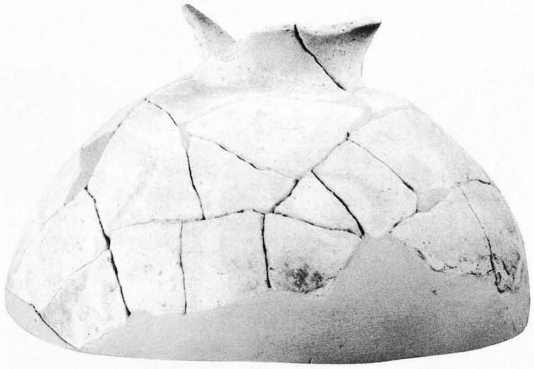
142（R655－2）

B地区遺構内出土遺物㉒　木製品（遺物番号141～143）

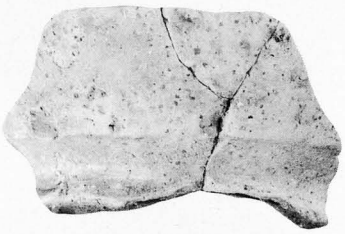
144（R227）

145（R113）

146（R001）

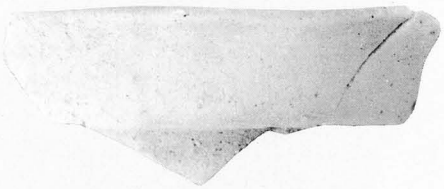


149（R527）

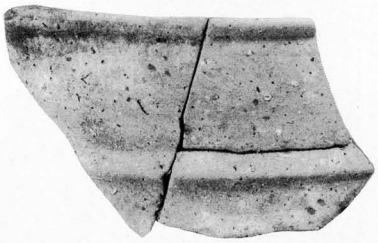


147（R039）

150（R335）

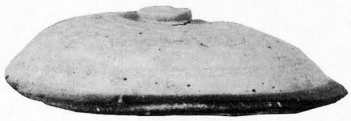


148（R527）



151（R359）

152（R001・R238・R287）



153（R240・R366）

154（R408）

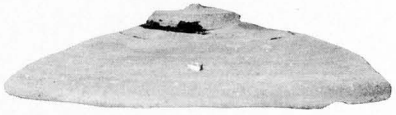
155（R101）

156（R111）

157（R168・R171）

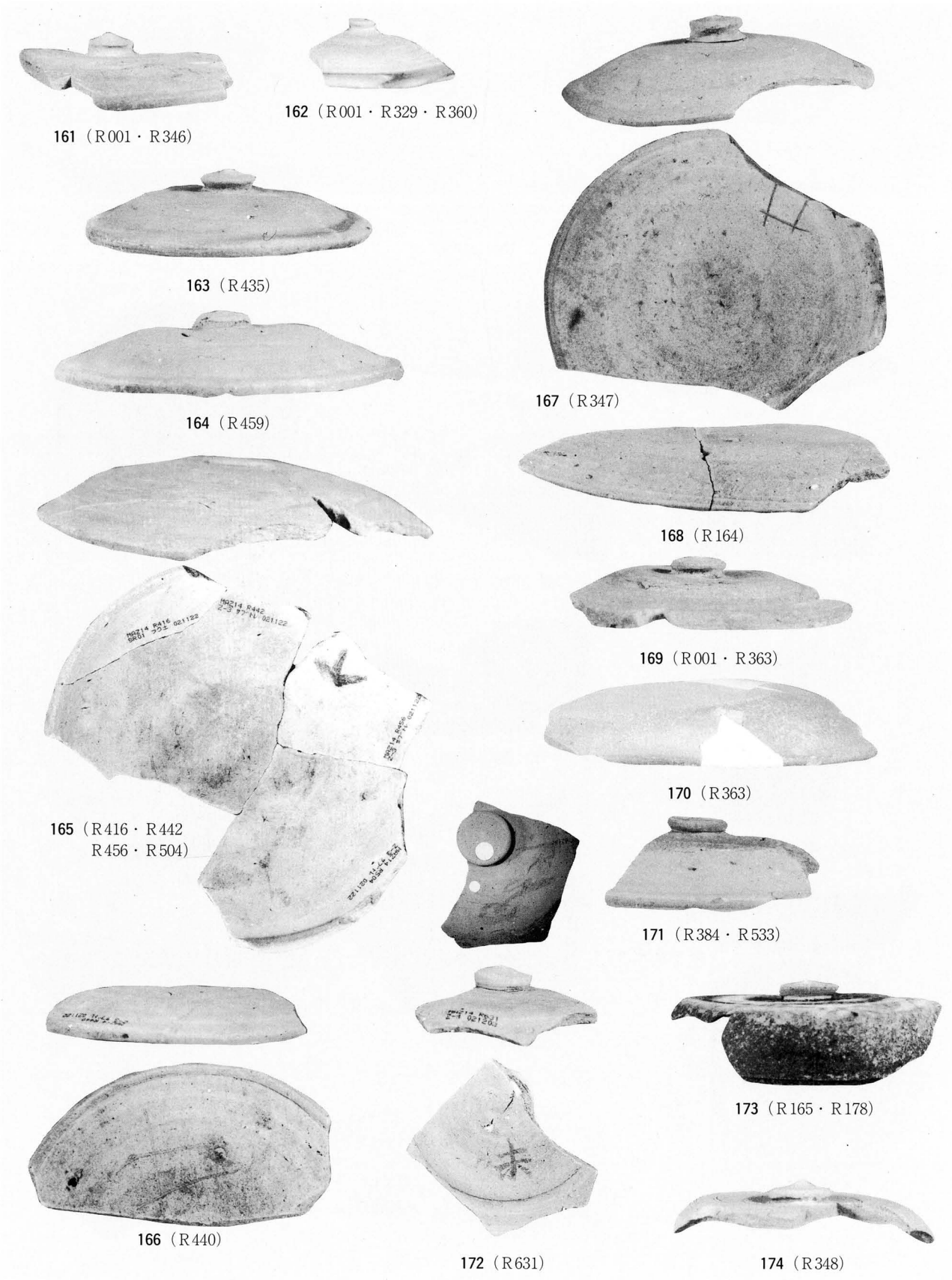
158（R378）

159（R554）

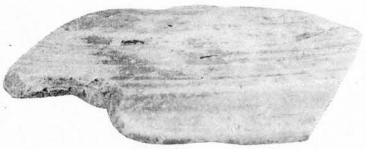


160（R376）

B地区第2面遺構外出土遺物①　土器類（遺物番号144～160）

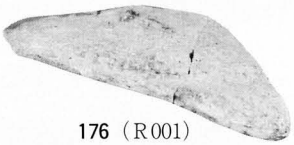


B地区第2面遺構外出土遺物②　土器類（遺物番号161～174）

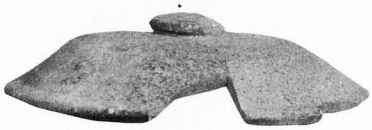

175（R001・R363）

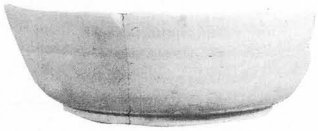
182（R196）

188（R407）

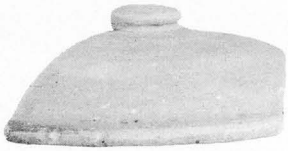

176（R001）

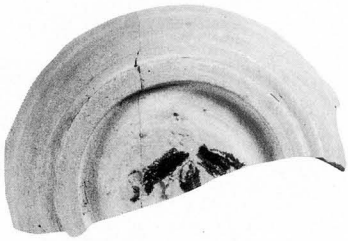
183（R239）


177（R001）



189（R089・R339）


178（R001）


184（R097・R196）

179（R405）

185（R099）

190（R112）

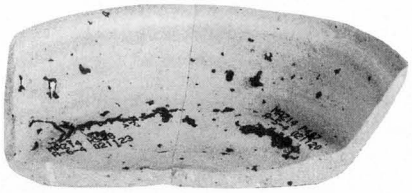
180（R240）

191（R316）

186（R354）

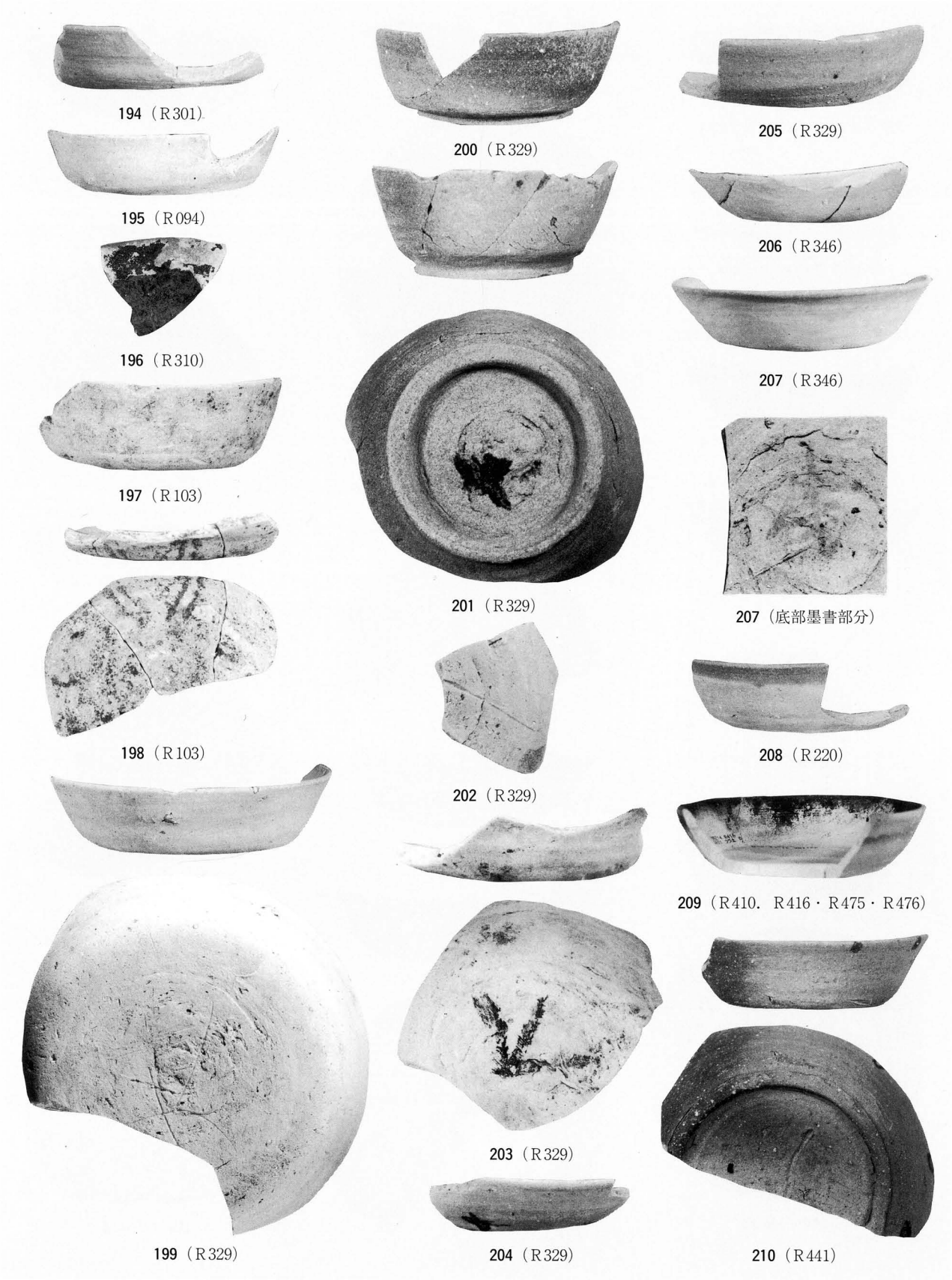
192（R327・R361）

181（R286・R329）


187（R407・R528）

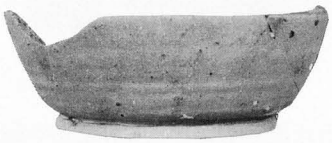
193（R300）

B地区第2面遺構外出土遺物③　土器類（遺物番号175～193）



B地区第2面遺構外出土遺物④　土器類（遺物番号194～210）

211（R451・R453・R503）

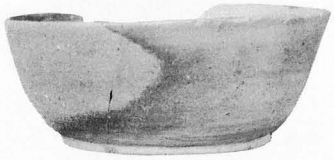


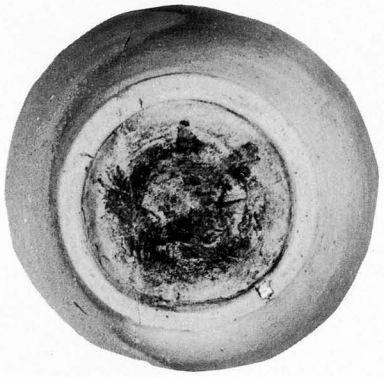
212（R453）

213（R461）

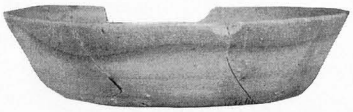
214（R462）

215（R463）

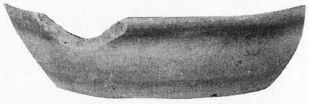


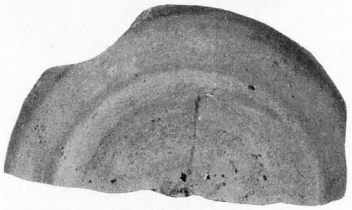


216（R468）



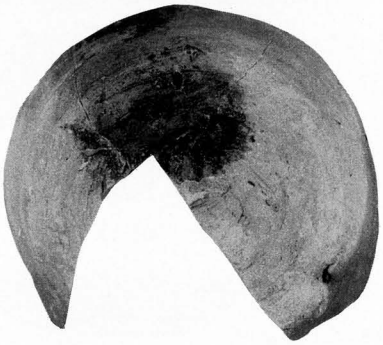
217（R469）



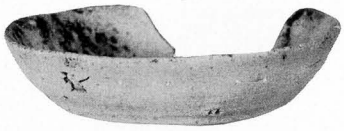


218（R477）

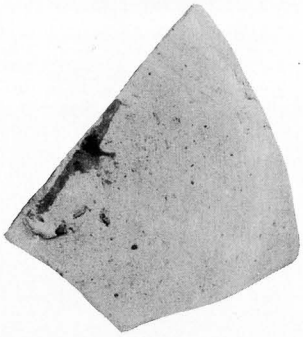
219（R480）



220（R484・R515）



221（R492）



222（R506）

223（R509・R522）

224（R513）

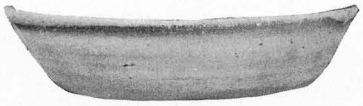
225（R516・R517）

226（R542）

B地区第2面遺構外出土遺物⑤　土器類（遺物番号211～226）

227（R396）

228（R649）

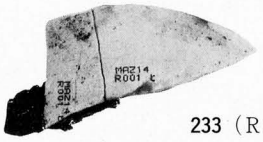


231（R001）

229（R001）

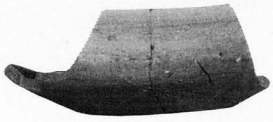
230（R001）

232（R001）

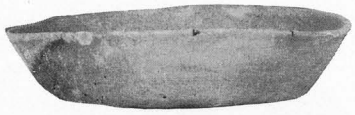


233（R001）

234（R124）

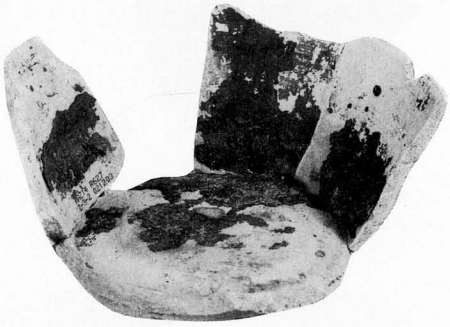


235（R394）



236（R619）

237（R347・R410・R627・R632）外面



237　内面

239
（R395・R474・R493・R494）

238（R443・R471・R473）

240
（R049・R105・R166・
R354・R355・R377）

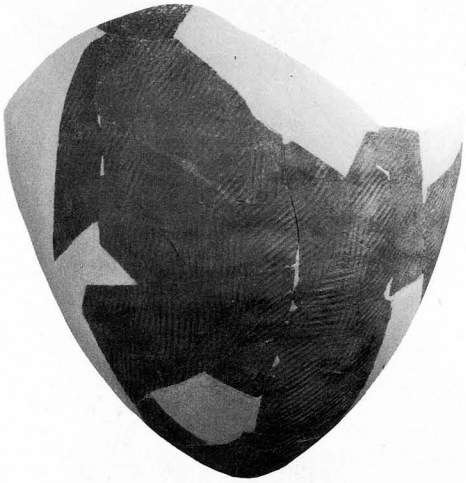
B地区第2面遺構外出土遺物⑥　土器類（遺物番号227～240）

241
（R445・R542・R547）

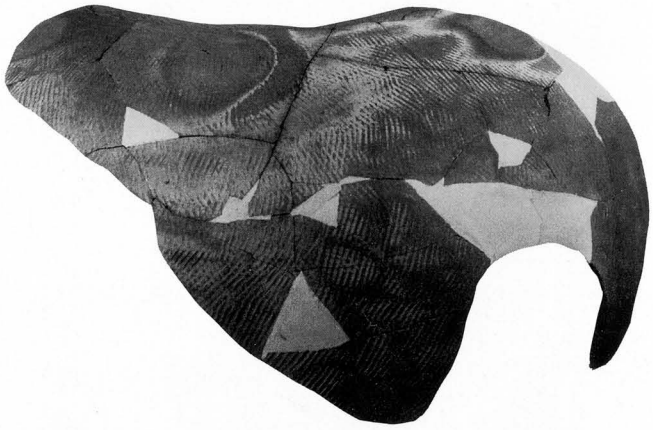
242（R394）

243（R001）

244
（R395・R425・R487・R523・R527）



245
（R001・R421・R422・R423・R424
R427・R430・R431・R446・R447
R448・R449・R465・R470・R479
R481・R482・R486・R488・R490
R496・R507・R512・R645・R650）



246
（R330・R347・R413・R437
R457・R460・R472・R501
R508・R547・R550）

247（R106）

248（R106）

249（R111）

250（R056）

251（R305）

257（R001）

252（R045）

253（R039）

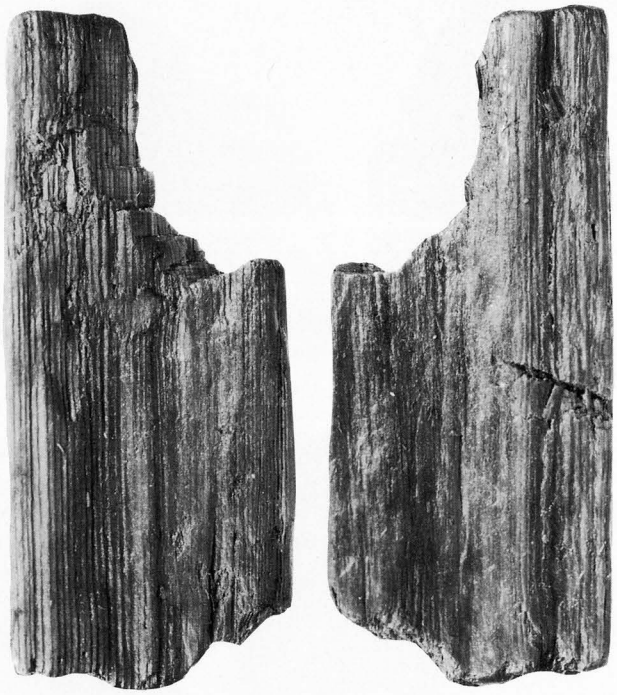
254（R001）

255（R001）

256（R001）

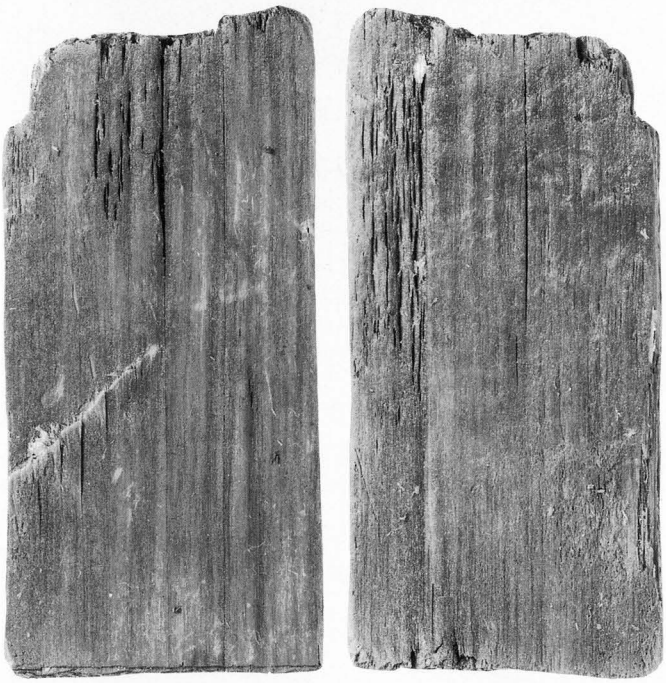
258（R109）

B地区第2面遺構外出土遺物⑦　土器類（遺物番号241～258）



259（R406）

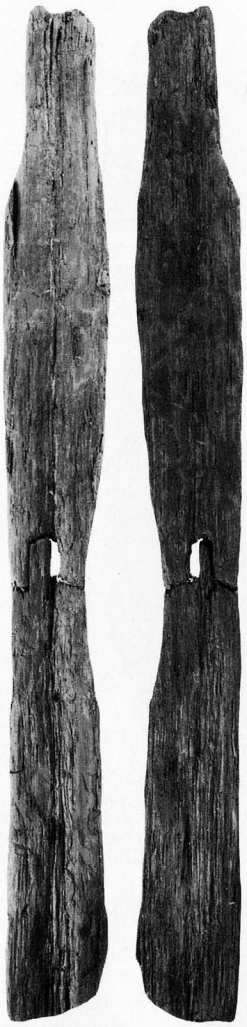
260（R553－1）



261（R553－2）

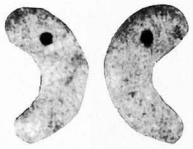
262（R519）

B地区第2面遺構外出土遺物⑧　木製品（遺物番号259～262）



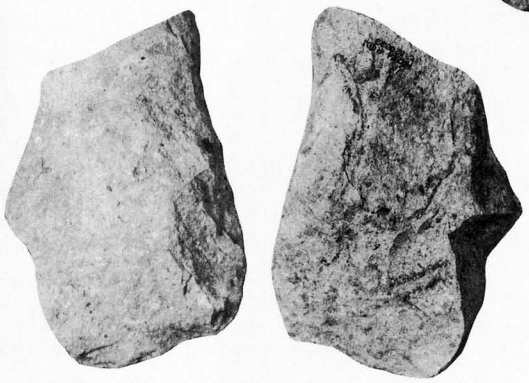
263（R520）

264（R397）



265（R002）

266（R527）



267（R001）

268（R090）

269（R030・R074）

270（R329）

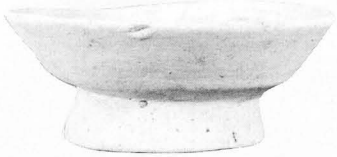
271（R001）

B地区第2面遺構外出土遺物⑨　木製品・石製品（遺物番号263～271）

272（R 1028）

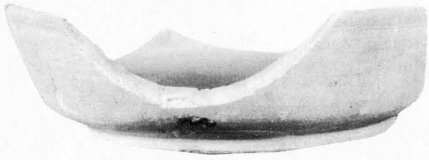
273（R 1034）

274（R 1009・R 1023）

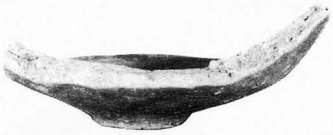


276（R 1021）

275（R 1009・R 1039）

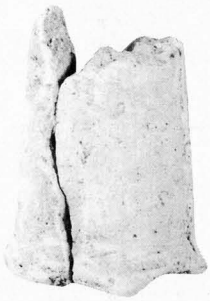


277（R 1022）



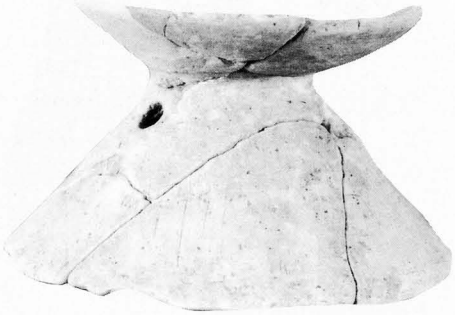
278（R 1009）

279（R 1006）



280（R 1003・R 1009）

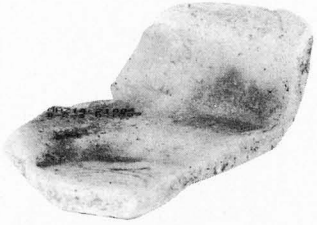
281（R 1006）



282（R 1009）

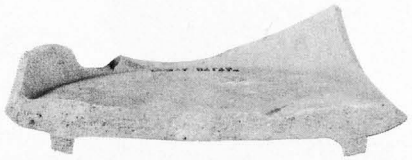
283（R 1009）

284（R 1020）



285（R 1004）

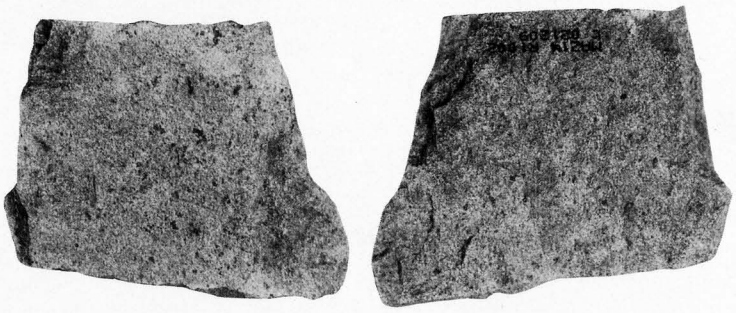
C地区遺構内および遺構外出土遺物　土器類（遺物番号272～285）



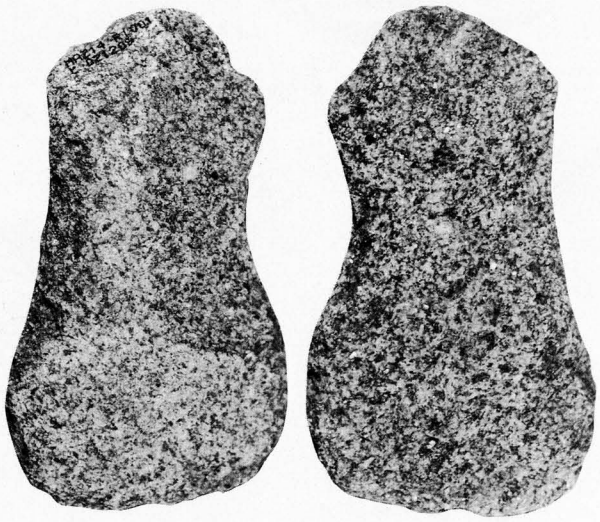
286（R 1013）

287（R 1006）

288（R 1003）

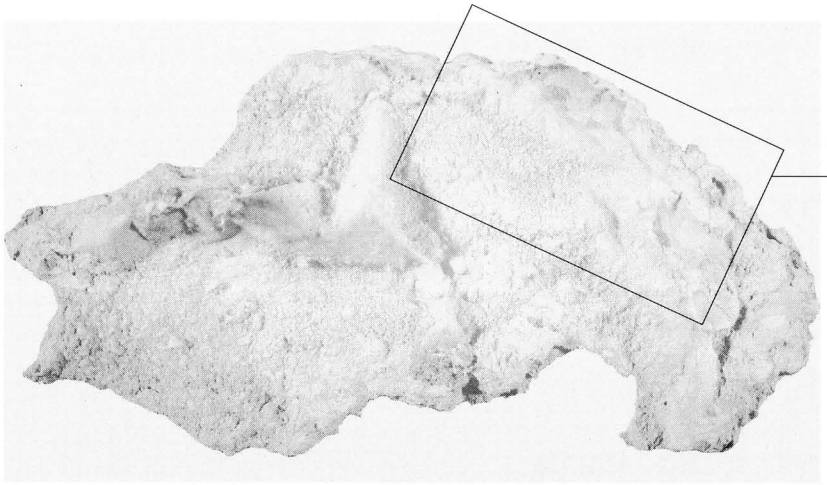


289（R 1001）

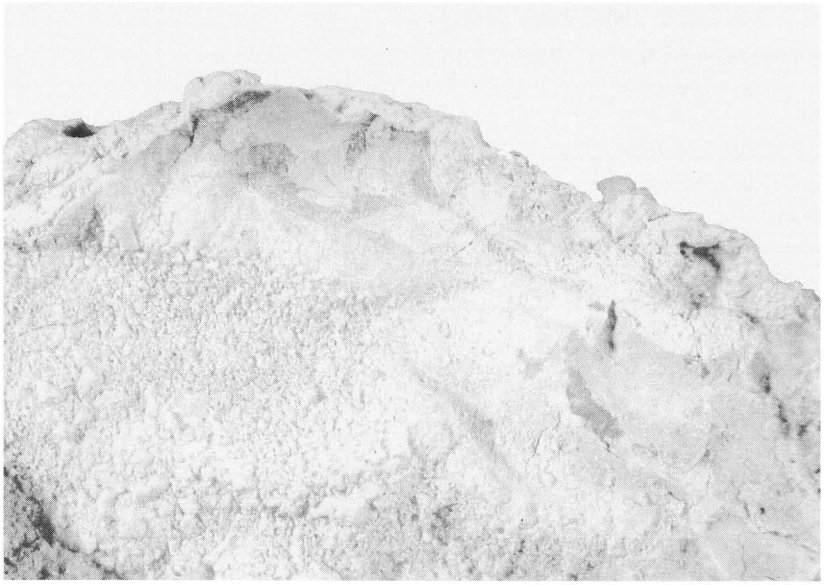


290（R 1002）

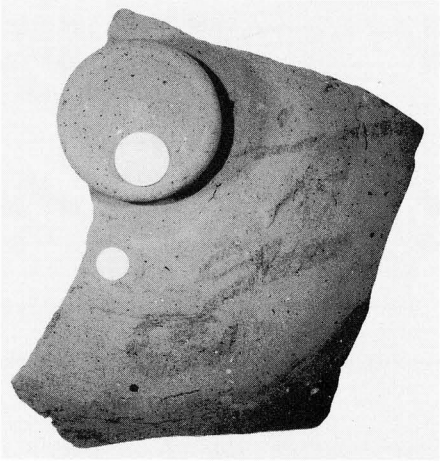
C地区遺構外出土遺物　土器類・石器（遺物番号286～290）



4（R267）
漆紙

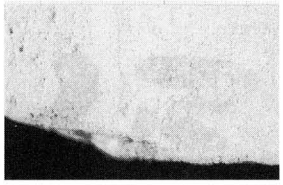


4（R267）
漆紙・墨痕部分



172（R631）
「万呂」

172（R631）
「未」



190（R112）
不明

207（R346）
「成」

漆紙および墨書土器　赤外線写真
（遺物番号　4、172、190、207）

報告書抄録

ふりがな	まづくしいせきちょうさほうこくⅢ
書名	間尽遺跡調査報告Ⅲ
副書名	平成14年度、能越自動車道土砂採取関連事業に伴う調査（Ｂ・Ｃ地区）
シリーズ名	高岡市埋蔵文化財調査報告
シリーズ番号	第12冊
編著者名	太田浩司、板野伸彦、富田静香、橋澤道博
編集機関	大成エンジニアリング株式会社　埋蔵文化財調査部 〒162－0045　東京都新宿区馬場下町１－１　早稲田ＳＩＡビル８Ｆ
発行機関	高岡市教育委員会 〒933－0057　富山県高岡市広小路7番50号
発行年月日	西暦2004年３月31日

ふりがな 所収遺跡	所在地	コード		北緯 °′″	東経 °′″	調査期間	調査面積	調査原因
		市町村	遺跡番号					
まづくしいせき 間尽遺跡	とやまけんたかおかし 富山県高岡市 たらいの 手洗野	016202	202073	36° 45′ 43″	136° 57′ 47″	020731 ～ 021226	Ｂ地区 3,160m² Ｃ地区 1,720m²	能越自動車道 土砂採取関連 事業

所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
間尽遺跡 Ｂ地区	集落跡	古代 中世 近世	掘立柱建物跡18棟 土坑13基 区画溝	土師器 須恵器 珠洲 木製品	区画溝と掘立柱建物群を検出。墨書土器や漆紙、多くの木製品が出土した。
間尽遺跡 Ｃ地区	集落跡	古代 中世	掘立柱建物跡13棟 土坑14基 区画溝	土師器 須恵器	区画溝と掘立柱建物群を検出。

高岡市埋蔵文化財調査報告第12冊

間尽遺跡調査報告Ⅲ　－平成14年度、能越自動車道土砂採取関連事業に伴う調査（Ｂ・Ｃ地区）－

発行者　高岡市教育委員会
富山県高岡市広小路７番50号

編　集　大成エンジニアリング株式会社
埋蔵文化財調査部
東京都新宿区馬場下町１－１
早稲田ＳＩＡビル８Ｆ

2004年３月31日

印刷所　株式会社白峰社
東京都豊島区東池袋５－49－６